

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

4月号



昭和四十四年三月二十日印刷 昭和四十四年四月一日発行 四月号(第二十三巻第四号) 毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大船特別掛札認許第二〇号

奇譚クラブ

昭和四十四年四月号

'69
4

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13型) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号箕田京二宛お申込み下さい。

☆

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均齊のとれた体(佐々木真弓)
32 爬虫責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの撥り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をながく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむぎき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
3 襲う影に慄のく (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困るわ (金原奈加子)
7 私を襲わないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はくの字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 麗身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出したお尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首細股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
58 罵られる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

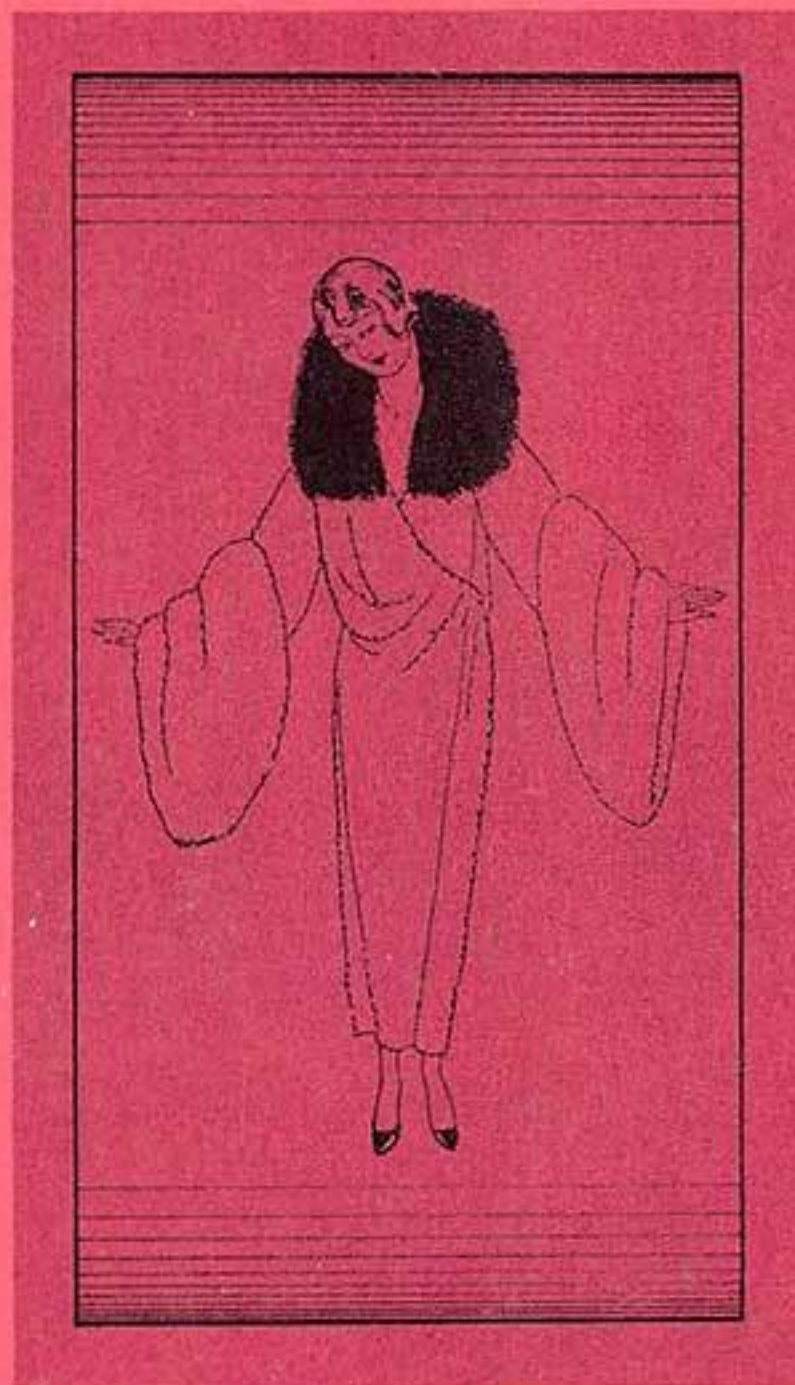
69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 遅ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

奇譚クラブ
昭和四十四年三月二十日印刷
昭和四十四年四月一日発行
昭和四十二年四月二十一日第三種郵便物認可
昭和四十二年四月二十一日
四月号(第二十三卷第四号)毎月一回一日発行
日国共大局特異換承認雜誌第二一〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

4月号 ¥ 350

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひ▽

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせ▽

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆ▽

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめ▽

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よす▽

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よも▽

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よき▽

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさ▽

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もと▽

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへ▽

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もに▽

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もち▽

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほ▽

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬ▽

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もり▽

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もは▽

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なの▽

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむ▽

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあ▽

くすくす責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きす▽

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせ▽

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそ▽

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きて▽

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きと▽

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きな▽

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあ▽

足舐めをたのしむマゾ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めく▽

足舐めを強要されたマゾ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆ▽

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めや▽

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえ▽

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひ▽

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あは▽

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふ▽

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこ▽

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るね▽

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえ▽

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそ▽

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はね▽

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はた▽

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てら▽

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いね▽

刺青裸女を踏みにする

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつ▽

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこ▽

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみ▽

黒フンドシ高小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろ▽

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほか▽

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほき▽



奇譚クラブ

△第二三卷 第四号・通刊第二五一号▽

(昭和四十四年) 四月号 目次

△本 文▽

懸賞人選『色彩画の記憶』……………原 薫……………(10)	体験記・熱い青春 お灸いじめ……………玉田 静江……………(19)	懸賞人選々妖童記々(下)……………秤 蕩也……………(22)	珍書探訪 乱歩と足穂Ⅱ同性愛問答……………斎藤 夜居……………(36)	連載小説『大噴火』(第七回)……………千葉 青鬼……………(42)	切腹研究夜話 ヌード忠臣蔵考……………中康 弘通……………(50)	濡れにぞ濡れし 続・聖牡丹餅の洗礼……………芳野 眉美……………(54)	表紙の「ニキビ」に思う「わが『悪書』論」……………新宿 町人……………(67)	SMカメラ・ハント△渚マリ(井上幸子)の巻▽ 『ハレンチ・イレブン・ナイト』……………辻村 隆……………(70)	ヤセ犬の遠吠え ヘソ曲り……………系振 昇……………(94)
-------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------------	---	---	--------------------------------

奇クサロン……………編集部構成……………(233)

浣腸こそ我がいのち……………	藤田千代子
サロン楽我記(五十八回)……………	辻村 隆
S・コレクション……………	豪 城二
「ガラスのプレゼント」……………	SM映画生
映画 寸感……………	東山 映史
最近の縛り映画……………	日本 武士
イメージ画「いらだち」……………	石渡 雄三
わがトルコ探険記……………	松永 寛
夫婦プレイ雑感……………	編集 部
編集部だより……………	赤畑 修造
刺青・肥満女性通信……………	竹口三十一
貞操帯のこと……………	江川 夢次
SM歌謡「緊縛師」「ピンクの花」……………	野江 三郎
イメージ画「マゾ派、陶醉流」……………	菊池 淳子
「さあお手当の時間ですよ」……………	沢潟 しの
昨年見たものの印象……………	九美 淳
漫画「マゾミチャン」……………	吉村 永興
観劇ルポ「ローソク責め」……………	早木 夢二
マニヤの幸福「後手しぱり」……………	江川 乱
女性禪姿態美について……………	阿羅 孝二
イメージ画「柔肌の激突」……………	雪崎 京人
女斗美イメージ「たおやめの斗い」……………	関 照穂
短歌「夜の縄目」……………	目出 鯛三
宝のウエス「収穫」……………	呑気 放亭
マゾ商売……………	室井亜砂路
イメージ画「出番待ち」……………	岩手 信夫
告白 私の越冬法……………	

連載小説『ピエロ床屋』……………(2)……………鬼山 絢策……………(96)

娘相撲物語 女の斗志(下)……………海野三津男……………(104)

新春晴着放談……………牧 高志……………(110)

懸賞創作入選『ヌードモデル』……………鬼談 仏心……………(114)

あぶ・らぶす・こんと「天国と地獄」……………水沢 登……………(124)

S・C・R・回答欄「夜尿症」について……………弓削 達人……………(129)

秘密写真と秘密映画の中に観る

責場・SM場面見聞録……………金剛 敏三……………(132)

夏の憶い出「ギリカン」……………鮎川 幸子……………(140)

創作シナリオ 受難の悲歌……………橘 雅美……………(142)

美臀憧憬の譜「痴 夢」……………麒麟 欧二……………(155)

連載小説『花と蛇』(続篇第五十二回)……………団 鬼六……………(158)

女武者決斗シリーズ 女四天王……………川上 米子……………(178)

告白 衛生検査技士の妄想……………加藤 尚子……………(187)

男性虐待快楽術(第三話)

薔薇はトゲがあるから美しい……………馬族 保……………(190)

鼻責めに悶える女……………渡辺 暁子……………(200)

アマゾン考察 女性乗馬のクリテリオン……………佐野 寿……………(210)

レズ小説『白い玩具』……………まや・清原……………(214)

読者通信……………編集部選……………(252)

(目次・扉カット……………室井亜砂路・画)

「最新緊縛資料写真一覧」

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 八〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 八〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号(いね)

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

昭和44年4月号

(1969年・4月号<第23巻第4号・通刊第251号>)



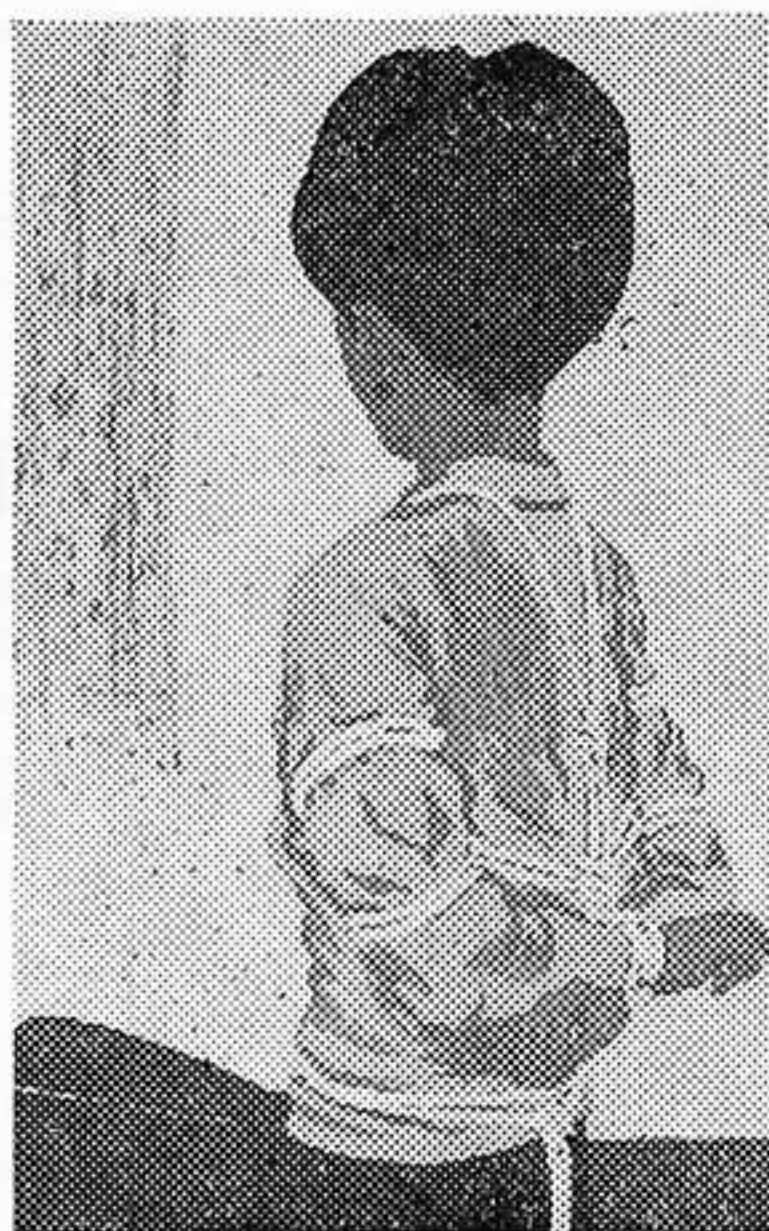
本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



色彩画の記憶

原

薫

自分で、その種の絵を描いてみたいと思っ

たのは、もう四、五年も前からであるが、絵を描くことを専門に習ったわけでもないのでもちも恰好になるものではなかった。それでも書きつづけては又書くというようなことを繰り返しているうち、一つの安易な方法を発見した。それは古雑誌の中にある挿画を探しだしてきて、これはと思う絵をトレシングペーパーで引き写すのである。そして、その下絵を元にして、いろいろと書き加えたり彩色したりして自分の好きな絵に作り変え、仕上げてゆくのである。

その頃、僕は友人から二眼レフの中古カメラを買った。パチリパチリと珍しいままにや

たらと撮りまくったが、現像を頼んでみると案外うまく撮れているのに勇気を得て、モデルを写してみようと思った。親戚の娘や勤務先の会社のBGの中には、僕好みの女性が多山いたが、身近かの中からモデルを頼むことはとても出来なかった。それで、行きつけの街角にある小さな喫茶店のウェイトレスに白羽の矢を立てた。十九か二十か、小柄で可愛い顔立ちの少女に狙いをつけて一カ月ばかり熱心に通った挙句、デートに誘いだす

ことに成功した。

新緑の頃から夏にかけて、僕は青春の情熱を傾けて彼女を撮りまくった。プロニ判で12枚のフィルムを何本費消したことだろうか、悲しいことに、私は自分で現像や焼付が出来ないことを忘れて撮りまくっていたことに気がついて、淋しく諦めてしまわなければならなかった。撮影済のフィルムは徒らに抽出の奥で埃をかぶっている始末だった。

そのうち『奇ク』十月号で、鵜藤恵さんの「ふおと・あんど・むうびい」なる一文を読み「髪をおさげに結った一人の少女が全裸に

されて腰紐で細い両腕を完全に高手小手に縛られている。男が一人、その少女の軀を何とも奇妙な恰好にさせて……』云々なる文章に刺戟されて、喫茶店のウェイトレスを女学生に見たてて、ようやく一枚の画を仕上げてみた。

ペンや筆は素人の僕には、とても無理なので、色鉛筆の12色を使い分けて描いたのだが以前に見たことのある、あの色彩画の素晴しさには程遠くて、やはり自分のような未熟な者の画では駄目なのだと、自分でも情ない位に沈んでしまうのだった。しかし、そんな絵を描きたいという意欲は、中々おとろえるどころか益々熾烈になってきて、一枚画き上ると又一枚、書きつぶしては又一枚と、暇を見てもは画き続けた。

すぐ何事にでも熱中して凝るくせに、又すぐ飽きてしまう飽きっぽい僕のことだから、いつまで続くかわからないが、とにかく僕にとっては、こんな絵を用紙の上に彩ってゆくことが一つの大きな楽しみであった。

○

僕が生まれて初めて、そういう絵を見せられたのは高校一年の時である。

あまりにも遠い記憶なので、今では思い出

そうとしても殆ど忘れてしまったが、小学校の三、四年生の頃に、父の本箱の片隅で、女の人が紐で吊るし上げられている挿絵の載っている雑誌を見たことがある。そんな出来事も、僕をこの世界に引っぱり込んだ要因の一つかも知れないと今では思っている。

今となつては、何処で何をしているのか、まったく音沙汰がなくなってしまったが、その頃、特に仲のよかった同級生に、橋本純というのがいて、授業が終ると毎日のように彼の家へ遊びに行ったものだった。

彼の父親は国鉄の職員で、行くといつも留守だったし、母親はその頃腎臓が悪くて入院していたので彼の家は、日中は殆ど無人に近かった。時たま、編物を習っているとかいう彼の姉が家にいて、顔を合わせることがあったが、無口で余り喋りたがらない娘さんだった。色が白くて可愛いという印象が残っているが、それ以外余り記憶がない。

橋本の家には丁度誰もいなくて、彼と二人で彼の勉強部屋にしている六帖の間で本を漁っている時、彼がその絵を見せてくれた。

それは鮮明な色彩画で、若い女が全裸にされて、壁に斜めに立てかけられたテーブルの上に、まったくの露出したポーズで縛られて

いるもので、泥棒に入った男が、その女を犯している図だった。

その色彩があまりにも鮮やかであったのと無論、そんな絵を見るのが生まれて初めての僕にとって、それは口に言いあらわすことの出来ない程の大きなショックだった。

口に固く喰ぐつわを噛まされて苦悶している女の表情と、水色と白のんだらの紐で、下肢を押し拡げるように縛られている恰好がなんとも言えぬ程刺戟的で、思わず唾をのみ込んで凝視したものである。

父親のいない時は、しょっちゅう見ているらしい彼が羨ましくて羨ましくて、その絵が欲しくてならなかった。

彼の話によると、驚いたことに彼の姉（恵子といっていた）も、この絵の存在を、すでに承知しているというのである。

絵は彼の父親の机の上の百科事典の間に挟まれていて、彼が一見したあとは、必ず隣の本とびったり揃えておくのに、彼の姉が父の書斎へ出入りしたあとは、きまって本の位置がずれていると、得意そうに語った。

十八、九の娘が、こんな絵をひとりで見ながら、どんな表情をしているのだろうと思うといささか妙な気分になった。殊に彼女が控

え目で大人しい人柄だけに、余計気になって仕方がなかった。

次の日に、彼の家へ遊びに行ったとき、物干し竿に下着が乾いてあった。タオルやクツ下などの間に、まっ白なズロースを見たとき僕は心臓が高鳴ったことを、今でもはっきりと覚えている。

橋本とのつきあいといえば、今ではそれ位しか覚えていないが、僕の性格は彼の家へ遊びに行っている間に、徐々に芽ばえてきたのではないかと思っている。

○

今の会社へ入って間もなく、僕の課の上役で、普段は無口な人なのだが、酒を飲むとやたらと喋り出す癖のある中年の人と、会社の帰り、バーへ寄ったことがある。

いつもの要領で酔うにつれて、ぺらぺらと喋り出した。酒が重なるに従い舌の方も止まる所を知らず、さすが客商売の二人のホステス達も、いささかうんざり気味で相手をしていたが、そのうち彼は喋り疲れたか、席の傍の皮靴から大学ノートを一冊とり出した。

「何んなのよ、それ？」

ホステス達は、彼の舌を止めるのに丁度よいチャンスだと思ったのか、さも興味深かそ

うにその手元を覗き込んだが、忽ちケタケタと笑いだしてしまった。

僕も思わず酔眼を見開いて、顔を寄せてみたが、拡げられたノートを覗いてみて、いささか愕然としてしまった。

若い婦人警官が下半身を晒したまま、洗面器の上にしゃがみ込んでいて、その背後に回ったやくざ風の男が二人で浣腸を施している絵が挟んであったのだ。その恰好が僕にとつて、とても刺戟的だったが、ホステス達にしてみれば、只滑稽な絵にしか映らなかったのだろう。彼女達の哄笑は、仲々止みそうにもない。

僕はその時、一緒に声を合わせながら笑ったが、しかし眼だけは真剣に、その絵を見つづけていた。

その上役は、別に僕と同好の志だというのはなくて、只単なる興味本位から、その絵を持っていたに過ぎなかったらしいが、僕は心の中では、その絵が欲しくて欲しくてたまらないのに、口に出してよう言い出せなかった。

この過去に見た二枚の画が、僕のSの心を衝いたのかも知れないと、今では思っているが、その頃は、只胸の中が燃え上るような快

い刺戟が僕の心を驚かせたものだった。

× × ×

女の排泄に興味がある、と言っても、別に排泄物そのものの存在に強い執着があるのではない。

一年程前に、会社の仲間達と、那須ヘドライブに出かけた事があった。

男三人に、女三人と、数もちょうど釣り合いがとれていて、気の合った者同志と言うことが一層このドライブを快的なものにしてくれた。

黒磯から湯元まで約12キロ、さらに湯元から有料道路を抜けてロープウェイまで、六月の新緑が眼にしみる程美しく、一行はすこぶる御気嫌なドライブを楽しんだ。

お昼ちよつと前に黒磯を出発したのに、途中でコーラを飲んだりドライブインで昼食をとった為に、ロープウェイに着いたのは二時頃であった。

車を無料駐車場の隅に入れて、ケーブルカーに乗らずに歩いて噴火口まで登ろうという事になった。

荷物になるものは、みんな車へ残して、女の子を挟むように先頭に男二人、中に女の子を入れて、^{しんがり}殿に僕がついた。

ハイキングコースを進むと、男の足で噴火口まで約四十分の道程。

細い岩道が蛇行して伸びている頂上付近には、もちろん高山植物もなくなってしまうって赤茶けた岩が、ごろごろしている。

コースは二本あったが、比較的楽な方を、というので、少し遠回りにはなるが、それでも意気揚々と登頂し始めた。

初めのうちは、一列縦隊にきちんと並んで進んでいた連中も、やがて次第に体力的な差が出て来るにつれて、その列も乱れがちになる。僕も、一番最後から登っていることは分っている、上の連中の姿が大きな岩に隠れて見えなくなると、さすがに心細くなった。

細い道を、それでも皆に遅れまいと、一生懸命登っていたが、頂上近くなってから、とうとう力つきで、斜面の道に腰を下してしまった。だらだらと流れる、汗をぬぐいながら上を仰いだ、すぐ上にも大きな岩がのしかかるように転っていて、まるっきり上の様子がわからない。

と、突然水の弾ける様な音が、すぐ近くでした。そして、急に、なま温いものが僕が腰を下している岩の間を流れて来た。

その時、僕はそれが何んだかわからなかつた。

た。判ったのは、ちょっと間をおいてからである。

それは、湯気を立てながら、地質が岩肌の為に地面に吸収されずに下へ流れ落ちているのであった。

すぐ側の岩陰に人の気配がした。それも、ためらいがちな、憶している素振りがまざまざと感じ取れるのである。

(女の子だな)

とっさに僕はそう推測した。

このまま僕が岩の裏を覗き込んだらどんな顔をするだろう。おそらく放尿したままの姿勢で息を殺しているのだろうから、いっそ覗いてやろうか——と言う不らかな気持ちも起こらぬではなかったが、しかし、そんな事をしとあとで会社で気まずい思いをしてもつまらない、と思いその場をすぐに離れてやった。頂上に着いてからしばらく待っていると、はたして最後に登って来たのは砂原千代子と言う女の子だった。

僕と顔を合わせても、何んの反応も示さない。

もっとも、あの時あそこに居たのが、僕かどうか彼女には判らなかったのかも知れないが……。

ズボンの尻のあたりが少し濡れたままだったが、そう悪い感触ではなかった。

○

那須へのドライブの楽しさが忘れられずに又同じメンバーで何処かへ行こうという事だったが、それも果たさずに日が過ぎてしまった。

十一月末のある日、僕が会社の宿直になった。

工場長が僕の所へ来て、会社が終ったら女の子を二、三人残しておいてくれ、と言う。

他へ飲みに行くのもなんだから、いっそ会社で飲まないか、と言うのである。

そういう事にはあまりやかましくない中小企業の会社のこととて、僕もすぐに承知して同じ資材課の女の子に声を掛けておいた。

ひとりは群司あさ子という女で、もうひとりは大宮とし恵と言った。

どちらもまだ十八だったが、僕は若い女の方が楽しいだろうと思っで、この二人に声をかけておいたのである。

作業が終り、工程を流れていたベルトが止ると、他の従業員はさっさと帰ってしまい、当番の組が工場内をさっと掃いて、それもすぐに帰ってしまった。

宿直室で飲み始めたのが六時近くだった。

若い女の子は七時頃までに帰さなくてはならないというので、工場長と一緒に残った樋山係長が、三島典子という女を連れて来た。

彼女は今年三十四歳になるが、まだ独身の女で、会社では、とかく評判がよかった。

一升びんが空になる頃には、工場長はじめ若い子を除いて皆好い気嫌——。ふたりの女の子はジュースで相手をしているが、酒の入った大人の話に、すっかり耳をうばわれた様子。

そのうちに、工場長が、例のフィルムをうつそうと言ひ出した。十六ミリのモノクロのやつが二巻あると言う。

どうせ酒が入ったのだから、みんな鑑賞しようと言う事になり、酒が入っているのにも拘らず自分で車を駆って家へフィルムをとりに行く。

僕と樋山係長とで倉庫から白い模造紙を持ち出して来てとっさのスクリーンを作った。

十分位で工場長が戻って来たので、君達は帰るかい、と女の子に尋ねると、まだいい、と答える。それでは、と言うわけで、酒宴の果ての試写会が始まった。

初め、僕はどうせただのエロフィルムだろ

うと思ってたいして気にもしていなかったが

一本目はなる程ただのエロで、五、六分で終ってしまったが、まわりの連中の鼻息が大分荒くなっている。ことに、行為が終って女のそこから白い液体が布団の上にこぼれる所ではかなり大きな反応があったが、僕はむしろ映画そのものより、一生懸命それを見つめている女達の方に興味があったので、映写中の大部分を彼女達の動作に注意していた。

二本目は、少し僕の心を引いた。やはりモノクロだったが、行為の前に縛りが入るのである。

モデルの女は太っていてあまり美人ではなかったが、その女が両手を縛られて天井の太い柱に釣り下げられると、肩の肉と乳房に緊張があつて、苦しそうに喘ぐ表情は、仲々ぐつとくる。

女達には少し異常に見えたのか、息を殺したまま微動だにしない。

やはり五、六分程でフィルムは切れた。

電灯が点るとすぐに、三島典子がトイレへ立った。ふたりの女の子は、まだ頬を紅潮させたまま、ジュースを飲むでなく、ただもて遊んでいる。

私も、と樋山係長もトイレへ立った。工場

長は、見なれているフィルムの為か、別に表情に変化はないが、コップの酒が大分へって

いる。五分程して三島典子が戻って来た。何んだか落ちつかない素振りである。

樋山係長は十分たってもなかなか帰って来なかった。

「どうしたんだろう」

と工場長と顔を見合わせたが、わざわざ立って様子を見に行くのも億劫で、そのまま酒を飲んでみると、下半身をびしょびしょにして戻って来た。

中のトイレは暗かったので外でしようと思つて、誤って工場側の川へ落ちたと言うのである。何んでそんな所まで行って放尿しようとしたのかは分らないが、がたがたふるえている樋山係長を放つてもおけず、ストープの火を強くして、その前にしゃがませた。

樋山係長がストープにかじりついている間に、僕も尿意を感じてトイレへ立った。

なる程少し暗い。が、わざわざ外へ出て行く程の事もあるまいと思う。

僕の推測だが、樋山係長は、映画を見て興奮のあまり、あの時漏らしてしまったのではないかと思う。

それを洗い落とす為に川へ行き、ズボンを

濡らしたままでは反って変だと思われるので自分で川へ落ちたのではないか、と思う。

と同じに三島典子もあるいは……。

しかし、これはあくまで僕の推測であって真偽の程は分らない。

もしそうだったとすれば、これは愉快的事に違いない。三人の女達に与えた心理的ショックを考えると、にやにやせずにはいられない。

× × ×

前にも書いたように以前にある女に写真のモデルを依頼した事がある。

モデルと言っても、別に金を払って頼んだわけではないが、喫茶店で知り合った女の子で、家は矢板だが、黒磯のボーリング場へ勤めている関係で、今では大田原のあるアパートに独りで住んで居ると言う事だった。

僕は二、三回お茶を飲みに行ったりしたがそのうち彼女に露出癖のある事に気づいた。テーブルに向かい合って坐ると必ずと言っていいくらい足を組むのだが、その組み方がオーバーで、初めの時はドキッとした。

最初、僕は、そういう関係になっても良いという無言の暗示だと思って、それとなく誘ってみたが、別に肉体的に欲求しているので

もないらしい。が、事あるごとに自分の軀を見せびらかそうとするので、思い切って、

「君の裸の写真を撮りたいな」

そうもちかけると一も二もなくオーケー。渡りに舟とばかりに、次のデートを約束して別れた。

最初に写真を撮ったのが、彼女のアパートである。美原町二丁目の入り組んだ所にあるアパートで、つい最近建ったばかりと言ってモルタルもまだ新しいままだった。

八月の上旬なので暑い日だった。

二眠レフの旧型カメラだが、写りが良いのでそれにフィルムを二本買い、アパートを訪ねると彼女は準備して待っていた。

昼間なので覗かれないかと聞くと、裏が山になっているし、普段は人もあまり来ないと言う。カーテンを引くと室が暗くなるので、なるべく明るくして（照明の方法がわからなかったので）写すことにした。

スカートを下げ、ブラウスを脱ぐとスリッパ一枚になったが、何のためらいもなくそれすら脱ぎ捨てたのには、少し愕いた。彼女はまだ二十歳だと言っていたが、その露出癖が本物である事に、喜びつつも少しとまどいながら僕はそんな自分が情ないと思った。

フィルムは十二枚撮りだったが、たちまち二本とも写し終えてしまった。僕は汗がびっしょり。

写真の内容については、さすがにちょっと書き難いが、縛りを入れたことは申すまでもなく、彼女が自ら望んだ事もあって、そのほとんどが全裸の露出ポーズであった。

僕にしてみれば、はからずもめぐり逢えたこのチャンスが唯一のプレイであったから、今思い返しても本当に幸運だったと言える。

この時を含めて、全部で十本近くのフィルムを撮り、三回程のプレイを楽しんだが、そのフィルムも現像する機会がなくて、とうとう無駄にしてしまった。

しかし、そのフィルムが、どうせ使い物にならない物だった（露出不足と分った）のだから、諦めがつかない事もない。

三回目のプレイの時に撮った、彼女が室の中でポリバケツに排尿しているポーズも駄目になったことは、何んとも残念でならない。彼女がわざわざコーラを買って来て、それだけでなく汗になってしまふのに、なんとか尿がたまる様に努力してくれたのだから。

彼女は、今はもう東京へ行ってしまったがせめて一本でも完全なフィルムを、とくやん

でも仕方のない事だろうか。

この時以来、この様な幸運な巡り合いの相手も見つからぬまま、今日まで来ているのである。

○

プレイする相手がいなくなってみれば、やはり若い女の子と接している日常の細い所に神経が集中する。

と同じに自分で自分を慰める絵画にも大いに興味が湧いてくる。

最初は、水彩で画こうと思っていた絵だったが、二、三枚も書き捨てると、筆では無理だという事が分った。

それで、十二色の色鉛筆を買って来た。ところが、どうしても女の肌の色が出ないのである。水彩と違って色と色とを混ぜ合わせる事の出来ない色鉛筆の悲しさ、仕方がないので文房具店へ行って尋ねると、二十四色ならいいだろうと言う。

さっそく買い込んで来た。

初めは映画雑誌を参考にして書き始めたが高校の時に見たあの絵が忘れられず、ページをめくっても仲々思う様なポーズのものが無い。最近のサド・マゾ映画の影響で、縛りの写真は多くても、もっときわどく、もっと刺

激的なものと欲を出すのだが、そんなに思い通りの写真は見つからない。

ある時、友人のひとりからエロ写真を見せてもらった。それが、少しアレンジすれば縛ったポーズにしても自分の氣にいったものになりそうなので、その写真をかりて来た。

写真では両足を上げたものだったが、画く時に足首で一つに縛った。こうすれば、いくらか緊縛感が出るだろうと思ったからだ。

女は、前にも書いたが、十月号鶴藤さんの文章を参考に、女学生にしてみた。男は、彼女の養父と言う組み合わせである。

三日程で一枚書き上げたが、出来上ってみると、わり合いに楽しい。

二枚目は高校の時の記憶から、又三枚目は上役の持っていた絵から、と次から次へと欲が出て来て、これはこれなりに楽しいものだと、最近では思っている。

写真をかりた友人が、台湾の写真を持って来た。これも参考になる。

台湾ではこういうショーが、半ば公然と行なわれていると聞いた。

写真は十二枚あったが、まるで、花と蛇を地で行くような内容には愕いた。

鶏卵産み落し、喫煙、習字、ラッパ吹奏、

犬姦、糸つり、などなど……。

習字の文字が、台湾観光となっていたのは、びっくりした。

あるいは、と期待していた浣腸シーンはなかったが、それでもけっこう楽しめる。

写真を返す前に、何とか絵に仕上げてみようと思う。アレンジの仕方にもいろいろ工夫がいて、それなりの苦労が、又楽しく、当分はこの方の趣味が続きそう――。

× × ×

つい最近、知人の招待で塩原へ出かけた。塩原は、那須と違って（と言うのは、那須には御用邸がある為）かなりその方面の取り締りがゆるやかと、聞いていたが、町にはストリップ劇場とヌードスタジオがそれぞれ一つずつあるだけの、温泉町にしては、ちょっと物たりない。

米屋と言う旅館に泊ったが、酒の接待を受けて御氣嫌になった所で、町をぶらつこう、と言う事になった。

旅館からは少し離れているが、男女混浴の共同風呂があると言うので、その知人と、僕と、もうひとりの招待客の三人で町を流しながら行ってみた。

時間が遅かった為か、まったくタイミング

が良く、若い女の入浴者がひとりいる。知人は芸者だろうと言う。さっそく着物を脱いで風呂へとび込んだが、入っているのは、二十八、九の女。しかも知人の言う様に芸者らしくて妙に色っぽい。

こんな女を縛り上げて自由にできたら面白いだろうとひとりで悦に入りながら、女をかこむ様にして湯に入った。

芸者とは言え、三人の男が急に入り込んで来たのには、さすがに愕いたらしくて、出る事もならず、はっと身をすくめた様子。

そのまま意地悪く十分程入っていたが、酒が入っている為に、女よりこちらの方が早くまいてしまった。

そろそろ出ようと言う事になって、せっかくのチャンスも中途半端のまま、風呂を出たが、何んとも気持がおさまらない。

知人達はさっさと着物を身につけて出て行ってしまったが、僕はわざと遅れて身仕度をする。

女の脱いだ着物が、かごの中にきちんと入っている。見れば着物の間から、申し分程度に顔を見せているのは、ピンク色のパンティ。

こんなことを知らんふりで放っておくのは

もったいない、と思い、そっと手に取って鼻へ近づけると、ほのかに女の臭いがする。

ブラジャーは少し汗臭いが、妙に嬉しい。下着ぐらいならかまわないだろうと、パンティを素早くふところに入れてそこをとり出した。

知人達には知らん顔をしていたが、思わぬみやげ物に、内心のうれしさを隠せず、どきどき。

塩原も、たまには良いと思った。

× × ×

塩原から帰って来て一日二日は、持ち帰ったパンティの移り香を楽しんだが、そのうちそれも飽きてしまった。

同じ下着でも、やはり二十歳前の若い娘のものの方が好いには決っているが、そうたびたび無断で拝借しては、軽犯罪××法に引っかけってしまうのでそれもならず。

温泉芸者で我慢して、まずは充分すぎる程満喫した。

会社の方はそれ程忙がしくなかったので、余暇を見つけては、相変らずの絵に熱中。

ある日、会社の帰りに女の子を二人誘って食事に行った。小さな食堂だが、味が良いので僕の行きつけの店だった。

まずはビールで一杯と言うので（僕が強引にすすめたのだが）三人でグラスを上げる。

一本のびんを空けると、もう少し飲みたいと言う事でもう一本追加した。ふたりの女の子も、少し飲み過ぎた、と口にしながら、それでもグラスをほすピッチは相当なもの。

ビールが終れば、あとは早く食事をすませなければならぬ。ある下心があったから、何かと理由をつけて早目に切り上げると、店を出ようと言う事になった。

そろそろ街のネオンが色づきはじめて、何んとか好い気分になってくる。

このまま帰るんじゃない、公園へでも行こう、ともちかけた。

つい二、三年前に出来たばかりの竜頭公園は、町の東はずれにある。

大久保町を下ると五分程で公園に出た。

夏の間はアベックで一杯になる場所だが、さすがに落葉の季節とあっては、そんな姿も見られず、酔いの回った頬に冷たい空気がな

んとさわやかで、そのままふたりを誘って天望台へ登った。

長い石段が、ぐるりと廻って伸びている。五十メートル位の高さだが、ちょうど城山の頂上に建っているので、大田原の町が一目

で見回せる。すっかり灯りの入った家々と、まだわずかに残った正面の高原山の夕焼けが素晴らしく思わず魅せられてしまう景色に、連れの女の子も満足そうである。

そのまま、しばらくはあれこれと話しがつづいたが、そのうちに、いよいよ期待していた現象が起こり始めた。

酔いが少しずつさめてくるにつれて、冷たい空気が容赦なく肌を刺す。

ぶるっと身震いしながら、
「そろそろ降りましようよ」

とうとう、こらえ切れなくなったらしい。

それではと、なるべくゆっくりと降りはじめたが、ふたりの女の子は、もう激しい尿意を前々からこらえていたらしくて、その足どりもなんとなく急ぎ足なのである。

僕がそばにいたので、はっきりそれを言う事もならず、ふたりの困惑した様子が、手に取る様にわかる。

公衆便所は山を降りなければならないし、まだそこまでは、少し時間がかかるので、僕はゆううつと歩を進めた。便所の近くまで来てから、ちょっと寄って行くから先に行っていてくれ、と言うと、はっとした様子。ざまあみろと心の中で舌を出しながら、ひとりです

っさとトイレへ入った。

ふたりの女の子の観察に心をうばわれすぎて、僕の方もどうやら満タンになっていたものだから、かなり時間がかかった。

爽快な気分でするトイレを出ると、ふたりの女の子は、まだそこに立っている。

どうしたの、とわざと意地悪に尋ねると、何やら言いにくそうに、もじもじしている。

そろそろ解放してやろうか、と思った。

ふたりを待って立っていたが、その時間の長かったのには愕いた。

よほどたまっていたに違いない。

帰りにシャネルと言う店でコーヒーを飲んだ。うまい。舌のやけそうなやつになんとも言えぬ香りが、軀の奥までしみ込んで行く。

ふたりの女の子と途中で別れて、まだ少し時間が早いので、本屋へ寄った。

二、三冊の映画雑誌をめくったが、どれもこれもつまらない。寝室秘話とか、夫婦生活などのページをめくったが、この方も冴えない。家へ帰って、又画こうか。

又、あの時の様に、ひよんな事から幸運にめぐり合わぬとも限らない。それまでは、ひとりで慰さめるより仕方ないだろう、そうあきらめている。

会社で、樋山係長が烏山の支社へ転勤になる、と決った。その送別会が、土曜日に、作業が終わってから会社内でひらかれた。

樋山係長は、今年でたしか四十二、三だと思いが、まだ独身だった。

二十歳の頃に結核をわずらって、片方の肺を取ってしまった、と言う話である。

そんなわけで、その青春時代はかなりみじめだったらしく、たぶんS、Mの要素を持っている様に僕には思える。(僕の感じた所では、MよりむしろSの方だろうと思うが)

若い女の子を見る眼つきに、時々はっとするものがある。

会社内での樋山係長は、おとなしくて話のわかる人で通っているが、あの試写会があったから、僕は少し見方を変えて来た様に、自分でも思っている。

もし僕が自分の趣味を打ち明けたら、あるいは一も二もなくとびついて来るかも知れない、と思う。が、いずれにしても、樋山係長が烏山へ行ってしまうえば、僕とは出張の時以外にほとんど会う機会もなくなってしまうのだから、少しさびしい気もする。もし、彼が同好の志であるとすれば……

体験記「熱い青春」



お灸いじめ

玉田 静江

「熱いッ！ ウームムッ」
ついに賢ちゃんは、悲鳴をあげてうなり出しました。

うつ伏せになっている背中から紫煙が立ちのぼり、もぐさの燃えるにおいが部屋いっぱいにたちこめています。

賢ちゃんは、その熱さに一生懸命耐えている様子です。口をゆがめた顔をまっかにして握りしめた拳がブルブルふるえて、絶えずうなり声が続き始めました。

その様子を見ている私は、ぞくぞくするほどの気持が急に昂まり、胸のドキドキが激しくなってくるのがよくわかります。

その煙りがゆっくりと消えてゆくと、黒く灰になったもぐさは払いのけられ、そのあと

へまた新しいのがのせられます。大豆ほどのもぐさは、線香を待ってすぐ煙りを立ちのぼらせ、賢ちゃんを呻かせるのです。

○

賢ちゃんはことし成人式を済ませたばかりですが、まだ童顔のおもかげを残す色白の顔立ち、とても二十才には見えないときがあります。中肉中背というのでしょうか。グリーンや赤のセーターがよく似合い、ことに細いストラップスなどを穿くと、若さそのものと感じられるような、カッコいい青年です。

私は、小さなお店ですがスタンドバーの、これでも「マダム」なのですが、賢ちゃんを知ってから、一度いじめてやりたくなったのです。私は賢ちゃんとは五つしか違いません

が何故か、もっともって年下の少年のような気がして、仕方がありません。その賢ちゃんが、お店でハイボールを飲んでから、しばらく経って、胃が痛いといい出した時、私は、すぐにチャンスだと思い、

「胃は早く治さないと駄目よ。私がいい先生を知ってるから一緒に行きましょう」

とってしまったのです。

「まさか手術なんかじゃあないだろうね」

「とんでもない。ごく簡単よ、少しは熱いかも知れないけど……」

「熱い？」

「そう、お灸だもの」

「エッ。あの線香で火を点ける、あのお灸のこと？」

「そうよ。とってもよく効くのよ。さ、これからすぐ行きましょう。クミさんお願いね」

クミさんというのはバーテンさんです。

「そんなのいやだよ」

「だめだめ、早く治療しなきゃあ。胃はひどくなるとこわいのよ」

「だって、お灸だなんてカッコわるい」

「なにいつてんの。効くんだったらなんだっていいじゃない。ネ、お願い、行ってちょうだい」

「でも、なんだってそんなに僕のことを……」
「それは。……それはね、うちのお酒で胃を痛めたって思われると……」

「思やしないよ、そんなこと」

「いいえ、だめ。とにかく行ってちょうだい
お願い。そのかわりスキー用品をプレゼント
するわ」

「スキー用品？　ほんとかい」

「お灸を我慢したらね」

「するよ、する」

賢ちゃんにはスキー用品が、よほど魅力であつたようでした。

○

お灸の治療院といっても、普通のお医者さんの診察室と余り変りはありません。ただ、五つもレザー張りの診療台が並んでいるのが違うところでしょうか。

院長先生は、よくお店へ来てくださるお得意さまなので、気易くお話しも出来ます。でもやはり、お店で冗談をいっていられるときとは、ずいぶん感じが違います。

賢ちゃんは、院長さんに云われると、仕方がないというように私の方をチラッと見て、赤いセータを脱ぎ始めました。続いてシャツがとられます。男には惜しいような滑らかな

肌が、私の感情を昂らせました。

治療台に横になった賢ちゃんを見降ろしながら先生が、

「きみ、どうだい、通院出来るかな？　続けられないようなら、少し大きいのを据えたらいいんだがね」

賢ちゃんが、おどおどしたような眼で、私を振り返ります。とても可愛いく思いました。が、私はわざとそしらぬ顔で、

「大きいのをお願いしますわ」

と代りに答えてやりました。

「そんな……」

と賢ちゃんが、不服そうにいいながら起き上ろうとするので、私は大急ぎでその肩を押えました。掌にじーんと電流のような感覚が走り、胸の中がカッと燃えるようでした。

「近頃の若い人達は、お灸というと頭からバカにするが、薬よりよく効くよ。胃の痛いくらいはすぐさ」

と先生がいいながら、賢ちゃんのミゾオチ辺りを軽くつつきました。それで観念したのか、賢ちゃんは眼をつむっておとなしくなりました。

先生の手で賢ちゃんの胃の上辺りに印しが二つつけられました。それからズボンですこ

しずらせて、おへその下辺りに二つ。そしてさらにその下に一つ。今度はうつぶせにさせて、背中に二列行儀よく並べて腰辺りまで十二。そしてぐっとズボンを下げてお尻に四つの印しがつけられたのです。

きれいな賢ちゃんのこの肌が、この印しだけ焼けるのかと思うと、私はドキドキするような気持と同時に、ちょっと惜しいような気もするのです。

「こんなにたくさん据えるの？」

と賢ちゃんは顔をよじらせて、小声で私にいいました。先生が聞きとがめて、

「きみは病気なんだよ」

と一言だけいって、私の方をみてニコッとされました。

そこへ白衣を着た若い女の子？　がはいってきました。まだ二十前後でしょうか。助手だそうですが、先生がこの人に「据えてあげて」といわれたとき、私は急に胸のドキドキが余計にかまりました。何か嫉妬めいた気持ちもあつたように思います。私が据えたいような衝動も感じました。

若い助手は、やはり慣れているのか別に賢ちゃんの肌をみても表情を変えません。若い人はめったに来ないらしいのに、仕事とわり

切っているのでしょうか。でもその事務的な助手の態度で、私は何かホッとした気持ちになったのでした。

いよいよ、もぐさに火がつけられました。煙が立ち始めました。見詰めている私の方が背中に熱さを感じます。体がきゅうッと縮まるように思えて、ワクワクする気持で慄えるような何かが突き上ってきます。

「ウッ！」

と賢ちゃんがうめきました。いよいよ第一番目のもぐさが燃えつきたらしいのです。次々と十二の点が熱さを与えるはずです。賢ちゃんの呻きが激しくなって、跳きはじめました。きつと生まれて初めてのお灸の熱さに、びっくりしたことでしょう。私は、頭の方にまわって賢ちゃんの両肩を抑えつけました。

「動いちゃだめよ」

「ムーッ、熱い！」

返事の代りに賢ちゃんは唸ります。背中が大きく波を打ちました：

「熱いですか。少し大きいのを据えていますけど、一寸辛抱して下さいね」

若い助手は、あたりまえのようにいって、慣れた手付きで灰になったのを払っては新しいもぐさと取り替えて、平気な顔で火を点け

るのでした。

賢ちゃんの呻きが切れ目なくなって、抑えている肩がうねろうとします。額に汗が、ふき出しているのを見て、私の胸のうずきが急に激にふくれ上ってきました。若い男のお灸にもだえている姿は、私をなんともいえない気持ちに誘い込んでくれるのに十分でした。賢ちゃんをいじめている。賢ちゃんもだえている。私がこうして苦しめている。……その実感で私の魂は宙をとぶ想いでした。

背中、あのきれいな背中に黒々と、十二コの灸跡をつけた賢ちゃんは、今、私の手で抑えつけられて、その恰好のいいお尻から、四筋の煙りを立てながら、呻き苦しんでいるのです。体を走り抜ける戦慄をいくども意識しながら、私は知らぬ間に賢ちゃんの肩に爪を立てていたようでした。

背後を終わって、おお向けになった賢ちゃんは、若い助手さんと初めて顔を合せたからでしょうか、急に顔をマッ赤にしました。私はまた嫉妬じみた気持ちがもくもく盛り上ってきました。

ミゾオチの辺りや、おへソの下などは、背中よりずっと熱く感じるはずなのに、「熱い熱い」と呻きはしましたが、賢ちゃんは、背

中の時より跳きかたが少いのです。私は変に思いました。そり返るようにそむけている賢ちゃんの顔は、もぐさの燃え尽きるたびに歪んでいるのを見ても、熱いには違いないようなのに、余り跳かないのは、若い助手さんを意識しているからだろうと気付いて、私はラムラと腹が立ちました。

「早く治すのですから、もっと大きなのにしていただけません？」

さり気なくつくろって、私は助手さんにいってやりました。助手さんは一寸考えているようでしたが、今までよりさらに大きな、もぐさにしてくれました。賢ちゃんの跳き方が俄然、大きくなりました。

○

帰り途で賢ちゃんは恨みがましく何やかやいっていましたが、私は知らん顔をして、何とか二人きりになって、あの灸点に据えてあげられる方法はないものかと、考えていました。

スキー用品の高いのには驚きましたが、ボツボツ買ひ揃えるという口実が出来て、かえってよかったと思います。

懸賞入選作品

妖^{よう}童^{どう}記^き

(下)

秤

蕩

也

アル・タイワ

ここは、宏壮な洋風邸の、奥まった一室である。中央のソファに、和服姿の白鬚瘦面の老人が、チョコンと腰かけていた。

真上からの照明で、ツルツルのその頭部は赤黒い光沢を放っている。

さっきから、ただ黙然としている様は、なにか置き忘れられているかのような感じであった。だが、この老人が、この邸の主人であることには違いなかった。

時折り、廊下に秘めやかな足音がして、

「伊藤さま、只今お着きになりました。でございます」

などと報告にくる初老の男がある。この邸の、召使いの一人であった。

老人はこの報告に応えるどころか、身動きひとつしなかったが、召使いのほうも心得たもので、報告が終ると、そのまま待つ気配もなくスーッと消えてしまう。

室内には、老人が腰かけている他にも、まだ主のないダブルクッションの椅子が三つ、一見、乱雑げに、配置されてあった。

室内の一方に黒いビロードの幕？ が、この部屋の四分の一ほどを余したところで仕切



ったように垂れていて、その先はどうなっているのやら見えない。ただ、この幕さえなければ、この部屋はかなりの広さに感じられることだろう、ということだ。

午後九時ちょうど。

チラと老人の眼の玉が動いて、不意に、化石からよみがえった如く、大きく腕をのばして伸びをした。それから彼は、ピョコンと立ち上り、今度は天井に向かって、アゴが外れてしまいそうな欠伸をやったのけた。

すると、それが合図であったとしか思えないようなタイミングのよさで、ドアが開き、そこに、ダーク・ブラウンのワンピースをゆ

ったりと着こなした、やや小肥りの、上品げな白髪の婦人があらわれた。

「揃っておるかな？」

老人は、その婦人を見向きもせず、訊いた。しわくちやの顔に似合わず、案外と若々しく張りのある声だった。

「ええ、おそろいになっていますよ」

ドアのところから一步も入らず、婦人も老人同様、あらぬ方に視線を投げたまま、低い声で、もの静かな口ぶりで答えた。

「では——主人たちにだけ、ここへ集って貰おうかな」

「ハイ、つたえましょう、すぐに」

婦人はそのとき、僅かながら片頬に皮肉な笑みをうかべた、が、すぐに、素直に頷いてみせた。

「ところで」

老人は尚も背中を向けたままで、訊いた。

「お前はこれから、出掛けるのだろう」

「もちろんですわ」

「例のところか」

「さあ、——でも、それはあたしの勝手にさせて戴きますわ」

「ふん。わしとしてもそのほうがサッパリして良い。だが、甥のところ余りわしの悪口

を吹くではないぞ」

「そのつもりで、いつもいるのですよ」

「——」

「なるほど、そう言われてみると、私は今までに貴方の悪口なんて、言った覚えはございませんんだ」

「嘘つけ。わしはみんな知っておるぞ。この前だって——」

「この前、どうかしまして？」

「もういい、早く行け」

婦人は、老人の背中の中の動揺の色に対しても眉ひとつ動かさない。

「里見と、お車、借りますよ」

「お前の車はどうした」

「今夜のような場合、私の車を使う必要はありません」

「勝手にしろ」

「そうさせていただきます」

「それにしても、何もいままさ、あらたまっで断ることはないだろう」

「それは、どういう意味ですの」

「いまに始まったことではないだろうが。この何十年間、ずっとお前は、借りっぱなしの筈だ。車も——里見も」

「でもそれは、私からすすんでお借りしたこ

とではありませんよ」

老人は、いびつに口唇もとをゆがめた。

互いに奥歯にものを挟ませた。白々しく、あっけない夫婦の対話？ だった、ともいえないが、やがて婦人は静かに去って行った。

とうとう最後まで、老人のほうへ一瞥すら与えなかった。そのくせ、態度は悠々としていた。老人は、ドアが閉まるのと同時に舌を打ち鳴らしていた。それは、いかにも苦々しく、腹立たしげであった。

間もなく、そのドアにノックがして、この夜の『招かれた紳士たち』が姿をみせた。

シンシタチ

「やあ、中津川先生。まったくの、お久しぶりというところですねあ」

「またお会いできて、嬉しいことだと思っております」

「先生、お壮健で、なによりです」

老人は、この挨拶には唇をへの字に結んだきりで、かすかな眼の瞬きだけで応えた。

三人は、重役風であり、商店主風であり、学者風であった。

一樣に、その久しぶりの再会が嬉しいらし

く、椅子に就くなり互いに握手したり肩を叩きあったりして、矢つぎ早やの雑談を始めるのだった。ちよつと見ると、まるで旧師をかこんでの同窓会みたいな雰囲気である。

「いやあ、去年お会いしたときよりも、うんとお若くなつていらつしやる」

「オ、これはまたご冗談を。そういう貴方こそ、お顔などいっそう艶々となられて——ハハアン、これは、ここ一年間、ますます心身が充実していらつしやる、という証拠になりますな」

「とんでもない、貴方こそ」

が、彼等とてこんな雑談が目的でここへ集つて来たのではないこと、無論だ。

さて、ややあつてそれまでソファにもたれていた老人が、ギョロリと眼玉を廻した。

「今夜は、ごくろうさま」

眼の動きがとまると、彼は尊大にアゴをしやくつて言った。三人はそれに応えて、無言のまま、かるく頭を下げた。

「年に一度の、そうだな、例会みたいになつておる年に一度の今夜が、とうとうやつて来おつたな……」

うっすらと笑つて言う言葉は自分自身が嘸みしめようとしているかのような、声のひび

きであつた。

「この一年間、わしはこの夜の来るのが待ち遠しくて、たまらなかつたものだが——御三方はどうかの？ わしは、皆さんがこの一年で、涙ぐましいばかりの努力を傾けて調教され、磨きに磨きをかけたと、充分想像される『掌中の珠』を、また今夜もこうして、無事に観賞させていただけることに、まったくの幸福というものを感じておる」

ここで老人は、演技かなにか知らないが、その眼をシヨボシヨボさせてみせた。

「楽しみだな。たとえればいづれがあやめ、かきつばた……。はてさて、今夜とて例にもれず、この老いの眼に、あんた方が披露してくれるその『掌中の珠』は、きっと最高の観賞物となつてくれることだろう、厚く礼を言わせていただくとともに」

急に彼は胸を反らして、いくぶん言葉にちからをこめた。

「これはたつた今思ひついたことなのだがその、わしのせめてもの気持として……今夜のこの会の披露に於いて、かくいうわしを完全に唸らせてくれた主人に、あの菊花の黄金盤を受けとってもらおうと——」

老人は、言ってから素速く三人の表情に鋭

い眼を走らせた。

(あの——菊花の黄金盤を?)

それは老人の秘蔵する貴品のなかでも最高クラスに属するといわれている。かねてよりこの三人の垂涎的であつたのだ。

彫金の高肉彫り仕上げ(毛彫りを併せて実に繊細な、手法の凝つたもの)で、もし時価として踏むならば何百万、いや何千万するやら見当もつかない。息を詰めたのも一概に無理とはいえないだろう。

「では、老人というものは氣短かでのう、早速、開幕……披露ということにしてみようかの」

効果観面の彼らをたのしげに見やつて、老人が言った。三人は、我に返つたように意氣どみ、いっせいに頷いた。ここにきて、もう先刻のなごやかさはその面上から拭いさられていた。

老人が、ちぢむようにソファへ身を沈めながら、かるく手を上げた。いつの間にかドア近くに立っていた一人の男が、壁づたいにすみ出ると、例の『幕』の前に立った。

と、灯りが消えて室内は闇黒となった。紳士たちが、その闇の中で何となく居ずまいを正し静かに——しかし、あるねばっこの熱氣

を胸の奥に秘めて、次を待つ。一瞬、彼等の後方、天井近くから一条のスポット・ライトが、白光の棒状となって、未だ開かれざる幕の中央に注がれた。

ライトの反映でぎらつく十個の眼が、異常に高ぶりつつある互いの無音の氣息を、露わに表現しながら、その一点に集中した。

重々しくさえあった幕が大様に揺れて、放たれているライトの中央から、ゆっくりと割れはじめた。

やがて――。

獲物を求めてキョロつくかのようだったライトは、その一段高く設置された舞台？

の端へ登場した男の姿をとらえて停まった。

あらためてお互いに微妙な競争心に燃える三人とはうらはらに、招待主の老人ただひとり、この開幕と同時に若者のような……いや、若者以上のような輝きを『単純』に、その眼に宿し始めていた。

ジュン

赤銅のような裸体に、真っ白い禪をキリリと締めた、二十五、六才の青年である。

誰もいないような、ひっそり閑としている

『観覧席』のほうに向かって、足を踏ん張ったまま恭しく一礼をしてみせたとき、その素晴らしい肉体はクリクリと彫りこまれたような見事な陰影を作った。

極端に細く見える足首から、筋肉が捻れて盛りあがっている太股、固く締まっている腹部から内臓器のすべてを押し上げてしまったような胸部の鮮かさ。そして巾広い肩の隆々たる美事さ。眉濃く、眼も黒々と涼やかで、強くむすんだ口のために僅かに痙攣する頬骨あたりは、髯の剃りあとも青々しい。いうなれば美男子であった。

ところで、こんな禪姿だというのに、どのような意味があるのやら知らないが、ちょっと可笑しく感じられるのはその首もとに細ゴムか何かで、チョコンと付いているグリーン

の蝶ネクタイである。
この小さな蝶ネクタイの故で、せっかく、凛々しい青年の禪すがたも、まるで生半可な道化師^{ピエロ}みたいに見えるのは残念だった。

彼の裸体ぶりを“点検”するかのよう、に、默然と凝視していた観覧席の三人の紳士も、この蝶ネクタイに気がついたとたんに、遠慮もなくヘラヘラと声を立てて笑った。

おどろいたのは禪青年である。

何故笑われたのか解らぬままに、しばらくはポカンと口をあけていたが、すぐに赤くなつて、おろおろしはじめた。

「うほん！」

わざとらしい老人の眩が、場違いな三人の笑いを押しとどめた。

これに勇氣を得たものか、やつのことで青年は、キツとなって、顔を上げた。

そして、宙をにらんで一呼吸の後、それまで何気なく後に廻っていた片手をサッとあげた。瞬間、振りおろす。

びしゅっ！ と鋭い音。

すばらしい筋肉の躍動に氣を奪われかけた三人は、アッというまもなく、その空を裂く峻烈な音に眼をみはった。笑い顔は完全にとび散ってしまい、そこに漸く我れにかえった平常の、もっともらしい面^{かお}がのこった。

禪青年の、水平に伸ばして停めた手の先から、瞬時にして生氣を失った革紐が舞台上に長々と弛んで垂れたとき――

片方の、たぐり寄せられている幕のかげから、いかにも間のびのした声があがった。

「え――曾根浦さまア、奴隷……ジュン」

悪声で、不明瞭で、なんだか安っぽい、が、もうちょっとキマリのあるアナウンサーをな

なんてことは、会の性質上、それはぜいたくというものであろう。

さて、このアナウンスを聞くと、四人のうち学者風の曾根浦を除いて、一同は、みるみる露わな好奇の色に燃えて身をのりだした。ぱしっ！

ふたたび、鞭が鳴る。

と、この時、鞭振った禪青年のほうへ引き寄せられるかのように、よろよろっと、奴隷ジュンが登場した。

同時に、ライトが、待ってましたとばかりに走って、その全身をとらえた。

赤銅のような禪青年とはこれはまた対照的な、蒼いばかりに白い肌だ。腰部にぴっちりとしびぬるのパンツを穿かされて、その濃紺の色はヌルヌルと濡れ光っている。そして、その裾から膝がしら近くまで、俵掛け式になっている革製バンドが両の太股を不自由に拘束していた。これでは、よろけつつ登場したのもあたりまえだった。

その上、二本の腕は捕虜兵のように、首の後にあげて、手首のところで縛り合わされているのだった。

意志ならず頼りなく、こんな姿でやっこのこと舞台中央にすすみ出た奴隷ジュンは、こ

のとき観覧席の中へ自分のご主人さまを求めて哀れな視線をうろつかせた。

「……………」

俗にいう「可愛い子」ちゃん容貌なのだが、こんなショーに放り出し登場させられたのは勿論始めてのことだろう。オドオドしているというよりも、ガタガタふるえているといったほうがよかった。柔らかそうな髪が何かではたかれたようにパサリと額に落ちて追いつめられてしまった白い表情が、ピク、ピク！ とひきつっている。

必死に視線をうろつかせた甲斐あって、彼は逆光の一点に漸く我がご主人さまの姿を見つけた。

（ああ、ご主人さま……）

彼は、泣きださんばかりの表情になった。（ひどい、ひどい！ 何の理由もおっしゃらずにこんな処へ連れて来て、こんな羞しい姿を他人の眼に晒すなんて——）

鞭打たれ緊縛で責められるのも、いつもご主人さまと私の二人だけの秘密なのに、と恨みつらみの想いがそのつぶらな瞳にこもって凝っと思つめる。

ところが、そのご主人さまの曾根浦は、実に冷酷な顔つきで彼をにらみかえしているで

はないか。

助けてくれるどころか、何を今更みっともないぞ、とばかりにすっかり見捨てた風だ。

（ああ——）

とジュンは諦めの瞳を閉じた。

瞬間、立ち縛りの全身の肌に、昨夜のご主人さまから受けた「いたわり？」の感覚が目くらめく速さで想起されて奔った。

その時——。

やにわに鞭が唸って、肌をするどく打つ音と同時に、彼の胴へ生きもののようキリッと巻きついた。

「きゃあッ——」

ジュンは、諦めきった表情もつかの間、若い女そのもののけの凄い悲鳴をあげてのけぞる。細面の顔がいつそう長くなって、オーバーに眉がとび上り、眼が吊り上った。そして、そのまま足がすくんでしまったのだろうか、ヘナヘナとくずれかかる。

とたん、鞭がピーンと張る。

「あっ」

後へ、もんどりうって引っくり返った。

さあ立て、立つんだという風に、巻きついたままの鞭が無情に波打った。

窮屈な足が変な恰好でバタついて、くり抜

かれている「部分」が、びっくりしたような「顔」でライトに晒けだされた。

「か、かんにんして、おにいさま！」

立て、と鞭搏たれても自由なのは膝から下の足だけだ。仰向けに引っくりかえったこんな姿では、そう簡単に立ちあがられるものではない。空しくバタつく足の向うで、ジュンは哀れな声を出した。

「曾根浦さん、なかなかに好いじゃないですか」

「観賞眼」を光らせていた一人が、むっとりとして難しい顔の曾根浦に、本気とも追従ともつかぬ囁きをかけた。

「可愛くって、しなが良くって、なかでも特に、あの足指のかたちが、なんとも言えませんなア」

「……」

曾根浦は、ますます難しい表情をしてみせた。

「いや、うらやましい限りです」

そのとき、ジュンの身体から鞭が放れて、おどり出た禪青年が乱暴に彼を引き起こしにかかった。

「あつ、おにいさま、もう止めて……」

固く縛った手首のところをつかまれて、強引に起こされたジュンは、あぶら汗できらつく顔を振りながら青年に哀願した。

が、禪青年は、ムツとした横顔を見せて、そんな願いにはお構いもなく突っ立たせる。

そして二、三步離れると拾いあげた鞭をまたも打ち鳴らした。

鞭は生命あるものの如く撓って、プチンと可愛くついている乳首のあたりに当たった。

と、ジュンは、今度は声もなく、すばらしい？ 跳躍を見せた。

非情の鞭から逃がれようとする、必死の兎そのものであった。

それを追って第二撃の鞭。

同時に、渾身を奮っての兎跳び。

また、これを追って唸る鞭。

舞台は、にわかに騒々しくなった。

息をもつがぬ追跡と逃亡の、赤銅と白の肌に、レビューのフィナーレのライトのように

烈しく躍動し始めた照明が、可笑しさと緊迫の入りくんだ舞台をいっそう煽るかのように追い、走った。

そうして。

舞台を三周ほどもして、ぶっ倒れそうになったジュンが、右端のほうまで逃げてきたと

き、そこで彼は、不意にそのまま幕の向こうへとびこんで姿を消してしまった。

すると――。

舞台の中央あたりで、ジュンの消えていったほうに向かって鞭持つ手を、大げさに振りかぶってみせた禪青年は、そこで急に「観覧席」に対して正しい起立の姿勢をとり、深く一礼をした。

曾根浦だけを残して他の者は、いたって景気のよい拍手喝采を舞台上に送った。

――意外とあっけない第一幕の幕切れではあったが、各登場者の持ち時間が十五分前後とあらかじめ決められていたのだから、これも仕方のないことであった。

一礼を終った青年が、その口もとになんとかなくホッとしたような、微かな笑みを浮かべたとき、

「伊藤さまア、奴隸――キチ」

一息入れる間もなく、例の間のびのしたアウンスである。

禪青年は、ふたたび糸に操られた人形のごとく、ギク！ として身構えた。

今の兎追いで、蝶ネクタイも歪んでしまっている。

だが、元気はいっぱい、

——ぴしっ！

渾身こめて鞭を打ち鳴らした。

さて、この鋭い合図で、次に登場したのは台車上の奴隷、キチであった。

キ チ

台車といっても、一・五メートル四角ほどの厚板で、裏四隅へ前後左右に自由廻転も出来る小車輪をつけた、例のやつである。

台上には手枷足枷の鉄輪が固定されてあって、キチはそれへ、四つん這いの恰好となつて手足をひろげさせられていた。

なだらかな背面に薄布がかけられて、その幻妖な色彩は床上にまでフワリとながれて落ちていく。

深く首をたれて身動きもしないキチの、そんな姿を、スポット・ライトはまるで剥製の置物を見せるかのように、白々しく舞台上に浮かびあがらせた。

「なるほど、考えてみると、この披露会には始めてのスタイルですな」

主客入れ替った形で、キチの主人伊藤某に囁きかけたのは曾根浦であった。

「いやア——」

心はずで舞台上の我が「愛玩物」のキチの上に被^かぶさっている伊藤は、曾根浦にそっけもなく応えて眼を凝らしている。

欲望から芽生えた危懼と希望に、めらめらと燃えた眼の光りであった。

「貴方も、わたしたち以上にご執心で、毎年すばらしい奴隷を次々とご披露してくださいが、今夜は特にすばらしい。実に美しい身体の線をしていますなア」

さっきのお返しの意味か何か知らぬが、曾根浦は甘い執拗な声で囁きつづけた。

そのころになって、放り出されたままの形であったキチの周囲を、禪青年がゆっくりとめぐりはじめた。後手に鞭を引き垂らして、さてどうしてやろうか、というような思い入れている。

やがて彼は、キチの向う側で立ちどまると何かを楽しむかのようにキチの背中の上で指をピクピクさせていたが、ひとつ頷くとその薄布をつまみ、ふんわりとはらいのけた。

生れたまんまの四つん這い姿が、赤銅の立像と交叉して、不思議な構図となってライトに映えた。その瞬間、禪青年は横っ跳びにとんでキチの後方に立つと、不意に、身をかがめ、台車に手をかけて持ち上げ始めた。

緊った筋肉が捻れて、ぶるぶると震える。

「……………」

キチは、態勢の急激な変動に驚いて、はじめてその顔をのけぞらせた。

きりりとした横顔にも、まだ甘さが充分残っているように見えた。

禪青年が台車をほとんど直立に（キチにとっては逆さまに）立てたとき、

「か、かんにんして！」

キチは逆流するような悲鳴を上げていた。

枷られている手足の鉄輪に体重のすべてがかかって、痛烈な苦しみが襲っているのだ。

「ゆ、……」

許してといおうとした二の句は途切れて、横腹が信じられぬ程の速さでピクついた。

その時、足を踏んまえた禪青年は、逆様の台車をギリリと廻して、キチの背面を観覧席のほうに正面向けた。

同時に、伊藤を除いた三人がアッというような表情をした。

キチの、ライトをまともに浴びた背中に、なめらかな肌とは対照的な痣が、ひとつの文字となって這っていたのである。

「イ？——い？——」

「うーん、伊ですな」

まさしく、さかさまの「伊」がその背中にあった。

(——焼き印?)

三人は一樣にそう思って、ますます眼を凝らした。もしもこれが焼き印であるならば、牛馬のそれのように、わが姓の頭文字を背肌

に焼きつけた伊藤もさることながら、それに堪えて頭文字を甘受? したキチのこの有様は、秘した両者の只ならぬものを感じさせてやまないではないか。

輝青年は、ゆっくりと元の位置へ台車を倒した。起き上ることもかなわず、俯伏せに倒れるも出来得ず、苦痛のままにキチは大きく腹を波うたせていた。

そのとき、だしぬけに舞台の袖より黒い腕が差しのべられた。

気づいた輝青年は、その手から木宮ぼくのような物を受け取ると、尚も喘ぎつづけているキチの後方へ、ベタリと胡坐をかいて坐りこんでしまった。

そして、観客に対して見せびらかすような手付きで、宮のなかのものを取り出した。

(浣腸器……)

まさか。このような会で、それを実演して見せるのでは——?

が、何故ともなく紳士たちが眼を細めてしまったとき、すかし見るようにして上げた輝青年の手の、太々しい注入器の先から、液が二、三滴ポトポトと、彼等の紳士づらを嘲笑うかのよう、ライトに光って床へ落ちた。

受持ちの時間は超過していた。

だが、だれも何もいかなかった。

悪魔の踊る怪しい音が、次第につよくキチの下腹をかけめぐり始めて数分。

バチで唐紙を叩いたような音が、バカの申し合わせみたいに白眼をむいて聞き耳立てていた紳士たちを、ギク! とさせた。

立ち上った輝青年は白い歯を見せて笑い、中腰になると、唇をかみしめてもだえるキチの周りを、いたずら小僧が覗き見るような表情で廻りはじめた。

その妙な恰好の躍動に負けじとばかりに、キチの苦悶の踊りもいっそう烈しくなった。

(だめ……)

(もう、駄目!……)

人間の自制のちからは弱く、限りがある。肉を突き裂かれる正直な感覚に、キチは胸に顔をうずめて、肩先をふるわせた。

間、一髪——

キチの頭のほうに廻っていた輝青年が、片足あげて台車を蹴りとばしていた。

ガラガラ! と車輪の叩き転るひびきが舞台に狂って、ロケットにたとえるならば逆進行の形で、瞬時のうちに台車は幕かけへと突入していた。

幕が引かれて、しばし休息のときに、「しかし伊藤さん、あの文字印から察するとずいぶんと、よく仕込まれたものですね」

またも曽根浦が、やや得意気な顔でふんぞりかえる伊藤に話しかけた。

「いやアまったく、徹底した奴隷調教ぶりと察しられますよ。彼も彼なら、よくぞそこまでに調教された貴方の腕も腕です。ね、そうでしょう」

測り知ることは出来ない本当の思惑はその繊細な面つきの下へ隠して、曽根浦はいつか歯の浮くような賞め言葉を操っていた。

「でも、われわれのなかで、いちばんお上品とでもいうか、温厚的理論を常となさる貴方が、私には到底想像も出来ないあのような実験を、すでに果たされていたとはねえ」

彼はニンマリと微笑みながら、チラチラと光る眼を伊藤の横顔に走らせた。それは、言葉とはうらはらに、「しろい」感じだった。

となると、彼は、「敵」に、塩を送っている心算なのだろうか。

(ふん——)

曾根浦の言葉に、そのとき口唇もとをゆがませて、微かな嘲笑を浮かべたのは、あと一人、登場する筈の奴隷の主人であった。

——数分の後、曾根浦は口を噤んだ。

幕が揺らいで、開いたのである。

そして、例の、アナウンス。

「中岸さまア奴隷——ユリ」

ス ト ッ プ

中岸の奴隷ユリが登場してしばらく経ったとき、「観覧席」で、今までにないざわめきが起こった。

四人の位置では、いちばん後方にあたる椅子で腕を組み、他の者とは比較的冷静な態度でこれまでの舞台の進行ぶりを見つめていたユリの主人中岸健太郎へ、『同僚』の四ツの眼が申し合わせたように振り返り、

「……」

ある非難をこめて注がれた。

その意気込みの視線に、わざとテンポをずらしたのか、中岸はしばらくしてから、

「どうか、しましたかな？」

ボソリ、といった。

それがいかにも不思議そうな——いや、空っぽけた表情だったから、

「ど、どうしたかって、きみ」

中岸からいちばん離れた位置の伊藤が大人気もなく、大層に唇をとんがらせた。

「どうしたのです？」

「あれは、きみのあれは……女じゃないか」

これにつられた曾根浦も、

「どういうつもりで、あんたは——」

と向き直ってきた。

舞台では、再登場した輝青年が鞭を振りあげかけて、フトこのざわめきに気がつき、そのままの動作が停まっている。

「いけませんかな」

中岸は、腕組みを解こうともせず、そればかりか、頬に笑みさえうかべて言い返した。

この、余りにも白っぽい一言で、とうとう相手の一人は立ち上った。

伊藤である。

「きみ、それは何という言い草だ」

さっき曾根浦が、彼のことを温厚的なんとか言っていたが、別にそんな感じなんてありません。蓄えた怒気を早速、次の言葉に被

ぶせて吐き出している。

「われわれが、この中津川先生の許に集り同好の士として、真摯な態度で会を発足させ充実させてきて、ハヤ有余年……」

どうもこの男、怒ると演説口調のくせがあるらしかった。

だが、その怒気の底には、

(ついに、おれ達三人の中から、「失格者」が出た!——)

こんな陰湿な興奮が、どろどろ渦巻き始めていることも充分推察できるのだ。

「その充実、発展も、わたしたち個人々々がよくこの会の鉄則を守って今日までやって来たなればこそではないか。わたしとしては今夜のいまになって、見識ある筈のあんたにその鉄則を踏みじられようとは、夢にも思っていないかった。残念で、たまらない。——どう考えてもわたしは」

ここを先途、といった口調である。かえって、可笑しいくらい……。

「このわれらの心の拠りどころであった会がきみに依って冒瀆されてしまったように思えてならない。もし、きみに一片の弁解をしようという気持があるなら、わたしは」

「伊藤くん、やめなさい」

このとき老人が、舞台上を見つめたまま言った。

「でも、先生」

「いや、中岸くんとて、それは、よく知っている筈だ」

「しかし」

「やめなさい、伊藤くん。それに——きみはなにか、感違ひしているのではないかの」

「——！」

伊藤は、大いに自分たちと同意見であると思つていた老人に、「演説」の腰を折られた上に、なにか感違ひしているとまでいわれたら、その眉毛を毛虫のお産みたいにピクつかせるより他なかった。

「せ、先生。カンチガイ、とはどういう意味ですか——」

「では訊くが、きみは何でまた、そんなに騒いでおる？」

「オウ、これはまた先生、なにを言われる。

き、決まりきったことではないですか」

「——それで」

「先生っ。あの奴隷ユリとは女、女なんですぞ！」

「——」

「もちろん、わたしは、あのユリが初めあら

われたときには、きっと、きっと少年がそれらしく女装していることだ、とばかり思っていました。だが、よくよく（と力をこめて）

観察しますと、あのユリは正真正銘、女性でしかありません。これは、この曾根浦さん共々、眼に狂いは絶対ありません」

「——」

「女性の立ち入り厳禁。むろんこの第一鉄則は、わたし達の不文律だ。然るに——」

そのとき、曾根浦が彼の袖をひっぱって囁いた。

「伊藤さん。よしたほうが、いいです」

彼は、老人の横顔が急にむずかしく、しかめられていくのに気がついたのだ。

伊藤の熱する気持もわかるが、これ以上喋らせては理論はともかくとして、一向にそれらしくもない老人の激昂をも招きかねぬ。

曾根浦には、なによりもそれが、いちばん怖かったのである。

「——」

それに気がついたかどうか、ようやく伊藤は口を噤んだ。

その時である。

「先生、お願いがあります」

中岸が、不意に立ち上っていった。

すると、妙に息苦しい、静寂がきた。しばらくして、老人につられた視線が、ゆっくりと中岸に集まった。

「——なんじゃ」

老人が、声をくぐもらせて訊いた。

「はい。その……私に、あの鞭の役をやらせていただけませんか」

彼は、禪青年のほうを指差していった。と、二呼吸ばかりおいた老人が、急に笑いだした。

「ワッハッハ——」

「……」

「そ、そう言うだろうと思っておったよ、中岸くん」

「では、やらせてもらえますか？」

「そのほうが、面白いかも知れんな」

中岸はそこまで聞くと、すぐに上衣を脱ぎはじめた。

舞台上で「ストップ」をかけられていた禪

青年は、そんな中岸の様子を見ると、思いきりよく飛び降りて彼のほうへスタスタと近づいて行った。

二人の紳士の眼が、忙しげに瞬いた。

「では、おねがいします」

禪青年は鞭を手渡しながら言った。

「いや済まん、気を悪くせんではしい」
「いえ、とんでもございません」

禪青年がひきさがると、中岸は後方をふりむいて言った。

「その照明は要らない。灯りを、全部つけてください！」

室内はすぐに明かるくなって、よみがえった。中岸は、舞台に向って突進した。

同時に、一同の視線は舞台の中央でさっきからふるえているユリに向って、射られた。

ユリ

中岸は舞台にとび上がるなり、間も置かずその鞭をちからまかせに、ユリの肩先へ振りおろした。

パシッ！

よみがえったばかりの空気を裂いて、するどい音が鳴った。

「あッ……」

薄むらさきの地に、濃紫の大輪のバラを配した美しいカクテル・ドレスの上から、腕も折れよとばかりに白いロープできりきりと後手に縛られて、すでに禪青年に突き倒されてくずれ折れていたユリは、この一打で膕たけ

て美しい顔を仰向かせ、白い咽喉もとをのけぞらして、悲鳴を上げた。

ハイ・ヒールはどこかへとび、ふくよかにスラリと伸びた肢が大きく割れて、ドレスの裂ける微かな音と共に、跳ね躍った。

「ゆ、許して——旦那さまッ」

ふたたび鞭をふりかぶる中岸に、ユリは瞳をいっぱいに見ひらいて、そこにみるみる泪の珠をあふれさせた。

(みろ、やっぱり女装なんかじゃない)

(女、そのものに違いはないではないか)

(いったい中岸は……奴はどんなつもりでいるのだ！)

悲鳴と哀願の声音をしっかりと聞きとめた二人は、現実にはこの会を女で「よごされて」しまった口惜しさに、またしても異様な怒気におのれを滅した。

曾根浦は唇をかみしめ、伊藤は眼を反らし掌をにぎりしめた。

が、そんなことにはお構いなく、舞台の中岸は汗をふり散らし、つづけざまに鞭をふりおろしていた。

「う、ううっ……！」

ユリは鞭から逃がれようとし、後手縛りの身体で懸命に半身を起こしたまではよかった

が、またも強烈な一打で廻転して倒れた。

極端にねじ上げられ、くくり合わされている手から先はすでに色が変わり、その細い指は何かを掻きむしるかのように蠢き、痙攣していた。

とこの時、中岸は鞭を捨てた。

そして、今度は、無残にも乱れてしまっている髪に手をかけると、手加減もなく、グイッと引っ張った。

なにかを？——何処かを？——痙攣させながらもユリの顔には、もう動くものはない。かかった。

いまにも破れて、はじけてしまいそうなくらいに唇を噛みしめて、固く瞳を閉じ、ただその苦痛の歪みから唯一に逃がれ得たもののように、眉だけが、異様にうつくしくながれていた。

不意に、髪が手放された。

ユリはこの冷酷な弾みで、床に頬を打ちつけていた。

すると中岸は、その足許のほうへ回ると、やにわに片足をつかんで、残した足を直角になるまでに持ち上げた。

足指を反りかえらせ、精白として直立した脚線美が、見まいとして心中に斗いつづける

二人へ、強引に晒けだされた。

「く、ふッ——」

ユリは、かわいい形の鼻の穴から、妙な呻きを発した。シームレスは割けはじめ、外れでもう用をなさなくなったガーターがちぢんで、うごめいている。

足首をつかんで、グネグネと捻じまわしていた中岸は、やがて、肢を放り捨てると、そこで始めて、噴きだしている顔の汗をシャツの袖で乱暴に拭った。

放りすてられたユリの肢は、ユリのもではないかのように、極く、スローに落ちていて、停まった。

嘗て、経験したこともないこの「女の責め場」に、彼等はいつのまにやら、彼等の意志に反して内部に生じてくる熱い「かたまり」で、未経験だった異質の緊迫の気をこの室内に漲らせていたことを知らなかった——

眼を血走らせて、汗を拭った中岸は、例の薄ら笑いを浮かべた。

「さあ、立て——立つんだ！」

彼は、始めて声に出して、命令した。

そして、ユリの腋のあたりの縄に手をかけて、引き起こす腕にちからをこめる。

ほっそりしたウエストがいまにも折れそう

に前後に揺れて、辛うじてユリが立ち上ったとき、

「あッ」

ユリがさげびをあげるのもかまわず、中岸は、その丸襟から、荒々しくドレスを引き裂きはじめた。

見る者の肌にその痛みを感じさせるような緊縛の上から、ドレスを裂こうとするのだから、自然にその手付きは乱暴だ。

ユリは荒波にもまれる花葉かようのように、大きくよろめき、倒れかかった。

さげばず泣かずとも、服地を裂く音がユリに代って、場内に哀しくひびいた。

そして、数分が過ぎた……

中岸の背中が、動きを止めた。

なにかを、測るかのように、

一呼吸、二呼吸——

とつぜん、彼はユリの前からパツと跳びのいた。

ひろげた片腕の先に、見せびらかすようにダラリと垂らしたのは、苦悶のあぶら汗にジットリと濡れたブラジャー、ブルーのアップリフトであった。

瞬間、彼は、背中を向けたまま、まるで手品師がするような恰好で、ユリのほうを指差

していた。

（あッ——）

（オオ、あれは……）

彼等は同時に身を乗りだしていた。

しばし、変な沈黙がながれて、すべてが静止した——

この、イヤな黙だんまりをやぶって、不意に歌うように言ったのは、曾根浦だった。

「お——おとこだア」

「歌」に合わせて、

（しまった！）

眉毛をひきずりおろしたのは伊藤だった。

……縦縄、横縄をのこして、ドレスの前を見事なくらいにひき裂かれ、ひきちぎられた無惨な姿で、舞台中央に茫然として突っ立つユリの、剥きだされたその体は——。

正しく男の、それだったのである。

この時。

化石のごとく動じなかった老人が、なにかに撥ねられたように、立ちあがってユリを指差した。

「や、やっぱりお前は」

さけんだ顔は、いままでの年令相應の落着きと分別に構えられていた表情を、きれいに失っていた。

「の——則夫だったのか！」

口をぱくつかせ、指差す手をふるわせた。

ギクリとして、ユリは眼を伏せた。

ブラジャーが落ちて、不審と、驚愕の色を
いっばいにした中岸が、ふりかえった。

「その、乳首の上のアザは、まぎれもなく則夫のものじゃ——いいや隠そうとしなくてもいい。このわしの眼はハッキリと見透しておるわい。お、お前は、どうしてこんな形で、ここへ戻って来た！」

最後の語氣に複雑な怒りを表わして、老人は曳かれるごとくユリの足許のほうへよろよろと近づいていった。

支えを失ったように、くずれるように、その時、ユリは足を縄れさせて舞台に倒れた。

ウ ツ ツ

「ごめんなさい、旦那さま」

則子は、ハンドルを握りしめてジッと前方をにらみつけている健太郎の横顔をチラリと見あげて、いかにも申し訳なさそうに言った。そして、

「着いた先が中津川さまのお邸だと気づいたとき、すぐに旦那さまにお話しなくてはいいけ

なかったのしょうけど」

坂道にバウンドするライトのほうへ、沈んだ視線をながしながら呟いた。

そんな元氣のない表情とは逆に、いま着ている則子のドレスは、華やかなピンクで、その姿は花のようであった。

「ばかだな、則子」

健太郎が、ポツリといった。

「まだ、そんなことをクヨクヨ考えているのか。私は今夜、はっきりと中津川老人に宣言してきたのだぞ、則子はもう貴方の下僕ではない、と」

「——」

「お前とあの老人との関係なんて、私にはそれこそ関係のない話だ。お前が、老人の処に二年間もいたとは初耳だったが、今まで私があの邸に招かれたときも、お前を見掛けたことは一度もなかった」

「——それは」

「いや私にはわかってる。あの老人は、私たちを同好の士とか、何とかいってかき集めて、あんな会をつくり、規則として年に一度の集会には毎年新しい相手を連れてくる事、と決めおった。これが出来ない者は直ちに会員資格が消失だ、とぬかしおった」

「——」

「そのくせ、そのくせだぞ、自分の相手だけは絶対に『披露』しないという、勝手な決まりまでいつのまにやら作りおった」

「そう——でしたわ」

「老人の下心は、最初から、毎年違った相手を懸命に調教した末に連れてやってくる私たちから、これとメ・ボ・シのつけたその相手をまき上げて、自分のものにしてしまおうということにあったんだ。九人もいた会員が現在ではたったの三人、いや、今夜までは三人。みんな相手をあの手この手で取りあげられて、何度もそんなことをくり返しているうちに自分のほうから、会員資格を捨ててしまったのさ。バカらしくなったのだろう——」

「——」

道は、国道にはいった。

まばらに、交叉して来るライトが、凝っとして、造りつけのような二人の upper body を浮かびあがらせる。

「まったく、バカな話だ。あの老人に、調教されていたのは私たちのほうなんだよ。会一度に手渡される『調教資金』という、あの大金に眼が昏んでね、いまになると、泣きたいほどに、はずかしいよ」

健太郎は、唇をゆがめて自嘲した。

「あたしは、旦那さまの時とおなじようにあの時も場末の道ばたで、中津川さまにひろわれたのです」

則子は、やはりつぶやくように言った。

「あたしが中津川さまのところに行った、ということを旦那さまは、お怒りにはなっていないのですね？」

あどけない唇が開いて、顔が揺らいだ。

「あたりまえだ」

「いままで通りに？」

「きまっている」

「——うれしい」

「老人は黄金盤を餌にして、お前を取り戻そうとしたが、私の黄金盤はお前だ」

「——」

「だれにも渡すものか！」

則子は、その力強い健太郎の言葉に胸をふるわせて、そっともたれていった。

その黒髪に、やさしく頬ずりしながら健太郎は、

「だが、あの老人の処から、自分から逃げだしたようなことを、また今度もお前がするとすると、話は違ってくるがね」

いたずらっぽく、微笑んで言った。

「いやア、いじわる」

「おいおい、危いよ。そんなことをしちゃ、ハンドルが——」

「旦那さま」

「なんだ」

「あそこから逃げだしてしまった理由^{わけ}を、話してみましようか」

「聞かない」

「あら、それも……関係のない話だって意味ですの？」

「そうさ。もうこれっきりという、あんな老人の話なんか、聞く必要はないさ」

「それもそうですわね……」

「さあ則子、スピードをあげるよ。早く、あの私たちの“城”へ帰るとしよう！」

「——わたしたちの“お城”ね」

「そう。二人だけの“世界”さ」

「旦那さまとあたしだけの“世界”」

「則子のいる“虹の居城”だ」

「素敵な旦那さまのいる“居城”ね」

「早く帰って縛ってやりたい」

「強く、ギリギリに縛って、ほしい、わ」

始めて、いつものような輝きに燃えた則子は、その匂わしい微笑を車中いっぱいこぼして、

(しあわせですわ、旦那さま……)

健太郎の肩に頬をうずめると、うっとりとして声をくぐもらせた。

しかし。

あの老人、中津川が果して、このままに済ませてしまいうだろうか。

何事にも権力と金力を用いて、最近はとみにそれらで自分の“老人としてのあがき”を霧散させようとする傾向がつよい。それに、一年前におのれの秘密の飼育室より逃亡した則夫を、ついに発見した今夜の老人の眼は、決して懐古の情や許容の色は見受けられなかったことを思うと……

ともあれ。

幸福か。

妖美な、夢か。

それとも、空虚^{うつろ}か。

地上の二人の、そんな些細なことはいっさい知らぬげに、珠を散りばめたようにきらめく星空。

それを蹴るようにして——

矢のごとく疾駆しはじめた車は、夜半を過ぎた闇の彼方へと消えていった。

(完)

珍

書

探

訪

乱歩と足穂 — 同性愛問答 —

齋 藤 夜 居

敗戦後の世相の廃頹の生んだ印刷物文化の産物にカストリ雑誌があった。その記事のうちには、そのまま埃に埋もれてしまうには惜しい、もったいないなと思うのが眼につく。

これから紹介するのはその一つである。

江戸川乱歩には、その全集のほかに、『悪人志願』（昭和4・6）、『鬼の言葉』（昭和11・5）、『幻影の城主』（昭和22・2）、『随筆探偵小説』（昭和22・8）、『幻影城』（昭和26・5）、『続・幻影城』（昭和29・6）、『探偵小説三十年』（昭和29・11）、『わが夢と真実』（昭和32・8）、など興味深い随筆書があり、ほかに岩谷書店の雑誌『宝

石』第四十二号（昭和29・11）は全誌をあげて江戸川乱歩還暦記念号としている。いずれも参考になる点が多いので、書名を記して置く。

稲垣足穂（イナガキ・タルホ）に就ては、その著作が、入手し難い作家で、『星を売る店』『天体嗜好症』『一千一秒物語』など金星堂や春陽堂で刊行した単行本があるが、いずれも絶版書である。大正末期からエキゾチックな作風で知られていた——。最近になって『少年愛の美学』（昭和43・5）が発刊され、久しぶりにその著書を手にすることができた。誠に特異なエッセーであって、平和な

時代が続くとういう本も公刊される……。

まったく昭和元禄とはいみじくも名付けたものだ。名古屋タイムズ社の亀山巖が装幀と飾絵を担当しているが、これまた仲々ふるっていて、まず近來の珍書とよぶべきであろう。この書において足穂はハッキリと美少年愛を讃美している。

乱歩は両刀つかいで、女色のほかにペデラステイの実行者だったが、生涯ついにその深い蘊蓄を傾けるに足る同性愛著作は披瀝せず終っている。探偵作家として余りにも偉大なる存在であったからであろう。文献上の研究は二三散見するし、古典文庫刊行の岩田準

一の『男色文献書誌』などに絶大なる尽力を惜しまなかったが、自己体験はまったく語っていないし、エッセーもまとまったものは残していない。

○

『妖艶』九月号（昭和24・9）編集発行人宮本治郎 大和書房 50頁 定価60円。この雑誌の執筆者には愛欲猟奇精選小説と題して、海野十三、田中英光、中河与一などが名をつらね矢野目源一、石黒敬七、笠置シズ子も短文だが書いており、ずいぶん顔ぶれが揃っている。そして「対談同性愛を語る」という乱

歩と足穂との熱論が展開されているのだが、どうしてこんな雑誌に、このような対談が載ったのか、その事情を知らない。始めに、対談以外に乱歩自稿の文献メモが、掲載されているので、それから紹介する。対話の内容を理解するための便宜もあるからだ。

同性愛文献虎の巻

文献は内外共無数にあるので、同性愛文献史の如き内容を持つもの数種のみを挙げる。同性愛研究者が典拠として用いる虎の巻の類である。

○古代ギリシア

プルタルコス「比較列伝」。アテナイオス「宴会に於ける学者達」十五巻。ディオゲネス・ラエルチオス「哲学者列伝」十巻。

○西洋近代

ウルリックス（独）「同性愛全集」。ターノフスキー（露）「欧州の同性愛」。リチャード・バートン（英）英訳「千夜一夜」附録論文。J・A・シモンズ（英）「ギリシア道徳の一問題」。J・A・シモンズ「現代道徳の一問題」。

カーペンター（英）「中性論」。カーペンター「友愛佳句集」。ハンス・リヒト（独）「古代ギリシア性生活」二冊。アンドレ・ジイド（仏）「コリドン」。ほかにクラフト・エビング、ハヴロック・エリス、ヒルシュフェルト、ブロッホ、カーシュ・ハーク等いずれも好参考書なれども周知なれば省く。

○中華

「測鑑類函」第三百十三巻「寵幸」。「情史類畧」第二十二巻「情外類」。「五雜俎」第八巻「人部」。ほかに、「戦国策」「史記」「漢書」「宗書」「魏書」等の佞幸伝又は恩倖伝。

○日本徳川期

季吟「岩つつじ」二冊。棋条軒「よだれかけ」巻五巻六。喜多村節信「嬉遊笑覧」巻五の下及巻九の下。柳亭種彦「好色本目録」。

○日本明治以後

藤岡作太郎・平出鏗二郎「日本風俗史」（各時代の同性売色）。阿部弘蔵「日本奴隷史」（各時代の同性売色）。中山太郎「売笑三千年史」（各時代の同性売色）。平出鏗二郎「今古小説解題」（仮名草紙その他）。水谷不倒「列伝体小説史」（浮世草紙）。石川巖「軟派珍書往来」男色篇。岩田準一「本朝男色考」。



『妖艶』表紙

（往年『犯罪科学』に二年に亘って連載せられたもの。室町時代までで中絶しているが、そこまでで三百頁位の本になる分量がある。綿密正確、日本同性愛文学史として先例のない業績である。岩田君は惜しくも戦争中病歿したが、この稿はどうかして一本に纏めて残しておきたいものである）。

同性愛史の類は大正以後沢山出ているが、多くは孫引きの一夜漬けである。部分的なものは別として、纏った典拠は大体以上に尽きている。（江戸川生記）

「あなたは無意識に同性を愛している。女性 は人間を生産する機械に過ぎない。性愛の極致は美少年を愛することにある。」

これが、対談記事のタイトルで司会は「本社」。「同性愛のそのみちを語る」となっているから、両者共に斯道研究家として自他共に公認したことになるが、昭和二十四年の世相ということも念頭に置く必要もある。法隆寺の炎上、下山事件、三鷹事件、松川事件等々この年の出来事であるから、まだまだ世間は荒れていたのである。赤線地帯があり、街娼やオカマが闇に横行し、パンパンガールや基地の女というのが公然と闊歩し、堂々と他

を見下し、思うままに行動していたのだから同性愛のその道を語る対談も敢て、今日おもう程に奇異の感は抱かなかったのかも知れぬ。この様な俗悪誌に、高級な文学対談とは、まったく不思議だ。

○

本社 同性愛、美少年については昨今、この方面の職業人の進出に依って、一般の認識も改まった様であります。従来は文学等に現れた異性間の恋愛のみを讃美する傾向のためか、アブノーマルな遊戯として考えている人の一部にあることはまことに遺憾であると思います。稲垣先生の持論である理想的な産児制限法としての同性愛や裏門、そういう実利的な方面は別としましても、精神的にも、又性愛の極致としても、価値ある同性愛について両先生の蘊蓄を傾けていただきたいと思っています。

稲垣 上野公園や日比谷公園辺りでは、かつて外国の土産話として耳にしたようなことが現実に行われている。そういうものがあってよい、あるべきだということに近頃やっと気がついてきた。これは我々にある宇宙的郷愁の一形式、アイデアの世界からの投影で、それらは第三秩序に属するプラトニック・ラ

ブのカリカチュアに過ぎない。そういうことを私は江戸川さんに聞いてもらっていたのです。

（これが対談の序で、以下談話速記の小見出しの順に従って、きまりの良い所まで要約することにした。）

性戯学入門

本社 性的犯罪人というのは窃盗犯より教化がむづかしいそうですね。

稲垣 それは人間の自然性に出ているからでしょう。

江戸川 泥棒だって本能ですよ。誰のものであろうと欲しいものを取って食うのが、原始時代の普通のやり方ですからね。法律や習慣でこれを禁じて罪悪ということにしてしまったので、その点では性慾も物慾も差別はありませんよ。

稲垣 しかし性慾の方が直接的で、且つ普遍性を有っていきましょう。

本社 これがいわゆる変態性慾というものです。

江戸川 エエ変態性慾はむづかしい問題です。普通の性慾の場合は他に予め方法があるのだから、金さえあれば犯罪はやらなくてすむ。経済問題です。物の場合でも同じです。

有名な宝石を盗むのは女の場合よりもむづかしいでしょう。

カイゼル髭の稚児さん

稲垣 江戸の全盛期には江戸中で六百人位だった。つまりお女郎みtainな存在がね。ところで現在上野界限で三百人、他に銀座・日比谷・新宿・池袋と見積ってゆくなら、現代の方が隆盛だと云えやしませんか。

江戸川 そんなことはない。女の場合でも遊廓以外に売色者がいないかというと、決してそうじゃない他にも沢山ある。それと同じことで、むかし同性愛の遊び場所が公然とあった時代には、他にも非公式なものが沢山あった筈で、この方は昔の方が盛んだったでしょう。徳川時代にはそれが社会の常識化されていた時代の方が無論実行者も多かったに違いない。

本社 ドイツ辺りじゃ、あの商売に社会的な地位が認められているのじゃないですか。

江戸川 そういうことはないでしょうが、殆んど公然とやっていたようですね。戦前迄はパリとベルリンが一番盛んだったといえます。やはり性格的に女性分子の多い男がそうした商売人になるのですね。みんな年寄なんです。三十以上のも多いそうです。ドイツ

なんかへ留学した者がそれを見てぞっとして帰ってくる。

稲垣 カイゼル髭を生やした堂々たる稚児さんがあるのだから。

江戸川 それでも客があつて商売が成り立ってゆくのだかおかしいものだね。

女は不完全な生物である

本社 元来同性愛が生れて来たのは、どういふ所からでしょう。

江戸川 一般的な動機ですか、これは太古からあります。人間の性格にあるのですよ。

つまりワイニゲルが云っているように、人間というものは男でも女でも、女には男性分子がいくらかあり、男にも女性分子がいくらかある。その本来の性と違った分子が非常に強いものがやはり変態的になるのですね。これは動物社会にすらあります。西洋にはそういう性格をよく理解して、弁護論をとなえた学者がいろいろいますね。例えば、ドイツのウルリックスという人。この学者は全国を遊説して廻り、著書も沢山ある。これが恐らく近代に於ける同性愛弁護論の嚆矢だと思えます。クラフト・エビングだとかハヴロック・エリスだとかヒルシュフェルトなどはウルリックスよりあとです。同性愛者は決して悪を

やっているのではない。彼等は同情すべき人間なのだという弁護論ですね。この方の研究はドイツが一番多い。

稲垣 人間の性慾と名づけられたこのふしぎな衝動は、ただ、数を増すだけの目的でなく、完全な人間像を求めて働く。飲食の場合とちがってこれは全人間性をバックにして、美しき未来に向つてうごいている。そしてその努力は創造というよりはむしろ恢復の道である。女はいいけれどいやな所もある。男だつてその通りだ。双方の欠点を取除いて組立てた人間のモデルとは何か？ まづ人間が最も美しく賢くなる時期、云いかえると、十二三から十五六才の少年が暗示するものだといふはかはない。少年愛好の根拠をこう見てよいと私は思っています。美少女にしたって差支えない。けれどもいかにせん婦人は、人類の質的向上にたいして刺戟者の位置にしか立つことが出来なかった。そのため美少年という原型が先に採用されて、当然両立すべき美少女の方は顧みられなかった。しかし、ギリシャを曙とする文明が美少年に始まったのなら、来るべき新文明は美少女の理想に踏み出されるのかも知れぬ。そうしてそんな第二のプラトーンが出ることも期待される。精神的

価値として人間を見るならば、美少年乃至美少女の理念は、あえて同性愛者に限らず、何人にも当然うなづかれてよいことであると思う。

（対話のうちのこの部分は本社の質問どうして同性愛が生れたか？ という解答になっていないが乱歩は人間の性格のうちに本能的に存在すると肯定と弁護を認め、足穂は乱歩に聞いてもらいたい一心でまとまった美少年論を一席やっている。その著『少年愛の美学』の発想の源としてみることもできる。）

ジイド、マン、ポオの同性愛

江戸川 文学的な近世の例には、ジイドに「コリドン」という長い論文があります。非常にいい論文です。トーマス・マンの「ヴェニスに死す」これは少年愛をえがいていて、同性愛の理解がない人が読んでも非常に面白い。マンにはその外にも沢山ある。ちょっと古いところへ行けば、J・A・シモンズというイギリスの作家、それからヴェルレーヌやワイルドは無論ですね。ポオにもその傾向があったということを最近知ったが、これはフランス人の書いた伝記に出ている。ホイットマンもそうです。外国の文学者にはこれを讃

美した人が多い。あらわに書いてはいないけれども、ジイドの「贋金づくり」なんかも、この思想を知らないで、読むと本当にはわからない筈です。ジイドが云っています、スタンダールの「アルマンス」のことをね。あれはインポテンツの主人公を扱っているのですよ。普通に読むとわからない。ジイドの作品もそれと同じで、同性愛を知らなくちゃわからない所がある。同性愛の思想はそれ程一般的なものなんだけれども、世間は何だか下品なもののように考えているのですね。

（此处で乱歩の述べているのは、文学作品のモチーフとして同性愛は世界的な普遍性を持つことと、その理解が行き届かなければ十分な作品鑑賞ができない。読みの深さが足りないと言っているのだ。）

能の子方と野郎歌舞伎

江戸川 芝居は、お国の女歌舞伎が一番早い。これが風紀を乱したので禁止された。その代りに、少年が芝居を演じることになり、若衆歌舞伎が生れた。これがやはり風紀を乱した。若衆趣味というのが当時一般に流布して居りましたから。そこで幕府は若衆の前髪をそらせて、野郎頭にしたが、役者の方では紫頭巾をつけて美しくした。これが、野郎歌

舞伎です。やはり弊害はあった。野郎を買うという言葉が出来たくらいですから――。能は子役の美少年を愛する趣味があった為にいつそう盛んになったのですね。世阿弥は能楽史上最大の人物で、能の美学を書いた人ですが、この人自身が少年時代に足利將軍の寵愛を受けた。ギリシャ悲劇のソボクレスがやはり美少年で有名ですが、そういう点でこの二人は似たところがある。……野上豊一郎さんは能には同性愛はないと断言しているが、これはおかしい。能ほど同性愛思想に満ちたものはない位です。

稲垣 野上さんは同性愛に反撥を感じておられるのでしょうか。いつか、謡曲天鼓のことをあなたと話しました。あれは観阿弥でしたが、彼の最も不運な折に、資質がよく非常に囑望していた愛子を失った。「天鼓」はそんな時に作られたのだと聞いていますが、これは聴いていると、星きらめく下、呂水の堤の夜は更けて河波に美少年の亡霊が浮かんでくるようで、うすら寒い気持になる。ギリシャ語かラテン文で綴られていたなら大したものでしょう。単なる父子の関係を越えた永遠の美少年の形相がそこにほうふつとしている。

少年は梅花の香がする。

江戸川 ……女が、汚いと感じるのは、それは本物の同性愛者だけです。びんつけ臭い、白粉くさいという、そして少年は梅花の香りがするということです。

女性の子を産む機械

江戸川 ……当時のギリシャ人は女性を知らなかったかという、そうじゃない。女性愛はつまり子供を生む手段、女房は家庭の道具であって、精神的恋愛の相手にならないという考え方なのですね。その点も徳川時代と似ているのです。

稲垣 江戸川さんには新プラトニズムとグノーシス派の匂いがある。一寸法師や黄金仮面や陰獣はむしろそれらを媒介として、古代ギリシャの理想を回復しようとしているかの如くうかがわれる。

江戸川 具体的なことは云わない。かくすわけじゃなくて性格上そうなるのだ。同性愛的性格の人は、男でも女でも抽象性が強い。この抽象性と同性愛的なものの関係は、普通人にはちょっとわかりにくいけれどもね。同性愛というとすぐに醜悪なものを連想するけれど、稲垣君も云われるように、中性的なものを愛する心ですよ。中性が理想なんです。男と女に分化されてしまえば具体的になるが

もっと抽象的なもの、男女未分化の人間への憧れ、中性の憧憬と云いますかね。

（中性が理想なんです、と此処で両者は完全に意見の一致を認めあっている。以下まだ続くが、論理的な意味ではこれ以上引用しなくてもお分り願えたと思うし、同性愛論とは、なかなか難解なものだと考えられる方も多かったと思うが、本誌読者の嗜好から云えば、角度を変えれば思考の方法に、何らかの共通点が認められるのではないでしようか……。）

○

本章はこれで終るつもりでしたが、念のため本箱を探して、乱歩随筆のうちに、これに関連したものがないかと調べ廻っていたら、「あった！」も実にいい所で、灯台下暗し、とはこのことであろう。不本意な駄足を付け加えることになってしまった。

初め『妖艶』からこの乱歩・足穂の対談を発見した時は、まるで鬼の首でも取ったような気持ちだったが、それは、重ねて云うけれども、こんな俗悪雑誌から真珠のような記事をひろい出したという発掘のよろこびだったのに、『別冊・人間探究』秘版艶本の研究（昭和27・5）に、江戸川乱歩「同性愛文学史に

ついて―岩田準一君の思出―」があり、

「私は敗戦のドサクサ時代に、ちょっと出て忽ち廃刊になった雑誌の一つである『くいしん』というの、昭和二十三年一月号に、稲垣足穂君との同性愛文学対談の記事をのせたことがある。この『くいしん』という雑誌は殆んど人の目に触れていないので、稲垣君はそれを惜しんで、名古屋の文学同人雑誌『作家』の昭和二十六年五月号に、右の対談記事を基にして「E氏との一ター同性愛の理想と現実をめぐりて」という長い随筆を書いた。」

と、あるではないか――。

自蔵の雑誌は『くいしん』ではない。カストリ雑誌よりも、更に始末の悪い「ゾッキ雑誌」と呼ばれたもので、カストリ雑誌社が倒産すると、其処の紙型を買い集め、適宜に各種の紙型を寄せ集めて再製産する海賊雑誌の一つが、つまり『妖艶』だったのである。妖艶もまったくすさまじい話だ。しかし、『作家』誌の足穂稿は対談記事を基にしたとあるので、一応ゾッキ雑誌からではあったが、もとの対話の部分を紹介し得たことは、せめてもの慰めとしなければなるまい。

地 獄 門

ロンドンの資産家の娘として何不自由なく育ったアン・ブラウンが、一家の反対を押切って修道院入りをした理由は今は触れない。彼女は「神の命令」によってテヘランの病院に勤務することになった。そして神に仕える余暇を、この地の恵まれない人々に奉仕すること、信仰上の満足を見出してきたのである。しかし、たまたま彼女が美しかったことが悲劇であった。そのために、彼女はここに攫われて来た。

信仰に身を捧げているだけに一層、今、アンが追い込まれた状態は、哀れというほかはない。穢らわしい男たちの手から手へ渡されて、どことも知れないこの館まで監送されてきた道のりの苦しみ、それだけでさえ耐え難いと思うのに、今また赤裸に引剥かれて、牛や馬みたいに二千パーレビーの代金で売買された。日本の金で七百万円ばかりである。高いというか安いというか、それはアンには全く関係のないことではあった。それでも、殿下が、「たかがキャデラック一台の値段だ」といったひと言がアンの心に突き刺さっていた。こんなことにさえ、彼女の自尊心は傷つ



第七回

前号まで二怪しくも巨大なシンジゲートの持主、有明友之助の秘書、星恵美子（エミー司令）はテヘランで国際捜査官新津を匿にかけようとして、かえって人身売買のある組織に囚われ、とある山中の館でロンドン娘アン・ブラウンら四人と共に競売にかけられた。星は首領らしい殿下と呼ばれる男に大金で買上げられた。全裸、後手縛りのままジープに牽かれて、広い砂漠の中を馳けさせられる。一方、星を司令とする原子力潜水艦ネプチューン号は世界各地から誘拐して来た美女達を監禁したまま、司令救援のためアラビア海からペルシャ湾内に潜入しようとしている。

けられて行くのだった。

アンは、館の遠い一区画まで、前手の縄尻を買主に引かれて、よろよろと、歩いて行った。すみからすみまで露出させられた肌が寒む寒むと、頼りなかった。アンの絶望感はそのだけ胸に迫るようだった。

「オオ、オオ、……」

アンは、こみあげてくる大粒の泪を拭くことも出来ず、声をあげて嗚咽するばかりだった。ともすると、しゃがみこんでしまおうとするその豊満な臀部が、無情にもしたたか蹴りあげられた。

「オーッ」

ありったけの声で悲鳴をあげ、彼女はふたたびノロノロと歩を運んだ。

ほの暗い廊下を進んだ突き当りに、細緻なビザンチン模様を刻んだ、金色の大扉があった。アンには、それが地獄の門に見えた。ここ数時間の体験からみても、この奥にもっともっとおぞましいものが待っているだろうということは、容易に想像出来たからである。

女のようにスナリした覆面男の手が、何やら合図めいた調子で、その扉をコツコツと叩いた。するとカタリと音がして、扉の中央

部に小さな覗き穴があいて、強い光線が走った。誰が来たのか確認したのであろう、やがて鍵の廻る金属音がして、大扉が重々しく開かれる。

内部は打って変って近代的な造作がほどこされた明るい廊下で、フカフカした絨毯が敷きつめてあった。

出迎えたのは全身黒檀のように輝いた、雲を突くばかりに大きな裸の男だった。それよりアンをギョッとさせたのは、その大男が頭から爪先まで、一本の毛も見られないように剃りあげられていたことと、そのむき出しの股間が例の宦官であることを証明する醜い傷痕でひきつれていたことである。あかるい照明の下で、見まいとしても見えてしまったのだった。思わずタジタジと引きさがることを、後からドンと突きとばされて、反射的にその黒人の胸元にとび込んでしまう。その万力のような腕がアンをびくとも出来ない程におさえつけた。嘔き気のするような体臭が匂った。

「何を怖れているの」

うしろから細いが鋭い声が聞こえた。

「私のアブド、つまり黒人奴隷さ。これから何かとご厄介になるんだから、せいぜい気に

入られるようにすること」

アンの縄尻はアブドの手に移された。彼女をしめつけながら、うやうやしく礼を送る大男をしり目に、覆面の男は軽やかな足どりで廊下を進んだ。大男は片手でアンの肘を掴み、片手で大扉を軽々と閉めると、嚴重に鍵をかけた。アンは眼尻で大男の動作を追いつながら、こんなに頑丈な戸締りでは絶対に逃れられないと思い知らされて、身も世もあらぬ思いである。

廊下を一曲りすると、急に目の前が豁けてかなり大きな広間になった。真中に小さいプールを設けたテラス風の造りで、周囲に回廊めいた庇がつけられ、その奥にいくつかの部屋があるようだった。

アンが黒人奴隷に抱きかかえられるようにして広間へ入ると、彼女のあたらしい主人は三人の美しい白人娘にとりまかれて、覆面をとろうとしているところだった。三人の娘はこれも又、素裸で、揃いも揃った美事な金髪を長くたらしめていた。そして、争うように主人をとり巻いて、何くれと世話をしつつめようとする様子だった。

覆面をとり、クローフィアという鉢巻きのつ

いたかぶりものをとると、一人の娘がうやうやしくそれを受けとった。主人の頭部から、艶々した長い黒髪がハラリと落ちた。

何と、アンを買った覆面の人は女だったのである。しかも、眼が大きく、偃月刀（シミタル）のように鋭い鼻すじと、肉感的な厚みの唇とを併せ持った典型的なペルシャ美人である。

「フフフフ」

ふくみ笑いをしながらその女が言った。

「アン。私が女で吃驚したかい。よく覚えておいで、私の名はアマトル・アミーン。おまえたちの主人だよ。これからは、絶対私に服従してもらうからね」

そういう間にも、すると着物を脱いで全裸になった。やや小柄だが申し分のない肉体だった。二人目の白人娘が脱ぎ棄てた衣服を受けとる。すべて、跪いて奴婢のような卑屈さで仕えなければならぬ様子だった。

三人目の白人娘が、極度の緊張で全身をこわばらせながら何やら真黒な鞣皮の固まりを捧げた。あとの二人が、その一つをとりあげる。皮製のブラジャーだった。それも胸から腰骨あたりまであるコルセットとガードルを兼ねた、所謂「オール・イン・ワン」という

タイプの下着である。後から前で合わせて細い革紐でギュウギュウ締めつけるようにすると、ただでさえ恰好よくくびれたアマトルの胴は、まるで蜂のそのように細くなってしまう。続いて長いブーツを穿かせなければならぬ。最初の白人娘がアマトルの前に膝立ちになって一足のサアイ・レングス・ブーツ（太腿のあたりまである長靴）を捧げ持つと、二番目の女がアマトルの背後で四つん這いになった。アマトルは悠然とそれに腰をおろした。すると、第三の女はアマトルの足先に、仰臥して、主人のための足台になろうとする。やっこのことで腿まである靴を穿かせ終ると、アマトルが再び立ち上った。高さ五インチ（十二・五センチ）もある踵で、彼女は一層スラリとしてきれいに見えた。最後に一番目の娘が、これも黒いヘアバンドと組み合せになったマスクをかぶせた。アンの目には、黒い皮製下着とブーツに身を固めたアマトルの姿が、何か背中に羽根を生やした魔女のように怖しく感じられた。

遠くのほうで腹の底に響くような鐘の音が鳴り始めた。

「夕べの祈りだ」

アマトルが言う。

「皆々、メツカの方を礼拝しよう」

筋肉隆々としたアブドが先ず腰を折って平伏した。つづいて一番目の白人娘と最後にアマトルが跪いて、

「アラホー・アクバル（アラーは偉大なり）」と大声で唱えながら、何回となく額を床にすりつけながら礼拝を繰返すのだった。

残った二人の白人娘は、満面にありありと恐怖の色を示して、ひしとばかり抱き合っていた。

アンはといえば、何が何だかわからずに、縄の端は依然としてアブドが握っていたから逃げるわけにも行かず、ただオロオロと彼のそばに立ちすくんでいたのである。

やがて祈りが終って立上がったアマトルはマスクの穴から、一そう大きく見える瞳を、キラキラ光らせながら、

「おまえたちは又お祈りを拒否したね。丁度いい、新入りが来たから、一緒におしおきをしてあげよう」

二人は身を寄せ合いながら哀泣して、

「おお、アマトルさま、私たち姉妹は厳格なカトリックの戒律の下で育って参りました。ですから、他のことは何でもおしいつけの通



りに致しますから、どうか、どうか礼拝だけはお許し下さい」

「だめだね」

アマトルが答えた。

「そんな勝手なことを自分の奴隷に許す主人がどこにありますか。お祈りを許されるだけ

でも大変な幸せを与えたことになるのよ。サア、いう通りにしなさい。さもないと……」

二人はあわてて、

「い、いたします」

と、自分達の意志に反したことを答えさせられてしまう。その様子を見ただけで、抗命

の罰の厳しさが思いやられて、アンは総身に鳥肌立つのを意識するのだった。

頭と首とをアブドの太い腕が、おさえつけているので、アマトルの凄艶な姿が近寄って来ても、アンは顔をそむけることさえできなかった。いきなり、アマトルがペツと唾を吐きつけた。アンの顔をねらったのだろうが、それが

外れて乳房と乳房の谷間に当たった。ヌルリとした唾液がツーツと臍のあたりまで胸を伝って流れる。あまりのいわましさに総毛立つような思いで夢中でもがくが、アブドの手はびくともしない。

「いいかい。よくお聞きよ」

鼻先きが触れ合う程に顔を近づけながら、アマトルが威嚇するように叫んだ。

「犬のようなアブドアルマシ（キリスト教徒のこと）め。何百年もの間、私たちアラアの信者はおまえたち異端の徒のために苦しめられてきた。今こそ私たちの憎悪を、積りに積った私たちの恨みを、おまえたちにぶつけてやりたい。キリスト信者の女達を私の奴隷とし、苦しめてやる程楽しいことが世の中にあるだろうか。その点で、おまえたちは私の眼鏡にかなったわけさ。もっとも、一人だけは改宗してしまったがね」

一番目の白人娘が恥しげに顔をそむけた。改宗するまでに、どれ程苦盃を吞まされつづけたのであろうか、想像しただけでアンは脊筋に冷汗をかいだ。その汗が、ピタリくっついていいるアブドの胸を濡らして、一段と嫌らしい感触がアンの肌に伝わってくる。

「おまえも早く改宗した方が身の為だよ」

とんでもないという風に激しく首を横にふるアンを冷やかにみつめながら、アマトルが語を継いだ。

「そうかい。その方が私の楽しみが長びくというものだ。ありがとう。感謝するよ。ところで、丁度よい機会だから、先輩二人と一緒にアラーの神に礼拝して貰おうか」

そういいながら、いつの間にか片手に持っていた小さい金具をアンの目の前につきつけるのだった。その金具は美しいイアリングのようだった。アマトルはそれをアンの鼻梁に嵌め込もうとしている。勿論、アンは首を振って逃れようとするが、いよいよアブドが固く締めつけてくるので、結局は負けてしまうのだった。小さなネジが、鼻の穴の中で廻されると、鼻輪はしっかりはさみつけられて、少し位引っぱっても外れないようになる。

その間に、一番目の白人娘が、二番と三番の娘に、アンと同じような鼻輪を装着していた。そして、この二人はアンを真中にして立つように言いつけられる。こうして、三人の美女達が一列に並んだところで、アマトルは直径一センチ長さ一メートルばかりの金メッキをしたパイプをもってきて三つの鼻輪に通すと、抜き脱れないように、パイプの両端に

直径五センチもある金属球をネジ込んでしまった。三人は鼻輪によって連縛されてしまったことになる。

「よし、よし」

手をたたいてアマトルがいった。

「さあ、メツカの方、ホラ、こっちだ。聖地に向かって跪け」

やっと、アブドが手を放した。その途端である、両側の二人が膝をついたので、アンは鼻をひかれて思わず悲鳴をあげたが、どうするわけにも行かない。同じように坐らされてしまう。

「大きな声で、アラホー・アクバルと唱えてッ」

両側の二人は、哀れな声で切れ切れに云われた通りを唱えた。アンは憤りをこらえながら黙っていた。それが不可なかった。突然激痛がアンの脊中に炸裂した。

「ギャッ」

あまりの痛さに恥も外聞もなく、ありったけの声で吼えた。アブドが巧みに鞭を使いはじめたのである。そうと知っても振向くことすら出来ぬ。もがこうとすると、左右の女がアンの両肘をしっかりと押えつけた。互いに鼻づらをパイプで連縛されているのだから、

アンに騒がれてはたまったものではない。

「サ、額を床にすりつけて礼拝しなさい」

意地悪そうな声でアマトルが命じた。両側の二人がそうすると、アンも泣く泣くそれに従うしかない。

「メツカに五回、東西南北に二回ずつ、計十三回こうして礼拝するのがおきてだから」

その通りにせよというのである。

三人はよろよろと向きをかえながら、聖句を高唱して礼拝を繰返させられるのだった。

オ ア シ ス

ザグロス山脈に降り積った雨水は、山ろくから伏流となって砂漠の地下に吸い込まれて行く。ときどき、それがポツカリあらわれてくるのがオアシスである。

星恵美子が、ジープに牽かれて命からがらたどりついたのが、こうしたオアシスの一つだったが、それ程大きいものではなく、泉は直径三十メートルばかり、周囲に十数本のナツメヤシの木が生えている位だった。

ジープと砂との斗いに渴き切った喉をうるおそうと、獣のように直接口から飲んだ。そして、縄つきのままザンブリと泉に飛び込ん

だ。乾ききった皮膚にみるみる水がしみて、まぶしたような砂が落ちた。男たちは泉の汚れるのを怒らねばならなかったのだが、それさえ忘れて、この美しい奴隷のバイタリティに舌を巻いていた。普通の女だったら、半死半生になったであろう砂漠の引き廻しに、耐えぬいてしまったからである。運転手は寧ろ畏敬の念をこめて水から上った星の肌をタオルで拭いた。

「ここまで来たら逃げるわけには行くまい。縄を解いてやれ」

殿下にこういわれて、何気なく星の後手を解いた瞬間、星はねらっていたチャンスだと感じた。二人の男を処分するのはそれ程困難ではないと思った。アッという間に、星の右手が刀のようにひらめいて、運転手の首筋を搏った。空手の一撃だった。声もなく運転手が倒れた。

「何をする。動くぞと撃つぞ」

鋭く殿下が叫んだ。ああ、彼は拳銃をかくし持っていたのである。これは計算に入れていなかったことだった。しかし、星は屈しない。フンと鼻先で嗤って、

「五千パーレビーも出して、買った玉（ぎょく）をむざむざ殺しちゃっていいのッ？」

悪党にしては育ちのよい殿下が、ついっかかり、

——それもそうだ——

と考えたとき油断が生まれた。もんどりうって跳躍した星の裸身が五メートル程先きにあったナツメヤシの脊後に消えた。

ダ、ダーン。

反射的に引金をひいた殿下にしても、殺したり傷つけたりする気持は毛頭ない、たかが裸の女一人、と舌うちしながら追った。

幹から幹と、リスのように素早く身をかくしながら、星は次々と、移動して行った。目ざすものは、いわずと知れたジープである。これを奪ってしまえばこっちのものだと思っていた。

殿下も思いは同じ、ジープをとられてはこのオアシスで立ち往生になってしまう。とらせてなるものかと追いつがった。

数秒、星が早かった。ヒラリと座席にとび乗って、スターターを廻す。ところが、無念にも、オンボロジープのエンジンは、いたずらに喘息のような音を繰返すばかり。

そこへ殿下が猛然と組みついて来た。負けるものかと二人は砂の上で組んずほぐれつもの闘いとなった。ここにも星の誤算があった。

離れての闘いならばまだしも、疲労困憊している今の筋力では、組んでは男の力に敵わないということを考えなかったからである。

やがて、運転手が正気にかえって、殿下を助けに来ては、もうどうにもならない。今度は運転手の方が殺気立っていた。女に負けたことが頭に來ていたのである。

無茶苦茶に暴れたけれども、とうとう四本のナツメヤシの幹に両手両足をひっぱられて大の字なりに縛りつけられてしまった。

こんなことで一層情慾を駆り立てられたのであろうか、殿下は運転手をジープの番に追いやって遠く離れさせると、自分も衣服を脱いだ。そして、

「ずい分と、よい運動をさせてくれた。わたしは従順な奴婢には飽き飽きしていたところだ。さあ、その代り可愛がってやるぞ」

火のようにさかり立つ醜さを見せつけながら、もう全く抵抗する術をうしなした星の上に襲いかかって行った。

不思議なことに、いよいよトコトンのカタストロフィに追いつめられたかに見えた星なのに、全く動揺する様子がない。僅かに殿下の乱暴な掌が、彼女の肌をもみしだくのに顔をしかめたくらいのものであった。

不意に殿下がとび上った。怒りに唇を
ワナワナさせて、

「何だ。貴様はいったい……？」

「ホホホホホ」

えん然と嘲笑する星恵美子。

「わたしの身体には高性能の爆薬が仕掛けてあるのよ。お気をつけなさい。ウツカリ引き出すと忽ち破裂するから。わたしも吹飛ぶでしょうが、そのときはアナタも道づれですよ」

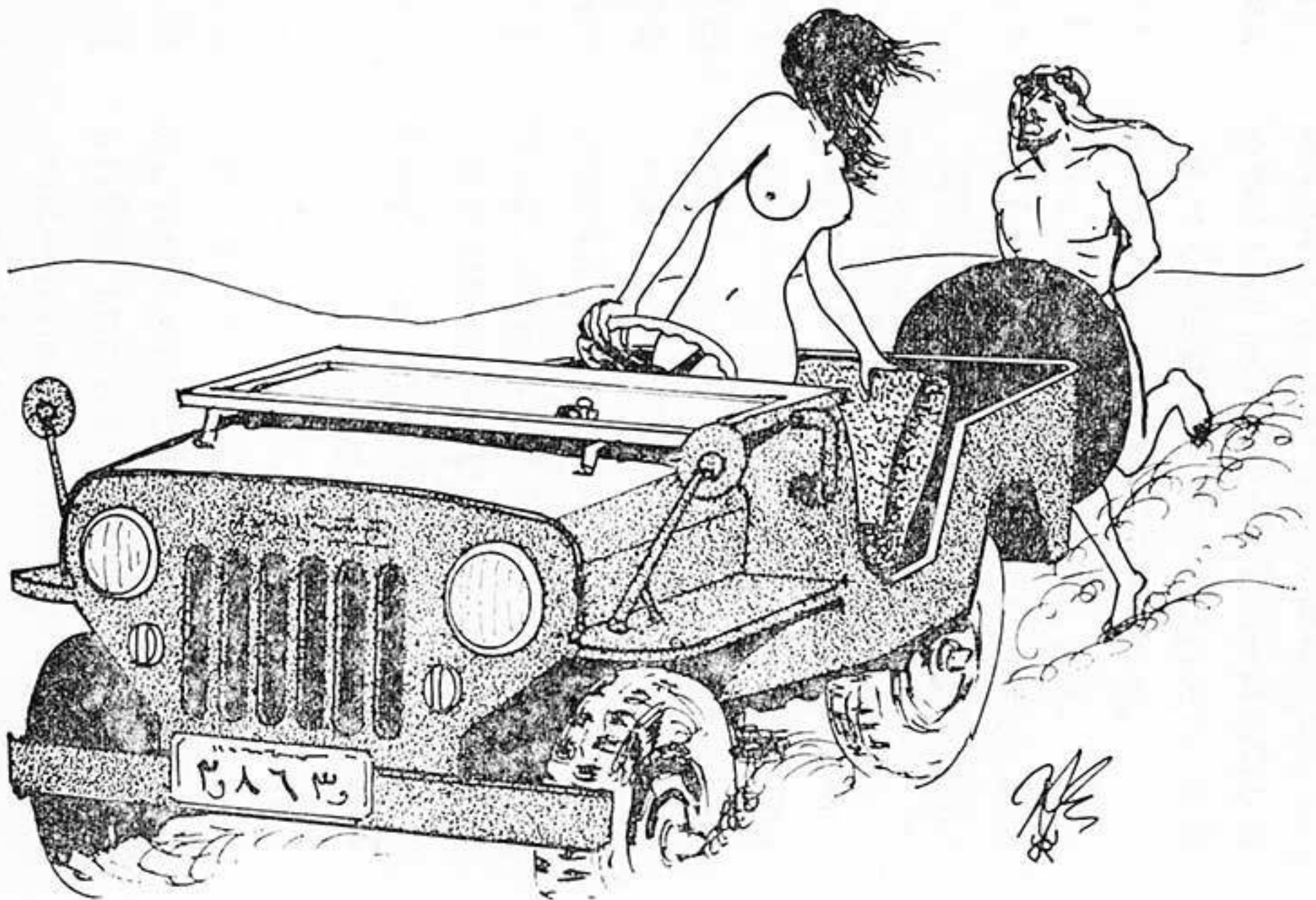
「畜生！」

殿下は齒噛みして地団駄を踏んだ。途中でとめられて、やり場のなくなった欲情が、余計、彼の怒りを倍加させた。

憤怒のあまり段下は、この憎らしい女を殺してしまおうとさえ思った。五千の金は、彼にとっても安い金ではなかったけれども、それを棒に振ったって、こんな女は殺してズタズタに引きさいてしまいたかった。

ふと、陰惨な考えが頭にひらめいた。彼女のいう爆薬の金属環が覗いているのを思い出したからである。

——そうだ、アレに長い紐か針金をつけて遠くから引っぱれば、例え爆発したって安全だ



ケの針金や紐をロープの類を集めて帰った。そして、顔をうずめるようにして小さな金属環に、針金を結び合わそうとして夢中になっていた。

ところが、あれだけ嚴重に縛っておいた筈の星の両手の縄が、いつの間にか解かれていて、彼女の上半体が徐々に起き上ってきたことに気がつかなかったのは殿下の不覚だったといわなければならぬ。

二つ合わせた星の拳が殿下の後頭部を叩きつけた。物も云えず殿下は、白砂に顔を埋めるようにして、気を喪ってしまったのであった。

ジープのあたりで運転手の絶叫が聞えた。それもやがて幽かになり、静かになった。

星が指を口に含んで、

「ヒューッ」

と吹くと、向うからも同じ音がハネ返って来た。やがて、砂を踏んで近づいてくる人影があった。その間には、星は足の縛めを解いて、スックと立上っていたのである。

「ジャン？」

低い声で星が呼んだ。

「エミー？」

男の声が答えた。

ろう——
殿下はジープのところへ走って、アリッタ

「ありがとう。間に合って縄をほどいて貰ったので、助かったわ」

さすがの星、エミー司令の声もホッとしたように、はずんでいた。

「私がついていながら、こんな危い目にお会わせて申し訳ございませんでした」

星の差し出した手を柔かく握り返して、ジャン・シュレッサーは寧ろ恥ずかしげに自分の不手際を詫びるのだった。

「それにしても、このバイオテレメーターがあったから助かったのね。でも随分さがしたんでしょう？」

ジャンの労をねぎらうように星が語りかけた。ジャンは一礼して、

「さようでございます、エミー。テヘランでお姿を見喪ってしまいましたものですから、部屋にとんで帰って電波でおさがしいたしましたところ、ある飛行場から飛んで行ってしまわれたということだけは解りました。けれども御承知の通り、私の携帯しております機械では、あまり遠くになると検波出来ませんので、困りまして、有明様からもっと精巧なのを送っていただきました。それからが大変で、チャーターしたヘリコプターにアングロ・イラニアン会社のマークを書いて送油管の

検査をするように装いながら、縦横にとび廻ったのでございます。やっと一時間ほど前、こちらにいらっしゃるのを、探知いたしました。爆音が聞こえないように二キロ程向こうに着陸いたしました」

「よくわかりました。もう三十分もあなたがおくれたら、これが爆薬でなくて無線発信器にすぎないということがバレてしまったでしょう。そうなれば万事休すということ、わたしは凌辱を受け、二度と有明の前に出られなくなってしまうところでしたわ」

しみじみと星はいつて、もう一度ジャンの手を固く握りしめたのであった。

ジャンが言った。

「エミー、ヘリコプターが待っております。

テヘランに帰りましょう」

「いいえ」

星はキツパリと答えた。

「私の素肌を見た男たちは、味方以外は皆死んで貰わなければなりません。それに大分、お土産もありそうだし……」

二人は尚も声をひそめて打ち合せをつづけるのだった。

あくる日の朝、ヘリコプターは星救出の吉

報と今後の計画指令をたずさえてテヘランに帰って行った。

殺した運転手は泉の側に埋めて、その衣服をジャンが着た。

小柄な殿下の着物は星にピッタリだった。

二人は変装して再びあの館へ戻ろうというのだ。

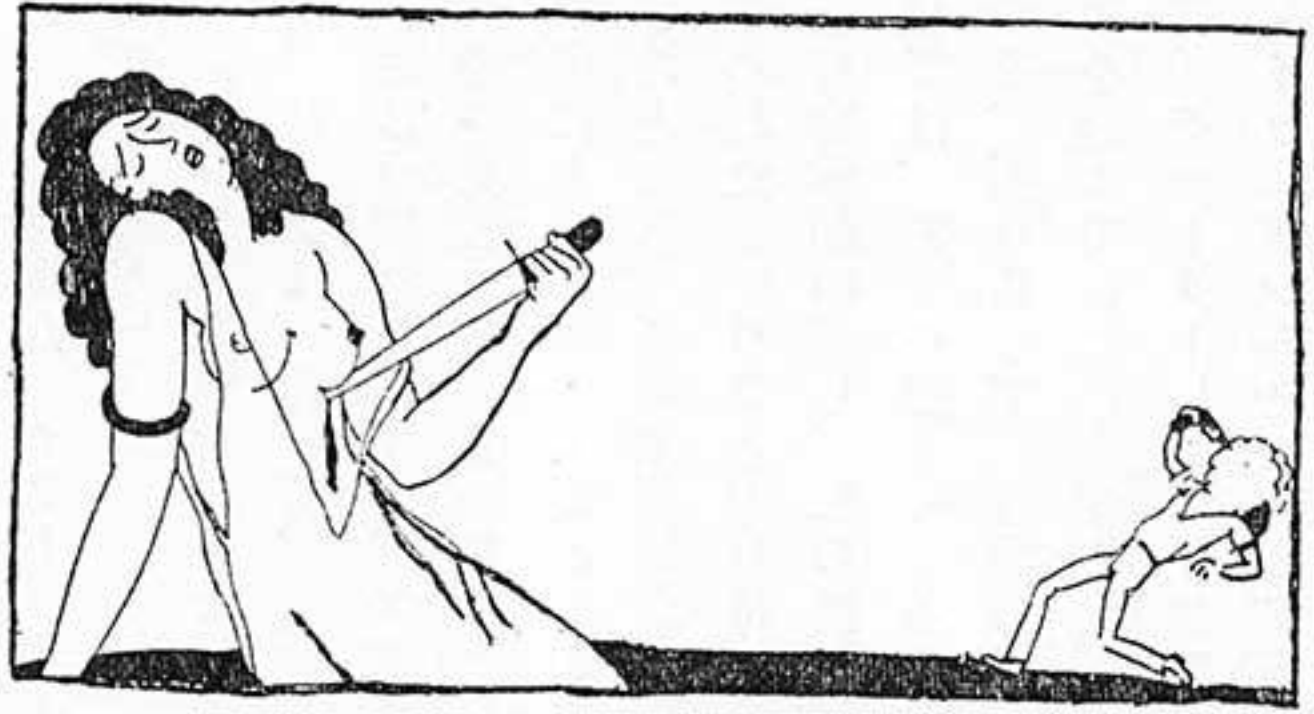
哀れをとどめたのは今度は殿下である。

まっ裸にされた上、星の面白半分のアイデアで、一物を紐でくくられ、更にそれを昨日星を引摺ってきたロープに繋ぎ合わせて、ジープで牽引されることになったのである。勿論、後手に固く縛られてしまったはどうすることもならずさすがの殿下も、歯ぎしりするのが関の山である。

「目には目という言葉が、コーランにあるわよ。ご存知？」

笑いながら星はジープのギヤを入れた。ジープが走り出すと、悲鳴をあげながら殿下はそれにつれて歩き出した。次第にスピードがあがると、息を切らせて馳けなければならぬ。すべてが昨夜、星の経験した通りとなった。

(未完)



切腹研究夜話

ヌード忠臣蔵考

通 弘 康 中

東京の青山芳樹さんから、例によって早耳の速報で、

大阪のOSミュージック公演（十一月三十日—十二月二十九日）「ヌード忠臣蔵」全二十二景、その第五景「判官切腹」の場に、久美エリカが女判官切腹を熱演する由、是非ともご鑑賞を……

こいつあ一番行かざるめえと、愛機あいくドック入りの折も折とて、子供にも使えるペンカメラ、左の手首にちよいとかけ、

師走某日、開場一番乗りの一列い20番に陣取った。なるほど一番乗りだけある。セリ舞台が突き出している、そのエプロンの最突端が眼と鼻、少々カメラには不自由を感じさせるほどなカブリツキである。

セリまで出てこれられると仰角になって、可哀や、美しい踊り子さんをクローズアップしようとするれば、どなたも例外なくアンヨが太く撮れちゃう。まことに美形も美形、脚線美ぞろいの踊り子さんには申訳ない仕儀と相な

るわけのものであった。いい年して今更、いい勉強（カメラの、ですよ。アンヨの、じゃない）したものである。

一体、ヌードショウというかバーレスクとどうか、この種の艶笑軽演劇をまじえたショウで、忠臣蔵を演じた例は決して少なくはないのである。

昭和二十六年ごろ、東京は日本橋のTデパートで、ショーウィンドーに「女判官切腹」のスチルが、大きく畳大に引伸ばして飾られたこともあるという。

また雑誌「りべらる」昭和26年4月号の口絵には、やはり浅草座所演の忠臣蔵で、義経袴に上半身裸体のヌード嬢が、短刀逆手に判官切腹を演じている写真が見えた。

是らは何というヌード嬢か、ご存じの方があればお教え頂きたい。また雑誌ご所持の方があれば拝借したいものと思っている。

青山氏に後年教えて頂いたところでは、当時次のようなヌード忠臣蔵が、年年東都の師走の芸界を彩っている由である。

- | | | |
|---|---------|-------------|
| 1 | 年月不明 | 国際セントラル劇場 |
| 2 | 〇25年12月 | 浅草座（りべらる口絵） |
| 3 | 26年11月 | 池袋アヴァンギャルド |

劇場

4 27年12月

同右「エロ手本忠臣蔵」

5 28年12月

東京劇場バーレスクルー

ム「あな手本忠臣蔵」

6 〇同 右

観音劇場

「エロ手本忠臣蔵」

7 〇30年12月

新宿フランス座

「アナ手本忠臣蔵」

8 31年1月

横浜セントラル

「浮気むすめと忠臣蔵」

9 32年1月

同 右

「エロ手本忠臣蔵」

10 41年12月

日劇ミュージックホール

「ヌード忠臣蔵」

このうちで、ただ短刀を腹に当てがうだけでなく、一文字に引廻して俯伏す本格的な切腹ぶりを見せたのは、〇印のみである。

(2)は氏名不祥、(3)(4)は藤アリサ、(6)はマヤ

鮎川、(7)は神代佳代子であった。(10)の高見緋

佐子は舞台が日劇だけに、週刊誌のグラビア

にもその姿が見えた。変わったところでは(8)、

シルエットで三宝の前に膝をついたストリッ

パーを写し出し、右手の短刀を逆手に切先を

腹に向け、左手を腹にあてて俯向く姿勢で暗

転。

是らはすべて東京周辺のことと、もしスチルをご所持の方は拝借方お願いしたい。

さて地元関西では如何かとみると、皆無ではない。つまり左記の通り。

11 30年12月

南街ミュージック

「珍版色手本忠臣蔵」

12 31年11月

OSミュージック

「ドライ手本忠臣蔵」

しかし(11)の判官役は茶川一郎で、腹切刀を前にして坐った判官の周囲を、顔世御前に扮した美波夏子が、上半身裸で舞う景があるばかり。

(12)の判官役は三浦策郎。

ほかに道劇が一度忠臣蔵を上演したが、この記録は全くない。チラシがあったというところだが、判官切腹の景があったかどうかとも関知していない。誰方かご記憶のいい方にお訊ねしたいものである。

従って、関西での本格的なヌードショウとして、女判官の登場そのものが、多分今回を以て嚆矢とするのではないかと思われる。

まずリーフレットを送って貰ったところ、

女判官役に扮する久美エリカの踊り姿が一頁に出ている。フォルムもマスクも美しい。どんな女判官になることかと、期待して出かけたわけである。そして見終ったあと、やはり感じたことは、とにかくにも久美エリカがいい。芸が素直である。気どりが無い。

踊りは勿論年期が入っていようが、コミカルな寸劇になると、自他のセリフで観客より先に微笑してしまう。世の中には気むづかしい御仁がいて、「コメディで役者が先に笑うのは見てられない」という人がある。実際TVなどでも、笑わせ型の司会者なんかで、少毒気のあるシャレをいかにも洗練されているつもりで、しゃべるご当人がおかしがる、なんてのがあって、是はどうもクサミがあっていただけ無い。

しかし、久美エリカの微笑は、心底から舞台を楽しみ、芸能を悦びとしている人のそれである。本当の役者根性というのは、こんな風情でもいいのではないか。まだ若い、ピチピチした女性が、思わず頬をほころばせながら舞台をつとめているのを、意地悪く見る人は、子供じみている、なんて云うかも知れないが、子供結構、役者子供なんて言葉も、意

味は違ふけれど通用する世界である。まず何よりもお客を楽しませるのが、芸能本来の姿であろう。

踊りの達者な踊り子さんがいて、コメディの合いまには、かけ声かけてのトリオや群舞は、それぞれに個性もあり、同じ踊りを踊っているながら、優美さや活潑さ、そして新鮮さをふりまいていたのもよかったが、久美エリカの悪びれぬ微笑は、ひととき筆者の目を魅いた。

そのエリカの内匠頭、もちろん笑劇ゆえ、大上段の演技ではないけれど、「松の廊下」では、クリクリと眼を輝かせて、大芝居な悲憤よりも、ハプニング的期待にみちた表情なんか、全く生氣にあふれている。

そのあと、炎の精の踊り子二人をからませながら、顔世との悲嘆の表現は、久美エリカとしては他の場では見せない生まじめさ。素顔を引っ込め一生懸命の役どころみたいで、白ぬり美男子ふうのつくりが、りりしくさえ見える。

一転して、いよいよ最大の関心事である判官切腹の場。

もちろん、歌舞伎調とはおよそ縁遠いけれども、「松の廊下」の可憐な判官ぶりを見て

来て、さあ、どんなに可愛い演技になるかと期待が持たれた。

期待に違わず、白装束で舞台中央、一段高い腹切台に正座した久美エリカの愛くるしさというものは、本当に少年のりりしさと少女のすがすがしさを、足して二で割ったような不思議な美しさ。

大きくつぶらなのに少しも女くささを感じさせない瞳、赤く熟れたようであどけなさの残る唇、ふっくらと若さの内から照るような顔が、男まげにも似合うから舞台人として得な人である。

さて、三宝の腹切刀を右手にとり、いざ、とせかれながら「内蔵助はまだか」とお決まり。しかしこの人らしい明るい声音のセリフがまたいい。左手を白装束の胸もとにかけたが、思い直して三宝を腰に廻していきき乗せる。介錯の武士（和田平助）が、腰のものを引き抜き、ズイと刀身をエリカの顔の前へ差し出す。

そこへやっと内蔵助参上。「近う参れ」とここは歌舞伎ふうにも右肩乗り出すようにして呼びよせる。すると内蔵助が寄りすぎて、互いに見合やす顔と顔。「鼻息があらう」と、内蔵助を、あとずさせ、「内蔵助、無念じ

ゃ」を遺言に、今度こそ思い切りよく、刀を一旦膝前におき、右からパツと肩を抜き、左も抜いて鮮やかに白い両腕、左右に開いて斜めに天を指すと、なめらかな腋から胸へ、流れるようにたかまる線を露わし、次いで両手で、白装束の腹を押しくつろげ、右手に執った刀の切先、ピタリと左の脇腹に当て、「さあ、切つてよ」とうながす。

介錯人はあわてて大刀を振りかぶったものの、また一思案。
「何よ、早く切つてよ」

また催促するところで暗転。そのあいだ、右手の腹切刀は彼女の手で左脇腹へ当てがわれたままである。実録風に云えば、左の腹を刺し、介錯の刃を待つ潔い風情。やわらかく、しかし笑わせすぎずに、久美エリカの美しい上半身を印象に残した。

このところ、いずれ艶笑劇ゆえ、もうひと押し、

「切つてくんないんなら自分で切っちゃうくらいいわ」

「ああもったいない、腹を切るくらいならそのまえに」

「キヤーッ」

くらいのセリフやカラミがあってもいいの

ではないか。それくらい時間をかけてもお客をダレさせないだけの、いわば画になる人だと思わせられた。

そのあとも、この人はお軽役で、主税の教育係という一と幕があったり、最後の討ち入り場面では大石主税役、おなじみ陣羽織を素肌にもとうてチャンバラまでやるサービスぶり。めでたく吉良上野介を討取って、大石内蔵助の音頭で勝ちどきの、エイエイオウと大刀を空へ高く突き上げたとき、陣羽織の合

せ目からお臍の覗けていたのも、なんとなく微笑ましかった。

フィナーレの「昭和元禄」では、トリオ、デュエット、ソロ、シックス、群舞と、入れかわり立ちかわり全員が、舞台狭しと踊りまくるなかで、久美エリカが金色の軽羅を背に鮮やかな洋舞ぶりは当然のことであろう。

いつも微笑を絶やさぬ踊り子として、久美エリカ、それにキティ島は印象に残った。キ

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

ティ島は整った顔立ちの美人で、落ちついた演技ぶり。コメディ続きのなかで、ただひとつ悲劇調を演じたのは、浪士の一人と恋におちた町娘役のこの人。別れをはかなみ、左手で着物ひきあけ、右手の**かんざし**で左胸を刺し貫いて死んで行く役どころを、表情も姿態も優美に演じた。

ついでながら筆者、シヨウにはずいぶんど無沙汰で、もう二十年近くなろう、フリーダ松木ら、やはり東宝のシヨーチームを観たことがあったきり。当時はストリップティーズ全盛で、スパンコールとバタフライだけの姿になるまでを、照明効果と衣裳とでいかに観客をじらせるかという、ティザーがはやっ

た。

久しぶりで見たシヨウ、ヌードシヨウとストリップシヨウの違いは目に立って、やはりOSだけのことはあるフォルムの美しさと踊りの鮮やかさで、結構時間を忘れさせられたものである。

以上、昭和元禄四十三年師走興行、OSミュージック「ヌード忠臣蔵」観覧記である。



濡れにぞ濡れし

続聖牡丹餅の洗礼

—— 美 眉 野 芳 ——

椅子の後脚に足首を縛られた裸の男は、残酷にも背中を屈曲させられて、椅子に頭を乗せていた。彼の全身をかううじて支えているのは、前脚にはさまれた膝頭であり、縛られた両手であった。

反り返った彼の胸は、無理な姿態を強いられて、水落ちが激しく波打っていた。恐怖に満ちた男の顔に、観念したような喜悦の表情がよぎるのが妙であった。

白い便器が、男の顔にかぶされていたのである。

白い便器から顔を突き出した彼の顔をまたいだ女王は、椅子の先端に踵をかけたただけで中腰になり、あえぐ彼の胸に片手をつき、スリップの裾をからげて男を見下ろした。

「あたたかい御馳走をたんとあげるよ」

——二月号の「濡れにぞ」のカットは最高だった。女王の言葉は、

「あたしの便器になりたかったのだろう。望みをかなえてあげたのだから、みんなたべるのだよ」

でもいいし、

「さあ、口を開けて。のどにつかえたって知らないよ」

でもなんでもいい。空想は楽しいものだ。

春川ナミオ画伯のM画はますます快調で、グラビヤ写真廃止を補って余りあると思う。春川画伯のすばらしいカットで、私の「濡れにぞ」も引き立つというわけである。

読者通信に、

『貴女様の奴隷にして下さい、では月並みなお願いで女王様には失礼かと存じます。それよりも、女王様の専用便器にして下さい。美しい女王様の巨尻の下で、一生県命奉仕したいのです』

という、東区、の女王、にあてた春川画伯の通信があり、春川画伯御自身の体験から、あのような刺激的なM画が生まれるのではないかと、ただただ感嘆して、よろこんでいるばかりである。

春川画伯と親友のあるH氏の話だと、H氏が連れて上京した大阪の女性（一月号の濡れにぞ／＼連投／＼参照）の人間便器に、彼はなっているのである。私は、彼女から神酒拝受はしていないので（それには理由があったのだが）、春川画伯と神酒兄弟になれなかったのは残念であった。

それでも、彼女を知っているだけに、彼女に縛られて便器にされている春川画伯が眼に浮かび、カットを見てはにやにやしている始

末である。

H氏の紹介で、春川画伯から自筆の水彩画を二枚いただいたが、家宝にしたいくらいの美しいM画であった。二枚とも女王の便器にされている図で、グラマーな美貌の女王は、私好みであり、また、H氏の奥様に似ているのが、私を悩ませるのである。

これは蛇足だが、春川画伯の手紙の字は、活字そのままといていいような、綺麗な字である。蛇が踊っているような字しか書けない私は、全くうらやましいと常々思っている次第である。

高橋鉄『あぶらぶ』（青友社）には、カウンセリング編があり、『女の排泄物に心酔する告白』というのがあるから紹介してみる。

『遠い親戚の娘で、私より四つ年上のひとが当時私の家に同居していました。私ははじめて初恋というものを覚えました。お光さんという人でした。——（中略）——空想の中では私はお光さんの便器にされました。床に仰向けにねて口を開いた、私の顔の上に、お光さんがまたがり口の中に放尿するのです。お光さんの股倉に首をはさまれたまま一晚を過ごすのです。』

しかもこのような空想を空想でおいでできなかったのは、同じ屋根の下に暮していることでした。お光さんが便所に入ると私はじつと呪縛されたようになってしまふ。そして彼女のあとに入ってゆく。私はまもなく、クソのクソのたまった上にお椀をそっとおいてそれで尿をうけることを考えました。私は今でも、湯気の立つようなしおからい液体を、のみ下した時の感激を忘れません。——（中略）——私は更に大便も手に入れました。クソ壺にクソのもり上って来ている時は上から手がとどくので、彼女のすぐあとに入って、手でさぐり、あたたかい固まりをさがせばよいのでした。それを紙につつんで私は部屋に持帰り苦いのを少しなめて見ました。尿とちがって余り口にさからうので、全部口に入れるなどはとてもできませんでしたが、……』

その答——

『現実の例でも、女サディストの下にうずくまって、豚か魚のように尿をのみこむ男の実験写真を、私はずいぶん蔵しています。直接そういう告白をきいたことも多いのです。逆に、そうした体験を持つ女性も数人知っています。』

そして、心の秘奥にそのような熱望を燃や

している男女は珍しくない、というよりも万人に多少ずつあると考えます。精神分析学の立場からです。

たとえば、男たちの多くが、御婦人のトイレットに非常な興味をもっている事実は、誰しも知っているでしょう。メンスでさえ男心をときめかす対象です。彼女たちの下穿などを、盗む連中さえ珍しくありませんね。

このマゾヒズムと排泄物心酔は、別々の現象です。にもかかわらず、共通し、結びついているケースが少なくありません。

その心因を分析してみると、何らかの結果愛する人に一身を捧げるほど仕えたいというマゾヒズムが高まると、その手段の一つに普通は、いとわれる排泄物さえ甘受したいという気になって行く。

もともと、人間は、生物の常として、性器と排泄器を近似したもの、同一ともいえるものと（無意識に）思いこんでいる場合が多いのです』

これだけの解答では不満足を覚えるのは私だけではないだろう。質疑と解答の間には、当事者と傍観者（研究家）のどうしても越えられない差というものがあつたのである。

誤解ではない。理解をしてくれる態度は示

してくれるだろうが、その趣味を持っていな
い人の理解には、おのずから限度があるはず
である。

初恋の年上の女性の便器に何故ならなければならぬのか。空想が何故空想でなくなつてしまったのか。尿から大便への移行の原因はどう考えたらいのだろうか。

要するに、こういうカウンセリングの解答は、一般的で、非常に常識的なのである。

女性の Urine をのみ、Kot をたべてみたいと空想する男がいたとする。男は、身近かの親戚の、それも年上の（これは憧憬を意味する）娘を初恋と称して相手に選ぶ。

男の物語りは、お椀で彼女の尿を受け、手をのばして彼女の大便をすくうという筋になる。男の行動は突発的で、必然性がないように思える。

初恋なら、ラブレターを書いたり、愛のさやきをかわしたりするのが、いわゆる必然性だからである。

こういった観念が混乱の原因なのである。

男にとって、年上の親戚の女性は、女性の糞尿を飲み食いするという空想の道具の一つにすぎないのである。必然性など、はじめから考えていないのである。

その場面をつくるために、女性を登場させたのにすぎない。

男の心理を奥深く解剖するのは、現時点ではまだ無理のように見受けられる。

道具にすぎないものを、どう精神分析したところで、それがなんの役に立つというのだろうか。

本能と一口でかたづけられてしまうSEXを、根本から考え直さなければ、解答は得られないのではないだろうか。

男女の交合だけが、SEXではないのである。

このカウンセリングより、質疑者の空想のほうが面白い。

『今の下宿は田園調布の西洋人の家の多い中にあるのです。私の二階の部屋から、裏の家の庭がよく見えるのです。裏の家は英国人のシビリヤンの家で、若い夫妻なのですが、メイドさんの話では、貴族の家柄の出の夫人だとのこと。この夫人は、Cさんというのですが、ジミーという犬を飼っているのです。大きな犬です。ポインターというのだそうです。御主人のKさんが、自動車ででかけたあと、Cさんが庭でジミーを仕込んでい

す。Cさんはスラリとした身長のある細面で金髪のすばらしい美人で、年はメイドの話では私と同じ二十三才です。庭にでてくる時はよくスポーツ用のズボンとスエーターで出て来ます。犬を仕込む時は、犬鞭をもっています。メイドさんの話でも気位の高いひとらしく、英国の貴族には、よくあるのだそうです

が、召使には一日中口をきかずに用を足させることもあるそうです。ジミーをつれて散歩する時なども、ツンとすましています。美しいが、どちらかといえばきつい顔立ちのひとで、それが犬の訓練の時だけは目がかがやき何か英語で命令する時の口もとなどとてもきびしいことがあります。そういうことのの一つが私には魅力なのです。その意味で、今の私の恋人はCさんだといえましょう。御察しのように、その恋は、お光さんに対してと同様、変態的な空想をかきたてるばかりなのです。そして、彼女の尿のことなど考えただけでもたまらなくなるのですが、一つ妙なことに、今迄かつて欲望しなかったことを欲望するのです。それは、私がジミーの代りになってみたいということなのです。少年時代からこの方、色々の空想にふけたのですが、動物になりたいと思ったことは一度もありません。

せん。エロ雑誌をよんでマゾヒストが馬にされる所がありますが、別に共感を感じませんでした。

ところが今では私の第一の望みは犬になることなのです。私の競争相手はジミーなのです。ジミーに羨望を感じるのです。今迄の単に空想に止まった欲望と違って直接行動に訴えたいような強い衝動を感じるのです。これが恋心としたら、今迄私は恋を知らなかったのです。Cさんこそが初恋の人です。しかも恋仇は、主人のKさんでなく、犬のジミーなのです。△犬の恋▽なのです。私はKさんには何のねたみももちません。KさんとジミーがどちらもCさんを愛し、愛されるように、私はKさんと並んでCさんを愛していけると思うのです。私はCさんの肉体を男として要求しようなどとはちっとも考えていないのですから。然しジミーは邪魔です。ジミーがいれば、Cさんは私を気にかけてくれないでしょう……。

私のこの頃の空想は、こんなのです。夜分寝しずまった頃、忍んでいってジミーを殺してしまいます。それから暫くして、Kさんの乗ってゆく自家用車に両足をひかれます。入院しますが、両足は膝小僧の下から切断され

ることになります。Kさんは私が覚悟してひかれたとは知らず、同情して見舞ってくれます。そして私の生涯の生活を保障すると約束してくれます。退院後は彼の家に引取られることになります。義足はもらっていても、両足共だからうまく使えません。つい這って用を足すことになります。家の内部ならばそれで恥かしいこともないのです。外出をあきらめれば義足なしでいいと覚悟します。Kさんの家は洋館を接収して改装したので勿論靴ばきで上るのです。私はそこを這っているのです。食事の時なども私ははってゆくのです。

約束があるからKさんは黙っていますが、Cさんは、この不具の日本人は不愉快だと露骨に顔に出します。私はその頃を見はからってメイドさんに実は自分がジミーを殺した。こうやって四つ這いの生活をするようになったのもその罰だと思おうと打明けます。口止めしてもすぐCさんの耳に入ります。愛犬を殺されてクサっていたCさんは憎い犯人が只でさえ目障りな私だと知って、復讐を志します。私を徹底的に犬にしておもうという決心です。――(中略)――Cさんは、私が、今迄寝ていた部屋から出て、犬小屋の中に寝ること。指を一切使わず、口だけで食事をとること。

と。口をきく代りに、犬のように吠えること等々……を命じます。但し犬小屋は、家の中の夫婦の寝室前の廊下におくということになります。外では寒いだろうと憐んでくれたのです。——(中略)——

Cさんは、ちょうどジミーを仕込んだように、私を仕込みます。覚えがわるいと犬鞭でうたれるのです。食事はお二人の食事のテーブルの下に坐っていると、骨やパンを投げてくれるのを口でたべるのです。嬉しいことがあれば靴をなめます。犬である以上、お二人の上半身には接触することができないのです。名前はジミーのあとをおって、ジミーとつけられています。然し、Cさんは時々もとのジミーを思い出して、今のジミーを、私を足蹴にするのです。気まぐれに鞭ったりするので、Kさんもじきにその状態になれ、自分に対してCと同じように服従することを要求します。私をひいたことで感じた気の毒さはジミー殺しだったことが分った時からなくなっているのです。今では飼ってやってるだけで恩恵なのだと感じています。実際この家を追出されたら、どこへゆくこともできぬ、私は何とされてもこの家にいるしかないのです。私の無力につけこんで、Cさんは私を一步

一步恥かしめの度を強めていきます。私の水呑器が、彼女が、もと使ったシビンになります。食事の残りが便器の中にあけられて、私はそれから食べるようになります。いやだといって食べなければ飢えてしまう私は汚いなどいってはいられないのです。次に私は夫婦のベッドにまねかれるようになります。今迄は寝室の外で番したものが今度はベッドの足につながれるのです。二人がダブルベッドにいる時、芸をして見せたり、或は首を中に入れて、前戯の道具に使われます。それから二人が性交中も……充分吸ってやります。これを私の長い舌でやるのでCさんは私の舌なしではいられなくなる。Kさんの出張中も毎晩です。尤もKさんは寝室迄入ると少し心配だと見えて私を去勢します。去勢されて安全になるとCさんは大っぴらに犬小屋を寝室に入れます。ここが私の生活のすべてになります。

Cさんは、更に私に大小便を口にすることを仕込もうとします。私は、鎖につながれて一週間も放置され飢餓の極に達した時、Cさんの大便をもった皿、小便を入れた椀がきます。つまり便器がおかれるのです。食欲にたえかねて私はそれを口にします。これを繰り返す中、私はその味になれ、空腹でなくても口にするようになります。Cさんは一日寝室にいて便所にゆく必要がなくなります。そばに僕がいるので、それが何でもすっかりおなかに入れてしまうからです。やがて出張から帰ったKさんはそれを知って自分も使うようになり、私はお二人のために、犬にして同時に便器であることになります。人が捨てにゆかなくてもいい便器なのです』

雑誌で読んだ記憶があり、その再録だが、私好みなので、長いが引用してみた。人妻に対する憧憬、白人崇拜、奴隷願望、去勢、犬、便器……と並べてみると、空想的な(観念的な)Masochismの、一般的な常識的な道具立てが揃っている。

このことは、これを書いた質疑者が、かなり健全な精神の持主であることを証明しているようなものである。

従って、カウンセリングでも、質疑者が結婚し、社会人として立派な生活をしていることが追記され、「あぶらぶ」は文部省の推選があってもいいような、見事な教育本になっていると見受けられる。

SEXの画一主義にささやかなアイロニーを持ち込めば、このような診断になるという

わけである。

この質疑者は、はじめから精神分析を受けると、精神異常をきたしているわけではないのである。あまりにもマトモすぎて、現代人のお好みの不安と猜疑心を増長させ、自己満足に陥ったのにすぎない。

私がいいたいのは、SEXの一型式として男の疑問をすべて是定し、そんなことに悩む必要はない、お続けなさいと、精神分析学上から論理的に解答してはしかった、ということなのである。

Masochism とか、Scatology とか、頭から Abnormal ときめかかって、精神分析をする研究者に、そこまで求めるのは無理かもしれない。しかし、誰かが頭をきりかえないと、いつまでも同じ事が繰り返えられるばかりである。

布石でその後の展開は変り、思考の方向は決定してしまうのである。大胆で斬新な布石を望む所以である。

女性の Urine を飲み、Kot を食べるという行為も、SEXの一型式として考えてみたらいかがですか、といっているのである。

SEXにNormalもAbnormalもあったものじゃない。

SEXとは、こういうものなのだ、と納得してしまえば、すべては解決してしまう。少し飛躍しすぎたかな。

『武士道といふは、死ぬ事と見付けたり』という一節で有名な八葉隠に、

『人間一生誠にわづかの事なり。好いた事をして暮すべきなり。夢の間の世の中に、すかぬ事ばかりして苦を見て暮すは愚^{おろか}なることなり』

という、まったく正反対の言葉が同居しているのは面白い。そして、葉隠を読むと、この矛盾しているような一節が、同じ意味だということを知られるのだから楽しくなる。

そんなことより、好いた事をして暮すべきなり、というところだけを勝手に頂戴して、性癖のおもむくままに遊びたいとは思うものの、そう簡単に問屋が下ろさないのが浮世の常というものであろう。

社会生活につきものの制約や、経済力を考えれば、空想していることを遊びに移行することを躊躇してしまう人も多いことだろうと思われる。

しかし、制約の危険をおかすところに、また遊びの楽しさがあるのかもしれないのである。

る。

私の遊びなど、経済力が無いほうだから、お茶をにごすのが背一杯だが、それはそれなりに遊んでいればいいものだ、と、あまり高望みはしないことにしているのである。

前書きが長くなったが、聖牡丹餅拝受の続きを書こうと思う。

四十三年九月号「濡れにぞ」の八その二に五月と書いてあるから、H氏に聞いてみれば上京された日がわかるだろう。

『——二回目の神酒拝受。椅子と椅子にまたがったあけみ女王。這いつくばって顔をもたげた。』

とめどもなく流出する暖流。

息をするひまもなく、のどから胸に浴びせられ、畳をびしょ濡れにした。

——いいよ、ビールをこぼしたといっておけばわからないよ。

容赦なく体内を通過したビールが降る。息が止まるかと思うほど苦しく、のたうちまわって飲み続けた。雨の中から外に出るわけにはいかなかった。』

そのあと、

『ようやく解放され、浴室に飛び込んだ』

とあるが、浴室に解放されるまで、まだか

なりの屈折があったのである。

あけみ女王が、二人の下僕に、ただ神酒を飲ませるだけなら、椅子と椅子にまたがる必要はないのである。そんな無理な不安定な、露骨な肢体を見せることはないのである。

あみけ女王の好みの態位は、ゆったりした肘掛椅子に腰を掛け、肘掛けに両脚を開いて乗せ、あらわな刺激的な肢体を見せるか、椅子の前に這いつくばって顔をもたげた、奴隷の肩に両脚をのせ、奴隷を神秘的な芳香で包みながら、さんざん奉仕させたあと、鼻口をふさがれて息も絶え絶えな男の口に放尿するのである。

私が神酒拝受をしていると同時に、あけみ女王は、足の指をH氏に舐めさせて、下僕を決して遊ばせておくようなことはしないのである。

H氏が神酒拝受する場合は、私が彼女の足の裏で顔を踏みつけられているといった具合である。

二つの椅子を引き寄せ、その間に私を寝かせたとき、Urine だけでなく、Kot をする用意が彼女の胸にできていたらしかった。それがH氏の望みなのか、彼女のM奴隷に対する遊びの意味か、よくわからない。

Urine ならともかく、平気で男の顔に浴びせる女性が多い。これは高橋鉄先生のレポートを読むまでもなく、見本はごろごろ転がっている。

だが、排泄は排泄でもKotとなるとそうはいかない。徹底的に、Mに飼育された女性でも、こればかりは、かなり抵抗するものらしい。誌友でそんな話をしていた人がいた。かなりS傾向の強い方で、私に影響されてか、責めに排泄強制をとりいれたらしいのだが、どうしても見せてくれないそうである。浣腸の排泄とは違う。あくまで自然の行為は想像以上の羞恥感をともなうものらしい。

況んや、サディスチンであるあけみ女王をや、である。H氏と二人、血走った眼でいまや遅しとにらまれては、そう思うようにことは運ばない。

「いやだわ、そんなにみつめて……」

彼女の羞恥心もそうとうなものだったのに違いない。

だが、男にたべさせるという加虐的な趣向が、羞恥心より数倍まさっていたと考えるのである。

うら若き女性で、男の口に直接に落下させた体験を持つ人は、そうざらにいるものでは

ないと思う。その意味では、貴重な体験であり、あけみ女王の存在は希少価値といわねばならない。

肘掛椅子の間を置いて二つ並べ、器用にまたがった彼女は、下が畳であることなど少しも気にしないで、足下に寝そべって待っている私の顔に、それこそ豪雨のように浴びせたのである。

豪雨がやがて膏雨にかわったかと思うと、予想外のことが起こって私をあわてさせたのである。

豪雨なら曲線を描くけれど、膏雨は雨滴れになり、的確に標的に向かって命中させてくる彼女の技量も拔群であれば、逃げるすべもなく、雨滴は雲みぞれのような状態で落下してきたからであった。

それが序章であった。

ある程度の距離を置いて、直接に受けるのは、視覚的な恐怖と、外気に触れてはじめて感じるにおいに対する、潜在的な拒否反応から、それこそどうしようもない汚穢感にとりつかれ、急激にこみあげる嘔吐を必死におさえるのが精一杯であった。

『にょい』の正体

人工衛生が空を飛びまわる時代ですが、現

在の科学で、においは何物で、なぜにおうのか、というナゾは、まだぜんぜん解かれておりません。この世の中には約二百万の化合物があり、その五分の一の四十万にはそれぞれにおいがあるといわれています。においは確かに存在しているし、実際、人間は嗅ぎわけているのですが、それが何であるか、さっぱりわかっていません』

『粒子説』

焚火をしている時、風下にいると煙が鼻にはいりけむいものです。でも鼻をつまむと、ちっとも、けむくありませんし、においせん。香水がにおうのは、アルコールといっしょに香料が蒸発するからです。においは粒子であろうと考えるのが、一番無難で、現在、最も信じられている説です』

堅田道久『香水』（保育社カラーブック）より。

蘭子のおきも、襟子のおきも、香のおきも直接拝受だったが、あけみ女王のように、直接は直接でも、主体と客体の間に空間がある場合と、直接食道に肛門が直結する場合とは違ってくるわけである。

糞尿の成分は医学博士にまかせておいて、空間の存在は、芳香を放つ要素があり、それ

はまた異臭として感じても当然のことであった。

前者三人の女王の場合は、私が無味無臭と報告したのはこの理由である。

正確きわまりないあけみ女王の爆撃に、私は戦慄して逃げだし、ビールをのどに流し込んだのである。

吐きだすことは絶対に許されないことであつた。

「濡れにぞ」にもどろろ。

『——お前だったら、お皿にしたわたしのをナイフとフォークでたべるわね。』

と女王はH氏にいった。

——喜んでちょうだいします。女王さまとある。

私が女王の足下から逃げだしたところで、女王の排泄は終わったわけではないのである。

人間便器に逃げられては、当然、次の便器が用意されるべきであつた。

H氏が大皿を女王の下に置いたのである。従つてこの会話がとびだした理由である。

もっとも、お皿にもりつけるについて、マルキ・ド・サドの「ソドムの百二十日」にくわしくでているのは、蘭子のことを書いた初神酒拝受のところで、ピックアップした通りで

ある。（四十年四月号参照）それが頭にあつたことは否定出来ない。

『香水』からおいの話を抜萃したついでに『動物性香料』に就いて、紹介しておこう。

『香料は天然香料と合成香料の二つに分けられ、天然香料はさらに、動物性香料と植物性香料（植物の花、葉、材、樹皮、根、果皮、コケ、草など）があります。』

動物性香料には、インド、チベット産のジャコウシカから麝香（ムスク）、アフリカ産のジャコウネコ（靈猫または麝香猫）からとった靈猫香（シベット）、カナダ産のビーバークからとった海狸香（カストリウム）、マツコウクジラからとった竜涎香（アンバーgris）などがあります。

これらの動物性香料は、いわゆる糞臭ですが、天然の花のかおりの中に、ごく少量まぜますと、魅惑的なかおりとなります。』

『九月十二日——』

H氏と二人、あけみ女王と約束したホテルに直行した。朝の十時である』

これは四十四年一月号の「濡れにぞ」の一節である。

朝の十時が何を意味するのか、私はうすう

す気がついていてた。女王が朝の時間を指定した魂胆は、再び私を人間便器に使ってやろうとするに違いないなかつた。

H氏もそれと知って、朝食をとることすら忘れて、うきうきと女王の待つ御座所につけたというわけであつた。

『女王はトイレに立った。何しろ起きたばかりで朝の日課をまだしていなかつたらしい。』

——おいで。

とH氏をさしおいて私にいい、便器に寝るように命令するのである。

——たべさせてあげるよ』

『濡れにぞ』は次に、

『——とんでもない。』

とびあがつた。それはH氏の飲分です。』と続く。が、ここはすでに歪曲してある。

いくらH氏にたべさせて下さいと哀願したところで、女王が許してくれるはずはないのである。お前がたべるんだよ。

その点、女王は遊びとは思えないほど、冷酷にサディスチンぶりを発揮する。

ホテルのトイレは小さく、便器に顔を乗せて寝ることはかなり困難であつた。身体を無理にねじまげてかろうじて冷たいタイルに身体を横たえても、今度は女王の座が窮屈すぎ

て、いささかごきげんななめにおわしたというわけであつた。

結局、寢室に女王のトイレを準備することになった。

あけみ女王からは、夜具の上で神酒拝受をされたこともあり、これは、絶対こぼすことを許されない暗黙の命令なのである。これはきつい。浴室でも、トイレでも、こぼしてもかまわないところなら、それだけ気が楽である。浴びせられて、息ができなくなったら、こぼせばいいので、ある程度の自由がきく。

ところが、夜具の上では、息ができなくても飲まなければならぬ。おかげさだが、極限状態で神酒拝受がなされる場合が起こる必然性があるのである。

畳の上は、その中間にあるといえよう。そうやたらにこぼせないが、こぼしても、夜具と違って、ふけるし、いいわけもたつ。それだけ、まだ夜具の上より安心なわけである。

かくて、あけみ女王の命じるまま、人間便器が畳に用意されることになる。

私は眼をつむって口を開いた。五月の時と同じように、椅子こそなかったが、女王と便器との間には、ある程度の間隔があいていたからであつた。

見ているのがこわいのである。繰り返して書いているが、どうしてもこの恐怖感をぬぐい去ることができなかった。

排泄物に対する汚穢感、潜在的な拒否反応こみあげる嘔吐感、窒息という異常事態、不潔とか不浄とかではいいあらわせない頭の混乱、いろいろな原因が恐怖感に結びついてくる。

それをはじめから知っていて、あけみ女王の人間便器にされることを知っていて、それなのに、同じことが繰り返される。

私にとって、麻薬に違いない。ただ、濫用できる性質でないだけに、まだ客観的に見られるのかもしれない。

眼を閉じた私を、女王は笑っていたかもしれない。口ほどにもない。たべられるものならたべてごらん。

『あけみ女王の、心地良い音が響き、』

——こっちへおいで。

と、また御指名があつた。

——四つ這いになって。

——便器に顔をおだし。

いきなり頭を踏みつけられて、便器に顔を押し込まれた。痛い。

——ほら、お前の、好きなものがあるだろ

う。犬のように、ぴちゃぴちゃと、おやり』と『濡れにぞ』にあるのは、H氏の抜群の奉仕の休憩の間に行なわれたプレイである。

Kotにしる Umeにしる、あけみ女王はまったく自由自在であった。

『あけみ女王の神酒を拝受したのは勿論のことだが、拝受したのはそればかりではないのだ』

と暗にはのめかしておいたわけである。

告白は、書いたあとで猛烈な自己嫌悪に襲われることもあるし、逆に、あくまで自分の性癖を正当化する闘争本能に燃えたたせるときとある。

『人間一生誠にわづかの事なり云々』ということになる。そして、

『エジプトのナイル河が氾濫すると、ちょうど多島海の島じまのように、都市だけが水の上に姿をうかべた。ある年のこと、セソストリス王の子、ピュロスは、川が珍らしく水かさを増して十八ペキウスに上ったから、王は怒って槍をとると、その渦まく河水のなかに投げこんだ。すると、たちまち水の神の罰にあたって、盲になってしまった。』

十一年目にブト市から神託がとどいて、刑罰の終わる期日がきているが、もし自分の夫

とだけ交った、貞淑な女の尿で眼を洗うならば、ふたたび見えるようになるであろう、と告げた。王は、結局、ある女の尿で眼を洗い視覚をとり戻した。そして、その女を王妃にしたが、その記念に、二つのオベリスクを建て、太陽神へ奉納したといわれている。これは、おそらく尿中の腐敗菌が病菌を殺したのであろうか』

とか、

『室町時代に、永井流の金創治術に、腸や脳の出たとき赤子の糞を用いた。また、江戸時代になると、慶長十一年林道春は、長崎で李時珍の本草綱目をとて、幕府に献じたが、それには千金糞方などの書物とともに、人糞を薬用にすることが記されてあった。』

これらのふるい養生法は、明、宋、元の医学の輸入につれて伝えられ、江戸時代に至って、医学の伝来とともに近代医学の萌芽となったのであるが、それでもまだ大小便は用いられている』

を読んで、微笑しているのである。

以上、李家正文『廁まんだら』（雪華社）のうち『葉となった大小便』より。〓李家正文は、元朝日新聞出版局大阪編集部長。文学博士。

『フランスの若いボヘミアンによって作られた人形芝居の一つで、一八六二年五月上演されたロランとデュボアとの銀しるしというドラマは、ある候爵と夫人が乞食の垂れた野糞のそばを通る。候爵が、臭い、というとき、夫人は、よい匂いだわ、と悦ぶ。二人は、臭い臭くないで喧嘩をする。叩かれて夫人が卒倒する。驚いた候爵が気づけ薬のかわりに汚物を紙につかんでかがせる。蘇生した夫人は、この香が好きになって、煮て食べたいというので候爵は、閉口する。人の好い候爵は、夫人から、食べてごらんない、とすすめられる。これをこぼんだ候爵は、顔を糞まみれにさせられるというストーリーである。』

これは、一つの諷刺である。われわれは不浄をこぼむことができない。大小便をこぼむことによって、人生は破滅する。大小便がなく、薬はありえない。パリの奇人の一人であった岡本老人が、昭和十二年帰国して、まづ放った第一声は、人糞からは一種のオゾンのような高価な気が発生するということであった』

と同書にある。

『不浄を排斥することはない。不・浄・を・浄・として、活用することが人智であり、生命の道で

あろう』

これが同書の主題だと思われる。

『浄として』のところを『SEXとして』とおきかえてみれば、我が進む道となる。

李家正文の『廁史話』（二十四年六興出版社）を古本屋でみつけたときは驚いた。文学博士でもこんな奇妙なことを研究する人がいるのだという驚きである。そして、愉快になった。『廁史話』は（かつて奇クに書いたことがあるけれど）千余冊の蔵書を整理したとき、まとめて売り払ってしまった。

『廁まんだら』の発行は、三十六年六月である。なつかしくて新本で買い求めた。廁史話で読んだ記憶のあるのも交っているのは、折にふれて発表した原稿を一冊にまとめたからだろう。

『まことに、その石組みは幽韻にせまるものがあった、おそらくだれでも讃嘆の声を放たないではいられまいと思う。これは、単に石組みではなく、全く庭の延長として生きている。自然石の前石、踏んでまたぐための水。後に石が巧みに、しかもなんらの作為もなく配されている美しさ。

ここでは、極楽が便所のなかにあらわれて

いる。尿も人もない。ただ一如の清爽の境涯がある。放ることは甘美である。ふと、わたくしも尿がしてみたくなった。閉寂な佗びしい雅趣は、狭い露地の添景となって、雪隠は茶室において美化されたのである。

茶事は、一切を茶室で営むというのであるから、雪隠を忘れてはいなかった。しかし、なにしろ不浄のものだから、これを茶室にとり入れるについては、なみなみではなかったであろう。

砂は、盛ってないときもある。砂雪隠の使いかたは、触杖で砂を掃き、紙を幾枚も敷いて、さらにすこし砂をかける。用便ののち、触杖で砂をかける。そのとき紙の四隅を砂からわずかばかりあらわにしておくのである。これは、あとで砂とともに尿をとるとき目じるしにするのである』

『桂離宮の砂雪隠』より。

『当流茶と湯秘伝集の砂雪隠というのをみると、片流れの屋根で、片木戸を用い、中におよそ幅一尺、長さ二尺二寸ばかりあけて、両方に踏み石を設けて、穴に一寸ほど白い砂が入れている。

来客前に水をうち、掃除を仕舞いて、その後軽く砂を手桶に取り寄せ、山なりに盛り立

て、その上に触杖をさす、路の間も、かわき砂を立ておくべし、にわかに如何様の不浄あらんやもはかり難く、また夕立ちなどに水溜りを調うためなり、しかるに何時となく常任に砂を入れおき、また水を打ちかけてぬれ砂にする事大なる心違いなり、戸は水にて流したつ、とみえる』

とのことである。

『御東司は、有名な桂柵の後にある御化粧の間に隣りしている御手水間のつぎで、御湯殿とつながっている。

御東司の小便所は、板で箱形につくられ、スギの葉をつめたものらしい。

大便所は二畳敷きで、前に盆栽、香炉をおくしつらいで、板一枚を入れ、左の後に柵が設けられている。柵には予備のなら紙などがおいてあったのであろう。

たたみのまん中より右に矩形の穴が切っている。床は、人のたけより高く、溜め枅はない。石たたみの凹みに、樋宮を置いて、御用便のつど、宮を運び去って、洗い浄めたものと見える。

隣りの御手水の間は、床はタケ張り、なかには水桶を下から柱で支えてあって、その造作の巧みさは、殊のほかすばらしい』

『桂離宮の御東司』より。以上『廁の美』からの抜萃。

砂雪隠と東司の写真が掲載されている。桂離宮を拝観したことがないので、実物にはおめにかかっていない。

『御廁香秘聞』なる珍小説を書いたのは、た

だ、こういう美しい廁を書きたかったからである。ほかに意味はない。

美は、感じる人の胸にある。美しい廁からいろいろな空想が生まれるのである。

「直接」と「間接」だが、私もよくわからな

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変った体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変った蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお待ちいたします。

- 一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。
- 一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。
- 一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。
- 一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

いのである。

二月号のマニアのノート『私はこの味に跪く』かず・とやま先輩の『ボックス』に、『と、そこに先客が、しゃがんでいたのである！』

三十ちかい、ホステスとしては年増。ボツテリしたグラマラスな女性が、和服をまくりあげて、いまやそのさい中。

おまけに、大きいほうまでやってるんだから、さすがの私も毒気をぬかれた』

と、かなりショックなシーンが描かれている。

『せまいボックスには、香気がフンブン。

ふつうの人なら、ハナをつまんで逃げださだろうが、私には、そんな勿体ないことはできやしない』

彼女の使用中、とやま氏は電話をかけるわけだが、

『あくる朝、そしらぬ顔で、わざわざゆうべのボックスへ廻り道をしてもういちど、のぞいてみた。

ゆうべ、私がチラリとみた魅力の山は、やはり水分を失って、ちゃんと鎮座している』とある。とやま氏のノートは、かなりリアルである。私にはこうは書けない。そして、

とやま氏の文にもウソを感じる。

マニアのノートには、おみやげにして持ち帰った（自宅の途中までだが）記録が再三でてくるのである。

ボックスの話が真実なら、持ち帰る（どこかの深夜喫茶まで）のが当然であり、神田と指定してあるなら、あのあたりに、スナックがないはずはないのである。

そのまま手をこまねいて、何も手にしなかったのなら、マニアのノートがうそになる。そこだけ、お利口に書いたことになる。

この疑問をいだかせるのは、とやま先輩がそんなに消極的ではないと思うからである。ノートを拝見している範囲内の話であるが。

津川博氏だったら、正露丸をたしかめながら、ぬくもりのさめやらぬ彼女の憧れのおみやげを、夢中になって戴いたと書くだろう。

私なら、さしづめ、にらめっこして、そこに何があったか、食物の残物でも書くかもしれない。マサカ？

うやうやしく、「電話帖」を引きちぎる彼女にむかって、やわらかな紙（かたくても、電話帖よりましである）を差し出すか、おふきしましょうかと、じょうだんでもいうかもしれない。

『早速に相談をと思ったのだが、あいにく、店はキャンバンだし、周囲の喫茶店も、あかりを消している』

とノートにはある。これは、理由にならない。

とやま氏が、ただただ、手をこまねいているはずもなく、この話、何かウラがあるのではないかと思うのは、私ばかりだろうか。

マニアになると、読むのも、ヘンにうたぐるものなのである。

この場合、間接だが、それでも、当人がいれば、そのものにキスぐらいはできる。それは、当人がいるという、直接的な範疇に入るからだと思う。

コップでも洗面器でも、彼女がUrineをしてくれた場合、飲む人と、飲めない人がいる。

彼女に朝昼夜と瓶詰めにしてもらい、それをもって飲むという勇者がいるけれど、私には、とてもまねは出来ない。

彼女がいて、直接にコップにして手渡してくれても、彼女の手がはなれる瞬間、いやになって飲めないという、デリカシイなM派もいるのである。

コップとか洗面器とかを使えば女王と奴隷

の間に、容器という無関係な物体が存在するわけであり、それを受け入れることの出来る無神経（といったら誤解されるかもしれないが）派と、どうしても受け入れることの出来ない派がいるわけである。

はっきりいって、私は、女王から直接拝受しなければ、それがどんな型であるにせよ、飲みたくはない。

たべるとなると、それ以上の抵抗があるのは当然のことである。

「直接」と「間接」の間には、相当の差があると思うのである。

「間接」でも平気な人が、Scatology としては本物かもしれない。そのほうが、真実味は感じられる。理由はなくても、そのものが好きだからである。

「直接」派は、そこに、より以上の、空想的な、ロマンチックな、Masochism を感じるのである。

女王様から、いた・だ・く・と・い・う・……。

Ⅱ（終）Ⅱ

カット・春川ナミオ画

表紙の「ニキビ」に想う



わが『悪書』論

新宿町人

わが愛誌『奇譚クラブ』の表紙に、またまた目ざわりとしか言いようのないニキビ。

「NO! 成人向 18才未満のかたには販売できません」

と来た。にくらしい、グロオブみtainな手が、ノウと突きだされ、まさに悪書大勲章といった形だ。

本誌が進んで、まさか、かようなグロなカットを入れるわけはあるまい。またまたどこやらの圧力か。

これが前者とすれば、発行元の見識をうたがいたいし、後者によるものとしたら、またよけいなオセッカイをしたものだ、内心おだやかでないものを感じる。

気にしなければ、それでよいのかもしれないが、しかし、悪書のレッテルを、こう麗々しく貼られたのでは読者はうかばれない。

十八才以下の青少年に読ませたくないという親心は理解できないでもないが、こうしたよわい者イジメばかりしないで、もういちど考え直してほしいことがある。

○ 若者のエネルギーの合法的処理機関? だった赤線が、あえなくつぶれて、ちょうど十年になる。

その間、何か、このために社会が明るくなるような出来ごとがあっただろうか。

性病の根だやしができただろうか。

女性たちは、完全にサク取から解放されただろうか。

○ さんねんながら、ノウという答えしか出てこまい。

昨年いっぱい社会をさわがせた学生運動、ゲバ棒とか、三派ナントカ、吾々にはわけのわからない若者たちのあのさわぎ。

最高学府は、全面占拠され、教授連は師の恩どころか、教え子からこづきまわされ、あげくには『オマエ』よばわりされ、そして、土下座せんばかりに、教え子の暴力のまえに屈した。

ライフル魔、射殺魔は思うままに実力を使い、新宿のまちには、フーテンとかハブニングのご連中が、勝手に公園を占領して、芝居をオッパじめるさわぎ。

○ 天下は物情騒然といっても、いいすぎではないだろう。

○ ある人は、この革命前夜? の世相を評して『赤線をつぶしたりするから、言わないこ

『とではない。こんなに世の中が荒れるんだ』という。いささか、この論理には飛躍の感がなくもないが、一面もつととも、うなずけるものがある。

○
ある週刊誌の計算によれば、十年前の赤線の料金は、平均（時間で）五〇〇円。これを現在の貨幣価値に直しても、三〇〇〇円。これが現今、女性を相手に同様のことを求めるなら、軽く一〇〇〇〇円は飛ぶし、しかも赤線のごとくビジネスライクに目的を達するのは、ほとんど不可能にちかく、多くのプロ青年には高嶺の花。しかも、病氣や加えてヒモの恐怖があるので、あの情緒は求むべくもなく、つくづく独身男性は、身の不自由をなげかないわけにはゆかないようだ。

○
話題を変えよう。識者はいちど、東京神田の古書店街を歩いてみるとよい。

わが『奇譚クラブ』誌の、バックナンバーでもグラビア廃止前のナンバーは、三〇〇〇円から五〇〇〇円。（もちろん一冊が、だ）安いので二〇〇〇円。半年前のナンバーでも定価の倍額の七〇〇円でよく売れており、陳列品は、嚴重にポリ袋におさめられ、代金を払わなければ、目にする事ができない仕組み。ヒヤカシお断りというわけだ。

○
場末のストリップは、相変わらず、満員の盛況を見せ、トルコ風呂もまた、人気のたかいミス・トルコと会うためには一回一〇〇〇〇円内外の用意が必要だし、指名しても、先客を二人も三人も待たねば、目ざす女性に目にかかれぬ、とは、まったく不自由な世の中になった。

家をもちカアちゃんをもちたくとも、タタミ一まいが月二〇〇〇円。二人で暮すのに、五万円は最低ライン。それにたいして、若い人の収入は、三万五〇〇〇円が標準ときてはまったくユメもキボもなくなり、殺バツに流れるのは、止むをえない。しぜんのなりゆきというものだろう。

○
だからせめて、ウチにこもっておとなしく本でも読もうと、氣にいった本誌など手にとれば、さながら、国禁の書みたい、NO！ときたのでは、なんだか悪事に加担してるみたいで、砂をかむ思いをさせられる。

○
いったい、たのしみを、どこに求めよというのだろうか。

十八才未満の青少年に、読ませてはならぬという戒律は、もとよりわれわれも反対ではない。

しかし、この世の中は、十八才未満の人間だけで構成されているのではない。

一億の人間のなかの何パーセントかの十八才未満の人のために、オトナが小さくなって読みたい雑誌を手にするにも罪悪を感じなくてはならないとは、誰がきめたのか、片手おちも甚だしいではないか。

吾々が、十八才未満育成のために、そこまで小さくなっていなければならぬ義務がなぜあるのか。

しかし、オマジナイか、気休めみたいに、こんなカットを一コ放りこんで、そのタブウが守られ、目的は達せられたとでも思ってるのだろうか。

読みたい者は、十八才未満でもいかなるカベを越えてでも読みださう。

へたすれば『お売りできません』といわれて、よけい好奇心がつのり、万引などの不法行為にはしる者はないだろうか。

これはまったく難しい問題だが、クサイモノにフタするだけでは、解決することではない。いままさ、私ごときが指摘するまでもないだろう。

○
もういちど話題を変える。ひさしぶりに、一流新聞社が発行する週刊誌—S・M誌（S M ったってサドマゾにはカンケイない）の新

春第一号を手にして、私は一驚した。

いつのまに、変ぼうしたのだろうか。そのイエローセクションの小ばなしは、セックスをテーマとした、きわめて脱線したもので、いわゆるピンク誌も顔負けの露骨なものになっていた。

こうしなければ、売れないのか、あるいは報道機関の責任を考えて、この殺ばつな世代を、やわらげるために、わざと、品位を落とそうと、率先して範をたれたのか、編集者の意図は知らないが、これが、堂々と、駅の売店はもちろん、書店の店先にも、少年マンガ誌と肩を並べ、自由に、中、高校に通う十八才未満の青少年にも、買われている。もちろん、あの目ざわりな「ニキビ」つまり、NO！のマークは打たれてない。

同じ傾向のものを、本誌がとり上げるのはいけなくて、それと、甲乙つけがたい小ばなしが、一流新聞社の、大部数をほこる週刊誌なら、堂々とまかり通る。そのザルというのか、片手落ちのそのへんの理由が、私にはわからない。

○

昨43年12月に、東映の映画『69年につばん狽奇地帯』なるフィルムが、封切に先だって、深夜興行の形で公開された。

画面中に、おそらく邦画ではじめてであ

ろう、M男性が登場し、カレーライスを女性の素足で、踏んだのを喜々として食べたり、あげくには『便器願望』のナレーションいりで、女性のうがい水を、喜んで口にうける男性が、カラーでスクリーン一杯にクローズアップされた。

そのときの、観衆の反響は、興味深いものがあった。

まず一しゅん場内はシーンとし、そのつぎには、

『ヒャー、キタネエことするなあ』

と、声がきこえ、シーンの進行につれ、この一般人には、汚辱、狂気の沙汰としかうつらぬ筈の、飲尿のシーンが、共感をもって迎えられたことを、私はこの目でみた。

そう言えば、新春をはさんで、一流週刊誌の小説にも、S—Mシーンが続々登場し、いやが上にも、その趣味をそそる。

私には、これを、よいともわるいとも論評する資格はないのだが、いささかの私見は述べてもよろしかろう。

それは、時代のながれというべきか、営業政策というか、こうしたショッキングな作品が、マスコミを通じて、広められてるのは事実だ。それが大衆教育の柱になっているのだから。

私は、これを「人間性の復帰」とみる。

健全なるSMは、これを、不自然に抑圧すべきではなからう。このへんのところを、よく考えてもらいたい。

○

さて、私の展開した論は、再びもとにもどる。

ちかごろのテレビ、映画、雑誌（奇譚クラブを除いて）が、デカデカとS・Mを興味本位に扱うのは、野放しのシンナー遊びみたいなもので、賛成できない。

しかし、正しく、これを扱うものは、むやみに押しつぶさないで、その取捨選択を行ない、マスコミにたいして、扱いを慎重にするよう強力に働きかけると同時に、青少年にたいする読書指導は、単に御題目に止めず熱心に、しかも真剣にこれを行ない、先決点である、正しい区別眼を育てられるよう仕向けることだ。

本誌的な「悪書」を追うのに熱中するの余り一般マスコミの暴走におろそかであってはなるまい。

NO！の、あのマークが、国の識者の知識水準の低さを物語る、一種の言論弾圧と誤解され、内外の失笑を買うことのないよう、一考してほしいと、読者の立場より重ねて申し上げておく。



SMカメラ・ハント・イン・トーキョウ……………

ピンク映画のグラマースター

渚 マリ (井上幸子) の巻

ハレンチ・イレブン・ナイト

辻 村 隆

「忘れちゃったかなあ、辻村さん——。ほら、恰度一年ばかり前『性犯』って映画御覧になったでしょう。見ないとは言わせませんよ。」

ちゃんと「サロン楽我記」に書いてありましたからネ。辻村さんそっくり、まるでアンタをモデルにしたようなプロのSMカメラマンが登場して、若い女性カメラマンを縛るってストーリー。その縛られる子が井上幸子って娘で、あとにも先にも、たった一度きりピン

ク映画に井上幸子って、名が出た子なんです。が、ちょいとしたツテでハント出来そうなんです。思い切って上京しませんか？」

受話器をとると、挨拶もそこそこの賀山社長。の意気込んだ声。急に突然、喋られたって思い出す、いとまもない。しかとは思いつくせぬが、ピンクスターのハントとなると、千里の道も新幹線の三時間。勿論、断る理由なんて全然ないから、喜んで、

「ああ、参りますよ。いい具合に鬼六さんも若いオピンクさんのピチピチしたのを紹介すると仰有っていますしね。今年もまた正月早々、こいつあ春から縁起がよさそうですね」「あっさりOKですね。ついでに、もう一人——、妊娠六カ月のお姐ちゃん、これも東京土産にどうですかネ？」

「そのタネは何を隠そう社長さん、あんたが蒔いた？」

「とんでもない。ないないづくし。歴つきとした旦那ともチト言い難いが、恋人のタネを宿した初産でね。旦那に内緒の出産費稼ぎ。いずれくわしくは、委細面談とまいりましょう」

「善は急げで、さていつ出発しましょうか」
「妊娠六カ月の方が、日曜日でないと都合悪いので、十一日の土曜日から三日間、如何でしょうかね」

「いいでしょう。じゃあ、こちら手ぶらじや何だから、箕田さんに早急に連絡して、モデル志望の東京娘、すぐに住所をきいて、こちらから速達でも出して貰いましょう」

「嬉しいこと仰有るネ。まるでハントの花盛り。これだから、やめられない」

キヤッキヤツとけたたましく笑って、社長電話をきる。

正月気分の漸くぬけた八日の夜のこと――。

又ぞろ私の身边は遽かにあわただしくなってきた。新春早々の東京ハントが、まるで恒例のようになってしまった。思い起こす去年



の一月九日から十一日の三日間。辰巳典子を「陶酔をよぶ君の名は」と讃美し、翌日、谷なおみの素晴らしき女体に「真白き柔肌の甘き香り」を存分に吸って、ついで第三日目、賀山社長の愛人との獣の戯れに耽溺して、気が抜けたようになって帰阪してから、早くも丸一年が経過している。そして、この私。飽きもせず、相も変わらずカメラ・ハントに憂身をやつしているのであった。

電話を箕田氏の自宅に掛ける。しかじか、かくかくと連絡すると、快く東京のモデル志望女性の氏名を三名告げてくれる。若しこの三名、正直に現われたらどうなることかとも思ったが、まあ、何とか捌いてやるわいとタカをくって、すぐさま折返し賀山社長に彼女達の住所を告げる。

品川区小山四丁目のF子さん（二十三才）

目黒区上目黒八丁目のS子さん（十九才）

江戸川区南小岩七丁目のN子さん（年令不

明）

Fさんは十一月中旬、Sさんは九月上旬、Yさんは十二月上旬、それぞれ編集部宛に、志望の手紙を送ってきている。

鉄は熱いうちに打てというが、そろそろ、ほとぼりのさめかけたこの三人、果たして連絡ありや否やは上京しておたのしみ。来なくてもともと、来れば儲けものといった軽い気持で、賀山社長に一切を託す電話――。

社長、息を弾ませ、随喜の涙流さん許りの喜びようで、即刻唯今、三通の手紙を書きオフィスの社長専用電話に連絡するように、そこは暁出版の東京出張所と名乗り、辻村隆上京上京と大いにうたい上げて、氣勢をあげようという魂胆。井上幸子のひょうたんから駒が出て、次々拡がってゆくSMの夢に、乗る気も乗り気、これではどちらが本命だか分らなくなってきた。

SMに関するメモ帳開いて、緊縛映画『性犯』について調べると、あったあった、奇クの六八年、三月号の「楽我記」にチャンと書いてある。田宮恭介氏に誘われて一緒に観にいらっている。緊縛の方は風俗奇譚の協力になっていた。正直いって、井上幸子という無名に似たピンクスターのイメージは浮かんで来

なかった。眼のパッチリした素人くさい印象しかないが、緊縛はなかなか迫力があつたのを覚えている。

去年の辰巳典子、谷ナオミに比較して、大分オチル感じだが、会ってみなきゃ何とも言えない。それにプレイは虚名とは別ものであるし、実際にはどのような素晴らしい収獲が待ち受けているかも知れなかった。

少なくともその時限に於ては、井上幸子が現在、人気のある渚マリと同一人物であるということを、私は不勉強にも全然知らなかったのである。(社長も人が悪い。一言いってくればいいものを)

× × ×

大阪が雨で、関が原、米原辺りが雪で、東京は晴れていた。狭い日本、三時間走ると、かくも天候が違っているのが可笑しかった。ひかり24号で、十一時に出発して二時過ぎには東京駅の古い赤煉瓦の中央出口に立っている。

新幹線の沿線風景や車内の物珍しかったのも当初だけで、今はキョロキョロする気も起こらない。持参した戸川昌子の単行本を、半分も読み終らないうちに到着してしまった。見覚えのある社長の外車、工事中の駅前広場



の片隅に駐車する。それを目指して、急ぎ足で、コンチワと手を振った。近頃は八重洲口の方が繁華で混雑するそうで、この中央出口は、反って閑散らしい。

「三人の女性に、十二時から一時半までの間に電話するよう書いたのですが二人はダメ。一人だけ脈がありそうです。辻村さんと会って、スケジュールをきめた上、連絡しようと思ひましてね。彼女の方の電話番号聞いてお

きました」

「スケジュールは社長任せですよ。私は全然分らない。どうなってるの?」

「先ず箕田さんの口から説明しましょう。品川のF子さんは唯今、岐阜へ帰省中と、これはアパートの、大家らしい人からの丁寧な返事。目黒のS子さんは、何も言ってこないから、こちらから電話しました処、十一月に引越したそうです。いうまでもなくアパートですが現住所不明——。江戸川区のN子さんからはありました。夕方五時頃までなら、いつでもいいそうです。或いは夜のお勤めかも知れませんが。フォトよりもプレイしたいという口吻で、ハキハキした人でしたよ」

「どうもどうも……。そうなると何人になるかな。井上幸子、妊娠六カ月の婦人、N子嬢の三人に、鬼六氏が、花木かおりという十七才のピンクさんのグラマーを紹介するといっておられたが、こうなると時間の調整に弱りますねえ」

「ところが、鬼六さんに連絡しましたら生憎辻村さんを入れ違いに関西へロケ随行中で十五日にならないと帰ってこないそうです。ロケなんて言ってるが、或いはフーテンの虫がおきて、何処かの誰かさんとヨロシクやって



るんじゃないですか」

「かも知れませんが。それじゃ三人だ。兎も角、今日は井上幸子でしょう。日曜日に都合のいい妊娠六カ月は明日で、三日目にN子さんといきましょう。社長さん、仕事の方はいいの？」

「そのつもりで片付けておきましたよ。じゃあ、とりあえず、井上幸子に会いに行きましょう。彼女、唯今、池袋東映地下の、池袋名画座で正月興行の実演中なんです。どうも設定が、昨年の辰巳や谷とそっくりですね」「いや、本当——、私もそんな気がしたところ。だけど井上幸子の実演なんて、彼女は今でも人気あるの？ あんまりピンク映画で、名前を見ませんよ」

参考にして下さい」

用意周到な社長は、運転しながら、片手で一束の新聞とピンク映画情報を運転台の前から取り出した。

どぎつくて、けばけばしいピンク映画の広告。なる程あるある。

曰く『女体谷わたり』曰く『悪徳女校医』曰く『穴じかけ』と、露出たっぷりの題名映画の主演級である。

「彼女、いろいろの事情で、本名で『性犯』で主演したのですが、それが家に知れて、すぐ叱られたそうです。それで一本きりで、又もとの渚マリに逆戻りしたんですが、いつもこんな映画から足を洗いたいと、口癖のようにいっていながら、どんな借金が出来るの

か、ズルズルベツタリに次々に出演しているんですが、本人はとても純真ないい子なんですよ」

概念や予備知識程度、社長は話してくれるが、私にとって渚マリは未知に等しかった。しかし、現役で活躍中の、しかも肉体女優の第一人者などというレッテルを貼られている彼女に対し、私は急速に意慾を覚え始めていた。年令二十才、身長一六四センチ、体重五二キロという若いピチピチしたグラマー女優に、インポでもない限り、意慾を燃やすのは当然である。

ここはどこだ、あそこはこれこれといわれても、私にとっては知らない街許り。

名画座に近いモータープールに車を入れると、私と社長、オーバーも着ずにカメラ一挺ぶら下げて、冷たい巷を歩く。

目指す池袋名画座まで、百米そこそこ。ふと眼につく隣接の池袋東映の映画が『元禄女系図』。懐しい女優さん達の想い出のシーン——。監督石井輝男の名前に並んで、気恥かしくも、緊縛指導辻村隆の名が、大きく麗々しくポスターを飾っている。スチールを見る人々、入場する人々、昂奮気味で出てくる人々。それらの誰一人として、この映画の俄か



てネ。それと見にゆくつもりなんです」

「私も家内と大阪でみるつもりなんです」

「お互いに、一人で見るのは勿体ない」

「そのようですね」

時間表を見ると、もう終りに近い時間であった。今頃、木樵に扮した私が、数秒間、尾花ミキを竹藪で責めさいなんているシーンが

うつっているかも知れなかった。

東京の片隅のこんな巷で、私の名を発見して、奇妙な感傷が、刹那私の心をよぎった。

その感傷を振払うように、社長が私を地下の名画座へといざなった。

いい工合に映画をやっていた。勝新太郎のそっくりさんが、図々しく勝新そのままの扮装で『好色ぼうず四十八手斬り』と、ピンク映画に進出である。スチールを見れば見る程よく似ているので、あきれのを通り越してウーンと思わず唸った。兄貴の若山富三郎の極悪坊主。そっくりさんの好色坊主。とこう出てくると、勝新もたまったものじゃない。

そのうちに、辻村隆に似た名前で、緊縛指導なんて、ピンク映画のポスターに書かれないとは、保証出来ない。

入口の花輪に、渚マリさんへと麗々しく飾られてある。

実演の題名が『惨奇貞操帯』。セックスとは？ このドラマが答える堂々一時間という大作？ であった。

看板に全裸の前手縛りの女の絵が、抜けめなく描かれてある。

モギリ嬢に楽屋をきくと、横手のムード茶房を指さした。ドアを開くと茶房とは仮の姿——。荒れ果てた喫茶店のテーブルや椅子が赤暗い灯りの下に、寒々と残骸をとどめていた。

ウイスキーの空瓶、われた鏡、腐臭の漂うカウンターのほとり。突き当りの屈曲した奥が、映画館の臨時楽屋であった。そっと覗き込むと、数人の男女が、石油ストーブを囲んで、喋るでもなく、ぼんやり一かたまりになっていた。うら淋しい場末の俄か楽屋の、余りにも佻しい風景であった。

「井上さんいますか？」

「井上さん？」

「あッ、そうだ。渚マリちゃん——」

スターであり、緊縛指導の私が、人々を眺めていることに気付かないのだ。傍らでニヤリとホクソ笑む賀山社長一人が、私の存在を知っているのみであった。

「もう御覧になりましたか？」と彼。

「いや、残念ながら、まだなんです」

「どうです、池袋東映の支配人に会って、辻村隆だと名乗ったら……。タダで入れてくれますよ」

「そのかわり、舞台挨拶をやってくれなんていわれて、眼をシロクロさせるかも分りませんよ」

「私は是非一緒に見たいという女性がいます」

「マリちゃん、御面会だよ」

うっかり本名を言って、社長は独り苦笑していた。

黒のトックリセーターに縞のストラックスをはいた、大柄な断髪の娘が立上って、すかすようにこちらをみると、ゆっくりと歩んできた。無難な飾り気のない服装である。

「だあれ？」

「あいよ、でっかい賀山ちゃんデスよ。お久しぶり——」

「まあ、社長さん、驚いちゃった。どうしたの、ちっとも電話くれないじゃないの？」

渚マリのびっくりするような、大きな円らかな眸の、瞳孔は赤かった。しかも何故かトロリと空をみつめて濁っていた。

「おや、たびたび電話したよ。チーとも通じないじゃないか」

「そおう……」

「そうじゃないよ。しっかりしてくれよ」

「そうだ、アパート変っちゃった」

「それみる。だから今夜はじきじき来たのだよ。関西のお客さまつれてね」



「そうお……」

「おいおい、ラレってるのかい。変だぜ」

「変じゃないわ。たしかよ」

彼女は私に視線をやり、物懶げに笑って、ペコリとお辞儀をした。私は名刺を差出す。

辻村隆の氏名と電話番号のみのプレイ名刺。

チラリと一瞥して、彼女はくるりと筒にして、無心にもてあそんでいる。

「ハイミナールのんだのだね」

「それが生憎ないのよ。わたし、歯が痛くて、かわりのものなんだけど、眠いわ」

歯痛は嘘かも知れなかった。大きく黒い円らかな瞳が、薬理作用で濁っているのが、荒れ

た境遇を語っているようで痛ましかった。彼女は何か呟くような口調で、しきりに社長に向かつて喋るが、私にその意味は汲みとりかねた。うなづく社長は、やや、彼女の饒舌をもて余しているようであった。

「何言ってるの？」

そつと社長にきくと、

「それが、ちっとも分らない。合槌打ってるだけの。彼女ラレっていますよね。何か借金があつて、それがアパートの敷金らしいのですが、それでこの実演も借金のかたで、収入ゼロらしいですね。やりたくないけど、仕方ないからやってるんですってさ」

「ハントの方、こんな状態で大丈夫かしら」

「当ってみますよ」

社長は口調をかえた。

「じゃあ、ユキコちゃん。賀山ちゃんがおこづかい上げようか」

「ほしい、ほしいわ」

縫るような眼付きになった。その妖しい瞳はその刹那、真剣に光る。

「この人ね、関西から来たのだけど、ホラ今東映でやってる『元禄女系図』の指導やった人なんだ。あの映画みた？」

「みない。でも、それじゃ明日でも見るわ」

「ユキコちゃんに会いたくて来たんだよ。分る？」

「うん、ワカル。ワカルワ」

「いやだよ。しっかりしてくれよ」

「判ってるのよ。何するの？」

社長は縛る手真似をした。既に何度かプレイの交渉があったらしい様子であった。

「縛られるのネ」

「そうだよ」

「いいわ。ここの最後の実演が終るのが、九時五十分。お化粧落して十時十分。入口で待ってくれる？」

「分った。じゃあ、夕食は寿司でも差し入れておくよ。大丈夫だね」

「大丈夫。少し、はっきりしてきたもの」

「ダメだよ、余りノンじゃ。それで舞台つとまるの」

「舞台は舞台——。えーと、このオジサン、誰だっけな？」

「辻村さん——」

「あっ、そうそう、名刺もらったのネ。辻村さんね。どうぞよろしく」

いつしか私の名刺は、彼女の足許にポトリと落ち、無心の渚マリの靴でふみにじられていた。

「舞台みようかな」と社長。

「ダメダメ、みちゃ。いやよ、みないで」

「どんなストーリー？」

「忘れちゃった。ええと、何だっけな」

「忘れちゃったって。やってるんだろ？ あ

きれけえった娘だ」

「すぐ憶い出すわ」

「映画の間、次の実演まで何してるの？」

「ここに、こうしているのよ」

「何もしないで？」

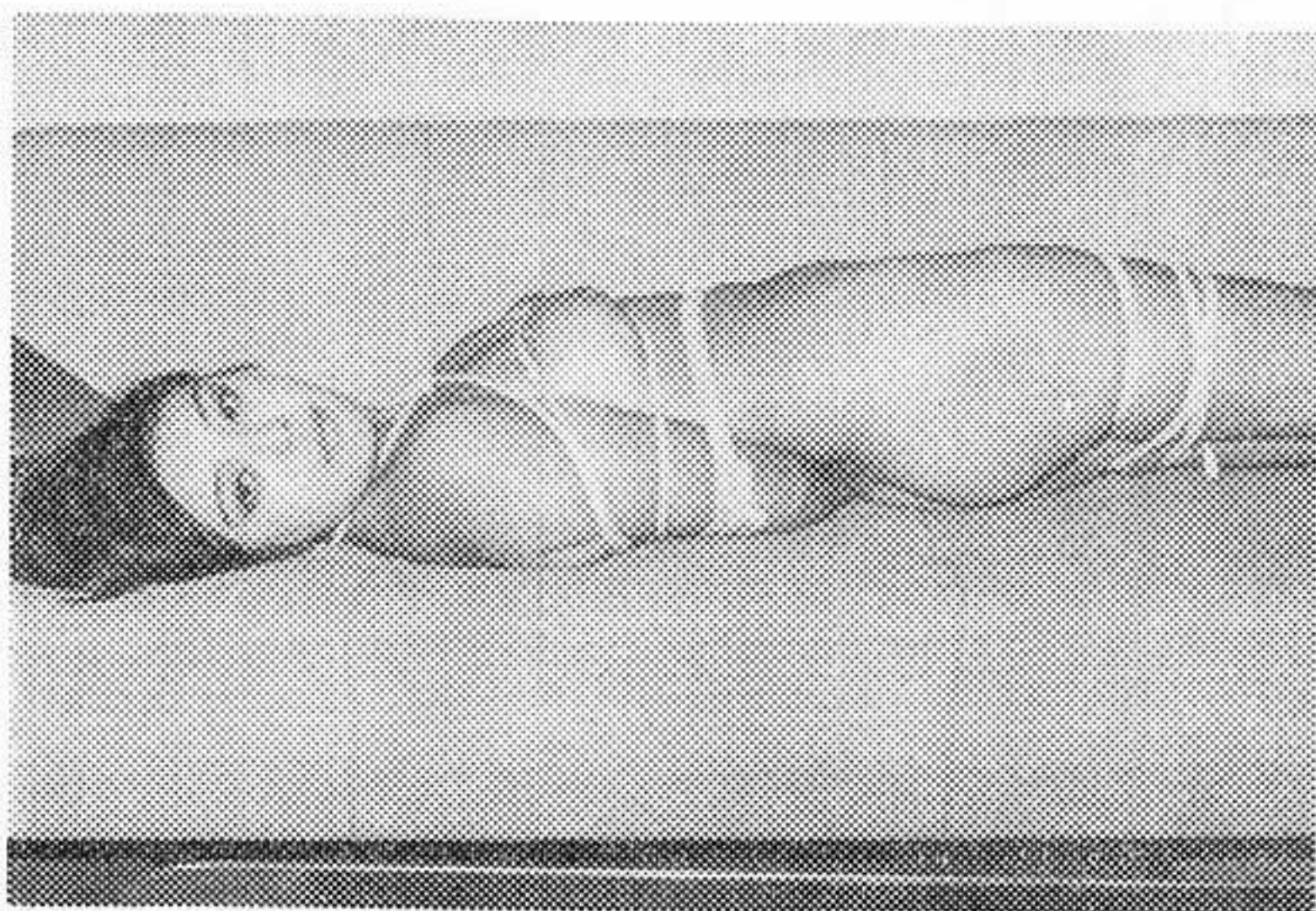
この陰鬱な、荒れ果てた茶房の廃屋の片隅で、この若い娘は、ハレンチな舞台の合間、何をするでもなく、ポツネンと膝を抱えていたのであろうか。空しくいたずらに青春を擦り減らしてゆく、この娘も、大都会に憧れた果ての、汚穢にまみれた末路を歩んでいるのではなからうか。そんなそぞろあわれな感傷が、私の心をよぎり過ぎた。

「だって、お金ないんですもの。何も出来やしないわ。舞台だってノーギャラだしさ」

「正月そうそう、いやに佗しいね。さあ、元氣を出して……。賀山ちゃんがウンと御馳走してやってさ。ゆっくり遊ぼうよ」

「何だか嬉しくなってきたわ」

「よしッ。もう一度、言ってごらん。何時に



何処で出会うか？」

賀山社長は念の為、彼女に復誦させた。還って来た応答は、思い掛けず正確であった。初めての渚マリとの会見は、遂に私に一言も開かしめなかった。

「じゃあネ」この一言を最初の最後にして、私は、あなぐらのような茶房を出て階段を昇

った。午後三時半の陽光は未だ地上を明るく照らしていた。あの陰湿な地下の楽屋が、まるで幽界の如く、別世界にすら思われるのであった。

「どうしましょう。午後十時までは随分と長いですね」

「御用事あれば、どうぞ。私は未知の街をぶらついてみますから」

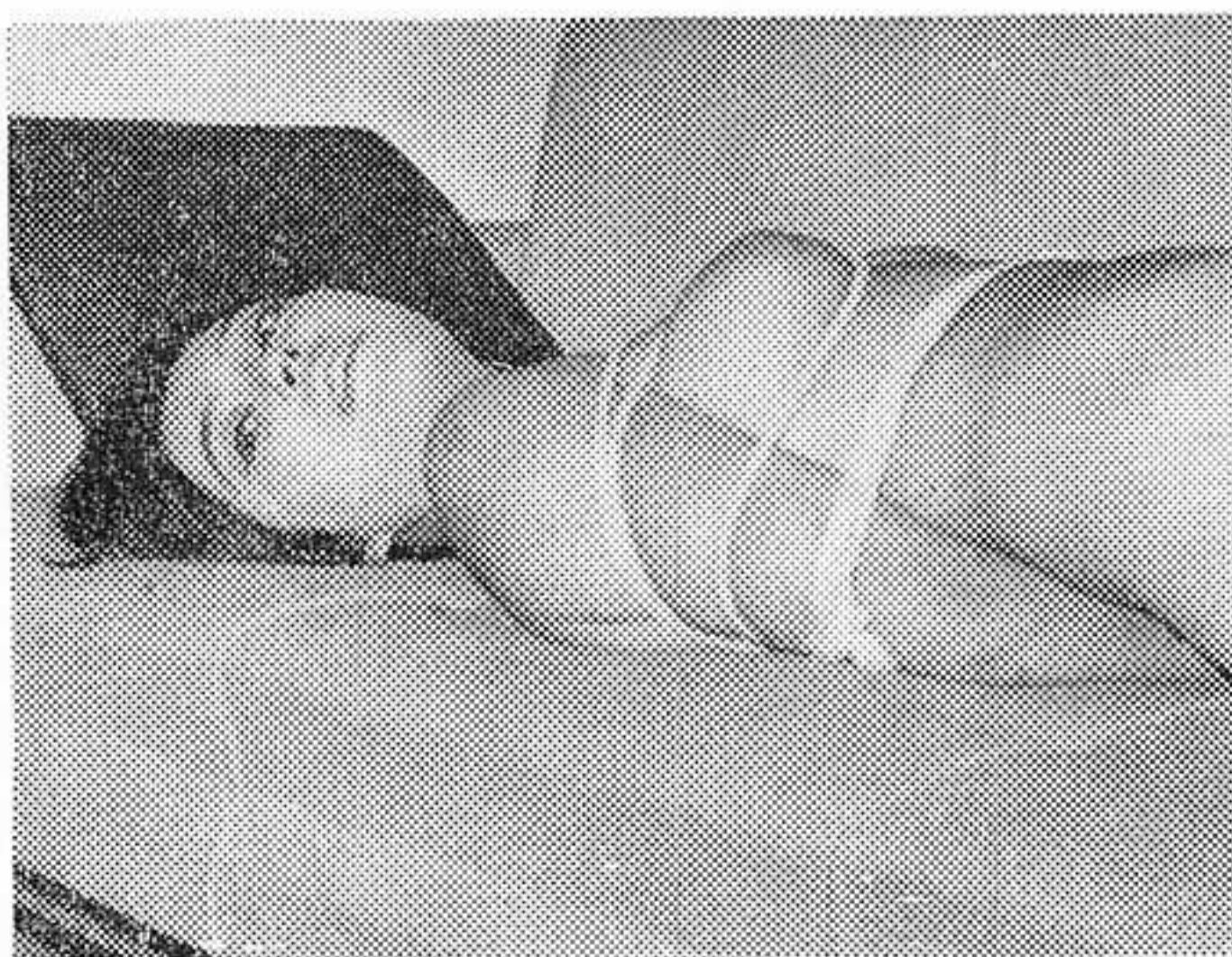
「そうですか。じゃあ、お言葉に甘えて、二時間許り——。実はこの西武デパートに少し用事がありましたね。五時半に、この名画座の前で会いましょう。迷子にならないで下さいよね」

「なあに、東京だって、大阪だって、ちょっとも変わりませんよ。大都会の喧噪はよく似たようなものです。じゃあ——」

× × ×

二時間という時間は中途半端である。渚マリの実演を見るには「処女の生理」の映画を見終って三時間足らずかかる。東映の映画も「新網走番外地」をやっていて、「元禄女系図」をみる時間がなかった。

別れて名画座の風景を数枚カメラに納め終ると、私はブラブラ、あてもなく歩き出す。かつては場末だった池袋も、西武デパートが



ターミナルになって、この一帯すごい発展ぶりだった。

つれづれに歩く私に街頭の宣伝マンが一枚のビラを手渡した。

（大人のおもちゃ？ 夜のお愉しみに——）

恐らくはセックス玩具だろう。時間つぶしにフト行く気になり、刷り込んである地図を頼りに三越を横目にみて、狭い隘路を辿る。バーの二階の狭い階段を上ると、取締りすれ

すれのセックス的なものが、十平方メートルばかりの部屋に、一杯に並べてある。オッパイパイプ、い貝のキーホルダー、般若の面の裏が女陰のキーホルダー、四十八手の財布、大声のレコード、浮世絵手帳、肥後ずいき、大型、小型バイブレーター各種、スポンジけし、缶詰パンティ、その他、思わせぶりなものがぎっしりである。ジロリと若い二人の店の者に視線を送られて、この臆病者、ひやかして去りもならず、どれもこれも飛びつきいい値段の、莫迦を覚悟で、大枚二千円を奮発して、大型の携帯バイブレーター一本買って早々に退出。このスーベニア、案外女房喜ばせる手段にもなるうかと独りにやついて、街角の喫茶店に落着いた。

五時半きっかり社長と再会。時間つぶしのサウナ風呂でサッパリし、蟹料理のビールがすきっ腹にぐんとしみ渡り、悪いくせの梯子酒——。いい年をしてコンパでガールハントの真似してみたり、社長馴染のクラブ・クル・ブーですっかり管を巻いて、関西弁丸出しで野暮な処を意気揚々と披露して、このお調子野郎、約束の時間もすっかり忘れ果てている有様で、社長にせき立てられてフラフラと、千鳥足踏みしめて、名画座の前まで来て



みれば、黒い円らな瞳が冴え渡って、シャッキリシャンとした渚マリが、私達を見掛けて大きく手を振っていた。

社長が車を取り出しにいったあと、私と渚マリの二人は、その方角へ、肩を並べて歩き出す。うた声喫茶にザ・タイガース出演とかで、若い娘の延々の列。十時になっても相変

らずで、出店のオバサンに五十円で南京豆を買って、独り紙袋ガサゴソいわせて、ポリポリやりながら、この不粋のハント老ボーイ、二十才のマリとええ気持で、アベック気取りで歩いていた。

「酔ってるのね」

「ああ、待つ間が長かってね。つい二、三軒のみ廻っちゃった。分るかい？」

「お酒くさいもの。大分、お強いの？」

「ああ、調子にのればネ。マリちゃん、のむの？」

「おつき合い程度なら……あらッ、足許が危ないわ。腕貸したげましょうか」

親切なこの娘、さっと私のかいなを抱えるようにして、嬉しくも組んでくれる。超デラックスな大きい瞳が、じっと私を見つめて、ニッと笑った。かいなが震えている。先刻の服装そのままの、黒のセーターに、グレンチエックのストラックスのさりげないスタイル。

「東映のお仕事していらっしたって本当？」

「ああ、妙な縁でね」

「私も東映でお仕事したことあるの。石井輝男ってカントクさん、御存知？」

「御存知どころか、そのカントクさん、オンリーだよ。二作関係したけど両方ともね。い

い人だよ」

「あらそう。私、あの方の映画で『温泉あんま芸者』に出演したのよ」

「へえ、そいつは知らなかった。それじゃ、いつか東映と一緒に仕事したいね。勿論、私の仕事は緊縛指導だけだが……」

「それ、縛ること？」

「そうだよ」

「へえーッ、妙な指導ってあるのね」

マリは改めてマジマジと私の顔をみる。凝視されると私は照れる。

「どんな人、縛ったの。東映で？」

「橘ますみ、賀川雪絵、尾花ミキ、その他、いろいろの有名無名の女優さんをね」

「縛るって愉しい？」

「愉しいときかれると返事に困るけど、悪い気はしないね。好きだから……」

「それでギャラもらえるの？」

「ああ」

「フフ、それじゃ趣味と実益ね」

「いつも、そう思ってますよ」

「私も『性犯』って映画で、随分ひどく縛られちゃった」

「見ましたよ、井上幸子さんでね」

「よく御存知ね。あの一作だけ別の名で出る

つもりだったのだけど、面倒くさくて本名で出ちゃったら、家から凄く叱られちゃった」

「どうしてピンクさんになったの？」

「いろいろとお仕事したけど、結局お金に困ると手っ取り早いネ。でも、もうやめるつもりよ」

「と、いって、いつまでも出てるそうじゃない？」

「私って意志が弱いね。次のお仕事、頼まれると、又フラフラッとその気になって出ちゃうんだけど、いつもそのあと自己嫌悪に陥るのよ。今度、借金返したら、本当にやめるつもりよ」

「何だか惜しいようだけど、無理に引き留めも出来ないしね。関西へ来ることあるの？」

「映画のお仕事じゃ余りないわ。都内か伊豆伊東あたりで、大抵パッパッと撮っちゃう。

でも若し行く機会があれば連絡しますわ。会って下さる？」

「ああ、光栄の至りですよ」

組んでいるかいなに心なしか力が籠った。

大柄なこの娘、小きざみに体を震わしていたのは、夜の寒さからであろうか。

「車早くこないかなあ。寒いわ、わたくし」

「ああ、私も寒くなってきた。少し酔いがさ

めたよ。早くこいこい、お車さんよ」

「わたし、このセーター一枚きり……下になにもないのよ」

「おや、驚いた。じゃあ、素肌にじかに？」

「ブラジャーもしていないの。舞台ですぐ脱ぐでしょう……だから、セーターとスラックス脱げば、パンティー一枚きりよ。驚いた？」



「正に驚き山椒の木。しかし嬉しいね。じゃあ、いざとなれば、手っ取り早いわけだ」

くくツと笑って、渚マリは、急に組んでいた、かいなを外した。支えを失って私はゆらゆらとゆらめく。その時、社長の車をやっのみつけた。

「おいおい、余り歩かないでくれよ。一方通行、右折禁止——。随分とあちこち探し廻りましたよ」

私は照れて頭を掻いた。嬉しそうにマリと手を組んで歩いている姿を見付けられていたかも知れなかった。彼女が急に腕を抜いたのは、そのためではなかっただろうか。

「いやあ、申し訳けなし」

酔顔でいうと、社長苦笑してドアを開く。

助手席に私、後部シートに渚マリが乗り込むと、

「マリちゃん、食事どこがいい？」

「そうね、例のフランス料理のカニコロッケにしようかな」

「じゃあ、そうしましょう。辻村さんもたべられるでしょ」

「ああ、いただきますよ」

大食禁物の、この糖尿病患者。己れの体調忘れて、既に鱈腹くって飲んでいるのに、未

だ喰うつもりでいるから情けない奴だ。

どこをどう走っているのか、さっぱり私の記憶にひっかからない。後部シートでひっそりと坐るマリの方に、もっぱら心が走る。

出来得ればマリと並んで坐りセーター一枚下はハダカの、あのムチムチした柔肌の感触にそっと、ふれてみたい助平心かられていた。脳裡にはマリの全裸のみずみずしい肢体が、あざやかに浮かび上ってくる。私は酔顔モーローとする頭の中で、そんなハレンチなことを考え、寝鎮まろうとするこの大都会の巷を走る車中で、いっそいきなり素ッ裸にひん剥いて、両手足を縛ってネチネチ虐めてやりたいような激情にかられていた。車内は暗い——。そうしたハレンチ行為も、恐らくは気付かれることもなく遂行出来そうな、大胆な幻覚に襲われるのであった。深い酔いが、私をしてそのような不敵な考えを抱かせたに違いなかった。

「辻村さん、これが新宿三越ですよ」

「ああ、そうですか——」

彼の声でハッと現実に戻る。黒々と建つビル横手に車を停めて、私達は下車すると、しばらく歩く。

「カフェー・ド・パリ」という店の名が眼に

入る。ボーイに案内されて、一段高いテーブルにつく。

何故ともなくマリは物憂げな瞳の色であった。フォートを撮ることを知っているの、舞台化粧そのままの顔が、ルームの薄暗い灯りの下で、くまの濃い陰翳をつくっていた。

いんぎんな物腰でボーイが注文をきいていたが、料理がやけに遅い。

「マリちゃん、舞台トチらなかつたかい？」

「ええ何とかネ」

「一寸、辻村さんと覗くつもりだったのだけど、あちこち飲み廻っていたら、とうとう時間なくなっちゃった」

「反ってその方がよかったわ。見れば失望するもの。私一寸トイレ……何だか、おかしいみたい」

マリが消えたあと、二人で又ぞろビールをくみ交す。最後の言葉が引掛かったが、それすらも薄っすら憶えている程度であった。

手洗いに立ったマリが戻ってくると、何か、社長に囁いていた。

「困ったなあ、急にそんなこと

言い出したりしてさ」

「だって本当ですもの。一週間以上も早いだよ」

「又の日といっても、辻村さん、そうそうは出てこれないんだよ。弱ったなあ」

私も、いつしか声のききとれるようになって二人の会話に、ふと異常を感じた。

「どうしたって？」

「ウン、急に唯今、アンネだってさ。いやになっちゃう。それに東宝の人とも会ったって——」

「困ったな。でもマリちゃんがよけりゃ、私はいいんだよ別段。撮れないこともないでしょう」





「だって、突然変異だから、何の準備もないんだって」

「買えばいいじゃない」

「もう今頃、起きちゃいないよ。勿論あちこち探すけどさ。マリちゃん、どうする」

「辻村さんにお気の毒だわ。探してみましようか。こんな体でよけりゃ私、構わない」

どうも私は生理づいている。昨年の辰巳典子しかり。数カ月前の川口有里子は、これ又正にプレイ開始の折のアンネ異変だった。今また、渚マリも、思いもかけぬ来潮で、心なしか顔色を赤らめていた。

私のデザートのコーヒーもそこそこに、ここを飛び出すと、既にイレブンナイトの静けさが、夜の東京の大通りをしっとりと包み込んでいた。

午前二時まで深夜営業のスーパーマーケットに車を止め、店内を物色したが生理用品やパンティは見当らなかった。青山近辺の、店内に灯のともるカラフルなショップを数軒、一店ごとに車をとめて、渚マリは飛降りると走って扉を叩いたが、どの店も閉じられていて徒労に終わった。辺りの暗さの中に、サイケ調の、美しい冒険を待つ花柄の下着が、まるで渚マリの徒労を嘲笑

するかのよう、五彩にウインドウで輝いていた。それは、闇夜にポツカリと咲いた夜光花のように鮮烈に私の眼を射た。肉体の線にくっきりとシルエットして、マリはその都度すごすごと引返して行く。支度のない彼女の肉体を蔽う一枚は正しく赤く濡れているに違

いなかった。

「このままじゃ、どうにもならないわ。どうしましょう」

切なげにマリは黒耀石の眸をまばたき、長い睫毛をかげらせて困惑した。

その時、一台のタクシーが、私達の前で停まると二人の客が降りた。間髪を入れずマリはタクシーに近づくと、何か訊ねているようであった。恐らく深夜営業のドラッグか下着ショップを聞いているに違いない。相手が若い女性とみてか、運ちゃんは親切に何か指さして教えているようであった。ペコンと頭を下げて戻ってくると、

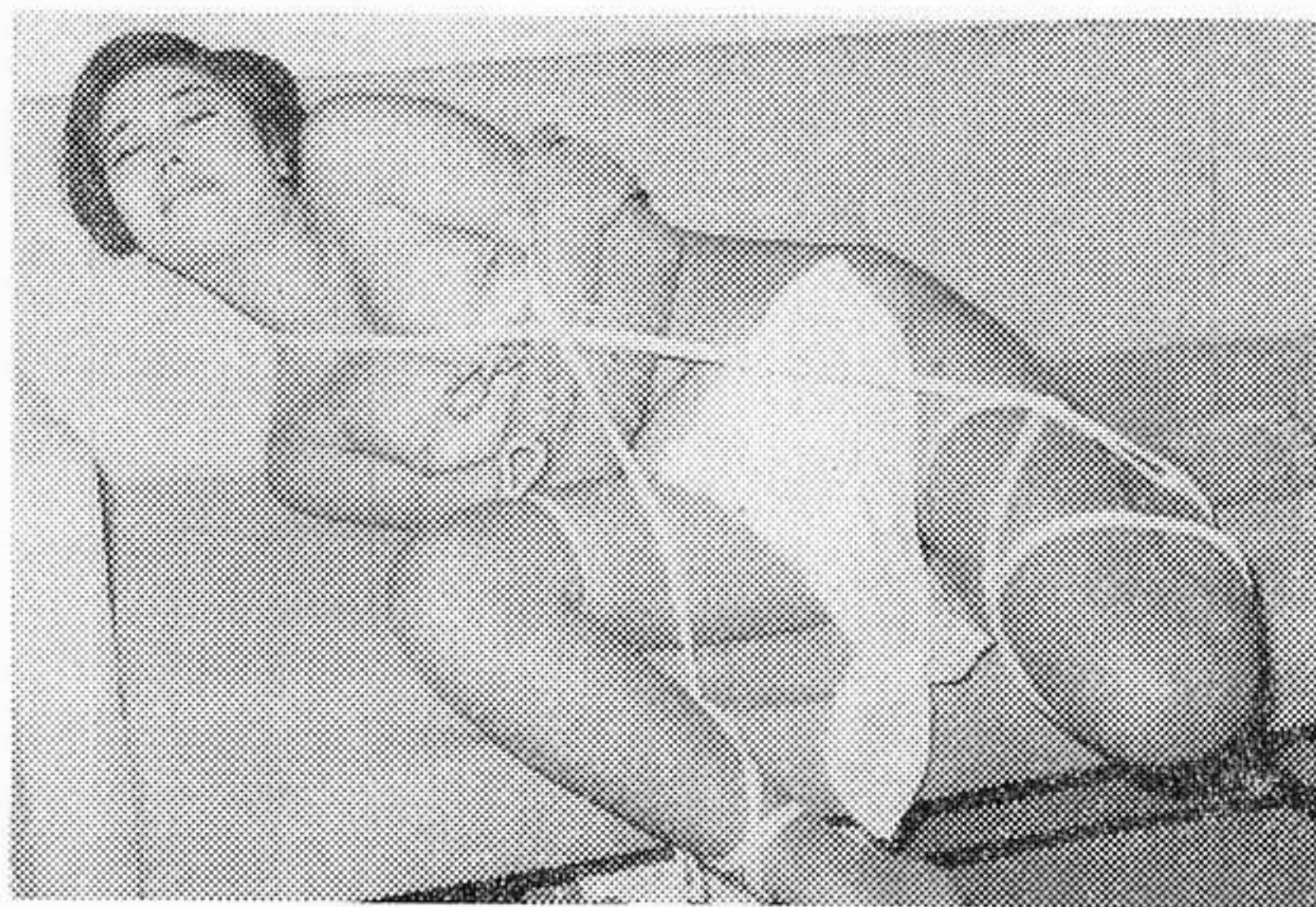
「青山一丁目の交差点近くの薬局がおそくまで開いているそうよ」

「なあーんだ。じゃあバタバタ探すこともなかった。コーポの近くじゃないの」

社長は無駄な浪費の時間の経過に撫然として、アクセルを踏んだ。私の酔いは急速にさめつつあった。この辺り、既に昨年で馴染みの、社長の隠れ家のコーポ附近でどこか見覚えがある。交差点の角に立つ、サンドリアのネオンが一年振りに懐しかった。

「ああ、よかった。ホッとしたわ」

大きな紙袋を抱えて、マリは真実ホッとし



た顔付きで、のり込んで来た。微妙な女の生理の急変が、当のマリは勿論、私や社長の秘かな戯れの、プレイの意図を大幅に狂わせてしまった。強烈な、プレイに対するブレーキが、こうして否応なくマリの深奥にかけられたのである。索漠とした顔付きで、社長は私

の耳許に口を寄せた。

「期待した強烈な露出プレイは無理でしょう。私だけなら止めちゃうんですが、折角の辻村さんの御上京なれば、己むを得んでしよう。まあ、やれるだけやりましょうや」

トーキョウ・イレブン・ナイトの静けさを縫って、車はコーポに横付けになる。

夜を徹してのハレンチなプレイの華が、今正に開こうとしていた。

× × ×

コーポの扉を開くと、フロアの洋風の間がすぐ眼前にある。バス、トイレ、キッチン、応接セット、書架が、この一室に同居していた。襖を開くと六畳の和室にベッド兼用のソファがおかれてあって、ホームゴタツがいつでも暖まれるようになっていた。

渚マリは、そそくさとホームゴタツに足を延ばした。社長がガス風呂に火をつける。ガスストーブに火をつけて、襖を閉じると、やがて仄々とした温か味が部屋に流れ始めた。

「さきにバスに入る？」

「ウウン、いいわ。三十分ぐらい、かかるんでしょう。わたし、裸なれているから案外、平気よ。少し体あたたまったなら、早いところやっちゃいましょう」

笑うと八重歯が、あどけなく白く光った。

向かい合ってホームゴタツに足を伸ばすと、マリの爪先に触れる。彼女はすっかり正気に戻っていた。その何よりの証拠は、大きな黒い瞳が美しく澄んでいることで分った。彼女の実演を見損なっているし、渚マリに対する市場知識も乏しいので、さして話題もない。

今更緊縛に誘導する必要もない娘だけに、今は唯、こうして暫くの時間を稼ぐしか仕方なかった。社長がウイスキーとグラス二コを持って、大きい体を折り曲げてホームゴタツに入ってくると、黙ってグラスに酒をついだ。

社長とマリとのなれそめなど訊きただしたかったが、いずれは辰巳典子とよく似たルートであることを察知していたので、彼女の前では敢てきかないでいた。しかし社長と彼女の或る程度の親しさは、そこに既にプレイの交渉のあったことを自から物語っていた。本人を眼の前に於て、そうしたハントの手練手管は、社長としても話したくなかったに違いない。私は、そうした過去には一切、触れなかった。紛れもなく、現在、渚マリの井上幸子が、私の眼前に、こうしてプレイの開始を待っていたからである。それでいいではないか――。

「辻村さんて、何をする方なの？」

渚マリは唐突に社長にたずねた。彼女の持ち続けていた疑問であろうか。

「ああ、この先生は縛るかたですよ」

「だってさ、そんなお仕事ってあるの？」

「あるから東映からお呼びなんですよ」

社長は、からかい気味にとぼけている。

「分らないわ、何が何だかサッパリ……」

渚マリは大きい眼をクリクリ激しく動かして、私に問いかける顔になった。

「去年も恰度今頃、ここで辰巳典子と谷ナオミを縛ったんだよ、このセンセイは——」

「本当？」

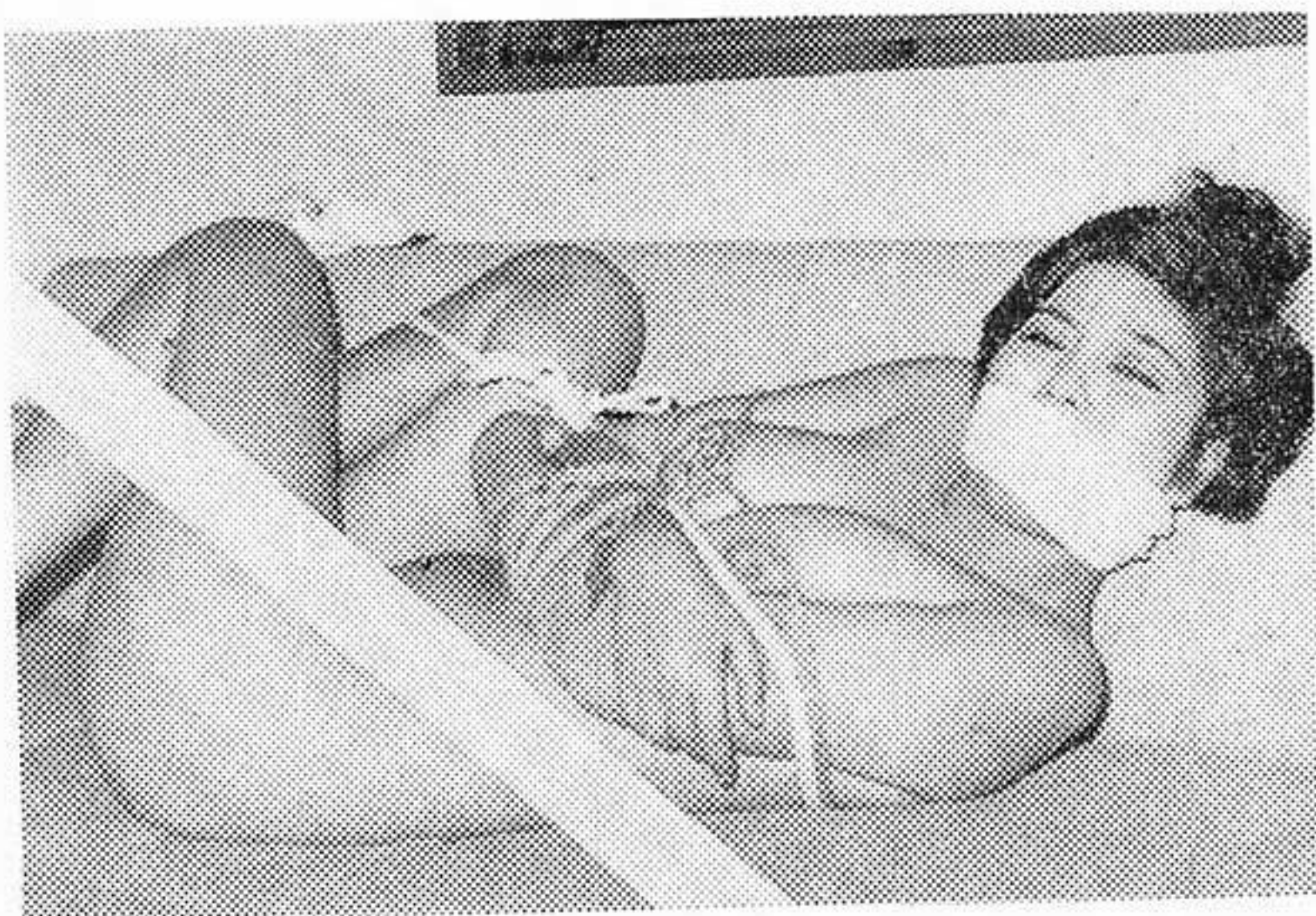
「ああ本当だとも。何ならその時のフォト見せてあげようか」

「ええ、みせてえ」

社長は押入れを開くとガサゴソいわせて、フォトを選んでいる様子であったが、やがて数十枚をドサリと台上におく。興深げにマリはその一枚、一枚を見てゆく。それには辰巳や谷を責める私の姿が、ありありとうつっていた。

チラリと見やって、社長は腰を上げる。

「じゃあ、そろそろ始めようか。もう午前零時に近いよ」



「ええ——すぐ脱ぐの？」

フォトを置くと、彼女ははずみをつけて立上った。

「そういこう。手っとり早くていいや。辻村さん、ロープありますか？」

「いえ私は一本も持って来ちゃいませんよ。社長さん、準備してくれると思った」

「そりゃ困った。白い細いロープが三本と、いただいたダンダラロープ一本きりしかありませんよ」

「仕方ありません。それでいいでしょう。だって東京までわざわざロープ持ってくるなんてことも考えていなかったから」

「いえ、沢山あるんですよ。ところがその縄のバッグ、うっかり会社の方へ置いてきちまったんですよ。今更取りに行くのも大変だから、これだけで我慢して下さいよ」

私達のやりとりをききながら、マリはサッとストラックスを脱いだ。成程下は忽ちパンティ一枚で、豊かな肉づきの太腿が白々と惜しげもなく現われる。

「一、二枚彼女とのスナップ撮って下さい」

社長に頼んで私はストロボ装填のカメラを渡す。私と並んでソファに坐ると、マリはごく自然に凭れかかってきて肩をよせてきた。やんわりと背後から腕を回すと、顎の辺りに黒髪が揺れる。抱きしめた恰好にストロボが光った。顔を仰向けさせて口を寄せて行くと瞳がすっと閉じて、私の唇を待つように心持ち突き出していた。軽いベーズを送る瞬間、再び閃光が走る。数枚、私はいいい気持になつて、下半身を剥き出しにした渚マリとのスナ



ップに身を委ねていた。

身をひくと、彼女は勢よく、セーターをくるくる巻き上げて、スッポリと首から抜きとる。確かに彼女自身いったように、セーター一枚下は、肌を蔽うもの何一つない見事な裸身が、じかに眩しく私の眼を射た。

形よい汚れを知らぬ豊満な乳房は、薄桃色にみずみずしく蕾の尖端をはちきらせ、堂々

たるグラマーの白磁の裸身が、私を圧倒するように輝いていた。整った目鼻立ちに、澆刺とした精気をみなぎらせて、マリはそのエキゾチックな風貌に淡いかげりをみせて、ニンジのように微笑んでいた。

長いまつ毛がまばたきとともにしななとゆらめき、美しく稜線を描いた鼻筋から口許にかけて、育ちのよさの、何か犯しがたい気品が溢れていた。娘としての、すべてが熟れた、このボリウムに、私はしばし恍惚の思いで見とれているばかりであった。気をとりなおしたように私は一本の縄をとり上げるとソファにあどけない表情で坐るマリに近づいていった。社長は黙って佇立した俣、私の行動を無言で直視しているばかりであった。

「縛りますよ、いいですね」

声をかけると黙ってうなずき、笑顔をやさず、マリは心得て両手を背後に回した。

微かな羞じらいの翳りが、マリの頬をかすめたが、観念したように裸身を私にゆだねていた。縛り易い位置に、体を少し前方に抱いて移動させ、しばし緊縛の手順を考えていた私は、縄を二つに折ると、その中心で首縄の輪をつくりはめ込んで絞った。ノーマルでオーソドックスな縛りの定石である。色灰かな

突起を頂点にした丸い双つのふくらみの谷間で、ロープを交錯させて、背で深々と組んだ両腕を手首で締めて、余白の縄を体にまきつけて、一本ロープの縛りを手早く終った。黒い大きな瞳が無意識のうちにかげって、八重歯がかくれ、マリは微かに若痛の表情を泛かべていた。

それをとらえて、私のカメラは非情にマリの肢態をフィルムに納めてゆく。

「痛い？」

悲痛な表情に、そう聞くと、パッと笑顔が戻って、

「ウウン、ちっとも……大丈夫よ」

マリは鮮かに笑った。知らず知らず身についた被虐の表情が、こんな時にもスターのなりわいの日々の性癖で、忽ち表情を変えていたのであった。安心して私は更に一本のロープを握りしめると近づく。思い切って下腹部をおおいかくしていた最後の一枚を剥ぐように足許へと脱がして行く。マリの知覚神経は瞬間ハッとこわばり、太腿から流れる軽い律動が、私の両手に伝わって来た。今、彼女の糸纏わぬ全貌が、私の眼前にあった。喘ぐようなマリの呼吸に微かな羞らいが籠っていた。私の眼はある一点を凝視する。真白いふ

くよかな腹部に烙印された傷痕——。その視線を感じてマリは唇を開いた。

「盲腸手術したんです。眼障りでしょう？」

私は、あわてて首を振った。しかし彼女の言葉は、私の思考の的を射ていた。この豊かなしみひとつない腹部に、オペラのケロイド痕は、何か尊いものを傷つけられた思いであった。その考えを振り払うようにして、縄を胸下の横縄に通して、垂直に股間に伸ばす。

深々と喰い入らせて太腿に巻きつけ、ゆるまぬよう一旦結んで、余白で両腿と一緒に締め上げて結ぶ。

マリの下腹部は敏感に反応し、よじれて揺れた。いやッといった羞恥が彼女の表情を切なく憂色にかえていった。私の緊縛の行程を撮っていた社長が、やおら近づく、この大柄な娘を抱き上げて、高い位置からはずみをつけてドサリと仰向けに落とした。ギギとソファがきしんで、女体が上下に反復し、マリは呀々と眉をしかめた。

足首から先が、まるで別のいきものであるかのように、ソファに爪先を立ててめり込んでいった。ポカリと隆起したおっぱいが、ブルンブルンと震えている。

マリは首を振ると、私を凝っとみつめた。

燃える瞳が刹那、猫の眼のように青白く光ってみえた。その眼に射すくめられたように、私は視線をそらす。フツと柔和がかえって、

「痛いわあ、社長さーん」

と甘えた口吻でマリは非難した。あらゆる思考を忘却して、魔女に魅入られたように、私はマリの大きな瞳に飽きもせずみつめていた。若い肉体以上に、マリの眼は官能的に、妖しくキラキラと輝いていたからである。

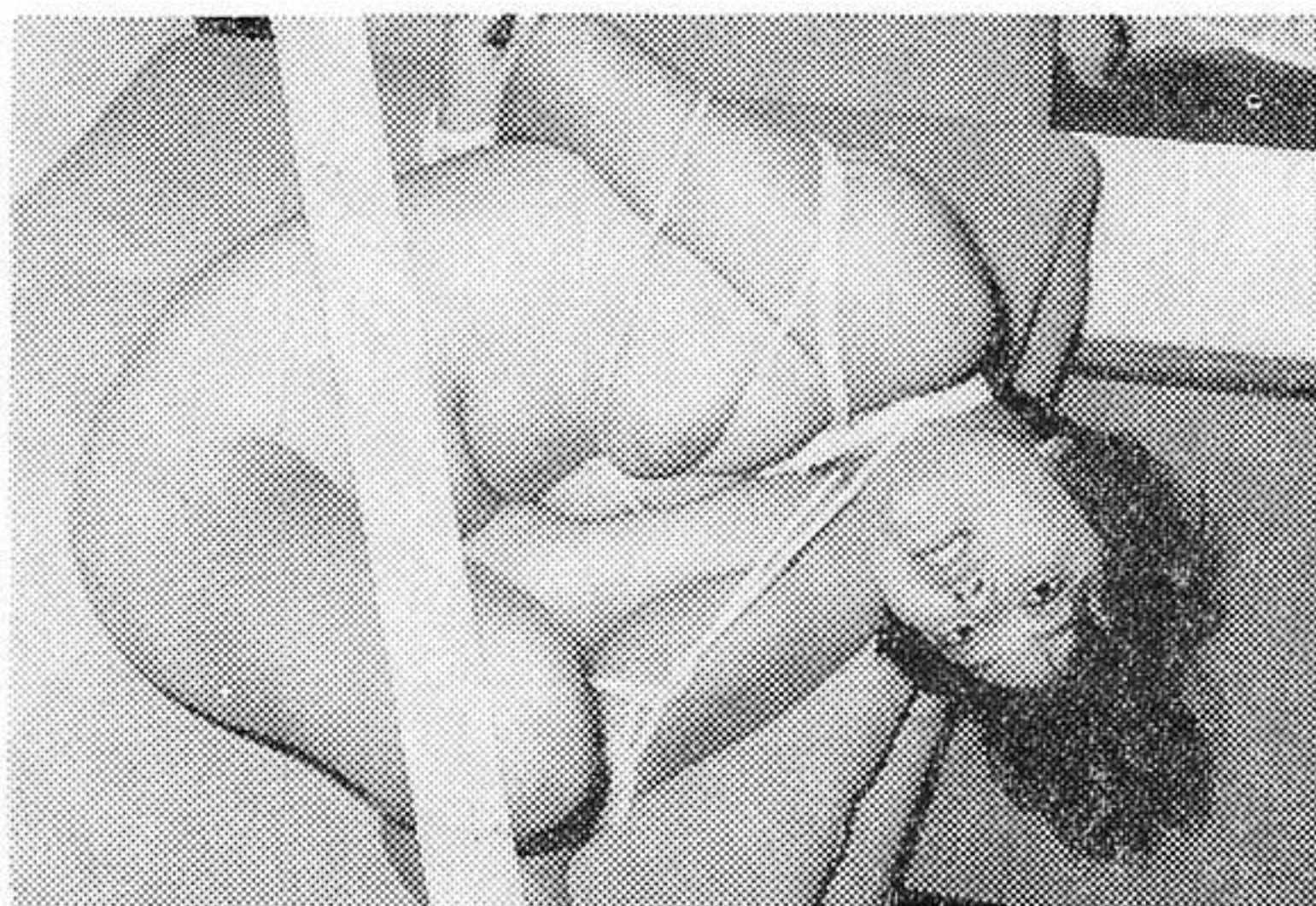
「さあ、そろそろ賀山ちゃんが虐めてあげましょうね」

優しい口吻の底に、嗜虐の血をたぎらせて社長はソファに近づいて来た。いつしか、ズボン脱いで、下着姿になっている。そういえば、しめ切った部屋の温度は、かなり上昇し、背広姿のままの私のひたいがじっとり汗ばんでいた。

「フフ、いやッ、くすぐったい。いや、いやよして——」

マリは撥ぐったように八重歯をキラキラ覗かせて笑った。社長の靴下の足が奇妙な律動を続けていたからである。

「本当はこれを使って、喜ばせてあげるのだけど、今夜はアンネちゃんダメね。残念だろ、マリ——」



社長は片手に握った小型バイブレーターをマリの頭上でチラチラ覗かせた。

「でも、ちよいと、この縄に挟んであげましょう」

ビビーンと微かな電動音が響き始めると、そのバイブを、胸下から腹へ垂直に降ろした縄の合間へ挟み込んで下降させた。

マリが、あーッと悲鳴をあげるのにも容赦せず、官能に通ずる痴戯に、社長は耽っていた。快楽と痒痛の交錯した奇妙な懊悩が、マリの容貌を崩し、いやよ、いやよと叫びながらも、マリの片頬には、妖しい媚笑が浮かんでいた。

その鮮烈な感覚に身悶えるマリの裸身を、ぐいぐい押しつけるように社長の足が体重をかけて踏みつける。微かな汚臭のただようソックスが、ふくよかなマリの頬を唇すれすれに踏みにじった時、私は瞬間、美の冒瀆を感じた。笑みをたやさぬ濡れて燃ゆる瞳に、私は彼女の被虐の想念をありありと見た。

唇許近く、押しつけられたソックスを、マリはいきなり八重歯でギュッと噛んだ。

「あッ、痛てえ！」

驚いて社長は足を降ろす。

「フフフ、もっと噛んだげましょうか」

めらめらと妖笑を泛かべて、このしなやかな牝獣は清冽な声を立てた。

その時、けたたましい電話のベル——。何故ともなくハツとする。

社長が受話器をとった。

「えっ、渚マリ？ ああ、おりますよ。一寸待って下さい。かわりますから」



受話器の口を押えて、

「マリちゃん、電話。だけど、どうしてここに
いること知ってるの？」

「さっき、お食事した時、東宝へ連絡しておいたのよ。少し遅くなるかも知れないからって……」

「よく電話番号、覚えていやがる。危ねえ、

危ねえ」

受話器を置くと、彼は唇に人差し指を当ててシーツという素振りです、近づいてきた。

「早く縄ときましよう、兎も角——」

私も慌てて、縄をときにかかった。ものの一分もかからない。マリはさっと牝鹿のように跳躍すると、素ッ裸のまま受話器にしがみついた。相手が喧燥のバーあたりからでもかけているのか、よくきこえぬらしく、右手で耳を押えて、何度もきき直している。二の腕や手首の縄痕がありありと深く、眼に泌みわたる。

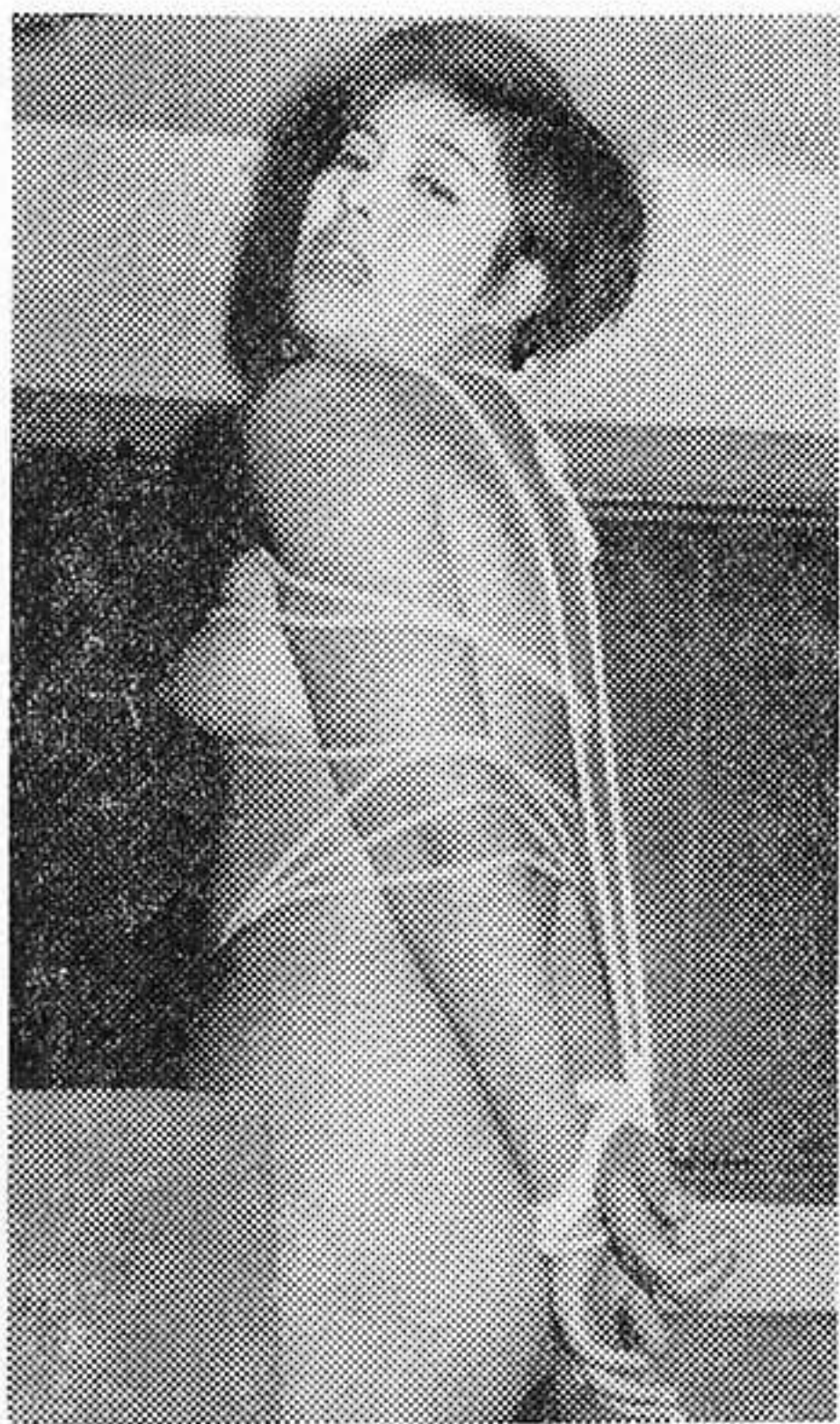
「いやだなあ。ちっとも、ききとれやしないわ。どうしたのかしら——モシモシ……モシモシ……」

マリは肩をすくめて、両のかいまで胸をかかえるようにして口をとがらせた。

椅子をあてがってやり、私のオーバーを裸身にきせかけてやると、ニッコリして黙って頭を下げ、素直に腰を降ろして、しなやかな脚を巧みに組む。相変らず片耳を押えたまま、何か仕事の打ち合せをしている。

「長い電話だね。仕方ない、辻村さん、一服しましうや」

私もうなずいて、ソファに腰を落した。



朗らかな笑い声を立てて、マリはやっと電話をきった。

「バカに嬉しそうじゃないか——」

「ウン、お仕事きまったの。今度は少し面白そうよ」

「もうやらないといっていたくせに」

「いい仕事ならいつだってやるわ。いやなお仕事はしないっていったのよ」

「当たり前だ、バカ」

マリは、私のオーバーをハンガーにかけると、ニコニコして裸身の胸を両手でかかえて佇立していた。

「少し寒いだろ。バスに入ってこいよ」

「いいの？」

「ああ、いいとも。辻村さんと二人で、虐め方を研究しているよ」

「ごめんね、途中で電話をかけたなりして。じゃあ、そうするわ」

マリは生理用品の入った紙袋を手にとるとバスに消えた。屈託のないサバサバした態度が、むしろ快かった。

「こん畜生、アンネがいやだね」

まったくいまいまして、社長はつぶやいた。

× × ×

湯上りの、未だ濡れそぼった体をいきなり引き込むようにして、社長は手にしたダンダラ縄で、マリを前手縛りにして胸の隆起で、

体にぐいと押しつけて、縛り上げた。ドンと体を押すと、マリはよろけてソファにドタリと坐り込む。

「どうするの？」

「しばらく、そうしているんだよ」

「せっかちなえ」

「せっかちなもんか。マリの裸をゆっくりと観察するんだから」

「意地悪——、コタツに入れて」

「ダメだ。突然アンネになったバツだよ」

フォンとあきらめて、マリはややふてくされたようにソファにじっと凭れて、私達をみていた。

「辻村さん、この子はとっても素直ない子なんです。この賀山ちゃんのいうことなら何だってきくんです。そうだな、マリ」

「無理矢理、きかされてるのかわ」

「でも、きいてきたね、今迄？」

「まあネ」

「だろう……ところで、辻村さん。少し眠くなりましたね。一時間許り横になってねましようや」

返事に窮していると、マリが激しくかぶりを振る。

「イヤイヤ、ねちゃいやよ」

「じゃあ、ねませんよ。それじゃ辻村さん、ねむけがましに、ぐるりとこの辺り一周しましょうか。もうかれこれ午前一時に近いから

辺りに幸い人影もなし、裸のマリをつれて散歩しませんか？」

「いやッ、マリ泣いちゃう」

「泣かれると困るね。それじゃ、こうしましょう。退屈のぎにカミソリで、一丁ゾリゾ

リッとやりましょうか。マリ、大分伸びたからね」

「それもいいやッ」

マリは泣きべそをかいている。賀山社長の言葉の嗜虐に、すっかり奔弄されていた。

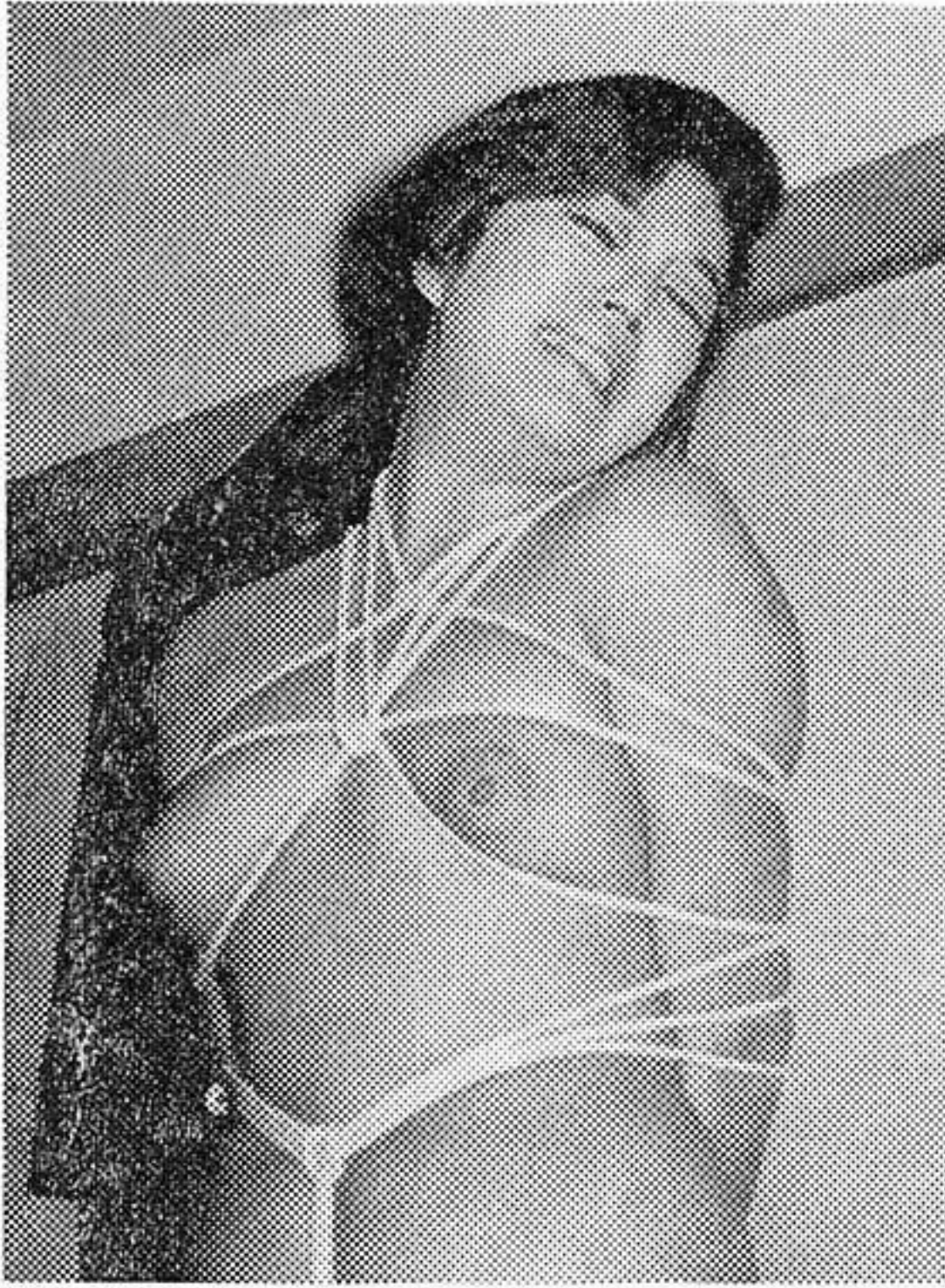
彼はマリに気づかれぬよう、チラリと片眼をつぶってほくそ笑んだ。

「じゃあ、マリは何がいいんだい？」

「そのほかのことなら——」

「そのほかのことね。ああ、それじゃオシッコさせてやろう」

「それもいいやッ」



「仕方ないな。うん、いいことがある。マリのアンネのタンポンとり出して、口へ押し込んで猿轡してやろう。いい味だぞ」

「いやッ、いやッ。みんな、いやッ」

マリはじだんだん踏んで、赤裸々なポーズを尚更にあからさまにして、駄々子のように叫んでいた。成程、縛るばかりが責めやプレイではない。こうした言葉の嗜虐のあることも私は知って、かつてない愉悦をおぼえた。今、渚マリは真剣にいやいやをしている。応ずれば、やりかねない社長であったからだ。

グラスのウイスキーをあほると、やおらは立ち上った。白い縄を握りマリの足音を縛ると、体にかけて両股を引き裂くように縛っていった。濡れたタオルをパラリとかけて、露出を蔽って社長は合図する。パチリと一枚。サツとほどいて、ついで片脚を膝で縛って胸に付ける。タオルで猿轡をして、自由の片脚を握ると大きく開いた。ソファの上で、マリの体を振り廻すように足を引っ張る。重心がくずれて、ドサリ

とマリはタタミの上に落下する。

「どうしてなの、どうして乱暴するの？」

くぐもり声でマリは叫んでベソを掻いた。

生理を嫌悪する社長の、どこへもやり場のない憂憤の吐け口であったことをマリは知らない。私は又、女性の生理に左程嫌悪を感じなかったが、彼の場合、それはよくよくのタブーなのであったろうか。

女体を引き裂き、血をにじみ上らせて、社長は荒い息を吐いた。私はむしろ、生理にもかかわらず協力しようという渚マリの態度に同情を禁じ得なかったが、Sの本性は社長の方が、私より強烈であったのかも知れなかった。

「辻村さん、バッテリー交替——」

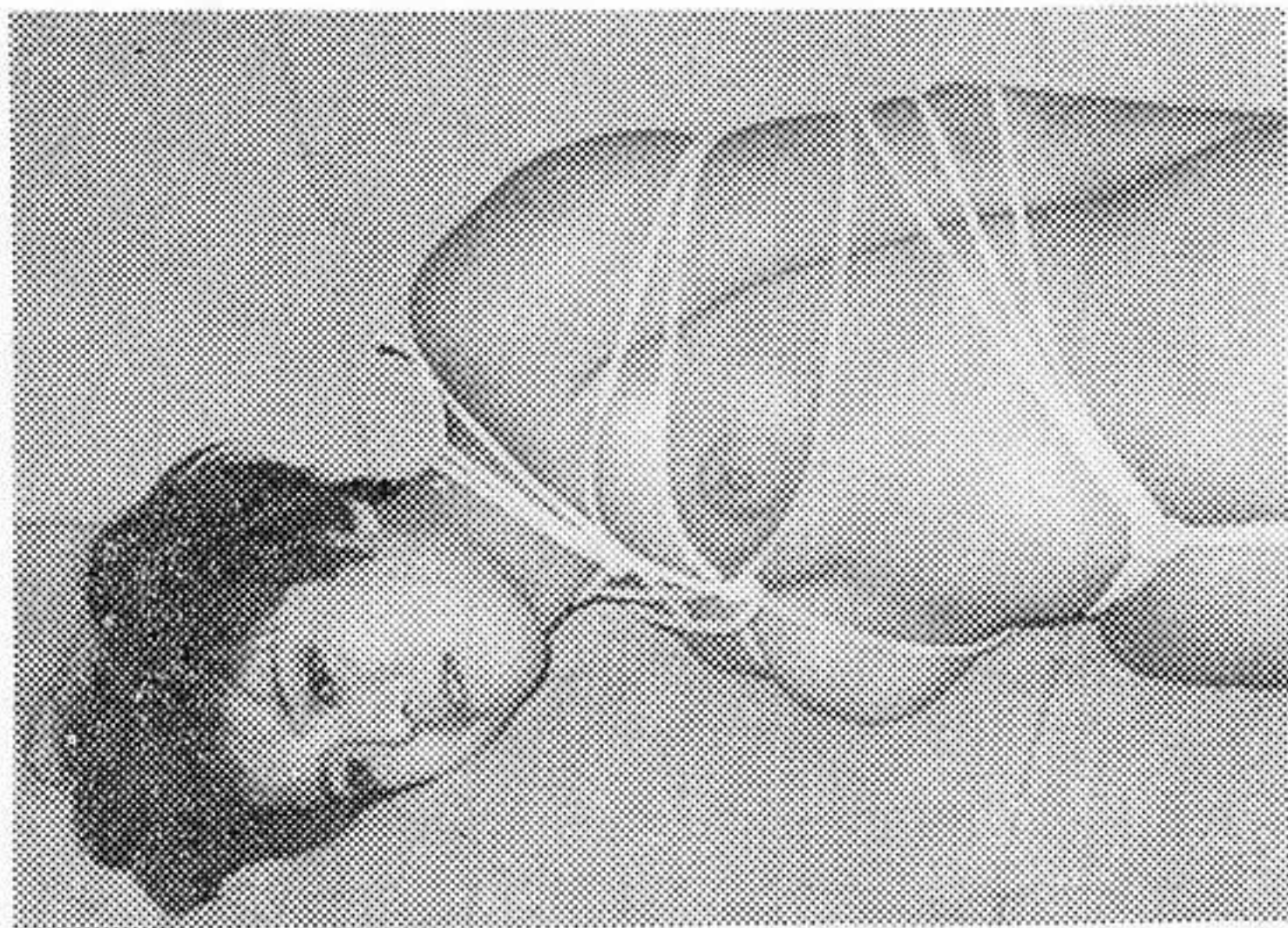
はい来たと私、しゃしゃり出ると、一旦はマリの簡単ないましめを解き、首縄かけて、乳房で八の字、二の腕高々と後手に縛り上げる。あぐらを組ませて両足首を別の縄で緊縛すると、御存知、海老縛り。柔軟なマリの体は易々とそれに耐えていた。それでも、圧迫される呻きが、ふりしぼるようにマリの口をつんざいて洩れた。熟れきった特大の白桃ふたつ、たわわに揺れて弾んでいた。

ソファを倒して、シングルベッドに早変わり

した弾力性のマットの上で、やがてマリはじりじりと苦痛が迫って歯を喰い縛る。体をポンと押すと、はずみで横倒れしたマリは、まざまざと、私の眼前に羞恥をさらけ出している。首縄が引きつれて、苦悶の表情が否応なく彼女の瞳をかげらせ、このポーズから何とかラクな姿勢を保とうと、もがきながらマリは果敢ない努力のうごめきを続けていた。

体の重みで徐々に上半身がマットから下降し、危くマリは落下しそうになった。あわてて頭を支えたが、それが動機となって、マリの体は逆さに落ち込み、拘束された上半身をタタミに押しつけて、見事に発達した双丘が眼下に屹立していた。二つ折れになって垂れ下ったまま、最高の羞恥をさらして、マリは全身を支えているのが急速に苦しくなってきたのか、

「あッ、く、くるしいわ。上げて……早く」と必死に叫んだ。重い体をやっとこさ抱え上げ、元の姿勢に戻しても、一旦くずれたポーズによって喰い込んだ縄目は、足首にも深々と交叉して、しまりにしまりきっていた。熾烈な痛覚に襲われ、マリは、あの燃ゆる瞳をとじて、長いまつ毛を濡らしてあえいでいた。



首へ掛けた海老責めの足縄を解いたが、上半身は解かなかった。

押入れから、クッションをとり外して椅子の木枠のみになったのをとり出してくると、それに、やおら坐らせる。

マリは、もうどうにでもなれといった、覚悟のほぞを決めているのか、私の嗜虐を求め手を拒もうとはしなかった。

思いっ切り開股させると、椅子の肘掛けに太腿をぐっと密着させて、白いロープで太腿と肘掛けを縛り合せてゆく。ついでダンダラ縄を、胸もとの中心で結び合わせ、腿の内うらへと廻して、開股の戻らぬように締め上げてゆく。マリの女体は、ハレンチをことごとく露呈するポーズになって、私のこの玩弄の嗜虐の縛りに甘んじていた。もっとも充実した悦楽のひとつときの、おとずれである。彼女は瞳孔を開いて、冒瀆のカメラをじっとみつめていた。うるおった肌が、鮮かな光沢を放って輝き、女の肌の匂いが、熱くこの密室に立ちこめていた。

私の灼きつく視線は、マリの女体の、奥の奥まで心残りなく探求していった。粘った唾液がのどにからみつく。

深沈としたマリの瞳は、深海の青味をたたえてキラキラと光り、ミルク色の肌は、こよなく美しかった。この美しい肌を、自由に操り、ハレンチ責めの究極のポーズが、今、目の前にあった。仮にそれが人呼んでピンクスターであろうとも、一応、市場性のあるスターを、このポーズにまで持ってゆけたのは、渚マリが最初であった。私の鬱勃たるSの慾情は、次第次第に加速して、たぎりにたぎり

煮つまってきた。数多くのフィルムが、このポーズに集中して費消され、閃光は凡ゆる角度から光り、寝そべって下からも、このポーズに狙いをつけたりする、念入りさであった。その私を見下ろしながら、マリはやや憐れみの表情を泛かべて、陰獣の、ころげ廻り右往左往して喜悅するさまを、じっと見つめていた。

神秘のヴェールをはがして、接写カメラが近々と、何を狙っているかを彼女は敏感に感じとって、熱狂する貪婪な私の技巧のいけにえとなったわが身に対し、激しい自己嫌悪を抱いたかのように、深淵の黒い瞳をそっと閉じたのであった。

× × ×

赤く燃えるガストープの熱気が部屋に充満し、猥らっぱい女の匂いが、温気に入り混って、ムンムンする嗜虐の体臭が密室にこもっていた。

飽くこともなく執拗に、私の緊縛はつづいている――。

今、眼の前に佇立するマリの裸身は、自由になぶって愛玩したい魅惑のニンフだった。乳房の盛り上りを強調して縛った後手は低く垂れてはいるが、腹部につないで垂直に下降

したロープは、深々と喰い込み、双丘で両手に繋がっていた。二の腕もろとも、乳房の下を巻きしめたロープが、かなり強烈に腕をしめつけている。

背のロープを握って引立て、マリの尻をパチリ、パチリと平手で叩いて、苦悶の表情を作る。思わず浮かぶ、屈辱の苦痛のポーズに、私のカメラは素早く光る。マリの全身を舐めるように、カメラは前後左右から這い廻っていた。抱えるようにして、ヨタヨタ歩むマリの右足をソファの背に掛けさせる。股に喰い込むロープは姿を没し、縛られた手首が痛さにもだえている。怨めし気に私をみやるマリの瞳は憂色を帯びて、こよなくも美しい。

ダイナミックな起伏を赤裸々にみせて、ソファのさらしものは、白いのをならして微かに呻いていた。神秘的幽玄の峡谷に私の視線は固着し、そのポーズに夢中でシャッターをきりながら、渚マリという娘は、どうしてこゝも可愛いのだろうか、私の酒に濁った脳裡は、そんな当然すぎることを懸命に追及しているのだった。

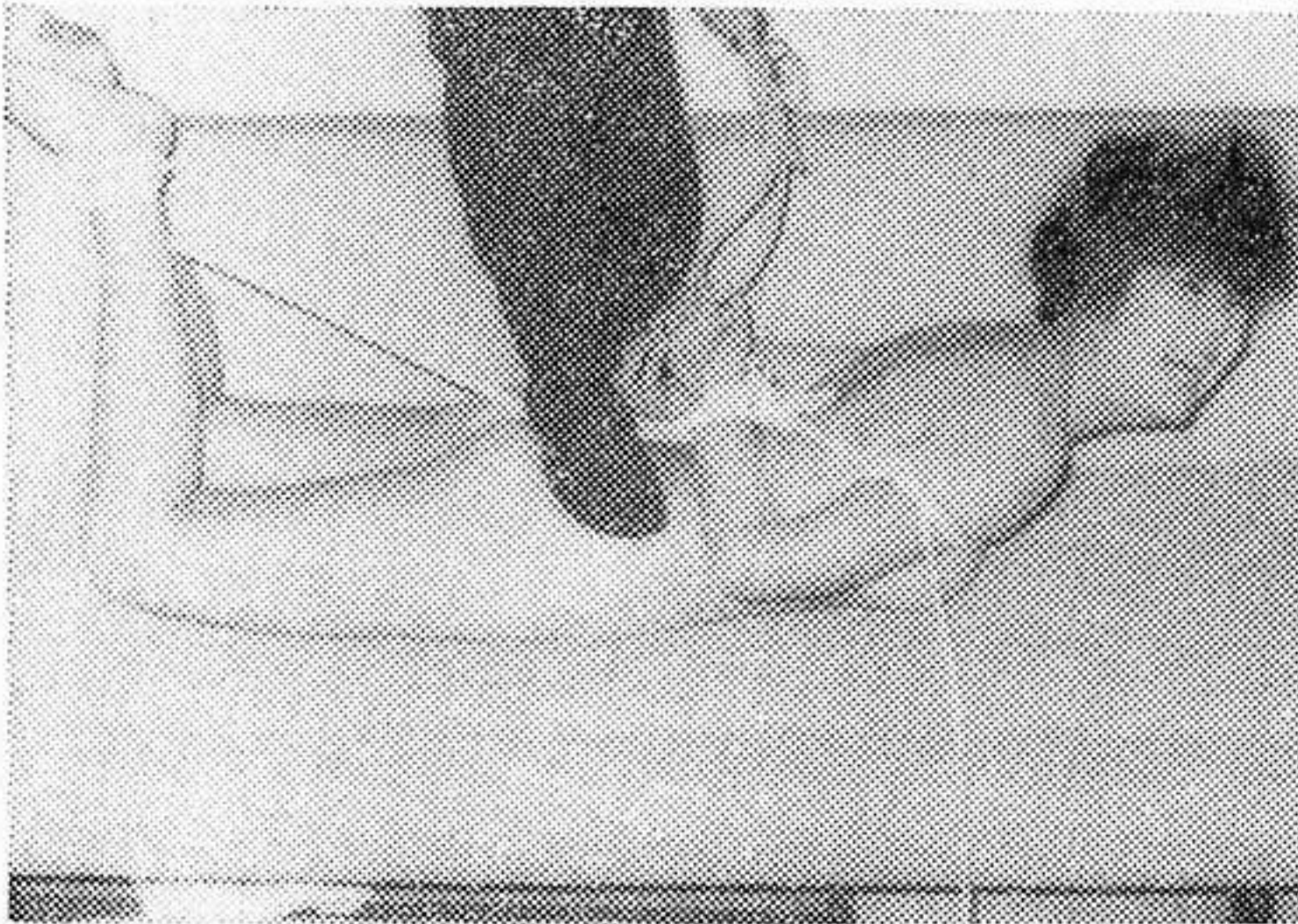
ソファに彼女を横たえたまま、社長は黙って寄ってくると、ヒソと私に悪魔の囁きを投

げかけてきた。

「もう真夜中で、そろそろ時間も経ちました。が、どうです、最後に思いつきり鞭打ちをやってみませんか。撮りますよ」

「いいの、彼女？」

「いいも、悪いも、やるだけです。やりたいのでしょう？」



「そりゃ……」

「じゃあ、考えることありませんよ」

それは強烈な魅惑であり、刺戟の光景であった。私の腹はきまった。このしなやかな肉体に、鮮烈な鞭打ちの洗礼を考えただけで、私の心は妖しく、ふるい立った。

「ねえ——」

横たわったマリが、甘い声をかけてきた。

「何だい——」と社長。

「冷えたのかしら、オシッコしたいの」

「よしよし、させたげよう。辻村さん、縛ったままでつれて行ってやって下さい」

「ダメッ、出来やしないわ。解いてくれなさい」

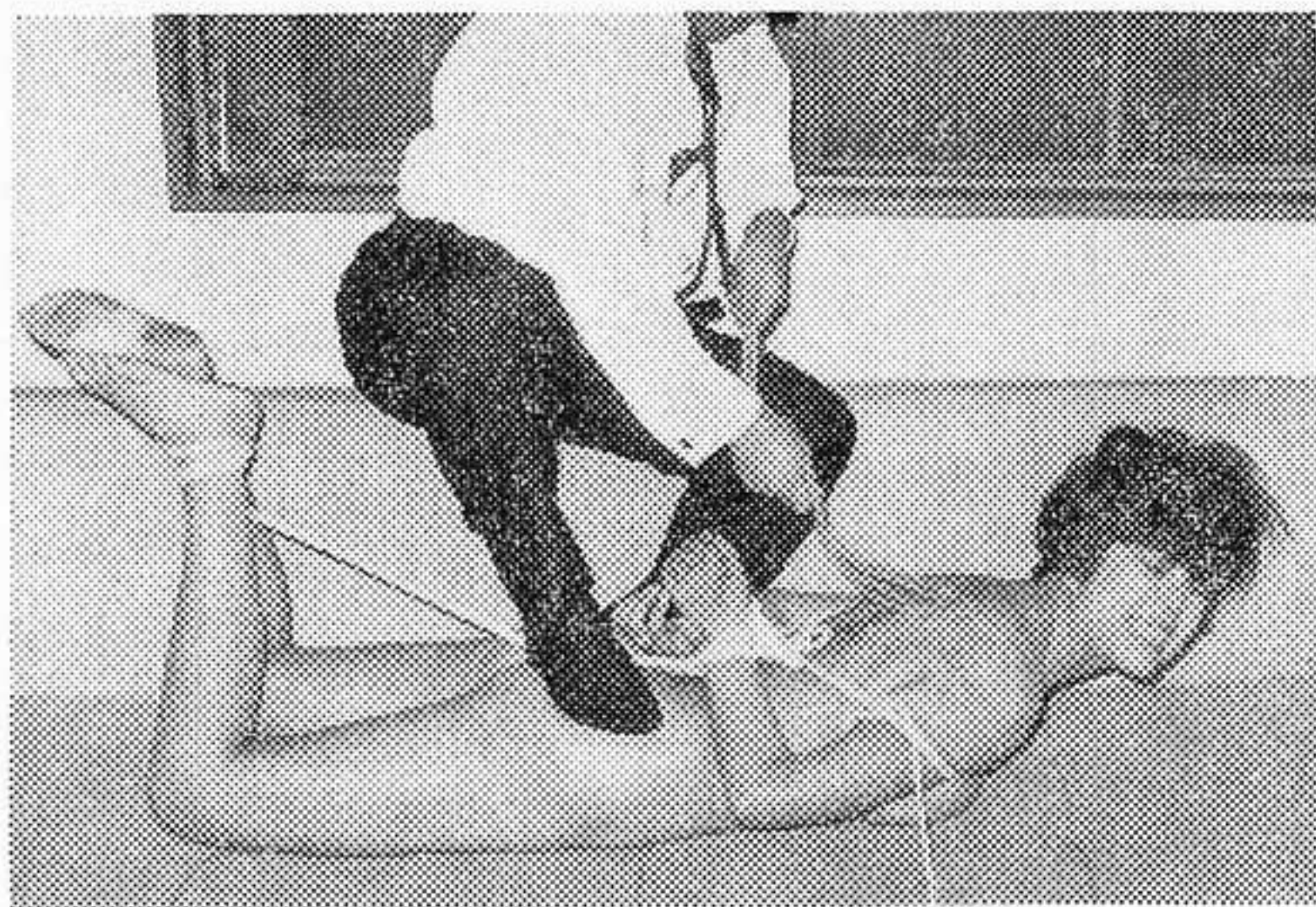
「ああ、その股縄かね」

「お願い。一度、解いて——」

哀願の眼付きに負けて、私は彼女に近づくと無言で素早く解きにかかった。生理用品を握って、マリは裸のままであわただしくかけ込んでいった。

かすかに聞こえる官能の音色——。

「もう、この辺りで最後にしたらどうでしょう。午前二時に近いですからね。彼女が出てきたところを、いきなり引っ捕えて、パッと素早く縛っちゃいなさい。ハント用の緊縛の



ポーズなんて、もうどうでもいいじゃありませんか。それよりプレイしましょう。さあ、カメラを貸しなさいよ。撮りますからね」
私は、うなずいた。ゴクリと生唾をのむと熱い緊張が駆けめぐる。縄を握ると一個所、うっすらと赤く染まって濡れている。その個所に鼻をよせ、私はマリの女臭を脳裡に叩き

こむべく深々と嗅いでいた。

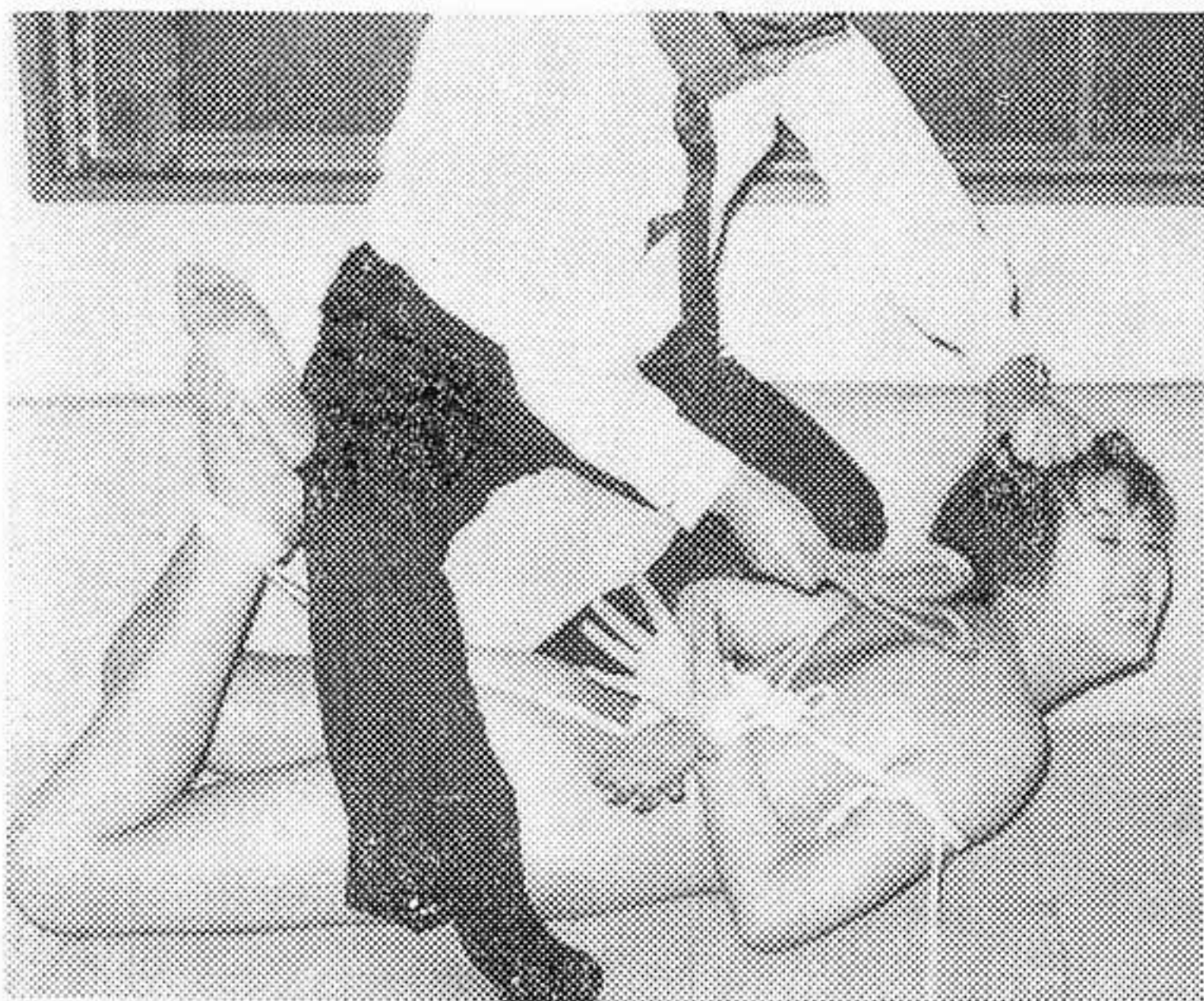
豊かな隆起を抱くようにして、マリはやや背を丸めて、ヒタヒタとフロアを歩いてくるのが、半開きの襖の彼方に見えた。

入りこむや、いきなり私は躍りかかった。

あーっと驚声をあげて、マリは激しく身悶えた。全身におびえのけいれんが走っている。かまわず私はマリの両手を背後にねじ上げ、ロープが生きもののようになり両手に纏わりつく。忽ちにして両手が縛り合わされ、胸に巻きつけて、二の腕でしめる。余った縄はしをそのままに、匂う女体を抱きしめるようにしてソファに押し倒す。俯伏せに倒れ込むマリにのりかかり、もう一条の縄が、手首と両足首を背後で結び合わせてゆく。

顔をのけぞらせ、マリはもがいた。クッションがきしみ、女体は揺れに揺れた。

荒い私の息の下に、直角に両脚を立てて、マリは両手で空を掴んでいる。私の手にたるみ込んだダンダラ縄が握られる。片脚に体重をのせて、ぐりぐりと双丘を蹂躪する。マリは低く呻き、双つの大きな盛り上がり、自分の体とクッションのあいだで押しつぶされて息苦しさのともなう圧迫が、マリの唇を裂かせて、声にならぬ叫びをもらさせる。



「お願い——もう少しゆるく叩いて……。マリ、我慢するから」

その声に、私は反って昂奮の度合いをたかめていた。

ソファの背に腰をおとし、尚も片脚で尻をぐいぐいもむようにして責めながら、縄をうちおろす。鈍い打擲の音と間髪を入れず、マリの口から耐え切れぬ叫びが洩れ、裸身がピクリと大きくくけいれんさせると、縛られた下肢がエビのように跳ね上った。縄鞭は断続してマリに襲いかかった。歯をかみしめ、マリは必死に苦痛と圧迫に耐えている。大きな瞳は苦悶にとじられて涙まじりに妖しくぬれている。

熾烈な私の鞭は、マリの裸身の随所に飛びかった。いつしか力任せに握りしめた髪の毛をぐいとこじ上げ、そりかえった上半身のあちこちに鞭跡が長く尾を曳いて、桃色の線に肌を染め上げていった。連打に氣息えんえんとマリは喘ぎ、うめきつづけた。激しく苦悶しながら、なお、この汚れを知らぬような牝鹿の女体は、優美に輝いていた。下半身が妖しくくねり、ゆらぎ、遅い双丘が折に触れて、ピクンと躍った。鞭

うつたびに、マリの首根は、息もつまるばかりに大きくのけぞり、全身が悶えた。

握っていた髪を放すと、私の踵が、マリの頬にのった。跨がるようにして、力任せに圧迫を加えると、噛みしめた唇の奥で、ギリギリと奥歯がなっていた。

カメラを構いた社長が私の助勢に近よる。手にした大型のバイブレーターが、マリの体の深奥部で微かな響きをあげ始めた。

羞恥をかなぐり捨て、絶叫に喜悦のうめきを織り込んで、苦悶と悦楽の交錯したそのフイナーレの悶えは華麗そのものであった。

絞り出す汗と脂のしたたりで、顔も背も胸も、白き柔肌のすべては、ぬめぬめと光り輝き、懊悩の果てに精神も錯乱するのではなからうかと思われるほど、狂おしいばかりにマリは転々反そくして、獣のうめきを高くあげつづけていた。

× × ×

残忍で華麗な終焉——。二人の調教者は、ぐったりとして、グラスのワインを煽るように口に流し込んでいた。

のたうち廻って、フーツと気の遠くなる恍惚感のあとの飽和状態からさめて、マリはクッションに頬をつけたまま、放心したように

そのまま、パシリと一閃、背を叩く。呀々と引裂くような悲鳴をあげて、マリの顔はウーンとのけぞり、大きく歪んだ。

「ウーン、いたいっ！ カンニーン」

「いや、マリ——ゆるさないぞ。突然、変異の罰を辻村さんのために受けるのだ」社長の台詞が、いいところに入る。

私達を、あの官能の塊のような大きな瞳で、じっとみつめていた。荒れ狂ったあとの甘美な飽和状態であった。

羞恥の縄をかけられたまま、身じろぎもせずマリは私達を深々とみつめた。

苦痛も羞恥も屈辱も影を潜めた、柔和なプロファイルであった。

憎悪より、甘美なプレイの記憶が、徐々に蘇っているのかも知れなかった。

ノロノロと立上って、私は乱れて締った縄を、やっと解きほぐす。

ぬけるような気懶い虚脱感——。ものいう気力すら失せて私は、ソファの片隅に腰を落として、そっとマリの腰の辺りを撫でた。

「怒ってる？」

「ウン」

首を振って、マリはそっと声をひそめた。

「アンネでしょう。だから……」

「だから？……」

「知らないッ」

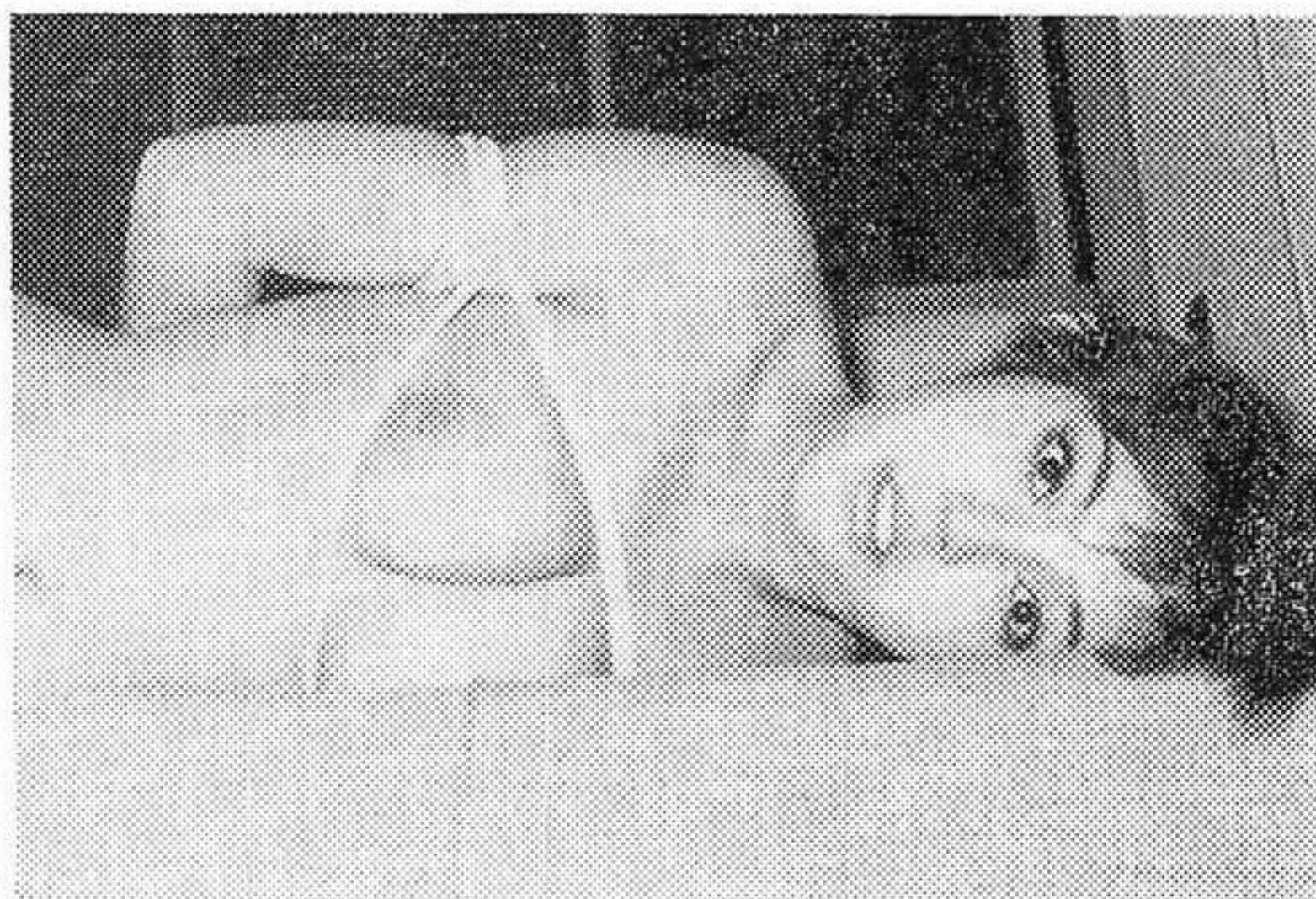
ポンと弾みをつけて立ち上ると、

「もう撮らないの？」

「ああ、有難う」

「着ていい？」

「どうぞ——」



憶するいもなく、マリは、けろりとして向こうをむいて、パンティを穿いた。

黒いセーターを素肌にかぶり、ストラックスをスルスルと、はき終ると、もう身支度が整う。美粧ケースを開いて、コールドをぬり、素早く化粧を落とす。

素顔のマリに、思いもかけぬ気品と純真さ

がハッとするような鮮烈な感覚でのぞけた。

「社長さん、送ってくれる？」

もう帰る気配を見せている。

賀山社長はあわてて立上り、服をつけた。

「バカに早いねえ。これから約束の人と会うの？」

「ウン、待ってるかも知れないわ」

「恐れ入った、スタミナ娘だ」

「若いもの——」

渚マリは、ケロリといって、ペロツと舌を出す。

「一寸、跡を片づけるから、待ってろよ」

雑然とひろがった部屋を、無然と眺めて、社長は縄などを、しまいにかかる。

「いいですよ、どうぞ——。私が片づけておきますから。ホテルへ泊るのも何だし、ここへよかったら泊めてもらいますよ」

「いいんですか、こんな処で——」

「明日もここなんでしょう？」

例の妊娠六カ月である。流石に言いかねてそうきくと、うなずいて、

「その予定です。じゃあ、そのソファね、シングルベッドになりますから、おあとをよろしく。彼女を送って、私は一応家の方へ帰りますからね。構わないですみませんねえ」

いっそ、その方が気楽であった。このソファに、今も渚マリの汗と脂と女臭が、ほのかな名残りを、留どめている筈であった。その匂いを嗅いで、私ひとり、このコーポの片隅で、ゆっくり休養をとりながら、思い出にむせびつつ、明日に備えたかった。

二人をコーポの外に送ると、風は冷たかった。鎮まりかえったこの住宅街は、深沈と夜の幕りに包まれていた。

車を舗道に出すために、社長は冷えたエンジンに遠慮勝ちにふかせていた。渚マリが闇にたたずむ私の傍らにツト寄り添ってくる。

「愉しかったわ……本当」

「つい、プレイを逸脱しちゃって、御免ね」

ヤセ犬の遠吠え

「ヘソ曲り」系振昇

またヘリクツを一筆。だいたい私は、人間（いや私だけ）の習性かも知れないが、物事をヘソ曲り的な、受けとり方をするクセがあるのだが、二月号の奇クサロンに載っている『好きなんだ』（青井松造氏）の詩？には無条件で納得できた。この、たかだか四百字

「縛られるってことも、たのしいわ。でも、そんなこと、外の人にはいっちゃ、ダメよ」

「尚更いいなくなる言葉だ。この道から足を洗うっていったけど、私の本心は、もっともっと活躍してほしいな」

「いいお仕事があればネ」

二人に沈黙が来た。

「おい、乗れよ——」

社長の声に振り向くと、

「じゃあ、お別れね。サヨナラ」

自分から手を差し出して握手を求め、さっと身をひるがえして、助手席におさまった。

テールライトが赤く、物悲しく私の眼に残影を残して小さくなっていった。

私は心より、彼女の倅せを祈らずにはおられなかった。

空には月も星もない。明日は雨か——。心の絆を振り払うようにしてコーポに入る。

既にマリのイメージは薄れて、私の脳裡には、明日プレイする約束の妊娠六カ月の人妻との未知の期待が、そくそくと胸をうち始めていた。

パトカーのサイレンが微かに聞こえ始め、それがひととき高く鳴り響いてきたかと思うと、夜のしじまを裂いて、強烈な破壊音を残して、又小さくなっていった。この甘美な大東京の深夜のどこかの片隅で、犯罪がうとましくも起こっているのだろうか——。

た。しかし、正直いって「お説ごもつとも」と全面的に納得できるものはなかったといっても過言ではない。皆それぞれに「なるほどな」と思える箇所もあるにはあるのだが、この青井氏の四百字ほどの同意感湧かなかったように思う。『山がそこにあるから……』と同様で、感心する私が、どうかしているのだろうが、リクツの嫌いでない私にも、この「リクツも理由も正当化も不要」の叫び？が何よりも強い「理由」とわかった。

この前に載せてもらったのに「本誌は、客に作法通りを強いる店の感がある」というよ

うなことを偉そうに書いた。が、これは私の誤解であった。筆をとる人それぞれの『好きなんだ』の叫び声なのだと思う。ただ、『サドとはこういうものだ』『SMとはこういうことなのだ』と定義づけられるようなのには抵抗を感じる。

勝手なもので、最初はホントにやじ馬根性で書いたのだが、それが活字にされてみると急に本誌がすぐ近親的なものに思えて仕方がないのだ。そこで改めてK誌の性格について、考えてみた上でのことなのだが、本誌は『S・M的』事項の集積ではあっても『S・M』誌ではないのだらうということだ。

「S・Mの本質」を知らない私なのだが、少なくとも、本誌上に表現されるSM行為の描写の中には私が何かの書籍で読んだ覚えのあるような『虐殺』に至るまでのものは出てこない。『処刑』以外には『殺』という言葉も見当らないようだ。勿論、編集方針の故かも知れないが、誌上にうたわれている『加、被虐』の数々は、すべて『愛』に帰するものばかりといってよからうと思う。好ましいことだ。

原作そのものかどうかは知らないが、大映が『盲獣』を映画化したそう。江戸川乱歩のこの小説を、私は小学生時分に読んだ。今からざっと三十年も以前だが、いかにショックを受けたかということは、それ以後、再読

する機会もないのに、今だにその大部分を忘れ得ないことでもわかる。巨匠の筆に描き出された倒錯性愛の生々しさに、いい知れぬ憧憬と罪悪感を覚えたのだらうか、オドオドと親の眼を怖れていたと記憶するが、倒錯愛戯の終末が『惨殺』に至ったことに、割り切れない何かを感じていたように思う。

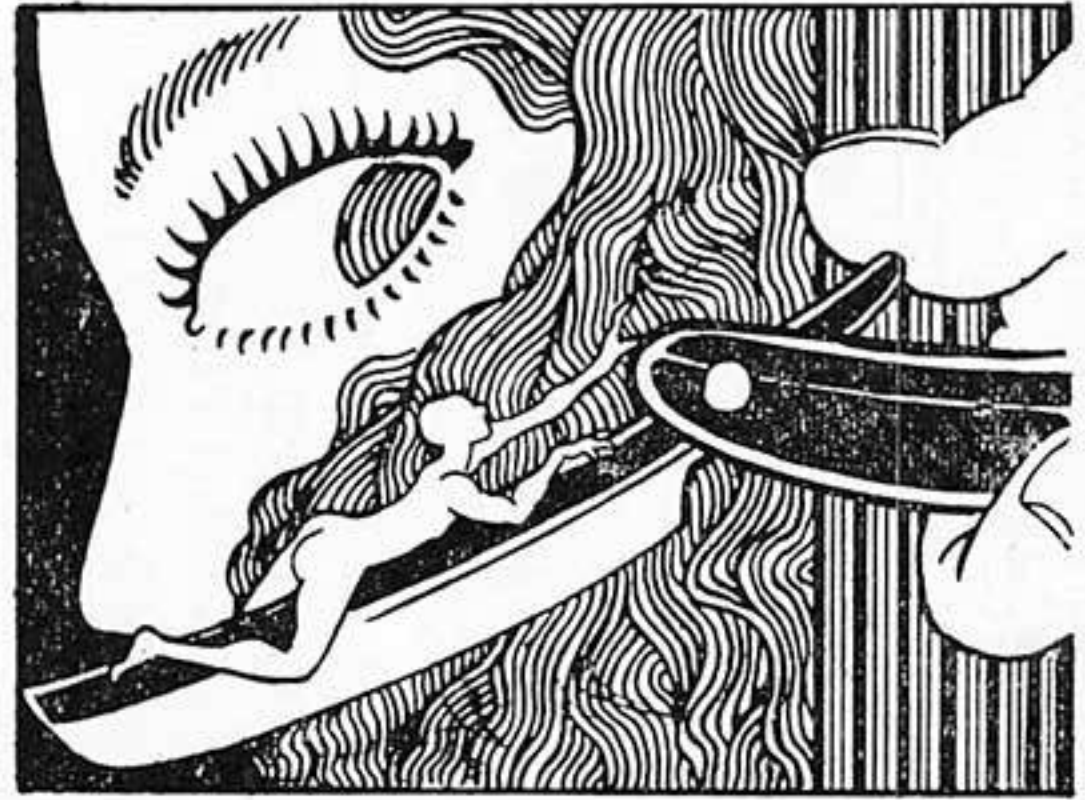
勿論、巨匠は探偵小説の一環として書かれたものだらうし、本筋の狙いというものがどこにあったのか知るよしもないが、思春期にも至っていなかった私の『受感』が、いちじるしく作用したことには違いなかった。

本誌の場合、ふんだんに出てくる「縛り」「裸」「肌」「サド」「マゾ」等々の単語と状況描写は、微に至り細に亘っているにもかかわらず、ハッとするような切迫した受感を得ないのは、その傾向を承知の上で頁を開く故もあるうし、私という人間がヒネクレているセイでもあるう。

しかし、この『愛』を基調とした『S・M的』遊戯の謳歌には賛同出来る。縛りが好きだからといって、何もサディストでなければならぬことはない筈だし、変態とされている行為を好んではいけないという道理もある訳はない。したい事を追い求めるのも人間の人間たるゆえんなればこそだ。だが、したいからといって、責め殺すまでの極限を求めたら、これは本人の人間性をふみにじっても仕

方がないことになるう。と同様に、本誌はあくまで『愛』の範囲内に於ての『S・M的傾向誌』にとどめておいて欲しい。倒錯的雰囲気を受感する私としての願望である。真のサディスト？ だけのものや、一般的エロのおいのするものとは一線を劃して欲しいものだと思う。だが、ただ女をハダカにして縛り上げ、苦しめさえすればSM的であるというものでもなからうと、思うのだがどうだろうか。

二月号の表紙に『成人向』の烙印がついているのに気がついて複雑な気持ちになったが、考えてみると、これでいいようにも思う。何とか協議会とかの干渉にしろ、編集部が自発的にしろ、成人にしかわからない事柄であることには違いないからだ。いずれ嫌が応でも感じとってくる『性』の問題であるにしろ、私の『盲獣』に受けたショックによるとまどいは強烈に過ぎる感じであった。しかし、近頃は、年少者の眼にふれる性関係の事柄はTVを始めハンランしている。その方が、年少者にとって却って将来のためでは？ とも思うが、この烙印が狙う効果をあらわすに越したことはない。ただ、十八才未満が本当に未成年であるかどうかということになると、近頃の若者の心身共の発育ぶりから見ても、私としてはヘソ曲りぶりを発揮したいような気がするのであるが、間違いだらうか。



求人難

翌朝、珍しく早く起きた栄子に、追い出されるようにして政吉は東京へ発った。

清太郎に会うのは二年振りで懐かしかったが、切り出しにくい用件を持ち出すと、案の定、清太郎は渋い顔をした。

「イヤ俺の店でも三軒合わせて三十人からの職人を使ってるが、やめてく奴が多いんで困ってるんだ。世話してくれる人がありゃ三万や五万のお礼は出す気で八方くちを掛けてる

連載 M 小説

ピエロ床屋

(2)

鬼山 絢 策

んだが、なかなかないんだよ」

東京の職人不足は政吉の想像以上だった。

だが栄子から、どうしても廻してもらいうように床へ頭をすりつけても頼んで来いと言われているだけに「ハイそうですか」とは引き下されなかった。

そのくせ、内心は来手のないことを望んでいる。政吉は心のうちにその矛盾と闘いながらも、やはりここは一生懸命、頼むのが正しい道だと思った。

清太郎も政吉の店の事情を察してか、「もうひと月もすれば、インターンを済ませ

——前号のあらすじ——

政吉は若い時は道楽者の渡り職人だったが栄子と知り合って四十八才で結婚した。二人の貯金と兄貴分の清太郎から借金して、栄子の郷里である栃木県大田原市に理髪店を開業して五年経った。友市という職人を使ったが、三十七才という女盛りの栄子は友市と関係した。十五も年上の政吉は知らぬ振りして我慢したが、図にのった友市が給料の値上げを再三要求し、女出入りも激しいので怒った栄子は友市をクビにした。しかし店にはどうしても若い職人が必要だと栄子は政吉に、東京の清太郎へ職人の世話を頼みに行けと命令した。

くる奴がいるから、それを廻してやろう」
 と言ってくれた。

政吉はホッとした。

これで栄子への申し訳けも立つと思うと気が弛んだ。

「どうだい、久し振りに飲みに行こうか」

清太郎は、政吉を大塚のキャバレーに連れていった。

常連と見えて清太郎はもてた。政吉も昔遊んだ時代を思い出して楽しかったが、そろそろ帰らないと栄子に怒られると思って、八時の急行で帰った。

政吉が家に着いたのは、十一時を廻っていた。

叱られるかとビクビクしながら裏口へ廻ると、まだ鍵が掛かったまま栄子は帰っていなかった。

「こんなことなら、もう少しゆっくり遊んでくるんだった」

と安堵したが、すぐに栄子のこと気がかりになってきた。

「温泉へでも行ってくると言ってたが、どこへ行ってるんだらう……」

かなり遅くまで寝ずに待っていたが、とうとう栄子は帰って来なかった。

あんたってダメねえ

いく日も店を休んではいられないから、翌朝は一人で店を開けたが、そういう時に限って客が立て混んだ。皆から「おかみさんはどうしたんだ」の「友さんはどこへ行った」のと訊かれ、中には「二人でかけ落ちしたんじゃないか」と、ひやかす者さえあった。客は冗談のつもりで言っても、政吉にとっては煮えくり返るほど腹が立った。

夜は早仕舞し、店を掃除して風呂へ入ってくると、もうすることがない。

政吉は言いようのない淋しさと、むらむらとこみ上げる不安を感じた。

「栄子の奴、どこへ行っちゃったんだ」

あの大柄な白い豊かな肉体が、まぶたにちらついて消えなかった。

「そうか！ もしかすると滝岡の憲三と一緒に出かけたのでは？……」

憲三は栄子の幼馴染みで、高校の先生をしていた。店へ時々頭を刈りにやってきて、栄子と親しそくに昔話をして行くことがある。

そう思うと矢も楯もたまらない気持ちに迫われ、憲三の家に電話してみると、細君が出て

きて学校が休みなので、おとといから草津へ行っていると言う。

政吉は近所の飲み屋へ行つて、五合ほど飲んで不安をまぎらそうとした。

近頃こんなに飲んだことがなかったので、かなり酔ったはずだが、それでも栄子のことか脳裡から消え去らなかった。

その夜も栄子は帰らなかった。

翌日も忙しかった。

昼すぎにブラリと栄子が帰ってきた。

「どこへ行ってたんだッ！」

「どうしたの。東京の方、うまく行った？」

「ウム、まあ……」

ちょうど客が多かったので、栄子は直ぐ白衣に着替えて仕事をはじめた。

「おかみさん、どこへ行ってきたの、盛装してさ」

「フフフ。ちょっと草津へね、久し振りで息抜きに」

草津と聞いて政吉はドキッとした。

「やっぱり憲三が先へ行つてて、そこへ行つたに相違ない」

「そりゃよかった。白根山へ行つて見た？」
 「ええ、いいですねえ、あそこは。月世界っ

と言うだけあって頂上の湖の水の色のきれいだったこと。子供の頃、歩いて登ったことあるんですけど、いまはケープブルカーが頂上まで行っちゃうんだから楽ですよええ」

「旦那さん、置いてったの」

「ええ、店を休んじや、お客さんに申し訳ありませんからねえ」

「じゃ恋人とアベックで行ったんだな」

「アラッ。そんなひと、いたらいいんですけどねえ」

「いないの？　じゃ僕が恋人になろうか」

「あら、いいわア。こんだ、どこかへ連れてって下さる？」

栄子を目指して来る客もあった。そういう男は、政吉の前でこんな冗談を言うのが楽しいらしい。

栄子も心得たもので、自分めあての客にはひげを剃るときに、豊かな乳房をかぶせるように男の胸に上からおしつけ、顔を近づけて鼻息をスースーとかけてやった。

栄子はマスクがきらいで、親しい客の時はマスクをかけずにやっていた。

政吉は仕事がうわの空で、いつも刈ってる荒物屋の息子から、

「オヤ。おじさん、今日はむやみに刈りあげ

ちゃったなあ。イヤだな、こんなの。まるで中年の男の頭みたいだぜ」

などと文句を言われた。

栄子は、今日はこまめによく動いた。テキパキと仕事を済ませると夕飯の支度にかかり政吉が店を閉めて掃除を済ませる頃には、飯の支度もできていた。

「風呂へ一緒に行くかい」

「妾は今朝、入ってきたからいいよ」

政吉が隣の風呂屋へ裏口から入って、サツと流して帰ってくると、珍しくもお銚子が二本ついていた。

「それでどうだったの？　どんなひとが来てくれるのよ」

栄子は上機嫌で酌をしながら訊いた。

「ウム、それがな、東京はこっち以上に不足してるんだよ」

政吉は、清太郎に言われた通りの受け売りをした。

「なんだい、それじゃ、ダメなのかい」

「ウム、イヤ、ひと月ほどすれば、インターンを終った若いのをよこしてやると言ってくれたよ。まあ兄貴だからこそだよな」

「冗談じゃないよ。それは清太郎さんの逃げ口上だよ」

「そんなことはねえ。清太郎は約束したことはちゃんと守る男だ」

「それにしたって、ひと月も待っておられるかよ。あんたってダメねえ」

栄子は格別、怒った風もなく、テレビのコマーシャルをまねて、おどけて見せた。

妬く資格のない男

「そんなこと言っただってお前、向こうだってよくよくなんだぜ。兄弟分の俺が頼んだからこそ、何とかしてやろうという気持ちで、言ってくれたんだ」

「ダメダメ。あんたの誠意が、足りないんだよ。ひと月なんてアテになるもんか」

「でも、そういうんだから待つよりしょうがねえじゃねえか」

三日振りで栄子の酌で食事をした政吉は、ほのぼのとした幸福感に浸った。

桜色に上気した栄子のくびれた、あごのあたりを見ていると、押えきれぬ欲情に、

「栄子！」

膳を押しつけ、栄子に抱きつく胸元をくりひろげた。

「何するんだよう」

「お前がいない間、とても淋しかった。淋しかったよ」

子供を産んだことのない栄子の乳房は、ブツクリとお椀型に形よく成熟していた。その隆起した胸の谷間に顔をおしつけた政吉は、音をたてて吸いまわった。

「くすぐったい。そんなことで話をはぐらかすんじゃないよ」

政吉は昂奮し、栄子を押し倒すと、捲くれたスカートの太い脚の間に、狂おしく顔を寄せていった。

「イヤだったら、およしよ」

口では言うものの、栄子は格別あがらうともせず、情痴に狂った五十男の、薄くなつた頭を、あわれむように、やわらかくはさんでやった。

「お前、この三日間、どこへ行ってたんだ」

「草津へ行ったよ」

「一人でか」

「当たり前じゃないか」

「憲三と一緒にだろ」

あたたかいパンティから顔をあげて、政吉は栄子の眼の色をうかがった。

栄子は、その顔をまともに見下ろし、さげすむように笑った。

「バカ。やいてるの」

栄子は右手のおや指と人さし指で輪をつくって、政吉の額をパチンとはじいた。軍隊で言う「牛殺し」という軽い刑罰だ。

「凶星だろう」

「何言ってやがんだい。あんたに妬く資格なんかあるかよ」

しどけなく横になっていた栄子がムクムクと動いて、政吉の顔をはさんだまま、起き上って、馬乗りに跨った。

「ええ？ 五十づらさげて、いいおやじが、やきもちなんかやいてさ」

グイと両股に力を入れて首を締める。

「ウツ、苦しい。おい、よせよ」

「いい加減な邪推をすると、承知しないよ」
「わ、わかった、わかった。苦しい、やめてくれ」

「店をしめてわざわざ東京まで出かけて、あんたは清太郎さんに丸めこまれてノコノコ帰ってきたのかい」

「だって、しょうがないじゃないか」

「もう一ぺん行って、どうしても一人よこしってもらうように、よく頼んどいで。向こうは三十人も使ってるんだから、本当にうちの店の困りように同情したなら、一人ぐらい廻し

てくれるはずだよ」

「でも、そりゃ無理だよ」

「なにが無理だよ。困ったときは助けってくれるのか兄弟分じゃないか。あんたにその気がないからだよ」

グイグイと締めあげると、逞しい腿の肉が平たくなつて政吉の顔の上にもりあがった。

「苦しい。おい、息が詰まっちゃう」

「もう一度、行るか！」

「でも、そりゃあ……」

「も一度、行るか！」

栄子は、抵抗力を失った衰れた夫を征服することに快感を覚えて、グイッと上から重味をかけた。

グラマーの栄子の体重がモロに政吉の顔面に加えられた。

はじめは、やわらかく暖かい肉のマフラーを首に巻きつけたような快さだった太腿が、いまは万力のように締めあげる責め道具と化していた。

にもかかわらず、うすいパンティを通して女の匂いをあまく嗅ぎ、ジットリと汗ばんだ栄子の肉体を、じかに頬に受けた政吉は、苦しみの中から、たとえようなない甘美な陶醉境に誘いこまれていた。

「この女は若くて美しい。からだもすばらしい。確かに女房の言うように、俺は妬く資格なんかないのだ……」

と思った。

政吉は、これまで数々の女に接したが、女に虐められて喜ぶというような、変態的な好みはなかった。

「だがいま、この苦しみの中から生まれる、快感はどうしたわけだろう」

そのうちにも、肉の枷は刻々と締めまり、重圧はますます強くなって、政吉は息が詰りそうになった。

遂に堪まらなくなって、

「参った！」

というように、栄子の太腿をピシャピシャ叩いた。

重圧が、やや弛められる。

「ム、ムウ、行くよ……」

ようやく許された政吉は、顔を真っ赤にして、荒い息をついた。

「行くなって言たって、ちゃんと用が足りてこなくちゃ何にもならないんだよ。ええ、自信あるの？」

「うん……」

と頷いたものの、実際のところ政吉には全

然、成算がなかった。

「所詮、あんたじゃダメねえ」

痴呆のように口をあけて、肩を波打たせながらハアハアと息づいている政吉を、頼りなげに見すえた栄子は、

「よし、妾が行ったげる！」

「エッ？ お前が……」

「妾なら、どんなことしてでも必ず仕とめてみせるわよ」

「どんなことしてでも……」

「フッフ、また気をまわす！ ばか」

その夜、政吉は栄子を求めたが、すげなく栄子は、はねつけて寝てしまった。

女の武器

「困りましたねえ、妾どんなことしてでも、旦那を口説きおとしてみせると政吉に言い切ってたきちゃったんですもの、このままじゃ帰れませんわ」

「ホウ、どんなことしてでもねえ」

清太郎はジロジロと、帯の上にもりあがった胸のあたりから、よく発達した尻のあたりをなめるように見まわした。

「女の意地ですもの」

「そんなに男がほしいのかい」

「イヤよ、旦那。まじめな話なのよ」

栄子は、サツと脚を組んだ。縦縞の錦紗の裾が割れて、年甲斐もなく赤い腰巻の裾をチラリと見せて、栄子はジツと清太郎をみつめながら『クール』の煙をフーッと吐いた。

「そりゃ、あんたの決心は重々わかるが、このままじゃ帰れないと言ったって、人間一匹そう直ぐ右から左にきまるもんじゃないよ。今直ぐって、わけにいかねえが、そのときは、どうする」

「とにかく決めてもらうまで帰りませんよ」「えらい意気込みだな。そういう気なら俺も何とかしてみよう。じゃ今日は宿をとってあげるから、まあ、そこへ泊りなさい」

清太郎は電話をかけて巣鴨の『パラダイスホテル』という温泉マークの旅館へ、栄子を先に行かせた。

清太郎は九時頃やってきて、栄子を素裸にして、そのすべてを味わいつくした。

「政吉の奴、すばらしい女を女房にしたもんだな」

清太郎は面倒みている自分の女と比較してあまりにも若々しい栄子の肉体と、その能動

的なのに、政吉がねたましくさえ思えた。

栄子は娼婦のような嬌声をあげて清太郎にサービスした。

「旦那も相当なワルね。弟分の女房をこんな風にしちゃってさ」

「お前が、もちかけたんじゃないか。据膳食わぬは男の恥だ」

「政吉に知れたら、刃物三昧になるかも知れないわよ。妾もお店のために、こうして身体を張って出てきたんだから、いい人をお願いしますよ」

「よしよし、とびきりいいのを、廻してやろう。委せときな」

政吉より二つ年上だが、政吉などは足もとにも及ばぬ精力をもっていた。

清太郎は中年のしつこさを露骨にみせて、更に時間をかけて栄子の肉体を食ったが、夜遅く、一時頃に帰って行った。

翌日昼頃、清太郎から電話で神田の店へ来るように連絡があった。

清太郎は大塚の店に住んでいたが、他に神田と神楽坂に店を持っていた。神田は三軒の中で一番大きな店だった。

土地柄のせいか、客は学生とサラリーマン

が多く、職人は十数人いたが、皆が忙しく働いていた。

栄子が入って行くと、レジに坐っていた清太郎は、

「あの男だ」

と目で知らせた。栄子が見ると二十七、八の苦味ばしったハンサムで、友市などより数段好い男前だった。

栄子は、ひと眼で気に入った。

清太郎は奥の部屋に連れて行き、

「仕事が終わったら『善』に来るように……」と店の者に言いつけた。

「どうだい。すごい上玉だろう」

「ほんと、よさそうな人ねえ」

「腕は店一番、確かだ」

「いくつなの？ まだひとり？」

「三十三だ。独り者だよ」

若く見たが意外に年をとってるなと栄子は思い、その点も頼もしく感じた。

「だが断つとくが、ただひとつ、お前さんの気に入らぬところがあるぜ」

「あら、何あに、それ」

「あの男は滅法堅い男だ。お前さんほどの美人がいくら口説いても、あの方だけは、まずだめだぜ。道に外れたことは金輪際しない男

だからな」

「あら、いやだ。旦那、妾を何だと思ってるの。政吉だって、まだ立派な男ですよ。そんな気持ちで来たんじゃないよ」

「そうか、そんならいいんだ。変な男を世話して政吉に迷惑をかけちゃ、俺としても気が済まねえからな」

「もちろん店のこと一途ですよ。旦那だけは特別だったけど……」

「まあ、昨夜のことは忘れようじゃないか。それと、もうひとつ。善は、うちでも一、二

の働き手だから、やり切りという訳にはいかない。インターンの片岡が、一人前になるまで、まあ三カ月ぐらい貸してやろう。片岡が仕上がったら交替させるからな」

そこへ白衣のまま噂の男が入ってきた。

「富岡善夫です。どうぞよろしく……」

善夫は、いく分、硬くなって栄子に丁寧な頭を下げた。

「大田原という所は、なかなかいい所だ。昨日も話した通り、まあ三カ月ぐらいの間だから、辛抱してくれ」

「よろしく、お願いしますわ」

傍で見ると、ますます気に入った栄子は、ニコリ笑って、媚びるように会釈した。昔

ホステスをしていたから、どうしてもしぐさが立人っぽく見える。

「善なら大丈夫だ。お客さんも皆喜んでくれる。だがな、善。おかみさんはこの通り美人だが、間違いをおこしちゃ困るぜ。このひとの旦那は、わしの兄弟分だからな。まあ、お前なら、そういうことはあるまいと思って選んだんだからな」

清太郎は一本、釘をさしておいた。荷物をまとめて四、五日あとに発^たたせるからと言うことで、栄子は納得して大田原へ帰った。

見下ろす女

大田原では政吉が一人淋しく栄子の帰りを待っていた。

「栄子が行ってもダメだろう……」

政吉は心の中で、それを願っていた。

「だが、あんなに自信たっぷりで出かけて行ったんだから、殊によると清太郎に身を委せてでも目的を達してくるかもしれない」

考えまいとしても、いやな不安がつきまとった。

「昨夜は、どこへ泊ったんだろう」

清太郎と栄子の痴態が、脳裡にチラと浮かんだ。

「ああ、俺はまた、やきもちをやいている。俺は、やきもちをやく資格のない男だったわけ。それに栄子は店のためを思ってやっているのだ」

そう考えることが一番、心の休まることだと政吉は考え直した。

今夜も一時過ぎ、もう帰ってこないのかと諦めかけたとき、栄子は帰ってきた。

「ああ、御苦労だったね。どうだった？」

「ああ、くたびれた。これ、おみやげ」

浅草の『雷おこし』の包みを投げ出すと、すぐ帯を解き出した。

「やっぱり、だめだったのかい」

「フン、あんたとは違うわよ」

栄子は長襦袢姿になって、立ったまま乱暴に足をあげて、足袋のこはぜをはずしながら政吉を尻目に見下ろした。赤い腰巻から、太股が白く、のぞけて見えた。

「ええ、じゃあ誰か決まったのかい」

「とても、いい人が来るわよ」

「へエ、驚いたなあ」

一瞬、政吉は暗い気持ちになったが、それを振り払うように笑顔をつくった。

「だから連れてくると言ったら連れてくるのよ。これでお店は安泰。妾にお礼を言いなさい」

「ありがとう。ほんとに、よかった」

「そんなことじゃ、ダメ！ そこへかしこまって、チャンと頭を下げるのよ」

政吉は言われた通りに膝を揃えて、

「恐れ入りました」

ちよっと、おどけて頭を下げた。

頭を上げると、目の前に派手な長襦袢の前をひろげて、赤い腰巻を見せつけるようにした栄子が立っていた。

「年甲斐もなく、こんな真赤な腰巻をしめて行ったのか」

とは思ったものの、いまこうして、あざやかな色彩を眼の前に見せられると、政吉もまた年甲斐もなく昂奮した。

牡牛のようにその前の赤い布に突進し、ふくよかな両脚を抱いた。

はだかった腰巻から、みずみずしい太腿がはみ出していた。政吉は両脚を抱いて頬ずりした、

「ほんとに、えらい女だなあ、お前は……」

「フフフ、だから、あんたとは違うって言うたろ」



娘相撲物語（ある夏のできごと）

女 の 斗 志
（下）

作 並 画 海野三津男

（7）

二人の取組みがどんなに激しいものであったかということを、その破れたシャツが物語っていた。

彼は、それまでで止めさせよう、と思ったが、心中にある慾望がそうさせなかった。口から出た言葉は逆だったのである。

「そんなもの着てるからだ。シャツなどを掴んでは、相撲にはならんな。……思い切って脱いでしまえよ」

言ったあとでハッと思ったが、言ってしまったことを引っ込める訳にはいかなかった。

しかし、二人は素直であった。

「そうね。どうせ私達、男みたいにしてるんだから、脱いじゃおうか」

「うん、やっぱり着てたら夢中で掴んじゃうもんね」

二人はそう言って、思い切りよく脱いでしまった。

乳房をあらためて目にして、敬一の血が騒いでいた。

「ワァー、こんなに白いわ。ここだけ陽に当たってなかったもんね。まるでブラジャーしてるみたいじゃない」

と言って、和子が両手で豊かなそれを押し上げるようにした時、彼は思わず視線をそら

していた。

そして、精いっぱい心を静めて言った。

「さあ、あと二、三番取ってみろ」

○

次の取組は、和子があっさり引き落として勝ち、その次は、みよ子がこれもあっさりとして首投げで勝っていた。

勝負が早く決まったことと、四つに組まなかったことが、彼を救っていた。

だが、最後の相撲は、四つに組んでいた。右四つであった。

腰を落として機を伺っては投げに出、或いは寄りに出て、二人が胸を合せる度に、敬一は反応した。

そして、両の手にしっかり握られたマワシが、ぐいぐいと引かれてズレ上っていく度にその反応は強まった。

二人は土俵際で激しく揉み合い、強引に寄って出た和子に、みよ子は土俵につめられていた。

みよ子は必死で和子のマワシを引き、寄りこらえようとした。

しかし、大きくズレ上ったマワシは、いくら引いても効果がなかった。

みよ子は片方の手をマワシから離すと、夢中で和子のパンティを掴んでいた。

敬一は思わず拳を握りしめた。

ビリッと、布の裂ける音がすると同時に、

女体は折重なって土俵の外に倒れていた。

○

その夜の彼のみた夢は鮮烈であった。

二人は、交替で敬一にかかっていた。

そしてそれは、常に四つ相撲であった。

○

二人との生活が瞬く間に過ぎて、夏休みの終りまで三日を残すだけになっていた。

敬一と、そして相撲とに名残りを惜しんだ

二人は、彼に勤めを休んでくれと言ひ、三日続けて、昼も夜も土俵に上った。

そして最後の日、二人は何と二十九回も土俵に上ったのである。

○

二人は、初めてマワシを締めてから三日目には、パンティまで脱いでしまっていた。

掴む所がマワシ以外にあると相撲にならないし、あまり何枚も破れては経済にひびくということからであった。

二人の持ち金にそれほど余裕はなかった。

二人は敬一には迷惑をかけたくないと言い、食費は彼の分まで出していた。

初めて、マワシだけの姿になった時、彼は

二人が取組む前から落着けなかった。

三日もすると彼も慣れたが四つに組み合せて激しく揉み合ったり、マワシを引き合せて土俵際で争う時など、やはり平静ではいられなかった。

だが二人の技は上達していて、動きも一層速くなって、男顔負けの相撲を取るようになったことが、彼に反応を起こさせる余裕を少なくしていたのだった。

二人は、慣れぬマワシで股ずれをし、痛がっていたが、いったん土俵に上るとそんなことは忘れていたようであった。

また、二人ともあちこちにすり傷をしていたが、それも構わぬという風であった。

二人は完全に相撲のとりこになっていた。

○

今や彼は、女そのものをまで見直すようになっていた。

彼の中に根を張っていた既成の女性観は完全に崩されたのだった。

それは、二人が男以上に激しく、しかも堂々と争うからだけではなかった。逆に、二人だけが特殊な女ではないということを再確認したところからもきていた。

二人の、土俵を離れた時の動作の中には、あちこちに女らしさが、前よりも感じられるようになっていたのである。

尤も、その女らしさとは、自分が女であることを意識して、示そうとしているものではなかった。

立居振舞の中に無意識に表われるものであり、彼に対しては前より一層自然に、妹のような感情で二人は接していた。

二人は、彼が勤めている昼の間、少なくとも二時間は土俵に上り、そして夜は彼の前で一時間は取組んだ。

そこだけが陽に灼けずに白かった部分も、いつか、そのきわだちを消していた。

二人の身体は、見てそれと分る位たくましくなっていた。力を入れた時、太腿に腕に背中に、筋肉がぐりぐりと見える程であったが体重だけは増えるのが嫌らしく、二人は食事の量に注意し、彼に買って貰った体重計に毎日のように乗った。だから体重は、みよ子は二キロ、和子は一キロ五百しか増えていなかった。

○
二人は、「来年も絶対来る、来させて欲しい」と言った。

しかし、二人の上にどんな都合が起るかも知れなかった。

最後の三日間。或いはこれで見納めかも知れぬと思う敬一の胸には、いい知れぬ氣持が渦巻いた。

二人が見事な技を見せたりする毎に感慨は深まり、二人が或る姿態を見せる度にその昂奮は高まった。そして、二人との生活が一刻一刻と終りに近づくにつれて、感慨と昂奮はいつかひとつになり、全身に渦巻いた。

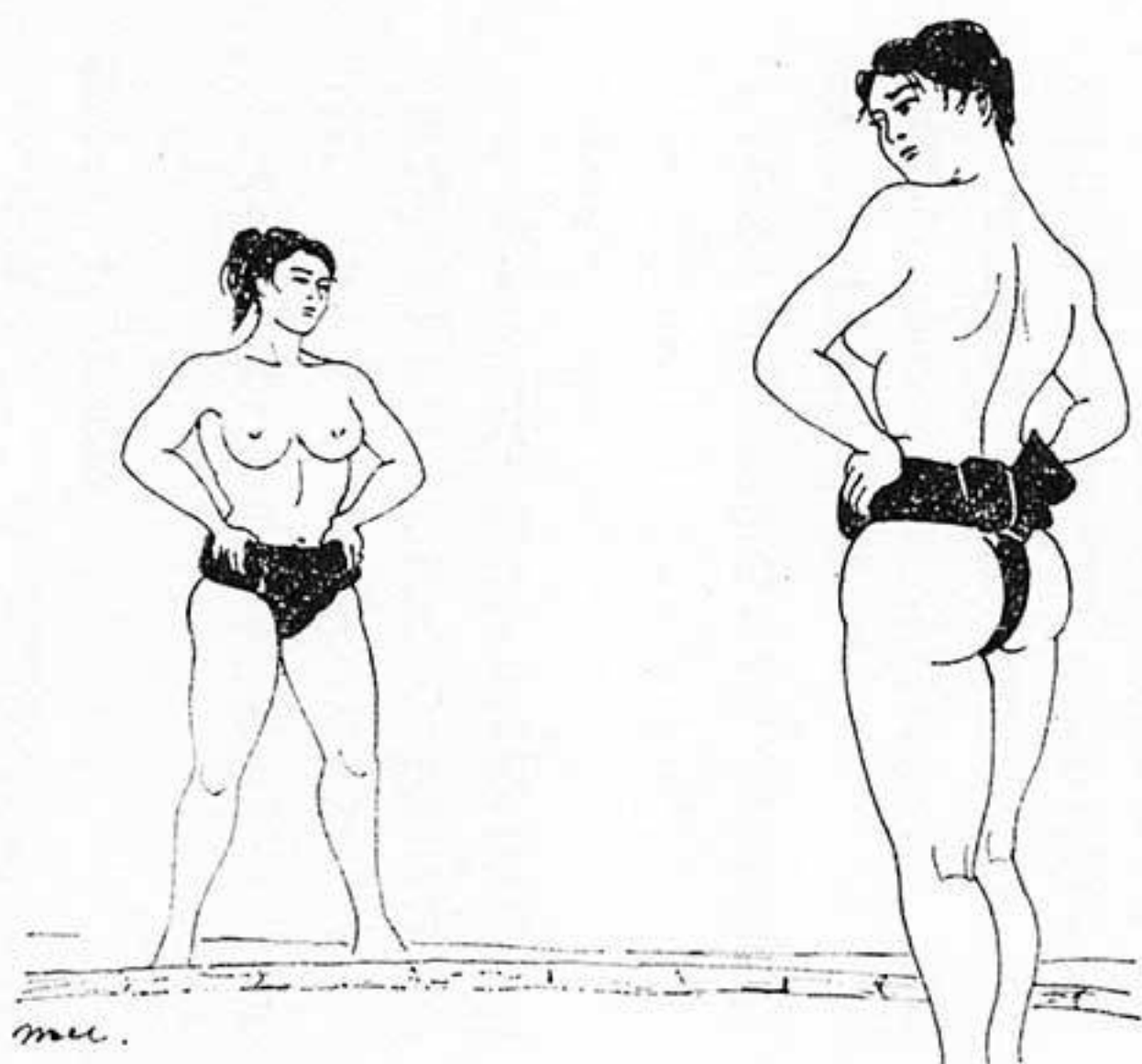
○
二人は、その日、二十九回取組んで最後の星を争うのだと言った。

「まさか、そげん取組めるもんか」

と言う敬一に、和子が言った。
「続けてなんて、とても出来ないわよ。朝昼を九回ずつ、三度に分けるのよ」

みよ子は、
「それでも疲れるかも知れないけど、私達いの、疲れても。だってもう今年はこれで終りなんだもの」
と言った。

最初の土俵は、朝、七時から始まった。敬一の提案で、土俵上の礼や仕切りのやり



方などは、すべて大相撲の通りにすることになった。塩や水も用意した。

最後でもあり、また、ちゃんとした星争いにはそうすることは必要でもあると思ったからであった。そして、三度取る度に適当な時間、休ませることにした。

二人は、初めのうちの三回ばかりは、角力取りよろしく、四股を踏み、塩をまき、そして仕切ることが嬉しかったのか、白い歯を見せていたが、それはいつか、きびしい表情に変わっていた。

早朝の取組の間、敬一は感慨こそあれ、さしたる昂奮はなかった。

最初の勝負は、和子が五勝四敗で勝った。みよ子は初めの頃と同じように押しに強かった。和子は、みよ子の腰を落としての押しには、どうしても勝てなかった。力と体重の差は、ひと月経っても埋められなかった。

しかし、敏捷な和子は、引き落としや、はたき込みで屢々みよ子に手をつかせ、投げ技や足技を効果的に使うことにも優れていた。

組んだ場合は、みよ子がやや有利で、特に右四つになると歩があった。だが、左を入れると和子が強かった。

だから、全体として見れば二人は互角と言

って良かった。

○

十時から始まった次の勝負は、敬一を屢々強烈に反応させた。

それは、四つに組んでマワシを引き合う相撲が多かったというだけからではなかった。

彼は始めて、汗みどろの女体から立ちのぼる女の匂いを知ったのであった。

裏庭には木立がおおいかぶさっていた。

しかし夏の太陽は木の葉の隙間からギラギラと照りつけた。

必死に揉み合う二人の肌には、忽ち汗が噴き出していた。

それは三回目、二人が右四つに組んで激しく投げを打ち合った時であった。

立ち上り、和子の手をはね上げるようにして右を入れたみよ子は、すばやく上手、下手

を取っていた。しかし、その腰が高かったため、和子にも両マワシを許していた。

みよ子は、いきなり上手投げをかけた。

だが和子はそれを残し、逆に上手投げに出た。それを今度はみよ子が残すと、二人は土俵の真中でぐっと腰を落としてマワシを引きじっと動かなくなった。

汗が、頬に背中に、玉となって流れた。

和子が、「ソレッ！」と声を上げて寄って出た時、みよ子は身体を左に開き、鋭い気合をかけて下手投げを打った。

和子は身体を浮かせたが、危くこらえ、逆に上手投げを掛けていた。だがみよ子も良くこらえて、投げの打ち合いとなっていた。

行司役の敬一が、土俵中を右に左に動き廻らなければならぬ程、二人の投げの応酬は早く激しかった。

ハッと思った時、和子の身体がぐらっと傾き、その脚が彼の直ぐ目の前を風を切ってよぎった。

その何とも言えぬ匂いを知ったのはその時であった。

それは、風に乗ってフッと匂った程度で、決して強烈なものではなかった。

若しそれが強烈なものであったなら、そして或る種の特殊なものであったなら、彼はとうに知っていたであろうし、嫌悪感を持ったかも知れなかった。

それは、土俵の外に居ては分らない程度のその日初めて土俵の中に入って、しかも鼻の先をよぎって初めて知った程の、ほんのりとしたものであった。

○

それが、ほんのりとしたものであったからこそ、敬一は強く反応した。

そしてその反応は、『今日が終りだ』という感慨によっていつまでも持続し、そして強まった。

それから三番、四つ相撲が続いていた。

しかも、その動きは少なく、二人は、がっぷり組んだまま、じっと相手の隙を伺った。

隙を見た方が攻勢に出た。だが今度は、何故か、投げに出ることが少なかった。

勝負は大抵、寄りか吊りで決まった。

完全に慣れていた筈のマワシ姿にさえ身体を熱くする状態になっていた所へ、二人は、これ見よがしに揉み合い、マワシを解けんばかりに引き合った。

三番続いた四つ相撲は、先ずみよ子が吊り出しで、次は和子が寄りから外掛けで勝っていた。

敬一の身体に熱く渦巻いていたものは、最後にみよ子が、土俵際で粘りに粘る和子を寄り倒した時、正に敬一を静止していることから難かしくしていた。

彼は、二人に、「休んで居れ。手洗いに行つて来るから」と言い、家へ上った。

何度か深呼吸をしてようやく気持を整えな

ければならなかった。全身が汗まみれで、シャツやズボンの表面にまで滲み出ていた。

○

十時からの取組は、みよ子が今度は五勝して、どちらも星数は同じとなっていた。

二人は、互角であることを喜び合っていたが、反面、午後からの最後の勝負には「自分が勝つんだ」と、激しい斗志を見せていた。それは相撲好きの、親しい男どうしの場合と少しも変らなかった。

昼食が済むと、二人はさすがに疲れていた



と見えて、三時まで二時間も、ぐっすり昼寝をした。

その寝顔は、まさに安らかな女のものであった。

(8)

二人は、その翌日の夜おそく、歩いてその町を出た。

列車の通る町まで三十キロ、敬一もいっしょに歩き、リュックをかわるがわる背負って

やった。

二人は、朝早い急行に乗った。

列車が出る時、二人は涙ぐんでいた。

○

それきり、敬一は、女の相撲を目のあたり見ることはなかった。

だがそれは、二人がそれをやめたからでもなく、二人の上に都合が起ったからでもなく、そして敬一の側で、それを拒む理由ができたのでも

なかった。

それは、敬一の心と和子が特別の関係になってしまったからであった。

いっしょに居る間、敬一はどちらの女にも特別の感情をひとかけらも持たなかった。

どちらも美しく明るく、しかも素裸で対していたにも拘わらずそうならなかったことは、後で考えても不思議であった。

それは、「女の相撲」に熱中していたためとしか考えられなかった。

離れて始めて、敬一は二人を、特に和子を男として想うようになり、日が経つにつれて和子への想いを強くしていったのだった。

○

いつか、夢枕に立つ女は、和子だけとなっていた。

夢の中だけではなかった。

一人、高校時代のマワシを締めて土俵に立ちじっと目を閉じる時、前に居るのは常に和子であった。

臉には、そのはっきりした目と濃い眉が、束ねた黒髪が、そして豊かな胸と、スナリしたしかし逞しい脚が、はっきりと映った。

それが和子のものであったかどうか知る術もなかったが、彼の心の中にはんりとした

その面影を想い浮かべるのはいつも和子のものであった。

目を閉じたまま両手を差し伸べると、和子はぶつかり、マワシを掴み、盛り上った乳房を敬一の胸に押しつけてくるようだった。

そんな時、彼は思わずその名を呼び、我と我が腕を互い違いに差し込んでマワシをぐいと掴むのだった。

○

彼は、「女の相撲」を取るか、それとも和子を取るか、暫くの間悩んだ。

和子がどう考えているか分からないことも彼をためらわせた。月に二度は来る二人の手紙のどちらにも、特別の感情は表われていなかった。

いつか、冬になり、そして春となった。

彼は、思い切って和子に手紙で打明けた。返事は、十日経ち二十日経っても来なかった。

彼は悩んだ。和子を失うだけでなく、世の男達の中で自分だけが経験することのできる貴重なものをも失う結果になったかも知れないからであった。

敬一は後悔した。その夏まで待つて、二人の相撲をもう一度目にしてから和子の気持を確かめても良かったと思った。

二人は手紙の中で繰り返し、「また、よろしく」と書いていたのであった。

同時に、ふたつのものを失ったのかも知れないたまらなさから、敬一は毎夜のようにマワシを締めて土俵に立ち、我と我が身を砂に叩きつけた。

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

だが和子は、手紙を寄越すかわりに直接やって来たのである。

彼女は、敬一から手紙を貰うまでは、彼をいっしょに暮した時と同じように「兄貴」としてしか考えていなかったと言った。

だが、敬一の気持を知った途端に、それは強い恋愛感情に変わったのだった。

和子は、「どうして急に変わったのか不思議だった」と言い、「みよ子にも申し訳ないよ」で、暫らくは悩んだと言った。

「ここへ来る前の日、私、思い切って、みよ子に打ち明けたの。みよ子、最初は驚いていた。そして、そんなら相撲取れなくなるじゃないのと言って、暫く怒ってたわ。でも、彼女、分ってくれたの。相撲より愛の方が大事よねって。若し、私も敬一さんが好きだったら決斗になってたわね、きっと。と言ってたわ。私達そうだったら、お相撲どころじゃないねって笑ったの。でも本当に決斗になったら絶対に勝ってみせるんだけどな」

敬一は夢ではないかと思った。

「みよ子に感謝せんないかな」

そう言うのと、彼はきつく和子を抱きしめていた。

——（終）——



—— 文 及 カ ッ ト 牧 高 志 ——

誌上、ことさらに改まって「若い女性の晴着」だと断るまでもなく、昨今は、やや狂気じみた和装ブームとやらに便乗して、黙って「晴着とは」と指させば、それは「もう中振袖であります」と云う風に何んとなく自他共に容認されてきたことは、一面文句なしに嬉

しいことなのだが、とり分け今年の正月は、東京では極めて僅かではあったが、いかにも板についた、つまりあの七面倒くさい着物をよくもまア立派に着こなした若い女性群がチラホラ増えてきたことは、世に云う明治百年の余徳だろうけれども、常日頃、何んだ、か

んだと口喧しくのしる筆者共に取って、思わず善哉よきかな、善哉と賞讃したくなったことは、どうも真実のようである。

特にこうした、さながら水の上の泡のような、あるいは春先に消える樹水同様の風俗の変遷を、何んの因果か、動くアルバムと称して後世に残すべく、はやりの8ミリカラーで撮影する私が、ファインダーを覗いて驚いたことは、何から何まで先程の明治百年にあやかった訳でもあるまいが、春着の地色もさることながら、その表地に染め出した柄が、ひどく古典調となってきたことである。

御所車、扇面、亀甲、青海波、花菱と云ったところから孔雀、大輪菊の刺しゅうもの、さては手の込んだ匹田絞り風に染め出したもの、あるいは反対に古典模様をさながら、洋服の感覚で存分に着こなせるように大胆にデザインを変えてしまったものなどがあり、実に多種多彩なのはよいとして、一方、着物の地は、おとなしい一越風の縮緬地より、やっぱり綸子や緞子綸子地と云ったものが多く、わけでも、地色は従来からの白一辺倒からブルー地、グリーン地、イエロー地、(だから遠くから見ると御存知、交差点の交通信号灯が歩いて来ると悪口を云った人も居るが)そ

れにピンク地、おまけに、もう一つびっくりさせたものに、何と白昼、緋縮緬の長襦袢ならぬ、赤信号的緋紅色地の振袖（緋赤の綸子だと云う）が堂々まかり出たことであつた。

このような情景は、何も東京だからと云うのではなくして、戦争の全くない平和な日本国中、何処へ行っても恐らく見られたことと思うが、呉服の都、京都の一角で、今年の流行は、あれにしましょうや。一つ、交通安全色というのはどうや。いや来年は思い切つてあれにしては……などと雁首を揃えて密談を交している染色織元筋は、馬子にも衣裳をずばり指して、さぞやニタリと、ほくそ笑んだことであらう。

ところで、今度は締める帯の方はどうだろうか。これはもう、ここで云うだけ野暮で、猫も杓子も申し合わせたように黒地に金銀糸、エンジなどの色系で織りあげた袋帯を、ふくら雀型結びに、やつこらしよと背中に背負いあげたものが圧倒的に多く、云うなれば、ここ数年マンネリで、やや型に嵌った感がないでもないが、いわゆる完成された帯の姿態美としては正に天下一品。東京オリンピックを皮切りに、今では国際線の飛行機中にまで持ち込まれて、全世界の賞讃を浴びていると

いう代物だけあって、お顔の点は兎も角、その後姿を眺めては、どなたも改めて惚れ直おすというから事は重大……こと程左様に、近世のし上った結び型なのである。このふくら雀結び風の帯型に、今年はどう云う風の吹き廻りしか、大正末期から昭和初期頃までに最盛を極めた、一言に云つて巾広の赤い帯揚げが俄然、多くなったことだ。今でもこの風習は、満更ないでもない。何処の結婚式場でも、花嫁が一たん色直しをすれば、大抵この赤い帯揚げを「入」の字に帯の上へ高々と結ぶであらうし、また花柳界で芸者衆が出の衣裳をまたとえば、必ずと云つてよい位、真紅の帯揚げを帯の間からのぞかせる。それが安直に晴着に舞い戻ったのだから、誠に嬉しいではないか。東京では明治神宮や浅草観音の仲見世を歩くと、十人のうち三、四人位が、赤い帯揚げを高々と結んでいた。いや、こればかりではない。今一つ喜ばしい？ ものに、それが紋羽二重であらうと、古めかしい錦紗地であらうと、ないしは高級縮緬地であらうとも文字通り緋一色の燃えるような長襦袢を着た女性が意外に多く（と云つても全体に較べると、まだ少数ではあるが）見られたことである。それが不思議なことに日頃、白粉気の少

ない官庁街とか何んとか問屋筋とか云つた処の若い女性層に愛用？ された事だ。もっとも中には親譲りのものもあつたに違いない。また、お正月だから中振の下に着れば文句なしに暖いだろうし、お腰代りにパアッパアッと蹴出したって、時節柄おかしくもないから、一度着て御覧なさいよ、思い切つて着てみたのかも知れない。

筆者が云いたいのは、こうした曾つて一世を風靡した緋色の長襦袢が、お齡を召した懐しのメロディの小唄勝太郎姐さんの、天竜下ればの市丸姐さんなどに慣習的に愛用されたのではなく、改めて近代女性に堂々と着用された点を高く評価？ したのである。

ところが、話はこれより少々落ちてくるが、こうまで万事が日本調になつて、最早や単なるイミテーションでなく、大時代的な丸鬘や高島田までチラチラするようになってみると、さて長襦袢の下は精々裾除すそよけ（なかなか上品な言葉ではあるが）で万事よろしいんだではいかなくなりそうである。ちよつとした婦人雑誌か週刊誌をのぞいても、例のパンティという奴やつが存外、邪魔立てして、着物を通して出た何んとも云えない腰の線が、ガタガタになると云う。そうでなくとも、市販正絹100

%の晴着は、もともと薄いのだから、そこは今更、嫌やだワ、あんなもの……などと云わずに、思い切ってオーソドックスなお腰巻^{こし}を巻くべきではあるまいか。つまり晴着に関する限り、彼の無防備極まる腰巻をしる、いや、お巻きなさい……と云うのである。

ところが成程、理窟ではそうであっても、このお腰姿なるものは、先ず望み薄であった。筆者がカメラを、まるで機関銃のようにふり廻わし、乱写乱撃しようとも、妖美なお腰は、ついぞ出ない（この場合、若い女性層に限るが）ばかりか、あらぬ艶消しの部厚いメリヤスなどが徒らに陰翳して、興を殺^そいってしまったのである。

筆者は想うに、少なくとも流行を左右しようとするには、えてして統一性を抜きにして、てんでに勝手気儘に思いついたことをやるから、折角オーソドックスな優雅な着付になつてきた処に思わぬ水が入って、長襦袢の下は着慣れたシュミーズでそのまま済まされてしまい、一方、晴着屋は晴着だけに専ら執着して、私共はお揃いのお長襦袢まではお世話致しますが、昔ながらのお腰などは美容師さんの方と、よしなに相談下さいまし……では、余りに無責任極まると云うべきだろう。

京の一角で、日本の晴着の流行をどっさり牛耳りたいのなら、店内に幾つかのモデル人形を置き、素肌に半襦袢、お腰、腰紐、裾除、長襦袢、腰紐、伊達締め（巻）晴着（中振、本振袖）、腰紐、袋帯でご存知ふくら雀結び、帯締め、帯揚げ……を、否この人形は一寸、違えてみました、御覧なさい。極薄手の和風股開きのパンティはさせますが、真紅の縮緬のお腰だけで、いきなり晴着をその上から着せます。実に大胆^{だいたん}ではありませんか。そして帯は新装帯に似たつくり帯（結び帯）のふくら雀結び帯を身体にぴったりとくっつけるだけです。第一、羽根のように身軽で、今様くめ仙をエクサイトするには充分なコスチュームと申せましょう。現に、夜目遠目傘のうちとは申しませんが、顔に気を取られてるうちに、あッあの女の蹴出したのは二部式の長襦袢だったろうか、それとも格調？ 高にお腰だったろうか、誠に判断に苦しむ？ ケースが多い。そんな時に、人形着付（本当の女の人間さまでもかまいませんよ）のA型だったか、B型ないしC型だったかの区別が咄嗟につきまします故、そう申しちゃ変ですけど私共の手で和装晴着に関する限り、この京の一角で日本国中の女性の姿態を御覧の通り自

由に牛耳ることが出来るンです。流行だつて、ほんの朝めし前ですワ。来年あたりは一つ、真黒い晴着（決して喪服ではありませんよ）を作って御覧に入れます。今年、東京あたりでチラホラした、総紫地の晴着なんぞは、その走りだと申してよいでしょう。さしずめ、豪華忍法くの一、EXP 70型衣裳とでも名付けて置きましょうか……位に、天下にうそぶいて貰いたいものである。

まだある。今年になって（筆者だけの感じかも知れないが）和装の晴着そのものに、コンサルタントの必死の援助や助言が効を奏した（かどうかは判らないが）、奇巧好みの緊縛美が漸く見え始めたことである。勿論、本縄の緊縛姿が、そのままの恰好で初詣する訳には行かないが、目には見えない、それでいて、ひしひしと若い女性の肉体を締めつけた、否たとえ上半身だけでも、ていよくがんじがらめにされた女性の何んと多かったことか……このことについては、古留節人氏が詳細に触れられているが、いわゆる拘束美の本体が結構、街頭に氾濫？ したのは事実である。結論を急ぐならばおよそ晴着を代表とする和服は、一にも二にも着崩れするのが怖かったら、もう何本と云わず細紐で文字通り目茶目茶に

身体を縛ってしまえ。そうよ、それが当然なのよ。ううん、抵抗なんかちっとも感じないわ。だって私達をふくめて女は、もともとそうされるのが好きなんじゃない？ なんて悟さとって頂けば甚だ結構だが、中には朝日新聞昭和四十四年一月十六日東京版で報ぜられたように、成人の日に例のきものコンサルタントがデパートで着物の着付無料講習会を開いたところ、「苦しい、何んとかして……」と妊婦同様、肩で息をしながら飛び込んできた娘さんの帯を解いてみたら、普通三本で済む細紐を六本も使って「胸と云わず、腹といわずキリキリ巻いていた」(原文のまま)という、裏の裏を行く一駒もあった、そうなの。

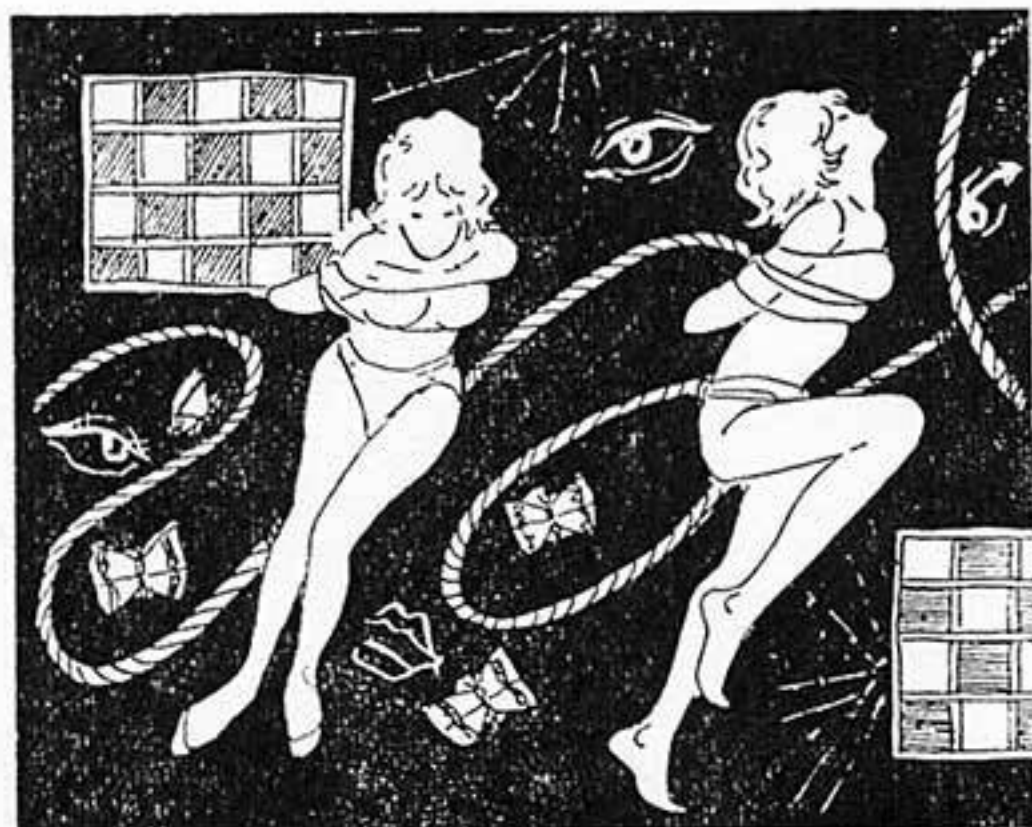
この一駒などは幸か不幸か、恐らく余り着物をご存知ない戦中、戦後派の女性に囲まれて、駄目駄目、途中でトイレに入ったら、そこそこからすぐほどけるから、どうしてももう一本締めなくっちゃ……序でにお乳の下も、このお腹の上も下も……と古留氏ご指摘の通り、胴中深く、それは厳しく食い込んだものらしい。こういう姿態で弱音を吐かず、仮にじっと耐え忍ぶ女性ばかりだったら、もう云うことなし、百点満点である。実は、ほんの瞥見べっけんに過ぎなかったが、このよう

な若い女性群に、それらしく遭遇したのだから、明治百一年は誠に有難いと云わざるを得ない。有難いので今一つ申添えたいことは、従来、半衿は真白いものだとされていたものが、TVドラマなどの影響で、ぐっと明治調の色もの、刺繍ものが、またまた流行し始めたこと。また、これはそもそも有難いかどうか、筆者も今のところ大いに迷っているものに「左前ひだりまえ」に晴着を着た娘さんに一人と云わず数人も、この広い東京の一角でぶつかったのだから、大いに驚嘆した。どこかの大学騒動ではないが、瓢箪から駒、正にきもの界の革命だと云ってもよいかも知れない。ぶつかりついでに、詳細に観察してみたら、偶然の一致かも知れないが、揃いも揃って濃ピンクの長襦袢に、同色の蹴出し(裾除けかも知れないが、どうもいわゆる、お腰ではなさそうだ)をしていた。

最後に、これは恐らく今まで放談した各論的な分野を打って一丸とし、総合したものになりそうだが、ご存知、胸高帯の形相が最近、又ぞろ目立ち始めたことである。逆に申せば、下半身の全く無防備化を強調(するの余り)あなたまかせの姿態となりつつ、その総力をあげて上半身の万艦飾化ぜいに贅を競い始め

たことをずばり指すが、つまるところ、男性側が垂涎にたえない両乳房を中核とした胸部一帯を、最終的に重厚な帯と帯締めとそして帯揚げとで完全に制圧、かつ強烈無比に圧迫し、その反動として帯下は前方に対しては、ふっくらとした腹部をいやが応でも膨出させ、後方に向っては、あの扁平な臀部を突出させる結末となる。だから美醜を問わず、若い女性のあのふっくらとした腹部を眼前に髣髴ふふさせたいのなら、そして併せて妖艶極まる臀部をとくと拝見したいのなら、すべからく人間女性としての姿態のアンバランスを百も承知の上で、まずは紐、伊達巻類に依って、あらかじめ占拠された胸部一帯を、さらにさらに緊縛し圧迫する要があり、このことは単にこれだけの問題でなく、いわばサジスチックな多目標的な目的も同時に達成？ されるということになるのである。

従って正月、成人式、卒業式、結婚式、その他、もろもろの祝祭典に召されるであろう女性の和装晴着は、有形無形的にも、筆者などに取っては測り知れない程の宝物なのである。そのトップ級の宝物に対し、お茶のこさいさい、無責任極まる放談を自問自答とは云え重ねたことを、深くお詫びする次第である。



(一)

「ひとみちゃん。……ねえ、ひとみちゃんっ
たら。あんた、聞こえないの……」

甲高いマダムの声が、何気なくぼんやり振
り向いた町子の顔に浴せかけられて、町子は
思わず、はっとわれに返った。

——そうだ、今日から私は「ひとみ」になる
んだっけ——

意地の強さを眸にこめて射すくめて来るマ
ダムの視線にどぎまぎしながらも、それでも
媚びる様な姿態でそれに応えながら、町子は
客待ちのボックスから立ち上って、急ぎ足に

懸賞「創作」入選作品

ヌードモデル

(上)

鬼 談 仏 心

カウンター越しのマダムと対い合う。

「済みません。何だか、自分のことでないみ
たいで……うっかりしました」

六時には一寸間のある時間で、この地下室
のバーに出勤して来る女の子も見えず、バー
テンダーの吉見だけが、仕入れのつまみ物を
数合せして居る。

これから脂粉とアルコールと音楽の充満す
る夜の賑わいを迎えようとする前の、ひっそ
りと静まり返った冷たい空気が、華やきの裏
側を見せつけるように、却ってそれだけ今の
静寂が異質な感じで、濁った空間にわびしさ
をしんと沈ませて来る。

「あんた、今日からはこの店の「ひとみ」な
んだから、早く雰囲気馴染んでくんなきや
困るよ」

「はい、気をつけます」

ここ半年ばかりの間にようやく身につけて
来た女のしおらしさが、白々しい嬌態に滲み
出て、幼ない艶めきが、ちらりと襦袢の襟元
から白く匂い出す。

そんな町子の身体の線をじっくりと撫ぜ廻
す様に眺めながら、

「だけど、あんた、子供の割にしちゃあ水っ
ぽいねえ、めばりにしても口紅にしても、化
粧の勘所はしっかり押えてるよ」

マダムの言葉に吉見が

「本当に良い顔してますね。男好きがするって云うんか。きっと、客受けしますよ」と相槌をうつ。

「吉さん、あんたも手が早いんだから、慎しんでおくれよ。店の女の子は商売物なんだからね。今度、変な色目なんか使ったら、勘弁しないからそのつもりでいてよ！」

苦笑いに誤魔化して、吉見が水汲み用バケツを取りに物置へかくれる。

「あんたにね、似合いそうな服を買って来たから、一寸、試しに着てみて御覧。よけりゃ借してやるよ」

「あら、入ったばかりなのに気を遣って戴いて済みません。何だか悪いワ」

「礼なんざ云うこと無いやね、お客の喜びそうなりして、どんどん稼いで貰わなきゃあね——あんたには、最初っから、他の女達より高い給料出すんだからねえ……」

町子は昨日、求人広告を頼りに初めてこの店に入って来た時、自分を面接してくれた三十半ばの「先生」を思い出して居た。

色白の細っそりとした美しい顔立ちが、口数の少ない物静かな物腰態度と調和して細く眼尻の切れた瞼の奥から、時折、きらっと光

る眸の印象の強さに、何か、ニヒルな冷たい雰囲気を持った「先生」だった。

マダムの耳打ちに軽く首を横に振って、無言の終、指先で一寸テーブルに書いた数字が町子の給料に決ったものと思われた。

それが町子の予想よりも多かった事で、町子は金銭拔きの好感を先生に抱いた。

「先生は、今日、みえるんですか」

「そんな事はどうでも良いだろ。それよりこの服、着せてみるからついておいで」

太り肉のマダムの後に従って、町子は階段を降りて地下二階の倉庫へ入った。

「ここも、うちのお店で使ってるんですか」

物珍らし気にあたりを見廻す町子に取り合わず、マダムはさっさと電灯のスイッチをひねって服の包みを解き出した。

十五坪程の一隅に黒白の布地が吊され、その前に二坪ばかりのモデル台が扇形にしつらえられた、粗末なスタジオがあった。

ライトのセットも七、八つ置かれて居る。

「ここで何時も写真撮るんですか？」

「あんたはベツにモデルをやる訳じゃないんだから、関係ないよ。それとも、やって呉れるっていうんなら、人手が足りない時だから歩合も相当、上げられるんだけどねえ」

「私、自信ありません。それに恥ずかしくて、とても駄目です」

「そりゃあまあ、どっちだって構わないけれど。いいから、早くこれ、着て御覧」

「はい」

黒のレース編みの支那服だった。

「何をもじもじしてるんだい、誰も見て居る訳じゃあないし、私と二人っきり。女同志じゃないか」

町子は思い切って着物を脱ぎ、支那服に手を通した。

「この頃の娘は、そうやって和服着ても、ブラジャーとパンティはつけてるんだね。そんなものしてちゃあ、身体の線が崩れて和服の色気が無くなるんだよ」

町子は脇腹の飾りボタンに止め紐をかけて立ち鏡の前に立った。

「あら、困るわ、ママさん。これ、ここん所が、こんなに開いてちゃ、ほら、脚がそっくり下着迄出てしまいます」

「何よ、その位い。それはね、お客さんが喜んで呉れる様に、私がわざわざ仕立て直して上げといたのよ」

「でも、これじゃ恥ずかしいわ。お願い、直させて下さい」

「あんた、そんな甘い事を考えててどうするのよ。他人より高い給料取って……それに、この店じゃこの店なりのムードがあるのよ。中には自分からすすんでモデルになって、裸を写真に撮らせてサービスしている女も居るのよ。商売をやって行くってことは、そんな生易しい事じゃないんだ。あんたもその位のことは承知の上で、昨日、アパートの権利金とかって、前借りして行っただけでしょう。この位の支那服を着ることぐらいが何よ。なんでもないじゃない」

満で十七才の誕生日を後四カ月先に迎える町子にとっては、何と云われても気が進まない事だった。

「あんたも、海へ行きゃ水着だけになるんだろ。それに、体操の時間だって恥ずかしがって居たかい?——第一ね、あんたは、身体の線がきれいだし、今、うちに居るどのコよりも、脚の形が良いから幸せだよ。威張ってその美しい脚の線をお客に見せて良いんだよ」

町子は、地下室の異様な雰囲気の中で逆らえぬ何かを感じて、その俛、首を項垂れて立ちすくんでいた。

「私ね、あんたに一度訊いてみようと思ってただけど、——あんた、生娘かい? それ

とも男知ってるの? 大抵は私の眼で見りゃ分るんだけど、あんたは一寸分らないわ。生娘にしちゃあ、色っぽい所もあるし、かと云って化粧落して来た昨日の顔見りゃ、まるで幼ないしさ。それに、恥ずかりがり具合なんぞ見りゃカマトトには見えないし。本当にあんたって人、分らないね」

暫くの間、気詰りな沈黙の時が流れた。そんな息苦しさ、切り目をつける様に、マダムがぽつんと呟いた。

「あんた、先生に惚れちゃ不可ないよ。昔は私もあんたみたいに小柄で、肥ってなかったんだ。先生の好きになるタイプだからね。若し惚れたら、私が許さないからね」

和服に着替えようとする町子の手を、強い力で押えつける様にしてマダムが云う。

「今日から、この服で働くんだよ。靴は貸して上げるから」

「でも、下着の支度して来なかったんです」

「そのままでもいいの。これからだってスリッパなんか着たりしちゃいけないよ。靴下も駄目。素足の俛で出なきゃ折角の私の好意が台無しだからね」

いきなり荒々しい力で町子のブラジャーが外された。

「あつ、ママさん、何するの」

町子の乳房が、マダムの両掌に驚きみにされて、擦ったいた様な激しい疼痛が、町子の身体を貫いて走った。

「やめてッ」

その声にあっさり手を離しながら、

「あんたが余り可愛いもんだから、つい嫉ましくってね。ヘンな気になっちゃったんだよ。驚かしてごめんね。許しておくれよ」

そつとマダムが囁きかける。

二人は廊下へ出た。晩秋の冷気が町子の火照った頬に心地よく、沁み入る様だった。

階段を上りながら何気ない振りで話しかけて来るマダムの熱っぽい息を耳朶に感じながら、町子は先刻の衝撃が、何時迄も払い退けられない激痛の様に、身体の奥深く重々しく沈んで来るような気分悩まされて居た。

「あんた、きれいな肌だね。今夜から本当にこの店の“ひとみ”になっておくれよ。あたしゃ、とってもあんたが好きになりそうだよ」

明い階段の電灯の下で、町子は、透き通る様なレースの支那服のこの肌ざわりが、自分を裸に引きむき、汚辱の刑場へ引き立ててゆく手枷足枷であるかの様な錯覚にとらわれて

これから繰り返されるであろう毎日が、おぞましい不吉なものに思われて来た。

そんな熱した脳裡の中を、逃げ出して来た家の義父の顔がちらりと横切り、その義父の顔へ被さる様に、“先生”の冷たい切れ長な眼差しがダブってきて、訳もなく身体の蕊が火照って来る自分が忌まわしいものに思われて堪らなかった。

(二)

「君、さっきのツイスト。なかなか堂に入っ
たもんだねえ」

「あら、見てらしたの。恥ずかしいわ」

「君もそろそろ慣れて来たとみえるね。もう
一カ月以上たつだろう」

「ええ。でも、まだ今でも何だか夢中ですわ。

私って、お客さんのお相手には向かないんじゃないかって、時々考えるんです」

「そんなことないよ。僕だって、君がこの店
へ入ってから、以前よりずっと熱心に通い始
めた位だからね」

「社長さんは、可成り前からこの店の上客な
んですってね。一カ月に一回か二回、来られ
るだけなのに、ママもバーテンも、最高のお
客さんだって、いつもお噂して居ますのよ。

でも、お若いのに立派な会社の社長をなさっ
て居るなんて素晴らしいわ」

「よせよ。君がそんなお世辞云うと、何だか
君らしくなくなるみたいで変だぜ。けれどな
最初、君を見た時は驚いたな。未だ子供の様
にあどけない顔して居ながら、支那服の透き
通る様な着てて……。そう、今夜のこの服
に似たようなのだったね。まるで身体が見え
ちゃうんだから。それが、ヌードで見るより
チャーミングだね。なんと大胆な娘だろうっ
て思ったよ」

「そんなお話よして。……そりゃ少しは慣れ
たからいいけれど、でも社長さん見たいなハ
ンサムな方に云われると、今だってとても恥
ずかしいのよ」

「いや、こっちの方が圧倒されちゃうよ。今
だってツイスト踊ってたろう、支那服の脇が
腰の辺迄開いちゃって。どうかすると、コス
チュームだけ付けたヌードダンサーが踊って
るみたいでさ」

「嫌だわ。他のお話にして、お願い」

「君の様な娘が、“コトナ”って云うのかも
知れんなあ」

「“コトナ”ってなあに？」

「肩から上は、子供の様に無邪気であどけな

いくせに、身体の方は立派な大人で、男を泣
かせるそうだよ」

「意地悪。私、お乳だって未だ大人と子供の
間位だよ。それに、社長さんの様に、沢山遊
んで居ません」

「でも、腰の辺から太腿にかけて、とても引
き緊った良い形をして居るよ。スポーツかバ
レーでもやった事あるの？」

「ええ、体操は学校の頃、ずうーっと選手だ
ったんです。モダンバレエも小学校に入る少
し前から先生に付いて教わりましたけれど、
この頃、ずっとやって居ません」

「それで筋肉が鍛えられて、きれいな線を出
して居るんだねえ。ところで君は、ここじゃ、
モデルの方はやらないの？」

「ええ、最初からお断りしてあるんです。こ
この先生も、その方がいいっておっしゃって
下さいますし。……でもね、ママさんは、何
度もモデルになりなさい、って云うんです
よ。拗っこいくらい」

「うん、それはママにも聞いた。でもね、僕
も君がヌードになったら、何だか、イメージ
がこわれそうで嫌だな。しかし時々はそんな
気持とは反対に、君のその素晴らしい身体の
線を、心ゆくまでにファインダーを通してし

やぶり尽してみたい、って誘惑に駆られる時もあるんだなあ」

この店での最高の客として、鄭重に取り扱われて居る青年社長の端正な顔立ちの中から、眼差しだけがきらりと光る。ひとみは、その端正さの中に、男の激しく燃え沸ぎる欲情を感じて、瞬間、ぞくっとするような衝動が、冷たく背筋を走り抜けるのを感じた。

感じながらも、ほろりとした酔心地の身体の蕊が理由もなく、かあーっと熱く火照り上げて来てとまどった。

「義父との時が、そうだった」

○

あれは今から七カ月以上も前になるだろうか。ひとみⅡ町子が、体操の教師との噂話を立てられ始めた頃、義父が、その真偽を問責して、頂垂れた俎、口を開かぬ町子に、いきなり平手打ちを浴せ、肩を掴んで押し倒した時……町子は義父の眸に親子の折檻以外の何か、別の感情が、激しく燃え上って来るのを見た。それは乙女心が直感的に感じ取る事の出来る、親子以外の生々しい動物的な焔の匂いだった。町子はうろたえながら、義父でありながら義父でない別の男に本能的な抗らいをみせた。しかし、その抗らいの中に無意識

な媚態をくねらせて居たことには気付かなかった。義父の中の男は、その媚態を感じとったらしく殊更に折檻の手に激しさを加えて来た。

折檻は執拗に続けられたが、町子はその加責に愛撫の変型を感じて居た。いや、感じて居たと云っては、嘘になるかも知れない。だが、その事は無意識の中の意識として、町子の身体に潜む「女」が、鮮烈に折檻の名を借りた愛撫を貪り求めていたとも云えよう。

ごろごろと畳の上を転げ回りながら、義父の手から逃れようとする町子の身体からは、何時か、高校二年の制服が、スリップがはぎとられ、スカートのむしり取られた時の数秒後には、乙女心の羞恥を包む何ものも残されて居なかった。処女を守ろうとする本能的な最後の抵抗と、未知の甘美を求めようとする本能的な艶まめきの相反した二つの欲求の中で、町子は身悶えし続けた。

義父の手が離れても町子は伏せたままの体をふるわせていた。幼ない捨て子の自分を育て上げてくれた、亡き義母に済まぬと哭いた。分け隔てなく、控え目に、自分に待づいてくれた二つ違いの優しい姉に大きな裏切りの罪を犯した悔に、身をよじらせて咽び上げ

た。虚ろな眼を見開いて空間を見つめ続ける義父に、言葉にならぬ言葉で、その獸化を罵り叫んだが、そんな表現の裏側で町子の心は躍って居た。

町子は家を出た。半年程、遠く離れたレストランにウェイトレスとして住み込んでいた。だが、ある日、義父が尋ね当てて来た。しかし、子供心から少女期にかけて、憧れの男性像として頭の中に住みついて来た義父の姿とは、別な男の姿がそこにあった。それは初老の疲れ切った男の彷徨の果てをまざまざと見せつけるものであった。

町子は、心の底を揺さぶられる様な惨めな懐つかしさに堪え切る事が出来なかった。それに堪え切るには、余りにも町子の心身は未成熟であり稚な過ぎた。

折角得た職場と住いを離れて、町子Ⅱひとみは、今のバーに落着き先を求めた。――

○

今、あどけなく頬を染めるひとみの心の奥深く、妖しい感情の起伏が大きく揺れ動いて居る事を、このスマートなプレイボーイの青年社長は知る由もない。

ただ、夢見る様な瞳を持った可愛気な、美しい肢体を貪り尽してやり度い衝動に駆られ

て、汗ばんだ客の掌は、極く自然な動作で、ひとみの肌を求めていた。

「あら、吉見さん、何か御用あるの」

その掌を軽く外しながら、ひとみは立ち上って、バーテンの吉見の所へ歩み去った。

「ひとみ、あのお客と余り深入りすると“これ”が角を生やすぜ」

小指をちらっと出して見せ、低声で吉見がたしなめる。

「だって、ママがあのお客の云う事を聞け、って何度も私に云ってんのよ」

「そりゃ、モデルの事だろ。うちのママも少しおかしい所あるけれど、あのお客も、あれでなかなか、変な趣味があるらしいぜ」

「男の人って、皆、そんなところがあるんじゃないの。吉っさんだって」

「子供の癖に、ませた口きくんじゃないの、一寸、表へ出なよ」

吉見は、何気ない振りを装いながら、ひとみを表へ連れ出して、一杯のコーヒーを待つ間に、ひとみの知らぬ内輪話の幾つかを聞かせて呉れた。

「うちの先生ってのは、美校出の若手写真家でね、卒業前から可成り売り出してたらしいんだな。それがね、その頃のモデルの一人と

恋愛して実家の反対を押し切って結婚しちゃったんだよ。その為、実家の方じゃ、一切の援助を打ち切るって云うんで、そのモデル……つまり今のママだね、そのママの希望通りにこの店を始めたんだ。

ところが資金がない。って事から、当時の自分のアトリエを売り払ったんだな。けれども、写真への夢が捨てられないんで、今の地下倉庫を借りてアトリエ代りに使う事にしたんだそうだが、それが、両方とも何時の間にかママの名義に変わって居て、先生も、そう云う事にこだわらない人だから、その俸になっちゃまったんだそうだ。その上、ここ三、四年、先生の健康が思わしくない。どうやら、心臓系統か結核関係らしいんだけど、これは我々には分らないんだねえ」

「私、先生、好きだわ」

「ひとみ。そう云う事は、気を付けて云わないといけないぜ。だいたい先生は、ひとみのような娘が好きなんだな。それで、余り口には出さない人だけれど、今迄にも問題を起した事が、俺の知ってるだけでも二回はあったぜ。ママは、嫉妬心が強い上に、少しばかり変ったところがあるから、相手の女は、酷い目にあわされたなあ。それに先生の病気だって、

何か、ママが細工してるんじゃないか、って噂があるんだぜ」

ひとみにはそれがどういう意味かすぐにはわからなかった。

「ところが、ひどい事には、最近、先生が自分、弱って来てから、ママは今の客……ほらあの若い社長に、相当、色目を使ってるんだな。もっとも、先方じゃ余りママには気がないらしいんだな。そこで、今度はサービスでやれ、って訳でね。そら、あのモデルやってるアケミ、うちの女の子だよ、あれが、頭の方は少しばかり抜けてるけれど、白痴美、って云うのかな、一寸、女優のSに似てるだろう。ほら、時代劇なんかによく出て来る目元の艶っぽい、男好きのする女優だよ——あれに似て居て、その上、少しばかりいかれて居て、お人好しというところに眼をつけて、モデルにして随分と酷い写真を撮らせてね。おまけに社長の女に仕立て上げよう、って骨折ったんだよ。ところが社長も、遊びには相当えげつない悪遊びをするんだけれど、あれだけの人だから、クルクルパーのヌードモデルじゃ、自分の女としてはお気に召さないんだな。そこで今度は、ひとみ、お前を狙ってるんだ。もっとも、そんな雰囲気を感じてか先

生が反対してるらしいぜ。そうなりゃ、先生が、ひとみに気があるんだらうって、此の間も、二人の間で一揉めして居た様だったな」

「アケミさん、どんな事されたの？」

「俺も一度、手伝わされた事あるけれど、呼ばれて入って行って驚いたねえ。――」

ひとみ、海老責って云うの知ってるかい。胡坐を組ませて、両手は背中へまわして縛るやつだよ。それも上半身が太腿に密着する程に緊め上げて放り出して置くってヤツさ。俺もここへ来る客の中で、女の子にそんな恰好させるのを何回か見たけれど、あんなのは真似事みたいないなもんで、それ程苦しくはないらしいんだが、それでも、裸の女があぐらを組ませられるだけでも恥ずかしいだろうに、海老縛りにかけられて横倒しにされたり、引っくり返されると、相当慣れて来ても辛いんだな。特に仰向けにされると、手首が床との間に押しつけられて痛いそうさ。大抵の女なら泣き出してしまうくらいなものなんだ。昔、ヒョンなことからズベ公の私刑に立ち会った事があるんだけど、その時は凄かったな。どうだ、こんな話、面白いかい？」

「うん、その先、聞かせてよ」

「丁度、ひとみ位の年頃の女だったけれど、

強情な女で、許してくれ、とも云わないんだな、そこで、その女が海老縛りにかけられたんだ。それも物凄いいもんでな、殆んど太腿が肩の辺りにくっつく程に縛り上げて、それをごろごろ、転がしながら、身体中、所構わず、バンドや、竹の棒で引っぱたくんだね。その後で、男連中が、入れ代り立ち代り嬲りものにして、それを女連中が囃し立てるんだよ。全部で、十二、三人居たかなあ」

「吉さんも、一緒になって手伝ったの？」

「そりゃ、多少の事はしなけりゃあ仕様がないだろ。戦争中、中国へ行った連中は、スパイ容疑の人間を捕えると、現地民の見て居る前で、スパイの両脚を二頭の馬に引張らせて股裂きにしたって云うからね。同じ、昭和の時代で、人間の残虐性なんてそんなに変わりはないさ。だけどね、あの時の女は、縄を解いてやっても気絶したままだったから、バケツで水を四、五杯もぶっかけてやったかな。そうしたら、漸く眼はぼんやりと開いたけれど、その俣ずうーっと動けなかったからねえ」

「……………」

「ところが、此の間のアケミの時が、よく似たもんで――いや、もっとひどかったかも知れないな。とにかく俺が行った時にゃあ、海

老縛りのアケミが転がされていて、殆んど意識がないんだね。その上、身体のおちこちが赤く腫れ上って居るんだ。おまけに、そんな腫れた所あたりには、半透明の薄い皮膜がこびり付いてるんだ、はがして見て分ったけれど、これがローソクなんだな。そのアケミの縄を解いて、長襦袢を着せる、って云うから、”もう終ったんだな”って思ったら、今度は、その俣逆さに吊り上げる、ってママが云うんだ。それを又、社長が何も云わずにファイルムの入替えをして居るんだよ」

「社長さんが？」

「そうだよ。いくら俺でも、あんまりだと思って最初は断ったよ。第一、あれ以上やるとアケミの身体がもたないからね。――けれど結局、天井に埋め込んであるアンカーボルトの滑車にロープを通して、後手縛りのアケミの脚を拡げさせて逆さ吊りにしたけれど、身体中の血が頭に下って顔は充血して来るし、薄ぼんやりと開いて居る眼がもう普通じゃあないんだ。俺はハラハラしたけれど、そんなアケミのとりんとした表情が良いなんて云いながら、社長の奴、シャッターを切り続けていたよ。――結局あの晩、社長は家へ帰らなかったんじゃないかな」

「……………」

「そこでね、アケミを降ろした後でママが社長に何て云ったと思う?——アケミの身体は少し硬いけれど、ひとみなら年も若いし身体も柔らかい。それに姿が良いから、もっと楽しめませんがねえ」って云ったんだぜ。その上、「うちの先生が気がある様だけれど」却ってそれだけ苛め甲斐がありますよ」ときたから、俺は驚いたんだ」

「……………」

「社長の奴、にやにや笑いながら、『安達が原の鬼婆みたいだね。まあ任せるよ。僕もあの娘は、必ずいいのが撮れると思う』って……だからひとみ、気を付けろっていうんだ。深入りしちゃあ危いよ」

「そう。そうだったの。……ありがとう」

思わず長話になって、冷え切ったコーヒを一口に呑み干すと、二人は申し合わせた様に腰を浮かせた。

「社長はもう帰ったかな」

そんな事を考えながら、ひとみが店のドアを押した時、時間は十時半を過ぎて居た。

(三)

店には、社長の姿は見えず、珍しく先生が

カウンターに後姿を見せていた。ひとみは、その後姿が懐しく思われて、何故か何年も別れて居た恋人に巡り合った様な錯覚が、何と云う事なしに自分自身をとまどわせた。

古参の明子に、

「社長さんは帰ったの?」

と訊きながら、先生の隣へ寄ってゆく。

「下でアケミの撮影よ」

唇のあたりに意味あり気な薄ら笑いを浮かべて明子はビールを奥のボックスへ運んで去った。ジュークボックスから「カスバの女」が低い調子で、どこか投げ遣りなリズムを流してくる。

——あなたも、私も、買われた生命、

恋して見たとて、一夜の火花——

盛りを過ぎた客足が、店の中に物憂い雰囲気漂わせてラスト迄の一時間はかりは、何時もひとみを味気なくさせて来る。

そんな時に、酒の酔いがまわってくると、

ひとみは、誰かが自分を確かりと受けとめて強く抱きしめて欲しい様な心の空洞を、ふと自分の心の谷間に垣間見る思いを味わう。

今夜は、一杯の冷えたコーヒの時間が、すっかりひとみの酔いを覚ましては居たが、却って吉見の話に刺激されたのか悪酔いの中

で荒野を漂泊する様な佗しさに救いのないやるせなさが残った。

軽く挨拶しながら、ブランデーグラスを両掌で暖めて居る先生の横顔が、堪えられない程に淋しく見えて、訳の分らぬ切なさがきゅうーんと胸をしめつけて来る。

「吉見、お代り……」

「先生、よろしいんですか?」

ヘネシーの壺から注ぎ込まれてゆく薄茶色の液体を見つめながら、自分の周囲だけが、急に、人一人見えぬ無限の寂漠の空間を、ぽっかり作り出して居る様に思われて来る。

下のスタジオから、インターホンを通じてマダムの声がカクテルを命じて来て、手早く盆の上に用意されたそれ等の誂え物を、吉見が運び去ってゆく。

「先生、お身体に、よくないんじゃないですか……そんなに召し上って……」

「君は、何故、そんな事云うの?」

先生の眼が訝し気にひとみに向けられる。「先生のお身体、お具合が悪いって話、聞いたかったです」

誰から聞いたのか、問い返す事もないままに、一息にブランデーを空けた先生の眸が、真直ぐに、ひとみを見据えて来る。

「君ね、すぐ、この店をやめた方がいいな」

「えッ？ どうして……」

思わず見返すひとみの顔を、いじらしい、あどけない子供でも眺める様に、

「勤め先だったら、僕が口をきいて上げる」

慈しみの籠った先生の眼差しを、ひとみは美しいと思った。

「ほら。これで、このママへの前借を返して置くんだな」

差し出された何枚かの一万円札を、そのまま押し返す手が、瞬間、先生の手と触れて、ひとみは、はっと身体を慄わせる。毎夜、客の手に慣れて居る筈のそのささいな事が、全く新しいものに感じられて、ひとみは、先生の手が冷めたい、と思った。

「ひとみ、ママが呼んでるよ」

吉見の声に

「先生、どうも……」

それだけ云って、ひとみは席を立った。

スタジオへの階段を降りながら、ひとみは先生を無性に恋しく感じ始めて居た。

スタジオでは、マダムと社長がカクテルを飲みながら何かに笑い興じて居た。その片隅でアケミが着物の袖へ手を通して居る所だった。入って来たひとみを意識したものか、さ

っと頬から首筋へ紅を散らすアケミの姿態がひとみには痛々しいものに思われて来る。

「ひとみ。あんたさっき、社長さんの外套、お預かりしたんじゃないの？」

マダムの言葉を打ち消す様に、

「いいじゃないか、そんな事……」

社長が手を振ってマダムを止めにかかる。

「いいえ、それはいけません。大切な事なんですし、うちの信用にかかります」

「野暮な事をして僕に恥かかせるなよ。惚れて居る娘に悪く思われ度くないからなあ」

「それとこれとは違いますよ。社長さんは甘くて歯がゆくて、お坊ちゃまなんですから。」

こういう事は私に任せて置いて下さい」

問題は、社長の外套の内懷に入れられて居た紙入れの中から、何枚かの札が不足して居る事の嫌疑が、ひとみにかけられたものである。もとより、ひとみには何の覚えのある筈もなく、強く否定した。否定しながら、この場の空気に、何か不自然な白々しさを感じ本能的な防禦本能が、鋭く身体をこわばらせて来る。

そんなやりとりを聞き辛そうに眺めながらアケミは、
「お先に……」と小声で挨拶を残して出て行った。

「そんなに仰言るんなら、ママ、嚴重に調べて頂戴。それに警察へでもどこへでも、ちゃんと届けたらいいでしょ」

いきなり、ひとみの頬に、ママの平手打ちが飛んだ。

「私じゃ、何もあんたがやったって云ってるんじゃないよ。それを、なんて云い方するんだい。可愛い娘だと思って常々あたしゃ、あんたに眼をかけてやってるつもりなんだ。その服だって、わざわざ私が借してやってるんだろ？ そんなに云うなら、今すぐ、その服を脱いで返して貰おうじゃないか。裸になつて貰って、ゆっくりと調べさせて貰うからね」

「ええ、いいわ。どうぞ、お気の済むようにして下さい」

答えてしまつてから、ひとみは内心で「しまった」と思った。下唇をぎゅっと噛みしめながら、こんな見えすいたトリックにあっさり引っかかる自分は、矢張り子供だと齒ざしりが出る。

「社長さん。そのカメラ、そっちへ藏つて置いて下さい」

捨て科白をたたきつける様にして、ひとみは支那服を脱いでブラジャーに手をかけた。

口惜しさに身体が慄えてくる。頭がかった熱してくる。しかし、もう間に合わない。

「さあ、その手を抜けて御覧。何も、あんたの裸を見ようってんじゃないんだよ」

マダムの声が、ねちっこく、ひとみを追い詰めてくる。

「ほら、早くパンティも取っちゃいなさいよ。自分から調べてくれっていいでしたんだから、恥ずかしがることないだろう？」

さっきからひと言も口を挟まず、薄ら笑いを浮かべて居た社長が始めてそれを遮った。

「マダム、やめて置けよ。僕が辛くなるじゃないか」

軽薄な白々しさが言葉の節々に滲み出て、却ってそれだけ、なめ廻す様な舌ざわりが感じられて、思わずひとみは、ぞくっと身体を慄わせる。

暫くその伛立ち尽すひとみに、しびれを切らしたマダムの手が後からパンティにかけられてきた。その手を思い切り強くはね退けて、ひとみは自分の手でぐいとずり降ろして居た。

どうにでもするがいい。捨て鉢な感情が荒々しくひとみの身体の奥から焔の様に吹き出してくる。大気の中へ放り出された様な頼り

なさか、戦慄をともなって身体の蕊を吹き抜けてゆく。

スタジオの中は、三人の吸う息吐く音だけが、妙に生々しく深夜の静寂を際立たせてくる。

音もなくドアが開かれて、だし抜けに鋭い声が怒鳴り付けた。

「おい、何の真似してんだ。どうせこんなことだろうと思ってたんだ。きたない真似するじゃないか、え、おいッ！ その社長も社長だ。いっぱしに通人振ってるが、通人なら通人らしく娘一人、向こうから惚れさせた上で、好きな様に料理して貰いたいもんだね。

このざまあ何んだ。きたない馬鹿者共奴！」
ブランデーの壺を片手に提げて、蒼白く引き吊った様な顔色を生酔いにまぎらせた先生が、そこに立って居た。

「おい、ひとみもひとみだぞ。こんな奴等に裸を晒してどうするんだ。お前の身体は、借りた金と天秤にかけて、釣り合いが取れる様な安物か。馬鹿娘が——」

「あんた。病人の癖に、酒なんぞ飲んじまつて何よ。大切なお客様の前で、変な言い掛かりつけないで頂戴」

憎悪をむき出しにしたマダムの声が、激し

く浴せられる。

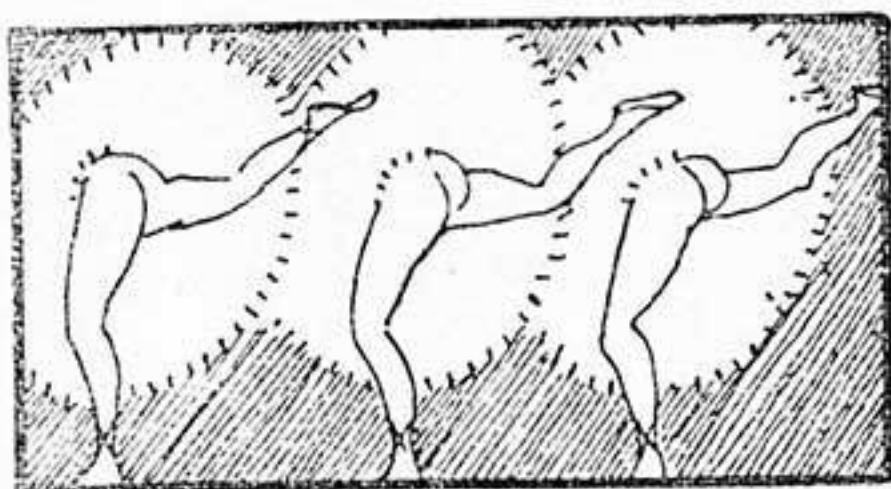
「何が客だ。二人揃って、気狂いじみた悪趣味も良い加減にして欲しいな。俺はね、ひとみの様な初心で純な子供を相手に、陰險なやり方でわなに落とすあくどさを見ちゃあ居られないんだ。遊びなら遊びらしく、からりと明るい楽しみ方したらどうなんだい。ひとみを罵るなんぞ、俺が許さねえぞ」

呂律の怪しくなった先生の声を背中に聞きながら、何か胸の奥に強く訴えて来る情感を覚えて、ひとみは、じっと立ち竦んで居た。

「あんた、偉そうな事を云うけれど、病気に高いお金をかけて、一体誰があんたの面倒見て居るのさ。この店のやり繰りだって楽じゃないんだよ。それを社長さんが随分助けて下さってるんじゃないの。第一、あんた、この店が今、誰の物だか知ってるの。私のもののよ。そんなに私が気に入らなけりゃ、ささと出て行きゃあいいじゃないのよ。この際だからはっきり云いますけれどね、この店はおんたとは何の関係もないのよ。私だって別にあんたの戸籍に入って居る訳じゃないんですからね！」

マダムのヒステリックな罵倒に、先生の眸がキラリと光った。

——(未完)——



あぶ・らぶす・こんと

天
国

と

地
獄水
沢

登

ワシントンと桜の木の話は、正直の美德を強調するのに恰好な題材として取り上げられ、誰もそれを疑わない。所が、我々自身の問題としてみると面白い。貴方が子供だとしても、自分の家の庭の桜の木を切ろうとした時、切れば親父にドヤシつけられるか、ハリ倒されるだろうくらいのことは予想して、切るのを止めてしまいうに違いないだろう。これが平凡な人間の反応である。ワシントンは、こんな幼稚な予測もできない、余り上等でない子供ではなかったかと推測される。この寓話でワシントンをほめ上げれば上げるほど、このように考えると愚話になってしまう。ところが世間では、このような解釈は不純だと

評価するだろう。ヤブニラミする筆者等は、不道德と指弾されるのは必定である。

科学的思考とは、事実を色々な角度、可能な立場から観察し、最も客観的理論を組み立ててゆくことである。時として、その時代の道徳思想に反するものがでてくるのは当然な話である。ガリレオは「地球は、それでも廻る」と唱えて、危く破門を宣告されそうになった。地動説が教会の精神的権力的思想の理論的根拠である天動説を揺り動かすのは、既成権力への挑戦であり、革命であると受け取られたのも、うなずける。支配者は、支配者の作った道徳をそのまま受け入れる民衆を好むものである。

冷たい眼で事実を見るのを恐れる。たとえそこに真実が隠されていてもである。神の子であるべき人間が、猿から進化したという事実が発表された時でも、世は騒然としたのである。

モーゼはシナイ山麓で雷鳴と稲妻の演出効果の下で神の名の下に十戒 (Ten Commandments) を示した。道徳の基礎である戒が神のもの、支配者のものであることは Commandments が支配力、指導権を意味することから容易に理解される。

あなたは殺してはならない。あなたは姦淫してはならない。あなたは盗んではならないという戒律はモーゼの集団では殺人、姦淫盗

みがひんぱんに行なわれていたことが想像される。「このところ立小便無用」の張紙は立小便する者がいなければ必要のないのと同じである。我々の祖先は洋の東西を問わず近親相姦、獣姦、男と女のあらゆる組合せの性の交りについて寛大であったのは事実である。

モーゼの神は男女間、しかも夫婦間にのみ性の交わりを限定し、違反者には死を与えることを強制した。それ以来、彼の神は自分の意志の通りに行なうもの、即ち支配者の道徳に沿う者は保護され、逆らう者は追放されることになったのである。美德は、こうして罪という恐怖に裏打ちされて称えられ、今日に及んでいる。あらゆる他の宗教も、同様なことが言える。

美は醜によって羨望が高められ、快は苦痛の存在なくしては価値なく、不徳がなければ美德がたたえられないように、神は自己の權威を高揚するために天国に配して地獄を創造した。神の意志に忠実な者は賜賞として天国に行けることになり、神に逆ったものは無間地獄で苦しむことになった。人間は生きてゆく上に、年中コセコセと神の顔色を盗み見て、暮さなければならなくなった。墮地獄の恐怖を繰返し強調され、教えこまれてきたの

であるが、その反面、神の意志に叛く異教徒の殺戮、魔女の火刑は美德とされた。どれ程の無実の人々が、無為に死に追いやられたことだろうか。神は復讐の権化でもあるのである。しかも、神は崇めることを要求するのである。神は、なんとサジスティックな性格を所有しているものなのか。そして、サジストとしての神に一生を捧げる宗教家の、何とマゾヒスティックなことか。人間が天国と地獄の思想を教えられるまま、如何に素直に受け入れ、一方では恐れ、他方で怖れ続けてきたことか。

ダンテもゲーテも「神曲」「ファウスト」で地獄を恐怖し、最後には愛によって救われることを主題としている。芥川も、天国と地獄に大いなる関心を持っていたことが判る。ただ、それが従来の思想の裏返しの解釈であることに、神への反抗、旧道徳への皮肉な批判が多分に含まれている。

『侏儒の言葉』の中で「もし地獄に墮ちたとすれば、わたしは必ず咄嗟の間に餓飢道の飯も掠め得るであらう。況や、針の山や血の池などでは二、三年、其処に住み慣れさへすれば格別跋涉の苦しみを感ぜないやうになつてしまふ筈である」と述べているが、これは

芥川の地獄への恐怖の裏返しである。

私はこのイメージを更にハレンチに解釈しようと思った。何故なら私をはじめとする現代人は、すべて地獄行になると想像するからであり、そうすることによって神や道徳に反抗し、できるなら、これが本心なのだが、地獄に墮ちる苦痛をいくらかでも軽くしたいと思うからである。

フォーク・クルセダーズは「天国よいところ一度はおいで。酒は旨いし姐ちゃんキレイだ」と歌ったが、どうも信用できない。天国の門をくぐれるのは、いずれ行ないました聖人君子、道徳家に限られるから、蓮のうてなで一杯やることは不可能だろう。ネエちゃんのお尻でも撫でるようなことをすれば、忽ち、あの歌詞通り追い出されるに定まっている。住人が住人だから一日中、礼儀だ作法だとうるさいに違いない。シビレが切れても、胡坐なんかかくわけにはいかない。天使の女の子は、絵にあるように、薄物でミニスカートからパンティがチラリでボインであるはずがない。やかましい連中の集まりだから、天女は黒のロング・スカートに膝まである長いパンツをはいて、お化粧は御法度、バストは洗濯板で、お尻なんかペツタンコに違いない。

男の子の誘惑なんぞトンと知らないし、する奴もいないから、いずれヒスの三十娘、五十娘というところであろう。一級酒やジョニ黒なんてのは影も形もない。一汁一菜、四つ脚は動物愛護の精神から駄目。ビフテキ、トンカツなどは決して食膳にのぼらないこと受合。そして現世は、天国に來たい一心でしたいこともやらずに我慢してきたから、エゴイストばかり。マージャン、競馬、パチンコ、ハント、プレイなんか異端視して一回も手に染めずにいた輩なので、ハナセないこと天下一品。

おまけに、この頃は天国にくるようなマトモな奴は少ないから、天国も収入が大激減。おかげで住宅事情も厚生施設もよくない。お家の事情は火の車。住居は傾く一方。着ているものは浴衣一枚で、それも色が変わっちゃって茶っぽくなっているね。それでも贅沢は敵と瘠せがまん。武士は食わねど……で栄養も失調寸前。芥川は言った。「天国の尼は何よりも先に胃袋や性器をもっていない筈である」とあなた、それでも天国へ行きたいかい。それに引き換え、地獄は押すな押すなの大繁昌。三途の川は、臨時フェリーボート大増発でも間に合わず、船着場にテント村をつく

り整理券を発行して一週間は泊りこみ。集團参加だから集團心理で、ついお祭り気分も出ようというもの。

六道銭の収入だけでも莫大で、歓楽街は壹を連ねて、飲む、打つ、買うは自由放題。ギャンブルは、ラスベガスを凌ぐ勢いである。

現世の悪徳はオープンのはず。何せ手前が地獄にいるんだから、何をやっても地獄へ墮ちる心配は毛頭ない。いずれ悪党、怪盗、ハレンチ野郎の大先輩が陸続として住みついているのだから、赤鬼、青鬼連中は、とうに鼻薬を効かせてある。地獄の沙汰も金次第。芥川の言うように二、三年と待たなくても、針の山には通り良い道が整備されているに違いない。鬼連中だって金と女には弱いはず。おまけにグラマーなボインちゃんにちょっと何してもらえば、どうってことはない。お堅い鬼には、いざとなれば針の山から抜いてつくったゲバ棒で大衆団交すれば、馴れた大学生は結構リーダーになってくれるだろう。

血の池で、新前のカワイ子ちゃんがアップアップしてるのを助けてやるのも、乙なものである。鬼の拷問なんてのも余り進歩してないし、新しい方法が開発されたとも聞かない。ゲシュタポ連中の残酷な責めが見られる

かも知れない。ピンク映画や残酷劇に厭きた好き者には垂涎物だろう。

案外、辻村隆氏等は緊縛指導者になれる期待を持って頂いてよいだろう。KK誌編集長は増頁に次ぐ増頁、発禁にするお硬い役人もいなかろうから、思い切ってグラビアでも復活する気になるに違いない。もっとも余り大ぴらに拝見できるので案外、売れ行きは鈍るかも知れないが。

サド、マゾッホ氏と夜もすがら一献汲み交すのも良い思いつきである。閻魔大王に舌を抜かれるにしろ、いずれ二枚舌ばかりの奴揃いだから、一枚抜かせて残りの一枚で間に合わせればよい。

存外、地獄は現世と余り変わらないかも知れない。神や道德に驚かされないだけコンプレックスが解消され、庶民には理想境なのかも知れない。神は天国が陳腐なことを知っていて、人間に嫉妬から地獄行を思い止どまらせるようにしているのかもしれない。「酒は旨いし、ネエちゃんはきれいだ。地獄よいところ一度はおいで」ということになる。テレビのCMではないが「……して地獄へ行こう」である。

もっとも、「道德におびえ世間に気兼ねし

いい、女を縛って責めたり、縛られていいめられる方が、君、スリルがあるよ」という読者が多からうから、何をかいわんやである。

☆性に目覚める頃☆

女子中学生英和辞典で drawers (ドローース) を引くと「引き出し」とあったので顔を真赤に染めて「マア、エッチ」

☆年賀状☆

年の暮、Sの名手に開眼した娘。思い出を

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

忘れかね、何とか慕情を伝えたいと思案に暮れていた。件の男は妻ある身なので、封書では奥さんに疑われてはと、年賀に認めた。

謹賀新年 旧年は色々とお世話になりました。本年もよろしく御指導御鞭撻のほどお願い申し上げます。

☆M対S☆

マゾヒストとは、既に燃え上っている裸の娘の接吻してくるのを押し止め、喘ぐ唇に猿轡をはめ、素肌に縄をかけ、両脚までも束ねて、ぐるぐるまきにした上、責めはするが娘

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に應じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能の絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに對しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返ししお返事差上げます。

の肌に触れもせず、ガマンする人。サジストとは、相手に自分を縛らせて責めさせるが、ガマンをさせる人。

☆G・S(グループ・サウンズ)☆

最近の若者達は、楽器を合奏することにかけては、大人も顔負けというところである。この間、ハレンチ行為で補導されたグループも、そうであった。その名をトリオ・ロス・パンティスといった。

☆C・M☆

中にはイッシッシというのがある。

「ツケテナイノネ」「ツケテルヨ」

「世界の名器を、あなたのお部屋に」

司会者の言葉でも、テレビで、

「知りすぎたのねという歌は、次は太モモということですか」

視聴者ニヤニヤして、

「あの司会者、いつもああやってんだね」

☆ピンチ・ヒッター☆

妻の産休中、仕事を代行してくれた若く美しい女教師と、教育関係者多数を出産祝に招待した夫。席上、

「この先生が、出産まで妻の代りを勤めて頂きましたお方です」

○
☆ポ ー ズ☆

カメラの流行で観光地の野外写真屋さん、大打撃。そこでサービスに、やっき。新婚さんらしいカップルに「いかがですか、奥さん五ポーズで千円にしておきますが」

ポツと赤くなった奥さん。

「こんな明るい、皆さんのいるところで夫と撮るなんて、私恥ずかしいわ」

○
☆真 実☆

悪友が、新妻の過去に男があったことを密告したので、嫉妬に狂った夫。その夜、

「お前は、俺より前に男があったそうじゃないか。お前は、そいつ等と寝たんだろう」

と責めると、

「あなたには嘘は言えないわ。ボーイフレンドがいたのは確かだけど、一しよに寝たのはあなたが初めてよ。信じて」

「信じられるもんか。奴等サジストで、お前を裸にして縛り上げ責め上げて、写真までとったそうじゃないか。抵抗できない状態にされて、何をされたかわかるもんか」

「本当よ。あの人達と一しよの時は寝かせてもらえなかったの、一晚中。だから一しよに寝たのは、あなたが初めてよ」

○
☆パン テ イ ☆

喫茶店で、たわむれに女子大生にパンティの重ねばきの理由を聞いたたら、

A「私冷え症なの」

B「痴漢よけよ」

C「パンティング（パンティ狩り）で一枚もって行かれてもいいように」

D「デートするとき余分が必要な」

E「一枚は彼とのプレイ用よ」

A「Fさんは、いつも、うすい一枚なんでしょ」

F「私も二枚よ。下にシャネルの五番はいるの」

○

☆パリから愛をこめて☆

フランスに旅行中のフィアンセから贈物が届いた。娘、胸をときめかせて包を解くと、これなんシルクのブラジャーとパンティ。失礼なと思いつつもパリ製に憧れをもつのも娘心。包の中の便りに眼を通すとビックリ。

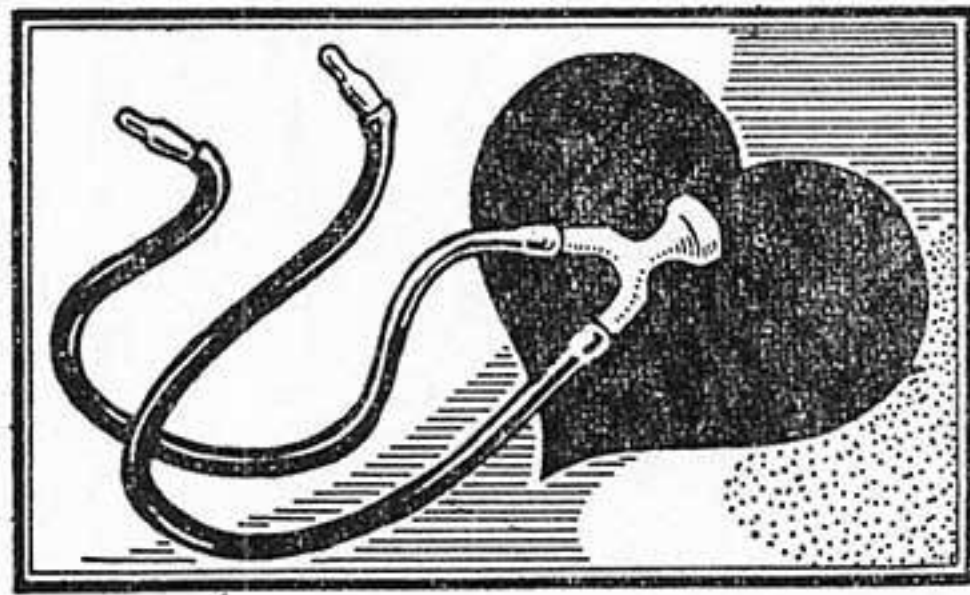
『ルリさん。僕は今、パリです。愛と接吻を

こめて、これを贈ります。それというのは、今まで何回か貴女とデートした時に知ったのですが、他の娘さん達はよくつけているのに、貴女は全くつけてないので最高級品を買いました。サイズが合わない困るので、実は東京を離れる前、貴女が眠っている時、そっと測らせて頂きました。だから、おつけになれば、きつと肌にピッタリくっついて離れないでしょう。いや離れないように僕が細工させました。パーティの節は、あの野暮な連中にも堂々と見せてやって下さい。きつと感嘆の声がしばし止まらず、中には、はずして手に取って眺めたいと言ひ出す者もいるでしょう。つけたまままでお風呂に入っても大丈夫。絶対変質は致しません。乾けば元通りになりますから。僕は一年後に帰ります。それまではずっとつけたまままでいて下さい』

娘がカッカとして手紙を引き裂き投げつけた時、玄関のチャイムが鳴ってもう一つの荷物が届いた。パリのデパートからのもので、同封の手紙には次のように書かれていた。

『パルドン。中身を間違えましたので、改めてお送り致します。お納め下さい』

そこで中身を調べると、金とダイヤで飾られた豪華なネックレスがでてきた。



「夜尿症」

について

医学博士 弓削達人

Ⅱ質問要旨Ⅱ 27才 女性 独身 無職

1 私は人並の容姿と思っています。従って人並の縁談もありました。しかし現在なお独身であります。

2 その理由は私は二七才になった現在でも毎夜のように夜尿をするからです。

近所の小児科、内科の先生から随分ながいと診てもらい、夜尿治療器も使用してみましたが、なおりません。

3 三人兄弟の末っ子ですが、両親も結婚さ

せることをあきらめており、私も洋裁で生計をたてて行く覚悟はしています。

4 しかし、近頃の女性週刊誌などを見ると、性の喜びを知らぬままに年をとっていくのも、悲しいように思われます。

5 それで、結婚はしないまでも、男の友人をつくったり、それができなければ、オナニというものをしてみようかとも思っていますが、おそろしくてまだ一度もしたことがありません。私のようなものが、一生オナニをしていくことは体に害があるのでしょうか

6 長兄の部屋を掃除していて貴誌を知り筆をとったわけでございます。

〇 〇

Ⅱ回答Ⅱ

大へんお気の毒に思います。夜尿というちよつとした習慣みたいなものにわざわざいされて、あたら青春を無為に過ごし、極端に言えば一生を棒にふるということは、あなたも言っているように、確かに「淋しい」ことだと思います。また、性の氾濫といわれている現在に―その当否は別として―性の欲びを知らぬままにすごすことも、確かに「悲しい」ことだと思います。

私はあなたに、ボーイフレンドをつくることや、マスターベーションをすることをお止しなさいと申し上げようとは、決して思いません。たしかにそのような方法も一つの解決の方法だと思います。

しかしそのような解決手段をとる前に、もっと外のことが考えられるのではないかと思います。そのことをやってみた上でどうして解決できない時に、次の段階のこととしてあなたの「プラン」を検討してみたいと思います。

従って、今回は、私の言うところのことを

よく理解して頂き、一度試みて下さい。

(尚夜尿一般のことについては、あなたはもう十分の知識があると思いますが、他の人のために、夜尿の基礎的なことから書いて行きます。)

1 夜尿は案外、多いものです。旧制大学の一年男子学生の調査でも一%の者が「時々もらす」と答えています。尿道括約筋は男性の方が強いし、尿道も男性の方が長いのですけれども、夜尿は、男性の方が多い%を示しています。

2 その原因としては、①先天性の畸形 ②尿道周辺の慢性炎症、尿道結石とか寄生虫などの異物などがあり、また③脊髄神経の過敏症、多飲症といった泌尿器以外の原因もあります。しかし一番多いのは、原因のわからない④神経性夜尿、心因性夜尿というものであります。

3 治療法としては、①のような先天性尿道狭窄は外科手術によって②③はそれぞれの原因に対する治療によって、案外簡単になおるものです。問題は特別の原因のわからない④に入るものです。これは結局何等かの原因—器質的な原因ではなく機能的な原因から起こった夜尿症が、これまた何等かの原因で固定

化、習慣化したものであります。(何等かというあいまいな表現が多くて恐縮です)これの治療は精神療法から、この質問者の方も使用されたい夜尿治療器といったものまであります。この夜尿治療器は条件反射を利用したものであります。この種の原因によるものの治療効果は、率直に言ってあまりあがっておりません。

心因というのは、夜尿をするたびに、あまり強く叱られたり、恥かしい思いをしたことがコンプレックスになって残っているものなのです)

4 さてあなたの場合ですが、あなたの文面から察するところ、あなたはこのような悩みがあるにもかかわらず、明朗な方であり外向的で活動力のある方のように感じられます。しかしこのように申上げると、内省力に富んでおり、高校時代に文学少女を気どっていたといわれるあなたは「自分が他人に明朗に見えるのは、反動形成で自分の弱点を防衛しているに過ぎない」といわれるかも知れません。しかしそれでよいのです。われわれは「なにを考えているか」ということより「なにごとを言うか」ということの方が大切であるし「なにごとをなすか」「なにごとをなし

得るか」ということが最も大切なわけです。あなたは「明朗に行動することができる」のですから、それで十分の価値があるわけです。

5 それであなたは、保母さんになって母性愛——女性的な愛情を昇華しようかと考えたこともあったといわれます。それもまことに結構なことでした。しかしそれもまた灰色ではないかと感じられた時に、性的プレイガールの姿勢をとってみたらと考え、それも田舎町では実行がむづかしいので、オナニーというもので満足を得るようにしてはどうだろうかともまで思いつめて来られたわけです。最初にも申しましたように、これもまた一つの解決方法です。

6 しかし、あなたが二七才の若さであるということ、夜尿に悩まされながらも、性格の明朗さを失っておられないということから、この最初の原因となった夜尿を、何とかならないものかと考えるのです。そして何とかなると思うのです。

7 即ち、これが治療は決して不可能ではないと思うのです。初めのところに治療効果はあまりないと書きました。しかしそれはこれまでのことであって、現在では、そして将来

に向かつては決して望み少ないものではありません。

勿論普通の内科や泌尿器科ではだめです。

若し「今一度」という気持ちがありましたならば、次のようにして御覧なさい。

① 九州大学医学部心療内科にて治療を受けることをおすすめします。この教授は、池見西次郎先生といわれます。（先生は小生のペンネームは御存じありません。もし必要ならば、本名で紹介状を書いてもらいたい。その際は住所氏名明記の上、御両親の承諾書を同封して返信を出して下さい」

② 通院では無理かも知れませんが、入院でも3カ月位のはずです。病室のないときには大学と関係のある他の病院を責任をもって紹介してくれます。

治療費は国民健康保険の場合、自己負担が一五、〇〇〇位でしょう。

③ あなたは中国地方のQ市におられるので九州にはなじみが少いかも知れませんが、普通急行で行っても2時間位です。博多駅についたらタクシーに、九大医学部の外来といえは連れて行って呉れます。そこで心療内科の外来はどちらかと聞けばよろしい。又タクシーで往復七〇〇円位です。

④ 問い合わせ方法

福岡市今粕九州大学医学部心療内科御中

電話 〇九二・六四・一一五一

⑤ 心療内科であつかう心身症のことについては、直接先方の先生がお話しになります。（余計な知識は治療の邪魔になることがありますので、この際ふれません）

—— 問 合 わ せ ——

杉並区のNさん

誌上回答を求めています。更に詳しくお聞きしなければ、正確な返事を致しかねます。

1 それで、できるならば住所氏名をお知らせ下さい。お宅の御職業の都合で、人の目につかずにお手許に届くようであれば、それが一番簡単で、正確を期することができます。

2 若しそれがどうしても不可能ならば、次のことを至急御連絡下さい。

① 御家庭、御夫婦の職業

② 夫婦の学力

③ 夫の年令

④ 当初から現在のよう性交形式（この形式をA形式と呼びます）になるまでの期間の正常な性交回数（週平均どの位であったか（結婚直後から次第に変化したはず）

⑤ 正常性交によって、妻にオルガスムスはあったのか。

⑥ 正常性交によって、夫の側にオルガスムスがあったのか。

⑦ 夫の側に同性愛的傾向はないか。

⑧ A形式での、妻の側のオルガスムス時の模様を具体的に（例）身体のどの部分に最も強く快感を感じたか、など）

⑨ 同じくA形式での、夫の側の満足の状況を具体的に。

朝霧清美さんの公開質問状に対して

1 興味深く拝見し、大へん参考になりました。

2 それで、この相談室の責任者である私の考え方などをも含めてお答えしたく思います。

3 しかしながら、小生、春の医学会の準備で現在のところ余裕がありません。それで申し訳ありませんが、8、9月頃までお待ち頂けませんでしょうか。

4 尚小生の回答その他について、御不満御意見のある方は、御遠慮なく編集部までお便りをお寄せ下さい。

5 尚また、一便だけの回答に不満の方は、再質問も御遠慮なくどうぞ。



秘密写真と秘密映画の中に観る

責場・SM場面見聞録

金 剛 敏 三

最近の映画は、人に聞くとところに依ると人氣が落ちる一方であるとか。その反面ピンク映画の人氣は、今や五大会社を凌ぐ勢いで、群小都市一円に、その配給会館を持っているそうである。

一様に何々市と名が付けば、必ず上映している映画館がある今時、そんな事は当然である。SMファンはもちろん、縛りや責に関心を持つ男子は……いや女子も……（但し成人だけ）題名によって胸中をくすぐられる様な思いをした事は、ありませんか。

ポスターのプリントに惑わされた事はあ

りませんか。

色欲のかぎり尽した女の表情を、貴方はその宣伝用ポスターの中から見出す事は、なかったですか？

当然です。ある訳です。あるに決まっています。成人男子があれだけの色彩と女の表情及態勢を見れば、ましてや縄の二ツ乳房に、そして腰周りに掛かっていれば、自動車やオートバイで通る以外、必ずや一目見返して行く所である。

もちろん、この私とてもその第一人者である。時々、何年か前に自分で付けた覚えのあ

る題名が、これ見よがしに街頭に、半裸の若い女のいかにも艶めかしい姿態と一緒に、時には赤く、時には黄に、麗々しく刷られ『これを見よ』と言わんばかりに大々的に突きつけて私の眼に映してくれている。

せち辛いとかなんとかいうものの、いい世の中に成ったものである。

過去十月号に記されていた、鶴藤氏にあやかって、同じ様な事をお話ししようとする訳である。意識して蒐めた訳ではないことは小生も同じであり、さらに小生としたところ、学生時代から学業そのものの写真いじりに始

まって、流行から流行を追いかけ廻して、フィルムを弄る様に成ったのだが……。

写真に始まって映画に至った（いずれも、いわずもの「例の」であるが）が、小生としては、面白味のある物はどちらかと言われれば直ちに例の写真の方を賞讃する。

先輩達には本当に失礼とは思うが、今回は小生の思うままに書かせてもらおう事にする。

……………◇……………

写真弄りの方が誰しも先だと思うが、とりつき易い点もあって、小生は子供の頃からカメラ弄りはしていた。学生時代にはもう例の写真を、友人がアルバイト先の写真屋から借りて来たのを引伸しや焼増し等、自由にやらかした。学生仲間に、紙代に色をつけた位いの値で、売りとばし、遊ぶ金、そして又、現像液や定着液、印画紙代にしたりして来た。したがって十枚一組だの、十二枚一組だのがあるが、その組数の数も大変なものである。何十組、何千枚に成るだろうか。

その中で変わったものと言え、五枚一組でキャビネ版の大きさのものが変種である。

一人の女を後手に縛り上げ、自分の膝の上に乗せる様にして後から、というのがある。投出した男の足の上に、もう一人の女が、こ

れも後手縛りにされてまたがっている。男の足の拇指が何かの意味を持っているのが分る。これは暴漢が女二人の室に忍び込んで、と言う設定であるらしい。素ッ裸にむかれての縛りも、なかなか本格的で、乳房に喰込んでいる縄に、又二人の女性の表情に例の写真以外の迫力がある。

二枚目は、二人の女がまったく同じ型の四ッ這いにされ、一人を本番、一人をコケシでと言ったスタイルだが、後手縛りは、そのままである。

三枚目は、その本番なる所を、タタミの上どころがされたチョット太っている方の女がジーツと見つめているという構図である。責められている方の女の、大きく口を開けたその表情が真に迫るものがある。

四枚目は、ほとんど同じ様な型だけれど、責められている女が変わって、今迄下の方からのぞき見ていたのに対して、その女性の顔の前に他の女性が大きな尻を向けている型である。と言う事は、もう説明は不要であろう、暴漢に強制されての屈辱図という設定。

最後の、後手縛りはそのままで自分の膝が乳房につく様に、二人共同形に縛り上げられて首の後の方でとめてあり、一人は右、

一人は左を向いての仰向けである。女二人による、ただのこのようなのはマァー良くある型だけれど、縛りを入れ、女性二人を相手となると、いかに数多き例の写真群と言ってもその数は少なくなる。公開出来る品物ならこんな説明は不用なのだが、残念な事である。

この五枚は事のほか気に入って、手離す気になれないでいる。他の写真はずいぶんと流しまくったが、やはり何でもそうだが、チョット変わったものとなるとそうそうは入手出来ないからである。

他に首輪を掛けた様にされ、縄尻を足首に縛り（もちろんピンと張る様に）、又は膝のあたりで縛り止めたりしての物が、十枚組の中にあるが、迫力となるとさしたるものではない。四ッ這いのものとなると縄等はもう関係なく、首からだらりとたれ下ったままになっていて、女に対してのM的な見せ方は受けると思う。この中の男がどこことなく、マング家の富永一郎氏に似ているのがなんとも面白い。

……………◇……………

これは、やはり好事家の小生の友達が、チョット変っているのがあると言って私にくれたものだが、女のオナーニーをあつかったも

のである。

生れたままの姿の女が、ねそべったり、しゃがんだり、あお向けになって足を上げたりしている。写真中に写っている物には、コケシ、トックリ、ビールビン、羽根、電球、きゅうりなどが見られるが、腰から下だけしか見えないが乗馬用のムチを持った男？　と思われる人物が右に左にそして後にと場所を変えて立っている。その中の一枚に、女がその男と思える人物に目をやっている（いわば見上げている訳であるが）のがある。これも強制されているという設定と思われる。

連続的な組写真なのだろうが、例のものにつきものの、最終場面の写真は一枚もなかった。又、女性の体にムチの当たっている様な場面もなかったが、例の写真の中にあっては珍しい方である。

女は、なかなかの美人であった。

.....◇.....

女の服装って事になると、小生が集めたものの中から言うと生まれたままの姿が圧倒的に多い。約半数以上である。次に長襦袢姿である。最後迄乳房を出さずのもあるが、大半は帯をとき前をはだけるのが多い。シュミーズ姿も多い方である。女学生の制服姿や看護

婦の制服姿等も確かに多いのだが、これらになると下半身露出のみと、ほぼスタイルは決定してしまう。

中には和服での盛装なんて、金の掛かっているものもあり、時代劇調に女にカツラを使用させたものもあった。そんな所が変っている方だと思うが、いかがだろう。

寒さしのぎにか、一度は全裸になりながら、その上にコートやオーバーなどをひっかけているようなものもあったが、そうなる何だか気分が悪くなる様な気もする。本当にあばずれた、いかにも商売的に割切った感がするからである。

中には男性に口をつけて笑っているのなんかがあるが、"すこし真面目にやってもいい"と怒りたくなるのが時々ある。こっちは真面目？　に、それこそ謙虚な気持ちで見ているんだから.....

場所となると、やはりアパートなんて所が一段と多い。又、連れ込み旅館等のふとんの上や、浴室の中も、かなり多い。山林や海辺などが、その次クラスだろう。

今、手元にある中に、電車の中で、と言うのがあ。最初の二枚はどこへでも出せるような写真であり、もちろん大衆の中であるが

若い女が電車の吊り皮につかまっている所から始まる。中年の男がすり寄って、その若い女性のカーデガンの上から胸辺りへ手をやった所で、その後の分は、大衆の姿は全部消えているのだが確かに電車の中には違いはななく女はカーデガンもブラウスもむしられて豊かな乳房が露出され下半身は生まれたままの姿でいろいろの型にされての組写真である。

最後には、ほおぼっての熱演である。国鉄協力の作品？　かも知れない。

フィルムの方になると、犬を使つての俗に言う「赤白」がかなり多いが、写真の方に成ると、ずっと数は少なくなっている。

四十八手がどうのと言っても、所詮写真に撮れるのは決まっているから女こそ変れども形変らずで、どれもこれも、よくよく眺めてみれば同じようなものばかりである。

マァー、生意気の様な事を言い出したが、所詮皆様の手元の物と比して変りばえのする品物でなかったかも知れません。

.....◇.....

それでは、話をフィルムの方に持って行こう。これの方だってそうだとは思うが、やはり少しでも変った物の方を誰でも好むのが人情である。したがって「モノクロ」で、ブ

ルーフィルムと一般に言われるそのお目当の場面が、始めから終迄フィルムに納まっていれば一応納得出来る訳なのに、三本、五本と入手し、又観賞する内に、先に記した変り種を観たくなるはずである。

今やたらと流行している故もあってか、カラーで観たい、とおっしゃる人達がかんり多いのだが、自分のコレクションにしたり、友人同志で、流し合って観賞する程度のものなら、金銭的にズーッと格安なモノクロでたくさんな訳だし、数を観る内に、この映画、と言うよりフィルムは、モノクロにかざる、と小生は言いたい。

普通の映画の様に、出演者の衣裳の色は全然関係ないし、美しく見せるべき野山や花々等も御呼びでない。かりに野山の景色が入るフィルムにしたところで、特徴ある場所を出せない。「あれは十和田湖、ここは伊豆あたり」なんて、すぐ誰にでも分る様な場所は使えないのである。この意味は御分りですな。

誰しも経験あると思うが、フィルムを時間にして約十五分間、その内五分も、もったいぶった時間かせぎの様な景色を見せられて、「美しい海だなあー、又来年も海水浴に行きたくなったなあー」「紅葉がきれいだ、旅を

したくなつたなあー」なんて思う聖人はいない訳である。

「ヘーイ、やる事は一つ。たまにや変つたのを、やって見せろやッ」口にや出さねど胸の内、秘かに思ひは皆同じ、である。

そこで、「白黒」から「白白」それも複数になると、チョット面白くなって来る訳だ。

同じ白黒でも、M的な人間になれば、女同志のレスビアン関係を覗き見ている内にそれを発見され、女性二人に組敷かれ、自分の顔の上にドッカと大きなお尻を乗せられ、奉仕する様命ぜられて、結局はそれを行なわされてしまう、というようなフィルムはすごく、受けると思うが、別にM的な人間でなくも又、楽しい事に变りはない。

完全なS、完全なMと言う人間になれば又話は变ろうが、我々中間派？（これが一番多いんだろう）にしてみれば、どっちだって余り大差はないと思うが、これをまったく逆にしたようなフィルムがある。

やはり女二人に男一人であるが、レスの所迄はまったく同じである。ただ違っているのは、前記のものは男性が現れる前にさうとうな時間を食っている。したがってフィルムの約半分を白白に費している訳だから、今迄手

にした事もない様な責道具を使って見せてくれたり、女二人の戯れを見せる時間が長かつた訳であるが、後者の方は、フィルムがレンズを通つてものの二分位だろうか、女性同志で抱き合っている所へ強い男性？が登場する。ステテコに、ダボシャツ、毛糸の腹巻、肩口に入墨。この最後の入墨ですごく人気を落とすんだそうだが「もう一生消えんとなりやしかたがねえ」と、二人の女性の間に割って入るなり、すぐさま別々の形にさせてしまふのだが、それでも演技はしているのだろうその時の二人の女性は、驚いた様な表情で乳房を両手で抱いていた。

事が始まってからと言うものは、女性二人共完全に飼いならされた犬の様であつて、男が一人の女性と接吻する間に、他の女性はいじらしい愛を捧げる態を觀せていた。男がスツと身を起して一人の女性の尻をたたき様にする、女達はすぐに四ツ這いになった。

同時に二人の女から奉仕されることは、私ならずとも男一生の夢（大げさかな）である。

それからの展開をなんと記せば良いのだろうか。記すにしてもむずかしい型での戦斗が残り八分、九分続くのだが……。

同じ白黒でも、見る者によってえらく訳が違って来るのである。又、それがこれ等の変種フィルムの狙いである。男性本位に、話を進めて来たが、小生の言うブルーフィルムの中にあって、女性に観せるべきもの（あまり女性には関係ない品物だが）で、願望していても普通には出来ないものが、例に言う犬を相手とした「赤白」である。この例になるとこれだけで終るものはまずない。必ずその前か、後に普通の白黒が付いている訳である。

そしてこれは、決まって屋外である。もしそうでない場合は犬は小犬を使って室内と言う事になる。この点は、この道で決まっている様なものである。

これに反したような物を見聞したことのある読者は、この奇クの誌上を借りて記してほしい。

犬を使うとなると、その道の女性達を馴らすと言うか習わせるよりも難しい相手である。そう馴れるものではなからう。したがって、その数も少なくなるのは当然である。

しかし一度おぼえこんだ犬は、人間以上にそれは完成されるらしい。あお向けにされて首と腹とを押えられれば、四肢を開けたままでジーツと、それこそ大人しくしている。又

それを相手にする女性が合図をすれば人間以外の、いわば四ツ足動物の習性を以て敢然と挑みかかるし、きれいに始末迄して、それを画面に見せての、ザ・エンド、である。M的女性に、この種のフィルム上映の場で逢わなかった為か、「イヤーネ。犬なんかと」というような答えしか聞けなかったのが残念だ。

もっとも、普通のシロクロの時だって「イヤーネ」「女の人の顔まで写してるんですもの」「アーアー、あんな事までされて」「恥かしいッ」なんてなのばかりだったんだからね、当然だよ。

「私、一度でいいから犬と」なんてのが、もしいければ、こっちが気持悪くなって逃げ出しなくなるかも知れない。

しかし友人夫婦や女友達に、上映した後で酒でも飲みながら、くだけた態度で聞き出すと答は決まって、それが好きだとは言わないが「あの犬の出て来るのがあったでしょ。あれなんか変ってたわねエ」なんて、もう一度ああ言ったヤツをといわんばかりのナゾを掛けられる。やはり女と言うのは元来マゾ的に出来ているんだらうか。それとも男の方がどっちつかずの気まぐれ者が多いんだらうか。

.....◇.....

話しは又、ガラリと変わるが、小生の友人の中に、その道の人間が居るから、小生もこの道にたけて来たのだが、彼はそれを写してするのが専門であって、そのフィルムの題名を考えたり、それをケント紙に書く事等になると、からきしである。そこで小生、製図板を使ってのゴジック、明朝、出来ないながらも筆を使ったりして、映画の題名作りと、タイトル専門に画いて来た。これこそいいコンビで「一流会社の社員ですよ」なんて言いふらして、バーやキャバレーを飲み歩く事、数知れず。二人共そんな時は全然、それには話を持って行かないのが、いかにもプロらしく今になって思える。

彼が又一流の演出家気取りで、チョットしたシナリオ的なもの、と言うより、こうしてこうやって、こうなるの、と言った順序の變化や、こういう場をこれには入れる、入れない。女をチョット縛る。なんてノートに走り書きした様なものを数日前に小生に見せる。小生は現場に関係ないから、「フン、フン」と聞き入るしかテがない。

それから数日すると彼から電話があり、彼の家で、その結果がスクリーンに映される。「愛欲」ってのはどう」「変態」っての

にする」てなことをマジメな顔付きで熱心な問答のはて、題名作成にかかる。このあたりが一般の映画と逆であって面白いところだ。

小生は地方の短大しか出ていないが、その彼はN大の法科を出ているだけあって、法律にかけては、友人連中の中で彼の相手になれる者はなかった。

いい頭を、……の方に使ったのかも知れない。とにかく面白い男である。

小生が、まだ例の写真の方に熱を入れていた頃、「オイッ、いいかげんで悪い事は止めなさい。そんな事をしていると、お巡りさんに叱られるよ」てなことを言って、フィルムの方へ小生を引っ張り込んだ彼でもあった。

懐しい題名の中には「たらい廻し」「強姦」

「浴室の密事」「待っていたワナ」「死姦」

「おしゃぶり」「ダッコちゃん」「お毛毛の

ひみつ」「犬」「未亡人と犬」「女学生の性」

「欲望のブルース」「女」等々。手元の原画

だけでもまだまだたくさんあるが、ブルームに全然関係ない様な家庭的な題を付けた事もある。「ある夜の出来事」「生きる喜び」「ハイキング」「魚釣り」「大相撲初場所」「力道山破れる」「デパートにて」「ド

ライブイン」「海水浴」「入院」「車内の彼

女」等はチョットそれらしく聞えんだらう。

小生も、又彼もエロと名付けるのが嫌いだ。だからかも知れないが小生達に関係ないのには実にエロと先に名付けるのが多かった。

「エロ教師の欲望」「エロ家庭教師」「エロ医者」「エロ社長」等、一見してそれと分る題名は小生達の作ではない。……失礼(作題者に対して)……

しかし皆さん、気を付けなされ。題名だけで中は全然喰わせ物、なんてのが温泉場だ。スーッとひもといた題名と目に映る時になりや二十秒か三十秒位の時間だけが、さも素晴らしい品物で、後の十五分近くはストリップ。それも上半身だけ露出と言うようなのが多いから、題名だけで信用してはいかん。

それと単価だが、モノクロ一本片手と見込むべきだろう。実際の所になるとその半分以上下チョットと言う所なんだけれど、マァ人間を見て買うなり借りるなりして下さい。

皆さんとここで顔を合せていれば話しは早いんだがねえ。もう、こんな事はやっていないが、手元にあるものを見せたり、聞かせたりする位はなんでもないんだが……。

……………◇……………

話しが又、だいたいSやMとは関係ない方へ

行ってしまったので、至急頭の中から戻す事にする。小生の題名作成に関係のない方で、縛りにも又SM的にも一番印象に残っているフィルムに「鬼面」と言うのがある。

これは題名が、それらに全然関係のないのに対し、画面右に題字、左に般若の面を映す意慾的な物だった。フィルムがスクリーンに映ると、もうそれは完全に縛り上げられた美女一人。背もたれの高い椅子に後手縛り、両足を左右に開かされ、それぞれの椅子の脚にその動きを止められている。身につけた長襦袢は縦半身はその肉体を露出されていた。左側の乳房と太股とをあらわにし、画面がアツプし始めると、それ等の部分部分に、鞭の跡と思われる黒い幾本もの跡がはっきりと見えた。

すると、般若の面を付けた半裸の男が一人現れ、いきなり皮のムチを振るい始めた。それ迄は、ガックリと首を落としてあえいでいた美女は、一ムチ当てられる毎に、髪を振り乱し、首を左右に振ったり、天井を向いて何か叫んでいるのであろう、大きく口を開けて自分の動かせる範囲のすべてを動かし、と言っても体の部分で動かせる所と言えば、かうじて許された膝小僧の部分位いなのだが、

ムチが乳房に、そして太股に当たる毎に、大きく又小さく開いたり閉じたりして、その苦痛に耐えている。カメラは縛りつけられた足首から始まって、ゆっくりとそのむき出された部分の方の体を追って、しだいに上半身に移って行く。乳房にも、そして左腕の付根にも数条のムチ跡を残していた。(この種の責め場は一般のピンク映画と同様いかにもワザとらしいものと、それこそまったくその物ずばりに責めるものがあるが、同じ演技となれば音声の入る、又ぶっつけ本番でないピンク映画の方が上である。

男のサジストは別としてマゾヒズムの女性にこれらの役者?の中に居れば、これは当然からくりなしで縛りを、又ムチ打ちを決行する事になるから迫力は抜群であろう。こうなるとかえって音声のない欠点が又、迫力をより上げて来る様な気もする。

ほんのおしるしに胸の周りに縄を掛けて、むき出された尻にムチを打つ、こう言ったストリームのフィルムを見た事があるが、勢い良く振り上げて、いざと言う時になると、グッと力をぬいてしまい、ただ尻にさわるだけなんてフィルムの方が多いのだが、こんなのは見ていてすぐ分るし、笑い出してしまう。

したがって女性の表情にも自然とそれが現れて、フィルムの前半をただそんな事だけで詰らなく過ぎてしまふのが多い)

美女の動きが激しくなると、腰を浮かす様にして体を振る訳か、椅子ごと倒れかかる事がしばしばある。そんな時、男は乳房にかけられた縄をグイッと握り荒々しく引き起こす。

男の手によって両の乳房と太股が押しひろげられる。椅子の後へ回り、ガックリと首を落とした美女の乳房を……。美女の顔と般若の面、苦痛に歪む女の顔と冷酷な鬼の顔、いかにも対照的である。

暫くして足首の縄をはずされ椅子から離されると、ドウとばかりに美女は左肩からタタミの上に倒れ込む。襦袢の裾をパッとめくり胸元を縛った縄間にそれをさみ、今まで無傷でいた尻を責め始めた。無防備の尻は一打一打に限りなき反応を見せ、美女は豊かな表情を見せている。悦虐にも見える、と言う言葉がぴたりである。男は自分の足下に美女をうずくまらせる様な型にして、左右の丘にムチは順を決めた様に打振られ、女は身をゆすって前に倒れる。

男はすぐに女の尻の方に廻り、……舌がそして唇が責めたムチ跡を……。そして美女を

片腕に抱きながら、男は女の後手縛りをとき長襦袢の衿元を持って強く引くとスルスルと女の体が半回転する様な型で足元に生まれたままの姿を晒す。先刻迄鞭の炸烈した跡を余す所なく見せて悶え、そして感泣している。男が更に……。

ウイスキーのシングルグラスが使われたがいかにも印象的であった。そして、羽根毛を手にした男の……。羞恥責である。女は首を振り、左右の手を一杯にひろげシーツをにぎったり、はなしたりして恍惚と奈落の世界ををさ迷っている。

黄金の針が美女の肉体を刺してから、女の足を自分の肩の上に乗せたり両足を一杯に開いて挙げたりしての熱演が長々と続いた。女を四ツ這にさせての……。がしばらく続いたが、カメラはその……。や、女の表情を正面からアップし、……。二人を所あまさず映し出していた。女の手がアップになると、先刻投出されたままになっていた鞭をしっかりとぎっており、それを男に、手渡そうとしている。

男が離れるとそのムチで、四ツ這の女の背中と尻とを又打つ。ムチ打たれながらもその美女は尻を振りながら、時にはジッと動かずにいたりして、そのムチ打の欲びに浸ってい

た。

数度打たれた末、四ツに這っていたその手がガクツと前にくずれ。男は急ぎ又……。

.....◇.....

大変なものである。部分的に忘れてしまっている。このフィルムをひっぱり出して映写しながらの記述である。長々とまあSMよりエロに近い。(当然か? これもSM映画じゃないんだからね。エロなんだから) くだらん話になってしまったが、本格的な鞭打物や縛りを主にした物は、数少ないだけに小生とて自然手元に置きたくなる。多少なりその気があ

団鬼六・作 臨時増刊号

△花と蛇△ 特集号

定価五〇〇円 略号(花)

待望の△花と蛇△の特集号を愈々印刷することに決定しました。写真や挿絵をどのように挿入するか、只今企画中ですが昭和四十二年一月号以降の本誌掲載の『花と蛇』を骨子として、興味のある構成にしたいと考えております。

団鬼六先生の名作△花と蛇△を一貫して通読なさりたい方は、どうか刊行と同時ににお求め下さるよう、お待ちしております。どうか御期待下さい。

るんだから。

他に『マゾヒスト』と、題名はいいのがある。縛りは迫力があつたが半裸の女を両手を頭上に天井から吊り下げた様な型に縛り床柱にぐるぐる巻に縛ったり、爪先が床から離れる位に締め上げられたりした後、日本刀で肉体のいろいろの部分、チクリチクリとあぶな気な手付きで刺す。長い髪をわしづかみにして前へ引いたり後の方へ倒す様にしたりしてから、その日本刀でスリッパを胸元の所から一気に差込んで真下に切落としてしまう。パンティは自分の口でくわえてひきちぎる様にズタズタにしてしまつてから胸や胴に深く喰い込んだ縄をとき本番に入る。しかし頭上の両手を縛った縄だけではとく事を許さず、めずらしい型で女を自由にするというもの。

最初にフィルムをスーッと伸してのぞき見た時は、題名にすぐ期待しただけに、なんだか残念に思ったのと、一杯喰わされた様な気がする。題名だけじゃ、まったくあてにならないものである。『強姦』なんて奴もそうだったなあ。昼寝最中の娘の室に忍び込んだ男二人に、服の上から胸元を麻縄でぐるぐる縛られてころがされた娘が、声を出そうとすると男がナイフを突きつけて威す。二度三度

威される内に女は観念した様にグッタリとなる。あとはやはりおきまりで、男二人がかわるがわるその娘を犯す、と言った設定である。その他でも、縛りものもずいぶんあるが、事が終わった時等、後手に縛ってあつた筈のものが胸周りだけになっていたり、ぐずぐずにゆるんで、女が両手共自由になってしまつており、跡始末を自分の手でなんかやっているのを見ると、縛りに関係があつただけにガッカリする。そんな様なら縛り等最初から関係のないものの方がまだしも良いと思う。

マァーなんとしても小生嫌いの方ではないから、これからはずいぶん、自然、集め観るというより、その道すじによって集つて来るだろうし、又それを他者から聞く事もあるだろうから、その時は又、改めて御話しする事にする。読者の中にあつて、変りダネなる御話があつたら、御聞かせ願いたいと思う。

これが小生のY写真と、エロ映画の、縛りを入れた、イヤ、観た、見聞録である。ともあれ、小生の見聞疎かなる所である。

しかれども、この後に期待して下されや。又、新たな見聞に我が眼を寄せ、耳をかせばこの体、ジツとしていず、御話ししよう。

(カット・日本武士画)



夏の憶い出

グ
リ
カ
ン

鮎川幸子

私は一昨年の八月、盲腸でS医院に入院しました。その時、私の隣のベッドにT女子大の芳江さんがいたのです。私と芳江さんは残念ながら仲はよくありません。芳江さんはどちらかといえばグラマー的であり、美貌を鼻にかけているからです。それでいてマンガを読んでいるので、オネンネなのかもしれせん。

芳江さんは夏休みに学校のプールで飛び込み頭を打ち、S医院で直ぐレントゲンで見て

もらったところ、首すじの脇の骨を折って、そのまま入院してしまったのだそうです。首にはギブスをはめていますが、首以外は健康体なので食欲が旺盛らしく、バナナやお菓子をパクパクとよく喰べ、毎日マンガや雑誌に読みふけていました。でも運動しないのでお通じがない様子です。いたずらっぽい看護婦さんが検温の際「芳江さん、気持ち悪くない」と言いましたが「いいえ、どうして」とオネンネの芳江さんは、看護婦さんの言う

ことがわからないようです。でも私は、とっさに浣腸のことだと思い、顔が赤くなり胸がドキドキしました。看護婦さんは「それならいいの」と言っ外へ出ました。

翌日の十時頃、芳江さんの付添婦さんと、昨日とは別の看護婦さんが入ってきました。そして芳江さんのおふとんのすそがまくられ何かゴソゴソしていましたが、やがて看護婦さんは出て行きました。あっ、浣腸だ。と思った瞬間、もう終わっていました。その後、付添婦さんがブツブツ言っていました。芳江さんが浣腸した後、直ぐ排便したいと言って便器を入れたため、肝心の便が出ないでグリセリンだけ出てしまったのです。さあ、大変！芳江さんはお腹がはってウンウン唸りはじめました。付添婦さんは、あわてて看護婦室へとんで行きました。やがて昨日の、いたずらっぽい看護婦さんが笑みを浮かべて入ってきました。そして手には何と五十CCの太い浣腸器とグリセリンのガラスのビーカーを持っていました。

「駄目ね、芳江さん。早すぎるわよ。もっとがまんしないと出ませんよ」と看護婦さんに言われて「すみません」と

芳江さんは低い声で答えました。

「今度は、ちゃんとしてね」

看護婦さんは太い浣腸器にギューと一杯、グリセリンを吸入しました。そして、ふとんにもぐるようにして「お口を開けて、息を吸って、かたくならずに力を抜いて……」と言いながら、お浣腸が行なわれました。「がまんしてね」と、看護婦さんは芳江さんの方へ向かって言うと、何とまた浣腸の準備をはじめたのです。ビーカーのグリセリンは硝子管の中へ、どんどん引き上げられているではありませんか。

芳江さんは「とても、がまんできません」と悲しい声をだしています。しかし看護婦さんは有無を言わず、一気に二本目の浣腸を施します。たちまち芳江さんは泣き声のような鼻声で「うあん！ かにんして」と叫びはじめます。看護婦さんは、バタバタと足を動かしている哀れな小羊、芳江さんには目もくれず、付添婦さんに冷たく事務的に申しました。

「芳江さんは、がまんできない性質たちなので、二本浣腸をしました。圧力をかけてグリセリンを入れたので、今度は大丈夫です」

看護婦さんは右手にがっちり浣腸器を握って勝ちほこったように室をでて行きました。

「がまんして下さいよ」と付添婦さんに強く言われて、芳江さんは唯、こっくりうなずくだけです。

ビニールと新聞で包まれた便器が入れられました。夏の暑い日ざしを受けて一瞬、部屋は静かになりました。やがて荒々しい激しい恥かしい音が聞こえました。微かに唸る芳江さん。でも私は、何と健康的だと感動しました。芳江さんは、もう両手で顔を押えて、時々私を睨んでいます。

翌朝、検温のとき看護婦さんに、「便通はどうですか？」と聞かれた芳江さんは、「あのう、昨日は……」と蚊の鳴くような小さな声で答えていました。そして看護婦さんに、「ああ、グリ浣ですね。グリカンね」と二度も念を押されました。

それから看護婦さんは私の処へも聞きにきました。「幸子さんは？」「三回です」「下痢気味ね」「そうそう。あさって、いよいよ盲腸の手術ですって」

私は、どきっとしました。いやな手術。当然、お浣腸がお待ちです。看護婦さんは、に

っこり笑って、芳子さんに聞こえるように言いました。

「幸子さんの浣腸はグリカンではないのよ。石けん浣腸をしましょうね。お腹をお掃除しなければね。全部、出ちゃうから、お腹が痛くなるかなあ」

私は身ぶるいしました。きっとそのときは丸いお尻を芳江さんの方へ出して、イルリガートルで大きい浣腸がかけられることでしょう。太いゴム管がお尻に挿入されるのです。グリカンよりもっと時間がかかるでしょう。芳江さんは今度は逆に、私の苦しむを思いきり眺めることができるでしょう。きっと復讐されます。

「ねえ、看護婦さん。私なら、きっと泣くわね」

芳江さんは、わざと大きな声で看護婦さんに話しかけます。

いやな芳江さん。

白く濁ったガラス管のお薬！ 片手で高く持ち上げられ、ぐっと奥までさされる管。

私は口がからからに乾くのを覚え、思わず目をとじました。



創作シナリオ

受 難 の 悲 歌

橘 雅 美

を縛っており、男はそれにかぶさる様に倒れている。

4 又、家の前に戻る

刑事、不安気な様子になる。人の気配もなく、立関のガラス戸に手をかけると、難なく開いてしまう。カギはかかっていない。

二人、様子を伺う様に足を入れる。

警官 ごめん下さい、警察のものです。

相交らず何の返事もない。二人、顔を見合わせて、中にあがりこむ。

5 奥の部屋

ふすまを開けた二人の前に、倒れている若い男女。刑事と警官、しまったと言う様にかけ寄る。

警官 (男をかかえてゆすりながら) おい君。しっかりしたまえ。

男、頸動脈を切って、すでに脈もない。

刑事A (下になっていた女の胸に耳をやり呼吸の有無を確かめながら) まだ脈がある。

警官は男を畳の上に寝かせ、ころがっている薬のエキビンと血のりの付いたカミソリを見つけて、手にとる。

警官 覚悟の自殺ですね。

刑事A (せかす様に) おい、救急車の手配だ。それから、皆を集めてくれ。

警官 はっ。(と言って急いで去る)

刑事、部屋の中を見廻わす。座敷机の上に

1 夕ぐれ時の街の中

場所は下町。けたたましく鳴るサイレンの音。二台のパトカーが走り、夕べの買い物に向かう人が、時ならぬサイレンの音に足を止める。新聞配達少年も振り向く。

2 正夫の家の前

刑事と一人の警官が立つ。小じんまりした

3 同 部屋の中

二人の若い男女が普段着のまま、畳の上に突っ伏している。女は和服の上から両ヒザ

平家建ての家。あまり新しい、建て物ではない。

警官、ゆっくりと呼びりんを押すが、何の反応も無い。

ある一枚の便箋を手にする。

6 画面一杯に二人の遺書

(男Ⅱ正夫のN)

稲垣を殺したのは私です。奴はオニです。人間の皮をかぶった恐ろしいオニです。でも、私が自首したところで、稲垣の仲間が黙っているはずがありません。あいつらはきっとみどりや、私を責め殺すでしょう。これ以上、苦しい思いをする位なら、自分で死にます。——木原正夫・みどり

7 再び部屋の中

刑事A (あとから来た警官を前に) 女の方はまだ助かるかも知れん。すぐ胃の中を洗うんだ。

(F・O)

8 手術室の中

(F・I) 画面はライトと手術をする医者
の表情、手の動きを見せる。

9 病院の待合室

灰皿のアップ。刑事の指先が、いらだたく吸いかけのタバコをもみ消す。

刑事B 課長、手術が終わりました。

刑事A そうか。で、どうだい生命^{いのち}の方は。

刑事B はあ、発見が早かった様で、助かりました。

刑事A (腕時計に目をやり) よかった。

10 みどりの病室の前

手前うす暗く、ろうかの先の方だけ、灯り

がもれている。二人の刑事が、ゆっくりと歩いてくる。コンクリートの床に、二人の靴音だけが、冷たく響く。

11 同 病室の中

医者と看護婦が居る。医者はみどりの寝ているベッドの横に坐り、看護婦、かけブトンを直している。

目を覚ましたみどりが、二人の刑事と医者を見て、身体を起こそうとする。

医者

(起きようとするみどりをなだめる様にし気をしずめて、さ、奥さん。落ち着くんですよ。

みどり あの人は、正夫さんは。先生、正夫さんは？

医者 ——。(顔をこわばらせる)

みどり、医者の答えがない事から正夫が死んでいる事を察し、ワッと泣き伏す。看護婦がそばから言葉をかけてやる。

医者

(刑事に向かって) 大分疲れてる様ですし、ちょっと興奮がひどいからです、今日のところは無理じゃないでしょうか。

刑事A

(刑事Bに向かって) 署の方に了解を求めてくれ。(医者に向かって) あとはよろしく御願います。我々は明日^{あす}もう一度出直しましょう。

12 病院の玄関

二人の刑事、一礼して出てくる。歩きなが

ら、うしろ(病院)を振り向く。

刑事B あの二人、初めから自分達も死ぬつもりで殺しをやったんですかね。

刑事A

かも知れん。が、そうだと決めつける事も出来ないよ。何しろ稲垣という男も相当な悪人だった様だし、やつらの仲間も、それに劣らず二人を苦しめる事もやりかねない。そいつがこわくて警察に言う事が出来なかったとも考えられる。ま、とに角、明日になれば全て分る事だ。

二人の横を、サイレンと共に一台の救急車が走りぬける。あたりはすっかり暗くなっている。(F・O)

13 翌日 同じみどりの病室

窓からさし込む朝日が、部屋の奥まで届いている。ベッドの上では上半身を起こしたみどりが、無表情に髪をいじっている。

看護婦がみどりの肩に上着を着せかけてやる。みどり、その上衣に手をやり、窓の外を見つめる。窓ぎわに手拭いを干しに行った看護婦が、下を見て、

看護婦 きましたわ。(つぶやく様に)

みどり (一しゅん顔を曇らせる) 昨日の刑事さん達ですね。

看護婦 うなずく。

14 同 病室の中

外から刑事の声。医者と二人が部屋に入っ

てくる。みどりは正座しようとするが、刑事が『そのまま』と、やさしくとめる。

みどり 申し訳ありません。

刑事B 奥さん、亡くなられたご主人と二人で、稲垣を殺害した。まちがいありませんね。

みどり はい。(深く頭を下げる)

刑事A 御気分さえ回復して居られるなら、ひとつくわしいお話しを伺いたいのですが……。

みどり はい。何もかも申し上げます。(イヤな事を思い浮かべる様に、暗い表情で目を閉じる。)

画面がゆらぎ、やがてかき消される。

15 学校の校庭

(回想場面となる) 白いシャツに黒いブルマーの女学生が、バレーボールの練習をしている。白いボールがコートに踊り、いさましいかけ声が校庭にこだまする。

(みどりのN)

あれは今から五年程前の事です。私は故郷の高校でバレー部に入っていました。

15 学校の中にある農園の片すみ

まだお下げ髪のみどりと、学生服姿の男子生徒が並んで腰を下している。

みどり 正夫さん、どうしても東京へ行ってしまうの。

正夫 東京で働きたいんだ。必ず待ってる

よ。お互いにあと一年頑張ってみようじゃないか。

みどり 正夫さんが行ってしまったら、私はひとりぽっちよ。私、今の叔母の家に居るのがつらくて――。

正夫 一年の辛抱だよ。

みどり そう、一年辛抱すれば私も一しよに行けるのに……。悲しいワ。

正夫 僕だって同じだ。でも、必ず君を安心して迎える様にする。本当だ。

みどり 正夫さん――。

二人、ひとと抱き合う。

16 二人のうしろの木かげ

みどりと正夫の様子を喰い入る様に見つめる女生徒が二人。(同じバレー部員)

17 農園の片すみ

女生徒二人の向こうで、みどりと正夫が軽く口づけをする。

18 同

二人の女生徒、顔を見合わせてうなづく。

19 更衣室の中

練習を終えたバレー部員が、それぞれ汗を拭きながら着替えをしている。

陽気な笑い声――さっきの女生徒二人が、身ぶり手ぶりで、みどりと正夫のことを、オーバーに再現して皆を笑わせている。

生徒B 私、悲しいワ。別れるなんてイヤ。

生徒C (男の声で) 僕だって同じだ。みど

りさん、愛してるよ。

生徒B うれしいわ、正夫さん。キッスして(目を閉じ唇をつき出す)

――笑――

二人の女生徒、抱き合ったまま、その場で笑いこぼる。この時、部長の女生徒が、一同の前に出て大声を出す。

生徒A 静かに！(生徒B・Cに向かって)

あんな達、それ本当ね。

生徒C (あわてて立ち上がり) 本当です、部長さん。

生徒A (少々ヒステリック気味) そう。もし本当だとしたら、絶対に許せないわ。私に良い考えがある。スポーツ

をけがしたバツを与えて、みどりに反省をうながすのよ。いいわね。

部員は、皆、生徒Aの周りを囲む。

生徒A 皆んな、チームワークを乱した時はどうなるか、よく覚えておくのよ。

皆が、部長の女生徒の話に耳をかたむけている所へ、みどりが入ってくる。皆、みどりを黙って見つめている。みどり、ちょっと不思議そうに部長に黙礼すると、自分のロッカーの前に行く。

生徒A お待ち。(きびしい顔つき)

みどり、ギクリとして立ち止まる。

生徒A みどりさん、あなた練習をサボってどこに行ってたの。

みどり —。(うつむく)

生徒A どうして言えないの。だまってちゃわからないじゃない。

みどり (皆に背を向けたまま) ああ、気分が悪くなったものですから。

生徒B (おどけてみせて) あなた、気分が悪くなると、男の人に抱かれたくなるの。へえ——、変ってるわね。

生徒C (あおり立てる様に) キッスをするよ、治っちゃうのよね——。

みどり —。

生徒A みどり、チームワークを乱した事、認めるわね。

みどり、首を縦に振る。一同から、どつとざわめきの声があがる。

生徒A あなたの様なフケツな人、私、初めてよ。これから、その汚れた心を鍛え直してあげるわ。これも部長として、部員を思えばこそなのよ。

みどり そんな。部長さん、私、真剣に正夫さんを愛してます。決してフケツな人じゃありません。

生徒A おだまり! 少しは反省したらどうなの。

みどり (ロッカーに手をかける) 私、帰らせてもらいます。

生徒A バレー部のはじよ。不良——。

生徒A、みどりに飛びかかると、強引にユ

ニホームを脱がそうとする。みどりはこれを振りほどこうと必死にあがく。他の部員もこれに加わる。

半裸にされ、他の部員に両腕を押えられたみどりの口に、生徒Aは無理矢理、奪ったユニホームをこすりつける。

生徒A このナマイキな唇が、男を知っているんだ。さあ、きれいに洗ってあげるわよ。(尚もこすりつける)

みどりの泣き声が次第に大きくなる。

20 回想

相交らず、みどりがいじめられている。みどりのNに合わせ、更衣室の中でのリンチが続く。

(みどりのN)

正天さんとの事を知られた私は、部長さんからひどくいじめられました。髪をむしり顔をたたかれ、その上、裸にされて水をかけられました。さわぎを聞いて先生が来るまで、さんざんに責められたのです。でもそれだけでは済みませんでした。もっと恐ろしい事が、私を何度も襲ったのです。

21 病室のベッド(現在)

みどりの顔、アップでとらえる。軽く目を閉ざしている。ややあってから、思い出した様に瞳を見せる。

みどり それから二、三日して、近くに住んでいた稲垣という不良グループから

呼び出しを受けたんです。

刑事と医者、話に聞き入る。看護婦も同情の表情を見せる。カメラは、そうした顔を順に写していく。

みどり 私と正夫さんの、農園での事を写真に撮ったと言うんです。言う事を聞かなければ皆にその写真を見せて、二人の事を大声で言いふらすとおどされました。正夫さんの事を思うとそのひと達の話を見無視する事は出来ませんし、許してもらおうと頼みに出かけたのです。

画面、ゆれて再びかき消される。

22 村はずれにある神社の境内

(回想場面に戻る) セーラー服姿のみどりが、あたりに気を配りながら歩いてくる。何度か足を止め、又歩き出すが、やがて思いつめた様にお堂のトビラに手をかける。

23 お堂の中

中は真っ暗。トビラが少し開けられ、外の光が中を照らす。恐る恐る、みどりが顔をのぞかせる。中をうかがいながら、少しずつトビラを開けて行く。足を一歩、二歩と中に踏み入れた時、急に閃光が走る。

みどり キャ!

24 同 お堂の前

みどり、あわてて飛び出して来るが、中から男の太い腕が口をふさぎ、身体を押えて

しまう。軽々とかかえあげられたみどりは男の手でお堂の中へ――。

不良B おととととと。せっかく来たんだぜ。ゆっくりして行けよ。

25 又お堂の中

ゆかにおろされるみどりの。むき出しになった素足を気にしながら男の手でその場に引きすえられる。

背後でトビラの閉じる音。みどりのおびえた顔が振り返る。

みどりの 何するの。帰して。お願いです、写真を返して下さい。

稲垣 写真？ 知らねえなあ。

不良B さあて、俺も知らねえよ。

不良C (手にしたカメラをなげる) これから撮る芸術写真の事じゃねえのか。

みどりの えっ。(ぎくりとする)

稲垣 そうか。でも、俺たちまだ、その

芸術写真ってのは撮っちゃいねえんだな。(みどりの前にかがみ込んで顔をのぞき込む) もっとも、これからお前さんがそのモデルになってくれるんだがね。

稲垣はさもないやらしげに、みどりににじり寄り、ホホにふれる。こわごと後ずさりしたみどりは、すきを見て逃げ出そうと腰を浮かす。

みどりの そんな。いやです。寄らないで！

誰か助けて――

稲垣 うるせえ。(みどりのホホを平手打ちする)

みどりの 泣き伏す。これを見て、仲間が舌なめずりする。

不良C 兄貴、そろそろ本番にしようぜ。

みどりの いや、やめて――。

みどりの、二人の不良に制服を脱がされるはめになる。叫び声を上げ、手足をバタつかせて逃げ様とするが、やがて裸にされて行く。不良Cの持つカメラが、しつようにそれを撮りまくる。ストロボの光りが冷たくみどりの顔にふりかかる。

稲垣 チェッ、運動やってるだけに、いやにあばれるじゃねえか。

不良B それにしても兄貴、こいつあ正夫みたいな坊やにやもったいいないぜ。良いた体してるぜ。イッシッシッシ。

みどりの、尚も泣きながら抵抗する。

稲垣 しょうがねえな、おとなしくしねえか。優しくしてりゃ良い気になりやがって……。

不良B 兄貴、こいつでふん縛ったらどうかな。(と、荒ナワを差し出す)

不良C そいつは面白いぜ。

みどりは後に手を回され、手首を荒ナワで縛られると、むしろの上に横倒しになる。

不良Cが大喜びで、これを色々な角度から

カメラに納める。

稲垣 可愛いがってやるぜ、おませなおじようちゃん。

みどりのブイと横を向く。稲垣のごつごつした指が唇をめくり、鼻・耳と責めたてる。そして荒々しい稲垣のいたぶりが始まる。やがて低い呻き声がもれ、他の二人の不良がユカイそうにこれを見降ろしている。

(みどりのN)

やはり、私の考え方は甘すぎました。あの人達、それから本気になって、その写真を理由に私をおどし始めたのです。私は何度も稲垣達のオモチャにされました。正夫さんは東京へ行ってしまう、一人ぼっちの私は、もう、稲垣の言われるままになってしまいました。

(F・O)

26 走る車の中(現在)

うしろの座席、刑事Aとみどりが坐っている。車の窓を景色が流れる。

みどりの 二年前、稲垣は『東京へ出てひと旗あげるんだ』と言って、私を連れて

上京しました。途中、幾度も逃げ様としたのですが、稲垣は決して私から目を離そうとはせず、少しでもそんな素振りをしただけで、列車の中でもかまわず、叩かれました。もうどうでも良い。東京に行けば、いつ

かは正夫さんに逢える事が出来ると信じて、じっとこらえる事にしたのです。(淡々とした調子で)

画面ゆらぎ、かき消される。

27 東京の夜 ネオン街

(O・L) パチンコの音、車の音、人の話し声、足音、レコードの音、その他あらゆる音が交わり、うるさい。

28 稲垣のアパート

稲垣とみどりの大胆な情痴の宴。一時後、薄ものをまとったみどりが化粧直しに立ち上がる。うしろから稲垣の声。

稲垣 おい、今夜の客は上等だ。思い切りサービスをしてやれよ。

みどり (黙って髪をとかし始める)

稲垣 そう不服そうなツラをするなよ。お前だって、結構楽しんでるんじゃないのか。

みどり (振り返り) よして。ねえ、お願い

だから、もうこれ以上私ばかりいじめないで。ほかの事なら、どんな事でも我慢しますから、それだけはかんにんして下さい。ね、稲垣さん。

稲垣 冗談じゃねえ、俺とお前は共同経営者なんだぜ。お前が客をとる、そして、俺がたんまりと金をまき上げるそうだろう、可愛い俺の奥様よ。

(強い調子で) いいな!

みどり (声もなく泣きくずれる)

(F・O)

29 バー「ミナ」の中

わりと広い感じの店。ホステスのはしゃぐ声。そしてボーイが行きかう向こうにカウンターがある。

(みどりのN)

稲垣という男は、恐ろしい、マムシみたいな男でした。仕方なく私がホステスにならなかったのですが……。あの男、三日とあげず、私に無理矢理客を取らせ、そして大金を客からしぼり取るのです。私は何度も自殺をしてみたいと思ったのですが、どうしても正夫さんを忘れる事が出来なくて死ぬ事さえ、出来ないままでした。

30 同 カウンターにて

シェーカーを振るバーテン。そして手前では酔いつぶれた男が一人。それを介抱しているのが、みどり。

咲子 (バー「ミナ」のマダム「みどりの

そばに歩み寄り) ねえみどりさん、あちらのお客さんが、ぜひあなたを呼んでくれて言ってるんだけど。

みどり (ボックスに目をやり、少しためらってから) はい。

咲子 こっちは、私におまかせなさい。

みどり すみません。じゃ、よろしく御願

します。

咲子 (意味あり気に) うちにとっては大

事なお客よ、そのつもりでしっかりね。(酔った客に向かい) サアサアホーさん、しっかりして下さいナ。

酔った客、何やらわめきながら咲子に抱きつく。適当にあしらいつつながら、咲子は目のみどりに合図をする。みどり、そこを離れてボックスの方へと歩いて行く。

31 同 フロアーにて

みどりの前にボーイ姿の稲垣が立つ。

稲垣 いいか、相手はさる銀行のドラ息子だ。うまくやれよ。

一杯のカクテルとマッチを渡されたみどりは、黙ってそれを受け取る。

32 同 ボックス

黒ぶちのメガネをかけたやせた男、みどりが来たのを知って、坐っていた二人のホステスを追い払う。

二人のホステス、みどりに一べつしてブツブツ言いながら去る。

みどり、無言のまま一礼し男の横に坐る。

若い男 お待ちしてましたよ。あなたはきれいですね。すばらしい。

みどりの差し出すグラスを取り、男は手首をにぎる。みどり、そっとテーブルの上に旅館の名前をメモしたマッチを置く。

33 旅館の入口

一台のタクシーが止る。中からみどりと男が出て来て、旅館の中に消える。

34 同 一室(二階)

ベッドに腰をかけ、みどりと男が抱き合っている。着物のすそをはだけた男の手を、みどりの白い手が押える。

みどり 待って。ちょっと待って。

若い男 (不満そうに) 何ですか、今さら。

みどり お願い、今から私の言う事を、よく聞いて下さい。私は逃げもかくれもしません。だから。

若い男 (舌打ちして) どうぞ。

みどり ありがとうございます。——実は、

私、とっても悪い女なんです。

若い男 本当、可愛い悪女。

みどり 真剣なんです。私には、いやな男が

ついて居て。

若い男 もういいよ。僕が君を抱く、君は金を受け取る。それだけじゃないか。

再び、みどりにいどみかかる。みどりは、やっとの思いで窓ぎわまで逃れ、カーテンを細目に開けて男に見せる。

みどり さあ、これでも私を抱く?

35 旅館の窓下

稲垣がタバコをくゆらし、こちらを見上げている。

36 再び部屋の中

若い男、急にふるえ出し、あわてて飛び出して行く。

37 旅館の窓下

若い男が稲垣にかけ寄り、何か話をし、立ち去る。稲垣、これを止めようとするが、あきらめる。タバコを地面にたたきつけて旅館の二階をにらみつける。

38 部屋の中

若い男と稲垣のやりとりを見ていたみどりは、窓ぎわを離れ、着物の乱れを直し始める。が、がっくりとした様に、ベッドに伏してしまう。

稲垣が部屋に入ってくる。だいぶ頭にきている風で、みどりの髪をつかむと、引き起こすなり、なぐりつける。

稲垣 このアマ、なんて事しやがる!

みどり イタイ。

稲垣 いいか、二度とこんな事が出来ない様に、たつぷりと体に教え込んでやるからな。

みどり 許して。

稲垣、みどりの帯に手をかけ解き始める。みどり、さほど抵抗も示さず、長襦袢も剥がれ、あつと言う間に裸にされる。

稲垣、裸にしたみどりをベッドに追いやり細ヒモで後手にくくり、胸にも縛めをかける。恐怖におびえるみどりの目前でタバコに火をつけ、素肌を責めさいなむ。ベッドにあがり、足で顔を踏みつけ、最後は胸の

上を踏みにじる。苦しむ、みどり——。

稲垣 どうだ。こんなのも、たまには面白いぜ。もっと苦しめ。

稲垣、ふと責めるのを止める。思い出した様に天井を向いて、つぶやく。

稲垣 まてよ、俺も万更嫌いじゃあねえが商売物を泣かしても一銭にもならねえな。よし今日の仕置きを、あのスケベじいじいをお願いするのがいい。お前の為にもなるし、これなら金が入るぜ。(みどりに向かって) おい今夜の分も、これからまとめてかせいでもらうぜ。

みどり、絶望的な表情をみせる。

39 田所の家の応接間

古めかしい飾り棚の置き物、どっしりした感じの応接セット。すべてが豪華な造りの部屋である。壁にとりつけたブラケットの^{あか}灯りが、かすかに部屋を照らしている。カメラは、田所の肩越しに、腰を下ろしている稲垣とみどり(彼女は目かくしをされている)を写す。

田所 (声だけ) 君の女だ、目かくしなどいるまい。せつかくの美しい顔がおがめないじゃないか。

稲垣 こいつはどうも。(頭をかく) つい

いつものクセが出ちまうもんで。稲垣、うつむくみどりの所に行き、目かく

しをはずす。みどり、はずかしそうに袖で顔をかくす。

稲垣 おいみどり、今更小娘^{むすめ}みたいなマネをするんじゃないよ。社長さんに挨拶しねえかい。

稲垣にとがめられ、みどり仕方なく、おじぎをする。

稲垣 そうら、ちゃんと顔を社長さんにお見せするんだよ。

みどり、肩を揺すられて恨めし気に正面を見る。目がしらが心なしかうるんでいる。

田所 うーむ。これがいつか見せてくれた写真の娘か。君が出しおしみるだけの事はある。(感心して) いや、

本当に素晴らしいの一言に尽きる。

稲垣 いやあ、どうも、照れますぜ社長。

みどり ああ、例の奴さ。お堂の中で、お前が『モデルにして』って、俺達に泣いて頼んだじゃねえか。あれだよ。

みどり (両耳をふさぎ、首を狂った様に振る) ああ。

田所 正直なところ、私はあの写真を一^{ひと}目見ただけで、あなたの身体にホレましてな。これは責めがいのある人だと、再三、ご主人にお願いしたのですが。いや、お逢い出来てこんなうれしい事はない。拝見した所、一段

と女らしいなった様ですな。

みどり、テーブルの上に顔を伏せる。稲垣横目でこれを笑いながら見つめる。

田所 さて、君の用はもう済んだのじゃないかな。

稲垣 こいつは御挨拶で。

田所 丁度、今、新しい女を教育中だな。

御らんになって行かれてはどうだ。

稲垣 それには及びませんや。ヤボ用がありますんで、へへ。(イスから立ち

あがり) あっしはこれで。社長さん、心ゆくまでお楽しみの程を、値は張りますぜ……。 (指でマルを作ってみせる)

田所は黙ってうなずき、ポンポンと手を打つ。奥から黒メガネの男が現われ、田所に紙包みを差し出す。稲垣はそれを手渡されて、ほくほく顔で出て行く。

男は次に、みどりの肩をつかむ。はっとした顔つきで、田所と男を見くらべる。

(F・O)

40 バー「ミナ」の二階

点滅するネオンが、ガラス越しに部屋を色どる。「ミナ」のマダム咲子と稲垣が、ふとんの中で抱擁し合っている。ややあって稲垣、タバコを口にする。咲子がため息をつき、これにライター^{あんた}の火をつける。

咲子 おかしな人ね、貴方^{あんた}って人は。自分

の女を他の男に借しといてさ。そのくせ、私の所へ来るんだから。

稲垣 みどりは金づる。ママはボクの大好きなひと……。 (笑)

咲子 勝手な人ね。(肩を抱く稲垣の手を

うるさそうに払い) でも、今日のあんたはいやにハッスルしてたじゃない。どうかしてるわよ。何があったっていうのさ。

稲垣 みどりの奴、男に俺の事をバラしや

がった。ちくしょう。(何度もタバコをふかす)

咲子 そう。アハハ、どうも御苦労様でした。(咲子、ふとんの中で足をバタ

つかせて笑い転げる)

稲垣 やめろ! (ふとんの上から咲子を押える)

咲子 それで、みどりはどうしたの?

稲垣 (ハナをこすりながら) 田所のじじいにまかせたよ。

咲子 (びっくりした様子で) そうなの。

……じゃ、今頃はあの子、はだかで縛られて……。

41 田所の家 地下室へ続く階段

ランプの灯りがゆれる。どこからか女のうめき声がもれてくる。

42 同地下室の中 1

天井から吊り下がるロープ、三角木馬、十

字架、その他色々な責め道具がずらり並んでいる。中央の床に二畳ばかり畳が置いてあり、そこでは一人の女が裸にむかれ、逆エビに縛られている。

背で結ばれた手足の縛めには棒が差し込まれ、田所がこれを力任せにねじっている。うめく女の目前にある柱には、長襦袢一枚のみどりが細引きで胸の上下をくびられてつながれている。顔がねじれる程に強いサルグツワが口を割り、きれいに結い上げていた髪は、無残にも背に長くたれている。みどりのわきには、先程の黒メガネの男がいて、叫び声をあげる女から顔をそむけ様とするのを引き止めた。

田所 これで今日はおしまいだ。だいぶがまん出来る様になったね。身体も柔らかくなったし（短い髪を掴んで引っ張る。女、気を失う）ゆっくり、お休み。

田所、男に女を連れて行く様、命令する。男、女の上に毛布を掛け、地下室を出て行く。田所、出口までついて行き、二人が出ると内カギをかける。みどりの所へ歩み寄る田所、細引きを解き始める。

田所 安心なさい、殺しやしない。今の男はあの女を送って行ったから、この家には私とあなたただだ。今更あが

いても、あなたが疲れるだけだからね。（細引きを解き終え、さるぐつわをはずしてやる）最後のものは自分でお脱ぎなさい。

みどり、覚悟を決めた様に、田所に背を向ける。肩から襦袢を落とし両手で胸をかくしその場にしゃがみ込んでしまう。田所、ロープを手にもどりの前へ。おびえた表情のみどりの目のあたりで手首に別々にロープをまきつける。

43 地下室のカベ

田沢が十字架に、みどりをはりつける様がかゲで写る。ロープのすれる音。みどりのむなしい声が断続して流れる。

44 同 地下室の中 2

両手を広げて横木に縛り、腰と足首を立木にくくられたみどり。胸を長い髪でおおいはしているが、全裸。画面は、これを横と真うしろから写す。

田所 君に素晴らしいひと時をプレゼントしてあげようね。私に協力してくれた、ささやかなお礼だ。そうら。

髪の上から乳房を手にもめる。もだえるみどりの顔。そして正面と背面からロングでカメラがとらえる。続いて長い髪が大きくはじかれ片方の胸に田所が顔をうずめる。アップで背面から写す。

45 同 地下室の中 3

画面一転してムチの音、みどりの悲鳴。田所のムチが次々と振られる。悲鳴をあげるみどりは猪吊りにされている。手足を吊られたみどり。ムチが空を切り、白い肌にからまる。長い黒髪が床にたれ、裸身はゆっくりと回転する。次第にみどりの肌に黒いムチのあとが浮かんでくる。のけぞる細いのどに、髪がまといつく。ムチ打ちは尚も続く。

46 田所の家の応接室

つい先程まで、みどりの坐っていたイスの上に、和服や帯が重ねて置いてある。田所が坐っていた席に、黒メガネの男が腰を下ろしている。

皮手袋をはずし、タバコを取り出すが、テーブルの上にあるみどりのハンドバッグに見入る。おぼつかぬ手つきで、そのバッグを開ける男。カチンという高い音がする。中のものをテーブルに広げ出し、興味深気に動く男の手を、画面に写す。

その内、男の手がハンケチにくるまったものを発見する。広げるとお守り袋が出てくる。男が急に小さきざみに慄えだす。その中には、古びた写真が一枚入っている。セーラー服姿のみどりと肩を組んでいるのは学生服姿の正夫。

47 画面一杯に男の顔

こめかみがふるえ、マユが引きつれる。

正 夫 人ちがいだ。そんなバカな。

48 地下室の中 4

丁度、乳首を隠す様なヒシナワ縛りに合うみどり。肩先からわき腹にかけて、ナワ目に棒がさし込まれてある。噴き出す汗に、肌が光る。みどりのうめき声と、苦悶の息づかいが更に大きくなる。

乱れた髪が顔にかかる。髪を啜わえ、齒を食いしばってこらえる、みどりのアップ。

49 地下室の入口

黒メガネの男、よろけながら転がる様に階段を下りる。地下室から呻き声がもれるのを、息を切らせ、中の様子に聞き耳を立てる。急に中が静かになる。男、ドアに顔をこすりつけ、尚も中をうかがう。

——間——

そして耳をつんざく様な、みどりの断末魔の悲鳴。

50 地下室の中 5

右側にぬっと立ちつくす田所。左側、三角木馬にまたがる、みどり。

みどり イタッ——。

こらえきれなくなった、みどり。顔を天に向け絶叫する。カメラは、あまりの痛さにけいれんする、みどりの上半身を写す。

みどり 正夫さん、正夫さ——ん。

そのままがくりと体を倒し、画面から消える。ドタリと、みどりの床に落ちる音。画

面は残された、鋭い三角木馬の頂点。

51 地下室の入口

正 夫 (みどりの声に気付き) あの人だ、みどりさんだ。(ドアをこわれんばかりに、こぶしでたたき) 社長さん社長さん!

内カギがはずれ、田所が顔を出す。

田 所 (むずかしい顔つきで) なんだ、ウルサイ。

正 夫 (中の方を気にしながら、) 奥さんが別宅で呼んでおられます。

田 所 フン、せっかくの気分が台なしだ。

こんな素晴らしい場面は、めったに無いことだのに。

正 夫 どうもすみません。(中を気にしている)

田 所

仕方がない。あの人は帰えしてやれあとはたのんだ。ああ、それから稲垣君に、今後は週に三回、みどりさんを借りたいと伝えてくれ。

正夫うなずく。まくり上げたワイシャツを元通りに直しながら、田所は階段を登って行く。正夫、田所が消えるのを確かめ、部屋の中に飛び込む。

52 地下室の中 6

木馬の近くで失神しているみどりを、正夫が抱きすくめる。ロングで音を消す。

(F・O)

53 田所の家 ウラロ

とうに夜は更け、月あかりに自動車が一台照らし出されている。黒メガネの男、みどりを肩に、支える様に出てくる。みどりは無造作に頭のうしろでまるめた髪、和服もくずれて相当疲れた様子。やつれた表情で男の肩に身体を預けている。男はみどりを後のシートに坐らせ、ハンドルをにぎる。

54 車の中

バックミラーにみどりの顔が写っている。

男、運転しながらバックミラーの中に居るみどりに話しかける。

男 まだ痛いだろう、みどりさん。

みどり ——。(瞳を細く開けるが、まだぼんやりしている)

男 音楽でもかけよう。

男 カーラジオのスイッチが入り、深夜放送の音楽が静かに流れる。

みどり あなたは、どなたです。

男、車を止めると、黒メガネをはずして振り返る。

みどり (おどろく) 正夫さん!

正 夫 (うなずき) 逢いたかった。みどりさん、僕は、君の事、一日だって忘れた事がなかったよ。こんな恰好で二人が逢えるなんて——でも、そんな事、どうだっていい。世界中で、一番好きな君に逢えたんだからね。

みどり (顔をそむける様に) すみません。

おろして下さい。

正 夫 何を言うんだい。

みどり 私、もう正夫さんにお逢い出来る様な女じゃありません。

正 夫、これに答えずエンジンをかける。

正 夫 君も苦勞したんだね。

みどり ね、車を止めて。(たのみ込む様子で) 後生ですから、私を降ろして。

正 夫 だめだ。僕の気持ちは少しも変らない。第一、僕だって君と五十歩百歩さ。あの田所という奴の下で、女を縛り上げて泣かせる為に働いているんだ。今夜の様にね……。こんな話もう、よそうよ。近くに川があったはずだな。少し休んで行こう。

55 堤の上

月光をあびて川面が輝いている。近くの鉄橋を、電車が走りぬける。シンとした堤の上。正夫の運転する車が近づく。ライトを消して、車がとまる。正夫、いったん車を降りて、後の座席へ移る。

56 車の中

正夫がとなりにすわると、みどりは逃げ腰になる。

みどり いけないワ。私は、もうダメ。

正 夫 (ポケットから二人の写真を入れたお守り袋を出して見せる) うそはい

けない。これ、君のだろ。

みどり あ、それは……。

正 夫 僕は君が好きだ。愛してる。君だっ
てそうなんだ、そう信じていいんだ
ろう。

みどり でも、私には。

正 夫 (みどりの肩をゆすり) 別れるんだ
よ、稲垣と。僕だって、あんな所は
オサラバだ。君と二人なら、それだ
けで幸せなんだ。これ以上、君につ
らい思いはさせたくない。何もかも
忘れ、二人でやり直すんだ。

みどり 私、こわい。

正 夫 いけない、今のままじゃいけない
だ。僕を信じてくれ。何者にも負け
ない二人の愛の力、それより強いも
のが、この世にあるものか。

みどり 正夫さん――。

みどり、正夫の胸にくずれる。熱い口づけ
を交し、二人は抱き合う。

正 夫 これで良いんだ。

みどり もう離しては、いや。私は正夫さん
だけのものよ。

正 夫 誰にも渡すもんか。みどり……。

正夫の指が、みどりの身体をまさぐる。み
どり、幸せなひと時を過ごす。

(F・O)

55 警察の調べ室

足を組んで坐っているのは刑事A。机の上
に調書を置き、ペンを片手にむっとりし
ている。悲しみをこらえる様に、口元に手
をやる、みどり。刑事B腕を組み、部屋の
すみを行ったり来たりする。

刑事B それで、じゃまになった稲垣を殺
てしまったと言う訳ですか。

みどり (強くかぶりを振る) ちがいます。

正夫さんも私も、そんな恐ろしい事
考えた事ありませんでした。本当で
す。信じて下さい、刑事さん。

みどり、身体をのり出す様に二人の刑事に
訴える。

刑事A 奥さん、気を悪くなさらないで下さ
い。しかし、御主人と奥さんが稲垣
を殺害した事は、隠す事の出来ない
事実なんです。我々は真実を知りた
いのです。稲垣を殺した時の模様を
御聞かせ願えませんか。

みどり

(涙も枯れ果て、無表情で話し始め
る) 私達、ただ稲垣や田所から目の
届かない所で、ひっそりと暮らした
かった。今更、誰をうらんでみても
仕方ない、二人が弱かったんだ――
そう自分に言い聞かせたんです。
それなのに(うつむく) 稲垣はケダ
モノです。(顔を上げ) あの男、私
達が、やっと掴みかけた幸せまで、

奪おうとしたんです。そんな事が許されて良いものでしょうか。刑事さん、正夫さんは、正夫さんは私を救う為に……。

みどり、そのまま黙りこむ。画面ゆらぎ、かき消される。

56 プラットホーム（回想）

（F・I）

駅の放送がスピーカーから流れる。人目をさける様に、柱の影に身を寄せ合いたたずむ二人。スーツケースを持つみどりと、ボストンバッグをかかえた正夫。二人共、サングラスをかけている。みどりは、珍しく洋服を着ている。

みどり （しきりに腕時計を気にする。Ⅱ手首にロープのアザが残っている）遅いわ。どうしたのかしら。

正夫 みどりさん、身体の方は大丈夫かい（いたわる様に肩に手をやる）

みどり、笑ってうなずく。

みどり きもう、全然眠れなかった。私、きつといい奥さんになるワ。

正夫 埼玉の叔父の家だ、稲垣や田所達には絶対わかるものか。

みどり その話し、もうやめて。（優しく正夫の腕に寄り添う）

正夫 （髪に手をやり）ゴメンよ。

その時、二人の背後から声がする。

稲垣 やけるぜ、お二人さん。

正夫とみどり、びっくりしてあたりを見廻わす。人相の悪い男が三人、取り囲む。

みどり あんた。どうしてここへ。

正夫 きさま！

稲垣 みどり、気の毒だが引き返してもらおうか。

稲垣、みどりの腕をつかむ。突き放された正夫の横腹に、コートで包んだナイフが押し付けられる。

57 バー「ミナ」の店内

みどりと正夫、肩を抱き合い床に倒れている。その周りに三人の男と稲垣、マダムの咲子が立ちはだかる。

咲子 （稲垣に向かい）あんた、とんだ三枚目じゃない。

稲垣 ウルセエ。おい正夫、このオトシマエはどうつけてくれるんだよ。

みどり 稲垣さん、私なら、どんなお仕置きでも受けます。ですから正夫さんを許してあげて下さい。

稲垣 （みどりにツバを吐きかけ）みどり

昨日は帰らなかったな。正夫と何してやがった。お前に男が居るとなりや、俺のメンツはまるつぶれだ。

みどり ですから、どんなバツでも。

正夫 だめだ。みどりさん、こんなやつらに敗けちゃいけない。

稲垣 この野郎！

正夫をけとばす。三人の男が正夫に飛びかかる。稲垣、みどりの髪を引っ張り二階へ行こうとする。

正夫 みどりさん――。

三人を振りはらい近寄ろうとするが、後からはがい締め合い、なぐられる。

みどり （あきらめた様に）正夫さん、もう

ダメなのよ。私の事は忘れて。

咲子 さあ、御夫婦は行った行った。

二人の背を押し、二階の方へうながす。正夫と三人の男の乱斗が始まる。

正夫、初めの内は素手でなぐり合っているが、相手が三人の為、押され気味となる。

咲子が面白そうにボックスに腰を下ろして見物している。

58 バー「ミナ」の二階

畳の上に突き倒されたみどりの上に、稲垣馬のりになる。上着のボタンを引きちぎりスーツとブラウスを破り胸元をはだけける。

みどりの首を締めつける稲垣。

みどり、上半身を下着までズタズタに破られたまま逃げ出すが、稲垣に足を払われ畳に転倒。スカートをむしり取られる。

59 同 店の中

男達のケンカを笑い声をあげて見物する咲子。正夫、三人の男の内、ひとりをかかえ上げ、カウンターの角に背をぶつける。そ

の男、のびてしまう。

残りの二人、これを見てカッとする。ビールビン割り、武器にする男。正夫、身構え直す。(口から血を出している)

60 同 二階

稲垣、みどりをパンティ一枚の裸にし、両足首をつかみ、股裂きになっている。画面、足元から、そして苦しみに波打つ胸元からこれをとらえる。みどり、うめく。

61 同 店の中

正夫、なぐりかかる男の腕を取り背後に回す。もう一人の男、ビールビンのかけらを持って正夫をねらおうとするが、逆にはち合わせを食い、その勢いで頭を打った一人が倒れる。最後のうずくまる一人も、股間をけられてダウン。

正夫、ジロリと咲子の方を見るが、咲子は力を落とし、しり込みする。気がついた様に二階へかけ出す。

正 夫 みどりさん。

62 同 二階

組み伏せられたみどりの最後のものを稲垣が取りにかかる。階段の踊り場に放り出される下着をとらえるカメラ。

正夫、現われ、この場面に驚く。

稲垣、正夫に気付かず、みどりにいどみかかる。

正夫の目に電気スタンドが写る。とっさに

その電気スタンドを取り上げると、稲垣の背中から、身体ごとぶつかる様に頭部をなぐる。稲垣、うめき声を上げのけぞり倒れる。

正 夫 みどりさん。

みどり 正夫さん。

二人、しっかり抱き合う。

(F・O)

63 再び警察の調べ室(現在)

(F・I)

みどり もう、どうして良いか解らなくなっ

てしまい、夢中でそこを抜け出してしまったのですが、二人の口からや

刑事B

っと出た言葉が、『自殺』だったんです。それなのに、私には死ぬ事

刑事A

かなわないのですワね、刑事さん。これからは、正夫さんが安らかにね

みどり (下を向く)

63 警察署の前

大通りを絶え間なく流れる車の群れ。警察署の入口、何人もの人があわただしく出入りしている。その中で、みどりだけ一人、ポツンと立ちつくしている。空を仰ぎ、小

春日の輝きをまぶしそうに見つめる。ふと我に返り、歩道を歩き始める。

64 先程の調べ室

調書を取り終えた二人の刑事が、ゆっくりタバコをくゆらしている。

刑事B 東京って所は、誰をも狂わせてしま

う、恐ろしい魔力を持った巨大な穴ぐらみたいなのですかね。

刑事A

(立ち上がり窓の外に目をやる)俺達は、皆んな穴ぐらの中で生活して

刑事B

る原始人って訳か。あの人、これからどうなるんですかね。

刑事A

いや、心配する事もないだろう。あれだけ苦しい思いをしてきたんだ。

彼女には、今こそ、何ものにも負けない自由という力がある。きっと幸せを掴むだろう。

刑事B

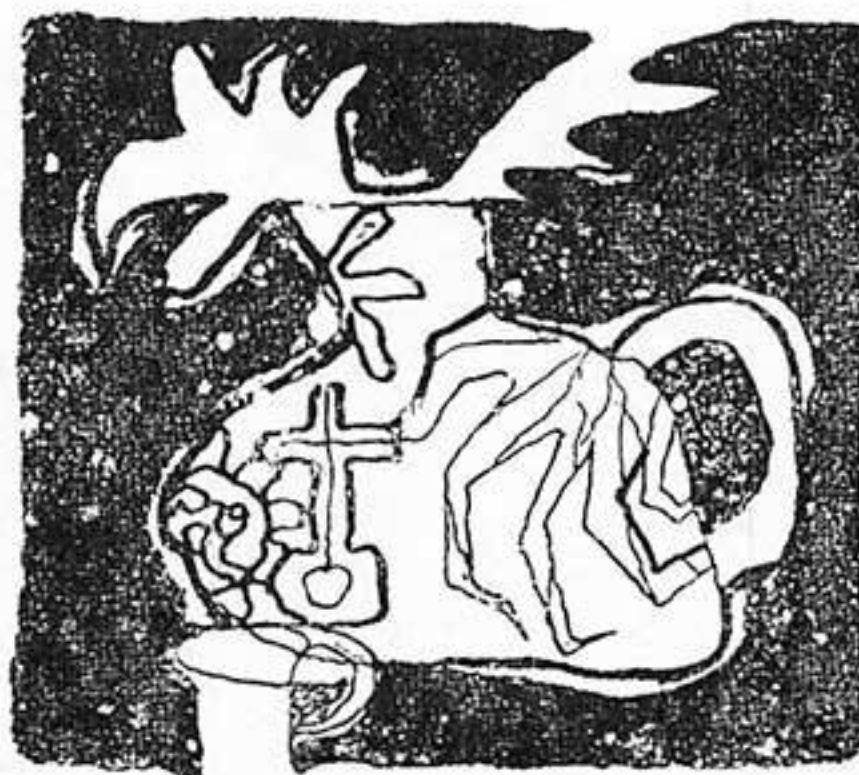
僕もそう祈りたいですね。

65 歩道

みどり、片手をあげタクシーを止める。みどりを乗せた車が真っ直ぐにのびた通りの彼方へ消え去る――。

× ×

× × ×
THE・END



美 臀 憧 憬 の 譜

痴

夢

麒 田 欧 二

挽き肉のように疲^{つか}れていた。にもかかわらず、その挽き肉を支えていたのは、裂けるような排泄感の故^{せい}だろう。排泄感だけが、確実に存在した。白日の路上を、排泄感だけが、よろめき歩いた。

四方を囲んだ方形のタイルが、一つ一つ、白い渦巻を作り、それが、ぶよぶよしたゼラチン状の吸盤に変わった、と思った時、するどい痙攣が来た。おそるべきエネルギーの爆発だ。つぎの瞬間、からだに開^あいている出口という出口から、同時に噴出する液状、半液状の排泄物が、それぞれ勝手なりリズムで五体の各部分にはげしい意識を強要した。

あたま、はら、腰、それに手足と、全くて

んでん、ばらばらでありながら、しかも奇妙な、一種のハーモニーを伴った精力的バレエが、たつぷりと続いた。暴風雨の狂暴なオーケストラ。

——と、だしぬけに、その暴風雨の奥から女の叫ぶ声を聞いた。軋^よるような甲高い声はあの女——いまいましい淫売だ。

《あんたの正体がわかったよ》

その声は、頭蓋のドームを、内側から張り裂くように響いた。

《変態で、インポで、そのうえ、きたならしいホモなんだ》

声は、何度も同じ言葉を繰返した。

どのくらい経ったか。はたと、女の声が歇^や

んだ。同時に、暴風雨も去った。とつぜん、墓場のような平和が来た。

(これは、どうしたことだ)

おれは見知らぬ場所に、ひとり佇立していた。いつ、便所を出たのか、いま、何をしていたのか、思い出せなかった。そればかりか自分の名前さえ忘れているのに気がついた。現在、自分のことを《オレ》と呼んでいることと自体、奇妙な空々しさを感じた。

急に、慄えが来た。理由はすぐわかった。

おれは、何も着ていなかった。いつ、こういうことになったのか、わからない。この世で最もおぞましく、最も醜悪なおれのハダカが

そこにあつた。これほど好きになれないものを、おれは知らない。それはまったく、やりきれない代物だ。

おれはよく、教材用に組み立てた人間の骸骨を、うらやましいと思つたものだ。あの白い、規則的な骨の組み合わせには、それなりの美しさとりズムがある。いつそ白骨であればいい。

ところが、おれには、何とも我慢のならない不潔な色をした、皮膚とわずかばかりの肉が、ぼろきれのように、骨と骨のあいだに、腐りもしないでへばりついているのだ。義足や松葉杖をついた人間に嫉妬を感じるのは、古釘のようにねじ曲つた自分の両脚を見るときだ。

その古釘の中央に、あの淫売女さえへななさ、これと呆れたように言つたきり、こんりんざい触れようともしなかった、ひとにぎりの肉片が、何かの腫物^{しゅもつ}みたいに、附着してゐる。おれだって、見れば悪寒をもよおし、反吐^{へど}が吐きたくなるから、見ないことにしているほどだ。

おれは、盲目^{めくら}になるべきだ、と真剣に考えたことがある。ところが、試しに眼をつぶつてみたら、自分のからだは、もっとよく見え

るにおどろいた。五十キロにも満たないというのに、その肉体がある、ということが、おれには、このうえない重荷なのだ。おれはだから、他人の眼には、自分の眼にも、めつたにハダカをさらしたことはなかった。

とつぜん、眼の前にドアがあつた。多分ずっと以前から、それはあつたにちがいない。おれはもう永いこと、一步も動いていないのだから……。

だが、それとおれと、いったいどういう関係があるのか、わからなかった。見たところ便所の扉らしいが、とすれば、いつ、おれは外へ出たのだろう。忘れてしまったのかもしれない。どっちにしろ、おれはつい今しがた一切合財、放出してしまつた。からだの中はからっぽだ。おれは現在、しごく平和だ。何の慾望も感じていない。しかもおれは、何かを待っているみたいだ。

その時、おれは、自分の手が擱んでゐるモノに、はじめて気がついた。トイレットペーパーの束だ。これは、だが、おれの尻を拭くためのものだろうか。いや、おれはこれまでこんな絹み^{ぬい}たいなやわらかい紙を使ったことなんか一度もない。ほんとうに、これで、おれの不潔な尻を拭いていいのだろうか。おれ

の尻が、きつと戸惑いするにちがいない。おれは、理由^{わけ}もなく全身が火照^{ほて}つた。

不意に、扉の向う側で声がした。その瞬間今までおれとはまったく無関係に、ばらばらに存在していた周囲の世界が、それぞれ明確な意味をとり戻した。安堵が、ゆっくりした重量感をもって、おれのからだの中を垂直に降りた。

もはや、無意味なものは何もなかった。
(おれは多分、夢を見ていたか、一時的な喪失状態にあつたのだろう)

おれは、鮮明なスポットライトの中で、自分の存在を確認した。やわらかい紙は、「関取」の尻を拭くためのものだった。おれは、彼の「附け人」だった。おれは、彼を待っていたのだ。

ためらうことなく、おれは眼の前の扉をあけた。同時に、おれの鼻先に、白い世界がひらけた。それは、白い小山だ。はちきれるばかりの丸みをもつた、巨大なロースの小山は北海道生れの見事な芸術品だ。おれは、視野いっぱいクローズアップされた完璧な肉の芸術品を前に、胸がつまつた。涙が出るほど讚嘆した。

これほど立派な、これほど美しいものが、

またとあるとは考えられなかった。

「はやくせんかい」

ローズの小山が揺れた。

——と、この時、おれは、自分の手が何も持っていないことに気がついた。いつの間に消えてしまったのか、むろんわからない。

「す、すいません、紙が……」

おれは、しかし、うろたえはしなかった。

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

むしろ、蒸発してしまった紙に、感謝した。

これは、神の啓示だ、と思った。おれは、永い間、この日を夢にまで見ていたのだ。心臓は咽喉まではね上り、口の中がするめのように乾いた。

「痴呆」

巨大なローズが、こんどは怒りを伴って、再び震動した。その真ッ白な肉塊の躍動が、

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の別は問いません。奮て御応募下さい。

一、写真選衡にパスした応募者の方全員に對して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に發表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。

一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。

一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに發表の写真撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに對する読者の投票については、いづれ誌上に發表します。

決定的に、おれを火にした。

「わしが……わしが……紙は要りません」

おれの視界は、いまや白一色だ。抱えきれないほどの巨大なローズに、おれは力の限りしがみついた。何か、叫ぶ声が聞えた。おれは、唇だけしか持たない軟体動物だ。おれ全体が、唇だけで存在した。

おれのふるえる舌先に、微妙な反応を示すもの、唾液に溶かされた不思議な味を覚えた時、とうとうおれは、腸がねじれるように呻いた。

淫売女の前では、死肉のように附着したままだった腫物が、突如、宙に向って吠えるのを感じながら、おれはしだいに失神した。

「おかしいぞ。どうかしたんじゃないか」

という声と、便所の扉を外から叩く音を耳にした時、おれは、折り曲げた両膝の間に首を突っ込んで眠っていた。タイルの床一面を覆ったおびただしい吐瀉物のぬかるみに、靴も靴下も脱ぎ捨てた素足を埋め、這いつくばっているおれが発見されたのは、お節介な通行人の手で便所の扉が見事に破壊された時だった。

ぼんやりと見つめている。

「さ、お入り」

春太郎が夫人の肩に手をかけ、身をかがませようとすると、

「ね、お願いです」

と、静子夫人は、耳もとでほつれている黒髪を憐れ、陰翳の深い悲しげな瞳を二人のシスターボーイに向けたのである。それは、やはり、千原美沙江に対する嘆願であった。

「どうか貴方達からも、お願いです。川田さん達におっしゃって。静子が幾度も頼んでいたと」

静子夫人はそういって、静かに眼を閉じ合わせると、ひっそりといった。

「そのかわり、静子の体をどのようになさろうと、決して恨んだり致しません」

春太郎と夏次郎は顔を見合わせて、北叟笑んだ。

「わかったよ。じゃ、明日は、バイブレーターなんか使って、こってり絞め上げるけど、覚悟して頂戴ね」

春太郎は楽しそうに言って、量感のある夫人の双臀を手で叩いて音を立てた。

「か、覚悟は、出来ていますわ」

静子夫人は、彫りの深い片頬を憐れながら、

ら、すすり上げるようにうなずくのだった。

「連続三回の浣腸よ。がまん出来る？」

夏次郎が愉快そうに夫人に浴びせる。

「が、がまんします」

静子夫人は、肩先を憐れさせて、横へ顔を伏せ、消え入るようにいうのだった。

「じゃ、調教は明日の朝、十時からということにするわ。いいわね」

春太郎は、そういつてから、ニヤニヤし、

「牢屋に入る前に、も一度、はっきり私達に挨拶させて頂戴。今夜、お夏と一緒に作戦を練り合うんだから」

と、夫人の尻を指ではじくのだ。

「さ、そちらを向いて御覧。奥様」

夏次郎が夫人の優美な大腿を指ではじく。

「馬鹿ねえ。今更、羞しがる事はないじゃないの。さ、早く」

二人のシスターボーイにつめ寄られた静子夫人は、固く眼を閉ざし、屈辱をぐっとこらえるよう首を後へのけぞらせると――

「フッフ、明日が待遠しくてたまらないって顔してるわ」

夏次郎と春太郎はふき出して、さも面白そうにからかうのだ。

夫人は、思わず、体を痙攣させたが、すぐ

にそのおどましさを耐え忍び、動揺をおし隠して、甘くすねるよう、双臀を嫌々するように左右へ揺らせるのだった。

「うん、今夜はもう勘忍して。明日、うんと可愛がって頂くわ」

そんな風に、ぱっと全身に色香を染めて、モジモジする静子夫人をシスターボーイ二人は、ほくほくした思いで見つめる。

「そうね。私達も明日を楽しみにするわ」

春太郎と夏次郎は夫人の縄を解き始めた。やっと両手の自由を取戻した静子夫人を二人はすぐに牢舎の中へ押しこむ。ボタンと扉をしめ、鍵をかける。

「じゃ、奥様。明日は十時前にお迎えに来ますからね。今夜は、楽しかった昔の夢でも見ながら、ぐっすりお休みになるがいいわ」

鉄格子から中をのぞきこんだシスターボーイ二人は笑い合う。

二十燭光の裸電球の鈍い光波に写し出された狭い牢舎の中は、素っ裸の美しい捕われ人のために暖房装置だけは施されていたが、破れ毛布一枚にブリキの便器が無雑作に投げ込まれているだけで、他には何の設備もない。そんな牢舎の中で、静子夫人は両手を胸の前で交錯させ、初々しい羞恥の色を横顔に浮か

べ、壁の方に身をすり寄せて小さく立膝しているのだったが、二人のシスターボーイが地下の階段を上って引揚げていくと、今まで自分が演じていた浅ましいばかりの演技が痛烈な自意識となって胸に突き上って来たのだ。こらえ切れず慟哭が堰を切ったように迸り出て、夫人は床にがっくり顔を埋め、肩を激しく慄わせるのだった。

春太郎と夏次郎が、階段を上り、自分達の寝室へ入ろうとした時、向こうから森田がせかせかとやって来た。

「よ、お前達を探していたんだ。一つ、手伝ってもらいてえんだよ」

「私達、いい加減疲れているんですけど」

春太郎は、顔をしかめた。

「何いってやがるんだ。大体、おめえ達二人の仕事は何だよ」

「京子の調教ですよ。それでお手当てももらってます」

「その京子が、これから清次さん達の前へ出るんだ。調教師のおめえ達も出番だよ」

ああ、そうか、と春太郎と夏次郎は一緒にうなずいて、森田のあとについて、二階へ上った。

二階を上ったすぐ手前にある小さな部屋を

支度部屋にして、床柱に立縛りにされている京子は、葉桜団の義子とマリに丹念に化粧され、全身に香水をふりかけられている。

京子は、すっかり覚悟を決めたよう冷たく澄んだ顔で、無表情に一点を見つめたまま、マリと義子の手で入念な全身美容をされているのだったが、その柔軟な腰には、喰いこむばかりにびったりとハート型のバタフライが取りつけられている。全裸で男達の前へ引出すより、そうしたちよっとした装飾を取りつけた方がむしろ面白いと、それは春太郎の提案であったのだ。

「京子、今更、くどくどいなくても、要領はわかってるわね」

部屋へ入って来た春太郎と夏次郎は、京子のキラキラ光る挑発的なバタフライをはかされた腰部と、大腿あたりの官能味豊かな肉づきの良さとそれからすらりと伸びた優美な肢の線をしげしげ見つめながら、

「私達が手を出すより、お客様を遊ばせるのよ。教えてあげたようにしっかりやるのよ」

京子は、柔らかな睫毛を軽く閉ざしたまま小さくうなずくのだった。

そこへ、津村義雄が啞え煙草して、のっそり入って来る。

「ほほう。こりゃきれいだ。弟達、大喜びするぜ」

義雄は、化粧された京子の冷たい横顔の美しさと、バタフライを穿かされた肉づきのいい腰と脚の線の優美さを眼を細めて見、

「二年前、空手で倒された恨みが今夜晴らせるといって、弟達はいきり立っているんだ。何しろ、血の気の多い若い連中だからな。うんと色っぽく振舞って、連中を充分満足させないと、奴等、何をしかすかわらんからな。妹の美津子までを出せといい出し兼ねないぜ」

それを聞くと、京子は、ハッとしように閉じ合わせていた瞼を開き、哀切を湛えた潤んだ瞳を義雄に向ける。

「清次さん達の機嫌を、京子は死物狂いでするつもりです。ですから、どうか、美津子だけは——」

「そりゃ、お前さんの努力如何だね。三人の若い衆を公平に満足させてやってくれりゃ、何も妹まで取って喰おうとは云わないさ」

そして、義雄は、春太郎の方を向いて、「調教師として、京子にどういう芸当をさせるつもりなんだ」

と、ニヤニヤしながら聞くのだ。

「それは、京子が一つ一つお客様方に提案して、皆さんに楽しんでもらうっていう趣向になってるんですよ。だから、お客様のお好み次第ね。それからあとは、一人ずつのお相手よ。何しろ、清次さん達がこの屋敷から引揚げまで、清次さん達の部屋へ京子はつないでおくつもりですから、あの方達は、嫌という程、楽しむ事が出来ると思うわ」

よし、わかった、と義雄は満足げにうなずいて、

「あんまり、若い連中を待たせるのは可哀そうだ。連れて行こう」

春太郎と夏次郎は、京子の体を床柱から外し、縄尻をとると、

「さ、清次さん達がお待ち兼ねよ。さっさとお歩き」

復讐劇

一足先に森田は、陣中見舞の一升瓶を手にし、清次達が宿舎にしている三階の一室へ向いた。

清次は仲間二人とウイスキーを飲みながら花札賭博をしていたが、森田の姿を見るとあわてて坐り直し、「すっかりお世話になりま

して」と慇懃に挨拶するのである。

「こいつらは通称、五郎に三郎、これからはそう呼んでやっておくんなさい」

清次は、仲間二人を森田に紹介し、「ま、親分、一杯やっておくんなさい」と、森田に席をすすめ、ウイスキー瓶を取上げるのだ。

「いや、俺は、そうもしてられねえんだよ。これから大事な相談事があるんでね。ま、これは俺の挨拶代りだ」

と、一升瓶を畳の上に置いてから、

「もうおっつけ、京子がここへしょっぱかれて来るが、あの女は今、森田組が内職にしているお座敷スターなんだ。商売ものだけに体に傷をつけるような事は、なるたけしてもらいたくねえんだが」

「へい。そいつは兄貴からも、よく聞かされております」

清次は、微笑してうなずいた。

「二年前、お前さん達三人を相手に空手を使って暴れたじゃじゃ馬の京子だったが、今じやすっかり人間が変って、何でもこっちのいなり放題さ。俺達が苦勞して、お座敷スターに仕込み上げたんだよ」

森田は清次に注がれたウイスキーを一息に飲むと腰を上げ、京子に珍芸を披露させるた

めのその舞台装置を作るべく、清次達を指揮して動き始めた。

畳二枚をひっぺがし、そこだけを板の間にすると、その上へ椅子をつみ重ねて、天井の真中を走っている鉄のプルプへ太いロープを五郎と三郎に結びつけさせるのだった。

ただそれだけが珍芸を演じさせるための舞台であった。丁度、静子夫人が満座の中で果物切りの珍芸を演じた時と同じく、四角い板の間の上には、芸人をつなぎとめるための無気味なロープが一本垂れ下っているだけだ。

「ま、今夜は、京子の珍芸を酒の肴にして、ゆっくり楽しむがいいよ」

森田がそういった時、ドアを軽くノックする音。

「そら、京子嬢の御入来だぜ」

森田がニヤリと口元を歪めると、清次も五郎も三郎も一瞬、緊張してその場に棒立ちになった。

ドアが開き、春太郎と夏次郎に縄尻をとられた京子が、その弾力のある成熟した肉体を男三人の視界の中へ入れて来たのだ。

マリーに義子が箆とか洗面器とか奇妙な小道具を持ってそのあとに続き、津村義雄も唾え煙草したまま入って来る。

「清次、これが二年前、お前達に煮湯を飲ませた女かどうか、まず首実験をしてみろ」

義雄はそういうと、三人から視線をそらせて横へ顔を伏せている京子の顎のあたりに手をかけて、ぐいと正面に顔を向けさせた。

「この女だ。間違いねえ」

五郎と三郎が同時に叫んだ。それと同時にバタフライ一枚穿かされただけの脇の奥までムズムズするような官能的な京子の見事な肢態にゴクリと唾を呑みこむのである。

京子は、うすら冷たい表情を作り、虚無的な色を滲ませた視線をぼんやりと一点に向けている。

「そうか。じゃ、この女は、当分、この部屋に置き、お前達の自由にさせてやろう。恨みをたんまり返すがいい」

へい、有難うございます、と五郎と三郎はパイプより垂れたロープに京子の縄尻をつなぎ止めようとする春太郎と夏次郎に手を貸しながら、義雄に向かって、ペコリと頭を下げるのだった。

片意地なまでに冷ややかな表情を見せて、一本のロープに全身を支えられ、板の間にきちんと足首を揃えて立つ京子を義雄は小気味良さそうに見つめている。

「この三人は、長い間、女を抱いてないんで大分頭に血がのぼってるようなんだ。一人で相手するにや大変だろ。何なら、手伝いに、美津子をここへ寄こしてやろうか」

からかうように森田がそういうと、痩せ我慢が忽ち崩れ落ちたよう京子は、哀切的な眼差しを森田に向け、嫌々と気弱に首を振って見せるのだった。

「それなら素直に二年前の詫びを入れ、そのきれいな体を使って御機嫌をとるんだ。三人のうちの一人でも、サービス不足だと文句をいい出しゃ美津子を応援のためにここへ送りこむ事になってるんだからな」

森田は、京子にそう浴びせると、「じゃ、俺はこれで」と部屋の外へ出て行った。

あとは、春太郎と夏次郎が京子の左右へ寄り添って、これから行う珍芸の要領を更に念を入れて京子に教示するのである。それが終ると二人のシスターボーイは、京子の女臭さの匂う成熟した裸身をすでに酒の肴にしている三人の不良の傍へ寄り、酒の酌などしながら京子の責め方について話し出したのだ。

「成程、そりゃ面白いや」

清次は二人の仲間達の顔を見、ゲラゲラ笑い出した。

「それから一つ御注意申しておきますけど、かなり教育されたといっても、まだきかん気の所がある女ですからね。縄はといてやらない方がいいわ。何時空手なんか使って暴れ出すかも知れませんものね」

ホホホ、とシスターボーイは口に手をやって笑い、清次達を気持悪がらせてから、「それじゃ私達、明日が早いんでこれで失礼しますわ。どうぞ、ごゆっくり」

と立上り、部屋の外へ出て行った。

義子とマリの二人は、男三人の酒の接待役として残る事になったが、酒好きで男好きで彼女達は、久しぶりで男達相手に飲んで唄って大いに騒ぎたいようである。しかし、清次達は、そんなズベ公二人には眼もくれず、ウイスキーをガブ飲みする内に、次第に冷酷で残忍な眼つきとなって、悲しげな光を湛えた瞳を気弱にしばたかせている京子を凝視するのだった。

「よ、妙な所でお眼にかかったな。おめえがお座敷ショーのスターになってると思わなかったぜ」

「俺達に二年前の詫びを入れるそうだが一体どういう風な詫びを入れる気なんだ。ええ、はっきり聞かせてもらおうじゃねえか」

不良三人は、フラフラ立上ると、立縛りにされたまま身体を固くし、顔を伏せている京子の周囲を取巻くのである。

「見ろ、二年前に手前に空手打ちされたところだ。あの時の痣はまだ消えねえんだぞ」

五郎はワイシャツの袖をまくり上げて肘のところを京子の眼前に押しつけた。うっすらと紫の痣が肌を染めている。

「手前は俺を足で蹴りやがったな。脇腹に一撃喰った俺は二三時間立ち上れなかったぜ」

三郎がぴったりと閉じ合わせている肉づきのいい京子の優美な太腿を憎々しげに見て毒づくようにいう。

「よっ、何とか云ったらどうだい」

清次が京子の顎に手をかけて、噛みつくようにいった。

京子は薄く眼を閉ざしたまま形のいい白い頬を清次に見せたまま、勝気そうに引き緊まった唇を慄わせて、

「あの時の事は、心から、心からお詫び致します。どうか、許して下さい」

ぐっと屈辱を呑みこんだように下唇を噛みしめ、綺麗に揃った睫毛を顫わせて、京子は前に立った清次の顔に今にも大粒の涙が流れそうな哀しげな視線を向けるのだ。

「これから、俺達三人がお前の体を自由にするが異存はねえだろうな」

「ありません。どうぞ、気がすむまで、京子の体をおもちゃにして下さい」

京子は、そう云って、再び、美しくセットされた髪を慄わせて眼を伏せるのだった。

「よし、それじゃ今夜は三人がかりで明け方までたっぷり楽しませてもらうぜ。だが、その前に、俺達三人におめえ、珍芸を見せてくれるそうだな」

五郎が舌なめずりして、官能味豊かなムチムチした京子の太腿を指で押す。

京子は、小さくうなずいて見せるのだ。

「御覧になりたければお見せするわ。でも、京子はこんな風に縄で縛られているので貴方達に手伝って頂きたいんです。ね、手伝って下さいますか？」

京子は、涙を滲ませた睫毛を柔らかく伏せたまま、しかし、懸命に媚態を見せようと努力して、甘い声を出すのである。

「ああ、何なりと手伝ってやるぜ。そうだ。俺も一つ、おめえに芸を見せてやろう」

清次はそういって無粋にも五郎と三郎に屋根瓦を持ってこさせ、それを数枚重ねて京子のきちんと揃えている足首の前へ置くのである。

る。空手の技を披露しようというのだ。

「女のおめえに空手で倒された事が癪にさわって俺達三人、道場へ通って、みっちり空手の修業をしたんだ。その芸を一つおめえに見せてやる」

清次は何枚か重ねた瓦の上へ声をはり上げて空手打ちして見せると、見事にそれは真つ二つに割れてはじけ飛ぶ。五郎も三郎も面白がって瓦を割って見せるのだ。

「お見事だわ。もう到底、私なんか太刀打ち出来ないわ」

京子は、見るからに頭の悪そうな顔つきの五郎や三郎が、得意げに瓦を割って見せるのを、そんな風にはめた云い方をするのだったが、

「おめえだって俺達をあれだけ打ちのめしたんだ。こんな事ぐらい朝飯前じゃないのか」

と清次が、京子の頬を横から指でついていう。京子は首を振った。

「女ですもの。そんな事は出来ないわ。道場へ通ってただ身のこなし方だけを習っただけなんです。ね、もうそんな男っぽい話は嫌。

京子がどれ程、女らしく成長したか貴方達にこれからお見せするわ」

緊縛された美しい裸身をモジモジ悶えさせ

るようにしてそう云った京子は、先程から酒を飲み、むしろむしろスルメを噛っている義子とマリの方に潤んだ瞳を向け、優しい調子で声をかけたのである。

「義子さん。お願い、支度して下さらない」
アイヨ、と義子とマリは立上り、用意して来た卵の入った箆を京子の爪先近くへ置くのだった。

「皆さんの御機嫌をしっかりとらなきゃ駄目よ。あんたの努力が足りない」と美津子にとばかりがいくんだからね」

義子は京子の耳に真珠のイヤリングをつけながら小声でささやきかける。

「ハイ」

京子は柔順にうなずいて見せるのだった。これから、森田や春太郎に念を押されたように媚態を演じながら珍芸を見せ、その後、この三人の野卑な男達の獸欲を満足させる、そんな行為に自分の神経と肉体が耐えられるか、京子はそれを思うと心臓も凍りつくばかりの恐怖を感じるのだったが、美津子の名を責め手に口にされれば片意地なばかりに闘魂のようなものが胸にこみ上ってくるのだ。

ビニールの布の上に並べられた数々の責め具を義子は指さしながら、くすくす笑って、

清次達に要領を教えている。

「それじゃ私達、次の間で花札でも引きながら待機しているわ。何か御用があったら何時でも呼んで頂戴」

自分達女連中の前では、女を楽しむのに何かとやり憎いだろうと気をきかしたつもりで義子とマリはウイスキー瓶を抱えて襖を開けて出て行った。

「さて、始めて頂こうか」

五郎と三郎は、わくわくした思いで、腰を落とし、息苦しいばかりに官能的な腰にぴたり喰いこんだバタフライの紐を解こうとする。

「うん、まだ、駄目」

京子は、むずかるように鼻を鳴らしてゆさゆさ尻を左右に揺さぶって、男達の手を払いのけるのだ。

「その前に、二年前に京子が乱暴した事は許すと、はっきりおっしゃって。そうすれば京子、喜んではっきりとお見せするわ」

「ハハハ、条件つきってやつかい。ま、いいだろう」

清次は笑いながら、京子が素直に珍芸を演じ、そのあと、一人一人に抱かれる事を約束するなれば、二年前の事は水に流してやる、

と含み笑いしながら京子に云うのである。

さ、もうこれでいいだろ、と五郎と三郎が再び紐に手をかけると、

「まだ、脱がしちゃ嫌」

京子は、訴えるような情感を湛えた瞳を見開いて、更にモジモジ腰を動かさず、

「京子一人を、素っ裸にするなんて不公平だわ。貴方達も裸になつて」

ええ？ と清次達は顔を見合わせた。

「どうせ遊ぶなら、皆んなでうんと楽しみましょうよ。京子だって、貴方達の男性美が見たいわ」

乳色の頬をぽつと朱に染めながら、京子は大胆に媚めかしく微笑して見せたのである。

「よし、面白い。じゃ俺達も服を脱ごうぜ」

清次は仲間二人をうながして荒々しく着ているものを脱ぎ出した。

そんな事を要求しながら京子は、三人が脱ぎ出すと狼狽したように視線をそらせ、薄く染めた頬を恐怖と羞恥に慄わせているのである。そんな自分が口惜しくも感じるのか京子は心を硬く冷ややかなものにして、平静を装い、彼等に再び声をかけるのである。

「ね、まだ、貴方達のお名前聞いちゃいないわ。教えて下さらない」

清次達がニヤニヤしながら名乗りをあげ、清次が二十才、五郎と三郎が十九才という事を知った京子は、

「それじゃ、私の方が年上なのね。今夜は貴方達の姉さん女房に私、なるわけだわ」

平静を装うべく京子は強いてそんな事を彼等に語りかけ、冷淡な笑みを口元に浮かべるのだった。

「へへへ、そういうわけだ。京子姐さん一つよろしくお願いしますぜ」

裸になった男三人に取囲まれた京子は、狼狽と羞みの色を思わず見せて、一瞬、赤らんだ頬を横に見せ、眼を伏せてしまったが、

「そら、よく見な。二年前の恨みを今日こそ返してやるとばかり、やられた傷跡がこんなに怒ってるぜ」

京子の狼狽ぶりにつけこむように、わざとらしく、男三人は、笑い合い、ふざけ合うのだ。

「まあ、遅ましい体ね」

京子は、男達に翻弄され、睫毛の濃い瞳を薄く開いて三人に眼を走らすと、口紅を塗られた唇を慄わせるようにしていい、次に頬の色を硬くしながら、しかし、情感で煙ったような美しい瞳を甘えかかるように傍の清次へ

注ぎかけた。

「じゃ京子もおつき合いするわ。脱がせて頂戴」

よし来た、と男達三人の手が一せいにビニールの紐にかかった。

京子は、すっかり覚悟をきめたよう静かに瞼を閉じ合わせ、それが優美な太腿をスルスル滑って剥がれていき、足首から抜き取られてしまっても唇を軽く噛んだまま、微動もせず無言を守っていたのである。

きれいに化粧と手入れがされているのに、男達は驚嘆し、次に哄笑し、つづいて卑猥な揶揄、それがかなりの時間続いたが、京子はその間軽く瞑目したまま、上気の色をばかしたように浮かべた形のいい片頬に初々しい羞恥の色を含ませて、しつとりと口を噤んでいる。

だが、京子は何時まで無言で、ただ、さらしものになっているだけでは許されないのだ。これらの男達に誘いをかけ、彼等を楽しませ、嬉しがらせなければならぬ。そのための必死な努力を見せなければ妹の美津子が、この座敷へ引っ張り出されて——そう思うと京子は、自分の周囲を取囲んで腰を降ろ

し、酒を飲みながら大口を開けて哄笑しつづける三人の男達に弱々しいが情感的な微笑を口元に浮かべて視線を向けたのである。

「そんなに笑ってばかりいるの嫌。ねえ、もっと、近寄って、よく御覧になって」

そして京子は、再び、ぞろぞろと自分の体にまといついて来た三人の男達にそ……し出すようにしてみせ、

「それじゃ今から、芸をお見せするわ。手伝って下さいますわね」

と、美しい頬に媚びを含んだ色を染めて、

「最初は、卵を割るわ」
そう甘くささやくようにいって、一層の柔媚さを見せモジモジしながら脚元に置かれてある箆に入った鶏卵に眼を落とすのだった。
「よし、五郎、なるだけ大きいのを選んでやんな」

清次が嘲笑うようにして声をかけると、五郎が箆の中をかき混ぜ、一つを選んで早速仕事に入ろうとする。

「うん。駄目よ、そんなの」

京子は媚かしく身を悶えさせ、腰をひねって五郎の鋒先をかわして、

「女の身体って、そんな単純なものじゃないわ」

と、鼻を鳴らし、上気した顔を左右へ切なげに揺さぶるのだった。

「成程。そいつは悪かったな」

清次達はニヤニヤしながら顔を見合わせ、持場を分担して京子の肉体を……し始めたのだ。

三郎が京子の背面に廻り、その艶やかな背筋から、麻縄できびしく縛りつけられた両手首、更に移向して、息苦しいばかりに盛り上った双臀に至るまでの受持ちらしく、ぴたりと閉じ合わせている肉……に手を……れ、陰湿な……を加えるのだ。側面からは五郎が京子の耳たぶから白くて柔らかい頸筋から咽喉首あたりを口吻し、麻縄に緊め上げられた豊かな胸のふくらみを受持つ。

京子は、彼等の年に似合わぬ巧妙な手練手管にあつと驚くと共に身を硬化させ、一瞬、こんな連中の自由にされる口惜しさがこみ上げて来て、反発的に身をよじったが、誘ってはいなし、突いてはそらすような巧妙な彼等の触角にも似た……の動きとつぼを心得た微妙な口吻に京子はやり切れないばかりの情感がじわじわと身内からふき上って来るのを感じ出した。

京子をそんな風にする男達は、京子の見事

な肉体と弾力に官能の蕊を高ぶらせていきながら、この女に手痛い目に合わされたという腹立たしさと敵意がそれと同時にこみ上げて来たらしく、ズタズタに引裂いてやれ、と心に叫び立てながら、残忍な血をわかせて京子の肉体に狂暴めいた攻撃を加えるのだった。

「ああ、そ、そんな」

京子はカチカチ歯を噛み鳴らしながら、髪を振り乱して首を左右へ振った。

「お願い、もう止めてっ」

京子はほざくようにうめいて、緊縛された裸身を揺さぶり、

「割って、見せますわっ。もう充分よ。お願い。やめて頂戴」

「よし」

清次は面白そうにうなずいて、五郎に眼くばせをする。

清次と交代した五郎が卵の一つを手にとつてにやりと笑った。

「意地悪な事なすっちゃ嫌っ。ねえ」

京子は鼻を鳴らしながら、五郎がわざとそれをみせびらかすのに、口惜しさを噛みこらしてみせる。

「さあ、早く珍芸を見せてもらおうじゃねえか。ぐずぐずすると、おめえの妹の美津子に

代役をさせるぜ」

と、五郎が京子の一番怖れることを並べながら、卵を眼の前に突きつけて振ってみせ、男達は笑いこけるのだった。

京子の必死な努力を嘲笑するために考えた野卑な男達の奸計だったのか。

京子は口惜しさをぐっと噛み殺し、しかし精一杯に媚びを含んで、

「ねえ、お願い。そんなにじらさないで。だって京子、こうして後手に縛られているんですもの。貴方達が手伝って下さらなくちゃ、何も出来やしないわ」

そして、もどかしげに、悩ましいばかりに肉の盛り上った腰をよじって嘆願のポーズを精一杯とって見せたのだったが、五郎は、へへと笑って、卵をポンと宙へほってそれを受けとめながら、

「こいつを割るのを京子が嫌やがったと社長に報告さすりゃ、美津子もこっちの手に入るんだ。同じ楽しむなら、別嬪の姉妹を揃えて、乱交パーティーっていう趣向はどうだい。え、兄貴」

五郎は清次にそんな事を云い出し、ひきつったような顔つきになった京子を面白そうに見つめるのだ。

「御生ですっ」

京子は遂にわなわな慄える頬に大粒の涙をポタポタ流し始める

「貴方達の恨みのあるのはこの京子なのよ。」

私は、貴方達にどんな羞しめを受けたって辛抱するわ。でも、何の關係もない美津子まで卷添えにするのは許して。ね、お願いです」

「それなら、ここで割ってみせろよ」

五郎達は再び卵を脇腹や臍に押し当てて哄笑し、二年前の恨みを返したつもりで、すすり泣く京子の横顔を楽しげに見つめるのだ。

「そういじめてやるのは可哀そうだぜ」

清次が突いたりさすったりしている五郎と三郎を制して身を乗り出し、

「よし、それじゃ俺が手伝ってやるぜ。そのかわり、その前に、責めに悶えぬいた時のおめえの顔てえのをゆっくりと拝見させてもらいてえんだ。それから、ゆっくりと卵割りを見せて貰おうじゃねえか」

京子が男達三人に対して取乱したのはその時だけで、どのような責めでも甘受する覚悟になっている京子は、一まつ不安を感じながらも、再び、五郎と三郎がねばっこくからみついてくると、男達が官能のうずきにモリモリ喜ぶ事を計算に入れたような、あらわ露で激し

い身悶えを見せ始めた。

清次は、京子の一方の太腿に片手を巻きつかせ、うずくような陶醉感と復讐を仕遂げたといった快感とで有頂天になっている。

「うんと京子をいじめて頂戴。うんと京子を泣かせて——」

熱い被虐の戦慄にのたうつ京子は、責め手の三人の耳に泌み入るような涕泣を洩らしつつ、清次の巧みな攻撃に遂に城門を開け渡すかのよう、じわじわと錯乱の様相を表わしていくのだった。

「へへへ、俺達三人をぶっ飛ばした鉄火娘もやっぱり女なんだね。どうでい。この悦びようは」

清次は、小雨の囁きにも似たしっとりした泣声をそれより洩らさせ悦に入っていたが、やがて、体を引き、桐の箱を開け始めた。

「さて、仕上げはこれだ。いいな」

京子は、潤んだ瞳を軽く閉ざし、上気した顔を斜めに伏せて、さも羞しげにうなずくのだった。

肉の拷問

それと同じ頃——美津子もまた吉沢の巧み

な手管に捲きこまれ、口惜しい身悶えをくり返しながら、薄紙を慄わせるような繊細なすすり泣きを可愛い唇から洩らしている。

吉沢はうしろから、また側面から、美津子の白桃にも似た柔かい二つの乳房をゆっくりと……ぐし、フロアスタンドの明るい燭光をまともに受けて艶々しく照り映える滑らかな美津子の美肌のあちこちを、甘くくすぐるように……てから、美津子の華奢な肩先を抱きしめるようにし、美津子の切なげに息づく、可愛い紅唇に、自分の唇を押し当てようとする。すると美津子は、撥ねのけるように、嫌、と声を出し、首を反対側にねじって、吉沢の唇をさけたのだ。燃えさかって来た炎に水をぶっかけられた思いで、吉沢は口をとがらせた。

「俺の調教は受けられるが、俺の女になるのはどうしても嫌だっていうのだな」

「お願い。約束だけは守って——」

美津子は、吉沢から視線をそらせながら、上気した頬を悲しげに慄わせて、小さく云うのだ。

「よし、わかった。だが、その痩せ我慢がどこまで続くかな」

吉沢は、何か魂胆ありげに意地の悪い微笑

を口元に浮かべ、腰をかがめると、美津子のいじらしい程小さい臍の凹みに邪惡な唇を近づけてゆく。

ううっと美津子は声にならないうめきを発して身をよじったが、吉沢は、つづいて、柔らかな線を描く腰部から滑らかな太腿に攻撃をしかけた。

美津子の涕泣と身悶えはますますあらわになった。可愛さあまって憎さが百倍、そんな気持の吉沢は、自分に殘忍なものをけしかけて、掌の攻撃と唇の攻撃とを交互に加えながら、美津子の肉と心の一つにして引きさらうかのように一途に責め立て、美津子に生々しい声をあげさせるのだ。

吉沢は、おや、と眼を瞞^{みは}った。吉沢が美津子のその……いじめた事はたしか銀子や朱美達の見守る中で一度か二度あったが、その時は、若鮎のようにピチピチした若い美津子の肉体が吉沢を有頂天にさせたものの、美津子の抱く恐怖感と嫌惡感が彼女自身の気分に抵抗を感じさせるのか、いくら苛責をほどこしても、吉沢を満足させるまで、美津子はそれに引き込まれるという事は、なかったのである。それがどうだろう。吉沢の調教を受ける、とはっきり覺悟したとはいえ、それはま

るで人が違ったような激しさで、吉沢は舌を巻いたのである。

吉沢は、攻撃を中途にして打切り、腰を上げると、真っ赤に上氣した顔をねじるように伏せて、シクシクすすり上げる美津子の熱い頬を指で突き、

「美津子、おめえ大分、成長したようだな。

こんなに応えてくれるなら、俺も調教のやり甲斐があるってものだ」

からかうようにそんな事を云った吉沢は、「何だか体中がカッカと熱くなって来やがった。俺も裸になっておめえを調教するぜ。いいだろ」

と、上衣を脱ぎ捨て、ズボンのバンドを外した。

美津子は、顔を伏せたまま、崩れ落ち、溶解し始めていく自分の肉体を一層の切なさで口惜しく感じ出したのか、肩を慄わせて嗚咽しているのだ。

「ああ、嫌、そ、それは嫌っ」

全裸になった吉沢が、まるで子供が悪戯するような仕草で、ニヤニヤしながら、視線の前に廻ると、美津子は狂ったように緊縛された裸身を揺さぶり、柱にびったり縄止めされている全身をくねらせ、顔を振りまわして吉

沢を正視するのを拒否するのだった。

それでも思いを遂げようと思えば、簡単な事であったが、吉沢は楽しそうに、泣くまで待とうほととぎす、などと口ずさみながら、「姉の京子に似て、仲々、強情なところがあるじゃないか。ままいい。とにかく、俺は、おめえにぞっこん惚れちまっているんだ。へへ、おめえがその氣になるまで、俺は氣長に口説く事にしたぜ」

吉沢の目的は、もとより、美津子に珍芸を仕込むという事ではなく、美津子を完全に自分の女にする事であったから、柱を背にしておちちりと縛りつけられている美津子の美しい滑らかな裸身を舌なめずりして凝視しながら、責具を手にし、それを美津子の鼻先へ押しつけて、

「お前の姉さんをキリキリ舞いさせた責の棒だ。まだ京子の匂いが染みている筈だぜ」

ぼんやりと情動的な潤みを湛えた美しい瞳を見開いた美津子は、物悲しげに眉毛をそよがせて、静かにそれから視線をそらせる。

「今日はお前がこいつで油を絞られるってわけさ。いくら大声を張り上げたってかまわねえ。泣きたいだけ泣くがいいさ」

吉沢は、再び、じわじわとまるで鼠をいた

ぶる猫のよう、白い頬を充血させて血でも噴き出しそうな思いに、わなわな唇を慄わせている美津子を楽しそうに見ながら、責めを開始するのである。

始めは、わずかに自由の利く腰をねじったリ、引いたりして微弱な抵抗を見せていた美津子であったが、次第に吉沢の術中にはまっていくなかった。

吉沢は充分に美津子をじらしておいてから責める手に力を加えた。

あっ、と狼狽した声が美津子の紅唇から洩れ、「嫌っ、ああ、嫌よっ」と上ずった声を切れ切れに美津子は発したが、あとはもう吉沢の仕上げを待つばかり。

「ハハハ、どうだ。口惜しいか、美津子」

吉沢は、もだえる美津子の美しい肢体を眺めながら、眼を異様にギラつかせ、しかし、口元だけは笑って、

「だが、俺はいささか驚いたぜ。おめえがこつも見事に——。ついこの前までは女学校のセーラー服がよく似合う花も恥じらう乙女だったのによ」

吉沢は、気もそぞろになって火のように熱くなった顔をねじるように伏せて、シクシクとすすり上げている美津子を見詰めるのであ

った。美津子の黒髪に結びつけられたフラワ—リボンが美津子の鳴咽につれてフルフルと揺れ動いた。

「さて、これからたっぷり時間をかけて鍛え抜いてやるからな。色々な芸当を覚えるにしてもまず、筋肉を柔らかく強く鍛えなきゃ駄目だそうだ」

吉沢は楽しそうにそういつて、ゆっくりと責具を操作し始めた。

「ああ——」

美津子は、美しい眉を八の字に寄せて、切なげに首をのけぞらせ、艶々した首筋を大きく見せて、口惜しさ……混濁した狂おしい痺れに、全身を火柱のように燃え立たせていく。

拗ねてもがくような、また、甘えて体を揺さぶるような、そんな美津子の媚めかしい身悶えを吉沢は浮き立つような気分で見つめ、美津子の肉体が以前とは、見違えるばかりに成熟している事をはっきり知悉したが、何よりも吉沢を驚かせたのは、透き通るように白い、華奢な肩先を慄わせ、麻縄に上下を緊め上げられた形のいい乳房を波打たせ、嫌、嫌よ、と鼻を鳴らせて、反抗にならない甘い反抗をくり返している一方、吉沢の責めを、ま

るで食欲な獣類が獲物を捕えた時のよう……悦びに脈打っている事であった。

「吉沢さん」

美津子は、裡から衝き上げて来るものたまりかねたよう二、三度首を左右に打ち揺ると、吉沢にすねたような甘い声を出した。

「どうしたんだ」

吉沢は、責めを中断し、柱に背を押すつて、唇を半開きに激しく息づいている美津子の側面に立った。そして、ニヤニヤと口元を歪め、美津子の火のように熱くなった美しい横顔を見つめる。

「ね、お願い。こ、これ以上、責められると美津子は、美津子は——」

大きくあえぎながら美津子は吉沢より視線をそらせて、すすり上げるのである。

「どういう意味なんだ」

吉沢は、意地悪くそんな事を云いながら、脂汗をねっとり浮かべた胸の隆起を……する手は休めない。

「死ぬ程、羞かしい姿を貴方に、お見せする事になるわ」

「遠慮する事はねえといったらう。俺は今日からお前の調教師なんだぜ。つまり、夫婦同然だ。何も俺に気兼ねする事はねえよ」

「だって、だって——」

美津子は、乳房を淫微に……する吉沢の手管にたまりかねたよう思わずもどかしげに身を揺すって吉沢の胸に額を押し当て、ゆさゆさ黒髪を揺さぶり、甘えかかるように慄え泣くのだった。

こうなれば、もうこっちのものだ、と吉沢はホクホクした思いになり、待ちに待った思いをすぐに遂げようとも思ったが、ここまで来て何もあわてる事はない、と最初から計画していた邪惡な責めを美津子の肉体に加えるべく、再び責具による攻撃を続行した。失寸前にまで美津子を責め上げ、あと一步という所で攻撃を中断。そんな責めを幾度もくり返せば、そこは女の生身の悲しさ、気の狂うような思いにキリキリ舞いし、泣いて……を自分の口より欲求するに違いないと、それは鬼源より教えられた一種の女体拷問である。

ゆるやかに、また、激しく、吉沢は美津子の肉体を、教えられたそれ一本で攻撃しつづける。今はもう、吉沢の眼前に最奥の羞恥を晒け出すより術^{すべ}はないとはっきり観念したのか、美津子の身悶えに、ふと激しさが加わり出した。と同時に、口から発する涕泣も生々しさが加わった。もう何のためらいも羞恥も

かなぐり捨てたようであった。

吉沢は、計画通り、美津子が絶息寸前と見るや責めの手を止めた。

はっとしたよう美津子は眼を見開き、そのねっとり情感を滲ませたぞっとする程美しい瞳で恨めしげに吉沢を見、次に心持開いていた太腿を、さも羞かしげにぴたりと閉じ合わせて顔を横へ伏せるのだった。

「少し、汗が激し過ぎるようだが、一度、きれいに拭き取った方が良さそうだな」

などと云いながら、吉沢は用意の紙を取り上げた。

羞恥を晒す決心が次第に弱まって来た頃を見計らい、吉沢は再び攻撃を開始する。

美津子の肢体が再びのたうち、失寸前を徘徊し始めた所で、吉沢は責めの矛先をまたもや引揚げる。

「ひ、ひどいわ」

それが二度三度と重なり、それが吉沢の計算だと知った美津子は、世にも悲しげな顔をするのだった。

「ハハハ、さすがの美津子も、この拷問にはいささか参ったようだな」

吉沢は、笑いこけながら、次に、凄んだ調子になって、

「こんな責めを何度もくり返してりゃ、本当に気が狂ってしまうぜ。さ、何時までも、強情をばらず、俺と夫婦になることを承知するんだ」

吉沢は、そう云って自分の持っている責具を眼前に押し出すのだ。

「それとも、まだ、こいつで、キリキリ舞いがしたいというのか」

「負けたわ」

美津子のべっとり脂汗を浮かばせた額に黒髪が半分もつれている。精も魂も尽きたようにがっくりうなだれ、優美な二肢を慄かせながら、

「もう、これ以上、いじめないで。美津子は貴方のものになるわ」

「そうかい。ハハハ。早くそれを云えば何もこんな苦しい目を見なくてもすんだのだけ。じゃ、今日からは俺には絶対服従だ。わかったな」

「はい」

美津子は心の底より屈服したというばかりに柔順にうなずき、そのまま、声をひそめて小さく嗚咽するのだったが、その泣き濡れた頬を吉沢は両手で挟むように持って起し、唇を押し当てていく。

吉沢の唇をぴったり唇で受けとめた美津子は、薄く眼を閉ざして、ゆっくりと吉沢に舌を吸わしてから、

「ねえ、早く美津子を貴方のものにして。このままじゃ、美津子、気が狂うわ」

と、責めに負けた自分を嫌悪する気持に挑戦するかのように云い切ったのだった。

美津子を屈服させた悦びに吉沢は有頂天になりながらも、思えば今まで自分を毛嫌いし避け続けて来たこの小娘を、一思いにものにしてしまうのも何だか腹立たしいような気にもなってくるのである。どうせ、朝までかかってゆっくり料理するつもりだ。もう少し、いじめて泣かせてやろうか、と吉沢が上衣のポケットから煙草を取り出して口にした時、ドアをノックする音。

「おい、俺だ。一寸、開けてくれ」

森田の声であった。

何もこんな時に、と吉沢は舌打ちしたが、相手が親分であれば叱りつけるわけにはいかない。

「へい、一寸、待っておくんなさい」

吉沢はあわてて下着を身につけ、ズボンはいてドアの内鍵を外した。

「悪いが今夜、美津子を借りるぜ」

森田は、うろたえる吉沢をおかしそうに見てそう云った。

「そ、そんな殺生な。これから俺は美津子と夫婦になる所なんですよ、親分」

「なんだ。まだ美津子と、そこまでいっちゃいないのかい」

「へい。なんだかんだと手間がかかりましてね」

吉沢は、ここで美津子を横取りされれば、気が狂うのはこの俺だとばかり、必死な眼つきになるのだ。

「気の毒だが、社長命令だ。今、客人を相手に熱演している京子の手伝いを、妹の美津子にさせるんだよ」

そう云った森田のうしろから、銀子と朱美がクスクス笑いながら顔を出した。

「ついちゃんないわね吉沢さん。今、清次さん達が京子の奴に二年前の復讐をしているのよ。京子に一番辛い思いをさせるのは、美津子を眼の前でおもちゃにする事なのさ」

最初から今夜はそういう設定になっているのだと説明した銀子と朱美は、啞然としてしまった吉沢を無視して、ズカズカと部屋の中へ入りこみ、柱に緊縛されている美津子の傍へ近づいていく。

「まあ、随分といためつけられたようね。可哀そうに」

銀子は美津子の足元に転がっている貴具を見て笑いながら、ハンカチを出して美津子の額に浮かんでいる汗を拭いとり、縄尻を柱から外して、

「さ、行くのよ。久しぶりにお姉さんに逢わしてあげるわ」

と、足をふらつかせ、その場に膝をついてしまった美津子を強引に引き起し、部屋の外へ連れ出して行った。

「ハハハ、鳶に油揚げって顔だぜ、吉沢」

森田は、呆然として立ちすくんでいる吉沢の肩をたたいて笑った。

「今、社長は川田達と明日の大仕事について相談中だ。おめえも森田組の幹部として顔を出しな」

「俺は今、とてものこと、そんな気分にはなれねえんだよ、親分。あと一歩という所まで漕ぎつけておきながら——」

「情ねえ事いうな。お前も男じゃねえか。なんだ女の一匹や二匹」

森田は、悄然とする吉沢の手をとって部屋の外へ引っ張っていく。

京子の珍芸

野獸達がそういう手筈を最初から仕組んで
いるとは露程も知らない京子は、三人の男達
に前後左右から守宮やもりのようにまといつかれ、
苦痛と……の炎に身を焼き尽したようなすさ
まじいばかりの悶え振りを見せている。

左手をしっかりと京子の腰に巻きつかせて
清次は気もそぞろになり、自棄になったよう
京子を責め立てるのだったが、京子も同じく
捨鉢になってそれに呼応するかのよう息苦し
いばかりに肉ののった太腿をくねらせ、豊か
な双臀を……せるのだった。その跳くさま
が、清次の官能をたまらないばかりに刺戟す
る。

京子はふくよかな肩を揺さぶり、五郎に責
め抜かれる乳房を一層波打たせて、息もたえ
だえな悶えの中で、

「ね、二年前の事は、お願い、許して。女だ
てらに空手なんか使った事を、京子、心から
謝ります」

と、途切れ途切れに口走るのだった。

「よし、そう素直に出られりゃ、俺達も昔の
恨みは忘れてやるぜ」

「俺達は、二三日この屋敷で世話になるから
な。その間、お前に女の修業をみっちりさせ
てやるつもりだ」

と五郎と三郎がいうと、

「京子、貴方達に好かれる可愛い女になり
ますわ」

全身からふりこぼれるような色香を見せて
激しい責めに身をよじった京子は、急に、う
つと眉を寄せて、火のように上気した顔をう
しろへのけぞらせ、乳房を責める五郎の頬に
頬をすりつけると、カチカチ歯を噛み鳴らし
ながら、

「もう許して、」

ある現象の近づいた事を上ずった声で三人
の男達に京子は告知したのである。

五郎と三郎は、ニヤリと顔を見合わせ、清
次の傍へ身を寄せた。吠面をかく京子の姿態
を心ゆくまで見物しようとしたのだろう。

野卑な若い三人の男の眼前に、口惜しくも
遂に、みじめな敗北の姿を晒さねばならぬの
かと狂乱の中で、わずかに残っている京子の
氣質がキリキリ首をもたげて、一刹那、氣力
をとり直そうと必死になったが、遂に精根尽
き果てた京子は、電気にでも触れたような激
しい声で、絶息するよううめきと一緒に身

も心もどろどろに溶かされて、がっくりと首
を前へくずした。

ほっと息をつき合った男達は、京子が完全
に敗北した事をたしかめ合う。

「さすがは空手二段の鉄火娘だ。負け方もこ
りゃ凄いや」

男達は笑い合ったが、京子自身も夢うつつ
に女のはかなさといったものを口惜しいばか
りに感じとったのである。鬼源や川田、そし
て、二人のシスターボーイの常軌を逸した調
教のために、自分の肉体は、責められる内に
湧き上るものを、こうも敏感に感受するよう
になったのかと、今、男達の凝視する中で心
底より降伏してしまった自分がふと自分では
ないような気にもなるのだ。

「どうしたんだい。まるで気が狂った女のよ
うだぜ」

五郎がせせら笑って、京子の臍を指ではじ
き、三郎はねっとり汗ばんだ京子の肩に手を
かけて、紅生姜のように熱くなっている耳た
ぶに口吻しようとする。

「どうしようもねえ鉄火娘だと思っていただ
けに、いささか驚いたぜ」

「だって、皆さんが……。女の泣かせ方をす
っかり御存知なのね。憎い人だわ」

京子は、口惜しい気持を押えて、ふとすねた素振りを見せて三郎から視線をそらせるのだったが、それは調教された技巧というより陶酔を知った女の肉体から自然にわき出る色香というものかも知れない。

「うん、そんな事するの嫌」

清次と五郎が、まるで機械の部分品でも点検するかのように、それぞれが責めていた跡をたしかめようとすると、京子は嫌々をするように不自由な体をもじつかせたが、

「いいじゃねえか。責め跡ばかりじゃねえ、俺達はこの機会に女の体を納得するまで研究させてもらうぜ」

「将来、婦人科をやるうと思つてな」

清次と五郎はそんな冗談を云って口を開けて笑った。

「それじゃ、はっきりお約束して頂戴。妹の美津子には絶対に手を出さない。そうすれば京子、喜んで貴方達の実験材料になるわ」

よし、約束してやるぜ、と清次がうなずくと、京子は、何ともいえぬ羞じらいの色を上気した頬に滲ませて、かたく閉ざしていた腿の力をゆるめるのだった。

落城させた敵城をくわしく視察するような清次達の勝利感。口惜しくも攻め落とされた

自分の城を敵軍に明け渡しているような京子の敗北感。そうした狂おしいばかりの屈辱の中にマゾヒズムの快感を京子は、ジワジワと感じとっている。

「ねえ、どうして、そんなにくわしく御覧になるの。そんなに京子の体って面白い？」

京子は、五郎が自分の片足に手をかけ、肩にかけて持上げようとすると、それに抗わず膝の関節を五郎の首にからませて、極端なポーズをとらされたまま、ふと気弱な眼差しを清次に向けて、甘えかかるような声音で云うのだった。

清次はそれに答えず、今はもう、恨みも口惜しさも忘れ果てたような敗者のみじめな姿を晒している京子に「こいつは見事な上——をしてやがる」と嘲笑して、五郎に京子の肢をおろさせた。

「さ、それじゃ、お前さんの珍芸とやらを見せて頂こうか」

清次は頃はよしとばかり、五郎に眼くばせする。うなずいた五郎は箆の中から一つをつかみ出した。

「一寸、待ちな」

清次は、身をかがませようとする五郎の肩をたたいた。

「その前に、一つ、お京姐さんの口からはっきり俺達に教えてもらいてえ事があるんだ」

京子自身にもう一度はっきり敗北と屈辱を認めさせる為、清次は銀子と朱美に聞いた一種の屈辱責めを思いついたのだ。それは、男勝りの鉄火娘をいたぶる方法としては面白い程の効果があると、銀子がクスクス笑って教えてくれたものだが、つまり、女として最も羞ずかしく感じる肉体の名称を、はっきりと口に出して云わせるといふ遊びである。

清次達三人の波状攻撃を受け、遂にこらえ切れず、三人の敵の眼前で、あのマゾヒスチックな悦びの現象をはっきりと口に出し、屈辱の姿態を晒け出してしまった京子だから、今更、それ位の事にためらう筈もないだろうと清次は鼻先をこすりながら、うっとり眼を閉じ合わせている京子の肩に手をかけた。

京子は、裸の肩を清次に優しく抱かれるとひっそりと睫毛をそよがせて妖しいばかりに潤んだ輝きを見せる瞳を開き、

「教えるって、何を教えるのですか」

「フフフ、その前にまず仲直りのキスだ」

清次は、京子の背を両手で抱きしめる。京子は清次に吸いつけられるように、ぴったりと清次の唇に唇を合わせた。

身も心も今の邪惡な責めで完全に溶け潰れた感の京子は、むしろ自分の方が能動的に柔らかな溜息と共に清次の口中を舌で愛撫し、次に清次にも充分に吸わせて、そっと清次の唇から唇を離していく。

「一人だけ、そんなサービスするのは不公平だぜ。お前は今夜、俺達三人に平等にサービスする事になってるんだからな」

五郎と三郎が、ニヤニヤして、京子の左右に寄り添うと京子は放心したようにうなずいて、二人と交互に熱くて柔媚な口吻をかわすのであった。三人に平等に接吻を送った京子は、バラ色に染まった美しい頬を更にポーと熱くして顔を正面に戻したが、

「教えてもらいてえのはこの呼び名さ。こりゃ何ていう所なんだ」

と、清次はその銀子伝授のいたぶりを開始すべく、面白そうに京子を見上げて云うのだった。

「嫌、そんな事、京子に云わせないで——」

京子は、狼狽したようみるみる首筋まで紅に染めて、モジモジ身を揺すり始めた。

「鬼源という調教師からくわしく呼び名を教わったそうじゃないか。さ、大きな声ではつきり云うんだ」

「ひ、ひどいわ。女の私に、そんな事を口に出して云わせるなんて」

「云わなきゃ、また、さっきのようにいじめるぜ」

五郎が、手にした責め道具で軽く京子の頬をたたき始める。

肉体だけでなく精神まで、これらの三悪党に蹂躪じゅうりゃんされてしまった京子は、その屈辱に反撥する気力ももう消え失せていたのである。

上気した美しい頬を男達に見せ、声をひそめてシクシクすすり上げながら、

「云いますわ。でも、笑っちゃ嫌」

と、さも羞かしげに鼻を鳴らすのだった。

羞恥責めとも屈辱責めともつかぬ奇妙ないたぶりを清次達は、それからしばらくの間、笠にかかって続けたのである。

京子が血を吐くような思いで、やっとそれを口にする、と、「声が小さい、も一度、やり直せ」と、何度もそれを口に出させ、揚句には、その呼び名を含めた様々な言葉を、京子の口から云わせるといふ遊びを繰り返したのである。京子がためらうと、その代役を妹の美津子にさせるぞとおどかした。

「——京子の——は絶品でございます。今夜は皆様で何卒心ゆくまでお試しになって下さ

いませ」

それはコマースシャルだと無理やり云わせてから大笑いし、次にその卑猥な呼び名まで無理やり口に出させようとする。

そして、心身ともに京子がぐたくたになったのを見とどけてから、五郎と三郎は、京子の前に膝を折り、二人がかりでゆっくりと卵遊びを強要し始めたのだった。

「うっ、うう——」

京子は狼狽に満ちた異様な声をはりあげ、激しい身悶えと一緒にそれに従おうとしている。名状の出来ない京子の切なげな、そして妖氣をはらんだ凄艶な表情——。京子の波打つ乳房の上下を、きびしく緊め上げている麻縄も京子の汗と脂を吸って濡れ光っている。

これで二年前の恨みは充分に返したという酔い痺れたような勝利感に浸りながらも、清次達は、京子の周囲を取巻いてウイスキーを飲み合い、ギラギラ血走った視線を向け、

「さ、お前の芸当を酒の肴にしてやるぜ。始めな」

と、更に追い討ちをかけるよう京子を叱咤するのである。

京子は、燃え立つような凄艶な表情となりじっと瞳を一点に向けたまま、ゆっくりと屈

辱の場にいどみ始めた。

若い悪党達は手を打って笑いこける。

「こりゃ傑作だ。カワラを空手割りするなんかよりずっと面白いぜ」

そんな男達の揶揄や嘲笑はまるで無視したように京子は物悲しげなはにかみを深々と湛えた瞳をじっと前方に向けながら、必死に羞恥とたたかっているのだった。

「よ、まだ割れねえのか。早くすましてそろそろお床入りにしようじゃねえか。こいつがもう辛抱し切れねえといってるんだ」

五郎と三郎は、互いに相手を指さして笑い合った。

「お願い、もう少し、待って」

京子は哀しげな言葉を吐いて、屈辱のポーズを次第に大胆なものにさせ始めた。

清次達はサイコロを振り合って、この獲物を抱く順番をきめている。

「へへへ、やっぱりトップは俺だな」

清次が北叟笑んだ。

男三人は、脂汗を流してその熱演をくり返している京子の方を面白そうに凝視しながら押入れを開け、夜具を引きずり出している。

京子はそれを眼にすると、濡れた睫毛をふと慄わせて切なげに上気した頬を伏せた。

この珍芸をやり遂げたあとに待っているものは、これらの卑劣な男三人の餌食。だが、

京子はもう今はそれを辛く感じたり、口惜しがったりするような余裕はない。当面の屈辱に全身を火柱のように燃え立たせて必死な努力をくり返しているだけであった。

「そろ、この通り、もうお床の支度まで出来たんだ。早く、割っちまわねえか」

清次は、京子の揺れ動く臍を指でつつくと

「ああ、もう勘忍して」

京子は急に動きを止めて、男達に哀願するのだった。

「出、出来ないんです。ね、お願い、今日はもうこれで——」

「芸を見せるのは勘忍してくれっていうのかい。冗談じゃねえ。能書きだけ何だかんだと並べやがって、今更、出来ねえとは何だ」

清次はわざと凄んで見せ、次にニヤリと口を歪めて、

「だが、出来ねえものを無理に続けさせても仕方がねえ。その埋め合わせに、お前の妹も一枚加えて、これから乱交パーティーって事にしようじゃないか」

「嫌っ、嫌よっ」

京子は戦慄したように激しく身をよじって

「割るわ。必ず割って見せますわ」

再び、京子は狂ったように激しく羞恥のポーズを繰りひろげ始めたのである。

清次達は身を低めて、その美女の苦斗に好奇な視線を喰い入るように注ぎかける。段々激しくなる京子の身動きは、くり返えされて羞恥の涙と共に男達の眼前に晒け出されたのだったが、やはり、その殻を打破る事は出来なかった。

「へへへ、どうやら、無理なようだな」

「待、待って。お願い、もう少し、待って頂戴！」

京子は、狂ったように息もたえだえになつて叫ぶ。

「よし、あと五分待ってやるぜ。それで出来なけりゃ、この室内電話をかけて、お前の妹をここへ呼びこむ事にするからな」

清次は意地悪く、床の間の電話線のコードをたぐりながら、電話器を京子の足首の前へ置くのであった。

京子がそんな芸を見事にやってのけようとのけまいと、最初から銀子の提案で、美津子を京子の前でなぶり抜く計画は立てられていたようである。京子に対する精神的拷問は妹の美津子に対して凌辱を加える事だと、最

初から一切が計算されていたのだ。今頃は、銀子と朱美が、美津子に因果を含め、清次が電話する事になっている二階のホーム酒場に待機している筈である。

「そら、あと一分だ。へへへ、どうやら、お前さんの負けらしいな」

清次は、電話の受話器に手をかける。

「後、後生です。待って、待って下さい！」

「そら、そう云ってる内、あと三十秒だぜ」

清次は、クスクス笑った。

京子は、獣じみたうめきを発して、あられもないくらい露で激しい努力を全身でくり返し、それも及ばない事だと知ると、

「口惜しいわ。ああ、口惜しい」

狂乱したように首を振り、わっと号泣するのである。

「時間切れだぜ。可哀そうだが、約束だからな」

清次は電話の受話器を手を取った。

「待って、お願いです。もうしばらく試させて下さい」

「駄目だね。約束は約束だ」

清次は鼻で笑った。

「卑、卑怯だわ。貴方達は最初から、妹を巻添えにする気だったのね」

京子は、彼等が始めから奸計をたてていた事をようやく悟って、汗みどろになった緊縛された裸身を慄わせ、ぞっとするほど美しい眼に一瞬、憤怒の色を浮かべたが、すぐにがっくり首を落とし、おどろに乱れた黒髪を慄わせて、ひきつったような涕泣を口から洩らすのだった。こうした野卑な男達の官能を高ぶらせるため、心ならずも、精一杯に媚びをふりまき、死ぬより辛い女の羞恥図を晒け出して見せたのに——京子は、彼等を恨むというより我が身が浅ましくなり、泣きじゃくるのだった。

「何を云いやがる。割れなかったくせに大きな口をきくねえ」

五郎は、悶え泣く京子の前へ、身を乗り出し片膝を畳の上につくと、空手の手刀をつくり、

「おめえと勝負するため、みっちり空手の修業をつんだのだが、こんな事にしか使えねえとは情ねえな」

五郎は、京子の恨みのこもるものに軽く手刀を当てて素早く一撃を加える。

あっと悲痛な声をあげた京子は思わずムツチリ引き緊まった太腿を、電気に感電させたようにぴったりと閉じ合わせた。五郎の一撃

で殻は微塵にたたき割られたのだ。

「どうだい。さっぱりしたろう」

五郎は、切なげに眉を寄せ、全身を弓反りにして、堪え切れないような吐息を洩らす京子に、貪るような視線を向けた。

割られたそれは、どっとばかりに、溢れ出る。その骨までが溶けたような爽快感とも嫌悪感ともつかぬ奇妙な感触に、京子はモジモジ脚を慄わせて耐えている。

「ハハハ、こりゃ愉快だ」

貪るようにそれに好奇の眼を向けていた清次は、ふと、京子の裸身を後手に縛ってある麻縄がゆるみ出しているのに気づき、も一度しっかり縛り直そうぜ、とあらかじめ用意しておいたらしい別の麻縄を取り出し、五郎達と一緒に全身を充血させている京子の周囲にまといつくのだった。

熱く汗ばんでいる背中の中程で縛り合わされている京子の手首に更に縄を巻きつけ、前へ回ってキリキリと乳房の上下を締め直した五郎と三郎は、別の麻縄を使い、ぴったりと揃えている京子の足首にきびしく縄を巻いて、がっちりと縛り合わせる。次に脛がむず痒くなるばかりに官能的な、ぴっちり合わせた太腿の上にも、まるで荷造りでもするよう

にキリキリと麻縄を巻きつかせ、雁字搦目に仕上げていくのだ。

これから、京子の眼の前で美津子をなぶりものにするわけだが、それを見た京子は狂乱状態に陥り、嵐のように悶えまくるかも知れず、それを封じるため、京子を念入りに縛り直したわけだ。

京子の膝の関節の上あたりにキリキリ縄がけしている五郎と三郎の手の上へ、微塵に打砕かれて今やとめどもなく、したたり流れてくる卵の中身がこぼれかかってくる。

「へへへ、氣持が悪いだろうが、もう少し、辛抱しな。妹の眼に、一度はつきり、そのみっともねえ姿を見せてやるんだ」

それは、足首の上までしたたり落ちて、黄色い溜りを作っているのだ。

全身から血をふき出さんばかりの屈辱感に打ちのめされ、胸をついてあふれ出る慟哭と共に汗ばんだ肩を慄わせている京子を清次は小気味良さそうに眺めながら、豆絞りの手拭を取出した。次は、これから眼前で展開される妹の姿を見て、逆上し、わめき散らすに違いない京子の口を、前もってかたく封じようというのである。

猿轡をはめようとして、清次が、京子の形

のいい顎に手をかけると、京子は、涙を一杯滲ませた柔かい睫毛を哀切的に慄わせて、少女が甘い反抗を示すように、なよなよと首を振るのだった。

「こんなに、こんなにまで京子を罵りものにしておきながら妹まで、——ああ、貴方達は一体、何という——」

「うるせえな。二年前に手前に受けた恨みを俺達は今、楽しみながら返しているんだ。つべこべ云うねえ」

五郎と三郎も立上って、京子の顔を押さえ三人がかりで京子にきびしく猿轡をかませるのだ。口から形のいい鼻の先端までが豆絞りの手拭でかたく覆われると、京子は、絶望したように悲しげに瞼を閉じ合わせ、わさわさ慄える頬を見せて、大粒の涙を流し始める。

世にも哀しげな横顔を見せて猿轡の中で鳴咽する京子を、清次は云うに云われぬ楽しい気分で見えていたが、やがて、京子の脚元に置かれた電話の受話器を取り上げた。

「もしもし、ああ、銀子姐さんですか」

清次は、鳴咽する京子に意地の悪い微笑を向けながら受話器の中へ話しかける。

「そろそろ京子の妹をここへ連れこんで下さいよ。これから、乱交パーティを開こうと思

うんです。ええ、京子の芸ですか？ ハハハ駄目ですね。能書きは一人前だけど、遂に割れずじまい、そのかわりお詫びとして、乱交パーティで、妹と一緒に俺達の気嫌をとるといってるんですよ。それじゃ、よろしくお願い致します」

清次はそういつて電話を切ると、猿轡の中で一きわ激しく涕泣を洩らし始めた京子に向かって云った。

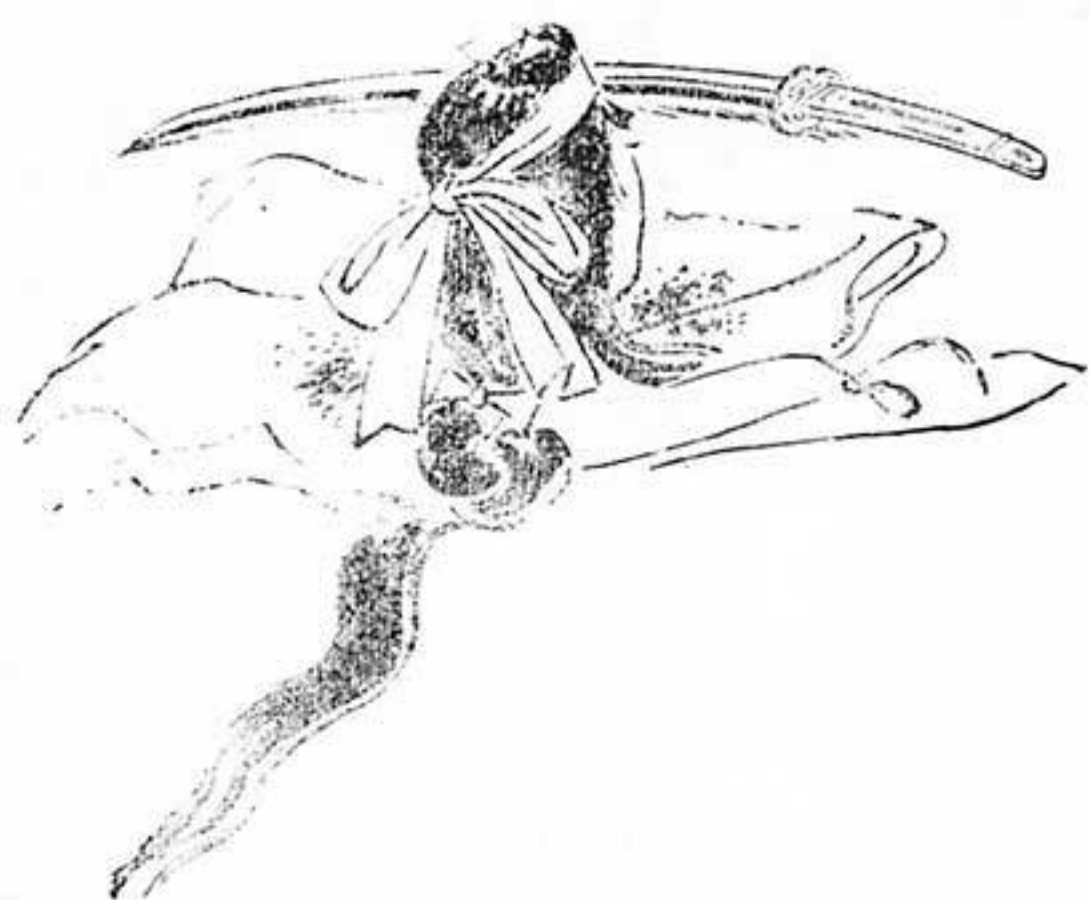
「美津子は、きれいに寝化粧して、もうすぐここへ御到着になるそうだ。まず、最初、おめえの眼の前で、美津子を俺達三人が可愛がってやる。そうすりゃ、おめえもあきらめがつくだろう」

五郎と三郎は、先程の夜具を二人で引きずり、わざと京子の足の前に配置する。

「ここで美津子を料理してやる。それがすめばおめえも混って楽しい乱交パーティを始めようぜ」

男たちは、雁字搦目にされた裸身をくねらせ、ひきつったように顔を歪めながら猿轡の中で号泣する京子を、ざまを見ろといわんばかりの表情で見とれるのである。

(つづく)



— 女武者決斗シリーズ —

女 四 天 王

川 上 米 子

人皇第六十六代、一条天皇の御代のことである。加賀の国白山の城主、立花正任の後家桔梗の前なるものが、その子兼任を擁して謀叛を起こした。

朝廷では直ちにその討伐のことを議したがこの正任というのは、藤原純友を誅伐して武名あり、前源満仲と勢力を争って敗れ、加賀に流人となって病死したわけであるが、その勢力は仲々侮れない。源氏でも満仲は既に没し、今を時めいているのはかの大江山の鬼退

治で有名な頼光であったが、折悪しくこの時は病床に臥って居り、これに代るものの人選が難しかった。

しかし桔梗の前、兼任の謀叛の理由は、源氏を攻め滅して、正任の恨をはらすのにあるのであるから、この征討の大將は源氏一族の中から選ぶのが至当である。頼光も病中から意見を述べ、弟頼信にその大任を降すことを乞うた。頼信も兄に劣らぬ名将だが、この時はまだ三十を出たばかりでこれといった武功がなかったから、朝廷ではその成功を危ぶむ者もあったが、坂田金時以下頼光の四天王を

従軍させるという事で議は決したのである。

源頼信はたしかに武勇の点では、兄頼光に一等を許したが、智略に富み、大局眼を有することでは、既にこの頃から抜群なものがあつた。彼は出立に際し、兄頼光はじめ朝廷の何人にも秘していた一策を、愛娘の金剛媛と留守の守備隊の責任者である子四天王に打ち明けておいたのである。

「皆の者、充分に心しておけ。この度の立花一族の謀叛の様子を見るに、不審の点が数々ある。どうやら源氏の主力を加賀までおびき出し、その留守に乘じ、内応の者に京におい

て乱を起こさせ、兄頼光の命を狙うとともに、一気に御所をわが物にし、その後白山城と呼応して源氏を滅す深謀と見える。わしの探索させたところによると、今の帝の寵姫として名高い真田姫というのは、昨年兄頼光に誅伐された大盗袴垂の忘れがたみらしい。それにかつて立花兼任と真田姫は相愛の仲でもあったと聞く。とすれば、内応者がありとすればこの辺りだ。しかし計られたと見せて計るのが兵法の極意。わしは何喰わぬ顔で白山城の攻撃に出掛ける故、そち達も、わざと京の警戒を弛やかにしておくのだ。そうすれば、真田姫の一味は必ず正体を現わす。その方が手っとり早く、不逞の者どもを一網打尽にすることが出来る。ただし、敵の動きを、逐一内偵しておくことを忘れるでないぞ。よいか」と諭して、金剛媛には源家に伝わる名刀膝丸を渡した。

金剛媛は年わずかに十七才。うち見たところ、花も恥じらう可憐なる美少女であるのだが、その実、膂力あくまで強く、打物としては男も及ばぬ程の女丈夫。頼信の秘蔵の娘であったのだ。

子四天王というのは、頼光の四天王の子供達で、いずれも二十に満たぬ若者達だが、揃

って父に劣らぬ勇士の面々で、薄井荒次郎重貞、占部六郎季重、渡辺源二郎武綱、それに坂田悪太郎公平のことである。ことに坂田公平は、年最も若く十六才ながら、身の丈八尺に近く、父金時も舌を捲く程の怪童である。

かくて頼信が加賀の国へ打ち発つと、果せるかな、幾ばくもなくして京には、袴垂こと藤原保輔の娘真田姫が源家討伐軍を起こして御所に攻め向ってきた。真田姫はこの時年つもって二十才。一昨年日本国中の美人揃えが催うされた時、その第一等に選ばれて京に召し出され、一条院の寵を受けた。開花羞月の粧い、うかがい見る何百という男子の鉄腸を溶かしたが、これまた実は、父保輔の血をうけて強弓を引き、荒馬乗りの名人で、それはさておいても、薙刀を使つての舞の鮮かさは知らぬ者としてなく、京童の口の端にも上る程であった。

そればかりでなく、彼女が率いる女軍の中には当時高名の女武者が四人加わって居り、世人、真田姫の女四天王と称した。

一人は袴垂保輔の妹で、真田姫には叔母に当る恵美姫と呼ぶ女性で二十四才。一人は強力をもつて聞えた八田の八女で、三十一才のうば桜。まだ年十七ながら既に戦場で兜首五

つ、六つを挙げて、一躍名を知られた鈴井の力女。そして源家の一族でありながら、頼光兄弟に恨を含んで敵となった一条日女子は二十才。いずれ劣らぬ女斗士である。

不意を打たれた宮中では上を下への騒ぎとなったが、それは表向きのもので、実際は大將金剛媛の采配の下、子四天王が四方を固めて寄せくる藤原勢を二度、三度と撃退した。

「ちっ。敵は少数、不意を打たれては、ろくな応戦も出来ぬ筈と思うたに、何所の門にも一際すぐれた勇士がいて、突破出来ぬ」と齒を噛みしめて口惜しがる八田の八女。

真田姫はキッと思索して、

「敵もさる者、この位いの用意はあって不思議はない。四天王は頼信に従って下向したことはたしかな故、ここに居るのは、かの子四天王と呼ばれる連中に違いない。とすれば妾に策がある。どうじゃ、そち達。子四天王と勝負して勝つ自信がおりか」と、女四天王をふり返る。

「これは姫様のお言葉とも覚えませぬ。われら女として一軍の将をもって任ずる者、いかなる荒武者として恐るるに足りませぬ」

若い力女が激怒して答えれば、一条日女子も相槌を打って、

「そうとも、かの悪名高き四天王と組んでも負けるとは思わぬ。まして口端の黄色い子四天王の如き、一ひねりに首引きちぎってみせましょう」

と勇み立つ。ただ恵美姫は首を振って、
「そう敵を見くびっては大事を招く。噂によれば、子四天王もこの頃は、父、四天王に劣らぬと聞く。とすれば力の差は紙一重。勝負は時の運とて二対二と見ねばならぬ」

言われて真田姫も、うちうなずき、

「叔母御前の仰せはごもっとも。ただ妾は四人同士を戦わせて勝を取ろうというのではありませぬ。それを口実に四天王を一カ所にひきとめておいて、その隙に妾みずから御所に討ち入り、頼光の首級を挙げる所存。御所をさえ占領してしまえばこちらのもの。あとでゆるりと、子四天王を料理したらいかがかと思ひまする」

「さすがは姫様、御名案」

今度は異口同音に賛成、早速手はずにとりかかる。

翌朝一通の矢文が子四天王のもとにもたらされた。

『子四天王と女四天王の決斗によって、源藤の勝負をつけようではないか』

という内容のものである。

これに対し、子四天王と金剛媛も額をつき合せて相談したが、

「真田媛のこと、必ず何か企みがあるうが、それに乗せられたと見せて備えるのが、父上も云われた兵法の極意。敵はまだ、この金剛媛の存在は知るまい。そち達は女四天王と戦え。何か変があれば、妾が処置します」
凜然たる媛の一声で衆議は一決した。

二

翌日、長保四年十月二十日の朝まだき。京にも霏々として雪の降り始めた中に、子四天王と女四天王の花々しい一騎打ちが演ぜられた。いずれも鎧、物具に身を固めているが、獲物は夫々に違ふ。中にも強力な八田の八女が、八貫目もある鉄棒をふり廻しているのが目立ったが、これには大太刀を翳した坂田公平が立ち向う。長刀を掻い込んだ恵美姫には大槍を持った渡辺武綱。組打上手の力女はわざと一尺八寸の小太刀をもって、占部季重の長刀とわたり合った。一条日女子と薄井重貞は共に槍である。

かくて年少の勇士と美女との一騎打ち。四組の戦いが、雪の中に馬を走らせて四カ所で

行われた様は、まさに未曾有の決斗である。

しかし、さすがに互いに名誉をかけての晴の決戦。仲々に勝負はつかず、白旗を一斉に靡かせた源氏の軍勢。丸三つに一文字はじめ色とりどりの差し物を打ち立てた藤原勢。いずれも手に汗を握っている。時こそよしと真田姫は、おのれの影武者に愛用の小桜緘の鎧を着せて、後見しているかの如く見せかけ、自らは三百の精兵を率いて真しぐらに宮中へ乱入したのである。

門々にはそれぞれ相当の固めの兵がいたのであるが、子四天王でない限り、真田姫の鋭鋒を遮るべくもない。たちまち切り開いて奥庭に走り入り、

「源氏の大將頼光に見参！ 妾こそは汝のために無念の最期を遂げし袴垂保輔が娘真田姫なり。今こそ父の恨を霽さんために参上せり出会えや！」

と呼ばわる。その銀鈴をふるような声音には、ここまでくれば、もはや手向う強敵もあるまいという自信の程がありありと読みとれた。四天王も子四天王もいないとなれば、あとは病に苦しむ頼光あるのみ。大願成就、と勢いこんで廊下へ駈上ろうとした時である。その頭上から天来の声がした。

「慮外者、退りや。ここを何所と、思うぞ。一天万乗の大君のおわすところ、源家の棟梁のみが御守護つかまつる聖域ぞ。それを、そのような土足、凶器で汚すとあっては、容赦なりません」

「な、な、なんと……」

これはまた、鶯が囀るような妙な声音ながら、ピリピリと身に伝わるような威厳に打たれて、真田姫も思わず立ちすくみつつ、その声の主を見上げる。

と、こわいかに、武具こそつけてはいないが、鎖帷子に身を固め、襷・鉢巻も凛々しく手槍をかいこんだ女性一人。年の頃なら十六七、目元涼しく、鼻筋高く、丹花の唇、バラのような頬、辺りを明るくするような美少女なのである。

「そ、そちは何者？」

「妾は源氏の棟梁頼光が弟頼信が娘にて金剛媛。ここ御所守護の大將じゃ」

「むむう、そちが頼信の娘とな。お前如き小娘、真田姫が相手ではないわ。早々に引き退って頼光を出しや」

「笑止や、賊婦真田姫。頼光病気のことは汝がよく知っているはず。この機に乗じ、立花兼任と相計り、わが父頼信を京に引き出し、

その留守の間に京をわがものにしようとする謀叛のたくらみ。わが源氏一門が知らずと思うてか。今の今まで捨て置いてわざとその手に乗ったは、汝をここまで引き出し、動かぬ証拠をつかまんがため。飛んで火に入る夏の虫。この金剛媛がしかと見定めた上は、前非を悔いて潔く誅に伏しや」

「おのれ、小賢しき言の葉。まずそのそっ首からうち落してくれん」

意外な邪魔者に、齒をかみならした美女真田姫、得意の薙刀をふるって斬りかかる。と見て、金剛媛の部下二、三人が躍り出して遮ったが、たちまち長刀にかけられてあえない最期。とみて金剛媛は槍をとり直し、

「われは源氏の嫡女。そなたも藤原の嫡女。大將同士、尋常に一騎打の勝負せん」

と挑めば、

「言うにや及ぶ」

真田姫もこの敵討たずんばと立ち向う。かくてここにはまた、妖姫と乙女の艶麗な決斗がくりひろげられたのであった。

三

それと知るや知らずや、外表では子四天王と女四天王が、いずれ劣らぬ烈しい斗争。ど

う勝負がつくとも見えなかったが、

「おう」

と一際おめいて勇をふるったのは、さすが子四天王の中でも強さにおいて群を抜いていた坂田公平で、女人に負けてなるものかと、双腕に力をこめて阿修羅の如く猛って打った太刀先が、受けた八田の八女の刃を押してその眉間を傷つけた挙句、切尖流れて左の肩へ切り込み、プツと血潮がとび散った。

「アアッ」

流れた血が目に入ってひるむ八女。得たりと太刀を捨てた公平は、すかさず下から入って八女の女体にムズと組む。

「しゃっ！」（小癪なり、小童！）

と上からかかえ込んだ八女は、力においては四天王随一。一気にひつつかんで馬下に投げ落とそうとしたが公平ははまだ力こそ劣れ父譲りの相撲の名手。上手から捻ろうとする強力を利用して左からの下手投。これが鮮かにきまって、八女の身体は鞍を離れ、もんどり打って、したたか地上に叩きつけられた。

「う、うーん」

しばしは起きも得ずいるうちに、たちまち公平のために馬乗りになられてしまった。

「む、無念、ちっ！」

八女は必死に刎ね返そうとするが、如何せん、流れ出る血に片眼しか開けられず、不由おびたらしい上に、左肩の傷が痛んで充分に働けない。力の限り抵抗して見たが、その利き手を逆にとられて、相手の膝の下にしツカと組み敷かれてしまつては万事休す！ 公平はキラリと引き抜いた腰刀を、切尖三寸、彼女の雪白の咽喉元におしあて、

「いかに八田の八女、同じ四天王でも、所詮女は男に及ばぬものと思ひ知ったか」

言われて八女は、なおもあがいて、

「何の、汝が如き小童に、この首とられてなる……ウ、ウワッ」

言い終らぬうちに、公平の短刀が襲った。

さしもの勇婦もあわれ虚空をつかみ、もだえつつ息絶える。天下の女傑として聞えた八田の八女も三十一才を一期に、怪童公平に討ちとられてしまったのである。

公平は手早く、八女の黒髪をつかんでその首を掻き落すと、美しい生首を高く掲げ、「敵も味方もよく聞け。真田姫の女四天王の随一人、八田の八女を、坂田公平が討ちとつたり」

と呼ばわる。ワッと源氏方から上る歓びの声。この名乗りが、他の三組の戦に与えた

影響は大きい。必然、他の子四天王は公平に負けじと勇み立ち、女四天王側は八女の仇とばかり奮い立っても、そこには隠せぬあせりが見られた。

案定、続く犠牲者は、女四天王の方から出た。一条日女子が薄井重貞に馬下に突き落とされたのである。日女子も烈女、痛手に苦しみながらもなおも突き出す重貞の槍先をつかんで馬下に引き落とそうとした。重貞は逆らわず槍を放して、みずから馬を飛び降りた。

「ア……ッ」

不意を打たれて槍を握ったまま仰向けに倒れる日女子に躍りかかったと見る間に、

「エイッ——」

抜く手も見せず横に払った手練の一刀、あやまたず日女子の細い頸筋に当たったと見る間に、あわれその美しい首は宙に飛んで、噴血二三尺の胴体は雪中に倒れて、辺りは一面のから紅。日女子の首を拾い上げた重貞は、

「薄井重貞、二番首」

と名乗りを上げる。かくては女軍の非勢はもはや明らかとなつて、藤原勢には早くも動揺の色が見えはじめた。かくと見た公平は、「重貞、汝は武綱と季重に加勢せい。わしは金剛媛が心もとない。その方を見てまいる故

こちらは頼んだぞ」

言い捨てて門内に走り入る。

四

その頃、金剛媛と真田姫はなおも華々しい一騎打をくり展げていた。廊下の欄を隔てて上から突き下ろす金剛媛の槍先、下から払い上げる真田姫の薙刀。一上一下秘術をつくして渡り合うさまは、とても女同士勝負とは思えない。すでに何十合闘ったか、この雪降る中で双方の美しい額からは玉なす汗が流れて鉢巻を濡らしている。

(このような小娘一人討てぬとは……)

必然、真田姫の方が、あせった。

彼女の武勇は夙に天下に聞こえているが頼信の年若き姫がこのような武術の達者とはついぞ知る人はない。年下の新人におのれの名声を奪われてはという心配、しかもこう時を費しては、敵の四天王が引き返してくるかもしれないし、どのような邪魔が入らぬとも限らぬ。この機会を失いたくないというあせりが彼女を不退転のものにしていた。

(ええい、何とか廊へ上らねば……)

まさにその通り。薙刀は払うばかりでなく真向から斬り下げる武器なのだから、こう上

位をとられていては、その威力は半減してしまふ。そうと分つてももとより金剛媛もそれを計算に入れて闘っているのであるから、いづかなその好位置を譲ろうとしない。

(ちっ、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ)

キッと下唇をかみしめた真田姫、何と考えたか、一旦体の動きをとめて大きく薙刀をふりかぶった。相手を見縊ったともいえる大胆な所作、必然、下半身に隙が出る。

「ええっーい！」

そこは若さの哀しさ、さそいの隙とは知らず、力一杯突き下す槍先。あわやというところで、ヒラリと体が変わって、右手でグイとその千段巻のところを握ったのである。

必然、引き落とされまいと手繰ろうとするその相手の力を利用して、

「やっ」

トンと左手に持った薙刀の石突で地をつくと、そのしなやかな女体が宙に躍って、鮮かに欄の上に飛び上った。

その神技——。折しもそこへ走り込んで来た坂田公平も、それを目の辺りに見せられて思わず立ちすくんだのである。

おどろきは同じ金剛媛。さすがに気押された形でたじろぐのに乗じた真田姫。

「覚悟！」

今度こそはと、真向切って降り下ろされた薙刀。交す間もなく体勢崩れた金剛媛。今少しく距離があったら、唐竹割にされていたところであろうが、わずかに体が寄りすぎていて、叩いただけの薙刀の刃を、辛くも槍の柄でうけとめる。それをぐいと押し伏せようとする真田姫。両者の体が相寄ってすさまじい力比べとなった。

お互に相手の美女特有の快よい体臭に酔いながら、生命をかけて精魂と体力の限界を賭けて競合うさまは、まことにこの世の美の極致で、公平が立ちすくんだままだに一歩も動けないのも無理はない。

(いけない。このままでは敵の体力と伎倆に圧せられてしまう——)

必死に支えながら金剛媛の頭脳はクルクルと働いて、

(そうだ、膝丸の太刀、南無八幡！)

そこへ思い至った時、彼女の胸に光明がさして、不思議な力が身内から湧いてくるのを覚えた。

「む、ムムッ……」

神通力を得るということがある。ジリジリと金剛媛の槍の柄が相手の薙刀の刃を押し返

しはじめたのだ。

「な、なんの、小娘が小癪にも……」

あわてて力を入れ直さんとする真田姫。そのはなを金剛媛はわれから槍を棄てるように体をさっとすべらせて前に引いたのである。

「アーッ——」

不意を打たれて、宙に声を残したまま前のめりに泳ぐ真田姫。その姿へ、転りながら腰の太刀に手をやった金剛媛は、抜き討ちにサッと氷の刃を走らせた。

「心得たり！」

そこは腕自慢の真田姫。態勢を崩しながらも薙刀を斜めに構えてカチリと刃先をうけとめたのであったが……。何たること。腕の冴えか、刀の切れ味か。あの長刀の柄がスパッとはずに切り断たれて、尚、真田姫の高腿をしたたか薙いだからたまらない。プーッと飛ぶ血しぶきが辺りの雪を真赤に染めた。

「くっ、ク、ククッ」

苦鳴とともに、さしもの真田姫もしりえにどうと倒れる。得たりと跳ね起きた金剛媛。

「真田姫、覚悟しや！」

と二の太刀をふりかぶる。思いもかけぬ不覚に動揺した真田姫は、脇差を抜く間もなしと見たか、とっさに素手のまま金剛媛に武者

ぶりついていった。

「あ……っ」

突き放そうとしたが、相手も必死。揉み合ったままの女体は障子を押し倒して、部屋の中へ転げ込む。

相手の右手に持たれた名剣を、必死になってもぎとろうとする真田姫。さはさせまじと防ぐ金剛媛。しかし、争いながら金剛媛の方は、なお余裕をもっていた。それは、おのれには正義の神の加護があるという強い自信と事実、傷ついた相手の動きには目に見えて弱りがあったからである。

（相手に太刀をとらせて、その隙に脇差で刺すべきだ。だが、わがものを抜くよりは、相手のをいただいた方が早い）

そこまで計算した金剛媛は機を見て、持った太刀を相手にとらせた。と殆んど同時に敵の帯にたばさんであった脇差を抜くより早くそのまま、相手の下腹へ突き入れた。

「うっ……うわっ！」

この奇襲は、さすがに手練の真田姫も防ぐ術がなかった。鋭い刃先に右下腹のあたりを深々と刺し通されて、一旦その長身をえびのように反らせると、抗角奪い取った膝丸の名刀がポロリと落ちた。さすがに一度は相手の

体を押し放そうとしたが、さはさせじと押し返されて、もろくも背を板戸に押しつけられてしまった。それでも尚、それ以上刺させまいとするのか、あるいは挟られてはおしまいと思っただのか、短刀を握る金剛媛の両手を、両手でしかと捕えたまま、動かさせないのである。

それを身体ごと押し込もうとする金剛媛と最後の死力をつくしての揉み合いとなった。といって勝敗は既にきまっている。時間の問題なのだが、逆転を警戒して金剛媛もあくまで力を弛めず、ここで勝ち切ってしまうとする。

それにしても、これほどの重傷を負いながら、なおも勝負を捨てない執念と、悔り難い死力に、いささか畏敬の念を抱いた金剛媛は上眼使いに敵姫の顔をぬすみみた。相手の黒髪がおのれの顔にかかるままに、さなきだに背の低い金剛媛が、そり返る真田姫を押し刺しているのである。必然真田姫のふくよかな胸に顔をうずめる形になって仰ぎ見たのであるが、その顔を見たとなん、

（何という美しい人——）

それまでは気付かなかったこの女将の凄いまでの美貌——月のような眉。うるんだ大き

な眼。気品のある鼻。そして紅い唇の下に苦痛のためにキリリと喰いしばった白い歯。透き通るように滑々した額と花びらのようにふくよかな頬と顎の皮膚。そしてやや厚目の下唇がヒクヒクと苦痛を表わし、しなやかにうねっている頸すじに視線が下りてきたとき、ふと、

（妾は今、こんな美女を討ちとろうとしているのか——）

と急に後めたく感じたのである。

が——その時である。廊の下にかけ寄って来た公平が、

「姫様、しっかりなされませ。われわれは女賊どもを討ちとりましたぞ」

と呼ばわったのである。その声は雷の如く二人の耳に響いた。それは美に打たれて気運れを覚えた金剛媛に勇気を与え、反対に真田姫には致命的な影響を与えるものとなった。

苦痛を耐え死力をこめて防いでいた両の手が急に弛んで、むしろおのれの刀でわれとわが腹を切るように、グイと一抉りすると、大きな眼が眠るように長い睫で閉ざされ、

「む、無念ながら……妾の負け——」

つぶやくように言ったと思うと、ガックリ白い顔を伏せ、ズルズルと崩れ折れるように

腰を落とすと最後は両手を展げて仰向けに打ち倒れてしまった。その動きにつれて、むしろ相手に導かれるが如く押し倒した形となった金剛媛が、グイと懐剣をひき抜くと、その

切尖から血潮が滴って辺りを染める。ホッと思わず出る吐息をつきながら、敵姫の姿を見下ろす金剛媛。

「姫様、お見事！ 鬼神とうたわれた真田姫

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上のお申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

を、よう一人で仕止められましたな。これで源家は万々才でござる」

廊の下で喜ぶ公平の声に、ハッと我に返った媛は、なぜかうろたえた。

「いや、そなたが加勢に来てくれたからこそ

じゃ。やっと——」

「なんの、私はただハラハラして手に汗を握っていたばかり。それにしても膝丸の切れ味には感じ入りました」

「そう、まことにこの名刀が真田姫を倒したのじゃ。父上のお蔭というもの」

「殿もいかばかりお喜びか。しかし媛、敵はまだ退きませぬ。早う真田姫の首級を挙げられませ。私は味方に伝えてまいります」

言い捨てて、また走り去る。

(このような美しい女体を、身首二つにせねばならないのか……)

金剛媛は急に、戦のあとの空しさと敗れた美将への愛惜の情に、乙女らしい感傷に誘われたが、これも武門の掟やむを得じと、真田姫の胸にのしかかる。そして流石に息のあるまま首を刎ねかね、左手で襟をとって引き上げつつ、右手の懐剣をとり直し、

「いかに真田姫、武運つきた御身の首級、不本意ながら、金剛媛が申し上げます」

と声さやかに引導を渡し、そのふつくらと盛り上った左乳房の下、心臓目がけてズブリと止めの一刀を刺し通す。臨終の際の痙攣にブルブルと五体をふるわして、やがてガックリと息絶える美将。日本一の美女真田姫は、二十才の花の盛り、美の絶頂のまま討死を遂げたのである。

五

作法通り、頸すじ長めに真田姫の首級を挙げた金剛媛は黒髪を纏んで掲げてみる。つい先刻まじまじと見たあの凄まじい美貌は、今は変り果てて何かあどけない童女のそのように感じるのも不思議であった。

(やはり、心優しい女性であつたらうに、運命があのように猛々しく……)

あの威猛高に挑んで来た雄々しい女武者振りも、今にして想えば幻でしかなかった。そんなことを思つて呆然としてゐる彼女のところへ、また公平が走り戻つて来た。

「おう、真田姫の首討たれましたな。名乗りは私が致しましょう。お渡しあれ」

受けとつた真田姫の美しい生首を、名刀膝丸の切尖にグサと刺し貫き、高々とかかげて大音声。

「敵も味方もよく見よ。寄手の大将真田姫の首は、これこの通り、源家の女将金剛媛が討ちとつたり」

と呼ばわれれば、両軍から一樣に起こる異様な喚声。

同じ頃、鈴井の力女も遂に力つきて、占部季重に組み敷かれて首搔かれていた。

最後まで残つた恵美姫も、かくなれば事成らじと見たか、馬上から長刀はじめ、鎧、物具を投げ捨て、

「女四天王の最期の有様、よく目にとめて後世の語り草にしや」

と叫びざま、衆人環視のうちに双肌押しひろげ、雪とまがう肌にグサと短刀を突き入れると、キリキリと右に引き廻す女の切腹。見事に一文字に切り終ると、切尖を口に含んだまま、どつと馬下に落ちて壮烈な最期。

(さすがは女丈夫)

と、敵も味方も感歎したが、かくて真田姫一味の野望は水の泡と消えたのである。

真田姫は一条院の寵妃。それをほしいままに討つたとあつて、

(首にまでしなくとも……むざんな)

と御機嫌斜めの由ではあつたが、こう明白に逆意があらわれては弁護の余地はない。

金剛媛にはおとがめもなく、真田姫はじめ女四天王の首は、逆徒として四条河原に梟けられ、源氏の武名は、いや上つた。

しかも日本一の美女と女四天王の生首を見んものと、京に集る見物人は大へんな混雑。

そこで早々に梟首はとりやめ、真田姫の首を塩漬にして頼信の陣中に送り、さらにそれを立花の城へ届けさせた。

兼任も愛する人の変り果てた首を目のあたりにしては、抗争の氣力を失つて、城はその夜のうちに落ち、兼任ならびに桔梗の前も首を源家に授けて終つた。

両四天王の一騎打の模様は華やかに、かつ艶麗に肉付けされた噂となつて、人々の口から口へと流れた。

誰知る者もないと思える御所内での美将二人による死闘も、乙女武将金剛媛の抱いた、真田姫の凄艶極まりなき最期の美に対する愛惜の情までをいい当てて、壮烈にして、かつ優美な決斗として、たちまちの内に誰知らぬ者もない程に拡つたのであつた。

それは、逆徒とはいへ美勇共に兼ねそなた、得難い女武者達を惜しむ氣持の現れに他ならなかつたのであろう。

—おわり—

告

白

衛生検査技士の妄想

加 藤 尚 子

衛生検査技士という、いかめしい名前が、私のお仕事です。飲料水の検査とか、工場の埃にまみれて汚染空気の測定をする姿を思い浮かべる方もあると思いますが、私のお仕事は病院で臨床検査に従事することで、難かしい国家試験をパスして始めて与えられる名前なのです。

大きい近代的設備をととのえた病院には、私達のような検査のお仕事をする人が多いところでは何十人も働いております。でも大い地下の検査室で、もくもくと働いていますから、こんなお仕事を御存知にならないことでしょう。

病院の近代的姿というのは、ドクターとナースとレントゲン技師や私達の検査のお仕事、三つ協力し合って、患者さんを能率的に治療していくのが、それなのですから、私もいささか自負心を持って、お仕事をしています。私の出すデーターが患者さんの生命につながると思うと、試験管を持つ手も思わず緊張します。

ガラス器具や薬品の匂う化学検査室。消毒薬や細菌の培養のため、いつも生暖かい細菌検査室。計算器のカチカチ忙しくひびく血液検査室。緊張の連続の輸血部。異臭のただよ

う一般検査室。患者の体から取り出されたものを検査する病理検査室など。私達のお仕事は多種多様で、病院にお勤めするようになって数カ月、夢中になって働いてきました。

しかし、お仕事に慣れてくると、地下の検査室にエレベーターでつぎつぎと運ばれてくる伝票と検査材料、測定値が記入されて病棟別の状差しに返される伝票など、その流れ作業はまことに味気ないものになってきます。まして、お仕事に追われた一日、仕事が終わる星空を仰いで家へ帰るときは、本当にわびしい思いでした。

あるとき私は、病院職員の健康診断で、お小水の検査の結果、蛋白が陽性という返事をもらって驚き、自分で時々お小水を検査するようになりました。その結果、どうも白血球が沢山混ってくるので、どこかお腹に炎症があるのではないかと思いました。そして検査のドクターに相談しましたところ「それならとにかく炎症が本当にあるかどうか、ハルンの細菌の検査をしてみることだね」と、おっしゃるのです。私は「だって、お小水は細菌検査のときカテーテルでとるんですもの」と思わず口に出してしまっ、恥かしさに顔がほてりました。

それまで検査室に機械的に運ばれてくる検査物が、患者さんからどのようにして採取されてくるのか、考えてみたことがなかったのですが、お小水検査の場合、菌の混入を防ぐため、必ずカテーテル尿を使うと、習ったことをこのとき、ふと思い出したのでした。私は、自分でとって調べようか、それとも内科へ行って診ていただくかしらそれともいっそ泌尿器科へ行ってみようかしら、などと考へ、学校時代に習った教科書やノートを探し出してきて、一生懸命、どんな風にして検査するのか、お勉強したのでした。

そして、やさしいK先生の手で私のお小水が採られる場面や、内科のこわいナースに採尿される場面を想像してみたりしました。でも泌尿器科からくる検査物には、左右の別が記入されてあるので、きっと膀胱よりもっと深く、カテーテルを入れるのだらうと考えられますし、外来のナースに下着など見られるのが嫌なばかりに、とうとう半年ばかり我慢しました。

けれども、それから数カ月たってから私は時々腰痛に悩まされるようになったのです。そして、M大学病院の内科を紹介していただき、入院して検査していただくことになりました。

した。幸い、お小水には異常はなく、胃腸の検査を行うことになりました。実は、病院では浣腸されるのではないかとビクビクしていたのですが、バリウムを飲むことになりました。「上から」飲むことになったわけですから、何度もお腹の写真を撮った結果、陽性虫垂炎ということでも手術を受けることになり、外科へ廻されました。

そして手術の前日、受持ちの先生から、「お腹の中を綺麗にしなければいけないから浣腸するよ」と言われた私は、「お願いします」とも「いやです」とも言えませんでした。毛布で顔をかくしてうなずくより仕方がありませんでした。

軽い夕食後、病室の天井にとりつけられたスピーカーで「加藤さん、処置室へお出下さい」と呼び出しがかりました。隣のベッドのおばさんに「浣腸ですよ、早くいってらっしゃい」と室内にひびくような声で言われて、私は顔を赤くしてどぎまぎしました。でも外科の場合、手術の前は殆どみんな浣腸されるのですから、そう思いつめることもなかったのです。

私は病院にお勤めしていたのにこのときまで、お浣腸は先生がなさるものとはばかり思っ

ていたもので、処置室でナースの方に「パンティをとって、ベッドの上に横になって」と言われ、背中の方でイルリガートルとカテーテルが触れる音が聞こえても、今に先生が現われて私の肌に触れるのではないかと固くなっていました。

カテーテルが挿入されたとき、余りにも直ぐでしたので、ぎくっとなりました。私がお浣腸されたのは、このときが初めてでした。そして、子供の頃、母親から浣腸されそうになって、裏山へ逃げ出したことがあったのを思い出しました。高圧浣腸は、かなり刺激が強く、夢中でトイレに走りましたが、後で考えるとお浣腸の途中ナースの方が何か小声で話してらしたようです。

トイレへ行こうとしたとき処置室の入口でぶつかりそうになった二十七、八の美しい方にもしかしたら見られたのではなかったでしょうか。

でも、そのようなことを想像するだけで、不思議と興奮するのは、どうしてなのでしょう。手術の後、目がさめたら丁度、医長先生の回診中で「君、もう泣かなくてもいいんだよ。終わったんだから」と言われました。きつと私は、夢を見ていたのでしょうか。

その後、退院までの間に、以前お小水の異常のあったことを先生にお話して、検査をしていただくようお願いしました。その結果、腎臓が下がっているためと言われ、直ぐ手術をしなくとも、もう少し様子を見て良いのとこのでした。そして、とうとうある日、お小水の細菌検査をして下さるよう、自分からお願ひしてしまったのです。

検査の方法は普通の尿検の時のようにコップにとってするのではなく、やはり膀胱にカテーテルを入れて採るのです。そして私はほんとうは自分から、そうされることを望んだのです。

採られるときは痛みは思ったほどありませんでしたが、そのときとる姿勢がいやでした。ナースの顔が見えるのです。私は目をつぶっていましたが、ナースの方は私の方を見ながら「もっと膝を立てて」とか「力を抜いて」とか「ずい分、出るのね」など嫌味のようなことを言うのです。

実はその前夜、こっそり隣室のS子さんの流腸されるのを、処置室で見ってしまったのでした。そして私自身、何か強烈な刺激を求めたい気持ちが湧いてきたのです。でも後で後悔しました。導尿は後で思い出しても、ほんと

うに恥かしいのです。

その後また入院して、お腹の検査をしていただきました。今度はバリウムをお尻から注入してレントゲンを撮るのです。前に入院したとき、お流腸や導尿に興味を覚えてしまったので期待していたのですが、検査そのものは大量に注入するのでお腹がはって苦しく、その上、いろいろ体位を変えたり、お腹の上から圧迫したりするので、楽ではありませんでした。また途中で排便して、空気を入れたりするので。それに、先生が挿入して下さらないのも不満でした。

私が入院していたのは六階で、レントゲン室は一階なので、検査のときエレベーターで下までナースに連れられて行きました。ナースの手には赤い太い直腸カテーテルのついた大型イルリガートルと、瓶に入ったバリウムがお盆にのせられ、これ見よがしに手にささげているので、一緒にエレベーターに乗った方達には、パジャマ姿の私が何をされに行くのか分かってしまうのです。わずか一、二分の間ですが、私は恥かしくて思わず逃げ出したいくなりました。

退院してから、再び元の検査のお仕事をすることになりましたが、機械的に運び込まれ

る検査物を見ると、いけないことですが、知らず知らずに検査物が患者からとられるときのことを想像してしまうことが多くなりました。採便管に入ったお通じ、お小水はすべてカテーテルでとられた筈で、伝票を見て私と同じ年頃の方ですと、また入院のときを思い出したりするのでした。

病院の栄養士の方の採用試験のとき、身体検査の検便はナースに代って私がとりました。皆いやがったからなのです。そのむくいのためか、後で院内に赤痢が発生して職員全部の検査（自分でとっていただきますが）を、徹夜でやらされました。

そして今では、自分でひそかにエネマをしたり、自分で検査をしたりすることに興味をもつようになってしまったのです。そして、この頃は、お友達の中に体の具合の悪い人がいたりすると、恥かしがるのを無理に病院に連れていって、いろいろ検査を受けさせたりあるいは検査物を調べてあげたりすることに興味をもっています。結果を後で教えてあげるのが、とても楽しみなんですもの。こんなことをしてはいけないうか。

× ×

男性虐待快樂術 (第三話)

薔薇はトゲがあるから美しい



小説

薔薇は

トゲがあるから

美しい

馬族 保

第一章

藤田亜子は有頂天であった。

彼女の体は甘才^{はたち}の若さで、はち切れんばかりに輝いてみえた。男というものが、こんなにも他愛なく亜子の足下に屈伏しようとは想像だになかったことである。男たちが、白い眼をむき、呼吸^{いき}をハアハア喘がせながら亜子を求めて、哀願するさまは、世にも得がたい珍奇な風景であった。

ああ、わたしの魅力は素晴らしいんだわ。

楠本南里は、

——貴女が死ねといえ、この場で死んでみせます。

と云い、金子鶴亀は、

——亜子さんに、往来で、わたしの股をくぐりなさいと命令されたら、きっと恥も外聞も忘れて、くぐるでしょう。

——というのだった。彦沢譲二は、

——貴女のその素晴らしい絹の膚を洗った

風呂の水なら、僕はよろこんで飲みます。

わたしの魅力は、これからは、わたしの財産になるかもしれないわ。

亜子は寝る前に、三面鏡に彼女の美のすべてを写してみる。鏡の中の亜子にニッコリ笑ってみせる。怒ってみせる。脚を大きくひろげて、金子さん、さあ、わたしの股をくぐってごらんさい、と小さな声でつぶやくように命令してみる。下唇を突き出し、傲慢な表情を写してみる。丸いお臀をむき出しにして

写してみる。きちんと坐った大きいお椀のような二つの乳房を写してみる。

「ほんとだわ。わたしの体は、生きた芸術品だわ。ふ、ふ、ふ。男たちが目の色を変えてのぼせるのもムリないわ。わたしが惚々するくらいですもの」

藤田亜子は、くすり指を丸めて、鏡の中の彼女の可愛いおへソを軽く弾いてみる。

「めったには、そこいらの男達に、わたしは上げられないわ。ふ、ふ、ふん」

亜子は、赤いネグリジュに着換える。寝台に体をどすんと放り出し、ポン、ポン弾みながら、

「男どもを奴隷にして、奉仕させている夢でも見ましょう」

その夜、亜子は彦沢譲二の夢を見た。夢というものが、如何に生々しい肉感的な感情を伴うものであるかは、読者諸君が先刻、すでに経験済みの、はずである。眼がさめてから、も、亜子は夢のあとの興奮で恍惚境をしばらくくさまよい続けた。何という素晴らしい夢だろう。

「あのあと、彼はどんな事をしたのかしら」

眼のさめたことが憾めしかった。彦沢譲二の唇が強い吸盤となって、亜子の全身を舐め

まわったのだった。とにかく、亜子にとって始めて経験する刺激的な場面であった。

——わたしの理想は、女王さまになって男どもを顎の先でこき使うことだわ。

翌日の午後、藤田亜子は、サンドウィッチ公園の入口で、偶然、木宮圭子にばったり出会った。サンドウィッチ公園は、二つの池に挟まれているところから出た別名である。

五月の季節だった。すでに桜は散って、若葉がそよぎ、もう夏はそこに近づいていた。

「圭子、どうかしたの？」

笑顔で会釈しても、木宮圭子はふり向かなかった。亜子は圭子を追って、彼女の肩に手をかけ顔を覗き込んだ。それでも、圭子は強情に黙りこくっている。圭子は亜子の高校時代の学友であった。

「ね、圭子。亜子、圭子に何か失礼なことしたの？ 教えて。あったら謝るから」

肩をゆすぶった。

「ふん」

圭子は鼻さきで嗤ってみせた。

「え？」

「亜子、あなたは悪女よ。何も選りに選って親友のわたしの恋人を奪^とらなくとも、いいじ

やない。失礼なことしてたら、謝る？ しゃあ、しゃあとよくもいえたものだわ。いけ図々しいっらないわ」

「圭子の恋人を奪^とる？ まあ、誰のこと？」

「彦沢譲二」

「あ——」

亜子は想い出した。そうだった。彦沢譲二を紹介したのは、たしかに木宮圭子だ。

「わたしは奪った覚えはない。勝手に彼が近づいただけよ」 亜子は親友のために、釈明したかった。しかし、それを説明したところで何になろう。怪しまれるだけではないか。

「圭子、本当のことというわ。彦沢さんとは、わたし何でもないわよ」

「ウソおっしゃい」

「ううん、ウソじゃないわ。ほんと。一度、御飯をつき合ったくらいよ」

「亜子、あなた、白々しいわ。ちゃんと譲二がわたしに宣言したんですもの。卑怯者！」

圭子の手が、いきなり亜子の頬をうった。アッという間もなかった。圭子の顔は激情で真赤にそまった。

「あんな男、亜子に上げるわ。煮て食おうと焼いて食おうと、勝手になさい」

圭子は泣いていたのだ。手放して嗚咽し、

足を早めて、馳けるように去った。

「圭子、きつとわたしが勝ってみせるわ。見ていらっしゃい」

藤田亜子は、瑞々しい青葉の空気を胸一ぱい深く吸い込んだ。ああ、何ておいしい空気だろう。

亜子は晴れやかな微笑さえうかべて、彼女の職場であるU観光ホテルの方向にゆっくり歩き出した。

第二章

杉目治子の恋人、春海澄人は、海水浴場で藤田亜子を紹介された。治子は亜子と同じ職場の同僚だった。サイケ模様のビキニの水着を着た亜子の群をぬく肢態は、春海を圧倒した。……次の瞬間、春海澄人の視野から、杉目治子の存在がすうっと遠のいたのである。

職場の観光ホテルでも、それに似た小さな事件はしばしば起きた。同伴の恋人らしい女を離れて、亜子に接近したがる青年。妻らしい女を部屋に残し、亜子と話す機会をしつこく狙う中年の男もいた。ホテルの受付にいて次から次へと這入ってくる客、出る客を、てきぱきと捌いてゆく亜子の鮮かな動作には、一種の爽快味さえ感じられた。

午後九時は、亜子の退社時間である。一階の従業員専用のバスで一と浴びし、それから服を着換え、化粧を直して外に出た。

往來の人通りは、さすがにぐっと減っていたが、自動車の数量は相変わらず海のない港を頻繁に馳っていた。

商工会議所の建物の前まで来た時である。その角から人影が現われた。

「亜子さん」

彦沢譲二だった。

「まあ」

「貴女をお待ちしていました」

「何か御用？」

「ほら、その紋切型。いくらお電話しても、いつも忙しいの一点張り。実際、亜さんは冷たいね。たまらないなあ」

「そうお」

たしかに、彦沢は夜目にもわかるほどやつれて見えた。いい気味！ 亜子の悪魔が胸の内で快哉を叫んでいる。

「ね、亜子さん！ お願いだから、貴女の体につけたものを、僕に譲って下さい」

「いやよ」

「代価は、ちゃんと支払いますよ」

「あら」

「幾らでもいい。おっしゃってみて下さい」

「——」

「ね、亜子さん！」

「わたしの何が欲しいの？」

「ブラジャーか靴下」

「フン。ウソおっしゃい。あなたの一番欲しいのは、わたしのパンティでしょう」

「——」

「そうね、でも高いわよ」

「結構です」譲二の眼が、よろこびの色を露骨に示した。

「彦沢さん、あなたお金、ある？」

「はい」

「わたしの穿いているストッキングどう？」

「結構ですとも」

「五千円でお買いなさい」

「五千円？」

「買えるの？ わたしの足の脂汗が、きょう一日、じっくりしみ込んでいるわよ」

彦沢譲二の広い胸が、激しさを加える呼吸で起伏した。

「でも、今日は、だめ。明日の晩、この時間にここで待っていて頂戴。わたしの使っている香水も撒いてあげるから。あなた、地べたに跪ずいて、わたしの脚から脱がすのよ。よ

くって？」

「はい。でも、今ほしいのです」

「ほ、ほ、ほ。興奮しているわ。そんなにわたしが好きなの？」

「大好きです。もう、貴女がよろこぶことなら死んでも構いません」

「そうお」

藤田亜子は、街灯の明りで、彦沢の顔の表情をたしかめるように見つめた。傲慢も快楽の一種である。亜子は男を弄ぶ快感に浸ってみたい欲望にかられた。

「讓二さん、あなた、いつかわたしの使ったお風呂の水なら、飲むといったわね。これから、いつも飲ませてあげましょうか」

「――」

話題が急転直下したのに、しばらく、彦沢は啞然としていたが、その言葉の意味がわかってくると、急にどぎまぎした。

「ほ、本当ですか？」

「ほんとうよ。うれしい？」

「はい！」

「一ト月一円で契約しましょうね。たったの一万円よ。安いでしょ」

彦沢讓二は一介のサラリーマンだ。彼の給料からすれば、一万円は決して安い額ではな

かった。しかしこのチャンスを得がしたら、もうおしまいである。彦沢は必死になって、とびついた。

「わかりました。契約しましょう」

そこで、二人は契約の証として、固く握手を交したのである。

第三章

藤田亜子曰く。

△恋愛はスポーツである▽

藤田亜子、重ねて曰く。

△恋愛は女と男の戦争である▽

藤田亜子の胸には、彼女の美貌を如何に高く売りつけるかの計算が、いつもちゃんと用意されていたのである。スポーツだから、必ず相手に勝たねばならぬ、と主張し、真剣勝負だというのだ。勝ったからは、勝者は敗者を奴隷として従わせる権利がある。恋愛が女と男の戦争である証拠に、失恋した者は、生き死にの苦しみを経験し、恋に勝った者は、王者の栄華をほしいままにすることが出来るのである。

藤田亜子、また曰く。

△わたしは、恋愛のチャンピオンである▽
恋愛勝負はつねに酷しい。血みどろになっ

て闘うプレーである。だから、わたしは絶対に負けないのだ。

男どもを足下に組み敷き、降参するまで策謀をつくし、翻弄するのが亜子の恋愛技術であつた。

「一丁あがり」

その夜、亜子は自宅の二階の彼女の部屋の三面鏡の前で、狂的に胸の辺りを愛撫した。唇を腕の肉につけて強く吸い、ナルシズムに酔うのだ。

彦沢讓二は、S相互銀行を午後七時半に出た。U観光ホテルまで千メートルの距離である。ブラブラ歩いて二十分でホテルの玄関につく。

亜子に教えられたとおり、ホテルの横の芝生から、楨の植込をくぐって裏側に廻った。もう蛙が鳴いていた。樹の若葉を吹いてくる風が、甘く、彦沢讓二の鼻孔をくすぐる。ホテルの裏側は小川に面している。ホテルは、石垣を築き、その上に横幅いっぱい建てられていたが、小川伝いに、手すりのついた板の橋が架かっている。中央辺の一階らしい硝子窓に灯りが点いていたが、それが従業員の浴室に違いないと彼は推定した。しかし物音は

なかった。

「まだ、早いのかな」

明りに透かして腕時計を見た。八時を五分廻った時刻であった。

足場をたしかめたので、譲二はもう一度いま来た路を引返し、ホテルのグリルに入って飲物を注文した。時間を稼ぐつもりだった。

九時少し前、彦沢はグリルを出ると、ホテル裏の小川の橋の上に立って待った。十分ばかり経ったとき人の気配がし軽く咳払いの合図があった。たしかに亜子のそれであった。

バスの栓をぬき、サーッと脱水する音が聞えたが、間もなく、今度は新しい湯水の、硝子窓まで湯気を昇らせて注がれる音がした。

やがて、湯水を注ぐ音がぴたりと止った。

脱衣室の戸をあけ、インデアン・ラブコールを口ずさみながらバスに這入る亜子の鼻歌と湯を使う音が手に取るように聴こえるほど、あたりは静かである。

彦沢譲二は、しだいに高まる鼓動を押え、息を殺して待った。

短い時間が経つ。

譲二の頭のうへの硝子窓が、ガラリと音を発して開いた。浴室の窓からコップを持った亜子の白い手が垂れ下って来た。

譲二は慌ててそれを両掌で受けとめ、憑かれたようにグーッと飲み乾した。

生ま温^{ぬる}い湯は香水の匂いがし、味は塩っぱかった。

二杯目の時、窓の外に亜子の濡れた顔が半分、現われた。その眼が夜目にもしるく笑い低い声でささやくのだ。

「そうガツガツ飲まないで、ゆっくりお飲みなさい。わたしは、それを見定めたいの。わたしの玉の肌を洗った水よ。どう、おいしい？ あなたは、もうわたしの奴隷よ。これからは、わたしの眼の刺激のために、ずうっと奉仕なさい。分かった？」

仰ぎみる彦沢の眼が素直にうなづく。ふ、ふん、と鼻さきでせせら嗤い、バスに帰ったところで、宙に眸を凝らしながらつぶやく。

「あいつ、本当に、ばかな男だわ」

よおし、いつか圭子の眼の前で、わたしの足に接吻するところを見せてやるわ。ああ、愉快だわ。

ふ、ふ、ふ、と藤田亜子は恍惚とした眸を閉じるのである。

第四章

七月に這入ったある日、春海澄人は突如、

降伏の白旗を掲げて、亜子に面会を求めた。

亜子の自宅の二階の彼女の部屋であった。

藤田亜子は、床の絨緞の上に跪^{ひざま}ずいた澄人を見すえていった。

「あなたは、わたしの魅力の前に降参したのね。いいわ、わたしの奴隷にしてあげる。それが当り前ですもの。わたし、うれしいわ」

「僕もうれしいのです」

「治子さんをどうするの。わたしに責任はないわ」

「ごもっともです。治子とは別れます」

「そうなさい。わたしは、どうだっていいのよ。わたしの奴隷が、他の女を愛したからって、わたしとは何の関係もないんですもの。」

——これから、澄人って、呼び捨てにするわよ

「はい。結構です」

「わたしのことを亜子女王さまとあがめて、呼ぶんだよ」

「はい」

「亜子女王さま」

「はい。亜子女王さま」

「澄人、わたしに靴下を穿かせておくれ。うやうやしくするんだよ」

「はい。亜子女王さま」

亜子は三面鏡の座椅子に掛けて、とき色のガウンの前をはだけ、裸の脚を澄人の眼のさきにつき出した。脂の載った真白い脚だ。澄人は眼がくらんだ。亜子の足の指を手を取って熱いキスをした。亜子は、鏡の中の彼女の姿を見た。際立って妖艶である。だが、夢想したこの場面とは、およそ陶酔のしかたが違っていた。どうしたのだろう。澄人は亜子の甲高の足を両掌に受けて、丹念に甲の上をキスし続けていたが、その割にしびれて来ないのは、どうしたわけか。ハハーン……こいつ初めての経験なので、ぎこちないのかしら。それとも、技術が下手糞なのにちがいない。そのくせ、藤田亜子も初めての経験であった。

「奴隷、どうしたら、亜子女王さまを陶醉させることが出来るかを、これからよく研究しておくんだよ。ばっかっ！」

亜子は、澄人の顔を強く蹴った。澄人の体は横転した。が、すぐ体を起こすと勢いよく亜子の足に武者振りついた。

はじめての女王とはじめての奴隷は、お互い孜孜としてその官能に没入して行ったのである。

第五章

チリチリと電話のベルが鳴った。

「はい。U観光ホテルでございます」

「もしもし、藤田亜子さんをお呼び下さい」

「わたくし、藤田でございます」

「あ、亜子さん。僕、譲二です」

「何かご用？」亜子の声は相手を咎める調子にかわった。

「すみません。電話したりして。——圭子が自殺しかけたのです」

「ええっ！」

「ええっ！」

「ええっ！」

「ええっ！」

「それで、いまどこの病院にいるの？」

「庄島内科に入院させました」

「容態は？」

「お蔭様で、命はとりとめた模様です。いま眠っています」

「睡眠薬？」

「睡眠薬？」

「そうです。どうしましょう？」

おろおろした声だ。ばかなやつ。むかつ腹が立ったが亜子はさりげなくいつてのけた。

「眠ってたなら、そおとしときなさい。あとで行くわ。今夜わたしの家にいらっしゃい」

電話はそれで切れた。

自尊心の強い圭子のことだ。自殺もしかねない。だが、何という馬鹿な女だろう。二重の敗北ではないか。いや、圭子は明らかに亜子に挑戦したのである。しかも二度とも、みじめな敗残をさらしたのである。

勝った！

藤田亜子の胸の奥を、沸^{たぎ}るような快感が走って過ぎた。

夕食のとき、亜子は Grill まで出かけ、S 相互銀行の彦沢を呼出し、今晚九時にホテル裏へ出向くように命じた。亜子が、彼女の沐浴^{あふ}した風呂の水を、譲二に恵む日は、月水金と決められていたが、その日は木曜日であったにも拘らず特例呼出しをかけたのだった。

九時五、六分すぎ浴室のガラス窓があき、亜子の厚い大理石の胸が、湯気を立てながら現われた。その桜色の肌はヘソまで見えた。浴槽のふちに立っているのだろう。こんなことは始めてであった。

「譲二、わたしの裸像に最敬礼しなさい。そう。頭を、もっと下まで下げるんだよ。もう一回、もう一回。おい譲二、本当にお前は、わたしが好きか？」

「今さら……はい、好きです」

「よおし。わたしのいうことなら、何でもす

るか？」

「はい」

「本当に本当だな」

「本当に本当です」

「わたしは、その証拠が見たい」

「どうすれば、いいのですか？」

「わたしのなら、おしっこでも飲むか？」

「――」

「どうだ！ 惚れた女のおしっこなら、きつ
とおいしいよ。飲むか？」

「亜子さまが飲めとおっしゃるなら」

「飲むか」

「はい」

「飲め。よおし、ちょっとお待ち」

藤田亜子の姿が消えた。しばらくすると、
さっきの位置に、さっきの姿勢でひよいと立
った。右の手にいつもの小さなコップを持っ
ている。

「さあ、飲め」

譲二はコップを受け取ったが、思わずその
手はふるえた。

「上等のウィスキーをカクテルしといたから
な。ゆっくり賞味するんだよ。もう一度、わ
たしに最敬礼して、それから、お飲み」

譲二は三回、亜子の裸身に最敬礼した。

「グーッとお飲み」

少量を一口ふくむと爽やかなウィスキーの
味覚が口中にひろがった。

「どう？」

「たしかにおいしいですね」

「亜子女王さまのものは、みんな特別製だ。

これは神の酒、効きめあらたかな高貴薬。い
いか。奴隷、全部飲め！」

狙いすました獲物に砲さきを向け、引金を
ひくときのような名状しがたい戦慄が、亜子
の背すじを走った。腹の底から湧き出る快感
である。弾丸は、みごとに命中した。獲物は
その場に仰向けに倒れ、断末魔の痙攣状態を
おこしている。藤田亜子は骨の髄まで彼女の
専有物化した男のあわれな実態を、その眼で
じっくり見届けたいのであった。

亜子の小さな低い声がつづく。

「譲二！ その地べたに坐って、わたしの
尊い裸身を拝むのだ。お前のお蔭で、わたし
は圭子にひどい侮辱を受けた。おい、どうし
てくれるんだい。その罰として、わたしは、
お前を踏み殺すつもりだ。時間をかけて苦し
めながらふみ殺してやる。奴隷、もうよし、
というまでわたしを拝め。拝み終わったら、も
う用はないから、とっととお帰り」

藤田亜子は、そう命ずると浴槽にのびのび
と身を沈めた。しかし彦沢譲二は地面に坐し
女王の許しが下るまで額をすりつけて、見え
ない亜子の裸身を、米つきバツタのようにい
つまでも礼拝しつづけるのである。

わが神酒を飲んだるぞうれし亜子やその
高貴薬を夜ごと賞味べし

一週間後、彦沢譲二のアパートの部屋に、
亜子の作った歌が額ぶちに納まり、壁の真中
に掲げられた。額ぶちの下には、明かに亜子
の筆跡とわかるペン書の八つ切の紙片が押ピ
ンで止めてあった。

一、朝夕この歌を声誦すること。

一、ウィスキーを賞味するときは、賞味する
前に亜子女王の方角に向かって拝跪し「戴
きます」と唱え、賞味が終わったときも、も
う一度拝跪すること。

一、ウィスキーの角瓶の分量は、十日分であ
ること。十日分を賞味終わったときは、亜子
女王に拝謁し、次の十日分の分量をご下賜
願い出ること。但し、ウィスキーの実費は
別納すること。

第六章

今や女性上位時代が到来したといわれる。

しかし実際に上位に君臨する女性は一万人に一人の割合でしかない。というのが作者の意見である。そこで藤田亜子嬢の意見を聞いてみることにした。いや、十万人に一人しかないと言われれば、セックスの場合に象徴されるものでなければならぬ、と主張するのだ。

藤田亜子嬢の情事における女性上位の思想を、さらに詳しく知るためには、問答形式が一番適しているように思われたので、作者は幾つかの質問を提出してみた。

以下は、その問答のうち、特に本篇の内容を肉づけしそうな部分の抜萃である。

作者 亜子嬢はバアジンであるか。

亜子 タイヘン愚問ね。ご想像に委すわ。

作者 あなたは、目下、幾人の奴隷をシヨウウしておられるや。

亜子 サンニン。だいたい奴隷を虐待する愉しみがわかったし、奴隷を扱う術にも慣れたから、多いほどわたしの性生活は艶めいてくると思う。

作者 奴隷を虐待し奉仕させたあとで、可哀想だと思ふことがあるか。

亜子 ない。カケラさえない。とても善いこ

とをしたとおもう。

作者 なぜ。

亜子 失恋者が自殺するのは、恋する人のソバにも寄りつけて貰えないからよ。わたしは奴隷にしてやるの。不幸を転じて幸福と歓喜を恵んでやるの。

作者 なるほど。ところで、亜子嬢は、時に強い男に甘えてみたいと考えることがあるか。

亜子 ゼンゼンない。そんなカチある男が現われるとも思えないし、それはずうっと先のことで未知数としかおもえない。

作者 暴君のダイゴ味について述べよ。

亜子 カンタン。自信と勇氣に徹すること。

あとは奴隷の方で、わたしが神格化して見えるようになる。例えば春海澄人は、わたしの脚線美を見るだけでコーフン状態におちる。その時、わたしの台詞は神の声よ。

残酷な言葉ほど勅果があるの。春海澄人はわたしの奴隷になって、始めて幸福を知ったと告白するくらいだから。やさしくしたら、もうわたしは普通の女で飽かれちゃうの。

作者 あなた自身は、どうなのか。

亜子 タイヘン愚問ね。わたしの全身キスを

奴隷達が狂気のようにせがんでいるから、

彦沢も春海も、わたしの性具となる日も近いわ。亜子の舵の取り方一つでどういう状態にでも出来るというもの。

作者 ところで、あなたの歌の表現はたいへん古色じみてると思うが、如何。

亜子 オジサンはすこし低脳だとおもう。あの歌はムードである。他意はない。

作者 恐れ入りました。いちど春海澄人の献身ぶりを、トクと拝見したいが、特別の許可をお願いしたい。

亜子 ヨロシイ。オジサンも、わたしの奴隷になりたい口でしょ。亜子を書くのだからモデル代を含めて十数万円で契約しましょう。

作者 十数万円は高い。五万円にマケロ。

亜子 ケチ。押入の中にひそんでユックリ見物して頂戴。他人に見せることもコーフンの刺激剤になるわ。

作者 亜子嬢は、あなたのお友達の恋人を片っ端から奪っているように見えるが、これもコーフン剤であるか。

亜子 それもタイヘン愚問ね。セックスの快感は、相手の全部を征服したとき絶頂に達するものよ。快樂の倍加に生贄はいつも必要である。オジサンは、うすばかね。

作者 参りました。

亜子 わたしの靴に接吻してみたら。オジサン！

藤田亜子は母親との二人暮らしであった。F市に経営しているホテルの方に母親の新子は詰めっきりで、めったに自宅へは帰って来ない。従って、亜子の生活は自由奔放だった。

作者は、亜子の退時^{ひげどき}を測って、午後九時四十分頃、彼女を訪ねた。契約金の五万円を差出すと、亜子は無造作にそれを受取り、彼女の居間兼寝室である二階へ案内してくれた。真紅の絨緞の敷きつめられた十帖ほどの部屋である。長椅子をはじめ部屋の調度品すべてが真紅である。亜子の穿いているナイロン・パンティやスリッパまでが真紅であった。違っているのは、窓の綴帳の紫と亜子の着ている白金のガウンだけだ。

「うーん」

作者は思わずうなった。これでは、色彩ムードに弱い男なら、一たまりもないだろう。時間も迫っていたので、作者は早速押入にもぐり込んだ。引戸にスキ間をつくり、部屋の中が覗けるように、亜子は配慮してくれた。十時きっかり、チャイムが鳴った。いよい

よ春海澄人の出現である。澄人はすぐ背広を取ると下着姿になった。カーテンの向うが浴室らしく、澄人の姿は、カーテンの蔭にかくれた。間もなく、シャワーを使う水滴の音がつづいたが、三分もすると音はピタリとやんだ。

亜子は寝台に席を移した。ブラジャーとパンティの肢態を、寝具の上にゆったり横たえ、天井に向かってたばこを吹かしている姿が、黒いレースのカーテンを透して見える。

浴室の境のカーテンの襞を割って、パンツ一枚の春海澄人が現われた。裸の肩にバスタオルをひっ掛けている。

「奴隷、苦しくない。近う寄れ」

「はーっ」

澄人は寝台の前の床に両膝を折って額づいた。

「ばっ！早くマッサージをするんだよ。」

「ボヤボヤしゃがると踏み殺すよ」

「は、はい。では、ごめん」

澄人はバネ仕掛の人形のようにとび上り、寝台の端からよじ登るような格好で、俯伏せになった亜子の upper body にバスタオルを拡げ、首筋、背、ヒップ、太腿、ふくら脛の順で揉み始めた。亜子は、強すぎるというたり、もっ

と強くしろ、うやうやしく揉むのだ、お前は不器用だ、などと絶えず澄人を叱りつけた。若い澄人は、もう興奮してしまったと見え、揉む手を離しかけた。すると亜子がクルリと寝返りをうち、澄人の胸板を強く蹴あげる。弾みをくって、寝台の端にいた澄人の体が、一たまりもなく床へ転げ落ちた。

「おい。亜子さまのおみ足に接吻しろ」

澄人は床に正座し、亜子の足の甲にキスしようとする。亜子は澄人の横面をガンと蹴とばし、

「無礼な。うやうやしく押し頂いて接吻するんだよ。亜子さまのおみ足の指を一本ずつしゃぶるんだ。ゆっくり時間をかけてしゃぶるんだよ」

春海澄人は指の一本を口にふくみ、丹念にしゃぶり出した。チュッ、チュッと音を発してしゃぶる。

「ツバキは全部飲み込むんだよ。どう？おいしいだろう。わたしの足の指だから汚くないし、おいしいんだよ」

藤田亜子は奴隷の奉仕する作業を三十分の間、愉しんだ。その間「たばこ」を命じてたばこに火をつけさせ、それを吸いながら、作業を続けさせる。如何にもうっとり愉し

い表情であった。

「馬になれ！」

亜子の足が澄人のあたまを蹴る。合図だ。四つん這になると亜子は寝台から降り、細紐を口に咥えさせて手綱にし、絨緞の上をぐるぐる走らせる。

六回目に馬はつぶれた。亜子は自ら化粧台の赤い座椅子を作者の視界の真正面に据え、泡をふいている馬のあたまを蹴とばし、

「その座椅子に俯伏になれ」と命令する。

春海澄人は、激しく肩で呼吸をしていた。その首根っこを跨いでどしんと亜子が腰を卸す。オジサン、わたしのこのポーズ、どう？
といわんばかりだ。亜子のお臀の下から、頭の一部と座椅子を抱いた腕とを出し、澄人の苦しい息使いが波立って見えた。片方の手を引っ込めたのは、彼がその手を必要としはじめた証拠である。

藤田亜子はロング・ヘアを肩まで波うたせ上体をしゃきっと伸し、両脚を大きく開いて真面に作者の方へ向き直り、挑戦するようにぐっと見据えた。

第七章

十一月に這入って、ようやく涼しくなりかけた秋日和の一日、作者は藤田亜子を食事に誘った。その日は亜子の公休日であった。鯉料理で食事を摂り、小説の参考資料をいろいろ提供して貰っている最中に、一組の若い男女が、女中に案内されて、庭石づたいに川っぷちの四阿へ渡ってゆく姿が眼に映った。

藤田亜子の表情が一瞬硬ばった。

男は金子鶴亀であった。

藤田亜子はこの男を、たしか振り向きもしなかったはずである。にも拘らず、亜子の眼には激しい嫉妬と憤りの焰がカーッと燃え上ったのだ。

「金子さん、お久し振りね」

金子鶴亀は亜子を見た。彼は血相を変えて当惑したように同伴の女性——婚約者の中枝真知子と顔を見合せたが、必死に平静さを装う苦渋の色はありありと読まれた。そこにはもはや蔽いがたい異常な雰囲気が出されていたのである。真知子は縋るような熱い眼差で金子を睨めていた。彼女は和服のよく似合う、いかにも日本的な容貌のみずみずしいお嬢さんであった。

「——」

金子鶴亀は、黙って亜子に一揖した。

「お会いしたかったわ。本当よ。あなたのご希望を入れてあげたいと考えていたの。ぜひ二人切りで会いたいわ。明後日の夜九時半、わたしの家においでなさい。ね、いいでしょう」

当惑しきっている金子鶴亀の気持を押し測る亜子ではない。いや、爪の尖に押えつけた鼠を弄ぶ猫のようにじわじわと残酷さを加えてゆく。

藤田亜子はミニスカートのご自慢の脚線美の両脚をひらいてみせながら、
「鶴亀さん、さあ、わたしの股倉をくぐりなさい。上にあがって来て、くぐりなさいよ。どうしたの、鶴亀さん！」

「——」

息詰まるような一瞬だった。
あっけに取られている女中の前を、金子鶴亀の婚約者——中枝真知子は、さっと身を翻えし、表門に通ずる石段を駆け登り、庭木の楓の向こうに姿を消し去った。

「ほ、ほ、ほ」

美しい悪魔——藤田亜子の朱唇が、咲き誇った薔薇の花びらのように綻びると、彼女はきらびやかな驕りの笑いを送った。

鼻責めに悶える女



渡辺 暁子

1

あたしはつい先刻まで、自分で自分の鼻を
目茶苦茶にいじめつけていました。こんな変
なことをするようになったのは、もちろん鼻
責めのとりこになっているからですが、この
ことについて少し書きます。

これを「告白」とお思いになっても、「夢
物語」「くだらない創作」とお思いになっ
ても結構です。いずれにせよ、つたないもの
ですが、あたしの胸の中にあるものを書きつ
ねたものに違いありません。

— ○ —

それは二年前六月の下旬のムシ暑い日でし
た。あたしは運わるく? と云いましょうか
幸か不幸かと申しましょうか、その日に限っ
て、見たいテレビの番組の時間に遅れては大
変と、近道を通ったのです。

と申しますのも、近道を通りますと、五分
程早く、家に着くからです。

さみしい道なのでよせばよかったのですが
さっきも書きました通り、テレビが視たいあ
せりと、まさか、あたしが、襲われるなんて
あり得ないことだと、タカをくくっていまし
たので、こわさなどは、これっぽちもありま
せんでした。

それに、余計なことですが、高校の時から
姐御肌で、冒険心が強く、スリルを好む性格
ですので、何とも感じませんでした。

そして、電灯もついてない、細い道にさし
かかった途端、いきなり、足音もせず近寄
って来た何者かに、鼻と口を、ハンカチ様の
もので覆われ、瞬間、異様な臭いがして、く
さいと思い、(何をするの)と云って、必死
に暴れたつもりが、実際には、「ううう」と
呻いて、夢中で、顔を左右にはげしく振りつ
づけ、手足は、こわさにちぢこまって、力な
く、あたりを払うだけだった様で、やがて、
何も分からなくなって(つまり人事不省にな

って)しまいました。

つまり、あたしとしたことが、案外、いとも簡単に伸びてしまったらしく、その相手はあたしをかついで(かなり重かったでしょうに)近くの家(あとで分ったのですが、その人物は、そこから近くの二間ほどの家に一人で住んでいたのです)に運びこんだらしいのです。

あまりの痛さに、やがて気がつく、無抵抗のあたしは、ベッドに手と云わず、足と云わず、乳房までも、麻なわでしばりつけられていたのです。

そばには二十七、八のやせ形のシャツ一枚の、髪の毛を、まるで半年も床屋に行かない様になったく伸ばした男が立っていて、

「はははは。気がついたな」と、笑いました。

あたしは、とっさに弱味を見せてはならないと思ひ、激しい口調で、

「あなたは誰? 一体、誰なの! どうしてこんなひどいことを。あたしをどうしようって云うのさ」

男を、にらみつけて抗議しました。しかし男は、それが、さも楽しいかの様に、

「さあ、どうしようかな」

と、あたしの全身をながめ廻すのです。

「まさか、あんた。あたしを殺そうと云うんじゃないでしょうね」

いつしか、あたしの声はふるえていたようでした。こわかったのです。こんなことされるの、生まれて二十五年間で初めてですし、もし、いきなり刃物でさされても、どうしようも出来ないのですから……。

然し、その次の言葉で、あたしはひと先ず安心しました。

「とんでもない。殺すなんてそんな。そんなもったいないこと」

「じゃ、いったい、あたしをどうしようって云うの」

男は、それには答えずに、

「殺してしまったら、もう、滅多にない、あなたのその持物を、見ることも、もてあそぶことも出来やしない。そんな馬鹿なことを何でするものですか」

そして、気味悪く笑い、眼は熱をおびて来ました。

「もち物?」

「そう、もち物だよ。あなたのもち物は、実にすばらしい」

「もてあそぶって云ったわね」

「その通り」

あたしには、別の不安が襲って来ました。この男は、あたしが、まだ、誰にも上げたことのない、一番大事なものを、あたしをこんな状態にしておいて、奪うのではないだろうか、ということです。

もし、そうだとしたら、なんという不運なのか。あの道を通ったばかりに……。あたしはあわてて、

「それだけは勘忍して。それなら、殺された方がマシだわ」

と泣き声になったのです。するとあの男は人を馬鹿にした様な笑い声を立てて、

「あんたは、誤解してる様だ。私は別に、あなたの一番大事なものをもてあそぼうの、奪おうのなんてことは考えてないよ」

「じゃ、いったい……」

「鼻だよ」

「鼻?」

あたしはびっくりして男の顔を見ました。そんなこと、予想もつかなかったからです。

男は、ごくりとつばを飲み込んで、

「そう。あんたの、そのいかにも形の可愛い、滅多にお目にかかれない様なすばらしい魅力的な鼻を、思う存分自由にしたいのです」

よ。私はね、ずっと以前から、そう、あんたが小学校の六年頃から、ずっと、あんたを忘れた日とてなかった。つまり、その鼻を、思う存分、自由にしたいという強い気持を、祈りの様に持ちつづけて来たんだよ。そして、いつかきつと、その願いも叶えられると、信じて来たんだ。そして、時々、あんたを見る度に、なんて魅力的な鼻なのだろう。一度でもいい。あの鼻を、自分の思う形に変形させさぞ、やわらかいであろう、感触を楽しむことが出来たらと、それを思うと気が狂いそうでしたよ」

男は、ベッドの、あたしのしばらくしている体のわきに坐り、あたしの顔を、というより鼻を、穴のあく程みつめ乍ら語りつづけるのです。

「それにしても、見事な鼻だ」

「あなたは変態よ。気狂いよ」

あたしは、ののしりました。

「そう。変態かもしれない。気狂いかもしれない。私自身、そう思っている。しかし、なんと云われてもいい。私は今から、それを実行するだけなのだから」

そう云うと、男は立ち上りざま、あたしの鼻を、いきなり、つまもうとしました。

あたしは、すばやく顔をそむけました。

「はっはっは。面白い。こうなっても、まだ抵抗なさるとは、気に入りました」

男は、部屋の隅^{すみ}にいくと、背を向けて何かはじめました。あたしは、なんとか手足がほどこけないものかと必死でもがきますが、ビクともしません。そればかりか、なわ目が肌に食い込んで更にいたみが増します。

ああ、もう駄目かも知れない。しかし、この家にはほかに誰もいないのだろうか。大声で助けを求めたら或いは……。

あたしはそう思うと、声をかぎりに叫びました。

「誰か来てーッ」

男は急にあたしが叫んだので、びっくりして振り返りました。しかし、だまって、又、むこうを向いて何かしています。一体、何をしているのでしょうか。

あたしは再び、

「助けてーッ。助けて下さーいッ」

ノドも張り裂けんばかりに、声を上げました。叫んだあと、不思議と不安がいくらか薄らぎました。今に誰かが叫び声を聞いて、助けに来てくれそうな気がしたからです。だが男が何かを持ってそばに来乍ら、

「叫んだって泣いたって、ここは野中の一軒家、誰も来やしない。昼間なら、子供たちが遊びに来るけど、今はまあ、通っても猫か、野良犬位なもの。それに、この家には私一人だしね」

そして、さも楽しそうに笑うのです。

(ああ、もう駄目だわ)

あたしは観念しました。思わずため息が出て、体から力が抜けていくようでした。

2

男は、あたしの鼻孔に何かを押しつけようとしています。見ると、それはヘラでこねた絵具(ピンク色)なのです。

「いや、いや。何するの」

顔を左右に振ってもがくあたしを、今度は許しませんでした。片手であたしの頭を押えつけると、もう片方の手で、とうとう鼻の孔のまわりに、その絵具を塗りたくってしまっただけです。

「なんのまねなの、こんなことして」

「あんたの鼻の形をとるのさ。今までの女の分も皆、保存してある。説明をつけてね。つまり、年月日、名前、プレイした時の状況をね。これから写すあんたの写真と、録音テー

「プもすべて保存するのさ」

「どうやら、こんなことをされる被害者は、あたしだけではない様です。」

「やがて、あたしの鼻の孔のところに、紙が当てられ、きつく押しつけられました。やがてはがされた紙を男はあたしに見せました。『なんて素晴らしい形なのだ。やがて、この形のいい孔が、いろいろに変形するのだ。私の思うままにね』」

男がぬれたタオルで、あたしの鼻の絵具を拭い取りながら、

「ほらほら、こんなにやわらかく、変形するじゃないか。つまんだら、さぞ、すばらしいだろうに」

「何をするの」

「叫んで顔をふりましたが、とうとう男に鼻をつままれてしまいました。今まで誰にもつままれたことなんかない大事な鼻を。自由を奪われた身の悲しさと苦しさとで、あたしは大きく口をあけました。」

「いたい。うう」

鼻をつままれるという初めての経験にあたしは、うめきつづけます。

「そうか。苦しいか」

「うう。く、苦しい」

「眼がひきつれて、可愛く丸い鼻がこんなに高くなったぞ」

あたしの苦しみは、そのまま男の喜びになるらしいのです。

「ほら、あの形のいい孔が、こんなにぺちゃんこになって。これじゃ、息なんか出来ないだろうに。一体どこで空気を吸ってるんだ」

「うう。もう許して」

「どこで息をしてるか」と云うのだ

「ああ、なんという男でしょう。」

「云わない中は、はなさない」

「うう。く、口で、パー。口で息をしてるわ。パー」

苦しげに、あたしは答えました。男はすぐ手を鼻からはなしました。あたしは、ホッと鼻をすすりました。すると、

「ホホウ、その小鼻のへこみ具合が、実にすばらしい。そんなに、あんたの鼻はやわらかいのだ。とにかく、これからが楽しみだぞ」

男は一人でエツに入って、

「どら、ほらね、こんなにやわらかい」

ああ、今度はつまんではなし、はなしてはつまむ。それをくり返すのです。

「もう止めて！ 帰して。もう！」

あたしは大きな声で、どなりました。

「もっと叫べ、もっとわめけ」

男の声は上づっています。

あたしはもう、死んだ様に、男のなすがままにまかせていました。抵抗すれば、男は喜ぶだけです。

さんざん、あたしの鼻をもてあそんだ男はふらふらと立ち上ると、部屋のすみに用意してあったらしいカメラを近づけます。あたしのこの全裸を、しかも、しばられた姿を撮そうというのでしょうか。これは大変なことになる。もし、悪用されたらと思うと恐ろしさが急増しました。

「お願い、写真だけは勘忍して。それだけはやめて」

あたしは、すっかり弱い女になってしまいました。もう男をどなる気力も、暴れる元気もなく、ただ、ひたすらに、この不法な失礼な男に哀願しました。

しかし、男は一笑に付しました。

「とんでもない。のちになって、今日のあんたとの、この記念すべき出来事を、思い出す最もすばらしい記念である写真を、中止するなんて、そんなこと、出来るものか。写真ばかりじゃないよ。も一つの記念として残るものは、このテープさ。僕の責めに対する君の

さまざまな声を録音しとくのさ。これを聞き乍ら、写真を眺める時の楽しさは、とても君には分るまい。ははははは」

「ああ、あんたはなんてハレンチな……」

「何とでも云え。いくらでもものしれ」

男は、すべての準備を整えると、再びあたしのそばにやって来ました。そして、あたしの鼻をまじまじと眺めてから、いきなり、つまみ上げました。

「ああ」

と大きく口を開く、あたし。

「この形で最初とるか。正常形で」

つまり、親指と人さし指で正面からつまみ孔が、カタカナのハの字に密着した形なのです。男は手をはなすと、カメラの自動シャッターをセットして、再びもどって来て、あたしの鼻をつまみます。やがて、ジーツ、カシヤッ。

「さて、お次ぎは」

「許して、もう」

あたしは悲しい声を出しました。しかし、男は、まるで聞えない様子です。

「今度はエキゾチックな形といこうか。あたしの鼻は少しダンゴだから、こう先を思い切りつまんで、ツンとした形にしてみるのも面白いだろう。」

白いだろう。ほら、不思議なもので、鼻の形が変わると、顔の感じまでちがってくるぞ。孔もほら、こんな長くなってる」

もう死んだ様に無抵抗なあたしの鼻を、ゴクリとつばを飲み、眼を血走らせた男は、まるでオモチャの様に扱います。あたしはただどうか早くこんなことが終り、帰してくれることを心で祈り乍ら、つままれていました。

再びカメラをセットした男が早口で、

「眼はさっき閉じてたから、今度はかすかにあけてくれ」

あたしは（女優じゃあるまいし、そんなに都合よく表情が変えられるものか）と腹が立ちましたが、仕方なく云われる通り、かすかに眼をあけました。

「そう。その表情がいい。その切ない眼が、たまらなく、哀れを出している」

ジーツ、ガシヤッ。

「さて、次はと……」

（ああ、もう許してくれないかしら）

あたしは、そういう期待で男を見ました。すると男は、

「ああ、その眼、その眼でいこう。その眼を動かさないで」

そう云ったかと思うと、今度はカメラの位置をぐっと近づけ、あたしの体の向きを変えさせ、脚をくの字に曲げて立てると、いきなり、あたしの乳房の下あたりに、どっかと馬のりになったのです。

あたしはそれまで、さっき云われた通りの眼をしていましたが、馬のりになられてびっくりした途端、その眼をわすれて、

「ああ、何をするの」

と、男をなじりました。

「ああ、駄目だ。さっきの眼を変えちゃ。さあ、あの眼をするんだ」

男は怒った様に云いました。

あたしは仕方なく、さっきの様に、（もう許してくれないかしら）

と、心に期待して男を見ますと、

「そう。その眼だ。その眼。なんとも悲しそうな、それでいて、甘えのある眼。もう絶対うごかすなよ」

そして、あたしの鼻を、小ばなのつけ根の方をつまみ、

「ああ、孔が半分つぶれて、こりゃ面白い。息してごらん」

息をしますと、ヒューヒューと音がして、丁度、風邪をひいて、鼻の通りが悪くなった様な感じでした。

「はははは。こいつは、いい」

立ってカメラをセットし、いそいそもどつて来て、又、同じ様につまみます。

ジーッ、ガシャッ。

「よし、今のはケツ作だ。ね、そう思うだろう」

馬鹿々々しくて、あたしは眼を閉じたまま返事もしませんでした。

「怒ったのかね」

男が聞きます。

（当り前じゃない。こんなことされて、怒らない女がいて？）

あたしは、しかし、さっきみたいに、それを声に出す気力もなくなっていました。

次は何をされるのかという不安と、もう、何をされてもいいわという、捨てバチな気持ちになっていました。

男は薄笑いをうかべてカメラをセットし、いそいそもどつて来て、両脚であたしの頭をはさむと、

「今度はブタの鼻」

といい、鼻の頭を下から上に押し上げるのです。よく、子供がやるでしょう？ ああいう形にしたらしいのです。

「なんて変な形なんだ。面白いね」

ジーッ、ガシャッ。

あたしは、顔の真中のいつもの可愛い形の鼻が、見るも無惨にしわが寄り、つぶされて、ブタみたいに變形させられているのなんか、考えただけでも口惜しく、ただ心の中でひどいわ、ひどいわ、と泣いていました。

男はようやく、あたしの鼻を放すと、

「いたかったろー」

と撫でてくれました。あたしはその時、うそ泣きでもしたら、帰してくれるのではないかと思い、急に泣き出してやりました。

「もう許して。帰らせてよう」

男はちよっぴり、おどろいた様な顔をしましたが、カメラをセットしてもどり、

「だめだよ。今日は帰さないんだから」

そう云って、いきなりあたしをうつ伏せにし、背中にもたがると、片手であたしの髪を引き、

「うッ、いたいッ」

あたしがのけぞる様に仰向きますと、もう片方の手で、またもギョッつまむのです。

思わずひらく口からもれる、うめき。

ジーッ、ガシャッ。

「こいつは、いいのがとれたぞ」

興奮のためか、声がふるえて、ゴクリとつ

ばを飲みます。

そして男は、わたしの喘ぐ口の中に、いきなり何かを押し込め、その上から、さるぐつわをかませると、又、体をひっくり返して、仰向けに横たえるのです。

ああ、もう叫ぶことも出来ない。

わたしは、本当に涙がこぼれそうになりました。

3

自由になるのは眼だけなのです。

「どんな気持か、感想を聞かせてくれ」

笑い乍ら、云うのです。

ああ、この男は、なんというサディストなのでしょう。こんな目に合って、しかも、口もきけない女の感想を求めるなんて。

「う、う、ううう」

あたしがにらみつけると、男は、

「何だか分らないぜ。はっきり云うんだ。云わないと、こうしてやる」

いったかと思うと、急にわたしの鼻孔が潰されていました。さっきまでは口で息が出来ました、今はその口も……。

あたしは苦しくて、目茶苦茶に顔を振りましました。

男もさすがに、長くはつままず、すぐはなし、又つまんでははなし、それをくり返します。そのたびに、

「ああ、やわらかい鼻だ」

とか、

「肉の厚い鼻だな。これ、これ、こんなになったぞ」

とか、まるで、気が狂った様につぶやくのです。あたしは腹が立ちました。人の鼻をつまんでおいて、何というハレンチなことを云うのでしょうか。

そして、その鼻いじめはしばらく続きましたが、ようやくさるぐつわをはずしてくれました。もう、帰してくれるのかという期待が湧きました。が、それは期待外れもいいところで、このあとに、もっとあたしを苦しめることが待っていたのでした。

男は、いきなりあたしに眼かくしをしました。あたしは、不安に身を固くしました。

「これから何をするの」

眼かくしをされたまま、男にききました。

しかし、男は返事はありません。

しばらくの沈黙がありました。かすかな音が時々こえます。やがて、男がすぐ近くに來た気配です。

そして、又あたしの鼻をつまみます。もう鼻をつままれても、最初ほどはいやだという気持はありません。人って、すぐ馴れてしまうのですね。

「いたいッ」

あたしは、あまりの痛さに、とび上りました。何か、針の様なものが、鼻にささったのです。いいえ、男がさしたのです。

「何をするの。ねえ、何なのよ、それ。いたいわ」

しかし、男はつづけます。

「うう、いたい。あ、あ、死にそうよ」

あたしは、はげしく暴れ、そのために、眼かくしが、はずれました。

やはり、それは針でした。

「なんで、こんなことを」

「あんたの鼻は脂溶性。脂らのカタマリがブツブツが、人一倍大きく、鼻一面に、まるでイチゴみたいにある」

「知ってるわ。いつも気にしてるから」

「そうか。それをこれから、この針で採集しよう」と云うのさ」

それを聞いた、あたしの驚き。

「そんなひどいこと、やめて、お願い。穴があくわ、そんなことしたら」

「大丈夫。又、脂肪が分泌されて、すぐ、もと通りになるさ」

「でも、やめて、お願い。いままでの様にただ、つまむだけにして。それなら、いくらやってもいいわ」

「僕はこれがたまらなく好きなのだよ。だから君のような女性をねらって、鼻責めをやるのだ。ことに、あんた位、脂溶性の女も少ないからね。しかし、いつも眺めては生つばを飲みこむばかりだった。しかし、今日はどうだ。こうして、この鼻が、おれの自由になるのだ。どうしようと、おれの勝手なのだ。こんなにすばらしいことってあるか。え？ 考えてもみる。十年以上もこの日を夢みて来たおれにとって、それこそ、我が生涯の最良の日というわけだ」

男は再びあたしに眼かくしすると、鼻に針をつきさします。あまりの痛さに、あたしは男の手にかみついてやろうと思ひ、顔を左右に振りしました。

男は、あわてて、

「こいつ。おとなしくしていればいい気になつて」

それは、こっちで云いたいせりふです。とうとうあたしは、又、男に馬のりになら

れて、頭を片手で押えつけられ、

「おとなしくするんだ」

しかし、あたしは悲しい抵抗をつづけ、相変らず男にかみつこうとあばれましたが、所詮、自由を奪われた身の悲しさ。又、鼻をあげしくつままされると、あきらめるより他はありませんでした。

でも、針をさされる痛さ、鼻をギュッとつままれる苦しさで、思わず知らず、口で息を上げしくしますが、その痛さと云ったら、まるで、死ぬ苦しみです。

（死ぬんだわ。あたしはこんな目に合ったまま、やがて殺されてしまうんだわ）

そう思った途端、痛さと、絶望とで、いつしか、あたしは意識を失っていました。

どの位たったのでしょうか。

気がついてみると、男はプンとするものを（多分、軟膏みたいなものでしょう）一生懸命、あたしの鼻全体に塗ってもんでいます。

眼かくしは、もうとってあります。

「気がついたな」

笑って、のぞきこみます。

「何をしたんです」

「安心しろよ。何もしてやしないから。ただしずかにしてくれただおかげで、十個も脂

肪のかたまりをとることが出来た。ほら」

男は紙の上にならべた脂肪のかたまりを見せて得意そうに笑います。

ひどい男もいるものです。でも、いくらなんでも、もう解放してくれると思い、

「じゃ、もう許してくれるわね」

しかし、男は血走った眼で云いました。

「まだまだ、これからだよ」

男はまだ、何かをしようと云うのです。そして、あたしを重そうに運びます。

あたしは今度こそこの肉体を犯されるのだと思いました。ですから急に涙が出て来て、むせび乍ら、

「ああ、それだけは、どうか許して」

と云いますと、

「又、あなたは誤解しているね。おれの目的は、あんたの体じゃないんだ。あくまでも、その鼻なんだ。鼻責めしか、おれには興味がないんだよ」

男は、あたしが安心した様にうなずくと、

鏡台の前に運んで行き、いきなり鼻をつまみます。

鏡には、手足をしばられて、鼻をつままれた、あたしの姿がうつっています。可哀想なあたし。もうあたしは、魂を奪われた人形み

たいに、男に自由にされているのです。

「この可愛い鼻は、もうおれのものだ。ほら、こんなにやわらかいこの鼻が、おれの思いのままなのだ」

男は、はげしくあたしの鼻をもみます。あたしは自分の哀れな姿を見かねて、眼を閉じました。しかし、男は、

「眼をあける」

と云うのです。仕方なしに、あたしは眼をあけます。口を金魚みたいにパーパーあけて、おとなしく鼻をつままれてるあたし。

屈辱です。プライドが傷つけられて、あたしは口惜しさで一ぱいでした。

「あんたが、今、どんな状態にいるか、鏡を見乍ら説明するのだ。丁度、アナウンサーが状況説明をやるようにだ」

男が命令します。あたしは仕方なしに、鼻声で、

「手足をしばられたあたしは、鼻をつままれてるわ」

男は鼻をつままれたままのあたしを仰向けしました。

「さ、つづけるんだ」

「鼻の孔は、パー、つままれているのでペチャンコになってパー、息が出来ないの。」

だから、あたしは、パー、仕方なしに、口で息をしているの。パー」

あたしは哀れな声で説明して、

「鼻がいたい」

と、訴えました。

「そうか、かわいそうに、かわいそうに」

男は、ぶるぶると体をふるわせると、

「おれは気が狂いそうだ。ついに目的を達したんだ。とうとう、あんたのこの鼻を征服したんだぞ。ざまア見ろ」

男は、本当に気が狂った様に叫びます。

「だから、もういいでしょう。許して」

しかし、男は、もっときつくあたしの鼻をつまみ、もり上った鼻の頭の肉をたいこでも叩く様に、たたきはじめるのです。あたしは急におかしくなつて、ここに連れて来られてからはじめて笑いました。やがて男は、鼻から指をはなすと、鼻孔に息を吹き込みます。

「ああ」

あたしがうめくと、

「そんなに気に入ったかい」

又やります。それをやられると、なぜか今までと違った気分がします。もっと云えば奇奴に快よいのです。

今度は鼻をさらにきつくつまみ、鼻から指

をはなさずに、つまんだり、はなしたりします。なんだか、鼻の奥の水ばなが出て来そうな気持です。

「そんなにするとハナが出るわ」

「奥の方で音がするぞ」

「風邪引いてるのよ。だから、ハナが」

「あんたのハナなら、なめてやる。みんななめてやる」

上ずった声で云います。

「こんなに鼻の頭が赤くなったぞ」

ああ、男はとうとう狂ってしまったのでしようか。

「鼻がはれちゃうじゃない。もう助けて」

あたしは、うわごとの様に云います。

しかし、どういうことでしょう。そう云っているうちに、自分でもおかしいと気が付き始めていた気持がだんだん強く感じられてきたのです。はげしく、鼻をもまれていることがかえって、楽しくさえなつて来たのです。あまりいじめられたので鼻の神経がどうにかなくなつてしまったのかも知れません。それとも、あたしは、こんないじめられ方を喜ぶマゾなのでしょうか。

こうして自由を奪われ、鼻をはげしく、もてあそばれていることが、一種の楽しい遊び

のような気持になっている自分に気付いたのです。

ということは、男とあたしの気持が一つになったということなのでしょうか。

あたしは、もうすっかり男のなすがままに大事な鼻をまかせ、眼を閉じ、しばらくした手足までも、つっぱって、身もだえるのです。

「ああ、ああッ。もう許して……」

あたしは、はしたないと思つても、声を上げるのです。それは、さっきまでの悲鳴ではありません。

男は、あたしの心理的变化が分つたのでしよう。なおも、鼻をもみつづけると、次にはペロペロなめはじめるのです。

まるで、女の子が、シュークリームをなめる様な調子です。それがあたしに奇妙な陶酔感を与え、稲妻の様に、全身を突き抜けました。

「ああ、もうかんにん……して」

男は、あたしの変化に満足気に、
「どうだ、おれの鼻責めは。すばらしいだろう」

と、さらに、あたしの鼻をはげしくもんでつまみます。

「いじわる」

S.C.R.〔性問題相談室〕開設

担当………弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室（Sex Counselling Room 略称 S.C.R.）を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

自分でもおかしい位、あたしは甘えた声を上げます。

「こんな遊びを楽しいとは思わないか？ ええ、ほんとのことをいえよ」

男はあたしの心を見抜いているのでしょうか、じわじわと鼻をつまみながら、かきこったようないい方をします。

「……」

私は答えませんでした。

もしここで答えたら、きっとこの男の喜びそうな返事になっていたに違いありません。

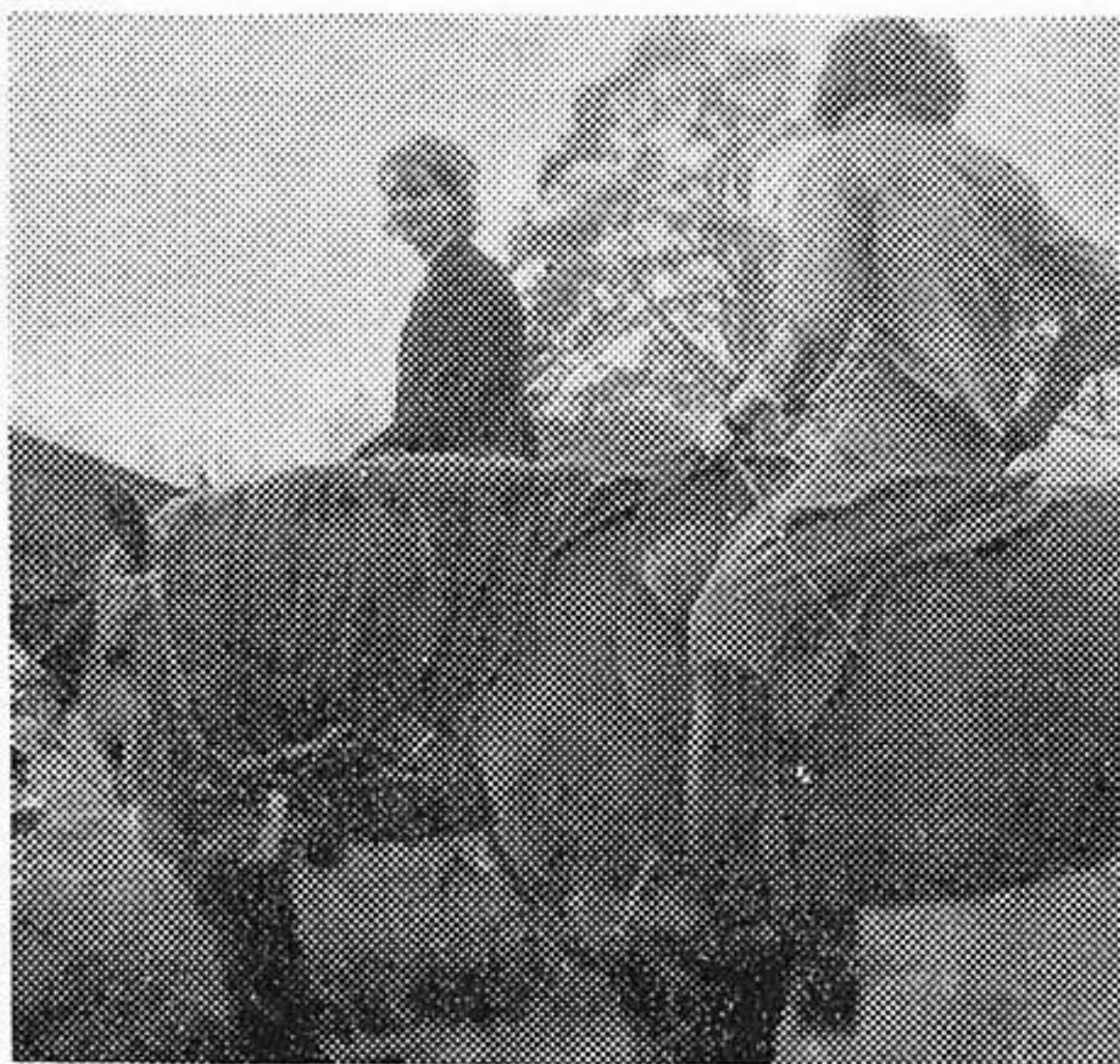
あたしの気持に変化があったとしても、やはり恐しさといやらしさが先に立っていたのは間違いないことでした。

男は、ふらふらと立ち上ると、テープをとめに行った様です。

とうとう、この異常な、そして初めての、あたしの経験は終わった様です。

でもあたしは、あれから以後、あの男のたった奇妙な行動のかずかすが、折にふれて思ひ出されて仕方がないのです。それも、嫌な思ひ出としてではなく、懐かしい思ひ出としてなのです。

（おわり）



アマゾン考察

女性乗馬の

クリテリオン

佐野 壽

本来その興味の対象となる女乗馬者は非常に西欧好みの性格を有する事もあり、見落しではならないことはやはり人種的制約も多々あることであろう。その数的分布から考えれば、全アマゾンの、殆ど半分以上が欧米であり、我国ではその数はぐんと少なくなりますが存在はします。一方ニグロや低開発国や未開地でアマゾンとは殆ど皆無なので、それは対象にはなりません。それは美的観賞の見地からあてはまるかも知れませんが、あまり詳しくは私にもわかりかねます。

女性乗馬に関しては、特に年令的制約は考える必要はさほどない事ですし、そうやかましい基準を設ける事自体おかしい事です、大体常識的に十五、六才から、四十才位迄はすばらしい対象を豊富に見出すでしょうし、私の実際知っている婦人騎兵団の女将校のマルガレータさんは、四十二才でしたがまだまだ相当美しく立派に見えましたので、そうきびしい年令限定はさしひかえる方がいいかも知れません。マルガレータ婦人将校は今も元気に女子騎兵団（フィンランド）の隊員の馬

術の指導をしておられるそうです。従ってその場合は年令よりも各人の個性と外貌に重点がおかれ、クリテリオンの評価がされなくてはなりません。ついですが、カーキ色のミリタリルックで馬術の練習をするアマゾンのグループは非常にさわやかで新鮮に感じられ体格もすんなりとすばらしく、そのクリテリオンは随分高い事は疑う余地がありません。特にグループ練習で、黒光りの長靴の林立を見れば思わず、はっとさせられるでしょう。更に忘れてはならない事はクリテリオンに

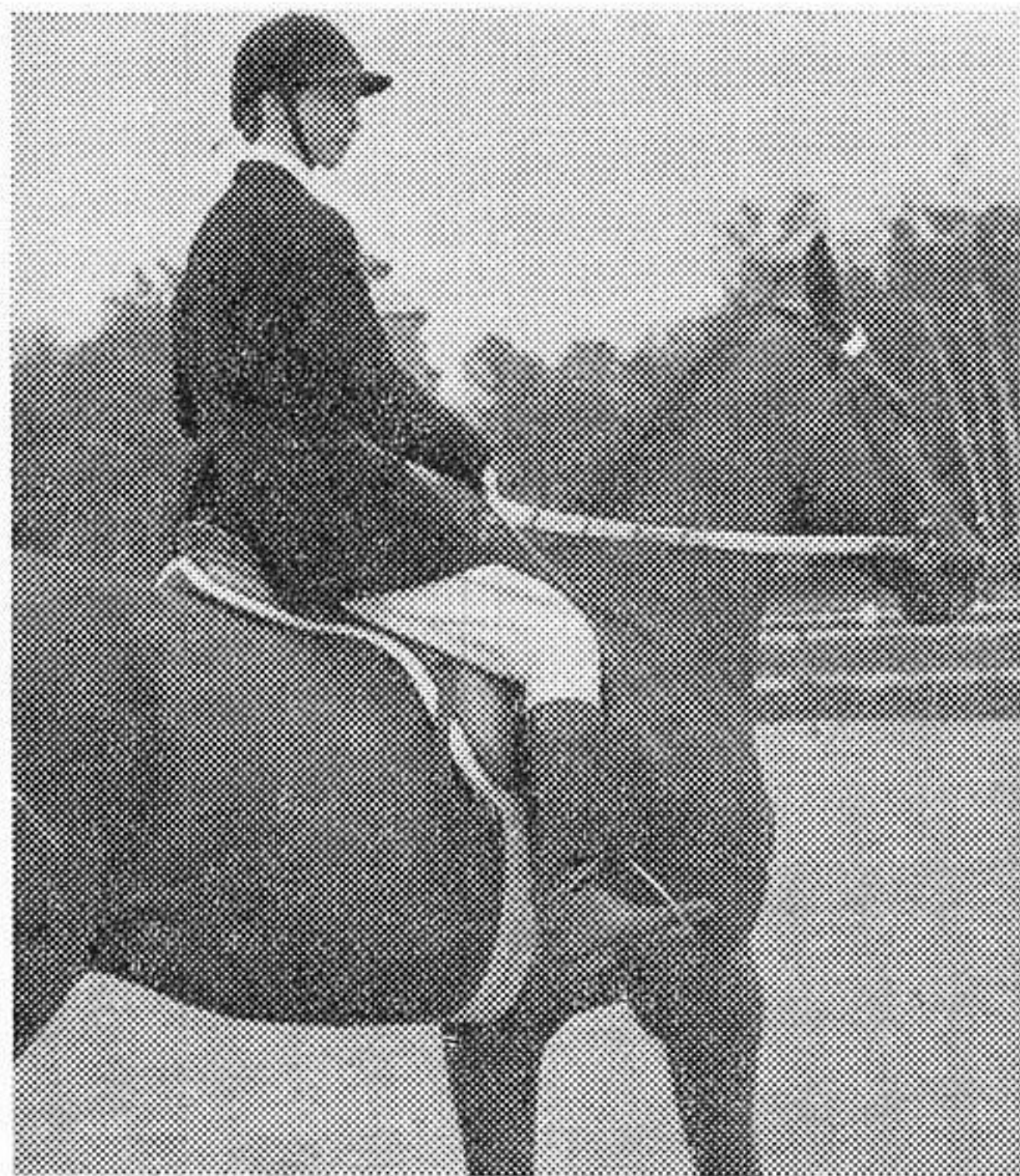
及ぼす女乗馬者の習熟練達度でしょう。同一の年令外貌ならば、当然習熟度が高ければ高い程、その評価水準は比例的に上昇しましょう。その事は障害飛びレースと馬場馬術及び野外馬術のどれについても当てはまります。スタントマン（代役）なしでの女優の映画撮影の際の乗馬の自信度についても、この場合決定的な重要因子になり、単に顔だけいくらきれいでも、こわごととお義理に監督の命令だから、いやいやちょこんと跨ると云うのは、その肝心な魅力や迫真力が大いに減殺されてしまいました。

近頃、我国でもテレビ映画に女優さんの馬術シーンが、時代劇、現代物を問わずしばしば登場するようになったことは喜ばしい限りですが、その際の女主人公の馬術の習熟度の持つ意義は、クリテリオンにとってきわめて重大になることでしょう。何も危険なシーンを彼女等に要求するのではなく、例えば馬術の練習を行うなら、たいがいの女優さんが将来はギャロップ位は出来る様にしてほしいものです。

その点イタリアの時代活劇にたまに見る女性乗馬者群はすばらしいもので手本になるかも知れませんが（ローマの女戦士を好演するア

マゾネス等）又、西部劇でよく見かけるのですが、テンガロンハットに弾帯をかたから下げ、やや長くてきゅうくつそうな厚地のスカートにブーツと云うスタイルはよろしいが、先述の理由で、例えば横乗りのクラシックスタイルでは満足は出来ません。それで女性本来の「跨る」と云う行為による征服感と喜びが表現出来るでしょうか。同様な物足りなさは、フランス、ロシヤの貴族婦人の婦人鞍による乗馬シーンについても当てはまります。

従って仮に優美ではあっても、その方面でのクリテリオンは微弱なものになってしましましょう。やはり女体も左右シンメトリーに出来てるのですから、ちゃんと跨った騎乗の方が自由で自然な事は申す迄ありません。従って、これは個人的希望ですが、落馬とか馬によって引きずりまわされるシーンとか、怪我しやすいシーンのみにスタントマンを使い、実際の馬上での数分間は例外なくその女優さん自身が出演するのではなくては意味がありません。



その点、洋画「アラベスク」でのソフィアローレンの女スパイが、最後の場面でグレゴリーペックの紛する考古学者と共に演ずる乗馬シーンは見事で、その印象が強く残っています。グラマーこの上もないソフィヤが茶色のミニのワンピースにブーツという姿は、有名なフランスのカルダンのデザインとかで、そのセンスの秀でたことが証明されて居ました。特にギャロップ速度が激しくなるにつれこのワンピースがまくれ上り、まし

てや下着がじかに鞍に密着するように跨るという状態に、セクシーなものを馬化願望者は発見して喜ぶことが考えられるのです。しかしこの場合も又、先述の回転木馬にすそをかち上げて太腿を大胆に露出した女性の乗り方同様、マゾヒストの興味と性的感覚を強烈に刺激し、この種のものこそ、ワイセツ感覚の根源となり温床となることに注意しなくてはなりません。

幸い私は個人的に、若い西独の人で、性心理学をホッホシュレーで専攻したマルチン・ボルマン氏の知遇を得ました。彼は35才で妻帯者ですが、ひとつ彼特有の女性乗馬者への鋭い観賞評価のクリテリオンを御紹介しましょう。ボルマン氏のやかましい基準は次の様です。そしてそれを性心理学、学会誌にも出したそうです。

『：私が対象となし得る女性は、背丈、体重、体格容姿について私なりの尺度で、その諸条件を満たす者による正馬装による身分いやしからぬ美しい女性でなくてはならない。であるから、私の性的対象となる者は例えば乗馬服を着用し長靴をはく、いわばフォトモデル嬢のような女は好ましいには違いないが、単にニューモードの乗馬服の中に女性が包まれて

いると云うだけではいけないのである。

しかしその反面、女性らしさの乏しい、性的魅力に欠乏したニュートラルな感じのするオールドミスタイプの、いわゆるサディスチンの乗馬姿や、下品で見るからにいやしい職業の女の乗馬姿（そんなのに限って太もものつけ根迄とどくけばけしい拍車付きの長靴を利用するが、私はそんなのを見ると性的興奮を覚えるどころか、逆に吐気さえもよし拒絶の対象となる）及び本当には

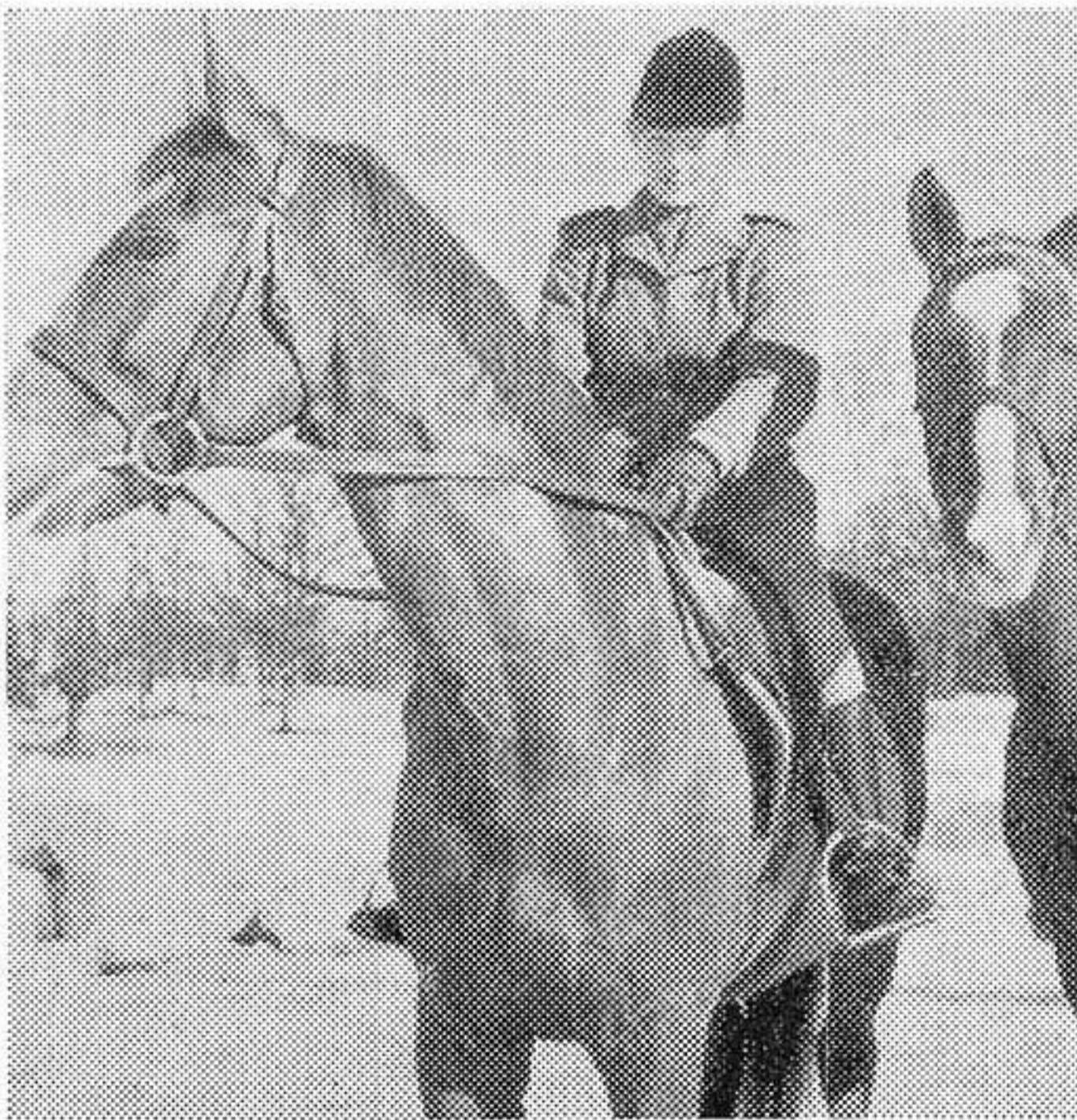
乗馬さえ出来ないのに、気取った見栄や金銭的な理由で、全くセンスのない馬装をする場合。

及び単に人気取りや人にさわがれたい為に、時々新進女優のよく使う手段での乗馬姿等、すべてのこういうカテゴリーのものは私にとって性的な対象とはならないので、容赦なくはずすことにしている。それではどういう女性乗馬者に、最も価値を見出すかと云えば、先述の外貌が優れ、体格のバランスのとれた、真に乗馬の出来る女性が、馬場馬術や高等馬術で着るユニフォ

ームでの乗馬であろう。特に黒一色の、上品で清潔な完全馬装にシルクハットのアマゾン、私には無限の尊敬と価値を見出し得るのである。……』

とボルマン氏は主張しています。（例えばゲルトルード婦人）

又、別の人ですが、パリで女性のモードを研究している長靴フェチシストのモローさんは、去年から今年にかけてパリでの女性靴の





一流店で店員をしています。最近の女性はミニスカート以外にマントとブーツのコンビネーションが大流行との事で、ブーツには青赤、緑、黄、紫と、あらゆる色ものの皮革製のものがあり、しゃれたものには、拍車そのものではないが、それを思わせる金属のアクセサリーがはめてあるそうで、銀座でもたまに見掛けるものです。特にモロー氏の興味の中心は、超長靴と云いますか、膝上つまりもおお長靴の売れ行きと、どのようなタイプの女性がそれを買い求めるかの傾向を調査することだそうです。

又、その靴店の地下階はスポーツ部分で、

そこではあらゆるタイプの本皮や人工皮革製の乗馬靴、それもパリのデザイナーによるセシールの優れたものがずらりとあるそうで、多くのパリ娘や婦人が、自分の脚に合う乗馬靴をそこで注文し、店員にサイズを取らせているすばらしい光景がかなり度々見られるらしいのです。モロー氏も、そこにかつて来た乗馬マニアのパリジェンヌに恋をして結婚したのでした。その店には勿論、あらゆる種類の皮革製の鞭が壁一杯に吊ってあり、答マニヤの心を喜ばせます。モロー氏の調査では、その超長靴はビジネスガールや女学生によってよりも、むしろナイトクラブやバーのマダム

ホステスにしばしば買われるそうで、たまには四十近く的外交官や社長・重役婦人によって求められる事もあるそうです。彼女等は一見必ずしもサジスチン風には見え、女らしいしとやかな容貌の人が多いようですが、自分自身でそれをはくのは間違いないでしょう。けれども、答を一度に三種類以上も買う女の人はどうも何か下品ないやしい商

売をしている人のようです。

けれどもこの様なタイプの女性による馬装は、ボルマン氏ではありませんが、心の狭いマゾヒストやフェチシストの反撥や拒否をかうかも知れませんが、私はそれは各個人の問題で、女のはくセシールにかかると思います。

どんなものでも、上品に使いこなしたり、優雅に価値づけることの出来る女性ならば、マゾヒストに与える影響は、商売の如何にかかわらず絶大なものとなるでしょう。もちろんマゾヒスト自身のセシールも重要な受感の条件に違いはないでしょうが。

さてモロー氏は、お客のそういった好みや傾向を飽く事なく調査した結果、現在の妻のマリアンヌさんに、ぞっこんはれ込んでしまったのです。彼女は以前、カバルカドと云うヌーディストを多く扱った写真入りのフォトモデルをしていましたので、ブーツの選び方やニューモードのさわやかな着こなしと、そのセンスの良さには定評があったのでした。その鞭を手にした乗馬服姿の妖姿には、マゾヒストでありブーツフェチシストのモロー氏の参るのも無理はないといえましょう。

——(以上)——

レズ小説

白

い

玩

具



— ま や 清 原 —

去り行く夏を惜しむように、真弓は午後のひとときを水着姿でテラスに横たえていた。夏の間中、逗子の海岸で焼いた小麦色の肌はオリーブに輝き、さわやかな九月の風が気持ちよく当って通り過ぎてゆく。

「早いものね、もう半年か……」
佐倉真弓が、伯父橋本孝之に養女として引取られて、横浜へ来てから、早や半年が過ぎていた。

祖母の七回忌に突然現われた品の良いロマ

ンスグレーが、伯父だ、と紹介されて真弓は途惑った。二十才に成人するまで、顔どころか存在さえも知らなかったのだ。

「腹違いの兄さんなのよ」

母に耳打ちされて、どうやら納得したのだった。

半月近い在阪中。すべてに涉好みで、深い人間味を持つ孝之の人格にすっかり魅かれ、父のように慕い信頼し、彼もまた、実の娘以上に可愛がってくれた。真弓に父がなく、孝之にも子供が居なかったせいかも知れない。突然、養女として引取りたいと言いだしたのだ。

「女にしては珍しく決断力も強い、経営の才能も充分あるようだ。いずれは事業を任せたいと思うのだが……」

渉る母をなかば強引に説き伏せて、勤務先の新聞社を早々に退職し、真弓は養女として引取られたのだった。

屋敷風の古い建物と、モダンな建物とが奇妙にマッチした坂道を上りつめた小高い丘の上に、孝之の家があった。

病弱な伯母、清子との二人暮らしには、ありあまる広さで、眼下に海を望む、どっしりし

た二階建ての洋館を中心に、深い木立ちに囲まれた広い庭があり、近所の目をさえぎっていて、何よりも静かな事が、真弓は気に入った。

「二階を好きなように改造して使いなさい」

孝之の言葉通り、真弓は、奥まった日本間ひとつを残して二間をぶち抜き、洋式に改造してしまった。

「まあ、男の子の部屋みたいですね……」

女らしい事など、何ひとつ出来ない真弓に代って手際良く荷物の整理をしてくれた、美しい家政婦、八重はそう言って笑った。

ベッドルームと居間をカーテンで支切り、壁からジュータンはもちろん、カーテンや家具、ソファ、クッションに至るまで、渋い茶一色で統一されたその部屋は、事実、女らしい物は何ひとつ置かれていない。

明るい日差しが一日中、差し込む南側の窓を開けると、水の青さと潮の香が心持良く胸にしみ通るようだった。

廊下をへだてた片方の硝子戸を開くと広いテラスに出られ、そこから見下ろす庭園は、モダンではあるが、古都の寺院を思わせる気品と落着きがあった。庭師を入れずに、孝之が造園したのだ。良く手入れされた芝生は、

グリーンのジュータンを敷きつめたように整っていて美しい。

日本調の寂と、洋風の華かさが、すべてに生かされていて、改めて孝之の豊かな人柄に感服する真弓だった。

「あー、たいくつだなー」

仕事といっても、孝之の秘書でいどで、行動派の真弓には何か物たりなく思えるのだ。

この半年間に変わった事と言えば、清子が逗子に静養に行った事と、八重が住込みになった事くらいで、真弓は、歩いても十分とかからない、孝之の会社と家とを往復するだけの、単調な毎日をくり返すだけなのだ。

それが、半年間も続いたのだから、婦人記者として活発に飛び回っていた真弓にとっては、まったく気の狂いそうな、くり返しなのである。

「まあ……」

驚いた声は八重のものだった。

「なあに？」

ものうげな真弓の声だ。

「お仕事申さないとばかり……お紅茶を持ってあげたんですよ……」

「そう、ありがとう、ついでに汗を拭いて」

細く目を開けてサングラス越しに八重を見上げて真弓は言った。

ブルーのタオルケットに横たえた真弓の肢体は、スポーツで鍛えただけあって、見るからに健康そうである。かもしかを思わせる、そう言う言葉がピッタリな感じだ。眩しように目を外らせた八重は途惑ったふうだった。我ままな女主人は、時々、わざと無理な注文をして八重を困らせた。それが、まったく突然なのだから、いつも赤面してまごつくのは八重の方だった。

真弓にすれば、そんな時の八重の表情が思わず見取れてしまうほど、色っぽく美しいからという、簡単な理由だけなのだ。

頭髮は男の子みたいに短かく刈り上げたセシルカット、服装もジーパンにシャツスタイルか、夏はショートパンツ愛用の真弓には、八重のような、解けば腰のあたりまで届きそうな長い髪もなければ、どこか憂いを秘めた和服の良く似合う女らしさもない。

「拭いてっ！」

命令するように再び言って、八重を見つめる真弓の目が、サングラスの下でいたずらっぽく笑っている。

小さく頷いて、ためらいながらタオルに手

を延ばし、拭き始めた八重の指が、真弓の肌の上で、小刻みに震えていた。

「なに震えてんの？」

笑いをこらえて真弓は言った。

「まあ、知りません。意地悪……」

サングラスを外して、下から覗き込む顔へ泣きそうな声で言って小走りにテラスを出て行く八重。その背中へ、楽しそうな真弓の含み笑いが追いかけた。

後姿が可憐で、二十六才とは思えない八重の純真さに、次第に心を魅かれていくのを、真弓自身、気付いてはいなかった。なぜなら人の事には決して干渉しない主義の自分の性質を、真弓は良く知っていたからだった。

子供の頃から一日として欠かした事のない真弓の日記帳に、八重の行動が細やかに書かれているのに真弓自身驚きながらも

《単調な生活のくり返しだから……》

と理由付けて、あっさりとかたづけてしまっていた。

その八重も、毎月一回、京都の茶会へ行くために四日から一週間近い休暇を取り、帰ってからも、二、三日は旅の疲れが激しいらしく、ひどくけだるそうに見える、という事しか書かれていないのだ。

《何て、単純な人種ばかりがこの家に集ったのだろう》

そう思わずにいられない真弓だった。

もう一度読み返してみながら、その時、真

弓は、はっと胸を打たれた。

日記帳の上段に、会社の行事を書くコーナーがあり、そこには、孝之の行動が手に取るように細やかに書き込まれていた。そして、八重が休暇を取る前後に、孝之もまた必ず外泊しているのだ。

《まさか、とは思うが……》

何度も調べ直してみたが、やはりそれは事実だった。妖しい胸さわぎを覚え、真弓はその日からさりげなく、しかし敏感に八重と孝之の行動を監視し始めたのだった。

真夜中にも、八重が手洗いに起きるかすかな物音にさえ目が覚めるほど、真弓の神経は鋭く研ぎ澄まされていった。

そんな日が、あきるほど長く続いたが、根気よく注意をおこたらない真弓だった。一度心に決めた事は納得するまで決して捨てないように、真弓は死んだ祖母から教えられていたし、彼女も、そうしないと何かすっきりしないものが後に残って不愉快なのだ。

ある夜半過ぎ、廊下を忍びやかに歩く女の足音に真弓は目覚めた。それは、いつもと違って一歩一歩踏みしめるように階段を下りてゆく。

《手洗いなら、二階にもある》

そう思った時、真弓は猫ねこのような敏捷さでベッドを下り、ガウンに手を通していた。

二月もなかば過ぎ寒い夜である。しかし、そのせいばかりではなく、ガウンの紐を結ぶ指が小刻みに震えた。

静かに部屋を出て階段を下りる耳に、ドアの閉まるかすかな音が聞こえた。どうやら、八重は孝之の部屋へ入ったようだった。

十分、二十分。真弓は待つ。

しかし、出て来る気配さえなく、時々おし殺したような熱っぽい喘いきぎが聞こえる。

せかされたようにドアへ近づこうとして真弓は思わず声をあげそうになり、さっ、と身を引いた。一糸まとわぬ八重が、太いロープに縛られて出て来たのだ。

着物の上からでは想像もつかない豊かな乳房の上下にロープは深く沈み、くびれて喘いでいる。驚いた事には、もう一本のロープは細く引き締った腰から、形の良い足の間をくぐって後へ回され縛られていた。

そのロープを引くようにして現われた孝之が、ポンと八重の背を突く。

「うっ！」

小さく呻き、ヨロヨロと歩く肢体が妖しく悶え、伏せるようにして居間へ入る。

静かに、ベランダへ通じる硝子戸が開かれ閉じた時、真弓もまた小走りに、その後へ入っていた。薄いレースのカーテンを覗くと、明るい月に照らし出された庭園を通り、やがて深い木立ちの奥へ消えた。

「昔、防空壕でしたのよ」

真弓が始めてここへ来た時、案内してくれた八重が教えた古い蔵のような建物へ、吸い込まれるように二人は消えたのだ。

寒さに震えながら、小走りに芝を踏む真弓の脳裡に、スクリーンなどで見た拷問シーンが次々に現われ、広がってゆく。いつの頃からか、そんなシーンに興味を覚え、食い入るように見ていた自分を、真弓は思い出した。ドクドクと熱い血の流れが激しく真弓の体内で燃え上り、夢中で開き戸を引いていた。小さく軋み、重く厚い、それは開いた。

裸電球の薄明かりの中には、不気味に浮かびあがった使い古しの家具があり、二人の姿

はない。

さほど広くないそこを何度も調べるうちに壁にドアが仕込まれているのを発見した。それは、うっかりすると見落としてしまうほど壁と同じ色でうまく出来ていた。

軽く押すと、音もなく開き、薄暗い急な階段が深く、下りると半間ほどの土間へ出る。驚いた事には、三方に木で作られたドアがあるのだ。つまり、真弓が下りた階段以外がドアになっているのだった。しばらく考えて、突当りのドアへ押入ってみた。

「あっ！」

声もなく真弓は叫んでしまった。

小さな部屋の右側は、二メートル四方もある大きな茶色がかった一枚硝子で仕切られ、真昼のように明かるいその中に、両手首を太いロープで別々に縛られ、左右に開いて天井へ吊られた八重が、くっきりと宙に浮いていたのだ。床から三〇センチ程離れて片足があり、もう片方は足首をロープで縛られて、左へ90度に関き止められている。

長くそうされているのか、白い肌は汗を浮かべて、小刻みに痙攣していた。豊かに波うつ乳房に、紫色のはん点が無数に印され、その上に一筋糸を引いて露が流れ落ちた。

「ムムッ……ムッ……」

苦しそうに呻き、俯向いていた顔が上った時、真弓はやはり声もなく叫んでしまった。美しいその顔は、赤い唇を割って食い込む鎖に歪んでいたのだ。

物言えぬ瞳が哀願するように真弓に向けられた。しかし、不思議な事に、真弓の存在に気づいたようすはなく、酔ったような輝きを放ち、潤んでいた。

長い髪が解けて背に散り、ただひとつ自由を許された右足が、眉を寄せてのけぞるたびに妖しく躍る。肉の盛り上った肩と、細く白く延びた腕が、ぶるぶると震え、なめらかな腹が激しく喘ぎ、全身で苦痛に鳴咽している感じだった。

と、その時、一つの影が、女体を真弓の目からさえぎって立つ。後姿は孝之だった。その手に、自動車の埃をはらう羽毛の束が握られていた。

苦痛にのけぞり、閉じていた瞳が気配に開き、それを見つめて哀願するように左右に首を振る。赤子がイヤイヤをしているように、甘えているみたいに真弓には見えたのが、不思議な気がした。

その顔が、力を込めて、さっとのけぞり、

しぼり出すような呻きの中にさらに激しく首を振る。突き出すように盛り上った乳房の上に、羽毛が這っているのだ。やがて、それが腋の下や首筋を走り乳房へ戻るくり返しを始めた時、その呻きは悲しいすすり泣きに変わった。

口の鎖が齒に音をたて、自由な足が空を切って躍り、開いているもう一方が小刻みに疼攣してそり返る。脂汗が波うつ肌をしたたり鼻にかかった泣き声はさらに高くなった。

やがて、孝之の手が自由な足首をガツチリとつかみ、腋の下へ巻き込むようにして体を右へずらせた。大きく開く結果になった内股を羽毛は上下に走り、女体は激しく波うち大ききのけぞる、長いきり返しだった。

汗に濡れた羽毛を床へ投げ捨て、孝之はガウンのポケットから筆を取り出し、ためらいもなく柔肌へ近よせる。

「あっ！」

真弓が小さく叫んで目を閉じると、咽を笛のように鋭く鳴らして、八重の動きが一瞬止まったのと、ほとんど同時だった。激しい息づかい、苦しげな呻き、切なげなすすり泣き、ロープの軋む鈍い音……

真弓は胸に抱いた手で耳を覆い、倒れるよ

うに床へ坐り込んでしまった。それでも、それらは覆ったすき間から入り、まるで天国と地獄から同時にひびく叫び声を真弓に連想させた。自分がその責めにかけられたような錯覚に息苦しく喘ぎ、熱く身悶えてしまった。

どのくらいの時が、流れただろう。とても長いようであり、あっけないほど短いその間に、咽を笛のように鳴らして泣いていた声はいつか弱い喘ぎに変わっていた。

恐る恐る目を開いてみると……。脂汗を滝のようにしたたらせ、ぐったりと伸びた八重は両足を揃えて縛られ、床から出ている丸い鉄の輪に引いて止められていた。その為吊られて伏せた唇から、露が流れ落ち、乳房の谷間へ汗と溶けて流れた。

宙をさまよう瞳は焦点を定めず夢路をたどる少女のように美しく輝いていた。汗と涙にびっしり濡れたその表情に苦痛の色を見い出せず。不思議だと思ふ反面、真弓にはどの八重の顔よりも美しく見えた。

事実、赤い唇を割る黒い鎖のコントラストまでが今の八重にはピッタリのアクセサリーになっているのだ。

パシッ！

床へ跳ねる鋭い音に身震いしたのは真弓か

八重か……

孝之の手に握られた長い皮の笞が床の上へパシッパシッと躍るたびに真弓は身震いしていた。いや、それ以上に吊られた八重は、白い肌を震わせて、音と共にのけぞって身悶えまるで打たれたような苦しい悲鳴をあげていた。

「白状するのかね？」

始めて聞く孝之の声は意外なほど落着いていた。

「八重がこんなむごい拷問を受けるほどの悪事をはたらいたのだろうか、物静かな八重が……。信じられない！」

そう思いつつ、見つめる真弓だった。

「くくっ……くくっ……」

忍び笑いをしているような、悲しげな無言の訴えをしているような……

そんな声とともに、八重が首を左右に振った時、笞は濡れた肌へ冴えた音をたてて弾け飛んだ。黒光りする笞が背から前へ回り乳房の丸みを潰して孝之の手へ引き寄せられた。

「ぐえーっ！」

鋭い悲鳴が鎖のすき間を突いて出た。それは真弓に、野鳥がけたたましく鳴く風景を、瞬間だが連想させた。

閉じた目が打たれた激痛に眉を寄せて白く引き吊り、縛られた手首のロープを力を込めて握り締めた。いや、八重にすれば、吊られてしびれ切った指にロープを握る力はすでになかった。しかし、真弓には、激痛に思わず開く指が握ったように見えたのだ。

パシッ
パシッ

さらに激しい音をたて、一定の時を置いて正確に答を振り下ろす孝之。

時には軽く、時には強く、それは脂汗を飛び散らせて、小気味良い音をひびかせ白い肌を躍り、答跡を刻み込んでいった。

やがて、それが波うつ乳房を潰すように、たくみに振り下ろされた時、狂ったように悶え泣き叫ぶ八重の乳房は、赤い筋を何本も走らせた。そして、全身にそれが刻み込まれた時、八重は、鋭く咽を鳴らしてガックリと力を抜いてしまった。

失神したのだった。

しかし、孝之は八重の意識のない、濡れた肌へ、さらに強い試し打ちを加えたのだ。何度目かに、まるで、水を吸い上げて生き返る花のように、眉を震わせ、小さな呻き声の中に、薄く目を開き、再び激痛に鋭い悲鳴をあ

げて八重は目覚めた。

そして答は、ようやく止まった。

床へくずれるように下ろされ、解放された八重は、うつろな瞳で孝之を見つめていた。手首は血に染まり、紫色に腫れ上って指が吊られる女体の苛酷さを物語っていた。

頬にくっきりと鎖の痕が刻まれているのが真弓の目にも痛々しく映った。唇を震わせて激痛に泣きじゃくる八重は床の上へ何度も起き上ろうとしている。

やがて、苦痛に呻きながら、くると伏せて這うようにして真弓に近づいてきた。その時になって、今まで逃げ出さなかった自分の愚かさ気付いた真弓だった。

「しかし、もう遅い、どうしよう」

釘づけにでもなったように体が動かないのだ。小さな硝子箱には身を隠す場所もなく、八重を見る目がこわ張るのが真弓自身にも、はつきりとわかる。

力の入った全身に、冷たい汗が浮かんできたが、不思議な事に、やはり八重は気づいたようすもなく、喘ぎながら身を起して、妖しく悶えるのだった。

答痕を呻きながら指で追い……

じつと真弓を見る目が潤んでいる。

「まるで鏡でも見ているような……。鏡？　そうか、この硝子は一方が鏡になっている特殊な物かも知れない」

真弓は、友人にそんな鏡硝子が警察などで犯人の面通しに使用されている事を教えられたのを思い出した。

「鏡の方に居る人には、絶対にこっちは見えないのよ」

と言っていたのを思い出したのだ。

「と、すると、哀願するように私を見た八重は……自分の姿を見ていた事になる。しかも酔ったような輝きを放って……。そうか、八重はマゾヒストなんだ！」

安心するとともに、真弓は美しい八重のそんな秘密を知った今、何か裏切られたような気がして無性に腹がたった。

「あー、許して……」

鎖の束を持って近づく孝之に、八重は喘ぐように言った。

「白状するの？」

あきらめたように目を閉じて鎖に縛られてゆく八重。その姿さえ、真弓には、肌に沈む冷たい感触に酔っているようにさえ見えた。

しかし、鎖に自由を奪われ、孝之の拷問にすさまじい悲鳴をあげてのけぞり、床の上をころげ回ってのたうつ八重を見ていると息苦しくなり、耐えかねて真弓は蔵を出た。鋭い悲鳴と苦痛の呻きが後を追う……。

外は夜明けを告げて明かるく、新鮮な潮の香と、夜露を含んだ芝の冷たさが、グリーンのおざやかさが、真弓を落着かせた。

空腹に目覚めると、もう昼過ぎだった。台所へ下り、サンドイッチを作って頬張りながら、真弓は今朝の孝之を思い出した。

疲れた体をベッドへ横たえ目を閉じてみたが、八重の悲鳴と苦痛ののたうちが真弓を寝かさない。たてつづけに、二、三本の煙草を吸ってみたが、やはり眠れなかった。苦しい寝返りを何度もするうちに、すぐに八時半になっていた。

もう一本煙草をくわえて下りて行きながら真弓は冷静に孝之を観察してやれと思った。八時半には必ず孝之が居間へ来るのだ。

孝之の後姿がソファに沈み静かに新聞を広げていた。それは、いつもと何の変わりもない光景だった。

「やあ、今朝はバカに早いんだね」

その声の落着きに、むしろ迷惑したのは真弓だった。澄んだ瞳を見ていると悪夢の一夜が信じられなくなる程、その清らかさに驚いた。

「八重は京都の茶会へ行くと言って昨夜出かけたよ。僕はせっかくの日曜だというのに、仕事さ。東京へ行かなきゃいけないんだ。真弓は、逗子へでも行ってくると良いよ」
やはり落着いた孝之の声音だった。

そんな孝之を送り出し、倒れるようにベッドへ身を投げ出していた真弓。
襲われる睡魔に勝てなかったのだ。

《八重は今どこに居るんだろう》
二階の部屋には居なかった。以前、通いの時に使っていた階下の部屋を覗いてみたが、やはり居ない。

《とすると、まだ地下室に……》

口いっぱいに頬張ったサンドイッチをミルクで流し込み、真弓は再び地下室へ下りた。今度はためらわず右のドアを押す。それは音もなく開き、一步足を踏み入れて真弓は啞然と立ちすくんでしまった。

そこは意外に広く、五坪ほどあって地獄さ

ながらの拷問部屋だった。

真弓の居た硝子箱の表はやはり、鏡で覗き込むようにしても中は見えなかった。天井の太い柱には、鎖や滑車が何本も垂れ下り、壁には答やロープ、鎖などが輪になってかけてあった。

《よくこんなに揃えたものだ》

どこをどう責めるのか、真弓にはわからないが、珍しい形をしたのが、硝子ケースに並んで納まっていた。

しかし八重の姿はそこにはない。

真弓は、妖しい胸さわぎを覚え、誘われるように左側の部屋へ入ってみた。

《居た！》

右と同じくらいの広さの部屋の片角に、赤い薄物をまとった八重が後手に手首だけを縛られて寝ていた。それは牢格子の中だった。長い髪を下の方で束ねてあるのは荒縄だ。

格子の入口には錠が下りていて、刑罰を待っている女囚のように見えた。

そして、真弓が居た硝子箱の表は、やはり鏡になっていた。

《何のために造られたのだろう。八重はいつから孝之とこんな関係になったのだろう。家政婦として勤めて二年近くになるはずだ。そ

の頃からだろうか？ 孝之が無理強いしたのか？ 八重から誘ったのだろうか？」

次々と広がる疑惑に何の解答も真弓にはなかった。当然といえばそれまでだが、不思議でならなかった。なにもかも、信じられない突然の出来事だったので、不思議でならない真弓だった。

とりわけ、硝子の部屋が何のためのものか真弓が居ただけに知りたいと思うのだった。

土間へ出て階段を上ろうとする真弓の耳に重い開き戸の軋む音が聞こえた。急いで硝子箱へ入り、ジーパンの膝を両手で囲むようにして床へ坐り込み、じっと耳を澄ますと、それは、右の部屋へ入り、しばらくして左へ入った。

左側が、真昼のように明るくなり、格子の錠を外して八重を引き出す孝之は着物姿になっていた。

真弓の逗子行きが地下室であるように、孝之の東京も地下室だった。そして、京都の茶会へ行って不在なはずの八重も囚われて地下室に居るのだ。

床に横たえた八重の目が薄く開き、甘えたように孝之を見上げていた。と、突然、スリ

ッパから出た孝之の素足が、八重の衿元へ差込まれ大きく開いて、豊かな乳房を剥き出した。

「あーっ！」

睫を震わせて閉じ、小さく身をよじって逃げようとする八重の乳房を、孝之の足が踏み潰して孤を描く。眉を寄せて大きくのけぞり声にならない悲鳴をあげて妖しくくねる八重の頬に血がのぼった。

孝之の足は、次第に爪を深く埋もれさせて体重をかけ、弧を描く。

「あーっ！ ゆ、許してっ！」

耐えかねた叫びを大きくあげて、苦痛を訴えて八重はうつろな瞳を部屋中に走らせた。

「駄目だね、夜中に主人の部屋へ入るような女は許せない、何を盗もうとしたんだ！ 言わないと、もう一度拷問にかけるよ」

素早く足を動かしながら孝之は楽しそうに言った。

「そ、そんな、あっ、いやっ！」

裾を乱し、太股もあらわに、床の上をくねる女体の喘ぎは早く、高くなった。しかし、そんな二人の会話が何かのゲームに熱中しているように、真弓には聞こえた。

「まあ良い、朝までたっぷり時間はあるさ。」

その体に聞くまでだ、手加減はしないよ。いいんだね」

決めつけるように言う孝之の声は、やはり楽しそうだった。

額に玉の汗を浮かべ、のけぞって苦痛に歪む八重の顔が、小さく頷いたように見えたのは、真弓の気のせいだったろうか。

手首のロープを解かれた八重は剥ぎ取るように着物を奪われ、全裸で孝之の拷問を受けたのだった。

それから一週間ほどして帰宅した真弓を八重が出向かえた。

「あら帰ってたの。お茶会どうだった？」

さりげなく声をかけてはみたものの、真弓は心が妖しく乱れた。

「いつもと同じですわ……」

答えた八重の声が、途惑ったように聞こえたのは気のせいだったろうか……。

入浴を済ませて居間へ入ると八重が紅茶を入れていた。いつものコースなのである。風呂好きの真弓は、仕事から帰ると、まず体を暖めて、熱い紅茶にブランディを落として飲む。

それを知ってから八重は、真弓が帰宅する六時頃には必ず風呂を焚いて待っていた。三〇分近い長湯にも慣れたもので、出る頃には紅茶とブランドイを用意しているのだった。

「ビールが飲みたい！」

驚いた顔が真弓に向けられ、笑顔で台所へ立って行く。

「飲まない？」

二本目のビールをコップへ注ぐ横顔へ聞く真弓。

「いいえ、戴けませんの……」

「お風呂も戴けませんの？」

八重の口調を真似て、真弓はおどけてみせる。飲み干したビールが口を軽くするのだ。

「まあ、くくっ……」

肩を縮めて吹き出し八重は小さく言った。

「いいえ、戴きますわ」

真弓と話していると、なぜか楽しくなる近頃の八重だった。

《私には無い自由奔放な明朗さに魅かれるのかも知れない》

そう思いつつ、風呂場へ行こうとする八重の背中へ、真弓の声が追いかけた。

「焚いてあげる、冷めたから……」

いつも男みたいなぶっきらぼうな言葉使いの真弓だが、意外なほどナイーブな面を持っている事を、八重は一年近く共に生活しただけで見抜いていた。

「すみません」

再び小さく言って八重は浴室へ消えた。

メラメラ、

パチパチ

音をたてて、薪は燃え始めた。その炎の中に、のたうち、苦悶する八重の裸身が浮かんで消えた。浴室の小窓に髪を解いている八重の妖しい動きまでが、あの日の八重の姿に見える真弓だった。

天井から逆さ吊りにされ、弓で打たれても首を横に振り、唇を噛みしめて白状しようとしなかった八重。

あぐらに組まされた足首を縛られ、開いた柔肌へ薬を塗られても、尺取虫のように全身を波うたせ、苦悶に目を引き吊らせ、泣きながらも、首を横に振った八重。

そして、硝子ケースに見た珍しい道具が柔肌深く次々と埋もれて、恥辱の涙にむせび、切ない悲鳴をあげてのたうちくねりながらもやはり首を振り続けた八重。

そして、どんな責めにも、決して白状しな

い女体は両手首を天井へ揃えて縛られ、吊られた足元へ運ばれた三角の鋭い山を持つ木馬を見た時、ピッタリと足を閉じてのけぞり、

「あー、ゆ、許して……」

震える声で哀願した八重。

「白状するのか？」
のけぞった顔が、薄く目を開き、もう一度鋭い山を見下ろして、再びのけぞり、力なく足を開くのがあった。

八重は静かに天井から下ろされた。

薄く開いた瞳が、やがて襲いくる激痛を思っ
て救いを求めるように天井を走らせた。

10センチ、5センチ、3センチ、

「うーっ！」

呻きとともに激しく波うち、さらにロープが下りて、縛られた手首が八重の目の高さになって止められた時、激痛をロープにさえ逃がれる事も不可能になった女体は、力を込めて痙攣し、鋭い悲鳴をあげていた。

そり返る足首を、別々に鉄の枷が捕え、横に取付けてあったひっかけに、孝之は丸い鉄の錘を下げた。

「ぎゃーっ！」

えぐられるような激痛にけたたましい叫び声をあげてのけぞり、馬上の肌が激しくうね

り錘が増えるたびに脂汗が波うつ肌をしたたり、手首のロープに齒を立てて咬み、獣けもののよな悲鳴をあげて白く引き吊った瞳から涙が糸を引いて流れていった。

妖しく激しくのたうつたびに、鉄の錘も不気味なほど静かに揺れ動く。

「どうだ、少しはこたえたか？」

のけぞる顔へ囁くように言う孝之を白く引き吊った瞳が力なく見つめ、区切るように、しかし鋭く叫んで、八重は言った。

「お、ろ、してっ！」

「白状すると言えば、下ろしてやる」

あきらめたように目を閉じ、激痛に身を任せ、再び八重は言った。

「あー、す、好きなようにしてっ！」

さらに、鉄の錘が加えられ、そのたびに内股を血が流れ、狂ったようなのたうちと悲鳴を流し続けて、八重は失神の安らぎを与えられた。

木馬の上でのけぞり、両手を吊られてぐったりと延びた女体は、

罰を受けた女囚のごとく……

罪の許しを乞う聖女の姿にも似て……

やはり美しい、と真弓は思った。

あの日、あの時、あの八重のすべてが、まざまざと炎の中によみがえる。

誘われたように、真弓は薪を一本取り、小窓へ斜めに食い込ませた。

それは、つかい棒の役をして、中からは開けられないのだ。

風呂場へ回り、音のしないように開けて真弓は入り、浴室の入口へも、棒をかませた。

これで、八重は浴室へとじ込められたのだ。

再び、かまどへ回り、孝之が健康保持のために取り付けた蒸し風呂用のかまどへも真弓は焚きつけた。ふたつのかまどから炎は大きく燃え上った。やがて、浴室の桧の天井と壁から、熱い湯気が吹き出すだろう……。

かすかな喘ぎは次第に高まり、小窓をたたいて真弓の名を呼ぶ……。

「あーっ！ 助けて、熱いっ！」

入口の戸をガタガタさせていた八重は、再び小窓の硝子に妖しくくねり、必死に真弓の名を呼び続けた。

じーんと、全身を貫く快感に身震いして、真弓は狂ったように薪を入れた。耐えていた言葉が、八重の悲鳴に急かされて、突いて出た。

「苦しむがいい。もっと苦しむのよ。お前はそういう女なんだ。知っている、見たんだ。」

地下室のお前を見たんだ！」

その声は叫びにも似て鋭く、わっと声をあげて泣きくずれ、湯気に巻かれて見えなくなった。

「み、水を。あーお水……」

苦しそうに喘ぎ、すすり泣き、弱く訴える声は聞き取れないほど小さくなった。

むっ！ と呻いて、思わず顔をそむけたくなるほどの熱気が浴室の戸を開く真弓を襲った。

入口近く、八重は俯向けに倒れていた。

しばらくして湯気が引き、裸の背に乱れた髪が濡れて震え、真弓を見上げた八重は泣いていた。

滝のようにしたたる汗が、波うつ全身に流れ桜色に染まって美しく……。

《いたずらな春雨に泣く桜の花のような……》

ふと、そんな光景を連想する真弓だった。しかし、まだ消えぬ傷痕をくっきり浮かべて痛々しく見えた。

《だから、美しく見えるのかも知れない》
そう思える八重の裸身だった。

月に一度の孝之による拷問ごっこは三カ月ぶりに行なわれた。

清子の病気が回復したのだった。

孝之は真弓に一カ月の関西旅行だと言って出かけ、八重は

「許して……」

と真弓に囁いてから

「年に一度、自然の中で拷問にかけられるのよ」

と教えて家を出た。

一週間が過ぎ、十日たっても八重は帰らなかった。もう二度と逢えないような不安と淋しさに気が狂いそうになるほどの八重恋しさを真弓は知った。

「なぜ孝之に従うのだろう」

この三カ月、逗子へ行きっきりの孝之の不在を幸いに、あの風呂場事件から八重を縛る事の魅力に取り憑かれ、夢中になって責めるだけで、そんな疑問を聞かなかった自分に始めて気付いた真弓だった。

あの日、風呂場に伏せた八重の裸身を見ているうちに気づいた時、真弓は八重の腰紐で起き上る事さえできない八重の手首を、背中

へ捻じて組ませ、厳しく縛っていたのだ。

「あー、いやいや、許してっ！」

弱く悶えて抵抗する女体を縛るのは、赤子の手を捻るようなものだった。

後から抱くように起こし、横坐りになった八重の乳房の上下に、真弓は三本の腰紐を結び合わせて巻きつけていった。いつか孝之がしたように……。

縛る手が、乳房に触れるたびに、八重は小さく叫んで俯向き、羞らった。

ぐいっと締めてゆくと、呻いてのけぞり、胸を突き出すようにしてそり返った八重。

「立つのよ！」

命令するように真弓は言った。

「ゆ、許して、立てないの……」

喘ぐように八重は言った。赤い腰紐が肌に美しく沈み、その丸みに誘われたように、真弓の指が延びて爪を立てた。

「あっ！」

のけぞり、肩をくねらせて胸を引く八重。しかし、真弓は指を離さず、紫色のはん点を刻んでいった。

「あー、かんにん」

「立つのね！」

喘ぎながら頷き、不自由な体をくねらせて

立上った濡れた肌を、真弓はバスタオルで拭いてやった。小さく叫び、身をよじって羞らながらもされるままになっている八重だった。

居間へ入る二人をストーブの炎が暖かく迎えた。それが、激しい渴きをよびもどしたのか、八重はジュータンの上に横たえた裸身を震わせて哀願した。

「み、水を、飲ませて……」

紅茶の冷えたのをその口へ持って行くと、くねらせて身を起こし、吸込もうとした時、真弓はさっと引いて自分の口へ流し込んだ。《女というものは、よほど意地悪く出来ているものだ》

不意にとった自分の行動に対して、後になって、そう理由づけてみた真弓だった。

「あー、飲ませて……」

涙が頬を伝って光り、必死に見上げる八重に、真弓は飲ませる事にした。自分が飲み残したグラスのビールをである。

膝を立て、胸へ抱くようにした八重の顔を押し当て飲ませようとする真弓。しかし、八重はのけぞって必死に逃げた。まるっきりアルコールが駄目なのだ。

そんな八重に口移しでビールを飲ませようと考えた自分の心が、今もって納得のいかないう真弓だった。

口に含み、顎を軽く押えて喘ぐ唇へ近づけて行くと、気付いた八重は小さく叫んで目を閉じ、かすかにのけぞって逃げた。顎に置いた指が、首筋を這い静かに撫でた。

「あー……」

消え入りそうに叫ぶ開いた唇へ、ビールは静かに、流れて入った。むせながら、しかし八重は飲んだ。

《瓶に残っているのも、やはり口移しに飲ませたんだわ。だって八重がまた逃げたんだもの》

恥かしさのせいか、アルコールのためか、目元を早くも染めた桜色の顔は、熱い喘ぎに震えて、とても美しかった。

《だから、私は小さく開いた唇を閉じるように軽く口づけしてやった》

まったく勝手な理由ばかり付けている今の自分が不思議でならない真弓だった。

「意地悪ですのね、あなたって……」

笑いを浮かべて見下ろしている真弓の視線に逢うと、頬を染めた八重は隠れるように真弓の胸へ顔を押しつけてきた。

《八重の熱い吐息に燃えたような、あの時の妖しいときめきは何だったんだろう。そうだあの時から私は八重のとりこになった》

八重と離れた、わずか半月間に、これほどの恋しさを覚える自分の心を、真弓はやはりそう理由付けていた。

半月が過ぎた、ある日曜日。なつかしい八重の香りを胸いっぱい吸い込んで真弓は目覚めた。

「八重っ！」

思わず叫んで飛び起きるすぐそばに、驚くほど美しい八重の顔があった。

昼寝のつもりが、もう六時を三〇分も過ぎ部屋の中は差込む夕日に照らされて、オレンジ色に染まっていた。

場所は言わなかったが八重は人里離れた山奥で孝之の苛酷な拷問に五日間も責められたと言い、真弓の求めるままに背を向けて着物を脱ぎ、肌を見せた。思わず顔をそむけたくなるほどむごい傷痕が、美しい白い肌に刻み込まれていた。

三カ月間、真弓に任かされた八重の肌は傷一つ付いていなかった。決して美しい肌を傷つけるような事はしなかったのだ。なぜなら

真弓は恥辱に染まって泣きじゃくる八重の聲が、妖しくのたうつ八重の踊りが美しく好きだったから……。

それだけに、責められる八重にすれば、気の狂いそうな耐えがたい屈辱の連続だった。「失神するほどの激痛を加えられ、傷が残っても、まだ耐えようはありますわ」

甘えたように、八重は真弓にそう言った。それほど苦しい恥辱責めに、最初は抵抗していた八重も次第に従うようになった。

我ままな真弓は階下で用事をしている八重を呼びつけて待ちかまえ、入ってくる後から飛びかかって手首を縛り、ベッドへ押倒す。帯を解き、腰紐を抜き、一枚一枚着物を剥いでゆく。

衿が左右に開かれるたびに小さく叫んで目を閉じ恥辱に震える八重は、手首を解かれて着物が束になって剥ぎ取られた時、乳房を両手に抱き、体を縮めて切なそうに真弓を見上げる。その瞳が、その美しさが真弓を残酷にするのを、八重自身、気付いていなかった。

荒々しくベッドへ押倒し、馬乗りになった真弓は、胸に抱いている手首を別々に縛り、ベッドの柱へ回し引いてゆく。

「あー、いやいや……」

消え入りそうな悲鳴をあげて、開いてゆく腕に力を入れて引寄せる八重も、やがてピンと張って止められた時、剥き出しになった豊かな乳房を早くも喘がせ汗を浮かべていた。隠すように足を曲げているのを、やはり別々に足首を縛り、柱へ回して引いてゆくと、四方へピンと大の字になった八重は、閉じた睫毛を震わせて、恥辱のポーズに耐えていた。そんな女体へ、真弓は羽毛や筆を場所に応じて這わせていった。

声を出すまいと唇を噛みしめて、ただ呻くだけの八重も、次第に耐えかねてのけぞり、やがて激しい喘ぎの中に、切ないすすり泣きを流して不自由な体を妖しくよじり、めったに許しを乞わない八重が、狂ったようにのうち、泣き叫んで痙攣し哀願する事も少なくなかった。

そんな時の八重のすべてが美しく、真弓を満足させるのだった。

真夜中でも、真弓は八重の部屋へ忍び込み朝方まで寝かさず責めたてるようになったのは、一カ月も過ぎた頃だった。

その頃になると、八重も起こされると、羞じらいながらも着物を脱ぎ、手を後へ回して縛られるのを待つ程、真弓の思うままになら

されていた。

八重の部屋には、当然のようにロープや答が置かれるようになり、小さな箱には、羽毛筆、洋服ブラシ、物差し、そろばん等が日毎に増えていった。

恥辱責めを好む真弓は、各電気メーカーのマッサージ器を買集め、流れが伝わり易いように改造して女体の反応を試すのだった。

女を責める時、やはり女は弱点を知っているのか、真弓は八重の敏感な部分へすべてセロテープで止め一度に電流を入れる。

息もできないショックの連続に目を白く引き吊らせ、言葉にならない声をあげて妖しく苦悶に躍る女体は、やがて白い肌を赤く染めて脂汗をしたたらせ、息もたえだえに哀願しピクピク痙攣して失神する事さえあった。

そんな八重の喘ぎ、呻き、すすり泣きを、子守唄に聞いて真弓は眠るのが好きだった。「あなたは残酷ですわ。許してくれないんですもの……」

その責めのあと、八重はよくそう言った。なぜなら、真弓は失神しても許さず、流れの中に目覚めるのを根気良く待つのだ。震えながら息を吹き返す八重の豊かに変化する表情や、意識のない悶えが思わず見とれてしま

うほど美しいからだだった。

決して傷をつけない真弓も、その責めの後だけは解放した八重に答打ちを加えた。

力いっぱい打ちさえすると、女の力とは言えみみず腫れが走る事さえあった。それでも、電流にしばれ切った肌にはかえって心持良いのか、自由にされても逃げようとはせず、ジュータンの上に横たえてのけぞり悲鳴をあげてのたうち脂汗を流れるに任せて答が止まるまで、八重は許しを乞う事もなかった。打つ方も打たれる方も、汗びっしょりに濡れて冴えた小気味良い音に酔っていくのだった。

そんな八重のすべてを、三カ月間の出来事を驚くほど鮮明に記憶している自分自身に真弓は途惑いつつも、孝之と同じ事をしている罪の重さ、深さをさほど気にもしていないようだった。八重という白い魔性に取り憑かれた頭の中には、そんな事を考える一部の余裕さえ見出し出す事は不可能だった。

「山道へ坐らされ、重い岩を太股へ乗せられて揺すられた時は、骨が砕けるのではないかと思いましたわ。そしたら、立上る事さえできない私を高い木に吊って、答で打つんですの！ もう死ぬ程苦しくて……。でも体中に蜜

を塗られて木を抱くような形で縛られ、虫に責められる気の狂いそうな苦しさにくらべれば、耐えられましたのよ」

白い魔性、八重の声音さえ、真弓には美しい唄声のように聞こえるのだった。

背を向けて身づくろいを始めた八重の後へ立った真弓の手が、荒々しく着物を剥ぎ取った。

「いや、まだ痛い、待って！ あー」

小さく訴えて、乳房を抱いて逃げるのをテラスへ引き出し、ロッキングチェーンへ坐らせ手足を開かせて縛りつけた。

大切な宝物を孝之に奪われたような、好きな玩具を取りあげられた子供のようなそんな不安と淋しさにさいなまれ続けた半月間の苦しみが、今、激しい怒りとなって八重の肉体へ爆発したのだ。

口いっぱい下着を噛ませ、その後から、太い鎖を巻いて、ロッキングチェーンの後へ止め、身動きできない肌へ、真弓はローソクの青白い炎を近づけた。

「うっ！」

乳房を襲う炎にも、逃げられない女体はロッキングチェーンと共に前後に揺れた。

炎は舐めるように肌を走り、蟬涙が溶ける

と、真弓は乳房といわず、太股といわず流すのだった。脂汗がしたたり、焼かれる苦しさに歪み、噛み殺された呻きを流して、涙がとめどなく頬を伝った。

「ぐっ！」

波うち、濡れた乳房の丸みへ、短くなったローソクの炎が突き刺すように深く埋もれて消された。

チェーンを軋ませて不自由な体がぐねって揺れ、小刻みに痙攣し、やがてぐったりと力を抜いてすすり泣く八重は、縛めを解かれても、すぐに立上れないようだった。鎖を解かれた時、口いっぱいの苦しい下着を吐き出し耐えかねた悲鳴をあげて八重はテラスへ泣きくずれた。

「あーっ！ いや、いやっ」

子供のように身悶えて泣きじゃくる肩が震え濡れた肌が月光に照らされて美しく輝く。女体の汗に濡れたロッキングチェーンに坐った真弓は、足元で妖しく躍る女体を見下ろして放さない。

痛いほど視線を背中へ感じたのか、呻きながら立上り、両手で乳房を抱いて部屋へ逃げて入る八重を、やはり真弓は放さなかった。身づくろいをする後姿が動き、時々見せる横

顔が乱れ髪も美しく、視線があうと照れたように笑ってそらせた。そんな仕草のひとつひとつが可愛くて、抱き締めたい衝動にかられる真弓だった。

《私が男だったら、あの美しい八重を骨が砕けるほど強く抱き締めていただろう》

八重もそれを望んでいたくらいだから……真弓の責めに妖しく苦悶し、すすり泣きの中に耐えかねて「抱いてっ！」と、切なく訴える声を何度も聞いた事があった。しかし、真弓はかすかな理性でそれだけは耐えてきた。その糸が次第に麻痺し切れなかった糸で保たれている事を真弓は気づいていなかった。

「八重、おいで……」

帯を結ぼうとした八重に、真弓はテラスから声をかけた。囁くような甘い声音だった。小さくうなずいて出て来る八重に、真弓はクッションを足元へ置き、目顔で坐るように命じた。小さく再びうなずいて八重は素直に従い、ジューパンの膝へ頬を乗せ目を静かに閉じた。それは、母の膝へ甘える子供のように見えた。

「お前は不思議な女だね……」

「なぜですか？」

しみじみ言う真弓へ甘えた瞳が問い返す。

「縛られるたびに美しくなるみたいだ」

とっぴょうしもない事を突然言う真弓の性格には慣れたつもりの八重も、思わず頬を染めて目を外らせてしまった。

見下ろす形になった真弓の目に、帯を締めない衿が開き乳房の谷間を覗かせ、真弓の手が延びて、さっと差込まれた。

「あっ！」

小さく叫び、睫を震わせて閉じるのを、真弓は片手で引寄せ、細い肩をジーパンの膝へ挟み込んでしまった。月光を眩^{まぶ}しそうに外らせる横顔へ低く囁く真弓。

「熱いよ、八重……」

ローソクの炎に焼かれた肌は、まだ熱く喘いでいた。

「あなたが……いじめるから……」

すねて切なく訴え、身悶える八重。

「柔らかいよ……」

からかうように言って、指に力を入れてゆくと八重は苦痛に呻いてのけぞった。しかし真弓の膝へ捕えられて逃げる事さえできず眉を寄せて、震える指を口に噛み、耐えているのだった。

「あーっ！」

「痛いのか？」

いつの頃からか、苦痛に歪む顔へ質問するようになった真弓だった。

潤んだ瞳が薄く見上げ、左右に首を振る。差込まれた両手に、衿は肩から落ちて剥き出しになった乳房は、潰されて白く張った肉が指の間へ盛り上っていた。

「痛くない？」

柔肌へ爪を立てながら真弓はさらに訊く。

「うっ！ うーっ……」

激しく身悶えて肩をくねらせ、大きくのけぞった八重は呻き、しかし首を振った。

「これでは、どう？」

立てた爪を深く食い込ませ、波のように押し寄せる激痛と必死に戦っていた八重に真弓は訊いたのだ。

「あーっ！ 痛いっ、許してっ！」

鋭く叫び、震える腕が真弓の指の上から乳房を抱き、激しく喘ぎのけぞった。

その顔に玉の汗が浮かぶ。

「あー、かんにん」

「駄目よ、また縛られたいの？」

いつも八重を責める時の真弓の声は、囁くような甘いひびきがあった。

「縛って、あー、縛って……」

小さく頷き消え入りそうな声で言う八重。

「いやっ、そのまま耐えなさい！」

苦悶し「縛って」とうわごとのようになり返す八重を、酔ったように真弓は見つめ、指に力を入れたり抜いたりして、変化する豊かな表情を月光の中に求めるのだった。

しかし、激痛に呻き泣きながらも八重は自由な手で真弓の指を取ろうともせず、口に噛み、空に延ばして握り締める、むなしいくり返しをして耐えるのだった。

乱れた裾から覗く素足のうねりが月光の中に影をつけ、妖しいまでに美しかった。

女体の汗に濡れた指に煙草を持ち、深く吸い込みながら、ジュータンに悶えてむせび泣く八重の乱れた美しさに真弓は酔っていた。

テラスから部屋へ入ってから、真弓の足が体重を乗せて乳房を踏み潰したのだ。

まだ醒めやらぬ激痛にうずくのか、両手に乳房を抱いて伏せる八重の、剥き出しになった肩から背中の半分まで衿がすべっていた。裾が乱れ太股が妖しく覗き、乱れ髪が頬にかかる横顔は熱い喘ぎに濡れて……。自分の手にこれほど美しい反応を示す八重を真弓は満足して眺めていた。

やがて、喘ぎしゃくりあげながら八重が袴を直すと、真弓の指がすつと延びて元通りに下げる。裾を直すと、ベッドへ腰掛けたジーパンの長い足が延びて、着物を軽く蹴り、太股を剥き出す。

「あー、かんにん……」

恥かしさに震えて切なく見上げ哀願し、再び伏せて肌を隠そうとすると、

「駄目、顔を上げて胸を出すのよ。そう……」

もう少し左の足を後へ引いてごらん」

唄うように低く命令する真弓。

「あー、その声がいけないの」

心に叫んで八重は真弓を見た。

「あー、その瞳が駄目なのよ」

澄んだ美しい真弓の瞳が注がれ、甘く命令されると、まるで催眠術にでもかかったように、どんな恥かしいポーズでも体から従ってゆく八重だった。

「あの瞳が、あの声が私を狂わせた」

いつか心まで真弓に囚われていた事に、八重は気づいていた。いつの頃からか、はつきりは覚えていないが、真弓は耐えがたい恥辱責めに目のくらむような快感を覚え、全身を貫く恍惚の深みへ誘われてゆく、自分を意識した。

それは、過去において数え切れない程の人間に、好むと好まざるにかかわらず肌を任かした八重にとって、誰にも感じた事のないものだった。孝之にさえ教えられなかった悦楽の世界なのだった。

それを八重は「愛」と名付けてみた。

罪の意識は、まったくなかった。

「もういいよ……」

優しい声に、はっと我に返り、乱れを直す八重の頬に紅が散る。

何本目かの煙草を美味そうに吸いながら、真弓の美しい輝きが注がれていたのだ。

「八重にも吸わせて……」

その瞳に誘われたように八重は言ってしまった。何度も口にしようとして言えなかった言葉だった。火のついた吸いさしの煙草を口へ持って来られると、すねたように首を振り俯向いて言った。

「あなたの煙がほしいんです……」

聞き取れぬほど小さな声音に、真弓の脳裡は素早く回転し、始めて八重を縛った時に口移しにビールを飲ませた感触がよみがえる。プツリと、かすかな理性の糸は切れた。

美しい月光が、八重の誘いが、真弓のすべ

てを完全に麻痺させてしまったのを、真弓自身もう振り返る力さえ残っていなかった。煙を含み、顎へ手をかけて仰向かせ静かに真弓は唇を重ねていった。柔らかく、熱く濡れた感触を味わいながら小刻みに震えている唇をそっと開かせ、煙を入れてゆく。

むせて、激しく咳込み、床へ伏せて喘ぐ八重。その背中を撫でながら、真弓は低く笑いきりの煙草を深く吸い込んで灰皿へ捨てた。

白い衿足へ吹きかけて出すと、うぶ毛が揺れてくすぐったそうに首を締め、潤んだ瞳が見返してくる。そんな頬を両手へ挟み、引寄せて唇を重ねてゆく真弓だった。

「あー」

小さく開いた唇から、熱い吐息が流れ、それもすぐに吸い取られるようにふさがれた。小刻みに肩を震わせ、任せ切ったそれを強く吸い舌を走らせるとためらいながら開く。真弓の口に含まれた舌が、やはりためらいながら震えているようだった。

まるで、始めて口づけされた娘のように、息苦しくなるほど長い口づけに切なく喘ぐ頃真弓は静かに離れた。陶酔したように目を閉じて、まだ開いている濡れた唇を軽く指で弾くと、小さく叫んで袂の蔭へ隠れる八重。

「見ては……いや……」

泣き出しそうに八重は言った。

「始めて？」

乱れ髪を指でかきあげ、桜貝のような耳へかけてやりながら真弓は甘く囁いた。

「こんな八重にも、いつか真面目に愛せる人が現われると思ったの……」

意外ではあったが、そのいじらしさが真弓の胸を熱くした。床へ抱くように寝かせ、激しく唇を重ねて行くのだった。下唇を軽く噛み、舌を走らせ、やがて強く吸い込む……。恥らい悶えながらも八重は必死に応え、真弓の首へ回した腕に痛い程力を入れて来る。

「あー、縛って……」

全身を震わせて叫びながら、喜びを覚える、縛られたくなる女の性が悲しかった。

されるままに全裸になり、真弓が差出す赤い腰紐へ、両手を揃えて出し、責めを待って妖しくさわぐ女心が悲しかった。

縛られ、責められないと女の喜びを感じないように調教された、自分のすべてが、悲しくてならない八重だった。

両手首を縛った腰紐をベッドの柱へ延ばして止めた真弓は、まるで気が狂ったように肌へ唇を這わせ、激情の押寄せるままに齒を立

てて噛むのだ。

「あっ！ あーあっ」

齒形が刻まれるたびに激痛にのたうち、その後押し寄せる陶酔に泣き声さえも、切なく八重は燃えていった。

「あー、消してっ！」

スタンドの光に照らし出される恥ずかしさに思わず叫び、身震いした八重に、真弓は見るに耐えない恥辱を柔肌へ加えた。あまりの激しさに八重は何度も失神しそうになった。すると、答が飛んでよみがえされ、息の止まりそうな恥辱の嵐にのたうち、

「あー、灯を、灯を消して……」

失神も許されず、耐えようのない長いくり返しに体中の血が毛穴から吹き出すような苦しさにさいなまれ、息もたえだえに訴え続ける八重は、かつて味わった事のない激情に流され続け、やがて波うつ肌に脂汗がしたたり縛めは解かれていたが、身動きするのさえ、けだるい甘い疲労に八重は陶酔していた。

何度も起き上ろうとするのだが、骨抜きにでもなったように力が入らず、かすかに身悶えるだけだった。

「お願い、灯を消して……」

ようやく体を伏せて訴える八重の声は、切

ない喘ぎに震えていた。

「八重、おいで……」

スタンドを消して、月明かりの中に妖しくくねる女体を、真弓は優しく誘う。

ジュータンに伏せていた顔が喘ぎの中に真弓へ向き直り、切なく哀願するのだった。

「もう許して、……死んじゃう……」

「バカ、何もしやしないったら。おいで!!」笑いながら優しく招くと、小さく頷いて身を起こし、赤い長衣に軽く紐を締めて、けだるそうに身を運ぶ。

その美しさに見とれながら真弓はその心に住むものを、やはり「愛」と名付けてみた。

悶えに乱れた髪を背に流し、くずれるようにベッドへ腰掛けて、まだ冷めぬ激情に熱く燃えている胸を両手に抱いて俯向いた八重の長い睫が震えていた。

「あーっ、許してくれないの」

後から抱き締めて耳を軽く噛む真弓へ、八重は甘えたように体を預けて言った。

真弓はそのまま静かに八重をベッドへ寝かせ、震えて体を締めようとするのへ唇を重ねた。呻き、かすかに身悶えて固くなった八重は、真弓の口づけに次第に全身の力を抜いて

切なく喘ぐのだった。

「ごめんね……」

しばらくして離し、甘えたように見上げる瞳へ真弓は素直に詫げる。あまりにもひど過ぎたと思ったのだ。

「いいんですの、八重は嬉しい……」

「あんなにいじめたのに？」

おうむ返しに聞いてみた。聞かなくとも、痛いほど八重の心を知っている真弓なのに……

「好きなの……」

小さく、しかしきっぱりと八重は言っ

「あなたが……」

と、つぶやくように口の中で消す。

たまらなくそんな八重が、いと嬉しい。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

頭を腕で支えて優しく笑って見下ろす真弓を必死に見返す瞳に涙がもり上った。

「可愛いよ、八重」

指先で唇を軽く撫でながら、真弓は耳元へ低く囁いた。震えて閉じた睫の下にあふれた露が光り、目尻へ流れていった。それを吸い取るように真弓の唇が這い、喘ぐそれに押しつけた。

さらに 強く……

さらに 激しく……

そして 長く……

「好き、あなたが好き……」

離すと呻くように口走り、切なく身悶えてすがりついてくる八重だった。

狂おしくその告白を吸い取る真弓だった。

それが返事なのだ。無言の返事なのだ。

冷たい髪が指にからみついて、いつまでも離れたくない、いつまでも離れたくない、二人だった。

唇を重ねながらいつか腰紐が解かれ、真弓の指が、柔肌をまさぐる。

「うっ!!」

ふさがれた唇から押し殺した呻きを流してまだ冷めやらぬ激情に、熱く燃えていた女体

は、切ない喘ぎにのけぞった。

「いじめないから縛っていい？」

唇を噛みしめてのけぞり、眉を寄せる顔へ真弓は囁くように言った。わななく声が返ってくる。

「あなたになら殺されてもいいの……」

縛られ抱き締められたいと思っていた八重だった。

縛った八重を素肌の胸へ思い切り抱き締めてみたいと思っていた真弓だった。

太いロープが乳房の上下を厳しく締めつけて、息もできない苦しい縛りに呻く八重は、真弓の胸の中にしっかりと抱かれていた。

「可愛いよ、八重」

狂おしく燃えた真弓の唇は、八重の肌を滑べりながら、叫ぶように何度も言った。

まるで、大切な宝物を磨くように……

大好きな玩具を与えられた子供のよう……

「嬉しい」

波のような激情に、八重は震えながら口走り、言葉にならない事をいつまでも流していた。

「あっ!!」

のけぞった細い首を、軽く締める真弓の指

に力が加わった時、大きくのけぞって八重は息もきれぎれに言った。

「あーっ、許して、苦しいっ！」

力が緩み、荒い息づかいに泣きじゃくると再び力が加わった。

「あーっ、殺してっ！ かんにん……」

何を言ったか八重自身覚えていなかった。

しかし、薄れゆく意識の中に聞いた真弓の熱い囁きに

△このまま死んでも幸福▽

そう思う八重だった。

「許さない。殺しもしない。可愛い八重を誰にもやるものか！」

何度も、何度も、くり返しながら真弓は、延び切った八重を強く胸へ抱き締めて、泣きじゃくり、八重の乳房を涙で濡らしていた。

「死ぬかと思った……」

真弓の体重による息苦しさの中に八重は目覚め、小さく訴える瞳が甘えて笑っていた。

「憎んでもいいよ、八重」

両手首を後で軽く縛って八重を強く抱き締めて言う真弓に、八重は再び小さく言った。

「いいの。あなたになら殺されても幸福よ。」

八重はあなたのものよ！」

「孝之にはあげないの？」

その言葉に一瞬動きを止め、小さく頷く八重。

「驚いた！ 誓えるの？」

くり返すのへ大きく頷き返す八重だった。

△もう真弓以外の誰にも肌を許さない▽

心に固く決心する八重だった。

「お前は不思議な女だね、まったく」

八重の手首の紐を解いて真弓はつぶやくように同じ事をくり返す。

「縛られるたびに美しくなるからですの？」

引寄せられるままに胸へすがりつき、真弓の答えを真似て問い返す八重。

「それもあるさ。でも、なぜそうなったのか

孝之との事も興味があるね」

ピッタリと体を丸めるようにして真弓の胸に入っていた八重の肌が、びくっと震えた。

そして、しばらくして八重は答えた。始めて聞く、重く深い悲しみに沈んだ声だった。

「そういうふうには飼育された女なんですの。」

この体に無理やり刻み込まれたんですわ」
言っではいけない事を口にして、真弓は後悔した。

△心まで傷つける事は許されない▽
そう思い、強く抱き締めて、詫びるように

優しく言った。

「そう、じゃあ早く忘れるんだ。聞かなくなっただけでいいよ。今の八重が好きなんだから、それだけで充分なんだ」

その思いやりが嬉しくて、思わず声をあげて泣いてしまった八重。細いしなやかな体を力いっぱい抱き締めて激情の納まるのを待ってやる真弓。

「聞いて下さいましね。誰にもお話しないつもりでしたけど、あなたなら、きっと八重のいまわしい過去を吸い取ってくれますわ」

「いや、言うんじゃない、八重の悲しい昔話なんて聞きたくないよ」

「いえ、聞いて。お話すれば、きっと忘れやすから聞いて……」

胸の中で、子供のように激しく身悶えて見つめる瞳へ真弓は小さく頷いた。

「きっと吸い取ってやるよ！」

はつきり言って、真弓は強く、さらに強く抱き締めて、小さく呻いてのけぞり息苦しさ

に喘ぐ唇へ静かに重ねていった。
いつまでも変らない心を。
いつまでも愛する誓いを。

それに込めて、強く抱き締め、強く吸い込む真弓だった。

――終り――



浣腸なんて物心ついてから、まだ一度もされたことも、したこともないのに、なぜこのようにひかれるのかしら、自分でも自分の心が不思議で仕方ありません。

カンチョウという言葉を書いただけでも思わず顔を赤らめてしまふ私なのですが、それでいて自分で浣腸しようなどとは、夢にも思っていないのです。

私は異性の手で浣腸されたいのです。無理矢理浣腸される、或いはされていると思っただけで、私は胸がきゅっとしめつけられるような思いで、全身がカッカッと燃えてくるのです。

私は今、或るお菓子工場に勤めております。仕事をしているときは皆白い作業衣に着かえるので、朝晩の出退勤時にはロッカールームは大混雑します。そこは以前は倉庫に使っていたとかで、工場から渡廊下でつながれていて、窓が小さいため、昼でもまっ暗です。

天井に蛍光灯がついているのですが、この頃のように日が早く暮れると、並んだロッカーのかけになるところでは、眼が慣れてこない、鍵穴さえはつきりとわからなくなっていくのです。

私がこの工場へ勤めだした頃は殆ど同年輩の二十才ぐらいまでの娘ばかりでしたが、この頃では人手が足りないとかで、三十台や四十台の家庭の婦人も多くなりしました。殊にパートタイムでくるおばさんがふえだしてきてからは、今までの空気とは、がらりと変わってしまいました。

ゆうべのきわどい話を大きな声であけすけに話しあっている中年の婦人たちの声に、思わずきき耳を立ててしまう私たちですが、でも私には何だかえげつなくて嫌なのです。中には、わざわざそのと

きの絵や写真を、私たちに見せてきゃっきゃと笑いあうのです。ロッカーのかけで彼女たちの解説つきで、そんな絵や写真を見せられても、私には好奇心はあってもたたいやらしさだけが先に立って、見たい気はしませんでした。

中には勇気のある女の子がいておばさんたちから、ひったくるようにして借りてくると、こんぼうしてある荷物の上に腰を下して、首を寄せ合って眺めるのです。未知なものへの好奇心で頬をほらしても、高い天井についている蛍光灯だけという薄暗さが私たちの羞恥心をやわらげてくれて、思わず大胆になって忍び声まで出してしまうのです。

そんな或る日でした。土曜日の退勤時という解放感も手伝ってきやっきゃと騒ぎながら更衣しているとき見せられた絵は、私にきついショックを与えました。それは全裸の娘が数人の医師らしい男たちの手によって診察台の上で浣腸されているものでした。私はチラッと見ただけでドキリとしました。幸い他の朋輩はその絵には興

味がないらしく写真なんかを奪いあうようにして騒いでいましたので私はゆっくりと手にとって眺めることができました。

黒いレザーの寝台の上で両脚を二人の男によって思いきり左右にひろげられた娘は、もう一人の男によって大きなガラスの浣腸をさされているのです。更にベッドの両脇には、のぞき込むようにして二人の男性がいて、一人は腕を握って脈をとり、一人はカメラを持って写真をとっているのです。

その絵を見て以来、私は浣腸のとりこになってしまいました。私もあのようにして五人の男性たちの手によって浣腸されてみたいと強く願うようになったのです。いや浣腸されていると思っただけで私の胸は熱くなってしまふので、いつもそんな空想に耽ってしまふのです。浣腸の実験台として私を全裸のまま浣腸して、そのときの表情の変化や生理的な変化をカメラで刻明に記録してほしいものだと思ひます。あくまでも医学の研究として真面目に実験台に使ってほしいのです。私は今年成人式を終えた女性です。連絡は勤先へ昼休みの時間にして下さい。電話番号を書いておきます。

浣腸こそ我がいのち

藤田千代子



(第五十八回)

辻村 隆

今年の正月も又、賀山氏の御好意で三日間東京ハント旅行。別項のように第一夜は渚マリ（井上幸子）のカメラ・ハントに成功し、翌日の午後、妊娠六カ月の飯田カオルさんと会う。賀山社長午後商用でどうしても手が抜けず、例のマンションで二人きりのプレイのひとつとき。ついで第三日目連絡をしておいた江戸川区南小岩の滑川嬢とホテル・オークラで会い、社長の特つマンションへ。激しいSMプレイに、ハント用フォトさっぱり撮れず、写真の方ではがっかりしながらも、生々しい体験に凄くハッスルして、帰りの新幹線の車中も、あの数時間の激しさを思い浮かべて、またたくうちボケたようになって、わが家に辿りついたのは夜の九時——この三人、いっぺんに発表したい気持ち山々なれど、締切まで一週間ちよっ

とでは、留守中の仕事も山積していて到底、無理というもので、わが筆力のなさを独り歯搔ゆく思っている。ところでこれを、三回に分載した場合、こちらの方のハントした分がおくれおくれになるし結局どれかをオミットするか、季節おくれで掲載するより仕方なく左近麻里子、谷山久美子の両嬢もここしばらく延期するより仕方なさそうである。上京中に金原奈加子から電話があったのだが、どうやら撮ってほしいらしい口吻とは女房の、一寸拗ねた言伝てであった。報告をかねて箕田さんに電話したら、彼にも金原奈加子より電話があった、搔把するといっている彼女が、どう気が変わったのか愛人のタネを産む気になったらしく唯今、妊娠五カ月半と進行中とのこと。こちらも妊婦かと、少々はあきれたが、根が好きなものの私。

このチャンス逃がしてなるかと、一方通話の彼女の電話、数日、首を長くして待ったが、未だに掛かってこない。気紛れな彼女のこと気がむけばヒョッコリ掛かってくるかも知れないが、唯今、電話待ちといったところである。金原奈加子の妊婦プレイ成功の暁には、妊娠三カ月のあの日の分と同時発表するつもりであるが、果たしてうまくゆくかどうか——。箕田氏も現在、株の上り下りで、電話に嗜りつき放しで、意欲あってもそれどころではなく、断ったというより、日を改めたということだったが、惜しいことをしたものだ。

× × ×

「元禄女系図」につづく、東映の性愛路線は、石井監督の「異常性愛記録・ハレンチ」と、そのものズバリの題名。最初「恍惚」というタイトルであったが、弱いと見てか改題。唯今、進行中である。一応シナリオを戴いたが、SとMの両面に耽溺する中年男とその対象となるバーのママが主人公。変質の愛情から逃避しようとしながら、その異常な性愛についてズルズルと引きずられてゆくママ。それに絡んで、ホモ、レスビアン覗き、露出趣味、異常性愛が、ふ

んだんに絡んでいる。緊縛シーンは、ほんの一、二カ所しかないの、御遠慮したが、次回は「責め地獄」。これはどうやら又、東映にお邪魔しますということになるらしい。私にも本職があるので、運悪く重なれば仕方ないが、そうでない限り、又ぞろ緊縛指導になる予定である。期待の「伊藤晴雨物語」唯今シナリオ執筆中であるが、或いは秋になるかも知れない気配である。

× × ×

毀誉褒貶は世のならいというが多少のやつかみ気も手伝って、辻村隆攻撃の通信が、二、三、やはり編集部が届いている。所用で編集部を訪れた折、一寸見せてもらって苦笑しきり。

その一。KK誌に応募してくるモデル女性を、何故、辻村ばかりに紹介してゆくのか。偶にはこちらへも廻せ——。（と書いておられた文中に、誤字と文法誤り四カ所。モデルを廻しても、それを紹介していただくには一寸幼稚な文章でした）

その二。辻村隆は時間と曜日を構わず、絶えずハントに憂身をやつしているが、これは少なくとも執務怠慢の月給泥棒であるに違い

ない。もっとマジメに勤務せよ——(残念デシタ。私は一匹狼。恐らくはサラリーマン氏と思えますが、私は会社勤めではありません。所長兼小使の自営です。忙しければ徹夜で稼ぎ、ハントとなれば、すべてを放っておいて走り廻っても、何処からも苦情のくるような職業ではないのです。口惜しかったら当てて御覧?)

でも若い女の尻を追うな。糖尿病が悪化しますぞ。——(御忠告有難うもうそろそろ、ここでハントは打切って、もっぱらプレイの方に独り愉しみみたいと思っております)

以上三通、編集長の意志で、執れも没にしてしまったが、掲載してくれば面白いと思った。大正十年生まれ。そろそろ引退の時ではないだろうか——。



Sコレク
ション 『ガラスの
プレゼント』

豪城二

「週刊サンケイ」一月二十七日号の、「とかくこの世は」の雑文記事の一節に、こんなのがあった。「睡眠薬、シンナーについて、フーテンがやっているのが、カンチヨウごっこ。「流腸」と書く。幼児用のを買ってきて、いくつもいくつもやる。数と、どのくらいガマンできるかを競うわけ。ガマンすればするほど、苦痛が快楽をよび、失神、陶酔の境地に達する」ともある。十七、八世紀、ヨーロッパの上流階級の婦女子は、美容の目的で盛んに流腸をなし、それがはやって、カンチヨウごっここのありさまを呈した記録がある」だ

となる、奇ク誌に登場してくる、流腸好きの諸氏、諸嬢は、至って優雅な上流社会のエリート族か、はた又、時代の先端をゆく種族ということになってくる。昭和元禄のハレンチ時代は、遂々、クリスタルの面まで、秘かに愉しむ私達の分野に侵入してきたようである。

× × ×
KK誌三月号を通読して、今も尚、梨花悠紀子への衰えぬ人気をしみじみと感じた。先日、彼女か

ら電話があった時、その由を告げて、フオト掲載か、カメラ・ハントを頼むと、強硬に拒絶された。しからば分譲フオトをと頼んでみたが、それもダメ。今の幸福を壊されたくない彼女の願望は、切ないまでに強いのであった。いつ、どこで、誰がと思うと、彼女の不安も分らぬでもない。ひたすらに家庭の平和を願いながら、その反面、フト忍びよる不逞なよろめきが、過去の華やかな幻影を忘れかねて疼くような衝動にかられるのであるうか。

これは罪悪だ、と思いつつ、私もズルズルべったりと惹かれて行く。カラストロフのない、SMに徹しきった仲でありたいと希いながら、一盗二婢のその味忘れかねて、ついつい次の約束をしてしまう。この一例でも分る通り、世の善良なる亭主諸君、夢ゆめ、わが愛妻に気を許す勿れである。

風流極道軒氏の熱意に負けて、貴家あてに、数枚彼女の近影フオト送りました。御笑納下さい。いづれ貴方達の夫婦プレイの御招待に、海を越えて参ります。先はその御挨拶がわりまで——。

映画寸感

SM映画生

辻村隆氏第二回特別緊縛指導で話題を呼んだ「元禄女系図」は、なるほど拷問、異常性愛、獣姦、レスボス、サド、マゾと、盛沢山ではあったが、期待ほどでなく、所詮は徳川女刑罰史の二番煎じでしかなく、尾花ミキの妊婦の巨腹を、吉田輝雄扮する医師が、切り開いた腹の中から、胎児（ゴム或いはプラスチック製か？）を取り

上げるシーンでは、明らかに失笑の渦がわいた。

また「につぼん69セックス猟奇地帯」は、乱交パーティ、全学連刺青する女ETGが紹介された。私のお目当ては、性の倒錯者というパートで画面に紹介された大阪のK氏なるM氏だった。（勿論、Kは氏名のイニシャルで、MはS MのM）K氏が勤務を終わって変装

を一寸施して、とある場末のバーの扉を押して姿を隠した瞬間から総ての人間性を放棄し、M氏となり果て別世界に惑溺する赤裸々な姿が実写されてくる。

カウンターの狭い床に平伏しているM氏の背中を、ホステス達の草履やハイヒールが行き交う毎に踏みつける。客の残したビールがひれ伏しているM氏の頭の直ぐ傍らのバケツに投げ棄てられる。ビールの飛沫が容赦なく頭や顔にふりかかる。ホステスらしい女（あるいは特殊なS性の女か、顔は全く写らず）の部屋で特製の犬の首輪ならぬ背中輪（体輪とでもいうべきか）を装着したM氏が、ベッドに腰を下ろした女の足を、いとおしそうに両手で撫で廻す。かと思ふと矢庭に、女の両足で頭を踏みつけられる。女の足を洗った後の洗面器の中のミルクを飲み干したり、女の喰い残した皿のものを食べる。ラスト近くでは、顔に跨った女の股間からほとばしる液体を、大きく口を開け喉仏を懸命に上下させて嚥下するのである。そして洋式トイレの中に湛えられたもので顔を洗うに至っては、私はただ恐れ入ってしまった次第である。実は私もミスターMなどと自

最近の縛り映画

東山 映史

東映の「徳川女刑罰史」の大ヒットについて「元禄女系図」と五社の残酷路線に対抗してか、このところますます活発になった独立プロの縛り映画も、小森白監督を筆頭に、谷ナオミ、美矢かおる等被虐スターを駆使して大いにハリ切っている。

貴誌にも掲載された団鬼六作の「残酷・肉の競艶」が、谷ナオミを筆頭に高月洵子、祝マリ、花木かおり等、半裸に縛られた姿を集団で見せてくれる。が、やはり何といても谷ナオミの豊富な緊縛姿が最も魅力があるように思う。この映画では女子大生の悦子に扮した花木かおりが新人ながら大いに熱演し、両手を吊るし上げられて身もだえするところや、ビビシとムチ打たれるシーンは非常に迫力があった。しかし、高月洵子のハダカ姿は、どうもいただけない。

小森白監督の「ぬき身」は、新人嵯波美也子が半裸で縛られて短



東映「徳川女刑罰史」スチール



「いらだち」 日本武士

他共に（他といっても妻だけで）認めていたつもりだったが、さすがにこの映画のミスターMには辟易した。まだ私如きは、M氏の、それこそ足下にも及ばないことを思い知らされた。

しかし、何ととっても私のSMの血をたぎらせた一篇は、大映の「盲獣」だった。これは緑魔子、船越英二、千石規子の三人が出演という異色作だが、クライマックスの十分間は正に圧巻である。女性の目、耳、鼻、唇、乳房、手、足で無数に蔽われている壁。中央

に二、三十メートルもあるうかと思われる巨大なゴム製の裸女の腹の上で、昼となく夜となく、ただれた肉欲の生活をくり返す盲目の男と女は、二匹の触覚のみの刺激を求めるようになり、ロープで雁字搦めに縛られ、同じロープのかたまりで滅多打ちにされる。そして遂には緑魔子の肌に、船越の持ったナイフが突き刺され、激しい痛苦とともに襲ってくる快感に裸身をのけぞらせ、傷口から血をすするといった物凄さ。そして全身互いに傷だらけとなり、出血と痛

みで動けなくなった女は、最後にどうせ死ぬなら私の手と足を切り落として身体をバラバラにしてくれと懇願し、男もこれに応じて庖丁と木槌で次々と女の手足を切断し、自分も心臓を一突きして相果てるという、戦慄的な終局となる映画である。ベテランの船越英二の演技力もさることながら、ナイフを突き刺される時の快感に満ちた呻き、Mの喜びに溢れた緑魔子の声と表情は、或いは彼女が本当にMではないのか……と錯覚を起すほどの名演だった。

刀を口にくわえたポスターがあつて、その姿は非常によかったが、期待していたのに本篇にはなかった。しかし、ベッドの上で縛られたところは、なかなか色気があつた。「女が崩れる時」の美也かおるは高利貸の二号役として熱演するがその高利貸というのが変態で、彼女が右手右足、左手左足を縛った前かがみの姿で責められ、「いじめて、その縄で縛っていいじめて……」と、大いにその被虐ぶりを見せた。

わがトルコ探険記 石渡雄三

2名

○音がきこえちゃマズイから軽くよ……1名

○OKとハリ切って、力一杯乱打してくれた勇敢嬢……3名

○背中踏みつけ

○アラ、あなたもその趣味……7名

○重たいから覚悟して……2名

○背ボネ折っちゃうぞ……1名

○おもしろいわ、やってみようか……2名

③のまして

○そんなものでやしないわ……5名

○毒でしょ、よしなさい……2名

○はじめてじゃイヤ。五回くらい通ってくれたら……3名

○いいけど、高いわよ……1名

○ちようど出るとこよ……1名

達していないので今回はふれず。

でも、こんな変った注文をだすと、例外なく彼女たちは、軽べつと警戒の態度をとった。

やはりトルコは、紳士的に、むしろ風呂とマッサージを楽しむ、健全な慰安場なのであろうか。

①濡れタオル乱打

○そんなこと無理よ……6名

○このつぎ指名してくれたら……



夫婦プレイ

雑 感

松 永 寛

人間の欲望というものは際限もなく次から次へと拡がってゆくものです。迷いに迷った末、とうとうペンをとりました。貴誌を最初手にしたのは白表紙の頃でしたから、もう十年以上にもなるでしょう。ショックと憧憬の入り交った複雑な感情の赴くままに愛読していましたが、三年程前からは定期的に購読を始めました。

夫婦生活十二年、マンネリな毎日を貴誌の購読により僅かに慰めてまいりましたが、一昨年暮から遂にプレイの実行に踏み切り、最

近では充実した楽しい日々を満喫しております。三十七才と三十五才の中古夫婦ですが、今になって青春よ再びというところです。

只少々不満なのは、妻がいささか痩せている事と、決して嫌がりはいませんが、自ら進んでプレイするという風はなく、未だ喜びや楽しみをプレイの中に見出してくれない事です。これは勿論、私の教育指導が悪いためでしょうが、先輩諸兄弟の御指導を得たいものです。又カメラはあっても自分でDPEが出来ず、店には面映ゆくて頼みもならず、心ならずも折角のプレイながら、一枚の記録も残っていない事です。

妻は十人並の容貌ですし三十五という年齢よりは十分若く見えます。時には今晩縛ったまま街に連れてってとか、外でお尻に鞭打つてとかねだりますが、本心から望んでいるのか私のご機嫌とりの為なのかわかりません。

一年余の夫婦プレイの結果、縛り、クリスタルプレイ、鞭打ち、ローソク責などを経験し、現在も週一回は必ず行っています。昨年末、大阪へ出る機会があったので是非辻村先生のモデルにと思い、一カ月がかりで納得させ天にも昇

る思いで連絡の便りを書き出した矢先、思わぬ支障で駄目になり全く残念でした。もうすこし近ければ何時かはと思います。九州ではどうにもならず簡単に大阪へ出る程の暇と金のないのが口惜しい事です。

顔さえはつきりせねば本に載ってもいいと迄納得していたのに返す返すも残念です。どなたか近くに同好の夫婦の方でもいれば交換プレイを試みてみたいです。中年の社会的地位のある方で経済的な負担を御願ひ出来る方なら男性だけでも結構です。妻は痩せていますが色白で十人並の容貌をしています。全裸にして羞恥責を加えて呉れませんか。羞恥責あたりから徐々に訓練すれば相当な責も可能と思います。妻も私以外の他の男性に責められることを望んでいるようです。DPEの出来る方ならフオトも撮ってほしいです。

一番の望みは箕田氏や辻村氏の別府旅行の機会でもあればと思うのですが、望むべくもないでしょう。私は安月給のため余り経費のかかる事は望みませんが、ロープや鞭などは所持しています。

(大分県別府市・松永寛)

編集部だより

○金原奈加子さんから妊娠中のフオトを撮ってくれてもよいという電話があった。辻村氏に早速出勤するよう要請したのだが、このところ忙しいとかで快い返事は貰えなかった。まだまだ月が若いので、いずれカメラハントの記事に金原さんの便々たる太鼓腹が登場することと思う。

○ハントといえば、カメラもペンもたつという新人から贗作カメラハントを物したいという申出があった。英会話も堪能なので、さしずめ、台湾、沖縄、香港、ハワイあたりを舞台に主として外人をハントしたいという意気込みようである。従来、モデル女性を紹介して呉れたら書くという立候補した人が多かったが、折角のモデル嬢をダメにしただけで誌上に掲載できないような文章を送ってきたためしはなかった。(一回きりで姿を消した女性を思い出してほしい)

○編集部としても、この種のお申出は大歓迎なので、自作の文章と写真の作品を同封の上、お便りを寄せていただきたい。取材費など

刺青、肥満女性通信

赤畑 修造

映画、雑誌で目にふれましたの
を紹介しましょう。

刺青では「女性自身」一月六日
号に若い女性の観音様のカラー。
また「パンチデラックス」新春特
大号に中年？の手古舞いなど。
映画では去年の「いれずみ無残」
の競艶会のシーンで特別出演の紅
一点、年増の背座での刺青は、さ
すが本物で、アツという間のシー
ンですが、マニアには見逃がせ

ない映画でした。「緋牡丹博徒一
宿一飯」では、藤純子の絵のよう
な刺青より、白木マリの肩から上
胸、腕の方が刺青らしく見えまし
た。

肥満女性では「週刊文春」一月
二十七日号のオランダはアムステ
ルダムにはミス娼婦No.1に体重百
キロ、三十九才の女のグラビア。
「小説宝石」新春特別号の庄巻、
体重百四キロのおばさん海女のセ

ミ・ヌードのグラビア。映画では
「華麗なる賭け」で、刑事室の秘
書が一寸チャームिंगな中年肥満
女性で、三、四回でてきます。
洋、邦画を問わず、予期せぬシ
ーンに、いつも期待しています。
特に書店でのアサリに発見、購入
したものを、自家製アルバムに整
理保存する喜びは、マニア独得の
モノです。世にヌード、グラマー
のフオートが氾濫しているが、こ
れらの写真は、それこそ九牛の一
毛ですから喜びもひとしおで珍重
に価します。

貞操帯のこと

竹口三十一

フックス「風俗の歴史2」
以来、「週刊文春12/16号」
や「血と薔薇2号」によって
興味本位の貞操帯の話や写真
が紹介されているが、今度は
邦画のスクリーンにお目見得
するそうである。このことを
「大阪スポーツ(2/1)」
が報じているが、それによる
と、『……日活「夜の最前線
女(スケ)狩り」に出てきた
この品物は夜の新宿を支配す

る葉山良二が愛人の、佐藤サト子
に嫉妬してつけさせるわけで、軽
合金製で、佐藤のサイズにあわせ
て美術部が作った苦心の作。……
一番心配だった映倫審査では「セ
ックスを守るもの」と意外に簡単
にOKされたそうである」という
ことだ。

一見の価値ある「実用的代物」
であるよう、大いに期待している
のであるが……。

負担の上、モデルその他の便宜を
はかりたい。誌上発表の際は作品
相応の原稿料をお支払いする。
○相変らず原稿が机上に山積する
程殺到して嬉しい悲鳴をあげてい
るが、どうしたのか、あれほど
度々お断りしているのにも拘らず
未だに横書き原稿が多い。なんと
か書き直しや訂正削除しなくても
発表できる作品を送ってほしい。
それから懸賞応募作品と銘うちな
がら、ノートの切れ端しや便箋に
書いて来られる方があがるが、必ず
原稿用紙をご利用願いたい。
○今月も締切ぎりぎりになって団
鬼六先生から「花と蛇」の原稿が
ロケ先の信州別所温泉から速達で
送られてきた。すばらしい別所温
泉で一日に数回入湯しながら撮影
している映画のベッドシーンを見
たりしてハッスルした上で執筆し
たとのことである。
○風流極道軒氏をはじめとして各
地の読者の方から夫婦プレイやカ
メラハントの取材に応ずるとい
う便りを貰った。地方駐在記者或は
男女探訪記者を派遣する用意があ
るので御希望の方は通信を寄せて
頂きたい。尚編集参考資料になる
ものは高価で求めたいので手放し
可能な向きは内容の詳細、希望価
格など一報賜りたい。



写真は竹口三十一氏提供

S M 歌謡

「緊縛師」

江川夢次

一
 なんて拗ねたか うらぶれた
 灯影も暗い 裏町の
 屋台でくだ巻く 男にも
 夢は有ったさ 小さな夢が
 今じゃ仮寝の 緊縛師

二
 好きで女を 縛りやせぬ
 畳もしめる 裏町の
 ホテルでごろ寝の 男にも
 恋は有ったさ 儂い恋が
 今じゃしがない 緊縛師

三
 肌のぬくもり 偲びつつ
 犬の遠吠え 裏町に
 鞭縄さばく 男にも
 明日は有ったさ 小さな明日が
 今じゃ世捨ての 緊縛師



「マヅ派、陶醉流」 野江三郎

「ピンクの花」

江川夢次

一
 好きでヌードに なりやしない
 若い娘の 恥らいも
 持っているけど 捨てなけりや
 純な娘は この世では
 生きてゆけない
 生きてゆけない 色地獄

二



「さあ、お手当の時間ですよ」

菊池淳子

恋もしました したけれど
 何故か男の いやらしさ
 目立つ世界の 悲しさよ
 こんな娘は この世では
 燃える日もない

燃える日もない 色地獄

三

酒も飲みます 自棄酒を
 若い娘の 憂さ晴し
 酔って見たとて 寂しいの
 弱い娘は この世では
 縋る木もない

縋る木もない 色地獄



昨年

見たものの

印象

沢潟しの

昨年公開されたものの中で印象深いものを、思い出されるままに書いてみます。

NHK TVの「竜馬がゆく」の中で、武市半平太牢内の場面。牢屋の外鞘への出入りを定法通り、きちんとやっていました。だらしない演出を見慣れていた目には大変珍しく映りました。

牢屋への出入りには、まず外鞘の錠を掛けてからでなければ、囚人の居る内鞘の戸は絶対に開けないのが、牢法の鉄則になっていることは以前にも書いたことがあります。映画などではそれを大変ルーズに扱っており、昨年の「秘録おんな牢」でも、せっかく古い

絵図面の通りに作った牢屋の、内外の戸をすっかり開け放しにして陽気にやっております。

ところが「竜馬がゆく」では、牢長屋の入口に番士を置いて、一人一人の出入ごとに几帳面に、錠をおろすところを、見せておりました。

牢屋への出入りは、劇の進行にはそれ程の重要な意味を持っていくわけではなく、ただ、半平太が藩論の転換によって重罪人となり苛酷な取扱いを受けている有様を強調して見せるために、牢屋の管理を詳しく見せたいのでした。TV「大奥」江島生島の牢屋の場のような、目茶苦茶なものが

あって苦笑させられていた頃でしたので、特にさすがに、NHKの看板番組だけのことはあると思っただけでした。

もっとも、それにしても何カ月も入牢している当の半平太が、袴こそ着けていませんでしたが、紋服のまま、きれいに髷を結っていたのは、ちょっと妙な具合で、奇異に感じたのですけれど……。

映画では、武智鉄二氏の「浮世絵残酷物語」

私にはあまりご縁がなさそうなものだと思いますが、念のために見たのです。「黒い雪」で、無罪を勝取った武智氏が、専門職の女優陣を駆使して製作した映画です。すから、なまめかしい女体を見せることがすべてに優先していたように、例えば「青山播磨」の芝居の時には、実演であるが故に実行不可能だった凄まじい女の殺し場を、十分たんのうするまでに丁寧に見せて下さったので覚えているのです。

なにしろカラー作品ですから、その迫力は強く、この方面に興味を持たない人達には激しすぎて、正視するにたえなかったのではなにかと思います。

全体の筋の運びは重点的に、相

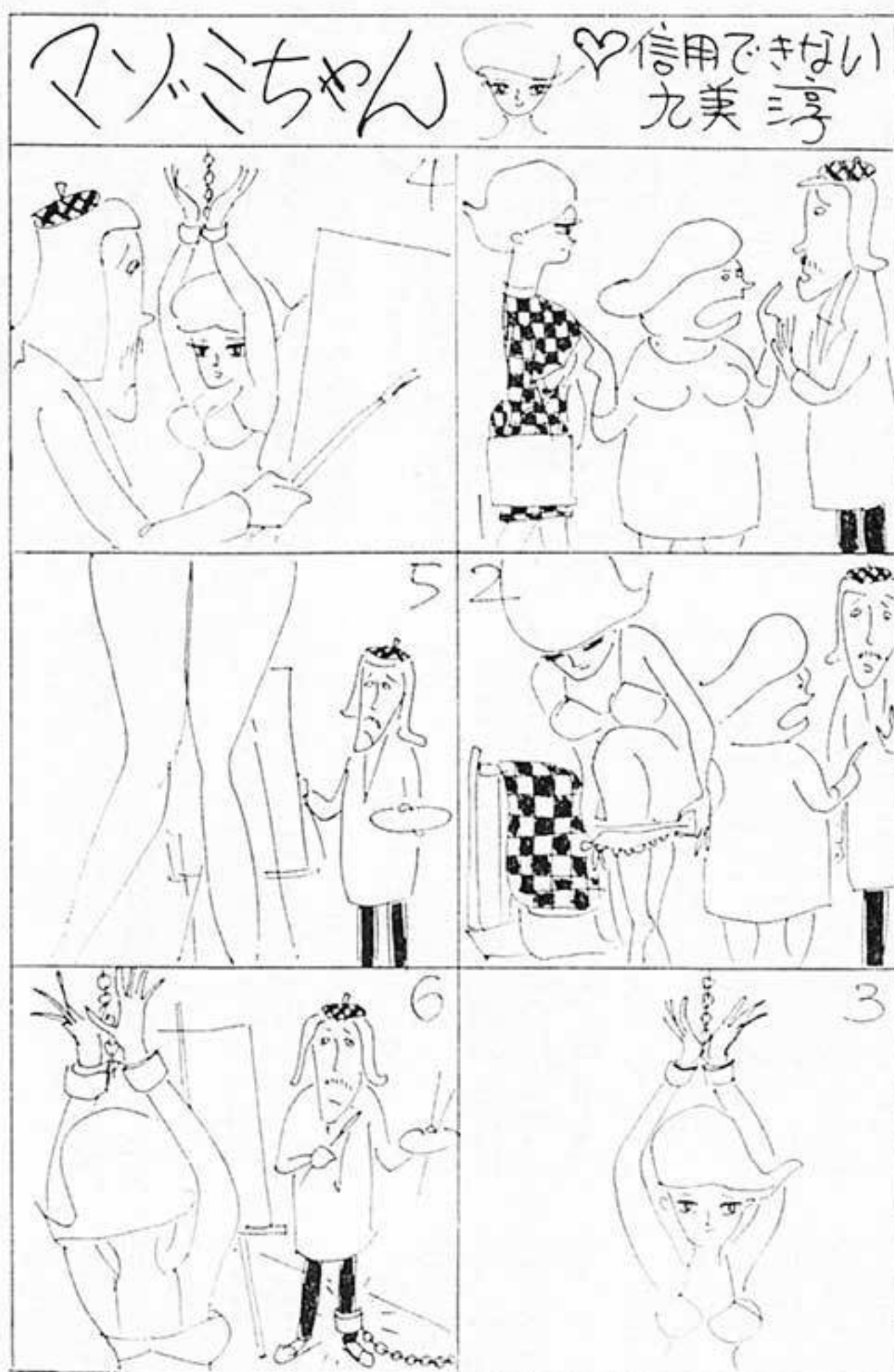
当に荒っぽかったと印象に残っているのですが、必要な部分については、キメのこまかい見事な演出だったと思います。

衣裳も派手でいて、しかも仲々よい好みのものが揃っていたと思いい出されます。たとえば、腰巻にしても、絵師の娘や遊女は収さん好みの紅絹の腹巻を付けた紅縮緬のをしめさせ、大名の側女のは形通りに白いのをつけさせていたのには、感心したものです。

その他、思い浮かぶものに、絵師の弟子が着物を脱ぐと、両脇を乞食仕立にした腰巻をしていたのがあります。

男で腰巻をしている人が非常に少なくなってしまう現在、ずいぶん変わった風俗として見られたのではないかと思つたものです。

縄付きの姿は、絵師長春が私刑にあうところと、息子が遠島になるところの二回でしたが、いつぞや団鬼六氏が書いていられたように、気のない人の縛った縄目が見られたものではなく、身体に縄がかかっている（掛かってでも縛つてでもなく）とでもいったようなもので、とてものこと、悪口もいう気にならない程のものであったと記憶しています。



観劇ルポ

「ローソク責」

吉村 永興

私はこの『ローソク責』という看板に、余り期待していたわけで

はない。「鎖と鞭」とか「残酷」とかいう、ショッキングなうたい文句のショーに、幾度も背負い投げをくっているからである。にもかかわらず、それらしいキヤッチフレーズにはついひっかかってしまうのであるが、どうせまたいい加減なものだろうと思いつながら、今度もカブリつきに坐りこんでしまっていた。

一つには「当地初演、一条小百合嬢」ということに、あるいは？ つと手を伸ばしてその巨大なローソクの束を取り上げる。仰向けに寝たまま、両手で支え持って胸の上に掲げ、そのままローソク束をさっと傾けた。

驚く程の量のローソクが、スポットに映えて光る滝となって、ボリウムある彼女の乳房に降り注いだのである。とたんに「ツー！」という低い呻きが彼女の唇をついて出た。つい先刻まで、曲に合わせて妖しい

という気持の働いたのも事実だったが、舞台上に現われた彼女の若さとボリウムある乳房には好感がもてた。開幕されると、正面中央にベッド、その枕元にデッカイ（径五糎長さ二十糎ほど）ローソクが五本束ねられたのが置かれ、静かに炎をあげている。

曲につれて彼女が全裸になって行くところはストリップと同じであるが、ベッドの上でからが違ってくる。思わせぶりのうちに、上の身悶えのうちに、

うねりをみせていた腹部や太腿がピリピリと震えているのがよくわかり、弓反りになった体や、足指の先の表情が、そのローソクの熱さを耐えていることを伝えている。

温泉地の小劇場での一刻だが、入場料五百円は安いと思った。



マニヤの幸福

後手しぱり

早木 夢二

「縛るのはいいけど、後手にして縛られるのは、イヤ」という女が

あった。

「だってあなたが抱けないもの」

仲々の殺し文句をおっしゃる。

「寝た時、背中の手首がゴロゴロして痛いよ」

これは案外、本音であろう。

せっかく、ピッタリとした菱縄をかけたところで、ゴキゲンをそこねてしまったのは元も予もない。

やっとのことでありついた「お許し」なのだから、気の弱くなった

緊縛マニヤは妥協する。

「前でなら縛られてあげる」

というのにとびついて、菱縄前

手縛りというスタイルにしてみた

のだが、どうも余りゾツとしたものではない。

それでも未練らしく、ちゃっか

りオットメだけは果たさせてもら

ったのだが、しらけた気分になっ

てつくづく想うのだ。

「この女め、余り縛らせる縛らせ

ろというもんだから、お義理につ

き合っているだけのことで、縛り

の情緒はテンデ分っち

ゃいねえ。縛りを餌に

それらしくみせかけて

俺をつってるだけのこ

とだ」

私の楽しみの一つは

縛り終わった女を引っ

立てて、鏡の前でお改

めをしたり、拷問蔵に

見立てた部屋へ曳いて

行って色々のお調べを

することにあるのだ。

菱縄をかけ、後手高

手小手に緊縛した裸女

に、

「女囚、立ちませい」

と、お役人気取りで

縄尻を引く雰囲気。

傍から見たら、さぞ

コッケイで「チョットおかしいん

じゃ？」と思われそうであるが当

人が楽しいんだから仕方がない。

「お調べだ。お白洲へ引立てる。

キリキリ歩ませい」

と、キツチリ縄がけされて、や

やうつ向き気味に立っている女の

肩をドンと突く。よろけるように

歩きだす女囚の後から、時々縄尻

をぎゅっと引いてみてやる。がっ

しりと組み合わせて縛ってある白

の背中で見せる表情は、お役人の

気持ちをかき立てるものだ。

ともすればうなだれる女囚を、

「体を起こしてしっかり歩け！」

と叱りつけるこの気持。

「後手でなくっちゃいや。縛られ

たっていう実感が無いもの」

慶子は、いつもそういう。

年令の違いで、肌艶や張りとい

う点では、やはり若い女の方が優

っているのは事実である。だから

愛情とは別に魅かれるのも事実で

ある。これが浮気というものである

ろうが、劣るといっても比較さえ

しなければ、慶子の体もまだまだ

魅力十分なのだ。

緊縛マニヤとしての幸福は、や

はり手元にあったのである。

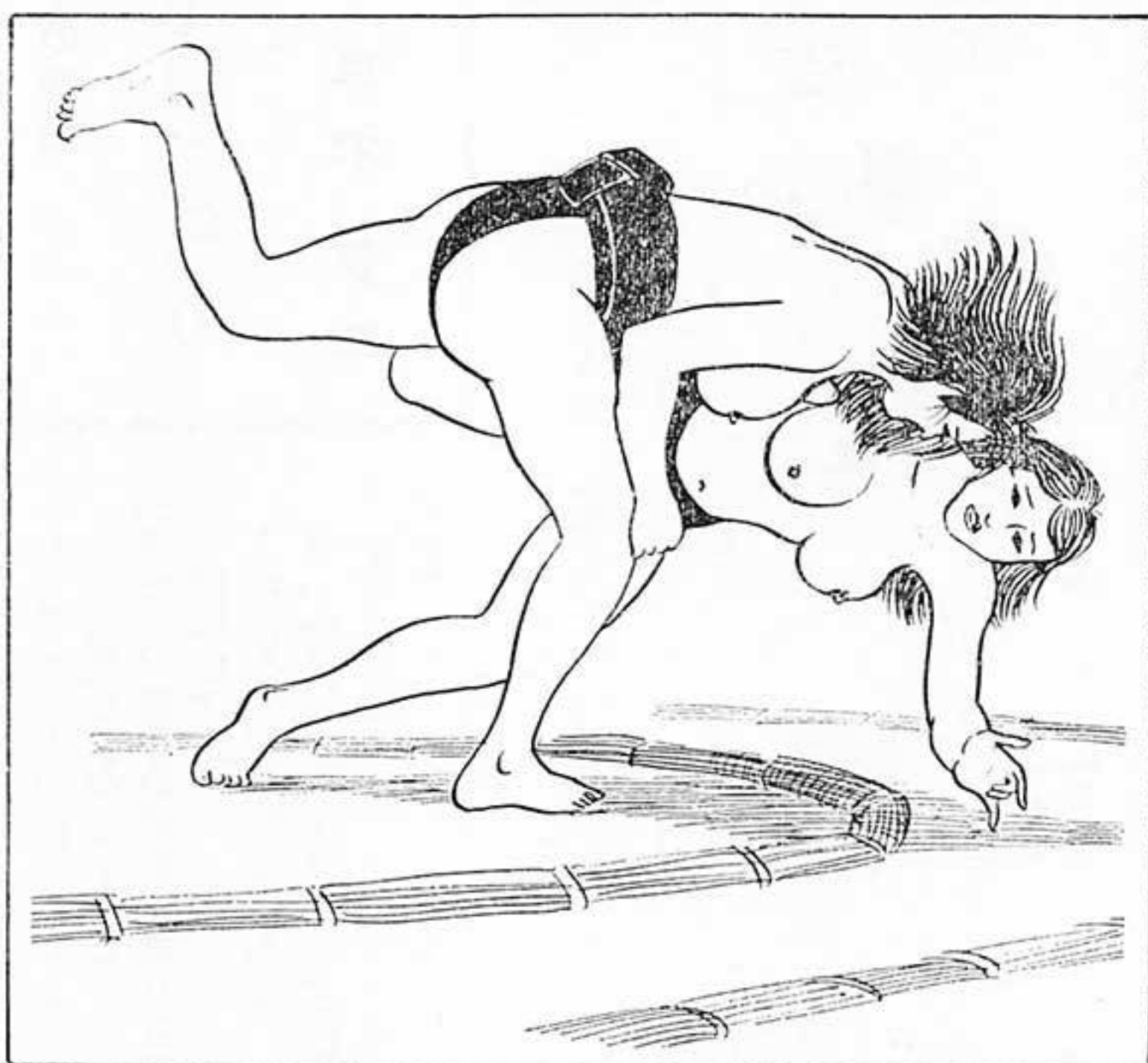
女性禪姿態美について

江川 乱

最近、週刊誌、雑誌その他のヌード写真の氾濫を見飽きた者に、女性禪姿態美写真は清冽な素朴的郷愁を感じさせます。その羞恥責

めに喘ぐ柔媚な姿態に、甘美な興奮を覚えるのは、独り私だけのことでしょいか。

女性禪姿態は股間縛りと羞恥責



イメージ画 「柔肌の激突」 阿羅 孝二

めを合成した印象を抱かせます。
“血と薔薇”の華美な貞操帯の變化を強調した作品も、単なるヌードに食傷した者には驚異でしょうが、素朴な六尺禪姿態の方が、それを女性が着用するという倒錯により、耽美的興奮を誘発してくれます。それは又、愛好者にとって欲望の最大限の簡易的緊縛美であり、そこに倒錯的羞恥美が交錯するところに興味が倍加します。

女性禪愛用者が、自身で股間を緊縛することの陶酔的自己拘束を観察することは、男性愛好者にとって最も自然な欲求の解消です。そして男女禪愛用者が連携して始めて相対的融和感が発生します。

しかし女性禪愛用者は一粒の砂のような存在で、それより外国製総刺繍のスキヤンティを愛用する時流の中では、分譲写真によって甘美なる興奮を追求する以外に方法はないようです。そこで奇巧分譲写真の女性禪姿態美作品の数々を、愛好者の一人として批判してみたいと思います。

左近麻理子の表裏二枚組作品は六尺禪姿態美写真の傑作だと思います。そのグラマーの姿態に、上質晒のこわばった布地が形よく股間を緊縛して、その完全な締め方

とともに、肩に垂れた長髪のもつれ、羞恥的視線による固い表情等完璧の作品です。正面作品の肉体的起伏は、グラマー美を如何なく発散して、綺麗な仕上りは申分ありません。しかし既刊号の読者通信で、女性禪は巾の細いY字型締め込みにすべきで、彼女の禪は巾が広すぎると意見を述べておられました。けれども私は、グラマー姿態の六尺禪は、彼女ののように巾の広い硬張った上質晒で締め上げてこそ、倒錯的羞恥美が発生するものだと思います。巾の細い禪は痩せぎすなサレンダータイプの姿態でこそ黒禪をY字型にきっちり締め上げた効果があるものです。

桜井葉子の三枚組作品は、超グラマー姿態に圧倒されます。中腰の右腕を曲げたポーズが良く、正面作品の自然に曲げた左指先が、羞恥に緊張した神経のデリカシーが感ぜられて、好感が持てます。その気の強そうな個性的美貌とともに良い作品です。側面作品の後手緊縛美は、流し目の表情、カメラアングル、豊満な姿態等、最高です。しかし禪姿態美作品としては、股間をもっと開放しないと、せっかくの禪着用が不明なのが残念です。正面作品の禪の前ダレが

上に巻き込まれて一重になってい
るのは不満です。褌は、前ダレを
古風な越中式に垂らすか、又は股
間から後に廻して、左近麻理子の
そのように締め上げるのが常識
です。六尺褌という古風なものだ
けに、簡易化は絶対、反対です。

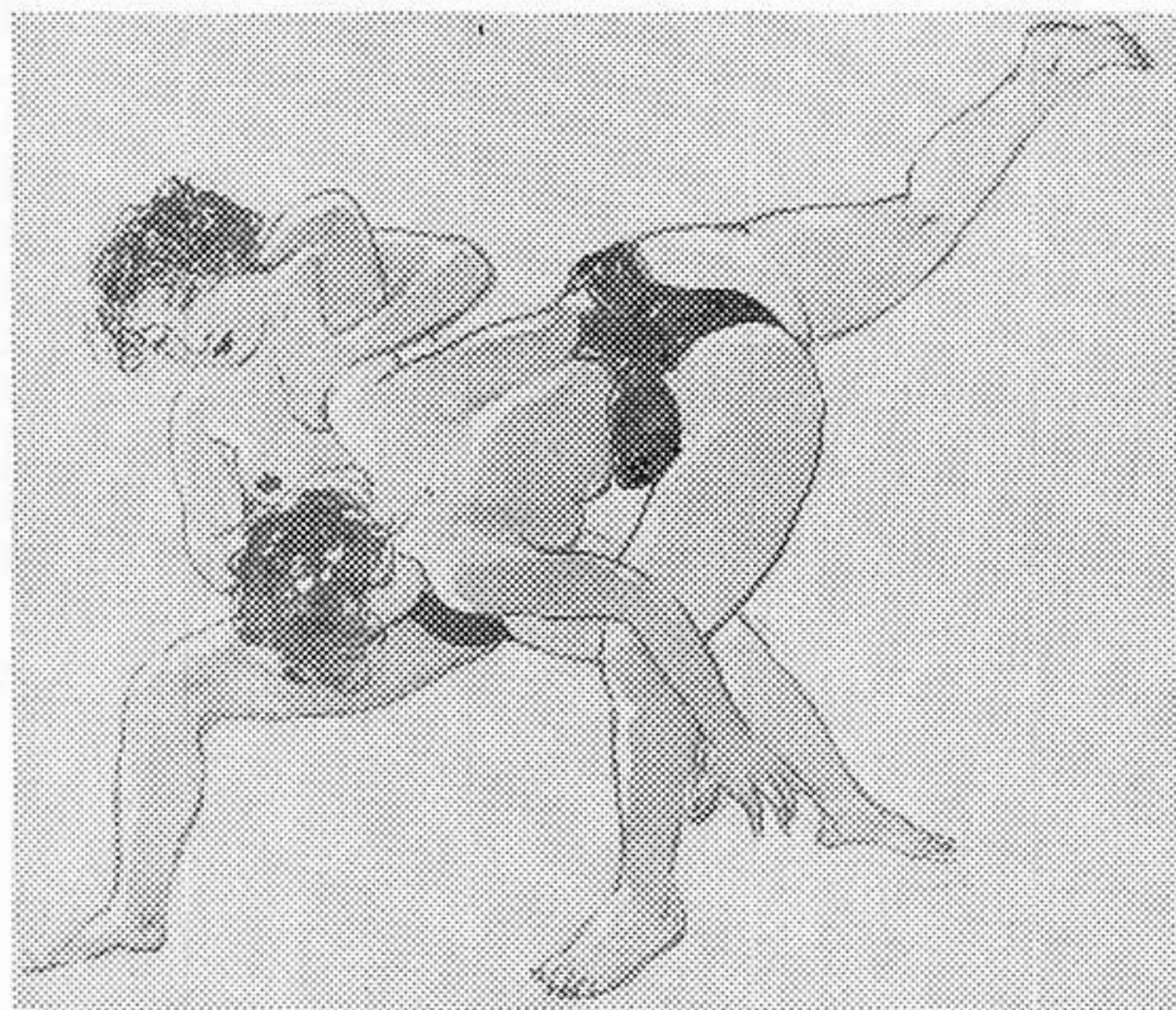
関谷富佐子の四枚組作品は、側
面の一枚は何を強調するのか意図
不明な作品です。桜井葉子と同様
の中腰ポーズですが、一枚を除い
て、だらりとしただけの腕のポー
ズは無神経です。背面作品の後部
締め込みが完全でなく、長すぎて
余った布地を御叮嚀にも前に二重
に廻してしまつては、褌姿態美作
品とは言えません。何故、切断し
て後部をスッキリと完全に締め上
げなかったのでしょうか。モデルが
緊縛スター関谷富佐子であるだけ
に、残念です。また長髪をリボン
で止めず、肩に長く垂らす方が効
果的でした。彼女の緊縛写真の傑
作の数々を愛好する私には、単な
る褌着用の変化だけでなく、何故
羞恥責的表情ポーズを盛り上げる
事が出来なかったのか疑問です。

へこ带状に結んでいるのは、興味
半減です。モデルがサレンダータ
イプの姿態であるので、彼女こそ
きっちりとした巾細のY字型黒褌
で締め上げると、より効果的であ
っただろうと、残念に思います。
また、背面写真がなく、後手の縞
模様の帯紐の緊縛は無意味です。
やや前かがみな作品だけが、頸に
巻いた縞帯紐が効果的アクセサリ
ーとなって美しい脚線を見せてい
るのは、やや戴ける作品です。

刑部典子の五枚組作品は、褌が
黒い巾広の布地で、光線の関係か
布質が不明なため、褌というより
黒サポーターを着用したようにし
か見えません。五枚組中、同アン
グルの殆んど同じ作品が二組もあ
り、当然三枚組として作製できた
はずです。臀部を強調した背面作
品が補充されるべきでした。菱型
の緊縛で腹部が誇張され、首から
廻してV字型の股間縛りにいたる
幾何学的緊縛は絶妙な出来です。
それ故に、同アングルの重複は避
けて、上体を前に深く曲げ、背面
より臀部を強調するようなカメラ
アングルの、褌着用緊縛姿態作品
があっても良いと思います。猿轡
は、豆絞りの日本手拭の方が、よ
り効果的でした。

東映の「元禄女系図」に褌姿の
裸女群による騎馬戦があるとのこ
とで、愛好者の一人として期待し
て見に行きました。しかし巾広の
前ダレの長いユル褌で、褌という
より白い前かけをしたように、臀
部の露出がなければ、それと不明
の褌姿態では興味が半減でした。
しかし多勢の裸女が斗争し、褌に
よる臀部の柔媚な群像の量感には、

映画でしか味わえぬものです。
女性褌姿態美愛好者として、そ
の発展のためにも、今後、より多
数の優秀作品が作製されることを
期待します。その際、褌着用は完
全な締め込み、モデルの体質によ
る布地巾などの選定、羞恥責めに
よる表情、ライティングの照明効
果カメラアングルなど、充分のご
配慮をお願いいたします。



女斗美イメージ画

「たおやめの斗い」 雪崎 京人

＜短歌＞

「夜の縄目」

関 照穂

素裸にされて立たされその上に
好きな縄目をいえと強いらる

さらされて羞恥に燃ゆる両の足
あぐら縛りに縄掛かりゆく

よい覚悟望みどおりにしてやる
と縄捌きゆく男にくけり

ひんやりと冷たき縄目柔肌に今
宵も受けて女をさらす

細引を胸の上下に掛けられて胸
乳豊かに前に飛び出す

うなだれてどうせ私はなぶりも
のされるがままにするがままにと

臍の上五つにくびる縄目より盛
り上りいる肌に光る毛

ううううと思わず洩れる呻き声
許しを乞えど縄解かれざり

細引を締め上げられるたび息つ
きぬ気も遠くなる俵の縛り

宝のウエス

「収

穫」

目出 鯛三

日頃、計算尺を片手に設計図と
四ツに取っ組んでいる鯛三は、耳

を聳する現場の騒音と油にまみれ
ながら若手技術者として奮闘。結

構、多忙な毎日を送迎している。
幸いなるかな、建築関係の現場と

は異って、工場内の仕事であるた
め、多忙と云っても、たかが知れ

ている。それでも宮仕えは御同様
やれ納期だ、完成検査のと、技術

的トラブルは勿論のこと、作業者
との対人関係もあって、勤務中の

大半はオフィスと現場との接触に
費され好きなタバコをゆっくり吹

かす時間さえ失われ勝ちの始末。
そんな或る日のことである。

たまたま、ある新製品の試作品
の組立てに立合うために現場へ顔

を覗かせた処、馴染みの作業者達
が一塊りとなって声高かに何やら

一枚のパンティが展げられていた
のである。

機械いじりの好きな読者諸兄な
ら、すでにお判りのことと思うが

念のため説明すると、ごく身近で
は、自動車や自転車等の掃除や分

解組立ての際に使う、あのウエス
(ボロ布)の中から、期せずして

現われ出たもので、まして年若い
男ばかりが五人とあっては、好奇

心旺盛な上に、女性の神域に直接
触れた魅惑的代物の、しかもすで

に御用済みの物件とあって、そこ
はそれ、男ならではの尽きぬ興味

が、何時しかY談にまで進展中と
相成っていた次第である。マニア

でもある鯛三、何とかそれでも体
面をつくるって、さしたる興味を

示さぬ素振り、そこは立場の強
味で「さあ諸君、仕事仕事」で、

一枚のパンティが展げられていた
のである。

機械いじりの好きな読者諸兄な
ら、すでにお判りのことと思うが

念のため説明すると、ごく身近で
は、自動車や自転車等の掃除や分

解組立ての際に使う、あのウエス
(ボロ布)の中から、期せずして

現われ出たもので、まして年若い
男ばかりが五人とあっては、好奇

心旺盛な上に、女性の神域に直接
触れた魅惑的代物の、しかもすで

に御用済みの物件とあって、そこ
はそれ、男ならではの尽きぬ興味

が、何時しかY談にまで進展中と
相成っていた次第である。マニア

でもある鯛三、何とかそれでも体
面をつくるって、さしたる興味を

示さぬ素振り、そこは立場の強
味で「さあ諸君、仕事仕事」で、

何ともしがたく残念であり、浅ま

しい根性が情けないのである。そ

れにしても各家庭を訪れる廃品回

収屋に堂々？と払い下げる勇敢

なる女性が現実存在することは

確かなことであり、この点、本誌

女性読者の御意見を承りたく、加

えてこの鯛三の切なる心境をご理

解頂く上で、不用品払下げの労を

取って頂ければ、鯛三感涙にむせ

ぶ次第である。

さて、当然の事ながら、くだん

の物品の所有者が若いお嬢さんの

ものであったか否かは断言を許さ

れない。瞬間直視した印象から推

理するに、好んでピンクを使用す

る年令層からでは、年輩ではなか

ろうと思われるくらいで、それす

らも知る由はなく、鯛三独りの妄

想と云うしかない。無残なるかな

ハサミが入って二度と再び物の用

を足さぬように「展開図」化され

ている処など、正直云って「憎い

仕打ち」であり、それだけに褪せ

たルージューの唇とも形容したい形

跡。男の好き心をいやが上にも搔

き立てる粹な小布の持つ偉大な底

力に、思わず敬服と憧憬の陰情を

そそられた次第でもある。

うわさによれば、四kg一束とな

っているこのウエスの中には、必

ず

ず

マ ゾ 商 売

吞 気 放 亭

月刊誌『現代』2月号を開いて
オモロイ記事に目をうばわれた。

タイトルにいわく、

『私の“舌”で男はみなダウン』
天下の著名人もズイキの涙を流
す神戸の美女グループ、という内
容。

さっそく、ゾクゾクしながら、
同記事を読んで、ゾクゾクしちま
った。

だって、予期の通り舌いちまい
をショールバイ道具に、有名タレン
トを客にとって、一夜一万七千円
をかせぐ、二十二才の美女の手記
なのだもの。

ニンニク食べてるプロ野球の選
手某は出口までニンニクくさかつ
た。なんて、ホネまでシビれるよ
うな体験があり、多くの客のなか
には、逆に“舌拔嬢”の出口をね
らう紳士もあるとか。

この世界では、この種プロ女性
を『舌ごと師』と呼んで、ソンケ
イしとるとか。

ニッポンも、いよいよ国際的に
なってきましたネ。

ず一枚ぐらいが混入されていると
いう。しかも今回のように原形を
とどめたものは比較的少なく、肝
賢の部分がスッパリ切り取られて
いるものが多いとも。

さすがに勇氣ある現代女性とい
えども、やはり払い下げる段とも
なれば、恥かしい造形の秘密を白
日の下にさらしたくない、たしな
みを忘れてはいないようである。
マニア諸兄よ、どなたか“事実
は小説より奇なり”の如く体当りの
行動に出てみませんか。何をかく

そう「廃品回収屋」となって、終
日、家庭訪問のボロ商売をおす
めする次第。

まさしくボロイ收穫まちがいな
しと存するが、いかが？。

はてさて後日譚を付記しよう。
去る日、納期遅れの忙しい中を、
たまたま特残（特別残業の意）で
深夜に及んだ調三、責任上もさる
ことながら、静まり返った組立工
場の片隅に山と積まれたウエスの
一つを解析に及び、宝珠を求めて
胸弾ませる間もなく遂に発見。急

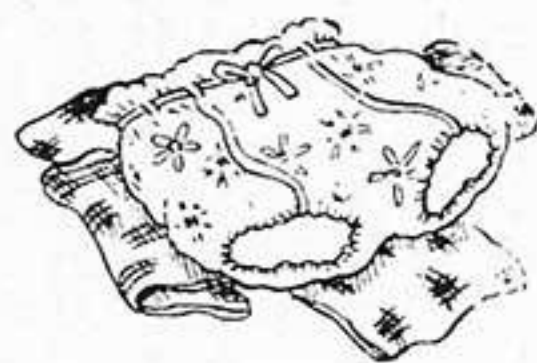
いで取出して点検に及ぶに、人生
ああ無情。

ホコロビを丁寧に繕った見るも
わびしい一枚であり、のび切った
ゴム紐が疲労も露わにブルルン。
幾百回となく洗濯機の渦中に身を
さらした哀れさに、鯛三悔惜の嘆
息一つ。

願わくば天下の女性諸嬢よ。大
切なお宝倉の守護衣だけは、“色
は匂えど散りぬるを”で儉約の美
徳も程々に……ネ。



「出 番 待 ち」 室井亜砂路



<告白>

私の越冬法

岩手 信夫

汗をかかない冬は尿量が増えて神経質な人は夜間頻尿に悩まされることがあります。私もその一人で、夜尿恐怖のため神経が休まらず頻尿となり、夜中に何回も起きることがあります。起き損って粗相する場合も稀にありました。

ところで私は幼時からオムツに異常な関心を抱いていました。粗相を防ぐためにオムツを使うという案にとびついたのも、自然の成行でした。十年以上も前に、ビニールの風呂敷にボロ布という道具立てで試みたところ、三日坊主の着用で終り、着用を怠っている時につぎの粗相が起るという事態の繰返しとなり、粗相を防ぐために使うというアイデアは不成功に終りました。不成功の原因は、オムツへの願望を罪悪視して故意に粗末な代用品を用いたからです。人間の行為を持続させるのに必要

な快感を忘れていたのです。いや忘れていたのではなくて、故意に遠ざけようとしていたというべきです。私が本誌にめぐりあってから多くの人々がオムツを着用して楽しんでいふことを知り、自分の本心を偽ることの愚を悟りました。その後は願望の命ずるままに行動し、オシメを濡らしたり、ゴムカバーを肌にしりつけたりすることの快感を味わいながら、自分に最も適した方法を模索しているうちに、今のようない道具が揃ってきたのです。赤ちゃん用のオシメ生地で自分のサイズに作った大量のオシメ。それを包む総ゴムのゆったりしたカバー。はみ出したオシメで寝具を濡らさないように特に自作した特大ゴムブルマー。その他は、着用中のズレを防ぐためのタイツ類。寝るとき掛けぶとんをはがすと、シーツの上にオシメが広

げてあります。下半身はオムツ以外に着けるものがないので、迷うことなくオムツを身につけてしまっています。

夜中に私は決して便所には行きません。翌朝、濡れたオシメを外す楽しみを味わいたいからです。そのため当初は、意識して排尿していました。しかし今では、排尿をやめて、その代り抑制を解くだけにしています。尿量の少ない夜は、抑制を解いただけでは尿が出ませんが、多い夜は尿意で目が覚めたとき、オシメを意識にのぼらせると抑制がとれて、内圧のため意志で排尿しなくとも尿が流れ出てきます。おねしょしつつある自分を落着いて感じとる、この精神の余裕こそ、オムツの醍醐味といえましょう。こうしてオムツに依存しきると、冬の夜がほんとうに楽しくなります。夜中に眠い目をこすりながら便所に行くという不快はなくなります。尿意で目が覚めたあと、夢の続きを見ることがあるくらい、安らかに眠ることができます。心身好調になった私の唯一の悩みは「オムツなしでは冬は越せない」ということです。

私が冬とオムツを結びつけたことには、もう一つのヒントがあります。それは去年の夏のことでした。宇都宮製作所東京出張所に注文しておいたゴムのオシメカバーを受けとりに行ったときでした。ついで見せてくれた見本の中に少年用の総ゴムカバーがありました。これは今年の冬、新潟の農村で沢山売れたとのことでした。ゆったりとした尻周りにピッタリ締まる股ぐりは、大量のオシメを頼りに一夜を無事に過ごす元気な少年を連想させるのでした。ふとんが干せない雪国の、寒い室内の冷えきったふとんの中で長い夜を安らかに眠る神経質な少年……私はそんな空想にふけりながら、こんないい物を買って貰えるなんて何と幸福なのだろうと思いました。ちなみに私が今使っているカバーは、そのとき買った大人用中サイズで、これは股ぐりにゴム紐が通ってないので、自分で紐を通して股ぐりを好きなように締めて使っています。

オシメも色々な使い方があってありますが、私のように「越冬用」に使った人は、まだないだろうと思います。十二月下旬頃から毎日オシメを着用している私は、春の何月頃になったらオシメがいらないかなるのでしょうか。

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(むら)

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(あけ)

猪吊り三態

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(いの)

責め衣縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(せめ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
玉田美佐子 略号(ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
玉田美佐子 略号(ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 四〇〇円
玉田美佐子 略号(ぬと)

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

吊り打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(やり)

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文子 略号(ぬこ)

踊り子緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文子 略号(りこ)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

膨満正面縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(へな)

マニヤ全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 四〇〇円
栗本ミチ子 略号(いな)

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(もい)

乳房責の苦悶

大手札二枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(もろ)

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号(もた)

強打に泣く裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号(むち)

裸身の晒し

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(わあ)

全裸股間縛

大手札四枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号(せら)

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(そう)

動感海老責地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(とう)

色褌の開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(いふ)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(はす)

乳房しばり

大手札三枚一組 四〇〇円
長野 良子 略号(うは)

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(うい)

木馬責三態

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(もく)

椅子責めの果て

大手札二枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(いす)

檻に入れられた女

大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(もの)

浴室の全裸刺青

大手札三枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号(よな)

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(はね)

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原・鈴木 略号(はた)

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
刑部 典子 略号(のん)

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号(きす)

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号(きせ)

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚・東浦 略号(きそ)

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚・東浦 略号(きて)

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚・東浦 略号(きと)

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号(きな)

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(なの)

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(なむ)

全裸の緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

逞ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

絹川文代 略号(そに) 一〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇〇円

美女の手で縛られる過程

絹川文代 略号(そと) 一〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

絹川文代 略号(そぬ) 一〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

絹川文代 略号(そり) 一〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(かみ) 四〇〇円
東浦ひかる

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号(かく) 四〇〇円
東浦ひかる

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(かな) 四〇〇円
東浦ひかる

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号(かむ) 四〇〇円
東浦ひかる

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一五〇〇円
梨花悠紀子

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 四〇〇円
絹川 文代

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いるり) 一五〇〇円
梨花悠紀子

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 四〇〇円
東浦ひかる

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子

浣腸 器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 四〇〇円
絹川 文代

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 五〇〇円
大塚 啓子

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 六〇〇円
大塚 啓子

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 四〇〇円
大塚 啓子

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 四〇〇円
大塚 啓子

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 六〇〇円
大塚 啓子

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 六〇〇円
大塚 啓子

浣腸 される清子

大手札三枚一組 略号(かろ) 四〇〇円
山原 清子

浣腸 に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一三〇〇円
山原 清子

浣腸 に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一二〇〇円
山原 清子

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(けか) 七〇〇円
大塚 啓子

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号(けき) 七〇〇円
大塚 啓子

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号(くく) 七〇〇円
大塚 啓子

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号(けし) 七〇〇円
大塚 啓子

浣腸 後オシメ着用

大手札五枚一組 略号(けこ) 七〇〇円
大塚 啓子

浣腸 と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(のけ) 四〇〇円
遠藤百合子

高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 略号(むい) 四〇〇円
大塚 啓子

浣腸 場面大写真

大手札三枚一組 略号(むは) 四〇〇円
大塚 啓子

施 される浣腸

大手札三枚一組 略号(むろ) 四〇〇円
大塚 啓子

浣腸 をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子

自ら 施す浣腸

大手札三枚一組 略号(ちぬ) 四〇〇円
大塚 啓子

浣腸 器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(ちり) 四〇〇円
大塚 啓子

浣腸 を施される女

大手札三枚一組 略号(ちら) 四〇〇円
大塚 啓子

浣腸 後介添排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円
山原・東浦

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(かて) 一〇〇〇円
山原・東浦

シリンドラーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円
山原・東浦

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円
山原・東浦

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円
山原・東浦

浣腸 に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円
山原・東浦

浣腸 される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円
山原 清子

浣腸 悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号(ぬる) 六〇〇円
美木乃々子

施 される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(ぬか) 六〇〇円
美木乃々子

挿入 された嘴管

大手札四枚一組 略号(るて) 五〇〇円
大塚 啓子

襲 いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(るち) 三〇〇円
大塚 啓子

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(ると) 四〇〇円
大塚 啓子



○ 孤高を貫く編集者皆様方、如何お過ごしのことでしょう。革命運動と風俗雑誌等への弾圧が同時に行なわれることは、歴史の示す通りですが、どちらに動こうとも決して理解されはしない、絶対真理を表現創造する分野に住んでしまった僕達は、ただ孤高を貫く以外にはないと思えてなりません。黒の世界で……。現体制なんぞに媚びる必要は、さらさらなくて、ましてや、アンダーグラウンドに降りて珍品がられる必要もないでし

よう。「血と薔薇」なんぞを編集して啓蒙家に甘んじなければならぬ、僕の尊敬する沢竜彦氏の苦渋いばかりか、この革命状況の貧弱さ。氏が今、おどましさを堪えて書き続けようとしている事柄は、すでに氏が十年前に全て論評しつくしたことの焼き直しなのです。奇譚クラブも孤高しなければならぬ理由はここにもあるでしょう。珍しがられるだけなのです。氏がサド、バタイユから、シュールレアリストを従えて、真の人間性を鮮明にしたときの衝撃！ 小学生当時から僕は沢竜彦、サドという活字を見ただけで何故かその夜は悪夢にうなされたのです。前置きが長くなってしまいましたが、僕は本当は完璧な童話を書くことで、この世を死んで行きたいと思っています。メルヘン、サドもメルヘン。悪魔的世界にしか真実がないとしたら、メルヘン以外に現実で表現しうるものはないのではないのでしょうか。全ての生存物が語を発し、人肉を喰い、自由に人間を物化する世界その表現方法を通して、真実が見れるとしたら……。宮沢賢治、ぼ

く、尊敬しています。仏教的、宇宙論的表現者、詩人。ぼくら奇くがなくては生きては行けないファンのたちのアイドル安井喜久子さんを素材にして、ぼくは今、童話を試みようとしています。読んで下さい。叫びがあるか、真実の生と死があるか。そして奇譚クラブの存在し続けねばならない全てが、そこにはないかを読んで下さい。

(東京・呪詛夢)

○ 美川美子様、ぼくはずっと以前から、毎月かかさず奇クを読んでいます。奇クは面白い本ですね。ぼくは太鼓腹マニアです。美子様のお腹は、相当大きいそうですね。ぼくは前からお腹の大きな女の人にあこがれておりましたので貴女様の文章を胸をわくわくさせて読みました。美子様の大きなお腹は妊娠腹でなく地腹ですからあなたを仰向けに寝かせて、そのふくらんだ、べんべんたるお腹をマッサージしたり、揉んだり注射したり、色々なプレイをしましょう。

(京都・岩本莊次)

○ 私は小さい頃から字の方はともかくも、画にいたっては常にアヒルの部で、上手な友人が羨ましく

てならなかった。最近、私は職場の後輩に画の上手な人を発見して責め画を描いてもらっている。それにつけて思うことは、奇クには本格的な責め画が少ないということである。これは奇クの自粛によるものか、あるいは描き手の少ないことによるのかは分らないが、もう少し何とかならないものであろうか。フォートの少ないのも同様であるが、読む雑誌という立て前から、止むを得ないとは思うがいささか淋しい気がする。その淋しさをまぎらせてくれたのが、一月号の新井伸治氏の血紅袋テストである。先にも書いたように私は画については全くダメなのだが広大な？ 女性の腹部に興味を持つ私には、腹わたまでハミでた女性の切腹の画は、異常な感動を起させた。鎧武者と裸女は一寸すぐわぬ感じがしたが、女の表情もすばらしく、全身に力のみなぎった感じで、迫力がある。同氏の画のせいではないが、またぞろ画の少ないのに不満が昂じてきたのである。できることならば、切腹に至る過程を描いてほしい。それは何も切腹画に限らず、SM全般についてそのような画がほしい。最近では大人の漫画ばかりで、書店の店

頭を賑わせているが、中には縛りものなどがチラホラとしているのは一寸、面白い傾向であるが、本格的な奇クのそれに比べれば雲泥の差であり、もちろん求めるべきものではない。豊満な裸身を縛られ、羞恥と苦痛にくねる裸女の傑作の出現を期待しています。

(葛西六郎)

城山ほずみ様、お元気のようにですね。私は昨年の十二月で二十三才になりました。横浜の元町の印刷会社勤務しております。

半年ほど前までは、私も城山様と同じように一人でプレイをしておりました。けれど今は良き理解者がおります。彼は金属会社とスタンドの仕事を持っており、二十九才になると思います。彼と会うのは月に一、二度ほどですが、大変楽しく過ごさせていたいております。私も彼も吊りが好きです。で、プレイは吊りに始まり吊りに終るようです。鴨居から手首、足首を一まとめにして吊るしてもらったり、ベッドを使用しての恥かしい縛りなど、私がいつも夢の中です。空想しております。城山様、彼とプレイを試してみませんか。彼は年より二、

三才、若く見えます。私は春には国へ帰らなければなりませんのでその前に私もお会いしたく思っております。そのときに色々とお話ししたいでしょう。何か良い連絡方法はないのでしょうか。城山様のご都合の良い日をお知らせ下さいませ。私自身、十二、三才の責具を持っておりますので、それをお譲りしてもよいと思っております。国に帰るときに持っていけませんので。

(佐藤京子)

その後、皆さん如何ですの。また多くの奴隷犬が名乗りを上げてくれたわね。嬉しいわ。いよいよ、どの犬にしようかと迷うぐらいよ。今日は犬としての生活の一部分を書いてみるわね。皆の犬どもは自身で練習しておくことよわかったわね。犬は勿論、全裸だわね。そして首輪は当然よ。犬自身がお小水するとき私の許可があるわよ。私が適当と思う時間になると、鎖につながれた犬を風呂場の五十センチぐらいの台の上に男物の尿器が置いてあるの。そこへ行って、犬畜生のやっている恰好で用を足すの。わかって。少しでもタイルの上に落とすと承知しな

いから。あ、そうそう。言い忘れていたわ。犬には尾があるでしょう。お前達、犬どもも尾をつけないてはいけないうのよ。自分で考えてごらん。前の犬は赤ちゃんのオシヤブリをアヌスに入れて尾のかわりにしていたのよ。尾が短いから、赤いリボンをくくってやってその先に私の穿き古したパンティの一部分をつけてやったの。犬が四つん這いで部屋を歩くとき、ジャラジャラ、ブラブラとして、とても良い姿だったのよ。男性自身

の先にも、柔らかい赤いリボンをつけてあげたの。そして、とても喜んで私に奉仕することに精をだしたの。この姿は、全部の犬がする姿よ。尾は全部、自分で考えることよ。いつまでも抜けない、段のあるものを選ばなくては、尾が落ちるわよ。変なことを書いて御免ね。二人きりになったときは、もちろん命令的な口調なのよ。づけと命令するから。汚れたパンティを口に入れられ、首のところに引っかけられ、前にリボン

木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」へ妊娠九カ月の妊婦を縛るVでその便々たる太鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦子夫人のフोटを特に同好者の方に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のま」 四〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のめ」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を晒す 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のや」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を縛る 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のこ」 四〇〇円

便々たる太鼓腹に縄掛け 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のし」 四〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のろ」 四〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のは」 四〇〇円

十文字縛りの妊婦腹 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のに」 四〇〇円

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のは」 四〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦 四〇〇円

大手札三枚一組 略号「のへ」 四〇〇円

木戸悦子

を結ばれ、尾っぽを下げてくさり
でつながれ、手足を連結されて部
屋を這い回る自分の姿を想像して
ごらん。馬になり椅子になり便器
になり、ペーパーの代りをしてい
る姿を。嬉しいでしょう。実現さ
せてあげるわ。私は縛るにしても
足を充分に拡げる型以外にあまり
行なわないの。最大の恥かしめが
私のモットーなのよ。仰向けにタ
イルの上に寝かされ、胸からアゴ
の上に尻をのせられ、女王の私の
臭いをかぎ、女性自身で口を押さ
れて神酒をさずかるの。浣腸もす
るのよ。カテーテルによる導尿も
週に一回ぐらいしてあげるわよ。
急所のくわしい測定ときは、過
去のことをくわしく全部、告白さ
せるわ。また色々責められての感
想をくわしく聞くわよ。私の奴隷
なら一切の身も心も捧げている犬
でしょう。犬には人格がないのよ
畜生だからね。違反したときは色
々の罰が用意しているの。その中
で刷毛が一番こたえるらしいわ。
前の犬は、さすがに泣いてあやま
ったわ。しかし実行したわ。前の
犬以上にお前たちも飼育してみよ
うかしら。春川ナミオ、マゾ男、
南区の奴隷、三重の志願男、野中
生、加藤好夫、みにくい小豚、ほ
か奴隷志願者へ。いつか皆に会っ
てあげる。奉仕するのよ。心ゆく
まで。
(東区の女王)

○

大阪の新居美和子さん。二月号
で貴女のお便り、拝見いたしました
。貴女の勇気ある呼びかけに敬
意を表すと共に、早速おこたえさ
せて頂きます。私は当年四十五才
のS気たっぷりな男性です。ただ
し私の場合、女性に対する強烈な
縛り、鞭打ち等の、肉体的苦痛の
激しい責めよりも、むしろ股間縛
り、開股縛りや、バイブレーター
による乳房や局部責め、さらには
浣腸責め等、女性の羞恥心を極度
にかりたてることにより、精神的
苦痛の伴う責めに興味があり、実
際これまでも何人かの女性を対
象に、プレイをたのしんでまし
た。しかし、それらの女性の殆ど
は金銭的な目的の場合が多く、
必ずしも彼女等、自身にMの傾向
があったわけではなく従って、どこ
となくプレイにも、そらざらしさ
があったことは、いなめません。
このたび貴女の呼びかけに接し、
一度、本当のM女性とおつきあい
願えれば……と筆をとった次第で
す。貴女が「MまたはSM趣味：
」と呼びかけていられるところ

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 略号 八しう V 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 略号 八した V 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 略号 八しち V 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 略号 八しつ V 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 略号 八して V 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 略号 八しと V 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 略号 八しや V 五〇〇円

痛打にもかく美女体

安井喜久子 略号 八しゆ V 五〇〇円

あくら縛りの羞恥責

安井喜久子 略号 八しよ V 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身

中河 恵子 略号 八とは V 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 略号 八とに V 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河 恵子 略号 八とほ V 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 略号 八とへ V 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 略号 八とち V 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河 恵子 略号 八とり V 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

中河 恵子 略号 八とぬ V 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 略号 八とる V 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

中河 恵子 略号 八とか V 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河 恵子 略号 八とま V 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

中河 恵子 略号 八とみ V 四〇〇円

浣腸責め的美態開陳

中河 恵子 略号 八とめ V 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 略号 八とも V 四〇〇円

をみますと、貴女御自身はS的要素の強い方かも知れません。もしそうだとすると、残念ながらMの傾向のない私には、お相手をつとめる資格はないわけですが、もし貴女がSMいずれをも受け入れられる方であり、前記のような私の好みの責めに御共鳴下さるのならぜひおつきあい願いたいと思います。かなりの年輩であり、また著名会社の管理職でもある私としましては、他人に知られることを大いにはばかる立場ではありませんが貴女の勇気にはげまされて、この便りを書いております。ちなみに私には新制中学の男の子が一人いるだけで、妻や他の家族はおりません。奇ク誌上で貴女のお返事にまみえるのをたのしみにお待ちしています。

(大阪市東住吉区・今井博)

○ 小生、女斗美の大ファンで、映画や演劇に女斗美のシーンがある

観てまいりましたが、どちらかといえは、私を失望させたものが多く自分でも満足のいったものは数えるほどしかありませんでした。その中で一番良かったのは、何ととっても「初恋地獄」でしょう。この映画の広告が目にとまった時から封切日が待ち遠しくなって、よく指折り数えたものです。そして封切りの日は、私は劇場までとんで行きました。その間の電車の走っている時間の長かったこと……。それは想像を絶するものでした。それだけ、この映画を待ちこがれていたのです。しかし、待ちこがれていただけありました。やっぱり、この映画は私の想像していたもののなです。女斗美ショーと銘うただけのことはありましたが、けれど、そこはショーだけに幾分ぎこちなさが抜けていませんでしたが、でも私の心を満たすものは充分ありました。特にナナミという女の子と外人女性との乳房相撲とでもいいますか、互いに相手の乳房をもみ上げ、しばって斗っているシーンなんかは、何ともいえないほど迫力があり、手に汗を握っての観戦？ でした。その他にも女斗美のシーンが盛りこまれていて、映画が終っても、

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆる

全裸縛りに羞らう

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よた

しばらくは気が抜けたようになって立つ気がしなかったものです。後日、映画館が変わるたびに観に行き、今までに八回ほど、この映画を観ています。

(川崎・目戸生)

門真市の藤原笑子様、私は三年ほど前から奇クを愛読し、同好の女性を待ち望んでいた男性です。私は羞恥責めなどを最も好み、余りひどい縛りや責めは好みません。あくまで精神的にいたぶるような責めが良いと思います。けれども私は今まで一度もSMプレーの経験はありません。いや、相手が見つからなかったのです。その点、私と貴女とは距離的にいって、それほど遠距離ではないと思います。私は、きっと貴女に満足して頂けるプレーが出来ると確信しています。ぜひとも、お会いできる機会が得られるよう、よい返事をお待ちしています。

(名古屋・遠藤和夫)

大阪の新居美和子さんの通信を拝見いたしました。小生、四十一年の会社員(大阪出身)で、少しばかりの文筆を副業としております。奇クも十五年以上、愛読して

おりますが、S趣味のため長い年月、妻と別居し、昨年、意を決して離婚しました。過去にM女性との交友もありましたが、やはりSMは、お互いに性向の一致した幸せな夫婦でないと……と思いついてきました。もし良き伴侶となればと、新居美和子さんにペンをする次第です。一度、気軽にお目にかかりたく思います。

(埼玉・白井)

妻恋い道中の歌詩「意地は男よ情けはおなご」の通り、世間に妥協せぬまま早や四十路の齡を過ぎて独身の私の如き者へ、貴誌連載中の花と蛇は所々冗長な表現や重複した内容のため、文学的に見て多くの短所欠点があるが、それでも女郎買寸前の緊張に似て、自ずと体が震えるほどにアトラクティブだ。しかし今に及んでも尚、私は徒らに「もっと責めろ」「徹底的に苛めて欲しい」と殆ど無批判な迫害者への一方的声援には、あえて加担したくない。それよりは、むしろ「変屈者」の夏目漱石が生涯「マゾ作家」の非難に甘んじて耐え抜いた天晴れな態度に、「流石だ」と快い共感を覚える者である。何故なら私自身「髪の毛

〔緊縛女体美のシリーズ〕

大手札印画紙焼付

大手札三枚一組 略号△もえV

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もゆV

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もよV

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もすV

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もせV

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号△もれV

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もるV

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もてV

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もなV

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もねV

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむV

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 略号△もろV

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もきV

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこV

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみV

浴後の剝玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆV

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよV

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はてV

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はおV

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はのV

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひV

一本でも、白くも黒くもすること
ができない」無能の者であり、ま
た日常生活に於てすら、高貴な女
性が趣味を伝えられる脱糞プレイ
を、こちらは止むに止まれぬ俄か
な生理上の欲求から行う、愚かな
失敗者に過ぎないからである。お
よそ本題から離れたが「心の貧し
き者」すなわち己の弱点を心得て
いる者は、傲慢一途な悪党どもに
反し、「ピティ イズ アキン
トウ ラブ」で、少くとも静子を
始め受難のヒロインに同情を寄せ
ると同時に、マゾ気分も味わえる
から最高である。

○ (京都市・高橋正)

東区の女王様、一月号のご返事
に「南区の犬へ」があり、ついで
奴隷の誓い、飼育方法に接しまし
て、今はただ女王様の奴隷として
三十五年の誇りを女王様の足下に
ひれ伏し、いじめられ恥かしめら
れ、屈辱の中に私をこのようにあ
つかわれる女王様に接することの
できた歓喜に、一七〇センチ、六
十五キロの身をひたらせることが
できるのを、ただただ夢見て急ぎ
筆をとった次第でございます。女
王様に恥かしめられることのみ、
私の生甲斐として仕事にはげみた

いと存じます。奴隷の誓い、すべ
て女王様のみ心のままに、ご命令
をお待ち申し上げます。

○ (南区の犬)

私は今回はじめて奇譚クラブを
読ませていただきました。思わず
一気に読み通してしまいました。しばら
くは呆然としてしまいました。ま
だ、このような雑誌があったのか
と大変うれしく思います。私の、
この種の雑誌、又は思想に対する
考えは、一月号、岩下先生の「S
Mは人間の加虐性、被虐性を通し
て、人間の中にある面白さ、美し
さ、正体等を追求して行く」とい
う考え方と同じです。しかし先生
の言われる純粋なSM文学云々と
いったところは、全面的には賛同
できません。先生のおっしゃるよ
うに純粋なSMは映画や色々の書
物にでてきて新鮮な気持ちにさせて
くれます。けれども本誌のように
SMを追求して行く雑誌になると
「純粋なSM」にとどめておくと
読者は失望するでしょう。SMを
追求して行くと考えると、本誌に
記載の物が、SMに対して邪道と
は思えません。むしろ私は、どな
たかのご意見のように、Sまたは
Mの人間が美しくないと、何の魅

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はわV

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はふV

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はほV

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はあV

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はうV

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はさV

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はめV

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はしV

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はもV

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はむV

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はめV

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はもV

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はさV

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はしV

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はすV

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はせV

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はゆV

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はたV

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はちV

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はつV

竹棒の胸絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はてV

竹棒開股胸絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はとV

力も感じないと思います。だいたいに、この種の雑誌は、目より読者に訴えるものですから、挿画はぜひ必要だと思えます。しかし貴社の方針として、挿画を減少して行く方向にあるのは、非常に残念だと思えます。誰しも、完全に挿画写真のなくなった雑誌に対し魅力を感じないのは当然だと思います。文章のみによる想像は、その人の記憶の中のものの変形されててくるもので、新鮮味に欠ける点があります。最後に、私は女性にはめられた金属性の貞操帯に魅力を感じるので、今までこの種の作品が少ないのは残念です。美しい挿画入りで、すばらしい作品を期待しています。

(広島県三原市・東博)

城山ほずみさん。小生は、すでに中年の域に達し、女性を美の観点より、ゆとりを以って見る事ができる自信を持つ者です。貴女の投書に注目してから数カ月たちました。この間、感じていたことと貴女の一月号への投稿文の内容の一部が一致しているように感じましたので、貴女に呼びかけて見る気になりました。貴女は責められたという願望を、自分自身に

プレイすることにより、まぎらわしているのですね。何故でしょう。当然ですね。未知の男性とのプレイ……それも恐らくは密室の中でしょう。貴女が、いつか書かれたこわさを心配されるのは、ごく自然の情だと思います。しかし貴女は責められたい。否、責められることを空想したいと言った方が、今の貴女の心境にぴったりなのではないだろうか。小生は呼びかける貴女と責めについて話し合う機会を持ちましょう、と。

(東京・石上)

赤畑修造氏へ。奇ク一月号のおたよりは私にとって近來にない喜ばしいものでした。同じ気持を抱く人が、私の住む尼崎と、そう遠くないところにいるということが全く嬉しく、心強く思われるのです。貴兄のご意見には、すべて同感で、私も少年時代から現在まで一途に肥満体にならぬ憧れ、SMの対象として一般に見られる常識の範囲を逸脱して、絶対的条件として、中年の肥満体に異常な執着をもっている男です。勿論、その他にも自分の欲望には色々な好みもあるのですが、先ず第一に中年の肥満体という条件をもって「肥満

最新撮影総天然色

カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てる

真紅の腰巻着用品姿

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用品縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れよ

羞らいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れに

体への郷愁」という拙文を二十八
年四月号にのせて貰ってから、以
後、四、五篇、自分のこの変った
欲望を活字としてもらいましたが
全く現代まで自分の気持を理解し
てくれるような人に出くわさず、
たまにそういう気持を（肥満体と
いう目的を表現して）表明する人
の意見に出くわしても、ホモ的、
マゾ的な人が多く、どちらかとい
えば肥満体の異性に関してS的傾
向の強い私には何か飽きたらぬも
のを感じさせるのでした。奇クに
度々投稿される仙台市の美川芙美
子さんでも、肥った太鼓腹を思い
きりいじめられたという言葉の
かたわら、その他の部分はそんな
に肥っていませんと言わざるを得
ない様子が、如何に女性の肥満体
というのが喜ばれないかというこ
とで、全く残念に思うのです。ま
た、私は肥満体といっても肉づき
のよいグラマータイプには飽きた
らず、年期の入った、いわゆる中
年肥りの婦人に対して異常な執着
をもっています。現在性に関する
文や写真が巷に氾濫しています
が、そうした肥満体の中年婦人の
裸体、ましてや縛られた姿にお目
にかかることは非常に困難です。
しかし貴殿の奥様が八十キロの肥

満体とのこと、実に見事な肉体が
眼前に浮かび羨ましいことです。
私は常に体重七十キロ以上の中年
婦人を好み、今までそういう人、
数人と交際したことがありました
が、全裸の姿が見られたのは、そ
の中の二名に過ぎません。まして
や縄をかけられる等、思いもよら
ぬことで、こうした人のイメージ
を絵にして、わずかに慰めている
次第です。ぜひ、貴殿にも奥様に
も拝顔の栄を得たいと思っていま
す。
(尼崎・高浜満六)

○ 過日「股間下着について」を、
サロンに掲載下され、ありがとう
ございました。お送り下された、
関谷富佐子さんの写真、拝見しま
したが、そのことについて短文を
まとめてみました。奇クが読物中
心になってより、禪に関する記事
が少なくなりました。どうか、禪
に関する唯一の雑誌である奇クが
愛好者を確保するためにも紹介記
事をどしどしと発表して下さい。
(東京・江川乱)

○ 女王様の提示されました八ツの
条件、よろこんでお受けすると
もに、女王様の命あらば長年連れ
そった夫婦のちぎりをもち女王様自

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大坂阿倍野局私書箱

第14号箕田京二宛へ願います。

らの手で引き裂いて頂けるよう離婚届も上呈し、心身ともに奴隷となり、お仕えいたします。幸い、お呼び出し頂けるなら、女王様に満足な日々を送って頂くため、貢物を求めて昼間はわき見もしないで働き、貢物を得て帰れば直に動きに一層の制約を課せられ、万一にも、女王様のご機嫌を損じた折には徹夜はもちろん、数日に及ぶ制裁を課せられようとも、お受けすることを誓います。奴隷の、卑しい欲望を断つため、強度の近視乱視のレンズを女王様の排泄物により汚され、又くもりを付し奴隷の視野をいちじるしくせばめたメガネを、しかも脱着できないよう毎朝貢物を求めにでる前、最強の接着剤ではりつけられ、又対人交際をも一切断ちきるため、これ又生涯、女王様に捨てられようとも脱着できない貞操帯を装着され、大腿部には小走りもできないようくさりで結束し、施錠後の鍵は奴隷自らの口から淀川深くに捨てさせ、又飼育上、必要とあらば昼間食べ物を持ち喰いしないよう、頑強なコルセットを密着させる等、数々の厳しい制約を課せられようと、ひたすら女王様にお仕えいたしとうございます。私の女王様

は年令、お姿には関係ございせん。ただただ厳格な女王様であれば、よいのです。私は、その女王様のもとで一生、奴隷としてお仕えいたしたいのです。どうか、お呼び出し頂く日の一日も早からんことをお待ちいたしております。

(芦屋に住むM)

私は本誌を愛読しはじめて十年以上たちますが、横須賀には同好の方が少ないようです。大変さびしく思います。私は二十九才の独身男子。身長一七五センチの瘡せたノッポです。東区の女王様に挑戦したく思います。貴女をレスリング等で打ち負かし、思いきりなぶって見たい。もし私が負けたら、君の思い通りになります。川崎の慶子さん、貴女のプレイを想像すると、楽しく思います。横須賀近辺の女性方、年令は三十五才まで、ミセス、ミスは問いません。お便り下さい。心ゆくまでプレイを楽しみましょう。

(横須賀・大橋義行)

小生は三十才の独身サラリーマンです。二、三、希望がございますが、実現していただけたら幸いです。それはセーラー服の女学生

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 略号△こよ▽ 佐々木真弓	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ▽ 佐々木真弓	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 略号△こお▽ 佐々木真弓	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 略号△こる▽ 佐々木真弓	煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 略号△こぬ▽ 佐々木真弓	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 略号△こほ▽ 佐々木真弓	臀部強調後手縛り 大手札三枚一組 略号△こる▽ 佐々木真弓	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 略号△こに▽ 佐々木真弓	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 略号△こち▽ 佐々木真弓	二つ折り責める女体 大手札三枚一組 略号△こへ▽ 佐々木真弓	緊縛フोटです。以前、奇ク誌上でも、どなたかが希望しておられました。いかがなものでしょうか。モデル嬢は金原奈加子さん。辺りが、いいと思います。77と79
脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 中河 恵子	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 略号△こや▽ 中河 恵子	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 略号△この▽ 中河 恵子	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 略号△こそ▽ 長井葉津子	羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 略号△これ▽ 長井葉津子	悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 略号△こた▽ 長井葉津子	片足挙げの鞭打ち責め 大手札三枚一組 略号△こら▽ 関谷富佐子	柔肌に弾ける惨酷な答 大手札三枚一組 略号△こな▽ 関谷富佐子	あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 略号△こえ▽ 佐近麻里子	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 略号△こて▽ 左近麻里子	のフोटを拝見して、一そうその感を強く致した次第です。つぎに以前、美木乃々子、山原清子さんによる「日本拷問刑罰集」という写真集がありました。注文した

時は、すでに遅く、品切れで、残念な思いを致しました。そこで、そういうのを是非、再現して分譲も合わせてお願いします。以上、小生の希望を申しのべましたが、たとえ一つなりとも、近い中に実現したら幸せ、これに過ぎたるものはありません。どうか、よろしくお願い申し上げます。

(山崎洋一)

貴誌を二年ほど前より愛読しております。読者通信を読み、全国に同好の方がおられるので安心しております。自分でイチジク浣腸し、オシメカバーをしてメンスバンドでしめます。ふだんは六尺をしめております。尻にキューと喰い込んで引きしまった気になります。でも浣腸を自分で行なうときは、なかなかうまくできません。ご夫婦で浣腸をなさっている方やご自分でなさっている方の文を読むにつけて、非常に羨ましくてなりません。同好の諸氏のお便りをお待ちしております。

(福井市・浣腸マニア)

新刊号を手にとる毎、編集部諸氏の御健祥が察しられて、うれし

く思います。三月号のMものの充実ぶり、まことに目を瞠らされる思いで、ここ数年ぶりのことと早や次号に思いをはせる次第です。これ以上の望みは過ぎたる高望みであろうことは百も承知です。心願わくば、このペースの持続を心からお願ひ致します。ただ挿画がもう少しあってもよいのではないかとと思うのですが、たびたびの各方面からの自肅要請を見れば、これもカット程度で我慢しなければならぬか、と残念です。他誌においては、かなりの表現の挿画があるのに……。まあ、奇ク誌は奇ク誌のやり方があると、自らなぐさめております。三月号を手にとって、うれしさの余り思わず筆をとって次第です。(青井只雄)

大女王様の有難きお言葉には頭が下ります。強度のM犬は、いてもたってもいられません。女王様の奴隷として一日も早く奉仕できたらこの世の光栄です。女王様のいかような責めや恥かしめをうけても、M犬は女王様の前にひれ伏して、泣いて喜ぶでしょう。女王様の八つの誓いのお言葉を忘れずに忠実に絶対服従をもってお仕え致します。その他、犬の誓いをお

きき下さい。服などは結構です。寒いときは女王様の汚れた下着、衣類などかけて下さいませ。首輪手錠、足錠をはめられ、手錠の方を高く吊るして、ムチ打ち、平手打ち、スリッパ打ちで、打ちすえて下さいませ。もし声を立てるようでしたら、女王様のパンティに神水をたっぷりしみこませたもので猿ぐつわをして下さい。そして食事は、女王様の皿の残り物や、女王様のコットをパンにつけて、むりやり食べさせて下さい。お茶がわりには神水をお飲みいたします。風呂場では、女王様の身体を時間をかけて、たんねんにお洗いいたします。可愛い犬のものがおこったときには、ローソク責めで静めて下さい。トイレットペーパーには、犬の舌が代用いたします。一生を女王様にささげたいと思う小犬が、女王様のご命令を首を長くして待っております。

(横浜・M茂男)

城山ほずみ様。一月号誌上で、またまた貴女の姿を見、想いはつのる一方です。貴女は「O嬢の物語」をお読みになりましたか。まだだったら、ぜひお読みになることを、おすすめます。サドの著

者とともに、あらゆるタブーから人間を解放しようと、自由を希求するものの詩に満ちた書です。サドと「O嬢の物語」とでは、見かけは逆。一方はSの方から、もう一方はMの方からです。そのO嬢のイメージと、貴女のイメージがぼくの頭の中で交錯します。初めて貴女の呼びかけを拝見してからもう半年以上になり、ぼくもこれが二度目の便りですが、適当な連絡方法が考え出せず、ヤキモキするばかりです。ぼくは二十九才の独り者です。この便りを貴女がお読みになって興味をお持ちになったら、お便りを下さい。

(東京・丹波三郎)

門真市の藤原笑子様、私は二十才の青年で、本誌を愛読して二年になります。私も貴女様と同様の悩みを持っております。この悩みを奇クを通して貴女様と私と二人で共通の話題を探し出し、色々な楽しい一ときを過ごしたいと思

(大阪市・井原)

初めてお便りいたします。私は三十才の男性です。奇クを愛読して数年になります。意外と多くの

次号(五月号)は三月二十五日に発売いたします

人がSMプレイを楽しんでおられ羨ましく思います。私もSMプレイに興味を持ち、近くで女性の方があればと、一日千秋の思いでいたところ、門真市の藤原笑子さん登場、さっそく通信欄を通じてお便りを出させていただきました。奇巧繁栄を祈ると共に藤原笑子さんの温いお返事をお待ちいたしております。(大東市・菊地晃)

り宜ろしくお願いします。尚3月号の、風流極道軒氏の「お長受縛譜」は最高に素晴しかった。風流極道軒氏の作品を又掲載して下さい。(愛知県・九美淳)

○ 三月号に私の漫画『マゾミちゃん』が3遍載っているのを見て天にもものぼる心地良さ。自分の画いた漫画が印刷になるという事の楽しみは本当に本人でなければわかりません。そして2月号の奇巧サロンで小竹一浩氏より漫画マゾミちゃんを賞讃いただき、これ又ありがとうございました。私のSMマンガにそういった少しでも共鳴して下さる方が居る事は私にとっては、益々制作意欲をかりたててくれます。それ故、この正月休みには6枚ほどマゾミちゃんを画いてみました。今後も『マゾミちゃん』を主にしてユーモア・サディスティックな漫画を画いてゆくつもり

○ 私は20才の女工員です。3年前東京にでてきて今は1人住まいです。KK誌を知ったのは1年程前です。そして以前から「女性写真モデル募集」に応募しようかどうかと迷っていました。でも恥かしさからお手紙でできませんでした。東京に親類や知人のいない私にとって男の人は恐いです。容貌もスタイルも決して美人ではありません。だからそんな体を写真にしてもダメと思っています。モデルと名のつく以上、やっぱりスタイルだけは均整がとれていないといけないでしょうか? でも卒直に言って、私、ほんとに信用できる方に縛っていただきたいんです。だから、どんなスタイルでもいいとおっしゃるのなら、緊縛モデルに応募します。私、ここまで書いてしまった以上、私の空想も書いてしまします。私は定期的にイチジクを使っています。でも最近ではあまり刺激を感じません。そこで男の方の手でもって、私に浣腸していただきたいのです。自分で、こんな恥しいことは、どんな信用できる男の方にも言えないことです。でも、ほんとに私に浣腸して下さいの方がおられたら、どんなに素晴らしいでしょう。私は今、赤面しています。空想のなかではもっともっと恥しいことを、その男の方にされていく自分を考えているのです。写真を取り終ったあとで、その人が信用できる方だと感じたら、私の空想していることをお願いしてしまうかも、しれませんが。私の住所は次の通りです。(東京都荒川区・宮城みち子)

○ 私たちM族にとって三月号はとても楽しく読ませて頂きました。Mの権威者、芳野氏を始め多くのM作品。そして新連載のM小説の「ピエロ床屋」等々、今後、非常に楽しみです。三月号で特に興味深かったものの一つに、渋谷青樹氏の「被征服願望開眼」があります。女性による馬のられ、特に顔面騎乗を切望する小生にとって、この告白は非常に身近なものと感じます。作者の心理が、よく現わ

れていると思います。一つ年下の少女から顔面騎乗の攻撃を受ける有様、胸おどるものがあります。女性によって顔面騎乗を受け、その重圧に息もできないほどくさいにおいをかがされることは、被征服者として、これほどの屈辱感はありません。(馬蘇生)

○ 安井喜久子さん、御気嫌いかがですか。三月号で拝見しましたが複数で責められてみたいという御希望のようですね。どうですか、ぼくを加えてみては。まだ女性を縛った経験がありませんが、御主人と協力して貴女を責め落とせると自負しております。前々から女性を縛って責めてみたいと思っておりましたが、今までは単なる願望のままで終わるかと思っておりましたが、始めて手紙を出す勇氣が出ました。好きな縛りは、股間縛り、あぐら縛り、乳房強調縛りなど、一連の羞恥責めです。ぼくを仲間にして下さることを期待しております。(神奈川・サド男)

○ 貴誌を愛読して十数年になります。拙文のため、またこれといった体験もないままに、一度もお手紙を出しておりませんが、いつも

本誌既刊号在庫一覽表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円（の御負担を願います。多数一括してお求めの際は、△小包▽にて発送申し上げます。

[illegible]

☆編集後記☆

○斎藤夜居氏より、先月号は休載の連絡を貰い編集を終った直後に原稿が届いた。『乱歩と足穂、同性愛問答』がそれであるが、今月号は連載中の『緋縮緬地獄』が、白鳥大蔵氏の御都合で休まざるを得なくなった。多忙の各氏のこととて、仕方のない仕儀ではあるが連載物が欠けるのはやはり淋しい気がする。いづれも好評のものだけに一入である。愛読の向きには深くお詫びする。

○本月号の「奇譚サロン欄」は、出来るだけイメージ画の発表を心掛けた。毎月お寄せ戴く「趣味」的な絵は相当数あって感謝しているが、発表可能のものでも誌面の関係上、つい延び延びになっている。絵に託した願望

吐露」という意味で、重視の価値は十分にあらうと思うのだが、絵というものの性質上、あまりにもズバリそのものや、稚拙なものを収載するわけにはいかない。尚、発表を目的としてお寄せ戴く場合には、鉛筆や青インク描きは製版に向かないことをお忘れなきようにお願いして、今後のご投稿をお待ちする。

○届いた原稿は出来るだけ早く整理したいと思いつながら、いつの間にか山積、投稿者に申し訳ない結果になっているが、ボチボチながら以前からの分につけていく。懸賞創作の「ヌードモデル」へ鬼談仏心「妖童記」へ秤蕩也」などは相当期間眠っていて貰ったように思う。まだ他に大分あり頑張るつもりだが、不採用なら返送せよといわれるのが少くないが、返戻しない建前なので宜しく。

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記△

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語△

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十萬元迄贈呈。

△感想、論評、批判△

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△（映画、雑誌）通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故に悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿△

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の栞☆

予約に限り

一月分(1冊)	三五〇円	送20円
三月分(3冊)	一〇五〇円	送共
半年分(6冊)	二一〇〇円	送共

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、御手配が間に合わない場合は、直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

四月号

〔第二十三巻第四号〕
〔通刊第二百五十一号〕

昭和四十四年三月二十日 印刷
昭和四十四年四月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 村俊夫

郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社
△振替口座大阪四二七八三番△
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努めております。青少年の健全なる育成に努めております。青少年の健全なる育成に努めております。